

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

魔法少女リリカルなのは 炎の紋章を持つもの

### 【作者名】

コウチャカ・デン

### 【あらすじ】

かつて世界を救った英雄は、役目を果たすため眠りにつく。ただしその結末を嫌った友の手により、目覚めの可能性を残して…

かすかな可能性だったにもかかわらず目覚めた主人公は、友の願いを聞き入れ「幸せ」になることを目指すが……

主人公は目覚めた地で、具体的な手段が思い浮かばず流されるままに生きていくのか、目的を明確に見つけ「幸せ」をつかむことができるのか……

## プロローグ

かつて、その大陸で、『暗黒戦争』と呼ばれる戦いがあった。『暗黒竜』と、後に『英雄』とよばれる人間たちとの戦いだ。

数多の犠牲を払い、この戦いは人間たちの勝利に終わる。しかし、いかに英雄といえど人間である。人の命は儂く、闇の力、いや欲望の力とは強大であった。

かつて封印されたものの復活。新たに覇を目指す者、絶望に落ちる者、そういった者たちが際限なく現れ幾星霜の間、戦いは繰り返された。そしてそのたびに多大なる犠牲を払い続けた。

時には滅びの未来を変えるために、未来から英傑がやってきたこともあった。『異界の門』を越え、異界から『英雄』がやってきたことも、また逆にこの世界から『英雄』が旅立っていったことも少なくなかった。

そんな戦いの中、その歴史に終止符を打つべく人々は立ち上がった。

方法としては褒められたものではない。だが、あまりにも長く続いた戦いは人々からそれ以外の手段を奪うには十分だったのだ。

すなわち争いの根源の封印。今までと違うのは、敵対するものだけでなく自分たちの希望となる力も共にも封印するということだ。地上に力が残らなければ、外側から封印を解くことは絶対にできない。だがそれは、外側から封印ができないということでもある。

「このような役割を君に託すことになったのは、私の不徳の限りだ。

……他に人がいない今だから、正直に言おう。私は……」

「それ以上は言うてはいけないよ、我が友よ」

見るからに神聖な衣装をまとった青年が、20は年上であるだろう豪華な衣装をまとった壮年の男性の言おうとする言葉を止める。

「俺がこの役割を果たすのは、当然のことだよ。この戦いに最初から参加していた身としては、今日まで戦いを終わらせることのできなかった俺にこそ責任がある」

もはや数えることもできない年月を戦い続けたという青年は最も新しい、そして最後であるだろう友に言う。

「俺は、長い時間を生き過ぎた。戦いのないときは眠りにつき、無理やりつなぎ合わせた命だ。もう100年も起きていられない以上、現状最も有効的な使い方をするのが当然だろう？」

外側からできないなら内側から。当然だがそれだけでは意味がない。それは内側から好きにあげられるということなのだから。

「だから、この封印は俺がやる。力量的にも、俺以外に任せられるものはいないだろう？」

この世界、異界も合わせて古今東西最強の存在が、全霊を持って封印を行う。それ以外にこの方法を実行できる手段はない。

かつて異界にあったものを含め、今現存する強い力を持ったものをすべて自身と共に封印することは、彼にとって決定事項だ。壮年の男性も、彼の意思を覆すことができないことはわかっている。

「それでも、私は諦められないんだ。100年だけと君は言うが、それでも人にとっては十分な時間だということぐらい君にもわかるだろう？」

「それでも、俺はやめられないんだ。君が封印に付け足したものが、せめてもの譲歩だよ」

彼らの話が続く中、ゆっくりと青年の足元が光り始める。封印を行うのは青年と、青年の持つ類稀なる力を持つ道具たちだが、それをさらに時間と場所で強化しているのだ。今更止まることはできない。

いや、止まることはできるがそうすると次は封印に、ある術式を加えることができなくなるのだ。

「わかっている……わかっているさ！ 理屈では、君が言うことが絶対正しいことぐらい！ 私も王として、この選択をするしか無かったことも！ それでも私は、君に幸せになってほしかったんだ！」

長い、長い時を戦場で過ごした青年に、平和な世界を見せたかった。そこで過ごしてもらいたかった。だから、あの術式を付け足したのだ。結局封印自体を中止することができない以上、できることはこうして会話をすることともう一つ……。

「せめて、「こうして最後に祈るくらいはかまわないだろう？」

『封印が必要なくなった時、自然とこの封印が解ける』なんて正気の沙汰とは思えないけどな」

そう、男が行ったのは、遠い未来に希望を預けること。青年が摩耗していった理由の一つが、目を覚ますたびにかつての友がもういないのだと知ることだと知っていても、ほんのわずかな希望を残したかったのだ。

「封印が必要なくなった時……なんてあいまいな条件だし、発動することなんてないと思うけど」

そういつて、自分から最後の封印を起動する。青年とて、友と平和な時を過ごしたくないわけではないのだ。そういつた思いを押し込めるため、最後の時へと足を速める。

「では、これからの世が平和であることを願っているよ」

「ああ、この道の先に君の幸せがあることを願っている」

そうして、青年はこの世界から姿を消した。交わした言葉が、青年に届いたかどうかはついにはわかることがなかった。だが、これで一つの戦いが、ようやく終わったのだと、終わってしまったのだということだけは確かだった。

「王よ、儀式は……」

「ああ、問題なく終わった」

封印を行った場から離れると、すぐに周辺を警護していた騎士たちが現れた。

「なら、これで……」

「いや、あくまで魔王やそれに類する存在による破滅の可能性がなくなっただけだ。完全なる平和が約束されたわけではない」

「それだけでも十分でしょう。これで、我々が1歩1歩積み重ねたものを、一息で破壊し尽くすような存在がいなくなったのですから！」

王は、その表情を変えないようにするのに、全霊を振り絞った。彼の言葉には、あの青年も含まれていると感じ取ってしまったが故だ。

「……そういった心の緩みに、魔は宿るのだ。これから数年が、最も危険な時期と知れ」

「！……失礼いたしました！」

そういつて姿勢を正す騎士たちを先導する形で、この場を去る。これもまた、王が封印を止めることのできなかつた理由の一つでもあるのだ。

(この世界の恩人である彼に！ なぜそのような思いを抱ける！)

それもまた、王は理解している。彼は強すぎたのだ。圧倒的に、理

不尽にすべてを蹂躪できる程度には。そこまで考え、王は肩の力を抜く。

（もう、わたしにできることなど、たかが知れている。だが、彼が再び目覚めたときに、この選択が多く命を救ったのだと、正しかったのだと、そう、安心できるものを残さなければならぬ！）

この時代は、後に様々な称賛を浴びる時代となったが、それを彼の青年が知ることができたのかは、確認するすべを持つ者はいなかった。

## 第1話 「幾星霜の時を越えて」

その青年は眠りの中にあつた。長い時間がその場にあるもの達から力を奪い、そのすべてを弱体化していった。今までの封印は闇を単体で封じていたのに対し、今回はすべてを一緒にしていたのが原因かもしれない。だが、そんな理由はどうでもいい。重要なのは、ある男が望んだ時がとうとう来たということだ。

そうして、今再び青年は世界に降り立った。

「……………」

目を覚ますと、そこは知らない天井があつた。それも『ただ知らない部屋』というレベルではなく、何でできているのかすらわからないレベルで知らない天井だ。

「……………」

周りを見渡しても、彼の知っている素材で作られたものが存在しないように見える。そもそもなぜ自分はこのなところ………と思ったところで、ようやく眠りにつく前のことを思い出した。

「そうか……俺は目覚めたんだ」

本来ありえなかった、あの時の続き。もはや目覚めることはないと思っていたが、それだけあの友の思いは強かったということであろうか。

そして、あの術式が発動したということは、ここには自分と共に封印されていた存在を滅ぼせる可能性を持った存在がいるということだ。あの時から見て遙かな未来だということもあるし技術が生まれたとということも考えられる。そうして思考が回り始めるのと同時に、

重大なことに気付く。

『闇』がない」

共に封印されていたはずの存在が確認できなかったのだ。

「まさか自然消滅ってことはないだろうが……ダメだ、頭が回らない」

永い眠りから覚めた後はいつもそつだ。疑問や問題はあふれてくるのに、それを解決する手段がまるで浮かばない。

しかも今回は自然解放である。彼を目覚めさせた人、というのも存在しないのだから、なおさら状況判断が難しくなるだろう。そういつた先入観があったからだろう、この部屋に入ってくる存在に彼は全く反応できなかつた。

「あ、目が覚めたんですね！」

「だから言ったろ？ そんな心配することないってさ」

外見年齢は、10歳と17歳ぐらいの少女たちだつた。10歳ぐらいの少女は安心したような顔をして、17歳ぐらいの少女は少し呆れたような顔をしていた。

「えつと、急な事なので混乱しているかと思いますが、落ち着いて聞いてください」

「あらかじめ言っておくけどさ、アンタがここにいるのは別にあたしたちのせいじゃないからね！ 不幸な偶然が重なった結果だつてことを理解しておいてくれよ！」

「アルフー！」

アルフと呼ばれた少女が、言い訳の様な事を言うのをしかる10歳ぐらいの少女。



(……なんだかよくわからないけど、彼女たちはなぜ俺がここにいるのか知っているらしい。まあ、目が覚めた後に誰かの話を聞くというのは恒例だしいいけど)

「大丈夫、落ち着いてるから。それよりさ、名前を覚えてくれないかな？あ、この世界でも人に名前を聞くときには、自分から名乗らないといけないのかな？」

青年は、このマナーがわからない以上素直に聞くのが一番である。しばらく質問攻めにしてしまわないように自粛しないといけない、などとちよつとずれたことを考えていた。

「えっと、人それぞれだと思います？わたしの名前はフェイト。こっちが使い魔のアルフです」

「うん、フェイトにアルフね……覚えた。俺は……そう、俺の名前はマークだ」

「ちよつと間があったみたいだけど、まさか偽名じゃないよね？」

よく見ている、とマークは感心する。

「アルフ、でいいかな？偽名ではないよ。ただ、今まであまり俺の名前を呼ぶ人があまりいなかったからね。ちよつと油断すると出てこなくなってしまうんだ」

そう、英雄ということすら生ぬるい、伝説である彼の名前を呼ぶものはあまりにも少なかった。いや、それ以前に相手が委縮してしまい、声をかけられることすら珍しかったのだ。

「……そう、変な事言っつて悪かったね」

マークは、そういつて引き下がるアルフの姿を不思議そうに見ていた。彼の周りには、極端に言つと2種類の人間しかいなかったからである。『恐れるもの』と『疑うもの』、前者は伝説を信じその力を恐れ、後者はこの20に満たない少年という者もいるこの姿を見て疑惑を持つのだ。

(彼らは俺が力を示すまで、決して信じてくれなかったからな)

信じたら信じたで、ほとんどのものが前者になるのだが……それはともかく、ただ言葉を交わすだけで信じてもらえるのが、新鮮でならなかったのだ。

「えっと、じゃあマークさん？」

「マークでいいよ」

「え、でも……」

そういつてはみるが、難しいだろうとも思ったていた。大体マークの外見は20歳に届かないぐらいで、フェイトとはそれなりの開きがあるのだ。

「敬語もいらないよ、なんだか話し辛そうだし」

それでも言ったのは、フェイトが慣れていないように見えたからだろうか。年上との会話、ではなく人との会話に。

「うん。わかったよ。……それで君の現状についてだけど」

「とりあえず結論だけでいいよ？ わからないところは順番に聞くから」

最初から話されても、その最初がわからない可能性の方が高いのだ。

「あんたは、あたしたちの転移に巻き込まれちゃったんだよ」  
「転移に？」

少し時間をおいて立ち直ったのか、アルフがそれはもう簡潔にまとめてくれた。もともとマークが封印されていたのは『異界の門』などで、封印から解放された直後に彼女たちが通って、巻き込まれたのだらう。

「理解した」

「え！ あれだけで？」

フェイトが驚いているが、やはりマークには何を驚いているのか理解ができなかった。まあ、すべてを理解したわけではなく、なぜ自分がここにいいのかを理解しただけだ。

「まあとにかく、しばらく世話になるよ？ 他にあてがないからね」  
「う、うん。それは全然かまわないんだけど……」

フェイトからしてみれば、服装からしておそらく管理外世界の人であるだらうマークが、なぜこんなにも理解が早く、落ち着いていられるのかわからなかった。

だが、自分たちの目的のためにも、すぐに彼を管理局などに保護してもらわねにもいかなかったのだ。どうしたものかと思っていたので、彼の申し出は非常にありがたかったのだが……

(なんたらう、すぐく気になる)

理解できないからこそ、興味がわく。知りたいとも思う。だがそれよりも前に、異世界の出身である青年にここで過ごすために必要なことを教えないとならぬだらう。

「じゃあさっそくだけども」

「な、なに？」

今後のことを考えていたフェイトへ、マークはとりあえずの要望を告げる。

「服装についてお願いできないかな？ 少なくとも、この辺りを出歩いて不審に思われないようにしたい」

結局この後にも質問などが続き、結局フェイトが行動に出るのは1日遅れることになった。

## 第2話 「初陣」

「ねえ、マークは本当にこの世界の知識がないの？」

「こんなところで嘘は言わないよ？ ただ人の心理というのはどこもそう変わらないよugdだからな、あれぐらい問題ないよ」

マークの質問攻めでつぶしてしまった次の日、ついやってしまったと謝るマークに丸め込まれてジュエルシード集めを手伝ってもらったことになってしまった。

彼女たちの反論はことごとく論破され、彼は手に入れたばかりの何の変哲のない服をまとい、不慣れであることを理由に3人で街へと繰り出すことになったのだ。

「別にあんたが飛べれば、こんな苦勞はしなかったんだろうけどね」

「飛竜とかがいれば何とかなかったんだけどね」

「さすがに飛竜がこの世界にいたらちよつと……」

この世界では幻想の生物だ。かなり面倒なことになるのは間違いないだろう。いや、もつすでに面倒事はあったのだ。この世界の治安組織に『補導』されそうになってしまった。

「最終的に何とかなつたとはいえ、できれば今後こんなことは避けたいな」

マークが言いくるめなければ、最悪強行突破をしなければならなかつただろう。

「就学時間や夜に歩かないことになつちやうけど？」

「……それはだめ」

「大丈夫だつて、あまり目立たないと通ればそう見つからないよ」

アルフは簡単に言うが、この人の多い街で姿を隠すのがどれほど大変か……そうマークが考えるのは裏腹に、人はよっぽどのことがなければ『見間違い』『勘違い』あるいは『何か事情がある』と納得する生き物でもある。そんなことを話しているうちにジュエルシードの反応があった。

「フェイトー！」

「うん！行くよアルフー！」

「ふ〜ん、これがジュエルシードの反応か……」

真っ先に駆けて行った2人の後ろを追いながら、マークはその反応を吟味する。だが、それがいけなかった。

「っておい、速いな2人も！」

特にフェイトに至っては、もう見えないところまで先行してしまっている。たとえ考え事をしていなかったとしても、その速さはただでさえ本調子でないマークを置いていくには十分だった。

「なんて言うか……一方的だな」

やっとの思いで追いつくと、もう2人は戦い始めていた。フェイトは茶色い髪の女の子と、アルフは……何か小動物と対峙しているようだ。だがマークから見ると、その内容はまだ戦いといえるようなものではない。

「待って……！わたし、戦うつもりなんてない！」

「だったら、わたしとジュエルシードに関わらないで」

なるほど、とマークは納得する。相手の子は人と戦ったことがない

のだろう。そう考えるとこの内容にも納得がいく。

(困ったなあ……なおさら手が出しにくいじゃないか)

数多の戦いを越えてきたマークにとって、敵を前にすれば息をすめるかのように殺すことができる。しかし民間人は別だ。相手が敵で、戦士でないのならその命を奪う道理を彼は持たない。

(だが、手伝つと言ったしな)

うまいこと加減して足止めする。そう思い直し、その場に足を踏み入れ声を大にする。

『ソレ』の相手は俺がする！ お前はジュエルシードを！』

相手は何者かわからないので、とりあえず固有名詞を伏せておく。フェイトの目的も、目の前の少女と戦つことではないのですぐに反応して離脱する。

「ま、待って！』

『ファイアー』

そういいながら追おうとする少女に対し、共に封印されていた魔道書の1冊を取り出し前方に火の魔法を放つ。

「なのは！』

「隙だらけだよ小動物！』

マークの攻撃により、辛うじて保っていた均衡が崩れる。

「かはっ！』

「ユーノ君!?　っく!」

小動物がアルフの攻撃によって『落ちた』。空にいる少女も、マークの牽制に対して何もできずに翻弄されている。

「2人とも、終わったよ!」

そうしている間にフェイトは回収を終えたようだ。マークは仕上げとばかりに魔法の威力を上げて、爆風をうまく使い少女を空から落とした。

《やり過ぎじゃ……》

《直撃は1度もないから大丈夫だよ》

習ったばかりの念話で少し話す。声を出さなかったのは、相手にこちらの弱みを見せないためだ。実は攻撃を躊躇していたなんて思われたら面倒だからな。

「っく……」

起き上がろうとする少女に、フェイトは言葉をかける。

「今度は、手加減できないかもしれない。だから、ジュエルシールドは……めきらめて」

そういつて飛び去るフェイトとアルフ。

(いや、だから俺は飛べないんだって)

少し遅れて、それも歩いて帰るなんて少し恰好がつかないな、などと思いつながら1本の杖を出し、残された少女たちに向ける。



「え……？」

『リザーブ』

そこから淡い光が放たれ、少女と小動物を癒す。範囲回復魔法とでも呼ぶ代物だ。

「な、んで……」

(……フェイトに『やり過ぎ』って言われたから、なんて言えないよな)

「……こんなことは忘れて、日常に帰りなさい？」

昨日フェイトから聞いた話に、この世界には本来魔法がないという話があった。とっさに思い出して言ったことだが、これなら治療をした筋も通るだろう。

そうしてマークは少女の前から走り去った。一応フェイト達が飛んで行ったのとは反対の方向だ。

「……いつ時に限って、何かしらのことが起こるのはなんでかなあ」

帰る先を特定されないようにと遠回りをしたのだが、割と全力で2時間ほど走りぬいた先で、例のアレを見つけてしまったのだ。

「まあ、人気の無いところだっということがせめてもの救いか……」

正直な感想として、フェイトかあの少女のどちらかがこのジュエルシードに気付いていたらあの戦いは起こらなかつたんだろう、と思ってしまう。

「済んだ」とはいいい、問題はこれをどうするかだけ……」

見つけることができたことは、幸運以外の何物でもないだろう。ただこれは触って大丈夫なのか疑問が残る品であるのだ。

残念なことに、フェイトに連絡をする手段がない。念話自体はできるようになったが、効果範囲は目視できる範囲のみだ。直接呼びに行くというのもだめだろう。なら、残る手段は……

「俺が封印するしかないのか？」

一応使えそうなものはある、あるのだがコレに使えるのかは不明だ。だが、ここで放っておくわけにもいかないのはもはや言うまでもない。

「やらないで後悔するより、やって後悔するべき……か」

そして1振りの剣を呼ぶ。かつて異界にて魔竜を封印した英雄の持っていた剣『封印の剣』だ。

「ハアッ」

気合一閃、炎を煌めかせ振るわれた剣は、ジュエルシードに突き立てた部分から結晶を発生させる。そしてジュエルシードを覆い、こぶし大の大きさになったところで変化が止まり安定した。

「ふう、これで一安心……！」

そこで気づいた。いや、それまで気づけなかったのだから、どれだけ鈍っているのだろうか。

「あ、あ……」

「い、いまの……」

そこにいたのは2人の少女だ。つい数時間前にジュエルシードを巡り戦った少女と同じぐらいの年だろっ。

(あの白い制服のせいかな)

フェイトより先にあの子と同じくらいと思ったのは、あの子の戦闘服も白かったせいか。

「なんでっくん……」

思わず顔を覆ってしまうが、それだけの動作で2人の少女はビクッと震える。

(いちちらとしては子供に向ける剣はないんだがな……)

そう思った後に『戦場に立たない』と付け加える。そして剣をしまい結論を出す。

(っくん、なかったことにしよう)

周りの大人たちが『子供のたわごと』と切り捨ててくれることを祈りながら、今度こそ彼は、本拠地のマンションへと駆けて行った。

### 第3話 「初陣を越えて」

「帰ってこないね……」

白いおそらく素人の魔導師と戦い、大事を取って帰還してから、何度目のつぶやきだろうか。

「はあ、フェイトもあいつの魔法は見ただろ？ そんなへマするような練度じゃなかったって」

そうなのだ、いくら相手が素人とはいえ、空を飛ぶ相手を地上から完全に圧倒していた。さらに言えば、警察を言いくるめることもできるほど知恵もまわり、話術もある。だけど、いやだからこそその不安がある。

「あれだけの知恵と力があれば、わたしたちのところにいる理由なんてないんじゃないかな？」

そう、フェイトにあるのは『何かあったのか』という心配ではなく『帰ってこないんじゃないか』という不安だ。

「でも、いくら何でもマーク1人じゃ次元跳躍なんてできないだろ？」「ここに居なきゃ帰れないんだから、すぐに帰ってくるぞー」

確かに彼が自力で帰れるのなら、フェイト達に世話になることなく本来いた世界に帰っていただろう。では、なぜここまで不安になるのか。

そもそも、マークとは昨日であったばかりだ。そして昨日の会話もそのほとんどがこの世界の常識などの話で、自分たちのことなど片手の指で足りる程度しか話していない。

「本当にどうしたんだろっ……」

アルフはこのつぶやきはマークを心配してのものと思ったのか、今度は何も言わなかった。そうしてフェイトは、答を得ることなく、マークが帰ってくるまで何とも言えない不安を抱き続けた。

「いや、心配させて悪かったね」

それからしばらくして、マークは何事もなかったかのように帰ってきた。正確には何があったから帰ってきたわけだが……

「何もなかったら2、3日帰らないつもりだったって……」

「本拠地の近くで敵対勢力と接触したんだから、それくらいの警戒は当然だろ？」

確かに隣町での接触は、ここから遠いと言えるほどの距離はない。だが警戒するほど近いとも思えない距離だ。こちら辺が常識の差というものを表しているといえるだろう。

「あんたさ、さすがに神経質すぎると思っつよ？」

「そうか？ま、ここがばれるよりずっといいだろ？」

「それはそうだけど……」

さすがに一朝一夕でこの認識を覆すのは無理と感じたのか、フェイトは強引に本題に戻してきた。

「それはそうと、「これ……どうしたらいいの？」

そう、彼の手によって封印されたジュエルシードである。不思議な結晶によって封印されたそれは、少なくともフェイトの知識ではどう

することもできそうにない。

「そうだった。じゃあ俺がした封印を解くから、フェイト達の術式でやり直してくれ」

「わかった」

ジュエルシードを必要としているのはフェイト達なので、封印もそちらに合わせておくに越したことはない。マークは『封印の剣』の核である一つの宝玉を取出し、掲げる。

「それは？」

『炎の紋章』この封印を解く小道具だよ

そうして掲げられた紋章から光があふれ、ジュエルシードを覆っていた結晶を溶かす。

「ジュエルシード、封印！」

その直後フェイトが再度封印を行い、問題なくフェイトの手の内に収まった。

「とりあえずこれで2つか」

「うん。……あの女の子も集めてるだろうから、急がないと」

それは、あの子と競うということだ。正直、あの子にある程度集めてもらってそれを横から……という方が効率はいいんだが、という考えをマークはそっと脇に置く。あくまでジュエルシードを必要としているのはフェイト達であり、自分は手伝いをしているだけと割り切る。

(本人が納得する方法でやるのが1番だ)

「それはそうと、ずいぶんと強力な封印だったね！ そっちが専門なのかい？」

かなり力の入っているフェイトを和ませるためか、明るめな調子でアルフが訪ねた。マークとしてもことさら隠す気はないのか、自然な調子でその力について述べる。

「そうだね、そこまで厳密に分野を分けてはいないけど……あえて言うなら、封印・討滅が専門かな？」

「それじゃあ、戦闘が本職？」

討滅というところが気になったのか、フェイトもその話に乗ってくる。

「ああ、基本的な立場は助っ人だけど、元いたところでは軍に所属していたことになるかな？」

「軍人……やっぱり犯罪者を追っかけたりしてたのかい？」

声を低くし、あからさまに警戒を示すアルフを見て、ある意味予想通りの反応だと苦笑するマーク。ジュエルシードが危険物だということぐらい、誰に聞くまでもなく理解できる。なら、それを追う彼女たちは何者か？それはマークという身元不明者を手元に置くことや、強引に押し切られたとはいえ上司などに連絡することなく協力を許すことから容易に想像できた。

「正式に所属していたわけじゃないし、そういうことはあまりやらなかったな。人じゃない存在を追いかけていた時間の方が圧倒的に多いよ」

事実、人同士で戦った内乱や戦争はあったが、犯罪者を追っていた時期なんてせいぜい山賊を狩っていたぐらいだ。最も多く戦ったの

は『屍兵』と呼ばれる存在だったか。『魔物』や人造生命である『モルフ』と呼ばれる存在、果ては『女神』とも戦った。

「まあとにかく、勝った方が正義を主張するような戦場ばかりだったからな。事の善悪より、俺自身の使命の方を重視していたかな？」

「……だから心配することないって」

「え!？」

「あたしたちのやってる事なんて、お見通ししてわけかい」

「目的までわかっているわけじゃないよ？　ただ、非合法なんだろうなってのはすぐわかったけど」

そうして2人はともに笑みを浮かべる。とはいえ笑いあうというにはあまりにも攻撃的なものであった。

「まあ、だからと言って何が変わるわけでもないんだけどね」

そういつてマークの獰猛な笑みから力が抜ける。その豹変ぶりに、アルフだけでなく今まで少し引いていたフェイトまで啞然としている。

「うん、この話はこれでおしまい！　今後は……そうだね、おそらく学校に通っているあの子の動けない午前中と昼のうちはバラバラに探索して、夕方前から合流ってことでいいかな？　あ、俺1人だと連絡とか封印に支障が出るし、一手に分かれる方がいいかな？」

「う、うん。それでいいと思う」

「あたしとしても問題はないけど……」

そうして、いつの間にか主導権を握ったマークによって今後の計画が立てられていった。

「そついえば、もう食事は終わったのか？」



ある程度話がまとまったのを機に、空腹を覚えたマークが訪ねた。

「ううん、マークが帰ってからと思ってたから」

「それは悪いことをしたな」

「ホント、もう腹ペコだよ」

改めて謝り厨房へと向かう。だがそこには特に何もなかった。

「……君たちは何を食べるつもりだったんだい？」

「えっと……これ？」

そういつてフェイトが指差したのは、クッキー状の非常食の様なものだった。

「せっかく人里にいるんだ、もうちょっとマシなもの食べようじゃないか」

「でもわたし料理できないし……」

「あたしもできないよ？」

「フェイトはともかくとして、アルフまでできないのか……」

マークの居た世界では、アルフぐらいの年で結婚しているものも多かった。それを思うと自然とため息が出そうになるが、ここでもその常識が通じるわけじゃないと思い直し必至で飲み込む。

「じゃあ、いまから簡単なものを……いやもう買ってきた方が早いな」

昼に街を歩いた時に見た商店の数とその質は、彼を圧倒して余りあるものだった。そこには完成した料理を売る店もあったし、そちらに行った方が早いだろう。幸い、友から大量の財宝を持たされたので金には困らない。とはいえ毎食買ってくるのも面倒だし、外で済ますに

もフェイトの気が休まらないだろう。

「俺が作るか、一応軍で食事当番になったこともあるし……そうとう昔だけど」

封印される直前ぐらいになると『そのような事をあなた様にさせるなんてとんでもない！』ということと基本何もさせてもらえず、暇を持って余していた。問題があるとするれば、こここの材料とマークの知る調理法が合うかどうかぐらいである。

「ま、今は食事だな。腹が減っては戦もできまい」

「わかった。ちよつと準備してくる」

「え〜これから移動か〜」

フェイトは素直に、アルフは文句を言いながらも特に遅滞なく準備に行った。

「……ああ、なかなかいいもんだな」

他人から見れば平穏と呼び難いものかもしれないが、今までのように世界の危機を背負うでもなく過ごすこのぬるま湯は、彼にとって心地よいものであった。

「う〜ん……炎を放つ剣を持った男、ねえ」

「やっぱり見つからなかった？」

ところ変わって、海鳴でも有数の大きさを誇る屋敷の中で、ある女性たちが話をしていた。

「まあ、うちでもすべての異能者を知ってるわけじゃないしね。とはいえ、放っておくわけにもいかないし……」

20歳くらいの女性が悩んでいるところに、メイドの一人が声をかけた。

「人相書きが出来上がりました……このような顔つきでよろしかったでしょうか」

「うん、これなら本人を見て見間違えることもないと思う」

「どれどれ……あら、なかなかいい男じゃない」

「お姉ちゃんー！」

おどける姉をしかる妹。もし夕方のあの場にいたものがいたものが居れば気付いたであろう。人相書きの男がマークで、この場で姉をしかった少女が、ジュエルシードの封印を目撃した子供であると。

「まあまあ、でも何かの行き違いで攻撃されたりなんかしたら、たまりませんからねえ〜」

「そうですね、幸い『目撃者は消す』といった方向性でないようですが……」

「なににせよ、話し合いの席は設けないとね」

そして、子供の話と切り捨てなかったこの女性たちは、いったい何を思いこの話を受け入れたのかと。いや、なぜか、などと問う必要もないだろう。要は『知っていた』のだ。異能の存在を。

「やっぱり恭也にも頼んでおきましょう。準備を怠って大怪我なんかしたくないし」

こうして実力者がまた一人、マークと話し合いを行うために追加された。残念ながら、マークに平穩が訪れるのはいささか先の話になりそうである。

## 第4話 「持たざる者」

あの夜から数日がたち、また一つのジュエルシードを見つけた。ただ今回は前回と異なり街中であるうえに、正確な位置がわからなかったのだ。

「それで、出てきたはいいけど……どーするんだ？」

いまだ探索については役立たずのマークが尋ねる。とはいえ、ここまで探す範囲を絞られていれば、あと小一時間もあれば普通に見つけられるだろうとも思っていた。

「魔力流を打ち込んで、強制発動させる」

「強引すぎないか？ そんなことしたら一瞬で相手の子たちにも見つかるぞ？」

だが、その子たちに一歩先んじて発見することはできるわけだし、下策というわけではない。こんなことなら、相手の位置をちゃんと把握しておくべきだったかと後悔する。

「こっちは3人であっちは2人出し問題ないって」

「伏兵がいる可能性も考えとけて……奇襲が一番怖いんだから」

そういいながらもあの子たちの戦力はあれきりだろうとも思っている。マークたちだって全員で動いていたのだ、あの子たちになんて出し惜しみをする理由はなかっただろう。懸念するとすれば、フェイト達の言っていた『管理局』であろうが、そちらはまだ来ないだろうというのがフェイト達の見解であった。

「じゃあ、マークがフォローに回って？ あの子たちはわたしとアルフ

でどつにかするから」

「大丈夫だって、単純なスペックでいえばあたしの方が上なんだから？」

「まあ、そうなんだが……」

長年の経験が、目の前の二人があの子たちに負けることはまずないと結論付ける。それでも躊躇するのは、前線に向かうというフェイトがいまだ10歳にならない子供だからなのか……

「それじゃあ、始める」

そういつてフェイトは魔力を練り始める。短い付き合いだが、マークがはっきりと断言しないのは、別に反論があるわけじゃない時だとわかっている。こうして無理にでも動けば、なんだかんだでマークはついてきてくれるのだ。

「アルフ、結界を。人的被害が出ると後の探索が面倒になる」

「あいよー」

広域結界が発動し、この場が半ば異界へと変わる。

「見つけた」

「さすがにあの子たちも気付いたみたいだね……フェイト！」

アルフの呼びかけに無言でデバイスを、バルディッシュを構えることで答える。

「いっつらっしやこ」

マークが声をかけるも目線すら合わせずに2人は飛び立つ。1秒を争うので返事がないのはある意味当然だ。

「で、飛べない俺はどうしようか……なんて、決まってるよな！」

そういつてマークは今までいたビルの屋上から飛び降りる。普通に降りていては有事の際間に合わないかと判断した結果だ。

「来い『バゼラード』！」

そうして封印から呼び出すのは、彼の持つ短剣の中でも随一の強度を持つもの。それをビルに突き立て落下の勢いを殺す。

「~~~~…って、痛がってる場合じゃないか。さっさとポジションニングしないと」

せいぜい手足にしびれを残す程度のダメージで地上まで下りたマークは、2人のフォローがしやすい場所へと急ぐ。

「って、これは厳しいな……」

実際ジュエルシードのもとに到着するころには、フェイトはあの白いのとどこかへ飛んで行ってしまっていた。アルフの方もおそらく小動物を追っているのか、近くに姿が見えない。

(俺が封印してもいいが……あの封印実はあんまり相性が良くないんだよな……)

ジュエルシードと封印の相性ではなく、マーク自身と封印の相性の問題だ。

「仕方がない……ちょっと隠れて様子を見るか」

戦えばまずフェイトが勝つのだ。あとは危険がないようにフオーローに回れば、マークが無理に封印しなくてもさほど問題はない。そうしてマークは、ジュエルシードから少し離れた路地に身を隠し、戦況を眺めようとしたその時だった。

「お、ライバル無視して回収優先か……さすがに距離が近すぎるぞー！」

先程まで何か話している様子だったのが一転し、高速でジュエルシードへ向かうフェイト達。だがフェイトは相手を引き離せていない。そして2人がジュエルシードをとらえ……何がはじけた。

「うっ……！」

「くっ……！」

ジュエルシードに触れていた2人は、数瞬だけこらえるが吹き飛ばされる。フェイトは体勢を立て直し何とか着地したようだが……

「おい、あっちは道に食い込んでるぞ……大丈夫なのか！」

幸いというべきか、まだ息はあるようだし、とりわけ血のにおいもない。地面を砕くことで、体へのダメージを受け流したのかもしれない。とりあえず安心したところでフェイトへ視線を戻すと、デバイスをしまい、突っ込もうとしている彼女の姿があった。

「あのバカー！」

一応先程の破裂からジュエルシードは静かになっているようだが、あれは嵐の前の静けさというやつだ。とっさにある杖を使いフェイトをさがらせる。

「……マーク!？」

「下がってるー！俺がやる」

使用した杖は『レスキュー』効果は離れたところにいる対象を自分の周りに呼び寄せるといったものだ。

『封印の剣』！」

先日也使ったが、あれは起動していないジュエルシードに対してだったため、今回もうまくいく保証はない。もう一つ可能性のあるものもあるが、あれは1回しか使えないためできればとっておきたいのだ。

「ハアッ！」

炎をまき散らし、ジュエルシードへと突撃する。そしてやはりというべきか、ジュエルシードに触れた時点で以前はなかった反発を感じる。

「ゲウウ………！」

後ろで何か騒いでいる気配を感じるが、封印に全力を注ぐ。反発はゆっくりと抑え込んでいき、それに従って目の前でゆっくりとジュエルシードが結晶に包まれた。

「ふう………！」

封印が終わっていると行き着いた時に、それに気付く。

「2人とも、帰還するぞー！」

「うんー！」

「了解ー！」



だが2人にはそれに気付かれないよういつも通り振る舞う。消耗したであろうフェイトを気遣ってか、アルフはフェイトを抱えてビルの上へと飛んで行った。

「やっ……『リブロー』」

前回と同じように杖を取出し、少女の傷を癒す。前は『やりすぎ』と言われてたからだが今回は特に理由はない。しいて言うのなら、目の前の少女がけがをしていて、マークにはそれを治す力があつたからかもしれない。

(丸くなったか？いや、「ここを戦場だと思つてないのが原因か……」)

そうでなければ治療以前に、前回の戦いの後、彼女たちを生かしておかなかつたかもしれない。少なくともジュエルシードの前で『様子見』なんて考えなかつたはずだ。

「あの……マーク、さん」

そこまで考えて、「ここがまだ街中であつたことを思い出す。名前はいつ……」と思つたところで、先ほどフェイトに呼ばれたことを思い出した。

(特に口止とかしてなかつたからな)

「なんだっ」

気を抜いたのは明らかにミスだ。だが相手に話したいことがあるというのなら、それを聞くぐらいはかまわないと思う。以前の戦場でも『投降したい』『今の雇い主にはついていけない』といった奴らも

いて、そんな奴らと和解し、共に戦場を渡り歩いたりもしたものだ。

「どうして……」

「まあ、な」

ジュエルシードを集める理由か、治癒を行った理由か。マークにはどちらの問いにもこたえる言葉を持たなかった。それでも、目の前の少女に答えるならば……

「しいて言つのなら『惰性』だな。かつての目的は意味をなさず、今は何をすればいいのか自分でわかっていないのが現状だ」

フェイトに協力をしているのだから、目を覚ました時にそこにいたからという理由が大きい。今までずっと自身の封印を解いたものと共に戦ってきたから、その習慣に則っているだけ。

「理由が、ない……?」

少女からしてみれば衝撃だろうとマークは思う。少女くらいの年ごろなら、『将来どうしたい』『ああんりたい』といった夢にあふれていただろう。今だって目的を持ってジュエルシードを集めていたのだろうにそんな中、目の前の青年は『目的がない』という。

「まあこれは俺だけの話で、相方たちのことは知らないけどな」

そう、マークはフェイト達の理由を知らない。なかなかデリケートな部分である上に、かなり強引にマークが手伝いを申し出たことも原因だろう。

「これで問いには答えた。……次は戦わなくて済むことを期待しているよ」

そう言って、マークはアルフを追ってビルの屋上へと飛ぶ。とはい  
えアルフのように一足飛びというわけにはいかず、ビルの側面を蹴っ  
て三角飛びのような形であった。

「ふう」

飛び上がったビルからしばらく跳ね回り、追跡等がないことを確認  
して一息つく。

「思ったよりきついな……」

その手には、いまだ『封印の剣』が握られていた。いや、固定され  
ていたという言い方が正しいかもしれない。

「ハッ！自分が行く封印に巻き込まれそうになるなんて……これでよ  
く封印を専門になんて言えたもんだ」

その手は水晶に包まれ、剣と一体化したようになっていた。相性が  
悪いとはわかっていたが、ここまでとは思っていなかった自分の見通  
しの甘さにも腹が立つ。

「しばらく使用は控えるのが賢明か」

そういつて剣から宝玉を取り外し、掲げる。この封印が剣の方まで  
覆っていたらどうなっていたかと、背筋が凍る思いであった。

## 第5話 「これからのあるべき姿」

「じゃあ、行ってきます」

「留守の間は任せたよ！」

先日の戦いののち、フェイト達はいったん報告に戻ることにしたらしい。正直に言えば、マークは報告するような相手がいることに驚いたものだ。

「そうはいつでも、せいぜい街をうろつく程度だぞ？ 期待なんかするなよ？」

一応探索を途切れさせないようにするという名目で、マークはフェイト達についていかないで留守番をすることになった。

「それじゃあ食事の方を期待しているよー！」

「そっちならいいだろう。この国の人気食『カレー』を作って待ってる」

アルフの希望に、挑戦的な答えを返す。ちなみに、今までマークの作った料理の評判は、最初の料理以外は好評だ。最初のものが不評だったのは、マークの基本の味付けが行軍中のものだったせいかとにかく味が濃かったのだ。2回目以降は調整され、おいしくなったが、その結果この世界の料理にまで手を伸ばす始末だ。

「どんな料理？」

「シチューに似た感じのものらしい。ま、楽しみにしておけ」

そういうマーク自身も、人気のある料理だという程度の知識しかないのだが……

「うん、楽しみにしとく」

「そうと決まれば、ちゃっっちゃと終わらせるよー」

「まったく……アルフったら」

そういつてフェイトは転移魔法を起動させる。その際座標やらなんやらいつていたが、マークは聞かなかったことにした。

「ふむ……思ったより暇だな」

マークはフェイト達が出て行ってからすぐに料理をはじめ、終わらせてしまった。ものの本によると煮込む時間こそ長いが、市販の材料を使えばそこまで大変な過程はないとのことだったからだ。

「掃除、洗濯はさすがにできないし……」

技能的な問題もあるが、マークが1番問題に思っているのは相手の私物に触れることだ。人にとってはゴミ同前でも、本人にとっては貴重なものということはままあることである。

「自分探しにでも行くかあ〜」

目覚めてからずっと後回しにしてきたが、そもそもマークがここに居るのは友が願ったからだ。そしてその友の願いは『幸せになってほしい』である以上、マークにとって『幸せになる』のは義務といっても過言ではない。

「幸せなんて、押し付けられるものじゃないと思うんだが……いや、そもそも幸せってなんなのか、それが問題だ」

哲学だな、とつぶやきながら部屋を出る。身近にないなら探しに行

かなければならない。

「だから、そんな強迫観念みたいな考え方は違うって、もっとこう……ほんわかしたもんだろ？」

独り言を続けながらマンションを出て、そこで足が止まる。何処へ向かえばいいというものでないからだ。だからと言ってここにあるわけではなく……

「気の向くままに歩いてみるか……あ、時間には気を付けないとな。歩き回れるのは学校が終わるまで」

そうして完全に気を抜く。さすがに事故にあったりするほどではないが、視界にジュエルシードが入っても気付かないかもしれない程度だ。

(何かを探すには気を抜きすぎかもしれないけど、ここまで気を抜いても目に入るものがあればいいな)

そうして、マークは街へと歩みを進めた。

「結局何もなかったか……」

安いハンバーガーをかじりながら、公園のベンチでひとりごちる。そこまで長い時間探したわけではなかったが、街を歩いて特に目につくようなものは見つけれなかった。なんだかねで、ジュエルシードを探すためあちこち歩いていたらせいとか、新鮮さにも欠けていた気がする。

「まあ、そんなに簡単に見つかるようなら、俺は戦場でだって幸せを見つけたらだろっしな」

それでもこのまま帰る気にもなれず、まだいったことのない場所があったか少し考える。と、そういえば住宅地のほうには行ったことがなかったと思いつく。

「そうだな、そっちを回って帰るか」

もう、何も見つけれず帰ることが前提にあるようなセリフだったな、などと考えながらもマークは歩き始めた。

「やっぱり何があるってわけじゃなかったな」

そこまで期待していたわけではなかったが、それでも空振りとなる気が滅入る。それでもあえて何があったかを言えば、元いた世界でも見るものがなかったでかい屋敷……の、門を見つけた。

「まあ、建築様式というか、技術や文化も違うわけだし、比較対象としてはいまいちピンとこないな」

そういいながら人気の無い場所へと向かう。理由としては、少しのんびりしすぎたようで、もう『放課後』と呼ばれる時間帯になってしまったためだ。できる限り、あの少女と日常でかち合いたくない。そしてもう一つの理由が……

「そろそろ出てきてくれないか？こっちとしてはつけられるようなこととした覚えはないんだが」

「驚いた、ばれていたのか」

返事をしたのは男の様で、手には細長い何かを入れた袋を持っていた。

「まあ、そこまで警戒されたらね……尾行は本職じゃないだろ、剣士君？」  
「……………」

男は無言で警戒のレベルを上げる。だがマークとしては今回に限っては、できれば戦いたくなかった。ちょっと挑発してしまったが、まずは理由から確かめるべきと方向性をまとめる。

「で、何の用？」

「それはこちらのセリフだ、何が目的でこの街へ来た！」

「ん？この街に入るには特別な許可や申請が必要だったのか？」

マークとしては割と本心からの疑問だったのだが、どうやら男にははぐらかされたように感じたらしい。隙のない動きで袋から二振りの剣を取り出した。

「もう一度聞く。目的はなんだ」

先程よりも目が座っている。望む答えでなければ切りかかってきそうな気配である。

「あ、よくわからんが特にこれといった理由があつてこの街へ来たわけじゃないぞ？それでもあえて理由を言うのなら自分探しとでも言おうか」

「ふざけるな……」

男は切りかかってこそ来なかったが、かなり強い気迫を込めて怒鳴る。

「貴様が炎の異能を使ってこの地で何かをしたことは割れている！それ以上誤魔化そのものなら……………」



「あーあー、わかった！あなたの気が立ってる理由はよくわかった！あれね。俺に話せることはちゃんと言います。だからその剣仕舞ってくれ！」

正直ここまで敵意をぶつけられると、戦場に立つものとして反応してしまいそうだった。せつかく自分の『幸せ』を探していたのだ。戦士としてではない自分を探す、その始まりに血を流すのは、できれば避けたかったのだ。

男は剣こそ仕舞わなかったが構えを解き、とりあえず話を聞く姿勢を見せた。マークもようやく自分をつけていた理由を把握し、2人の少女の身内である男にどう話すかと頭を巡らせる。

「はあ、ここに来たのは本当に偶然だ。ただそこでちょっと危険物を見つけてな。その処理をしていたのを、あなたのトコの女の子に見られたんだ。今はほかにもないか確認中ってとこだ」

「その危険物は？」

「こっちで知り合いに預けた」

男は胡散臭そうに睨みつけてくるが、これ以上のことを話す気はマークにはない。いくら今は戦いたくないといっても、現状の相方に迷惑をかけてまで貫きたいことではないからだ。

だがマークはこの会話のうちに一つのカードを手に入れていた。

「あんたも……いや、あんたの後ろにいる奴が変り種なのか？とにかくそっちが手を出さないなら、こっちもやることやってさっさと出てく。それでいいだろ？」

「……いつから気付いてたの？」

そういつて男の後ろから女が出てくる。一人が素直に出てきて、もう一人が姿を隠して隙を見るっていつのは、割と基本だ。今回は別々に隠れているのではなく、一箇所に隠れていたからより効果的では

あつただらうが……それでも相手が悪かった。

「どんなものかは知らないが、あんたも『人』とは違うんだろ？ならわかるはずだ。俺も『人』から外れるようなことは軽率にしない」

マークという『異常な存在』を認識できるということは、彼らもまた『異常』であるということだ。

「あんたにとって、都合のいい話だろ？俺が勝手にここに危険物を始末して、どっかに消えるってだけの話なんだから」

「都合がよすぎるわ」

「危険物だって、使い方次第だ」

一言で切り捨てた女に、こちらにもメリットがあることを告げる。これで、よっぽど偏った考えの持ち主でない限り話は終わる。お互いメリットのあることなのだ。あとはお互いを黙認するだけで終わる。

「それを証明するものがないわ」

「慎重だな……度が過ぎると好機を逃すぞ？」

「安全には代えられないわ」

マークは思った以上に慎重な女に内心悪態をつく。基本的に彼は交渉事には向いていないのだ。更には言えば難解な交渉は大抵、彼の友が行っていたため、経験もさほどない。せいぜいがその真似事といったところだ。

「……確かに、何の根拠もなく信じるのは愚かともいえるだろう」

「理解してくれた？なら……」

「だが……」

女が言いかけた言葉を遮り、マークは言う。

「交渉は最低限の信頼によって成り立つ。それを覆すのなら、それ相應の覚悟はあるのだろうか？」

マークは交渉事には向かない。それに加え、今回はさらに欠点があるのだ。

『裏付けが取れない』

マークがどれほど真摯に語ったとしても、それを証明することができない。最終的には『マークという存在』そのものを信じてもらうしかない。だがその信頼を得るのにどれほどのものが必要だろうか？そしてその対価を支払った時に、彼女たちが『信用できない』とすればいったいどうなるか、想像するのもおぞましい結果となる。

だから、今彼と交渉をするなら、どうしてもある程度譲歩しなければならなかったのだ。女はその見極めができなかった。引き際を間違えてしまった。

「今回はただ『決裂』だ。だが忠告はした。次はただでは終わらんぞ？」

マークは魔道書を取り出し、その手を大地へと向ける。

『「エルファイアー」』

今まで使っていた魔法よりワンランク上、その一撃の発した音、光、熱がマーク以外の感覚を焼き、彼の遁走を許してしまう。

「すみません。追跡はできませんでした」

「わたしたちの存在にも気が付いていたんですかね？逃げ方に、なんというか迷いがなかったですよ」

その場に残された男女の感覚が戻ったところに、2人のメイドが現れた。本来であるなら、この2人が退路を断つ予定だったのだが……

「予想をはるかに超える実力ってこと？これはちょっとやらかしちゃったかな……」

それでも彼女は、どこをしくじったのかいまいちわかってなかった。だがそれも仕方がない事だろう。交渉相手がこの世界に一切情報がない存在だと悟れという方が無茶なのだ。

「今度交渉に失敗したら、即戦闘っばいけど……勝てそう？」

「さっきの炎に当たらなければ何とかなるんじゃないか？」

その予想はかなり楽観的なものだろうと、女はもちろん、言った本人も思っている。炎の起こった地点はクレーターになっているし、彼女たちの包囲を完全に撤くだけの身体能力も持っている。

「はあ、せめて名前くらい聞けたらなあ……」

次回をおわせていたので、これっきりという事はないだろう。だが不干渉を提案してきた以上、あちらから接触してくることもないだろうし、探索は続けることになる。最悪の場合、すべての要求を呑んで一刻も早く出て行ってもらうのもありかもしれない、などと女は考えていた。

## 第6話 「接触」管理局」

《ねえ、マーク……》

《なんだ？アルフ》

珍しくアルフが念話で話しかけてきた。おそらくフェイトには聞かれたくない内容なのだろう。

《聞かないのかい？》

《何を？》

まあ、もし小声で話していたとしても今のフェイトには聞こえないだろう。彼女は今、ライバルである少女のもとへと歩いて行っているのだから。

《あの日……あたしらが報告に行った時のフェイトの怪我のこと》

《……階段から落ちたんだろ？》

そう、マークが危つく戦闘になりそうな場面から逃げ出し帰ってみると、フェイトの怪我をアルフが手当てをしていたのだ。

マークが怪我の理由を聞いても言いよどみ、結果マークの提案で階段から落ちたことになってしまったことになったのだ。

《……そう、あんたはそれでいいのかい？》

《……》

アルフの問いに、マークは答える術を持たなかった。正直に聞きたい思いはある。だが同時に、踏み込むべきではないとも思うのだ。

《中途半端だと、思うか？》

そう、マークは見なかったことにはできなかった。『ライブ』という杖を使い治療を行い、怪我の理由も聞いた。だが、フェイトが言いよどんだ時、それ以上のことをするのをやめた。

《あたしのご主人様はフェイトだからね。フェイトのことを思えば、聞いてほしいと思う……》

だけど、フェイトが話さなかったことを簡単に話すこともしない、と付け足す。ままならないなあ、などとマークが思っていると、そうしている間に2人の少女が対峙する。小動物もこの相対を見守るようだ。

「あの……フェイトちゃん？」

「フェイト・テストロツサ」

フェイトは呼ばれた名前に反応し、改めて自分の口から名乗った。

《それはそうと、なんだかんだで俺らって名前知られてるよな》

《……いや、まあ……そうだね。でも！あたしらだってあの子たちの名前は覚えてるよ！確か、なのはとユーノって言ってた！》

そつえば初めて戦った時に言っていたな、とマークは思い返す。

「わたしはフェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど……」

「ジュエルシードは、譲れないから」

正直ここだけ聞くと、なのはの思いを切り捨てているかのようにも聞こえる。実際フェイトは、ジュエルシードを集めることが最優先と思っているだろう。

（だが、こうして相手と向き合い話をしている。そこそこちゃんと気づいているか？）

無意識にこうなることを望んでいる。話がしたいと、フェイト自身も思っているのだ。

「わたしも譲れない。理由を聞きたいから……フェイトちゃんがなんでもジュエルシードを集めているのか……どうしてそんなに寂しそうな目をしているのか」

そうしてなのはは、手に取った杖を構える。

「わたしが勝ったら、お話聞かせてくれる？」

これは正しく決闘である。お互いが望むもののため全力でぶつかりあう。マークが渡ってきた戦場と違い、先に進むための戦い。その想いは、相手を拒絶し、滅ぼすために戦ってきたマークにとって、とても眩しいものだった。

そうして2人はそれぞれの思いを胸に、全力で戦いを始めた。……いや、戦い始めるはずだったのだが……

「そこまでだー！」

そこへ1人の少年が乱入する。

（無粋な……）

マークは、お互いの矜持をかけた戦いに介入する少年の行為に憤りを感じる。だが同時につまいとも思う。

（俺らが戦闘に参加しないのを確認して、戦う2人の集中が極限に達

したところで一気に捕縛か……)

あの2人の戦いを見守ると決めていた身にとっては無粋極まりないが、戦士としては、その効率的な介入に美しさすら感じる。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

「え!？」

「管理局……!？」

「さて……事情を聞かせてもらおうか」

あの少年、クロノの自信は『管理局』という組織の大きさに由来するものだろう、とマークは結論付ける。だが、その結論を生かす前にアルフが動いた。

「フェイト！撤退するよー!」

弾幕を張り、少年の視界をふさぐ。その隙にフェイトなら自力で逃げられるだろう。

《俺は空を飛べないからな。先に撤退するぞ!》

《了解!》

そういつて逃げようとしたところで、視界の端に逃げようとしていないフェイトの姿が見えた。おそらくジュエルシールドを回収するつもりだろう。

(あのバカー!)

声を出したら居場所を特定される。かといって慣れない念話をするほどの余裕はない。アルフのまき散らした土煙で正確な射線が読めないため、体を無理やり割り込ませる。そして予想通りに、ジュエ



ルシードに向かって魔法の弾丸が放たれた。

『ファイアー』

マークはなんとかその一撃を相殺する。

「フェイト!?マーク!」

《さっさと行け!あと連絡は期待するなよ!》

ジュエルシードを確保したフェイトが振り返る前に、アルフがフェイトをさらって飛ぶ。

「逃がすとも!」

「いや、逃げ切るさ!」

少年の一撃を、今度は射線に割り込むことなく相殺する。始点がしっかり見えていれば、割り込む必要はないのだ。

「邪魔を!」

「相方が打たれるのを黙って見ていると!」

今度はマークに対して放たれた魔法を火の魔法で同じように相殺する。だがこの時点でマークはほとんど詰んでいた。

(逃げる手がないな……もうこうなるとどれだけいい条件で降伏するか、か)

別にこの場をひっくり返す手なら、ないこともないのだ。ただ、相手のことは考慮せず全力で戦えばいい。すなわちあの少年を『殺す』のだ。だが今のマークにはそんな気になれなかった。

(ああ、自分探しなんて考えなければよかったか?)

そう、あの時『戦士ではない自分』を探していた。なら、血なまぐさいことは避けるべきだろうと自然に納得してしまったのだ。その場限りと思っていたが、思いのほか自身に深く根付いてしまったようだ。

「はっきり認識したのは今だが、もっと前からこの思いはあったんだろっな」

「何を…」

なのはを治療した理由など、いろいろと納得して満足しているマークに対して、クロノはいら立っていた。

(当たらない!!いや、遊ばれているのか!)

いくつか罫を用意してそこへ誘導したりもしたが、まるで最初から何があるかわかっていたかのように躲された。あと一歩で追い詰めるところだったところで、するりとその手を抜けていく。

それに対してマークは、表面上は余裕に見える。だがそれはあくまで表面上のことで、内心かなり焦っていた。

(最初の一撃を食らってから、体が重い!くそっ、ただでさえ知らない魔法なのに!)

そうフェイトをかばった一撃だが、実は相殺しきれずにダメージが通っていたのだ。本来マークには、魔法に対して最大級の防御力を持つはずなのだが、それがうまく働かない。

(俺自身の弱体化?いや、どちらかといえばかなり特殊な術式を組んでいるのか?)

もし彼の疑問に答えるものがこの場に居たのなら『非殺傷設定』の存在を挙げただろう。だが今この場にそんな存在はなく、彼は原因不明のダメージを与える魔法を過剰に意識しなければならぬ結果になったのだ。

(あと、彼の評価についても改めないとな！)

最初の一手こそ評価はしたが、ここまで戦えると思っていなかったマークはこの戦いを持て余していた。手を抜くには強く、本気でやるには弱い。攻撃が未知のものなら、防御もまた未知のものであることも大きい。

そうなるとむやみに手が出せなくなり、戦況は硬直する。なのはとユーノは、この状況を打破できる力を持っていたかもしれないが、それを実行するほど考えなしではなかった。そうして長くに続くかに思われた戦いだが、ある侵入者によって均衡を崩すことになる。

「ッ！」

「なっ！」

「え？」

最初に反応したのはクロノだ。あまり攻撃をしてこないマークが何らかの形で奇襲を狙っていると考えたため、周りへの警戒が高く、瞬時に迎撃を行った。

次に気付いたのはマーク。正体不明の『魔法』に対して警戒を高めていたため、『人』の介入に対して意識が薄くなっていたのだ。そして、侵入者の少女に対してクロノが行った攻撃への対処に走る。

最後にその光景を理解できなかったのはなのはだ。そこに本来いるはずのない人がいた。それが彼女の思考を停止させ、とるべき行動を忘れさせる。

「ッアア！」

マークとクロノ、侵入者の位置が悪かった。クロノの一撃をマークが相殺すれば、その余波は侵入者を呑みこんだらう。故にマークは、どのような理屈でダメージが通っているのかわからない、その一撃に割って入るしかなかったのだ。

(くそー腕で受けたのに、何で全身にダメージが！)

「迷い込んできた一般人にまで攻撃するか！管理局！」

気を抜けば膝をつきそうになるが、それを気合で隠し通す。少女には悪いが、マークにとって千載一遇のチャンスだ。ここでうまくいけば、この場を何とかやり過ごせるかもしれない。

「クッ！」

対してクロノは歯噛みをしている。間違いなく優勢だった状況がひっくり返されたのだ。一般人の侵入というイレギュラーが原因ではあったが、それを誤射してマークに防がれ事なきを得るというなど、まごう事なき失態だ。

「えっっっっ！」

マークは現状をうまく認識できていない少女を、一瞥することだまらせる。『貸一っ』と聞こえた気がするが、今はおいておく。

「何か不満か？」

「白タク………」

マークは挑発することで、二ちらの優位を主張する。もうまともに

体が動かない以上、何とか話し合いで安全を確保したいのだ。

『そこまです』

そこへまた一人介入してくる者が居た。

『時空管理局所属艦アースラの艦長リンディ・ハラウンです。お互い、何やら誤解があるようですし、少し話し合いませんか？』

「ああ、かまわん。こちらとしても、一般人を巻き込んでまで戦おうとは思わないしな」

おそらく現状出てこれる管理局側の最高責任者をけん制しながら、マークは驚愕を抑え込む。

(いったいどんな技術を使ってるんだ!?)

そう、リンディと名乗った女は空中に映像として介入してきたのだ。この地で目覚めて以来、車やらテレビやらで相当驚いてきたのでいくらか耐性ができたと思っていたのだが、それでも甘かったようだ。そしてこの驚愕は、残念ながら隠しきれなかったようだ。

『とりあえず、お名前の方をつかってもよろしいかしら？おそらく次元漂流者の方だと思うのですが……』

「……自分で完全に把握できていないんだが、おそらく、な。名前はマークだ」

手札を見抜かれわずかにあせるマークには気付かずに、この状況をどうおさめるかと、リンディは苦惱していた。

(こちらが出した映像に驚いたからまさか、とは思ったけど………思った以上に厄介ね)

彼の持つ赤い魔道書は解析したが、どこやら管理局のデータベースには存在しない類のものらしいのだ。そのことから推測できるのは、マークはいまだ管理局の手の届かない領域にある世界の出身である可能性。

『まずは、こちらの一般人に対する誤射を防いでいただいたことを感謝します。後ろの子にも謝罪を、ごめんなさいね』

「戦場に立つ者の義務だ。非戦闘員には手を出さずし出させん」

「い、いえ。こちらこそむやみに出てきてしまっごめんなさい」

「ここですぐに謝ってしまうという事は、本当に偶然迷い込んだだけなのだろうとあたりをつける。少なくとも、マークが仕込んだことではないだろう。」

『ではクロノ、みなさんをアースラへ……』

「ソレは勘弁してもらいたいな」

『……わかりました』

マークとしては、この先どういった関係になるかわからない相手の懐に飛び込むつもりはない。リンディとしても、そんな相手を本拠地に招く気はない。だがお互い敵対したくないという、何とも奇妙な会谈となった。

『それで、このまま話を始めてしまっごめんなさいかしらっ』

「ああ、あとそっちの話は後でやってくれ。2度手間かもしれんが、こっちとしては不確定要素をあまり入れたくない」

なのはたちには悪いが、相手が多くなれば自然と考えなければならぬ。今のマークにはそれを捌く余裕がなかったのだ。

『わかりました。では最初の質問です。あなたたちはジュエルシードを集めている、これに間違いはありませんね?』

「間違いなく。物自体は相方が持っている」

『では、ジュエルシードが一体どんなものか正確に理解していますか?』

「正確かといわれると自信がないな……せいぜい魔力の塊、といった程度か」

マーク自身が必要としているわけではないので、最低限の特徴しか聞いていないのだ。それを聞き、リンディは言葉を選びながら説明を始めた。

『ん〜遺失世界の遺産って言ってわかりますか?』

「微妙」

『次元空間の中には、いくつもの世界があるってというのは知っていますよね?』

「その中には、よくない形で進化しすぎてしまう世界がある」

リンディの解説にクロノが加わる。どうやら完全に戦闘方面はあきらめたらしく最低限の警戒しかしていない。

『進化しすぎた技術や化学が、自分たちの世界を滅ぼしてしまって、その後に残されてしまった危険な遺産』

「それらを総称して、ロストロギアと呼ぶ」

マークは自分の持つ強力な武具のことを思い起こす。ひょっとしたらあれらのいくつかも『ロストロギア』と呼ばれるかもしれない、と。事実ある戦争の時に、天変地異ともいえる現象を起こしていたはずだ。

『そう、わたしたち管理局や保護組織が、正しく管理していかなければ

ならない品物……あなたたちが捜しているジュエルシートもそう」

「あれは次元干渉型のエネルギー結晶体」

『流し込まれた魔力を媒体として、次元震を引き起こすことのある危険物』

「次元震？」

「君たちがぶつかった際の振動と爆発……あれが次元震だよ」

解説を聞くと同時に、思わず顔をしかめそうになる。今のセリフは、マークたちが以前から監視されていたことに他ならない。

「たった一つのジュエルシートでもあれだけの威力があるんだ……複数個集まって動かしたときの影響ははかり知れない」

『大規模次元震や、その上の災害、次元断層が起これば世界の二つや三つ簡単に消滅してしまうわ』

「大体理解した」

マークは、要は『危険だから手を引け』といたいのだと解釈した。だが事実として、世界の消滅にまで干渉できる力はマークにはないのだ。知らなければともかく、知ってしまったえばこれまでのように気軽に手を出すことはできなくなってしまった。

『それで、ジュエルシートについて正確に理解していなかった点から、必要としているのはあなたの相方だと思つのですが……なぜジュエルシートを集めているのか』存じっ。』

「いや、詳しくは聞いていない。ま、聞いていたとしてもこの場で話さないがな」

仮にも相方であるのだから裏切るようなまねはしない、と付け足す。

『そうですか……それで、今後のことですがあなたが次元漂流者であ



る以上、こちらにはあなたを保護する義務があります。ご同行を願えますか?』

「最終的にはそれで構わないが、先約があつてね。それが終わったらつてことで構わないか?」

『かまいません』

「母々……艦長!」

マークの主張を丸呑みしたリンディに、さすがにクロノも異議を唱える。しかしリンディは笑顔で受け流し、マークとの話を続ける。

『では連絡の手段ですが……後日連絡用のデバイスを用意します。

ジュエルシードの反応に合わせて接触していただいても?』

「承知した。いや、話の分かる人で助かったよ」

『ええ、お互いに。最良の結果が得られることを期待しています』

そういつてお互いに笑いあふ。具体的な事は何も話さなかったが、なぜマークは野放しにされたのか、おおよそ理解していた。

(最悪の事態だけは起こさせらなつてとこか? 下手に敵対するよりパイプを作つておく方が安心だろつしな)

特にジュエルシードに執着しないマークであるなら、一線を越えるようなことはさせないだろうつというのがリンディの考えだ。非戦闘員に対する考えが聞けたのは幸運であつたといえるだろう。

マークも今まで世界を救う側の存在であつたため、消滅させるようなことをやるつとした場合は止めざるを得ないだろうつと思つていた。ただ、一線を越えるまでは約束通り手伝つつもりでいるのだから、たちが悪いともいえる。

「それじゃあ、また。あ、こつちはどつする?」

『どつしますか? 詳しく話を聞きたいのであれば、アースラまで来

ていただきますが?』

そうして話は少女へと向かう。少女は一瞬なのはの方を見てからすぐに答えを出した。

「え〜と……こっちの人から聞きます」

「そっか、じゃあこっちは持つてくぞ」

『わかりました。では後日』

こうして管理局との接触は、最初はともかくあっさりと終わってしまった。

「よかったのか?」

結果からゆっくりと歩いて離れながら、改めて少女に問いかける。

「はい。あっちのことは後でゆっくり聞きますから」

「ふ〜ん、やっぱり知り合いなんだ」

マークの問いに対してあっさり答え、予想が正しかったことを理解する。

「それはともかく、わたしのうちまで来てもらえますか?守ってくれたお礼もしたいですし……」

「この間の交渉の続きもしないといけないしな」

マークの物言いに少女は苦笑するが、特に訂正などはしなかった。

## 第7話 「接触」月村家」

「……まあ、ここに至る過程はよくわかったわ。とりあえず妹を守ってくれてありがとう」

「どういたしまして。こちらとしてはもう1度話し合っ気になってあげがとうと言っておこうか」

マークは少女に連れられていつか見た大きな門をくぐり、その屋敷の一室に招かれていた。そして少女がおそらく家人であるだろう5人にいきさつを説明している間、ゆっくりお茶をしていたわけだが……

「まあなんていうか……敵対する気はないのよね？」

「ま、好んで戦おうとは思ってないがね」

前回のことがあってか、はつきりかなり警戒されているのでマークにとっっては居心地が悪い。

(うせ、言っほやでもないか?)

心地いい環境とは言えないが、そこまで忌避するほどではない気もする。この矛盾した考えが通用するのも、マークがそれなりに長い時を生きていたからであるといえるだろう。

「俺の要求はあまり変わらんよ。相互不干渉っただけだ」

「あなた以外の組織も動いているんでしょう? それなのに不干渉は厳しいわね」

確かに管理局という組織も動いている以上、個人で不干渉といっても無理があるように聞こえるだろう。だが彼らには彼らの理屈があ

る。

「あっちはあっちで、俺以上に不干渉であろうとするだろうさ。現場の裁量といっても限界がある」

あくまでフェイトから聞いた話ではあるが、問題はないだろう。もしかしたら異能を正しく理解するこの一族が話を持ちかければ答えることもあるだろうが、管理局側から接触することはまずないだろう。

「そう……まあ、所属不明のあなたに言ってもしょうがないか。でも全くの不干渉っていうのはいただけないわ」

「なんでね」

「簡単よ、お情けをかけられたみたいで気分が悪いの。こちらとしては危険物を排除してもらうんだから、それ相応の対価を払わないと気が済まないわ」

一瞬呆気にとられたマークは、次の瞬間には思わずといった感じで笑みをこぼす。

「ククッ、損な性格だな」

「この国には『損して得をとれ』なんて言葉もあるのよ」

「なるほど、真理だな」

そうしてひとしきり笑った後、改めて向かい合う。

「それじゃあ自己紹介と行くつか。俺はマーク、元傭兵ってところかな」「やっと名前の交換ができるのね……月村忍よ。夜の一族、わかりやすく言えば吸血鬼よ」

忍が投げつけた爆弾に一瞬マークは眉をひそめたが、それだけで周

りにいる人たちに次ぎを促す。

「いや待て、今のは流せるとこじゃないだろ!？」

「……先に紹介を終わらせてくれ」

忍と名乗った女性の隣にいる男からツツコミが入るが、それすらも流す。

「……小太刀二刀御神流剣士、高町恭也」

「月村忍の妹で、すずかです」

「メイドのノエル・K・エアリヒカイトと申します」

「同じく、ファリン・K・エアリヒカイトです」

それを聞き終えたマークは、それぞれの名前を呟き記憶しているようだ。

「よし、覚えた。……じゃあ改めて、マークだ。ナーガ一族、ハーフではあるがmamクートだ」

再び名乗りだしたのを、何事かと思っていた5人だが、聞き覚えのない単語が出てきてさらに首をかしげることになった。マークはそれを見て満足げな笑みを浮かべる。

「ま、スズカも言っていただろ？ 俺は『次元漂流者』だって。ならこついつことになることも考慮に入れておくべきだったな」

「ひょっとして……吸血鬼って聞いたことないの!？」

この世界においては割とメジャーな存在である『吸血鬼』も、異界においてその名が知られているとは限らない。逆に、マークにとっては割と知られている『mamクート』という存在を彼女たちは知らないのだ。

「説明……いる？」

「いらん。俺も説明する気はないし」

忍たちにとって『吸血鬼』が特別な意味を持つように、マークにとって『マムクート』は特別なのだ。マークには自分の『力』を隠す気はないが、何より今後使う予定のない力だ。積極的に広める気もなかった。

「そっちが名乗ったから名乗っただけだし、懇切丁寧に語るつもりはない」

「そう？ 残念ね」

そういつて肩をすくめる忍に対して、とりあえず要求するものを考える。

「ま、名前の交換は終わりだ。そして対価のことだが……とりあえず寝床と……換金を頼みたい」

おそらく管理局による監視がある今、フェイト達のもとへ帰るわけにはいかないのだ。あまり関係がこじれないように、同時に深くならないように手を貸してもらおうことにする。

「了解！ で、換金するものは？」

そう尋ねられてマークが出したのは、友から受け取った財宝の一つ『赤の宝玉』だ。フェイト達と買い物に行ったときに換金しようとしたのだが、身元を保証するものがなく、お金の換えられなかったのだ。

「ずいぶん大きいわね……ってか、どこから出したの？」

「秘密」

大体赤子の頭程の大きさの宝玉を預かりながら、忍は呆れたような声を出す。てっきり指輪サイズのものが出てくると思っていたが故の発言だ。

「それじゃあ、ほかに必要なものができたらいつでも言いに来てちょうだい。ノエル、彼に部屋を用意してあげて」

「はい、こちらになります、マーク様」

「呼び捨てで構わんよ」

そういいながら部屋を出て行った二人の後を、さすがが追っついていく。おそらく改めてお礼を言ったり、聞いておきたいことがあるのだらう。

「なんだかあっけなく終わったな……信用していいのか？」

「いいんじゃない？ そりゃ打算とかいろいろあったんだらうけど、さすがを助けてもらったわけだし……それに前回、向こうから攻撃してこなかったしね」

疑問を投げかけた恭也だって、進んで疑いたいと思っっているわけではない。だが2人ともが不用意に信用しては、万一の際に動けなくなってしまうがゆえに、そういった役割を果たしているのだ。

「まあ、しばらく滞在するみたいだし、その間に見極めるなり仲良くなればいいじゃない。かわるなっことは、かわったらなんだかなだで手を出しちゃうからでしょ？」

「そこまで言ってしまうのも極端じゃないか……」

そういいながらも、文句を言いながら手を貸すマークの姿が想像できるのだから、恭也もなかなかお人よしといえるだらう。

そんな会話が交わされていることを知ってか知らずか、マークはノエルに案内を受けながら、これからの指針を考える。

（かかわる人も増えてきたし、そろそろ最低限の決まりごとぐらい作っておくかな？）

とりあえずではあるが、ここにきてマークは自分のあり方を自分の中で明確にする。

1つ、決して人を殺さないこと。

戦士ではない自分を探す以上、むやみに命を狩るようなことはしない事とする。

1つ、決して誰かに隷属しないこと。

自身の幸せを見つけるため、誰かに従って道を決めるようなことはしない事とする。

1つ、決して誰かを隷属させないこと。

自身の幸せを、誰かの不幸の上に立てるようなことは絶対にしない。上のあり方と合わせて、万人を対等に扱う事とする。

1つ、上の3つの決まりは絶対のものとしない。

どんなことにも例外はある。極端なこと『世界を滅ぼすことが幸せ』などとのたまう様な奴まで気にする必要はないという事だ。

（ま、とりあえずはこんなところか……思うところがあつたら変えていい）

ここで注意すべきは『ここにあるべき』と決めつけて自分の可能性つぶしてしまうことだ。それさえしなければどうにだってなるだろうと、そのマークは考えていた。自分がすでにある可能性をつぶそうと



してしまっていることに気付かず……

「だめだよ！管理局まで出てきたんじゃない……」

なんとか追跡をまいてホームに帰ってから、どれだけの時間がたったであろうか。アルフは絶望的な状況だと感じていた。

「もつてつにもならないよ……」

確かに良い状況ではないが、本来であるならここまで追い込まれるとは思っていなかった。

(……確かに期待はするなって言ってたけど、本当に音沙汰ないなんて……)

それはこの世界にきてから共に活動し始めた青年の存在だ。確かに共に行動をしていたが、完全に信用まではしていなかった。いつ敵対しても大丈夫なように、マークの能力が明らかになるたびに仮想敵としてシミレーションしてきたのだ。

(過小評価しないようになんかなり強めに設定していたとはいえ、結果はほぼ全敗)

そのマークが、現在連絡が取れない状況にあるのだ。管理局に負けただけならまだいい。だが最悪のケースとして、フェイト達の情報を売った可能性もあるのだ。

「大丈夫、だよ」

「大丈夫じゃないよ……ここだっていつまでばねずにいられるか……」

だがフェイトはそれほど深刻には考えていないようだった。それ

が単に世間知らずなだけなのか、マークのことを信じているからなのか、はたまた別の理由があるのかまでは、使い魔であるアルフにもわからなかった。

「あの鬼はば……あんたのかーさんだって、フェイトにひどいことばっかするー！」

現状の不安を無意識のうちに別の形にしようとしているのか、アルフの矛先は今回の件の首謀者に向かう。

「あんな奴のために、もうこれ以上……」

「母さんのこと、悪く言わないで……」

だがそれはフェイトにとって悲しいことだ。2人ともフェイトにとってかけがえのない人たちなのだから。

「言つよーだってあたし、フェイトが心配だ……」

だがアルフは止まらない。

「フェイトはあたしのご主人様で、あたしにとっては、世界中のだけれりも大切な子なんだよ……」

そこにどれほどの想いが込められているのか……

「群れから捨てられたあたしを拾ってくれて、使い魔にしてくれて、ずーっと優しくしてくれた」

第三者ですら容易に感じるほどの想い……

「フェイトが泣くのも悲しむのも、あたし、嫌なんだよー！」

「じゅんね、アルフ……」

それでも少女には届かない。

「だけど、それでも！私は母さんの願いを叶えてあげたいの……」

アルフがフェイトのことを想うように、フェイトもまた母のことを  
想い、決意を固めていた……ただそれだけのこと。

## 第8話 「前線の外から」

「さて、次はここらへんかな？」

マークは月村低をホームにしてから、ある法則を持って海鳴市を巡っていた。それはフェイト達と共に探索していたものの続きだ。もちろん完璧にトレースできているわけではないのだが、それでも見当違いというわけでもないだろうとマークは思う。

(ま、あっちにはランダムに見えるんだろうけどな)

そうして意識を向けるのは、おそらく管理局が放ったであろう監視だ。先日の接触以降会っていないのだが、ちゃんとしてきているようだ。

(次のジュエルシードの時に接触してくれ、か……やっぱりホームを探ってるんだろうな)

確信こそなかったが、やはりフェイト達のもとに帰らなくて正解だったといえるだろう。今だっで見られている感覚こそあれ、どのような方法で監視されているのかはさっぱりわからないのだ。

「それはそうと、やっぱり一人はつまらないなあ……」

マークは屋敷を出るとき、忍に『手伝おうか?』と声をかけられたのに断ったのを、ほんの少し後悔し始めていた。考えてみれば、一人で活動するなどこれまでの生涯のうちで、片手の指で足りる程度しかしたことがないのだ。

(思っていたより、俺って弱いんだな……そういえば管理局に少年に

も劣勢だったな)

流れで前回の戦いを思い出し、例の攻撃の対処法も考えてなかったことに思い至ったところに、待っていたかのように近くから一瞬ジュエルシードの気配を感じた。

「事実、待たせていたようだな」

そういつてマークは気配のあった地点へ向かう。おそらく待っているだろう少女をこれ以上退屈させないように、割と全力で。

「遅かったね?」

「勘弁してくれって……索敵は苦手なんだって知ってるだろ?」

そこにはマークの予想通り、フェイトとアルフがいた。それも完全武装で、ある程度の距離を取っている。

「……一人でいるってことは、管理局から逃げ切ったって思っているのかい?」

「条件付きで見逃してもらったって感じだな。管理局がどんな技術を持っているのかさっぱりだから、不用意に動けなくてね」

アルフの質問に答えながら肩をすくめて見せる。マークとしてはフェイト達を相方と認識しているので、戦いたくはない。だがフェイト達は違うだろうと思っっている。

(ま、敵対してると思われても不思議じゃない状況だしな)

むしろ投降を呼びかけに来たといった方が信じられるだろう。だがフェイト達はマークの予想の斜め上をいった。

「……わたしたちに脅されてたって言って、保護してもらったらいい。そうすれば、比較的すぐに帰れるだろうから」

「実際のトコ、あんたを保護するって名目で手伝ってもらってたもいえるしね」

フェイト達は、どこか硬い表情で告げる。自分たちを悪役にして、あるべき場所に帰ってほしいと。

「それはなかなか情けなさそうな結末だな」

10歳の子供を差し出して自分は安全地帯にいるなど、マークにとっては選択肢にすらならない。だが、それ以上に思うことがあった。

(優しい子だ。戦場では甘さにしかならないだろうが……それでも、この甘さは覚えがあるな)

かつての戦友がそうであった。状況が違うので全く同じことがあったことはなかったが、それでもかつての友に被る。

「もつしばらく、うるちよろしてるよ。まだ、いろいろやり残したこともあるしな」

「……いいの？」

フェイトの問いには答えない。どんな答えであってもフェイトは自分のせいだと考えそうだと思ったからだ。

「ま、頑張れよ？うるちよろしてたって、何かあった時そこに俺が居合わせるとは限らないからな」

そんなことを言いながらも、マークはなんだかんだで戦いの中心横

にいる自分を想像できた。かつてがそうであったように、今回もそうなるであるという漠然とした確信があった。

「マークこそ、変なところで無茶して肝心なところで出られないなんてことないようにね？」

マークの軽口に、フェイトも応じる。ただ心配する様子を隠しきれないあたりは、まだ子供といえるかもしれない。

(短い間でも共に戦った仲だしな。俺も情がわいてるのは確かだし)

友に重ねた部分もあるが、それ以外のものがないわけではない。マークは少しだけ、このジュエルシードの件が終わった時のことを思う。状況が許せば、今後もフェイト達と共に行動するのもありかもしれない、と。

「じゃあ、またね」

そう言い残し、2人は姿を消す。マークが気配を追えたのはわずか数秒であった。

(転移をもう一度使えるようにしておくべきかな……)

封印を施したうえでまだ手元に残った、転移の魔法が記されている魔道書に思いをはせる。かつて魔王にその心を食われた皇子の持っていた魔道書『ナグルファル』。それ自体は特に危険なものではないが、感情的な意見も多く『闇』とともに強力な封印が施されていたのだ。

「個人的には『エレシュキガル』の方が好きなんだけどな」

今は手元にない魔道書の名前を告げ、それを感傷と切り捨てる。いまマークの下にないという事は、近いうちに敵対するという事だ。

「ま、今はいいか。今度は管理局の方に接触しないと。連絡用でばいす、って言っていたか？ それを受け取らないといけないからな」

いまだ電話ですら理屈を理解できないマークにとって、受け取ったところで使えるかわからないという不安は残るが、そこは努力するしかないだろう。

「それじゃあ、どうやって動くべきかな？」

今まではフェイトの探索の延長であったが、ここからは管理局の探索に接触しなければならぬ。現状では、これまでの探索で後回しになるだろう場所へ行くぐらいしかあてがない。

「仕方無いか、これまで通り地道に行こう」

今回のことでも接触してこなかった以上、管理局に会うにはジュエルシードを探し続けるしかないだろう。フェイトのホームにでも行けば話は別だろうが、そこは考えるべきではないだろう。そうしてマークは歩みを再開した。

「それで？ 収穫はあったの？」

もう深夜といっても差し支えない時間になり月村邸に帰還したマークを、当主とその恋人が出迎えた。

「一つ、相方が見つけたのを確認した」

「それじゃあ、あなた自身の収穫はなし？」

「そういうことになるな」



マークは微妙に失礼な感想をやはり軽く返す。そして一瞬迷ったが、その疑問を口にした。

「わざわざ待っていたのか？」

「ちよっと用があつてね……ねえ、恭也と模擬戦をやってみない？」

「拒否する」

この話は日中に忍と恭也の2人で話し合った結果、お互いの力を多少なりとも明かして信頼するきっかけになればという提案だったのだが、マークは一蹴した。

「どうしてだ？ あなたが剣士であるなら、俺との試合は双方得るものがあると思うのだが……」

「……戦士は廃業してな。必要以上に武を振るわないことにしたんだ」

戦士でない自分を探すと決めたのだ。状況がそれを許さないのだが、だからと言っていまだ戦い続けていることにマークはわずかな罪悪感をもっていた。

「廃業……いや、だが現状の實力を維持するのは悪いことではないだろう？ いつか役に立つことがあるかもしれないんだ。捨てる必要まではないだろ」

「ああ、その通りだろう。まだやらなきゃならないこともあるし、武を捨てるわけじゃないさ。ただ……意地かな？」

何に対する意地なのか、マーク本人もいまいちわからない。だが戦士であることをやめるのなら、このような試合を受けるべきではないと思うのだ。

「誘い自体は喜ばしいものなんだが……悪いな」

「いや、こっちも急に悪かったな。もし、再開することがあれば声をかけてくれ」

「そんな時が来ればな」

マークはそんな時は来ないと言外に言ったつもりだったが、恭也にはそうと聞こえなかった。今は妙な意地が先に立っているが、それ以上に強い何かがあるように思えたのだ。だが、それを告げることなくこの場を離れる。

「あれは絶対に理解していない顔だ」

一人になってマークが思うのは、去り際の恭也の顔だ。あれはある種の確信を帯びていた。これは言葉でいくら言っても無駄だと理解したマークは、ただ有言実行をその胸に誓うのだった。

「やっと見つけた」

数日の間何の成果もなく過ごしたマークは、やっとの思いでジュエルシードを発動させた巨鳥の下で管理局に接触した。正確には、管理局に保護されたであろう少女に、だ。

「マークさん…」

「ナノハ……だったか？ 元気そうで何よりだ！ ちなみに隣の少年は誰だ？」

「ユーノです…」

多少距離があるため、自然と声が大きくなる。が、それ以上に妙なことが聞こえた。

「ユーノ？ ひょっとしてあの小動物か？」

「小動物!? フェレットですよ!」

少しずれた答えだったが、マークは同一人物と結論付ける。

「獣化って流行っているのか?」

『流行るわけないだろ!』

「なんだ……」

マークの発言にクロノからツッコミが入り、それに対してマークは残念そうにつぶやいた。だがそれで勢いが削がれたのか、すぐになかったことにして応援を要請してきた。

『いや、ん、よく来たな、マーク。来て早々悪いが、手を貸してもらえ  
るか?』

「なんで……あ、あの2人で倒せない相手じゃないだろ?」

『より安全に事を進めるためだ。君にとっても悪いことではないだろ  
し』

確かに管理局に協力的な姿勢を見せることは、マークにとってプラスに働くだろう。少しだけフェイト達に対する罪悪感があるが、このジュエルシードを取りに来ることはないだろうと割り切る。

(管理局に間違いなく把握されているのは『ファイアー』のみ……希望  
的観測を述べれば『封印の剣』『バゼラード』あとは『リブロー』『レ  
スキュー』は把握されてない可能性もある)

そこになのはたちに使った『リザーブ』、忍たちに使った『エルファ  
イアー』を次点においておくべきだろう。

「了解」

『頼むぞ』

管理局が手の内を見たがっていることを察したマークは、使用攻撃魔法を火の魔法に限定する。今回の相手である巨鳥のサイズが大きめであることも考慮して魔法を使用することにした。

「こっちで倒してしまうから封印を頼む！ 『ファイアー』！」

「了解！」

「わかりました！」

基本的にマークが行ったのは、なのはと初めて戦った時と同じだ。ただ違うのは当てているかいないかだけ。相手に知性がないのならそれを攻撃するのに躊躇はしない。

(思ったより耐性があるな……これもジュエルシードの力だっていうのなら、面倒な限りだ)

直撃が数度あったが、見たところ巨鳥は五体満足で未だ飛び回っている。それでも本能に従って動く巨鳥に魔法を当てるのも、逃げる方向を誘導するのも問題なく行えた。

「ほら、あとは、煮るなり、焼くなり、好きにしなさいっ！」

「も、もう十分こんがり焼けてる気が……！」

「あ、あはは……！」

痙攣しながら横たわる巨鳥をみて、なのはとユーノは引き笑いをしている。マークはそれを急かして、ジュエルシードの封印をさせた。

「はい、これでおしまい。お疲れさまでした」

「えと、ありがとうございます」

「おかげで助かりました」

そういつて2人はマークに頭を下げるが、マークにとっては何ともむずがゆい。

「あ〜……こっちはこっちの事情でやってるだけだから、気にしないでくれ」

「でも、助かったのは事実ですから」

そういうなのは横で、ユーノは微妙に眉をひそめていた。マークはそれを『自分たちだけでもできたのに』という思いの表れだと受け止めた。

（まあ、今まで2人でうまくやれてたみたいだしな。俺自身、無用な手助けだったと思ってるんだし、それくらい当然か）

「協力、感謝する。それと、こちらが連絡用のデバイスだ」

「ん？ああ、クロノ……いや、ハラウン執務官か。何あれぐらい問題ないさ」

今まで画面越しで話をしてきたクロノが出てきたことに、不思議な感覚を覚えながらもデバイスを受け取ったマークだが、やはりいべきか使い方はわからなかった。

「ほかの機能は削ってあるから、少し魔力を流すだけで『アースラ』に繋がるようになっている」

なるほど簡単なな、と感心するマークを、初めて携帯を貰うおじいちゃんみたいだと思いつながらなのはが見ていることには誰も気付かなかった。そんな彼女をおいて、実際試したり機能の質問をしていたマークだったが、その話はマークの帰還について話に及んだ。

「どうも、あなたの世界について調べたいんだが……いくつか参考

になる固有名詞を教えてくださいもらえないだろうか」

「……ああ！ そっか、そっだよな」

はつきり言って、もはや故郷に帰る気など欠片もなかったマークは、クロノの発言の意味が一瞬わからなかったのだ。

「固有名詞もいくつかの世界で重複するものがあるから、複数個、それも地名や国名が望ましい」

「地名・国名ね……そっだな……」

そうはいつでも、マークに帰るべき場所というのはすでにないのだ。もし国が何かが残っていたとしても、そこで出会うべき人などいないのだから、帰ってもしょうがないというべきかもしれない。

(いや、あいつなら生きているか?)

そんな中、まだ生きている可能性がある存在を思い出す。

「テリウス大陸、ベグニオン帝国、クリミア王国、ガリア王国……こんなところかな?」

「わかった。数日中には結果が出るだろう」

マークが万に一つ出会えるかもしれないと考えたのは、あの世界にいた女神だ。かなり変り種な存在であるため、かつての仲間であり敵である存在だが、昔話ぐらいできるかもしれない。

「じゃあ、事が終わったら連絡する」

「ああ、なるべく穏便に事が済むことを願ってるよ」

先程の戦いを見て思うところがあったのか、そのような事を告げるクロノにマークは苦笑で返す。もとより戦士をやめようと思ってい

るのだ。戦わなくていいならそれに越したことはない。

(まあ、フェイトに協力している時点で好んで戦っているようなものか)

自身の矛盾に呆れながらも、それを正そうとはしない。どちらの行為もそれなりに思うところがある行為であるのだ。

「そうだな……俺もそうなればいいと思っつよ」

マークは、ただそう言って背を向ける。ただ戦っていればよかった時が終わったのだと実感しながら。それでもいや、だからこそ充実した日々になることを何の根拠もなく確信したのだった。

## 第9話 「海上での決戦」

「そろそろ決戦が近くなってきたかな？」

「まだ1/3程度残っているのに？」

珍しく日中の月村邸に滞在するマークのつぶやきに、忍が答える。探索の当てがなくなり、参考意見を聞くためにマークが協力を依頼したのだ。

「俺は素敵が苦手だからな。そろそろ決戦予定地を張ってないと、参加できない可能性があるんだ」

「難儀なものねえ」

さらに言うなら、転移や飛行を使う少女たちに比べて機動力も低いのだ。一応擬似的に転移を行える杖もあるが、射程が圧倒的に短いので戦場につくころには使用限界を超える可能性がある。

(新しいものを作ったりできないからな……大事に使わないと)

時間さえあれば手入れを行うことで、その耐久をある程度回復させることも可能だ。だがそれは下級の武器に限る話で、神器クラスになるとなかなか修復は難しいのだ。

「っと、思考がずれたな……とにかく！ 今まで確認できた発見地点は……これ。確認こそできなかったが、おそらく回収済みの地点が……」  
「……」  
「……これが探索済みの範囲だ」

「……結構広いわね」

「海鳴市全域が搜索範囲だって話だったからな」

マークの持つ情報を忍の用意した地図に書き込み、検討を開始す



る。忍も今回の協力の要請を重く受け止めているので、かなり真剣に地図を見ている。

「現在参加を確認した以外の存在が実は参加している、という可能性は皆無だ。俺は、予想以上に広範囲に散らばった可能性が高いとみている」

「わたしは探し物の詳細について知らないから、そのトコは何とも言えないけど……こっちの可能性はないの？」

そう言っつて忍が指差したのは、海だ。

「現在発見された場所をつまく囲むと……ほら、中心が中心だから、海が結構な範囲で入ってるわよ」  
「……」

正直、マークの認識不足といえるだろう。あるいは先入観というベきかもしれない。無意識のうちに探す範囲から除外していたようで、忍の発言は目から鱗だった。だが同時にできれば嘘だといってほしい現実だった。

「確かに……確かに海の可能性の方が高い。というより、もうそれ以外ない気がしてきた」

「そこまで言ったら言い過ぎでしょ……」

「いや、下手に範囲を広げるよりずっと現実的だ。だがこれは……どうやって戦域に行く？」

空を飛べないのが、ここままで大きな意味を持つとは思わなかった。マークにとって戦は陸で行うものであり、どんなに海に近くても船上だ。だが事を中心にいる少女たちには必要ないものである。彼女たちは空を自由に飛べるのだから。

(……使うか?)

一瞬だけ隠している力の使用を考えるが、その考えを脇へと押しやる。自身を正義と名乗ることができる状況でなければ、討伐対象になりかねないし、何より戦いから逃れられなくなるだろう。

「船を用意しましょうか?」

「そこまでの時間はないだろう」

「じゃあ、水上オートバイは?」

その名前を聞いて、マークは首をかしげる。全く何のことかわからないのだ。

「あ〜なんて言えばいいのかな……一人乗りの小型艇? う〜ん……もう! 見た方が早いわね! ノエル、すぐ用意して」

そう言って忍は返事を聞くことなく、マークを引き連れ海に向かう。マークはその後乗った車に大層興味を示したが、優先順位の低いことと言われ、肩を落としてながら浜辺へと降りていく姿が見られた。

「これよー」

「これか……」

微妙にテンションが低かったマークも、その機体を見て元に戻る。ここら辺は何とも普通の男の子のようだ。

「ホントはしっかり説明すべきなんだろうけど、今回はパス。習うよりに慣れろってやつね」

「大丈夫なのか……?」

いくらか警戒するかのよじな事を言っているが、そこにはすでに

機体に跨りあちこちいじるマークの姿があった。

「(よろしいのでしょうか?)」

「(ん〜? なにが?)」

その横でノエルが忍に耳打ちする。マークに聞かれてはまずい話かと思ひ忍は数歩後ろに下がる。

「(彼が免許の類を所有しているとは思えないのですが……)」  
「あ……」

だが、時すでに遅し。ついさっきまで目の前にいたマークは、すでに海面を滑るように走って沖へと向かっていた。

「……」

「……ちょっと、先に手をまわしておきましょうか」

「かしこまりました」

「今回は運が良かったな」

忍たちを置いて沖まで出てきたマークは一人、自身の幸運をかみしめる。つい先ほど、フェイトの魔力を感じたのだ。

「この「コントロール」について不安は残るが……戦場に向かえないよ  
りまし、か」

転ばないように慎重に魔道書を取り出す。さすがにこの戦場でうまく戦えるとは思はないので、いつもより余裕を持って2段階魔法のレベルを上げておく。

「さて、じゃあ突撃！ って、ぎゃああああー！」

そうしてマークは結界の中に入った。雷撃の洗礼を浴びた。

「マ、マーク！」

「大丈夫かい！」

「な、何とか直撃は逃れた……けど、また無茶をしたみたいだな！」

悲鳴を聞いたフェイト達が侵入者に気付き声を上げるが、存外平気な様子で走り回るマークを見て安心する。

「これぐらいしないと、これ以上集めるのは難しいから」

「だけど、手伝ってくれるかい？ さすがに2人は厳しくてね！」

「りょーかい！ 方針は速攻か？」

「うん！」

そのような会話を交わすうちに、暴走したジュエルシールドが水流をまとう。その数、実に7本！

「水か……実態を持たない相手っていうのも珍しいが行くぞ！ 『ギガファイアー』！」

先手必勝とばかりに放たれた一撃は、水流のうちの一本に直撃し爆発する。その爆発はいとも簡単に纏う水を吹き飛ばし、ジュエルシールドが姿を見せる。

「そこ！」

「わか、ック！」

だが残りの6本に阻まれ、封印には至らない。少し手間取るうちにジュエルシールドは再び水を纏い、マークたちに襲い掛かってくる。

「嘘だろ！ クッ、このッ！」

「マーク！」

どうやらマークの一撃が気に食わなかったようで、水流は実にその半数以上がマークへと向かって殺到する。

(反撃する余裕が無い！ クソッ、せめて足場があれば！)

水上バイクを必死に操り回避をするマークだったが、相手は水だ。それはすなわち、マークの足場すべてが敵という事でもある。フェイト達も援護をしてきているが、正直焼け石に水といったとこであまり効果が見られない。

「ウォッ！」

《大丈夫!?!》

エンジン音などで周りの音が聞こえていなかったのだろう。フェイトが念話で話しかけてくる。

「なんとか！ だけど、俺のことは無視して封印を優先しろ！」

《でもー!》

「足手まといになりに来たわけじゃないんだ！ いいからやれ！」

慣れない念話を使う余裕はなく、怒鳴りながら返事をするがフェイトはそれに了承できない。当然だろう。今は何とか防いでいるが援護が途絶えればどうなるのか、想像するのはたやすい。

「3分だ！ 1本減れば何とかなる！」

「~~~~！ わかった！ アルフはこのままマークを援護して！」

「あいよー！」

マークの上げた具体的な数字に、フェイトが折れる。どのみちこのまま均衡を保つていてもじり貧である以上、どこかで勝負をかけなければいけなかったのだ。

「フォトンランサー！」

複数発の攻撃を一本の水流に集め一気に片付けようとするフェイトに、マークを追っていた水流の一部が迎撃に回る。

「させるか！ 『ギガファイアー』！」

追ってくる水流の本数が減り、残ったものもアルフによって動きを鈍くしているわずかな隙に、フェイトへ向かった水流に妨害を加える。だが狙いが甘く、ほんの数秒の時間を稼ぐことにしかならなかった。しかしその数秒で十分だった。

「ジュエルシールド、封印！」

「やった！ これで……！」

楽になる、その思いが気の緩みにつながったのか、アルフの拘束していた水流が解き放たれる！

「なっ……！」

タイミング、位置、数、どれも最悪と言って構わないものだった。技後硬直というほどではないが、それでも魔法を放った反動を抑えてバランスを取っている最中。

（ああ、回避は不可能だ……）

せめてここが草原で、水上バイクが馬だったら、などというIFを

考えてしまつてしまつほどどうしようもなかった。だが、だからと言って諦めるわけにはいかない！

「ウオオオオー！」

水上バイクを蹴り、その身を空中へと投げ出す。もはや魔道書を抱える余裕もなく、放り投げる。

（『リワープ』の杖を使って離脱できるか!?!）

直後、水上バイクを水流が砕くのが視界に入る。

（ダメだ！ 間に合わ……）

「マーク！ つかまりな！」

「！」

とつさに声のした方に手を差し出すと、噛み付かれた。

「は？ って、ええ!?!」

そして思いっきりひっぱりあげられた。

《呆けてないで、さっさとつかまりな！》

「ア、アルフか？」

《それ以外に誰だっというんだい!?!》

窮地を逃れ、ようやく自分を引っ張り上げた存在を確認する。そこにいたのは、狼の姿をしたアルフであった。

《さすがにこのままじゃきついからさ、背中の方に移ってくれないかい?》

「了解……それと、しばらくの間、騎獣役頼めるか？」

《キジユウ？》

「騎馬みたいなもんだ」

完全に機動力を失ったマークにはどうしても必要な存在だ。それにこのような形であっても、空を飛べるのであれば十全の力を発揮できる。

《オーケー！ それでまだあんたが戦えるなら安いもんさ！》

「よし、じゃあ行くぞー！」

残念ながら魔道書を回収するほどの余裕はなさそうだったので、マークは仕方なく、そう仕方がなくだ。さらにランクを上げた魔道書を取り出す。

《いったい何冊持つてるんだい!?!》

「1冊ずつだ！ さっきのとは違うものだぞ」

デバイス一つで複数の魔法を使う魔法体系のものにはわかりづらかったであろう。内心で首をかしげるが、それでも危なげなく水流を躲して進んでゆく。

(あれ？ こんなに楽に躲せてたっけかな?)

ふとそんなことを思うが、水流が1本減ったことを思い出し納得する。

「そろそろ行くぞー！ 『ファラ……』！」

「どうしたんだい!?!」

アルフは突然魔法の使用を中断したマークをいぶかしむ。だが、本



人から答えを聞く前になにがあったのかを悟った。

「……………来たみたいだね！」

「ああ、ナノハの方が……………」

上空から、そろそろ馴染みとなった魔力を感じる。フェイトも気付いたようで、水流を躲しながら視線をマークたちに向けける。

《どうしようっ？》

《……………様子見が上策、かな》

《先手を打った方がいいんじゃないのかい？》

《相手の目的もジュエルシードだ。さすがにあの水流の相手をしながら戦うのは無謀ってもんだろ？》

マークはかすかに困惑しながらも、できれば敵対しないようにうまく戦うことを提案する。それより重要なのは、なぜこのタイミングで出てきたのか、という事だろう。

(てっきり最後の最後に全部かつさらっていくつもりなのかと思っていたが……………まさか独断専行!?)

組織に所属するものとしては最悪の判断だろうが、個人としてはなかなか興味深い行動である。そもそもなのはは管理局の人材ではなかったな、などとマークは思い返す。

「待ってくれ！ 僕たちは戦いに来たんじゃない！」

「……………お前も来たのか」

マークたちの沈黙を戦闘のための話し合いと見たのか、ユーノは戦場に出てきた途端に弁解を始める。

「暴走したジュエルシードが融合すればまずいことになります！  
ここはまず、協力して封印を！」

「ふむ……」

ユーノは言うことを言ったら、敵対する気がないことを証明するかのよう  
に背中を見せ、水流の拘束を開始する。だがマークは自身に向  
けられた説得を、生返事で返すのみにとどめた。

《どう……しようっ》

《フェイト、そこは自分で決めなきゃだめだ》

おそらくフェイトにも共闘の話を持ちかけたのだろうが、どうも決  
断には及ばなかったようでマークに尋ねる。だが、マークの返事は  
フェイトの望んだものではなかった。

《え？》

《……確かに普段は相方だなんて名乗らせてもらっているがな、俺ら  
の大将はフェイトだ。それを忘れちゃいけないよ》

先程はつい出過ぎた真似をしてしまったが、そこは譲ってはいけな  
い場所だ。……だが、ただ決めると突き放すわけではなかった。

《ただ、自身の望むままに動くといい。もし、最初の一步を踏み出す勇  
気が足りないのなら……いや、ここは俺の役目じゃなかったな》

一瞬何の事だか分らなかったが、答はすぐに示された。アルフは水  
流に対して鎖を伸ばし、バルディッシュがそのフォームを変える。

「アルフ、バルディッシュ……！」

フェイトは感極まった声で2人の名を呼び、その想いを意志へと変

える。

(マークも、ありがとう……)

声に出さずに、フェイトは自分を相手と呼んだ青年にも感謝を述べる。高まっていく魔力は、フェイトの資質により雷を帯びて満ちてゆく。

「わかった、残りはきっちり半分こだ」

その返事を聞き、少し離れた位置に移動していたのはも笑みを浮かべ、合図を出す。

「じゃあ、せーの……」

『サンダーレイジ』！

『ダイバインバスター』！

溜めに溜めた、おそらく今の二人の最大の一撃が炸裂する。その予想以上の威力と余波にマークたちは距離を取らざるを得なかった。

「なんつー威力だ……」

「いや、僕もこれほどは……」

驚愕する男2人を置いて、アルフは一人満足げであった。おそらく主人の力を認められたのがうれしいのだろう。

(二人がかりとはいえ……今の一撃は神器に迫るぞ！)

マークとしては10歳にも満たない子供が、これほどの一撃を持つことに驚いていた。だが、それでもかつての戦場を見渡せば似たようなレベルの子がいたことを思い出し、何とか冷静さを保っていた。

「友達に……なりたいたんだ」

そんな中、小さいがどこかに響く声が聞こえた。見れば空中にたたずみ、見つめあう少女たちの姿があった。

「……」

マークはつい声を出しそうになるが、なんとか堪える。だが、そんな思いを無視するかのように、結界の、いや、世界の外側から雷が迸った。

「なっ!」

《なんで!》

ユーノとアルフも驚愕を浮かべるが、マークのそれは2人の比ではなかった。

「まさか……今の魔力は……」

だが幸か不幸か、今は考える余裕などなかった。雷はフェイトを貫き、なのはを押しやる。

《マーク!》

「おっ!」

わずかな躊躇のちに、アルフはジュエルシールドへと向かう。ここでジュエルシールドを得られなければ、何のために無茶をしたのかという事になってしまう。だが、当然のようにそれを阻むものが居た。

《管理局!》

「駆け抜ける！」

《!!》

マークは思わず止まりそうになったアルフを叱咤し、さらに加速させ、アルフの背から跳躍する！

《なっ！》

「なっ！」

2人の驚愕を置いて、マークはクロノの頭上を越えて、ジュエルシールドを確保する。

「戦場に出てこなかった奴が今更来てもね、認められないな」

マークは静かにそれだけ告げ、そのまま落下していった。それも当然と言えるだろう。彼には単独で飛行するすべがないのだから。

《ちよっ！》

とっさに追おうとしたアルフの眼前に、3つの宝石が投げつけられる。

『きつちり半分』、だろ？』

そんな言葉が聞こえた気がすると同時に、マークの意図を理解する。要は『一緒に行動する気がない』という事だ。

「はああああ………」

そうとわかれば、もうここには用はない。人型の戻ったアルフは、渾身の一撃を海に叩き込み、視界を奪ったその隙にフェイトを連れ撤

退する。

(ここまで来ると芸術的とすら言えるな)

海から頭を出し、なぜか封印されていた丸太(注 槍です!)にしがみつきながら、2人の遁走を評価する。と、そうしている間に、彼の捕まる丸太に若き執務官が降り立った。

「マークさん、あなたを公務執行妨害で逮捕します」

「……その前に一ついいか？」

「……なんだ？」

「助けてくれ、泳げないんだ」

これにはクロノも、開いた口がふさがらなかった

## 第10話 「マークの逮捕？」

「いや〜さっぱりした」

「こっちはあなたの荷物チェックで散々だったがな！」

さすがに海水に濡れ、べとべとのまま艦内を歩き回られるのが嫌だったのか、シャワーを浴びることは許可された。もちろん持ち物はすべて押収されたが、マークにとって重要なものはすべて封印状態にあるため、痛くもかゆくもなかった。

ちなみに、その海水でべとべとの荷物をチェックしたクロノは、あまりに何も出てこなかったせいかわいらしいらしい。

(それはそうと『ギガファイアー』については痛かったな……)

あの場で放棄し、回収できなかった魔道書について思いをはせる。封印領域に仕舞う余裕はなかったので、仕方ないと言えば仕方ないのだが……

「ま、済んだことか……」

「？ ……何を呟いているのかは知らないが、着いたぞ」

考え事をしているうちに、目的地となった会議室に着いたらしい。

「こっぴど直接会うのは初めてね……改めて自己紹介といきましょうか？」

「必要無いだろ、リンディ・ハラオウン提督」

「それもそうね、マーク君」

その呼び方に、何か妙な感覚に襲われるマークだが、外見年齢は十代でもなんとかなるぐらいなので、『君』付けもあり得るかど割り切

る。

「とりあえず、いくつか質問してもいいかしら？」

「拒否権なんてないんだろ？ハラオウン提督」

「確かに事情聴取といった面もあることは否定しないわ」

それにしては拘束着こそ着ているが、手錠まではつけられていない。その理由は、アースラについてすぐ、ジュエルシードをなのはに渡したためだ。本人いわく。

『フェイトとナノハで半分こ、だろ？』

とのことらしい。「このようなことがあり、どうにか敵でも味方でもない状況を維持している状態である。」

「そうかもしれないけど……同意があつた方が気分がいいじゃない」

「ま、それもそうだな……じゃあ、俺に答えられることなら」

それとなのは達のことだが、どうやらマークがシャワーを浴びているうちに叱られていたようで、少し落ち込んでいる。一応護衛なのか、関係者だからなのかこの場にいるが、微妙に切り替えができていないようでもある。

(あるいはこの子がいた方が、俺が無茶をしないうって思われてるんだろっな)

それも事実なのでどうしようもない。もはや逮捕されたときに開き直ったマークは、何の気負いもなく腰を落ち着かせる。

「そうね、質問の前に言っておかないといけないことがあつたわ」

「ん〜俺の故郷についてか？」



「察しが良くて助かるわ」

そうしてテーブルの真ん中に出てきた画面に、『NO DATE』の文字。

「残念ながら、わたしたち管理局が把握している世界のうちに、あなたの言う大陸や国が確認された世界はなかったわ」

「そっか……その場合ってどうなるんだ？ 今後も管理局の保護下に居なきゃならなくなるのか？」

予想よりずっと落ち着いたマークの様子に微妙な違和感を感じながらも、リンディは現在管理世界の中心となっている『ミッドチルダ』で生活してもらつことになる可能性が高いことを告げる。

「ま、そこらへんは後日に頼めるか？ 一応希望の様なものもあるから」

「そうね、今回の件が終わらなければ、あなたの処遇も決定しないでしょっからね」

その発言にそこはかとなく嫌そうな顔をするが、こればかりは自業自得だろう。

「でも、何で彼女たちに味方することになったの？ はっきり言って何の関係もなかったでしょ？」

「確かになんの関係もなかったけど、しいて言うのなら関係ができたからかな？」

この世界で出会ったから、それが手伝った理由だとマークは告げる。マークにとっては知る由もなかったが、それはなのはがこの事件にかかわった理由とほぼ同じと聞いていいものだった。

(ひょっとしてこの事件は、そういう事件なのかしらね)

時々、このように人の集まる事件がある。滅多にあることではないが、リンディには今回の事件に、抗えない流れを感じた。

「まあ、最初はそれでいいとして、先ほど手を出していた理由にはならないわ。犯罪行為だとわかっていたでしょう?」

「それでも手伝つといったからな。俺の中ではそっちが優先だったんだよ」

「……管理外世界では多い主張ね、余所の世界の法など知ったことかかってこと?」

「そこまで言つつもりはないが……実際の行動はそうなってしまったからなあ」

正直なところ、リンディにはこのことはそこまで責めるつもりはない。管理外世界で管理局の法を押し付けるといふ事、それが無茶なことぐらい理解している。

「まあ、そこら辺のことを追及するのは私たちの専門じゃないから、また今度ね?」

「専門家に責められるなんて勘弁してくれって」

マークはさらにぐったりしてみせるが、わざとらしくさが抜けていない。ただこの話題はやめてほしいといふ合図だろう。

「じゃあ、別の話題にしましょう。あなたの持っていた魔道書についてなんてどう?」

「うーん……提出しろなんて言われたらさすがに困るぞ? 俺の持っているものに、余裕はないからな」

強力な力を持ったもの以外は、友がこちらで過ごしやすいようにと

用意したものも多い。だがそれも環境に慣れるまで持てばいい程度の数しかないのだ。魔道書など提出したら最後、最終的にマークは自衛の手段すら失うことになりかねない。

「そうね、わたしたちにとって未知の魔法である以上その話はいずれ出てくるでしょう。でも今回は違うわ。海であなたが落とした魔道書のことよ」

「まさか、回収している……とか？」

「ええ、ただ……」

もしかと思って尋ねたマークが思わぬ肯定に喜ぶ前に、リンディは釘をさす。そして別の部屋から持ってこられた、魔道書だったものを見てリンディが言いよどんだ理由を理解した。

「見てのとおりよ」

「これは……修復は不可能だな……」

そこには水流の直撃を受けたのだろう、1/5程度の大きさになった書物だったものと、ぼろぼろになった紙切れが積み重なっていた。

「……」これを、回収してくれたこと……感謝する」

「いえ……」こちらも思惑があったの……ことですから」

そのマークの感謝の言葉には、どれほどの思いが込められていたのか。提督という役職に就いたリンディに、思惑を持って回収したことに罪悪感すら感じさせるものであった。

確かにマークには、この魔道書を守って傷つく気などさらさらない。だが、それでも、今となってはこの魔道書も戦友たちの形見ともいえる品なのだ。それがこのようになってしまったという事は、思っていた以上に衝撃をマークに与えた。

「それでも、だ……よければ、これをまとめておく箱が何かをもらえるか？」

「わかりました。用意しておきます」

「それと、回収してくれた礼がしたい」

軽く目元をぬぐい、マークはいつもの調子に戻る。周りも、それが表面上だけだとわかっているが、そこには触れず話を進める。

「そうね……ジュエルシードの回収を手伝ってくれたらうれしいんだけど……」

「先約があるからな、それはできない」

あら残念、などと言ってリンディは肩をすくめるが、最初から返事はわかっていたのだろう、口だけなのが丸わかりだった。

「そうだな……今後の魔法技術の提供を約束するってことで、とりあえず勘弁してくれ」

「事実、そこらへんが妥当でしょっね」

本当のところマークは管理局に利益になることではなく、リンディに対して礼をしたかったのだが、さすがにそうと言うわけにもいれない。賄賂と勘違いされても困るので、このことは事件の処理が終わってからにした。

「あとは……あなたの身柄は、次元漂流者として管理局が保護することになります。現地文化の保護などもありますから、行動に多少の制限がかけられますのでご了承ください」

「仕方がないか……ただ、フェイト達に関わることは許可してくれないか？ 管理局に対して攻撃などは一切行わないと約束するから」

こればかりは決定事項なのだろう。ほかの件と違い事務的な口調が強調されたセリフに、マークは最低限の主張を返す。

(まったく……ここで『敵対行動をとらない』とでも言ってくれたらよかったです)(

あくまで『攻撃などを行わない』というのが曲者だ。だが逆に考えれば、マークはそこまでしても『約束』を守る人だという事でもある……という解釈もできるだろう。

(だけど、敵対する行為は何としても避けたいわ……)

それは管理局にとって未知の魔法を使う、というだけではない。今までの戦闘において、明らかに加減をしているのだ。残念ながら直接の映像などはないが、魔法だけでなく剣も使えるという話であるし。さらに言えば次元漂流者であるにもかかわらずこの世界の乗り物を使いこなし、7つものジュエルシードが支配する海域で飛行することなく戦闘を行うこともできる存在なのだ。

「そうね……あなたの身分・経歴をある程度話してくれるなら考えるわ」

「そうくるか……」

今までの会話で意図的に避けていた話題である。戦場に関わる生活をしていたのは確かだが、それ以上のことを話そうとしないのは、今までの監視の中で確認している。これで話さないようなら、一切触れるべきでないと判断すべきだろう。

「一応、軍人に分類されることになるか……近衛騎士から傭兵まで、いろいろやってきたし、戦場に立つものとして『戦士』と名乗ることが多いかな」

「近衛騎士……」

ある意味予想通り、そして予想以上の返事だったといえるだろう。近衛という事は、間違いなくマークは元居た世界でトップクラスの実力を持つであろうこと。そしてその経歴を語ったこと。これは大きな前進と言えるだろう。

「戦士だって……まあ戦場にいた時間が長すぎて、知識や技能はそっちに偏っている。あと、専門分野と言っているのかわからんが、封印・討滅を行うことが多かった……こんなところでもいいか？」

「ええ、十分よ」

本音を言えば、まだ聞きたいことは山ほどあったろうが、リンディはここで聞き出すのを終わりにした。人によっては臆病だということかもしれないが、慎重さを欠いてはならない時だと判断したためだ。

「この件はここまででしょうかね。それじゃあクロノ、今回の戦いで得た心当たりを」

「いいんですか？」

それはマークに対する警戒だろう。敵というには協力的だが、味方とはさすがに言えない存在だ。そのマークが聞いている中、情報を明かすことに忌避感があるのは当然だろう。

「こちらがつかんだ情報をゆがめるようなことはしないでしょっ？」

「知ってる事の方が少ないからな。まあ、多少の意見ぐらいはかまわないだろう」

「……わかりました、エイミィ」

わざわざ立場を悪くするようなまねはしないでだろうと納得したのか、同僚に声をかけ資料を出させる。

「あら」

「そう、僕らと同じ次元世界出身の魔導師プレシア・テストロッサ」

マークは出てきた映像を食い入るように見つめる。だが、この時点では先程の攻撃に感じられた違和感を見つけることはできなかった。

「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありながら、違法研究とその事故により放逐された人物です」

特定を行えたのが、魔力の波動の一致によるものだという事も付け加えられるが、正直マークにはまいちピンとこなかった。だが、そんなマークにもわかることがあった。

「テストロッサ、ね」

「！ そっといえばあの時、フェイトちゃんが『母さん』って……」

「これはもう確定と言って構わないだろう。」

「親子……ね」

「まあ、あの状況を見る限り健全な関係だとは思えないがな」

プレシアの放った雷は、フェイトにも直撃していたのだ。それを見て良好な関係を築けている、なんてさすがに考えられるものではない。

「マーク君はプレシア女史とは……」

「会ってないな。ジュエルシードを集める理由も聞いてないし」

「それで協力するなんて……もし大事になったらどうするつもりなんだ！」

「クロノ！」

リンディがたしなめるが、マークとしてもそこは軽率だったと思わないでもない。ただ、本人と接触できればどんな事態になるうと、どうにでもできる自信はあった。

「大事が起こったら、俺がどうにかするさ。それより、最終的な目標はどうなっているんだ？」

「……現状では、テストロッサ親子の捕縛、といったところかしら」「そんな……！」

なのはにとって友達になりたい相手が逮捕されるというのは、やはり考えたくない事だろう。だがフェイト本人も犯罪だという自覚があるので、庇いきるのは難しいのも事実だ。

「プレシアとの関係によっては、どうにかならないこともないだろう？」

問題は接触方法か……」

「最悪、こちらで回収したジュエルシードを罠にすることになるでしょうが、方法についてはこちらで考えておきます」

さすがにマークの発言に答え、下手な言質を与えることはしなかったリンディだが、それでも何とかしたいと思っているのは確かだった。

「後ほど、プレシア女史の詳細なデータが集まり次第、行動に移ることにします。……なのはちゃんは、一度おうちに帰ってご家族や友人を安心させてあげなさい？」

「え？ で、でも……」

リンディの言葉に困惑するのはだったが、相手が消耗した魔力が回復するまで動かないだろうという事に納得して一度帰ることを了承した。



「ツキムラさんに、『捕まっちゃって帰れないよう』って伝えておいてくれるか?」

「あ、あはは……っ、伝えておきます」

マークとしては、友人の安否を気にしている少女を和ませたかったのだが、苦笑しか引き出せず終わったことに、人知れず肩を落とした。

## 第11話 「決闘」

「こんな形で観戦することになるとは、さすがに想像してなかったな」  
「想像できてたら、未来視のレアスキルとして登録することを進めますよ」

「でもこの戦いの結果についてはもう予測できてるんだろ？」

「……まあ、一応な」

「君たち……もう少し緊張感ってものを……」

前回の海上の決戦から2日、管理局はなのは発案のジューエルシードをかけた決闘の案を採用した。結界のほぼ中央になのはが待機し、マーク、ユーノ、アルフ、それにクロノが端の方で見守る形だ。クロノまでいるのは、一応監視の名目となっている。

このような強引ともいえる案を実行するきっかけは、昨日けがをしたアルフを発見したことから始まる。

「アルフを捕捉したって？」

『ああ、なのはの友人宅に保護されているようだ。……話を待ってもらっているから、ブリッジの方に来てくれ』

なのはが実家に帰った後、個室をあてがわれたマークは、監視兼案内役の局員をつけられこそしたがおおむね自由に艦内で過ごしていた。アルフ発見の報を聞いたのも、艦内見学中だったのだから、もはや何でもありなのではないかと疑ってしまう。

（まあ、一応『ファイアー』の魔道書を預けた結果ともいえるかな）

さすがに武器を所持したままでは……という事で預けることになったのだが、本当の目的は複数冊魔道書を持っているのを知っているはずなのに、1冊しか提出を求められなかった時点で推して知るべ

きだろっ。

「って、こっちだったっけ？」

「こっついった艦に長くいると、ショートカットの一つや二つ覚えるもんですよ」

「……そっつもんか」

「そっつもんですって」

マークは、もつと返せばいいのかわからなかった。ただ、ブリッジの面子を待たせる時間が少なくなってよかった、などと考えるだけにとどめることにした。

「で、フェイトはプレシアの虐待を受けていて、我慢の限界を超えたアルフがプレシアに返り討ちにあった……という事か」

『……そっつもんことだね』

事が事なので、すでに魔法の事情を聴いたというなのは友人たちにも下がってもらい、アルフが事細かに話した内容を、マークはもの見事に一言でまとめてしまった。さすがのアルフもここまで簡単に言われてしまうと、何か釈然としないものを感じる。

「今後、僕らはプレシア・テストロッサの捕縛を最優先として動くことになるが……マークさん、なのは、君たちはどうする？」

「……」

『私は……フェイトちゃんを助けたい！お友達になりたいって返事も、まだ聞いてないしね』

マークが沈黙するうちに、なのはが先に答えを出す。そうすると当然、まだ答えを言わないマークに注目が集まる。

「……」

『ああ！ あたしに答えられることなら、なんだって……！』

ようやく言葉を発したマークにアルフが飛びつく。だが、マークの質問はこの場で聞く者の予想の外にあるものだった。

「プレシアは『エレシュキガル』の魔道書を持っているのか？」

『えれしゅ……？ いや、聞いたことないよ……』

「なんなんだ、それは？」

マークの言葉に、何か不吉な予感を感じつつもクロノが尋ねる。

「……俺の居た世界に存在した禁書だ。プレシアの攻撃から少し気配を感じてな」

「禁書……詳しく聞かせてくれないか？」

マークはクロノの問いかけに少し躊躇を挟むも、言葉を選びながら説明を始める。

『「災いを招く者」が扱った魔道書。人の身に余る知識が込められていて、使い方によっては……かなり危険な思想であっても実現できる」

その真意を理解しているかによって効果が大きく変わることも付け加える。

「その効果は？」

「……ジュエルシードの持つ力が次元干渉エネルギーだから、今回の件には関係ない可能性の方が大きいかな」

マークはそう言って、魔道書の効果についてはお茶を濁した。ただ数十年の研究なら、たどり着くのは『擬似的な死者蘇生』が精々であり、それだって莫大な『エーギル』と呼ばれる生命エネルギーが

必要なのだ。そして、研究を行う前提としてほかの魔道書も大量に必要なことから、現実的でないと判断する。

「……うん、やっぱり関連性が思い浮かばない」

「できれば自己完結だけでなく、ちゃんと説明してほしいんだが……」  
「フェイトを助けることについては、諸手を挙げて賛成しよう。プレシアが万一『エレシユキガル』を使用した際には俺が対応するから安心してくれ」

クロノの主張を無視して、マークは話を戻す。後半はクロノに向けたものだろう。話はしないが、対応はするから勘弁してほしい、といったところか。

「はあ……それじゃあ、フェイト救出の作戦だが」

『一応、考えてることがあるの』

こうして、なのはによって原案が出され、クロノ達によってまとめられた『決闘』が行われることになったのだ。

「それにしても、ずいぶんと物々しい格好ですね……」

「勝手なことだが、決闘の立会人だと思っているからな。そのための正装ってやつだ」

ユーノの言うように、マークの格好はいつもの量販店で揃えたかのような服ではなく、紺を基調とした、鎧姿であった。ただ、全身鎧というには程遠く、防御より見栄えを重視しているようにも見えた。

「軍の切り札っていうのはそついうもんだぞ。目立つことに意味があるんだ」

ユーノの疑問を感じ取ったマークが説明する。敵にも味方にも『自

分はここに居る』と主張しなければならない。見栄えを重視した、そのための武具なのだ。」

「で、立会人としてのマークの予想はどうなんだい？」

「……来たようだぞ？」

「!!」

それとは別にマークの予想を聞き出そうとするアルフだったが、このタイミングでフェイトがこの場に姿を現した。

(俺が『勝ち目が薄い』とでもいえば、無理やりでも止めるつもりみた  
いだしな)

フェイトに傷ついてほしくないと考えるアルフならそれぐらいするだろう、とマークは考える。事実、アルフの説得はかなり切羽詰ったものであった。

《だけど……それでも私は、あの人の娘だから!》

だがアルフの説得にも、そう言い切るフェイトの姿に何か不自然なものマークは感じた。

(ただ暴力をふるう相手に、ここまで尽くすものか?)

もし、あの親子の間にアルフの知らない過去があるのなら、納得もできる。だが、そうにしてはアルフの限界が来るような接し方をするのはおかしい。その違和感が、マークに最悪のケースを思い描かせる。

(人格が変わるってことは、闇を求めた代償の可能性もある。あれは自分自身を対価にして極める魔法だからな……)

マークはさらに警戒を深めつつ、フェイトを、なのはを見守る。そして、2人の決闘が始まった。

「戦闘空間の固定は大丈夫か？」

『うん』

「いや、さっきから何度確認してるんだよ、お前ら……」

マークの言うとおり、作戦が決まった直後に仮構成を行い、日が変わる直前に構成を完了。戦いが始まる直前に、不備がないか3度もチェックを行っているのだ。

「失敗したら、こちらの打つ手はほとんどなくなるんだ。これぐらい当然たる？」

「プレッシャーはわかるが、気を張り過ぎだ。最後まで持たないぞ？」

そういわれて、クロノは少しムツとしながらも大きく息を吐いた。過剰に力を入れていても、最善の結果にはならないとわかっているのだらう。

「確かに賭けではあるが、成功率はかなり高めなんだから」

『そうだよー！ こっちのフェイトちゃんを追跡準備は順調なんだから、もうちよっとな信頼してくれてもいいじゃないー』

「そう言っわけじゃ……実際、頼りにしてるよ」

『な〜ら任せなさいってー』

クロノは管制のエイミーにも諭され、おとなしく2人の戦いを見守り始める。だが、その目がやけに真剣であるのを見るに、念話で何かを話しているのだらう。

「やっぱり、ナノハが押され気味だな」

「まだまだ始まったばかりです！ 負けませんよ、なのはは！」  
「……………」

マークが戦場に目を戻した際の感想に、ユーノが反論する。ユーノがなのはを応援するのは当然ともいえるので構わないのだが、やはりアルフは複雑そうに戦場を見つめていた。

「速度・技はフェイトが勝るが、攻撃力・防御力はナノハが上だ。フェイトは当ててこそいるが、決定的なダメージにはなっていないし、ナノハは大きいのが当たれば一発逆転もありうる」

わかっていただろうが、改めて言葉にすると一瞬たりとも気の抜けない戦いなのだ実感する。戦力はほぼ互角なのだ。

「機動力を必要とする戦いを続けるのなら、ナノハに勝ち目はないぞ」「つくー！」

マークは思わず助言をしそうになったユーノを、軽くたたいて黙らせる。これが決闘である以上、よっぽどのがない限り介入を許す気はなかった。

(つーか、解説なんてしなければよかったのか?)

ついユーノが動いたのもマークが解説したからであると考えれば、先ほどの一発はなかなか理不尽だともいえる。だが、マークにとってもこの世界の戦い方を見る絶好のチャンスであるのだ。半端な観察をするわけにもいかない。結果、周りの意見も聞くために、そのまま考察は声に出して行うことにした。

「せっかく足を止めたのに、また高機動戦か……………」  
「なのはは、状況に応じて戦い方を変えられるほど戦い慣れしてませ



んから……」

慣れ以前に、まだ戦闘方針を確立できていない。その割には善戦しているのもはや才能としか言いようがない。そんな中、戦場が上空へと移る。

「……そこまで飛ぶか」

「映像は出せるかい？」

『了解』

アルフの要請で雲の上まで飛んで行った2人が映し出される。するとそこに現れたのは、至近距離で杖と鎌を交える2人の姿だった。

「フェイトって、近距離戦闘もできたんだな」

マークは、せいぜい一撃離脱の際に使用する程度だと思っていたが、なかなか扱えている様子に驚く。

「あたしとしては、なのはがそれを受けてるのに驚きなんだけど」

「なのはの訓練は、ほとんど彼女相手を想定していたから」

「なるほど」

だからこそ、この経験の差でも戦えていたのだろうと納得する。いふならば、今のなのはの魔導師としての性能は『フェイトと戦う事』一点に特化しているという事だ。

「俺が相手になったらどうするつもりだったんだ？」

「……全力で防いで、全力の一撃に賭ける……」

長所によるゴリ押し、これでだめなら諦めようという事だろう。

「動きが変わった……」

「え？」

「どっちだい？」

「フェイトの方だ。少し攻撃……いや、行動が全体的に粗くなった」

少し話がずれたすきに、戦場に小さな変化が訪れた。精神状態や疲労によって動きが変わることはよくあることだが、このタイミングはマークの予想よりかなり早い。

(やはり、精神的にかなりまいっているようだな)

特に、アルフが隣にいないのがきているのだろうとマークは思う。そして、その精神状態が影響してか、戦況が変わった。

「逆転した……」

「え？ それって……」

「ああ、フェイトが攻めているよう見えるが、ナノハは完全に防いでいる」

フェイトも気付いているのか、攻撃が苛烈になる。しかし同時に、粗さも目立つようになってきているため、結局攻撃が効果を表さない。

「設置型のバインド……それにあれは……！」

「フェイト……」

「決め技か……終わったな」

そして、そんな状況を打破するためか、フェイトが大きく動く。それに対し、それぞれ思うところがあったようだが、それ以上にマークの一言は見過ごせないものがあった。

「まだです！ まだ、決まったわけじゃない！」

「いや、決まりだろう。フェイトはまだ削りきれてないから、今決め技を使ってもナノハの防御は貫けないよ」

「そうです！ ……なのは魔力なら……って、え？」

ユーノが会話のずれに気付き、改めてマークに問いかけようとしたときに、フェイトの一斉射撃が炸裂した。その一撃の攻撃力を補うために用意された数は千を越え、そのすべてがなのはに向かって放たれる。

「スパーク、エンド」

そして放たれる最後の一撃。それは余波だけで周りの建物を削り、なのはへと直撃する。

「……」

それを見て、誰もが口をつぐみ、煙が晴れるのを見守る。ほんの数秒、永遠にも感じられた数秒が過ぎ、煙の中からいまだ戦意の衰えのないのが現れる。

「あれを、防ぎ切ったのかい……」

「なのは……」

そして反撃が始まる。大魔法を行使した疲労を押し、突撃を敢行しようとするフェイトをバインドで絡め捕る。

「デイバイン、バスターツ！」

「あああっ……」

そして放たれる一撃を、フェイトは渾身の力を籠め防御魔法を発動

する。フェイトの防御はマークの予想より硬く、この一撃をほぼ無傷でしのぎ切る。だが、この時点ではは次の行動に移っていた。

「はたから見ると、少しもどかしいな」

だがマークの言葉に答える者はいない。ここに居る者すべてが、なのはの一撃に魅せられていた。

「集束、砲撃……」

そんな中、不思議とフェイトの一言が聞こえる。

「うけてみて！　これがわたしの、全力全開!!」

それに対し、全霊を持って紡がれるフェイトの多層防御。

(それでも、ナノハが集めた魔力には及ばない………　　「たたく、非殺傷設定」について聞いてなければ、なりふり構わず飛び出していたところだ)

マークが2人の決闘を認めたのも、この設定のことを聞いたからだ。10歳に満たない子供が、極限の戦いの中ギリギリを見極められず、最悪のケースが起こることがないからこそその決闘ともいえるだろう。

「スターライト、ブレイカーッ!!」

一閃。結界の中を一掃するほどの余波とともに、その一撃が放たれる。マークは、自身の持つ神器に匹敵するその一撃を見て、さすがに戦慄を隠せなかった。

「マーク、行くよー!」

「! ああ、頼む」

なのはの一撃の余波が収まり、決闘の終わりを確認したアルフがマークに声をかける。マークはアルフに声をかけられやっと正気を取り戻し、獣化したアルフにまたがり2人の下へ向かう。だが、行動に出るのが、あまりにも遅すぎた。

《高次魔力確認、魔力波長はプレシア・テストロッサ!》

「! アルフ!」

「了解!」

エイミィの言葉に加速するが、その距離はあまりにも遠かった。プレシアの一撃は手を差し伸べるなのはを妨げ、フェイトを呑みこむ。

「フェイトちゃん!!」

「クソッ! フェイト!!」

なのはとアルフが飛び込む中、マークは回復魔法の準備を行いつつ、今の攻撃について考える。

(フェイトを切り捨てた? ……いや、今のは『非殺傷設定』だった。

口封じならそんな設定邪魔なだけなのに……)

さらに言うのなら、『エレシユキガル』の反応も薄い。精々、その存在を確認できる程度の気配しかないのだ。まるで自分はここに居ると主張するかのようだ。

(俺を、誘っているのか?)

なのはによって抱えられたフェイトを、『リライブ』の杖によって治

療しながら、アースラに転送を依頼する。なのはとフェイトの決闘は、なのはの勝利で幕を閉じたが、だがマークには、むしるここからが始まりにしか思えなかった。

## 第12話 「突入」

「もう突入したのか？」

「ええ、あのような大魔法の使用直後の疲労を見逃す手はないわ」

フェイトのことをなのはたちに任せ、一足先にブリッジへと着たマークの質問に、リンディは当然のように答える。クロノはエイミイのところへ行ったのであろうか、この場に姿が見えない。

「すぐに転送させましょうか？」

「いや、フェイトのことが気になるから、少し待ってくれ」

それならすぐここに来ないで待っていていればよかったですように、なとどリンディは思うが、口には出さなかった。そうしているうちに、突入部隊が中枢へたどり着いたらしく、一城の主の風格を持つ女性が正面のモニターに映し出された。

「あれが……」

「そう、プレシア・テストロッサ。どっ？」

一目見てマークは理解する。あれは魔道書に食われていない。だが、所持をしていることは確かだった。しかし魔道書自体は画面から確認することはできなかったが……。と、そこへフェイト、なのは、アルフの3人がやってきた。

「(手錠は必要ないだろ)」

「(形式上仕方ないのよ)」

そう一言だけ交わしたが、それ以上話す余裕はなかった。突入部隊が杖を構え、口上を述べる。

『プレシア・テスタロッサ、時空管理法違反および、管理局観戦への攻撃容疑であなたを逮捕します』

そこまで聞いて、いや、プレシアの後方に回った局員を見て、プレシアは顔色を変えた。そして、マークたちもそこにあるものを見て顔色を変えた。そこにあったのは、何かの溶液に浸された、フェイトそっくりの子供であった。

「えっ？」

『これは……』

『私のアリシアに、近寄らないで……』

まさしく一瞬であった。包囲していた局員も、後方でそれを発見した局員も、抵抗することすら許されず全滅した。

『たった11個のジュエルシードではたどり着けるかわからないけど……もういいわ、終わりにする』

それは誰に向けられた言葉か……

『この子を「く」してから時間も、この子の身代わりの人形を娘扱いするのよ』

そう、これは……

『聞いていて？ あなたの「く」よ、フェイト』

そして、マークの抱いていた疑問の答えでもあった。

『せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。』



役立たずでちつとも使えない、わたしのお人形……』

フェイトが最後までプレシアに付き従ったのは、アリシアの記憶があったから。そして、プレシアがフェイトを虐待したのは、似ているだけで全く違うという事に対する八つ当たり。

『最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テストロッサを亡くしているの』

おそらく、調べはついていたのだろう。エイミィは、ゆっくりと語りだす。

『安全管理不良で起きた魔動炉の暴走事故……アリシアは、それに巻き込まれて……』

事故の内容についてはわからなかったマークだが、それでも大切な人が亡くなるというのがどういふことなのかはよくわかった。

『その後、プレシアが行っていた研究は、使い魔を越えた人造生命の生成……そして、死者蘇生の技術』

「なっ……」

それはまさしく、『エレシユキガル』に記載されている技術だ。

『記憶転写型特殊クローン技術、プロジェクト・フェイト』

『そうよ、その通り……でも失った者の代わりにはならなかった。作り物の命は、所詮作り物』

そうして、画面越しにこちらを見て、さらに続ける。

『アリシアは、もっと優しく笑ってくれたわ……わがままも言ったけ

ど、私の言うことを、とてもよく聞いてくれた……アリシアは、いつでも私に優しくかった』

アリシアを愛しみ、フェイトを罵倒する姿に、マークは理解する。

『フェイト、あなたは私の娘じゃない……ただの失敗作、だからあなたはもういらないわ、どこへなりと消えなさい！』

まだプレシアはフェイトを見ていない。たとえ見ていたとしても、その視点は『研究者』のものなのだろう。

『いいことを教えてあげるわ、フェイト……あなたを作り出してからずっとね……私はあなたが大嫌いだったのよ』

その一言は、フェイトにとって致命的なものだった。全身から力が抜け、かろうじて握っていた『バルディッシュ』も、その手から滑り落ちる。

『ちよっ！ 大変、見てください！』

エイミィの言葉に、脇のモニターへ視線をずらす。するとそこには、魔方阵から湧いて出てくる、騎士人形の姿があった。

『屋敷内に魔力反応多数……いずれもAクラス！』

『総数60……80……まだ増えます！』

『プレシア・テストロッサ、何をするつもり!?!』

同時に画面が揺れ、鳴動が聞こえ始める。

『私たちは、旅立つの……永遠の都『アルハザード』へ！』

プレシアと『エレシュキガル』がつながったが、マークにはまだ疑問はある。だが、だからこそもうこんなところにいるわけにはいかない――

「出るぞー！」

「転送ポートへ！ 設定はこちらが」

マークは、話分かる責任者に感謝しつつ、ブリッジを出る。

(フェイトに一言声をかけるべきだったか?)

そんな余裕はなかったのだが、それでも、慣れない念話を扱い、声をかける。

《……先に行く！》

どんな形になるかわからないが、ここで立たなければ一生ついて回る傷になるだろう。マークにとって、フェイトは相方だ。そんなことにはなあってほしくない。

『取り戻すのよ！ すべてを！』

走り出すマークの背に、プレシアの言葉が届く。もちろん言いたいことはあるが、それを言うのは今じゃないのだと、必死に自制しながら――

「マークさん――」

「クロノか――」

別の場所と同じことを聞いていたのだろうクロノと合流し、並んで走り続ける。

「……忘却の都『アルハザード』」

「プレシアは、永遠の都と言っていたが？」

「おとぎ話だ……はるか昔に滅んだ、禁断の秘術が眠る土地……その秘術で、亡くした命を呼び戻そうとしているんだろっ！」「

そこには、まぎれもない怒気があった。おそらく、クロノにもなくした大切な人がいるのだろっ。

「だが真理だ。死んだ人ともう一度……俺だって、今は亡き戦友との語らいを夢想したものだ」

「……」

この無言の肯定を、責めることができる者はいないだろう。それは誰もが望むものなのだから。

「……それでも、認めるわけにはいかないんだ……」

「ああ、次元断層だったか？ そんなものを起こさせるわけにはいかない！一言言ってやるついでに、そっちも止めてやるよー！」

その一言にクロノがこげそうになるが、マークは無視する。もちろん、世界の崩壊の危機を放っておく気はないが、心情的にはフェイトのこのついでだ。戦士であることはやめたのだから、これくらいの主張は許されるだろっ。

「！ 君たちは……」

「わたしたちも行くよー！」

「こんなことになって、ただ見ていることなんてできない！」

おそらくユーノの短距離転移を使ったのだろっ。ポートにはすでになのはとユーノの姿があった。

「……わかった。ただし、無茶だけはするなよ！」

「うん！」

「わかってる！」

マークは何も言わず、ただ転移を促すだけだったが、拒絶の意思は見せない。なのはとユーノは、この戦士に反対されなかったことにひそかに安心する。

そして転移をした先には、奇妙な穴が開いた廊下が広がっていた。

「ユーノは知っているな？ この穴には気をつける」

「虚数空間……魔法が発動できない空間だ。落ちたら重力の底まで真っ逆さまだよ」

マークは2人の注意に、やはり自身の知る戦場とは違つのだと感じる。飛行魔法の使えないマークにとって、『落ちたら助からない』など自然な事だからだ。

「了解！」

「気を付けよう」

そして駆け抜けた先の広間で、数十の騎士人形が待ち受けていた。

「なのはは決闘の直後だし、セーブして戦いなさい。ユーノは支援を、俺とクロノで全部やるつもりで行くぞ！」

「一人あたたま50以上……って、さすがに無茶だよ!？」

その数を2人でやるというマークになのはは反論する。だが、マークにとって重要なのは数ではない。わざわざ返事をするのもおっくうだと言わんばかりに、なのはに対して『マジックシールド』の杖を使い、守護を行う。

「これで、よっぽどのがない限り大丈夫だろう。それより、あれがなんなのかは知らないが……別に壊してしまっても構わんのだろ？」  
「あ、ああ……あの傀儡兵には特にどう対応しなければならぬ、といった規定はないが……」

その言葉に安心したマークは、相対する騎士人形改め、傀儡兵の形状から最も効果的だと思われる武器を取り出す。その武器とは……

「ハ、ハンマー!? まさかそれで戦うつもりなのか!？」

「ああ、重騎士系に特攻だからな。見たところ全身鎧に似てるし、これでいけるだろう」

ただハンマーといっても、その大きさから相当な重量があることが見て取れる。戦場で扱うために作られた戦鎚、『一撃必殺』を思い浮かべるにふさわしい姿だった。

「それじゃあ、いくぞー!」

「ま、待て! 障壁だってあるんだ! いくらなんでも……!」

クロノの制止は間に合わず、マークの横薙ぎに振るわれた一撃は、傀儡兵の障壁に直撃し……一瞬の拮抗すら許さず打ち砕き、その後ろにいた本体を鉄くずに変えた。

「う、嘘だろ……」

「ふむ、重騎士型っぽいが、これは魔道型だな……そこまで防御力は高くない」

その言葉に、クロノは絶句する。確かに管理世界では質量兵器を禁止しているため、それに対する防御が低いという事もあるだろう。だが、シールド破壊の術式などを一切使わず、純粋な一撃の威力でここ



ものが駄々漏れの念話には、それを理解させるだけの思いがあった。

(なら、行かないと！)

マークがフェイトの相方を名乗るなら。アルフはフェイトの使い魔なのだ。そう簡単において行かれるわけにはいかない。アルフは戦場へと走った。

(わたしは……)

そんな中、フェイトの中にはプレシアの言葉と、今までの記憶がぐるぐる回っていた。そして、そんな状態でも、自然とフェイトは外界の情報を拾っていた。

(アルフ……それに、この子)

そこには、アルフが先程まで見ていて、つけたまま言ってしまった庭園内の映像。結局名前を覚えることすらしなかった女の子が写っていた。

(ちゃんと……教えてくれたのに)

フェイトは、時には一方的に攻撃してしまった、それでもフェイトに話しかけてきた女の子を思う。

(それに……)

マーク。ただ、偶然巻き込まれた、何も聞かず、無理やり手を貸し始めた青年。

(わたし……結局何も話さなかったのに)



それでも、フェイトの相方と名乗り。先ほども『先に行く』とわざわざ伝えてくれた。

(アルフ……)

いつでも隣にいてくれた彼女も、先に行ってしまった。

(わたしは……)

その視界の端に、戦場に立つ自身の半身が写る。

「バルディッシュ……わたしの、わたしたちのすべては……まだ始まっていない？」

バルディッシュは、その言葉に宝石から杖状になることで答える。なのはのスターライトブレイカーをくらい、ボロボロになってなお、主のためなら戦えるとその気概を見せる。その姿は、正しくフェイトの半身であった。

「お前も、このまま終わるなんて嫌だよね？」

自然と涙があふれ、フェイトの心に再び火がともる。

「うまくできるかわからないけど……一緒に頑張ろう……！」

そして、丁寧に、力強く、バルディッシュに魔力を流し、修復を行う。

「わたしたちのすべては……まだ始まってもない」

確かに、今までの自分はもう砕け散ってしまったのかもしれない。だが、この胸には確かに残っているものもある。

「だから、ほんとの自分を始めるために……」

（進まなければならない。この先には、自分を待っていてくれる人たちがいる……）

そして少女は再び歩き出す。新たな始まりを迎えるために……

## 第13話 「決着」

(……よし、次に変えるか)

なのはたちと別れ、クロノと共にプレシアの下へ向かうマークは、その内心でつぶやき、武器を『キラールランス』へと持ち替える。

「一体いくつ持っているんだ……」

「戦場で困らない程度にな」

あきれろクロノに軽く返しつつも、このランクでは目くじらを立てられないことに安堵する。そして、その槍を繰り出す、今までほど派手な戦いとはならなかった。

「爆散しない……!」

「ハンマーみたいに雑に扱つと、すぐダメになるからな」

鉄塊のごときハンマーとは違い繊細なんだよ、などと言いつつその一撃は急所をえぐり、傀儡兵を停止させる。

「つくづく敵に回したくない人だ……!」

「同感だよ執務官! その若さでここまでやるとは思わなかったぞ」

そう、クロノは正確にマークが作り出した射線を打ち抜いていた。そのことで前衛と後衛がかみ合い、さらに進撃速度を上げることになる。

「報告よりも多い!」

「上から回されてるんだろ、前情報を過信するな!」

結果、より危険度が高いと判断された2人に戦力が集中する。だがそれは、疲労しているはずなののはの援護にもなるため、もってこいの事態でもあった。

「！横だ、来るぞー！」

「おっと!？」

クロノの警告に、マークは何とか反応する。そこに壁を壊して現れたのは今までにない大型の傀儡兵であった。

「まさか自分の城を壊して出てくるとはなー！」

「アルハザードへ渡る以上、ここはもう必要ないという判断だろう！」

「なるほど、ねー！」

話しながらも攻撃を仕掛けるマークだったが、いかんせんサイズが違い過ぎた。急所を攻撃するには跳び上がらなければならず、跳べば飛行のできないマークに、攻撃力を保つ術がない。

「質量兵器の使用はここまでみたいだな」

「……………なんか悔しい」

マークは言葉通りの顔をするが、無理を通すようなまねはしなかった。槍をしまい、いつもの赤い魔法書を取り出す。だが、それを待つてくれるほど敵は優しくなかった。

「うおっー」

「マークさん!？」

振り下ろされた剣がマークの足場を奪い、魔法が走る。

『エルファイアー』！」

そのすべてを躲し切り反撃をするが、防御魔法を焼くにとどまり、本体には届かなかった。

「小型とは性能が段違いだな！」

「その割には余裕じゃないか！ 切り札でもあるのか!？」

その言葉に、マークは降り注ぐ攻撃を躲しながらただ笑みを深くするだけだったが、それだけで十分すぎる答えとなった。

(持つてる！ それも、今までとはけた違いに強力な奴を！)

「出し惜しむ気はないが、同時攻撃の方が早い！ 一気に決めるぞ！」

その言葉と同時に、マークの立つ地面から魔方陣が現れる。発光する円形ではあるが、ミッド式とは違う紋様であり、回転することなくマークを照らす。

「ッ！」

一瞬遅れ、クロノも砲撃準備に移る。ただそのタイミングは絶妙。マークに攻撃を加えようとした動きが、クロノの魔力に反応して一瞬止まる。

「ふん、単調すぎる。『エルファイアー』！」

「ブレイズキャノン！」

巨大な傀儡兵の防御はわずか数秒と持たず砕かれ、爆散する。そのあまりのあっけなさに、クロノは愕然とした。

(こんなに簡単に？ 攻撃の威力・連射性、防御だってかなりのものだったのに?)

そんな非常識なことをしでかした男は、爆発で起こった煙にまかれてせき込んでいた。そして、クロノの視線に気づき、バツの悪そうな顔をする。

「悪いな、待たせた」

「……いや、いい。先を急ぐぞー!」

クロノは、そうした感情にふたをして、今はプレシアの捕縛が最優先だと自身に言い聞かせる。そうでもしなければ、いろいろなものも粉砕される、そんな気がしたのだった。

そうして、プレシアが現在いるであろう地点へと到着する。

「この下かー!」

「下がっていてくれ、僕が打ち抜くー!」

そうして突入する直前、プレシアの決意とも取れる叫びが聞こえてきた。

「取り戻すのよ……こんなはずじゃなかった、世界のすべてをー!」  
「……」

それを聞いてクロノは無言で魔力をため、放つ。あと少し、そこですべての思いをぶちまけるのだと。そして降り立つ。その思いをぶちまけるべき場所へと。

「知らないはずがないだろうー! どんな魔法を使っても、過去を取り戻すことなんかできやしないー!」

「……過去は、過ぎ去ったことだからこそ過去なんだ。例え、時間を、空間を越えようと、そればかりはどうにもならないことだ」

マークは思い返す。かつて、未来を変えるため、滅びの未来から来た英雄たちを。確かに未来は変わったが、その英雄たちの過去が変わったわけではないのだ。そして、溜めに溜めた想いを、この場でぶちまける。

「……まあ、過去云々を除いたとしても、あんたが例え、真なる死者の蘇生にたどり着いたとしても、それは死者の蘇生足り得ないだろうけどな」

「何が……あなたに、何がわかるというの……」

プレシアから見れば、マークのような若造に理解できるはずがないと思うのは、無理のない事だろう。だが、この場に限らず、マークほど身近に『死』を知る者はいないだろう。

「すべてを理解できるとは言わない……だが、それでもわかることはある」

「なにを……」

「あなたは、繰り返しすぎ。完璧な蘇生が行えても同じことだ」

その断言に、思わずプレシアも口を閉ざす。だが、なぜ相手の言い分を聞く気になってしまったのか、プレシアには後付けの理由を用意することしかできなかった。

(どんなものであろうと、それが蘇生に関するものであるなら聞いて損はないわ)

「いいわ、言ってみなさい……」

「ふん、あなたは気付いたのか？ 一瞥見て、フェイトとアリシアが違

う存在だという事に」

「……」

プレシアは、すぐに答えられなかった。後でいえば、いくらでも理由をつけることはできる。『蘇生の成功に浮かれていた』『蘇生が失敗だなんて思いたくなかった』だが、目の前の青年に突き付けられた事実は、そんな程度のことでは返せるものではなかった。

「まあ、クローン云々は俺にはわからなかったが……元をただせば同じものなんだろう？ ならそれも当然だろう。だが、問題はそこじゃない。ある程度時間がたってから、フェイトとアリシアを別の存在だと認識したことだ」

その言葉に、プレシアのどこか別のところが反応する。だが、それを理解する前に、さらにマークの言葉が紡がれる。

「最初は些細な事だったのだろうか？ だが、見過ごせなくなった。完全な蘇生を行っても同じことだ。生きている人は変化を続ける。そして生じた些細な変化が、あんたの記憶とかみ合わなくなった時、『これはアリシアとは違う』そう結論付けることになる」

「そんなことあるはずないわー！」

「本当にそんなはずがないなら、こんな若造の言葉、無視してしまえばよかったじゃないか……馬鹿な事を言うガキだと、そう嘲笑ってればよかったんだ」

思わず反発するプレシアだったが、マークの確信を秘めた言葉に、反発してしまったことに愕然とする。だが、ここで折れるわけにはいかない。そんな信念すら失った義務感を感じていた。そして、そこに今、プレシアが一番合いたくなかった少女が現れる。

「何を……しにきたの？」



その言葉には、驚愕も含まれていたことに誰が気付いただろうか。今プレシアの前に立つ、あれほどのことを言われて、それでも憎しみを感じさせない少女はいったい何なのか。

「……あなたに、言いたいことがあってきました」

その目に宿るのは決意だ。ただ憎まれことを言いに来た者の瞳ではない。

「わたしは、ただの失敗作で、偽物なのかもしれません……」

その言葉に、プレシアのどろろ心が傷む。

「アリシアになれなくて、期待に応えられなくて。いなくなれって言うなら、遠くに行きます……」

痛むのは、心か……彼女が言っている言葉は、プレシアの言った言葉であつたはずなのに……

「だけど、生み出してもらってから今までずっと……今もきつと、母さんに笑ってほしい、幸せになってほしいって気持ちだけは……本物です」

何処からか、小さな笑みがこぼれる。そして、つい先ほど、胸のどこかに引っかかったものがなんだったのかを静かに悟る。

「わたしの、フェイト・テストロッサの……本当の気持ちです」

「この、目の前の少女はいったい誰なのか。プレシア自身が言ったではないか。」

(アリシアのクローン……言い換えれば、そう……ただ遺伝子上だけのことかもしれないけど、アリシアの双子の妹……私の……)

「ふ、くだらないわ……」

だが、だからこそ、今気づいたことにふたをする。目の前の少女は、自分のそばにいたべきではないと思うから。ただ、無言で、今まで干渉を抑えていた11個のジュエルシードに更に魔力を流し込む。

(今までのように、制御できるギリギリではないわ……これですべてが終わる)

その流し込んだ魔力に合わせ、再び城が鳴動を始め……すぐに鳴りやんだ。

「何……が？」

「ふん、この程度なんてことないな……まあ、意志の定まらない暴走なんてこんなもんか」

そこには、白い輝く石を掲げたマークの姿があった。隣にいるクロノすら驚愕するその現象を起こしたのは、その白い石に間違いないだろう。

「馬鹿な……半数以上のジュエルシードの暴走を止めた……？」

「だから、馬鹿って言うな……いくら強大な力だって、指向性がなければそう難しい事じゃないぞ？」

そうして、ジュエルシードはすべてその白い石に吸い込まれ消えた。その石こそが、かつてある大陸で、魔王の魂を封じていた『聖石』と呼ばれるものであることなど、知る者はいないし、知る必要もない。

(まあ、これはあくまで、かつて砕けたものをより集めて作った劣化品なんだがな)

それよりマークにとって重要なのはフェイトの願いだ。『幸せになつてほしい』それはかつての友が、マークに願ったことに相違ない。ならばプレシアは、マークと同じであるといえるだろう。

「とにかく、こんなことで死んでもらっては困る。フェイトの願いは、あんたが幸せになることなんだから」

「……死ぬ気なんてないわ。私は過去を取り戻しに行くだけなのだから」

「存在すら確認できない場所へ行こうとするなんて、自殺と同じだ」「いいえ、アルハザードは存在する！ 私はその証拠を手にしたのだから」

その手には間違いなく『エレシュキガル』が握られていた。

「この書には、死者蘇生の方法が記載されていたわ！ なら、この書を記した人物の居た世界こそ……」

「一体どうやって解読したのかは知らないが……残念だが、それは未完成だ」

マークの言葉に、今度こそプレシアは放心した。

「な、何を……」

「その魔道書の名は、『エレシュキガル』……著者名はなく、その内容は、エーギルの生成・人造生命体の創造・死者蘇生が主な内容だ」

プレシアは、まだ誰にも語ったことのない魔道書の内容を言い当てられ、マークの言葉に信憑性が増していくのを、ただ聞いていること

しかなかった。

「死者の蘇生に使われるのは、『大量のイーギル』と『蘇生させる存在の一部』のみ。蘇生させる存在に莫大な量のイーギルを注ぎ、足りない部分を作り出す術式を使用していたはずだ」

「な……なぜ、それを？」

「あなたがそれを手に入れた経緯は知らないが、それは俺が封印していたものだ。……それを記したやつのも知っている」

だから、今現在俺以上にその書について知る存在はないのだ、と告げる。

「だが、その方法では肝心の『魂』の再生には至らなかった。そのため、人の形をしながら中心に空いた『空洞』を埋めるために、あたりから無尽蔵に魔力を集める存在が出来上がる……それが『エレシユキガル』に記された死者蘇生の正体だ」

その言葉に、プレシアの体から完全に力が抜ける。しかし、本題はここからだ。

「どちらにしろ、逃げ道のなくなったあなたには、逮捕されるしかないわけだが……俺としては家族をやり直してほしいんだが？」

「なぜ？ ……なぜあなたがそんなことを言っの？」

「……こんなでも、フェイトの相方を名乗ったからな。相方の望みを叶えようとするのは当然だろ？」

プレシアは、一瞬だけ呆気にとられ、苦笑する。

「馬鹿ね」

「馬鹿言っな」

マークはそんなことを言うが、まんざらでもない顔をしていた。

「ええ、いいわ乗ってあげる。ただし、生半可な苦勞じゃないわよ？」

プレシアは、自分の生き残ることの意味を正確に理解していたが、それでもマークの提案を呑んだ。マークの認識が甘いことを感じたが、この青年が居れば、フェイトは大丈夫だと思ったためだ。

(なら、わずかな時間でも、この子のために……)

そこへ、駆動炉の封印を終わらせたなのはが静かにやってきた。プレシアがそれを軽く視線を動かし確認するが、もう抵抗する必要もなかったため、特に行動を起こすことはなかった。

なのはもアースラ経由でこちらのことを確認していたのだろう、特に何をするでもなく、フェイトの少し後ろに降り立つ。そして、事件の終わりを感じ始めていた空気を、マークは切り裂いた。

「ふむ、役者もそろったしそろそろ出てきてくれないか？ あれほどの時間が過ぎたんだ、もう発生しているのだから？」

そして『ソレ』は現れた。暗い闇を凝縮した、影の様な男の形をした何か。

「久しいな……などと言って理解できるか？」

『……今回も貴様は、私の前に立ちただかるのだな』

その存在の登場と同時に、この場にいたものが、唯一『安全』を感じた場所に一斉に移動する。すなわちマークの後ろにだ。

「何者だ……」

「気配は全く感じなかったのに……」

警戒を深めるクロノ達であったが、その男は一切興味を示さずマークに話しかける。

『貴様とて、望むものは同じだろうか……』  
「まあ、な。だが……いや、なるほど、理解した。ならもう道は一つしかあるまい」

そのまま話を続けるかに思われた2人の気配が一変する。マークの手に赤い魔道書が、男の手にいつの間にとったのか『エレシュキガル』が握られる。

「いくぞ！　今再び、この魔法に焼かれて消える！　業火の理『フォルブレイズ』！」  
『貴様こそ！　すべてを圧する真の力を知れ！　『エレシュキガル』！』

マークの扱う神将器『フォルブレイズ』かつてたった8人で竜と人の戦いの戦局を変えた、大賢者の扱った至高の魔道書。

影のような男の扱う『エレシュキガル』過去のすべてを代償に力を求めた男の記した、究極の魔道書。

その2つの力の衝突は、マークたちの居た場所の、実に半分をきれいに消し飛ばした。

## 第14話 「蘇生」

「……いくら強大な力を持つと、所詮は残留思念、か」

「これほどの魔法を使って『所詮』なのか!？」

2つの力の衝突は一瞬だったが、それだけで庭園の下層は修復不能な傷を負うことになった。

「……彼は死んだのか？」

そのクロノの言葉に、フェイトとなのはが凍りつく。あまりの光景に、実感がなかったが、そうであるなら目の前の青年は『人殺し』になっってしまうのだ。

「もともとあれは生きていないわけだが……残留思念じゃわかりにくかったか？　なら、あれは幽霊で、悪霊で、執念で、未練だと言えば分るか？」

「つまり……意識だけがこの世に焼きついたようなもの、ってところかしら？」

「いや、それはわかりにくくなってないか？」

科学者として幽霊などという言葉を受け取れなかったのかもしれない。

「なんとなく、わかった、と思う……」

「う、ん……大体」

あれが何かについては微妙なようであったが、とにかく殺したわけではないことは理解したようだ。

(まあ、今は生命を殺す気はもつないが、『アレ』は例外なんだよな)  
かつて封印していた存在を滅ぼすのはマークの義務だ。だがそれをわざわざ言いつつもりはない。

「とにかく、すぐ脱出しよう。これじゃあいつ崩壊してもおかしくない」

「その前にやっておきたいことがあるんだが……いいか？」

「それは……わかった。エイミィ、一応安全に帰れる限界時間を計算しててくれ」

確かに、安全にはかえられない以上クロノの言葉に否はない。マークは黙って1本の杖を取り出し、アリシアの入ったガラスの前に立つ。

「……」  
「ねってどつやって開けるんだ？」

「何をする気？」

「何って……」

「待て、おかしいぞ……通信がつかからない」

マークとしては一世一代の決心に水を差されて、冷たく返す。

「知らんよ、さっきの魔法で障害でも出たんだろ……いや、ある意味都合がいいかもしれないな」

「何を……」

「死者蘇生を行おうっていうんだ。今後のため、資料なんて残さない方がいいだろ？」

その言葉に、今度こそマーク以外のものが硬直する。その様子に満足しながらも、先ほどの質問の答えがないのにじれて『銀の剣』を取り出し、ガラス管を解体する。



「ほ、本気!? さっきあなたが言ったことよ!? 死者蘇生は未完成だって……」

『エレシユキガル』に記載されていたものは、な。これは別だ」

そう言ってアリシアを横たえ、『オーム』の杖を掲げる。

「ま、さか……本当に……」

「そんなに期待されると、万が一があった時怖いじゃないか……この魔法実は初めて使ったから、もう少し気楽にやらせてくれ」

言葉面は軽く聞こえるように言うてはいるが、その顔は、文字通り全身全霊。静かに、重々しく魔力が満ちていくのを、黙って見ているほかなかった。いや、それでも声をかけるものが居た。

「実験とかもやったことないの?」

「ああ、この杖は代えが効かないから……試してみるなんてことができないんだ」

声をかけたのはフェイトだった。だがその顔に余裕はなく、どう話しかければマークの邪魔にならずに済むかを必死に探っていた。

「別の杖に術式を埋め込んだりすればよかつたんじゃないの?」

「無理無理……この術式、俺程度じゃまったく理解できないからな」

クロノ達にはなぜ、この空間で、マークに声をかけられるのか理解できなかった。だが、フェイトにとっては、当然のこと。相方が『気楽にやりたい』と言ったのだ。なら、それを手伝うのはむしろ必然。

「知り合いが作ったものなの?」

「いや、誰が作ったのかなんて、記録に残ってない……ある程度予測は

つくがな」

フェイトには、普段の会話を再現できないものかと必死で考えるが、考えれば考えるほどどんな話をすればいいのかわからなくなる。

「どこで手に入れたの？」

「知り合いの王女に譲ってもらった。……まあ、俺には使えなかったから今までとっていたんだけどな」

緊張のあまり、涙が出てくる。だが言葉を切ることはいらない。

「じゃあ、どうして今……」

「一生使わないままじゃもったいないからな。思うところもあったし、これを機に……ってやつだ」

少し内容がずれたが、それにも気付けない。だが神聖さを増している空間で、ジュエルシードを封印した『聖石』が起動する。

「……しくじったな。ちゃんと仕舞っとけばよかった」

かなり特殊だが、言い換えれば11個ものジュエルシードが融合した状態だ。この場に満ちた魔力に感化されたのもうなづける。

「封印は……」

不可能だ。なら、賭けるしかない。フェイトは聖石を握り、ただただ願う。

(まさか……封印できないからと、使っつもりか!?)

願う内容は一つ『この場がマークにとって最高の環境になるよう

に『その願いによって空間がゆがむ。

(次元震も一切起こさず、この場が『変わる』のか!? そんなことが……!)

言葉にできない驚愕が、現実のものとなる。そうしてこの場は、正しく『祭壇』となる。そのことで無理な負荷が無くなったのか、異常なほどの空間の圧力がなくなる。

「これは……」

「本来この魔法を扱うべき場所……ってところかしら」

「やっぱり場所って重要だな。一気に楽になった」

やっと言葉を発せるようになったクロノとプレシアが意見を述べ、マークが自然に返す。それができるようになるほど、負荷が減ったのだ。

「結果オーライだな」

「あなたは……まあいい、ここがマークさんの故郷になるのか?」

クロノはマークのいいように呆れつつも、しっかり確認してデバイスに記録する。

「まあ、そうなるかな?……一応、これはあくまで重なってるだけだが」

「ここが、マークの……」

『……………』

そこへ何か声のような気配を感じた。

「な!?!」

「軍隊―」

そこにいたのは、青髪の青年を先頭に置いた軍勢であった。しかも、その青年の持つ剣には尋常じゃない力が感じられる。

「影だよ……どちらかと言えば、俺らの方が、だが」

思わず杖を構えようとしたクロノ達をマークが止める。

「ああ、なるほど……あの時の幻影はこれだったんだな……」

「何を……いや、まさか……」

「ああ、今俺たちは、『過去』とかさなっている」

蘇生を行っているマークは振り返ることができないが、そこに並んでいるだろう顔を思い浮かべるだけで涙が出そうになる。

「過去……じゃあ、あそこにいるのって」

「……ひょっとして、マーク？」

そう、その軍の中にはマークと瓜二つの存在がいたのだ。ただし、軍にいるにもかかわらず一切の武器も、防具すらつけず、民族衣装のような衣類しかまもっていなかったが……

『……』

『……!?!?』

「答える必要はない……まあ、答えようもないんだが」

確かに、彼らは何かしら訴えかけているようだが、その声が聞こえない。おそらく向こうも同じなのだろう。だが、何をしているのかはわかったようで、邪魔をしてもらうこともなかった。

そして、ついにマークの蘇生魔法が終わる。マークは蘇生の成功を

確信し、かつての戦友たちに視線を向ける。だが、その結果は、かつての彼が知るままであった。マークが魔法を完成させた直後、振り返る直前、役目を終えたジュエルシードが世界を再びゆがめる。マークの瞳に映ったのは、もはや廃墟のような状況のプレシアの城であった。

「……………わかっていたことだ」

かつてあの場にいたマークは、術者の顔を見ることがなかった。なら、その逆もしかりである。心が痛む、魂がきしみ、精神に亀裂が走る。

「マーク!？」

「マークさん!？」

そして、マークの意識は闇にのまれた。

次にマークが目覚めたのは、見覚えのある気がする無機質な部屋であった。

「……………アースラか？」

自分がいる場所を認識し、そもそもなぜこうなったのかを思い返す。

(そうか……………蘇生の後に倒れたのか)

なぜ倒れたのか、そんなことはわかりきっている。精神の限界を超える負荷がかかったのだ。

「……………『オーム』を使うという事がどういふことなのか、わかっ

も、耐えきれなかったのか？」

思わず自嘲するが、『オーム』は今までマークを支えてきた存在なのだから、これも必然と言える結果ともいえる。思わず涙が流れるが、マークはそれをぬぐう気にすらなれなかった。

「……一応ノックはしたのだけど、出直しましょうか？」

「……いえ、かまわない」

声をかけたのはリンディだ。おそらく、監視があったのだろう。目覚めたのを確認して脇目も振らずにやってきたのだろう、少し息が上がっていた。

「とりあえず……意識を失ったのは、魔力の過剰消費が原因だと思われるわ。まあ、あれほどの奇跡を起こしたのですから、その程度の代償なら安いもの、と言ったところかしら？」

「……そうか、ちゃんと成功したか」

「ええ、アリシアさんは今プレシア女史と共に精密検査を受けているわ」

成功の確信はあったのだが、こうして人から結果を聞くと安心する。精密検査と言っても、蘇生の魔法のデータを取るという側面もあるだろう。だが、蘇生に成功しても、何の悪影響もないとは限らないのだ。そういった意味では、必要不可欠な作業だろう。

「それで……あなたの使った杖なのだけど」

「わかっているさ。壊れたんだろ？」

リンディは静かにうなずき、その画像を出す。何とか杖の形を保っているが、その全体には微細なひびが入っているのが見て取れる。

「欠片もできうる限り回収してあるわ。ただ、破損がひどいから、ここに持つてくる」とはできなかったけど……」

「そうでしょうね……あれは、ロストログアとして管理局に提出しよう。研究資料としての価値は計り知れないはずだ」

「……」「うちの考えることなどお見通しってわけね？」

「まあ、いつの時代も人の求める物なんて、そう変わらないものだよ」

マークは、死者蘇生の持つ価値を誰よりも把握しているといっていだらう。彼自身が、その魔法の存在に支えられて生きてきたのだから。

「そうね、私だって思うところが無いわけでもないくらいなんだから……」

「まあ、その代わりにフェイト達の減刑を求めるかな」

「それぐらいは許容範囲よ。上の方の人たちからすれば、『どんなことをしてでも術式を手に入れる』なんて言う人が現れたって不思議じゃないでしょうからね」

マークも苦笑しながらその光景を思い浮かべる。実にありえそうなことだ。

「まあ、もう俺に死者蘇生はできないかな」

「……クロノから聞いたわ。『自分も死者の蘇生を夢想した』だったかしら？ ……どうして彼女を蘇生したの？」

蘇生の術を持ちながら今まで使わずにいた、そして1回限りの蘇生を赤の他人のために使うなどその真意はなんなのかと。だが、マークの答えはリンディの想像とは全く違うものであった。

「……誰か1人を選べなかった。これからもそれは変わらなかっただろ」

「それならばいい事……という事？ そんなの……」

歪んでいるといえるだろう。自分の最も欲したものを持ちながら、それを使うことができず、死蔵することができなかった。

「使うことはできたが、使えなかった……だからずっと、思い続けることができたんだ」

もし、彼と、彼女と再び言葉を交わせたなら、と。そんな夢をいつでも実現できる蘇生魔法の存在そのものが、マークを支えていた。

「……これから管理局は、蘇生技術の再現を目指すことになります。そのプロジェクトに、参加してもらえませんか？」

「やめとく……もう、諦めたから『オーム』を使ったんだ。もう、蘇生関係にはかかわらないよ」

マークの気力そのものがかなり落ち込んでいることを感じたリンディは、しばらくそっとしておくことにする。細かいことを後日話し合うことにし、リンディは退室した。

「ままならないわねえ……」

マークは気付かなかったようだが、プレシアも精密検査を受けていた。その結果は、最悪。テストロッサ家の面々にはまだ伝えられてはいないが、余命はよくて3か月と言ったところか。

「アリシアさんは問題なしっていうのが、せめてもの救いかしら？」

後日話し合う事ではあるが、ある程度プレシア減刑の『シナリオ』を考えておく必要もあるだろう。ほかに、マークの持つ『質量兵器』について、『非殺傷設定』についても考えなければならぬ。



「死者蘇生のデータもまとめないといけないし……彼の持っていた結晶のこともあったわね」

あの11個のジュエルシードを内包した結晶は、現在仮称として『ジュエルオーブ』と名づけられた。あれの所有権についても話し合わなければならぬ。

「現在判明した彼のデータも……はあ、しばらくまとめに休めないわね……」

リンディの悲嘆にくれた言葉に返すものはなかった。

## 第15話 「相方」

「……………」

リンディが出て行ってから、マークは動こうとはしなかった。フェイト達のことにも気になるが、どうにも動く気がしない。

「……………」いつまでもこうしているわけにはいかないんだけどな

それでも、体は動いてくれなかった。それどころか、少し考えれば、アリシアを蘇生したこと自体間違いだっただかもしれない、などという思考にのまれそうになる。

(だからこそ、あの場で蘇生を強行したわけだが……………)

マークにとって、『オームを持っている』がどれほどの意味を持っていたのか、何度もその想いが巡り続ける。

(この思いがどうにかなくなってしまふ前に、どうにかしないと……………)

このままではいけないと、理屈はわかるがどうしても体が動かない。こんなことを何度か繰り返したところに、再び来訪者が現れた。

「マーク……………その、寝込んでるって聞いたから

「……………寝込んでいるっていうか……………その通りだな。起き上がれないんだ」

部屋の前にクロノがいたが、部屋に入ってくることなく扉を閉める。フェイト一人では艦内を歩けないだろうから、彼が許可を出したのだろう。

「大丈夫？ …… って変だよ、大丈夫じゃないから起き上がれないのに」

「……そうだな、俺もここまでダメになるとは思わなかった」

「ううん、ダメじゃないよ。マークのおかげで、私はまた母さんと話をする事ができたし、アリシアとも会う事ができたんだから」

そっいいながら笑うフェイトを見たら、ほんの少しだけ、救われた気がした。少なくとも間違いじゃなかったと思う事ができた。

「まだ、ちゃんとお礼を言ってなかったから……その、ありがとう」  
「……どういたしまして」

そのやり取りの後、何がおかしかったのか2人して少し笑う。ゆっくり話すつもりなのか、フェイトは備え付けの椅子に座り、どこか懐かしげな顔で話し始めた。

「なんだか、変な感じだね。正直に言ってね……マークを最初に見つけたとき『厄介ごとが増えた』程度にしか思ってたのに」

「俺は逆に何も感じてなかったんだけど……完全に流されるままだった」

2人で、今日にいたるまでの思いを語りだす。まだひと月もたっていないのに、はるか昔の出来事にも思える。

「その割には、かなり強引に手伝わって言ってきたような気がするけど」

「情性だったと思うな。今まで新天地に行ったときには、一番最初にあった人と行動してたから……どこかでその続きを求めたんだと思う」

「そっか、あれはマークが今まで積み重ねてきたものなんだ……」

マークは情性と表現したが、フェイトはそれを『マークの歴史』だと解釈した。それがなんとも気恥ずかしく、マークは話を進めていく。

「割とすぐにこの世界での初陣があつて……帰るのが遅くなって結構心配させちゃったな」

「出会つてほとんど時間がたつてなかったのに、ね。ふふ、今思うと拾ったばかりの子犬が帰つてこないのを心配していたような感じだった気がする」

「わゝまさかのペット宣言……俺、飼われてる？」

「どちらかと言えば、私たちが方が餌付けされちゃったけどね」

実際、そこまでの回数料理したわけではない。日中探索しながら手軽に食べられるものを買ったことの方が多いし、朝は市販のパンを食べて済ますことも多かった。

「そして管理局が介入してきて……」

「別々に行動することになっちゃったね……もう一緒に戦う事なんて、無いと思つた」

「だから自分たちの情報を渡して、管理局に保護してもらえとか言つたのか」

結局マークは情報を渡すことなく、第三勢力の真似事のようなことをすることになった。

「でも結局、海での戦いでは私たちの手伝いをしてくれたし……」

「結構足手まといになつたこと、今でも気にしてるんだ……あんまり触れないでくれよっ」

「それでも、ちゃんと1個はあの子の来る前に回収できたよ？」

「1個はな……そのあと水上オートバイも砕かれて……あゝ、そのこ

とも謝らないと」

思い返しているうちに、借り物を壊してしまったことに思い至ったマークは、忍に預けた宝玉でどうにかならないかと考える。だが、この世界の相場を知らない以上、そんな心配は徒労以外の何物でもなかった。

「まあ、いい……それからは完全に独自行動とかできなくなったからな」

「うん……さすがにあの後の勝負の時に、アルフと一緒にいたのには驚いたけど……」

「そういえば、そのことは……？」

「もう話したよ。最終的に、みんながそれぞれ動いたから、こんな形で落ち着いたんだし……なんて言えばいいのかよくわからなかったけど、それでもちゃんと話した」

アルフと話をしているのなら、プレシアたちとも話を済ませているのだろう。特に暗い雰囲気は感じないので、問題なく話し合いが済んだのだとマークは予想した。

「……そして、わたしは自分の生まれを知った」

突入の前のやり取りのことだ。プレシアと和解したのなら、そこまですべて忌避する話題ではないのだろうが、それでもフェイトからはある種の決意が見て取れた。

「人造魔導師……クローン……わたし自身は、わたしは『フェイト・テスタロッサ』だって自信を持って言える。でも、ほかの人がどう思うのかまではわからないから……」

「……」

マークは、ここにきてようやく体に力を込める。まだ心は痛むし、魂が軋む。それでも、この話は横になったまま聞いていい話じゃないし、答えていいものではない。ゆっくりと体を起こして、フェイトの正面に座りなおし、続きを促す。

「マークは……造られた存在を、どう思う？　まだ、わたしのことを『相方』だって言ってくれる？　……」わたしはマークの相方だ』って名乗っても許してくれる？」

マークは言いたいことが全部出てくるのを待ち、ゆっくりとその内容を吟味する。この時間は、フェイトにとってとても長く感じられるだろうが、それでも、勢いや同情で答えたなんて誤解を寸分も与えられなかったからだ。

「……正直に言つとな、人造魔導師とかクローンとか言われても、よくわからないんだ」

そういわれて、フェイトはマークがそもそも『次元漂流者』であったことを思い出す。

「俺が知っている人造生命体は『モルフ』だけだが、フェイトはそれとは違うからな。だから、質問の内容を正確に理解できているとは言い難いが……それでもこれだけは言える。フェイトはフェイトだ」

その返事は、フェイトの出した答えと同じだ。

「たとえばフェイトの正体が女神だろうと魔王だろうと、俺はフェイトの相方だと名乗り続けるよ。だから、フェイトも俺の相方だって名乗ってくれるとうれしいよ」

「マーク……ありがとう」

そうでないとかかなり情けない片思いになってしまっからな、などと付け足し笑う。

「ああ、そうだな……」

「？」

マークは、ここにきて自分の行動を理解した。

(なんだかんだで、自暴自棄になっていたのかもな)

一番顕著だったのは、やはり『オーム』の使用だろう。どんな理由であろうと、自身を支える存在を使い切ってしまうというのは、やはり異常な事なのだ。だが、もうこんなことはないだろう。マークはこの地で再び自分以外の大切なものを、『相方』すなわち『仲間』を手にしたのだから。

「いやな、フェイトの出生の秘密を知ったんだから、俺も少し話しくべきかなって」

「マークの秘密……？」

それは信頼を表すものだ。ただし、表面的なものはもうほかに話した人がいるので、その内容に触れることになる。

「えと……いいの？」

『自分に話しているのか』ではなく、『ここで話しているのか』という疑問。だが、マークは、世界を股にかける組織がその気になって調べれば割とすぐ調べがつくのではと思っていたので、マーク自身がフェイトに伝えるという事を優先した。

「ああ……俺は実は人間じゃなくてだな、マムクートという種族なん

だ

「mamkurot?」

フェイトにとってもやはり聞き覚えのない種族だったようで、軽く首をかしげる。それに対して、マークは言葉を探し、フェイトに伝える。

「別の言葉では……多少異訳となるけど、『竜人族』なんて呼ばれ方もしたな。まあ、俺はあくまでハーフなんだが……」

「……竜、人？」

フェイトはまじまじとマークを見るが、やはりどこにも『竜』の部分を見つけれなかった。ちなみに、フェイトが『竜人』と聞いて思い浮かべたイメージは『リザードマン』である。

「燃費悪いから、普段は完全に仕舞い込んでるよ。その分強力だから、はつきり言っただけ使いたいところがないけどな」

「……」

フェイトは『フォルブレイズ』を見ている。それを使用しているにもかかわらず、『強力過ぎて使えない』とは、いったいどれほどの力なのだろうか、もはや言葉もなかった。

だがマークから言わせてみれば、mamkurotは種の生存競争に敗れた存在だ。本来完全な竜であった存在が、様々な理由により人の姿を取らなければならなくなったものが『mamkurot』なのだ。

「まあ、俺らはもう滅びの中にいる。俺が知る限り、純血種は両手の指で足りる程度の数しかない」

その竜たちも、今は生きていないだろうが、それを伝えることはなかった。



「どうした、怖くなったか？」

だが、マークが自身のことをどう思っているかが、個体としてみれば人とは比べられないほど強力な存在であることには変わらない。答はわかっているが、いや、わかっているからこそ聞きたかった。

「うっん……マークがどんな力を持っていたって、無暗にそれを振るわない人だつて知ってるから。だから怖くなんかないよ」

「それはよかった……だが、これはやはり『相方』の話の前にやっておくべきだったな。こうやって何度も聞くのは、なんというか……美しくないな」

あくまで話の終わらせ方の問題だがな、と付け足す。確かに、すでに結論の出た問題を蒸し返しているようにも聞こえるかもしれない。それでも、マークの秘密が聞けて良かったと、フェイトは笑顔で答えた。

「あ……これ、実は聞いてました〜なんて言いづらいね〜」

「……言つな、エイミィ」

別に特別聞きたかったわけではないが、犯罪者である2人を何の監視もなく放っておくわけにもいかないのもモニターを通して見る必要があったのだ。

「だが、何も言わないわけにもいくまい……彼はそれだけの価値を持っているのだから」

「……なんか言い方が悪役っぽいよ？」

「仕方無いだろ？ 『死者蘇生』はそれだけ重いつてことなんだから……」

下手をしたら、管理局のあり方すら変えかねない技術だ。マークが、アースラとの連絡がつかないことを『好都合』といった意味が、今ならわかる。

「僕たちの持っていたデバイスにも最低限の情報は残っているけど、再現するには圧倒的に足りない。まともな研究をしようと思ったら、最低でも100倍の情報が必要だろう」

「アースラで解析したら、それぐらいは解析できたんだろうけど……」

それでも数百年単位で研究しなければならぬだろうと思う。否、その程度では足りないかもしれないぐらいだ。

「不毛な研究になるだろうな……まあ、それだけ魅力的な魔法であるのも事実だがな」

「そんな未来のことより、今は整理しないといけない資料が多すぎてつらいよ……危険な会話もしてないみたいだし、仕事に戻ってもいいよね？」

「……まあ、この調子だったら大丈夫だろう」

一番話したいことはもう終わったためか、今後について軽く話している2人を見て判断する。主にフェイトがプレシアたちとどんなことをしたいかというのを話しているのだ。

エイミィもそれを確認して資料の整理に移る。クロノも、自分がまとめなければならぬことについて思考を向ける。

『現状把握できている対象人物の危険度および思想背景について』

要は、マークについてわかることは手あたりしだい報告しろという事だ。敵対する可能性はあるか、したとして制圧は可能か、所持戦力は、基本理念、思想、過去、現在、人間関係……そのすべてを調べな

ければならない。それも早急にだ。

「仕方がない……やるか」

とりあえずわかっていることをすべて記し、秘匿すべきことを艦長と話し合わなければと思うクロノであった。

『マークに対する考察 製作 クロノ・ハラオウン』

個体名 マーク（名字は不明、ナーガー族と外部で名乗るのを確認）

年齢 外見年齢は20歳弱（実年齢は不明、本人も正確に数えていないとのこと）

種族 マムクート（詳細不明、竜人族ともいうことを確認）

性別 男

出身世界 仮称 第1観測外世界テリウス

所持スキル 魔力変換資質・炎

空間系魔法（複数の武装の出し入れからの予測）

使用武装 『ファイアー』（魔道書、本人の協力のもと簡易調査を実施、別紙参照）

『エルファイアー』（魔道書、上記の上位互換と推測）

『ギガファイアー』（魔道書、全損を確認）

『フォルブレイズ』（魔道書、現在使用を確認された最

上位魔法）

『???』（魔道書、存在を確認したのみで未使用）

『剣』（銀製、質量兵器、現在管理局にて預かり）  
『封印の剣』（詳細不明、協力者の証言のもと所持を確  
認）

『ハンマー』（鋼鉄製、質量兵器）  
『槍』（鉄製、質量兵器）

『杖』（木製、治療系魔法を使用の際展開）  
『オーム』（杖、本人により管理局へ提出される、別紙参  
照）

『ジュエルオーブ』（宝玉、封印系ロストロギアと認定、  
現在管理局にて預かり）

『鎧』（材質解析不可、ロストロギアクラスと予測）

#### 本人に対する考察

観測外世界の出身という事もあり、『非殺傷設定』等の使用は確認で  
きず。本人の供述により、過去、出身世界の軍に所属を確認。膂力の  
突出以外はバランスのとれたスペックで、出身世界では高位の使い手  
であったと証言している。また、交渉事にも慣れている様子であるた  
め、将校クラスの地位にあったと予測する。

同件の容疑者『フェイト・テストロツサ』のパートナーであると自  
称している。出会ってひと月もないことから、情が深いことが予測さ  
れる。

上記のことから、誠実に接していれば敵対する可能性は少なく、有  
意義な情報・技術の提供も見込まれる。

以上をもって、マークの報告のまとめとする。

## 第16話 「旅立ち」

「とりあえず元気になったようで何よりだわ」

「そうね、あのままだったらすすがに後味が悪すぎるわ」

「心配させて悪かったな……何とか一応立ち直ったから、安心してくれ」

フェイトとの話の後何とか立ち直ったマークは、今後のことを話し合うためにリンディとプレシアのもとを訪れていた。だが、その前に話をしなければならぬ子がいた。

「おにいさんが、ねてたわたしをおこしてくれた人なの？」

「そうだよ……って言っても、最後のおいしいとこだけ持って行ったようなものだよ」

一番頑張っていたのはプレシアだ、とマークが付け足すのを、リンディが苦い顔で見ている。ちなみに、アリシアにはさすがに死者蘇生のこととは言っていない。いずれ知ることではあるが、今はまだ早いという判断だ。

「うん……でも、おこしてくれたのはおにいさんだから、ありがとうね」

「ごういたしまして」

直前にフェイトと話をしていたよかったと思う。それ以前の精神状態なら、こんな当たり前の対応すらできなかったことはまず間違いない。

「ああ、元気そうで安心したよ」

「検査でも問題は全く出てこなかったわ……まったく、規格外の魔法

ね

そんなあきれられる様なリンディの声に、マークは少し影を感じた。プレシアも気付いたようだが、どこか自嘲のようなものも含まれていた。

「……何かあったのか？」

「……」

「かまわないわ、すぐに……そう、すぐにわかることよ」

ためらうリンディに、プレシアはこともなげに言う。「これだけで、プレシアについて何か良くないことだとわかる。」

「……プレシア女史の病状ですが、治療に専念したとして、3か月持つかどうかという状態で……現在管理局の把握する技術では手の施しようがありません」

リンディの言葉に、その場が凍る。唯一変わらないのは、プレシアだけだ。自分の体のことだ、余命いくばくもないこともおそろくわかっていただろう。

「う、う、う……お母さん？」

「……」

2人の娘の様子に、プレシアはつなずく。そのことに顔を青くするが、フェイトがある事実を思い出し、さすがのようにつなずく。

「マーク……マークの魔法なら何とかならないの?! あんな魔法も使えるんだから、病気ぐらい……」

だが、マークはその言葉につなずくことができなかつた。なぜな

ら、マークの魔法の本来の用途はたった一つなのだから。

「……俺の使う魔法は、すべて戦場の魔法だ。回復魔法も、怪我の治療と体力の回復に特化している……病気には、手も足も出ない」

「そんな……」

「それ以上は駄目よ、フェイト」

そこでプレシアが止めに入る。

「本来なら……彼が居なければ私はここに居なかったのだから、彼を責めるのはお門違いよ」

「……「めんなさい」」

「いや……気持ちわかるから」

プレシアからしてみれば、マークが止めなければプレシアは間違いなく虚数空間に落ちていたのだ。それに比べれば、いくら短くても一緒に過ごす時間があるだけ奇跡のよつなものだ。

「それと……私は治療に専念するつもりはないわ」

「え……？」

「母さん……」

プレシアの宣言に、やはり周りは驚愕する。それは、ただでさえ短い時間をさらに少なくする行為なのだ。だが、それを理解するものもいた。

「寝て過ごすような時間はないってことか？」

「……確かに、治療を優先すればやれることは大きく制限されるでしょうね」

ただでさえジュエルシードの件で時間を取られるのだ。マークの

言うとおりに、寝て過ごすなんて無駄な時間は1秒だってない。リンディの言うように、体のことを気にしてやるべきことをやらないなんてありえない。

「……裁判関係は、できるだけこちらで時間の短縮を試みます。マーク君も協力してくださいね?」

「それはかまわないが……いいのか? そんな肩入れするような事して」

「確かに、管理局員としてはあまりほめられた行為ではないでしょうが……そこまで非情にはなれませんか?」

リンディは2人の子供を見て言う。確かにこの2人から、さらに時間を奪おうとは思えない。

「……いつそ俺を主犯にして事件を公表するか?」

「それは……確かにプレシア女史の裁判時間は大幅に少なくなるでしょうが……」

「あなたにこれ以上……」

「いや、その前にプレシアの行為の何が問題なのか教えてくれ。管理局の法律はわからん」

「……わかりました。時間が惜しいので本局に移動しながら説明しましょう」

マークの極端な提案に言葉を詰まらせるリンディだったが、幸いにもマークからその提案は流された。そこで話が終わろうとした時、フエイトがある要望を述べた。

「あ、あの! 本局に行くんですけど、その前にあの子と会えませんか?」

「……ああ、俺もシノブ達に会っとかないといけないな。少しだけ時間をくれ」



「ええ、どうせ本局への移動は申請を行ってからでなければできませんから……すぐに用意するわ」

「じつしてこの世界での、最後の時が近づいてきた。」

「まあ、そんな感じだな。急な訪問になったことは謝る」

「……はあ、まあいいわ。なのはちゃんから捕まったって聞いてたけど……それにしても自由にやっているのね」

「まあな」

早朝と呼べる時間にもかかわらず、連絡すらせずにやってきたマークだったが、月村邸についた時には若き当主が準備万端で待ち構えていた。なのは経由で連絡がいていたのかもしれない。マークの扱いについては、一応監視こそはあるが、それでもこの月村邸に一人で来れるあたり、マークがどんな扱いを受けているか想像できる。

「といっても、そこまで言うておくこととかないんだが……せいぜい水上オートバイ壊してごめん、ってことぐらいか？」

「……ああ、別にかまわないわ。十分以上に元は取れてるから」

「じつじつとだ？」

マークが首をかしげるが、それに対して忍は自慢げに胸を張る。

「ふっふっふ、あなたから預かってた宝玉の一部がやっと売却できたのよ」

「一部？」

「そうよー。あの後鑑定したらあれルビーだっていうじゃない！ あんなサイズだと買える人がいない額になっちゃうから、何個かに分けて売ることにしたのー！」

それでも世界最大クラスの宝石として売れたんだけど、と付け足

す。

「いろいろ伏せないといけない部分もあったし、何よりあなたが無一文だったからかなり安めに売りに出しちゃったけど……それでもなんと20億よー!」

「……そっか」

「なんでそんなに反応が薄いのよー!」

「いや……その数字にどれだけの価値があるのかよくわからないし」

テンションの上がってた忍が撃沈する。同じ宝石に価値を見出していることから失念していたが、世界の壁というのはここまで厚かったのかと……

「まあ、その金は適当に管理していてくれ。5年たっても俺が戻ってこなかったら、適当に処分してしまっただけ構わないから」

「あーそっか、別の世界に行くんだものね……カットしちゃってあるけど、宝石も返しましょうか?」

「別にいいや。向こうで雑に扱われることはないだろうし、何より似たようなものがまだいくつもあるから」

それに、回収できるものは回収して置くなんてすると、戻る気が無いように見えそうだし、などと続ける。

「そっいえばね……」

「マークさん……」

そこへ、若き当主の妹君がやってきた。あわてて準備して来ただろうに、それを感じさせない万全の格好に、やはり月村は上流階級なのだと認識を新たにする。

「別の世界に行っちゃって……」

「ああ、本当だよ」

「そんな……まだ……」

あまりにも早い別れに動揺する少女に、どこかほほえましい気持ちになるも、予定を変更するわけにもいかないので軽く返す。

「永久の別れというわけじゃないんだ、また会えるぞ」

「……約束、ですよ？」

「ああ、構わんよ」

マークには何がここまで少女を必死にさせるのかわからなかったが、それでもちゃんと約束を交わした。

「ふ〜ん……まあ、それもいいかな？」

それを横で見ていた忍には、確信こそなかったが妹の考えていることがわかった気がした。

(初めて自分たち以外の人から外れた存在にあつて、憧れちゃったかな？ ほとんど話もできなかったから、それでむしろ想像力が増幅されて……典型的なのかな？)

幸か不幸か、マークはこれから世界を渡ることになる。頭が冷えるならそれでよし、思い続けるのなら、それはそれで構わない。

「じゃあ、そろそろ時間だから」

「うん……また……」

「そう……できれば聞きたいことがあったんだけど？」

「却下だ」

そうしてマークは走り去った。魔法を使わなかったので、どこか合

流場所でもきめてあるのかもしれない。

「あゝあ、『マムクート』について、聞き損ねちゃった」

だが、次の機会があると思えば、そう苦にはならなかった。マークは5年以内と言っていたが、かなり余裕を持たせた数字だろうから……遅くても2年はかからないだろう。

「……また会う時が楽しみね」

「うんー」

「ううして、一つの出会いと別れが、いったん幕を下ろすこととなった。

「あんたんとこの子はさ……なのはは、ほんとにいい子だねえ。フェイトが、あんなに笑ってるよ」

マークが公園に戻った時には、2人の少女もしっかり話ができたようだった。アルフがその様子に感動して涙を流している。

「この様子だと、もう話は終わっちゃったようだな」

「マークさんか……思いのほか早かったな」

「ちよっと挨拶に行っただけだしな。フェイト達のこともあるし、裁判とか終わってもしばらくこっちで生活したほうがいいんだろ？」

これはマークの独断だが、あながち間違えとは言えないだろう。話の解釈の仕方によっては、フェイトも死者蘇生の魔法を手伝ったと言えなくもないのだし、アリシアは唯一の成功例だといえる。情報を完全に隠匿できない以上、よからぬことを考える奴がいらないとは限らないのだ。

「なにより、せっかくできた友達だ。たまにしか会えないなんて寂しいだろ?」

「……見事なまでの本音と建前だな。まあ、その主張なら通せるだろうが」

「……必要な話し合いなのはわかるけどさ、もう少し時と場所を選んでももらえないかい?」

「善処しよう」

せっかくの感動的な場面の横でこつこつ現実的な話をされては、何もやるせなく感じる。

「まあそれはそつと、そろそろ時間だ。いくぞ」

「了解」

「わかったよ……」

そつして、フェイトとなのはのもとに近づく。それに気づいた2人は最後に自分の髪留めを外し交換する。

「そこまで感傷的になることはないって。またすぐ会える」

「マークさん……」

「そんな安請け合いを……まあ、確かに時間をかける気はない」

「クロノ君も……ありがとう」

そして、クロノがアースラに連絡を取るすきに、なのはがマークに耳打ちをしてきた。

「(まだ、理由は見つかりませんか?)」

それはなのはとマークが交わした最初の言葉だったか。

「(そつだな……きっとまだ見つかってないんだろつな)」

今回得るものはあったと思うが、かといって具体的にどうすべきかはまだわからない。そんなマークに、なのははアドバイスをする。

「(きつと、その答えはすぐそばにありますよ)」

「(……そうだな、俺が気付かないだけかもしれないな)」

なのはの言いたいことはわかる。だが、マークはそれを肯定することも、否定することもなくただ聞き入れるだけにとどめた。そして、それぞれ別れの挨拶を述べるだけで、実にあっけなく転移が行われた。

「……あれでよかったのか？」

「うん、短い時間に無理に言葉を詰め込む必要はない……またすぐに会えるんだから」

クロノの疑問にそっけなく答えるフェイトだったが、やはり名残惜しいのだろう、なかなか歩き出そうとはしなかった。

「出会って短いかもしれないが……『ういつのも』比翼の友』って言うのかな？」

「比翼の友？ なんだいそれ」

「詳しい意味は聞いたことが無いんだが……確かあいつらは『2人で力を合わせればできないことなんてない！』ってな感じで使ってたと思ったから、無二の親友とかそういう感じかな」

マークの言葉に、フェイトは庭園での共闘を思い出した。確かにあのときは、なんだってできるようなある種の開放感を感じたのだ。

「でも、これからだよ……まだ、お互い知らないことの方が多いんだから、少しずつその名乗れるように、頑張っていくんだと思う」

「……そうかもな」

「なら……いや、そうだな……ある程度落ち着いたら手紙でも書くといい」

新たな誓いを胸にするフェイトに、クロノはそう提案する。現実としてかなり難しい事だろう。どう言いつくってもフェイトの扱いは犯罪者のものなのだから。だが、それでもクロノはそう提案した。

「……ほんとに、親子なんだねえ……」

なんだかんだで甘いこの管理局員達が事件を担当したことに、マークは心のうちで感謝した。

## 第17話 「闇の魔法と言葉の重さ」

マークは、管理局の本局への移動が始まるとすぐリンディのもとに向かい、事前に話していたようにプレシアの行ったことについて話し合いを始めようとしていた。そこで一番に聞かされたのが、この話し合いのタイムリミットだ。

「思ってた以上に時間がかかるんだな」

「次元航行と言われても想像はしにくいでしょうね、それでも1日中にはつくのよっ」

本局に着くまでにかかる時間への印象は、異界の門を越えたことがあるから「そ」遅い』という感想だったのだが、お互いに通じなかったようだ。リンディは『遠い』とマークが言っていると思ったのだ。

(それとも、これが普通で『門』の方が特殊なのか?)

つながる世界の理が同じであれば、ほぼ一瞬で世界を渡ることのできた『異界の門』。ひよっとしたら、今この船がいるのは門の中でも浅いところなのかもしれないとマークは思索を打ち切る。

「そうか……話をまとめるには微妙な時間だな」

「大筋を決めてあとはアドリブかしらね……さっそく本題に入りましょうか」

「ああ、プレシアの行為の何が問題となっているのか」

そう言って、リンディが現在考えられるプレシアの罪状について述べる。

「そうね……大まかに言えば『管理局への攻撃』『禁術の違法研究』」口



ストロギアの不当所持と回収』と言ったところかしら」

「ん……『禁術』っていうのは死者蘇生でいいのか？」

「ええ、生命を扱う魔法であれば、それがどんな形であるかはともかく当然実験でも相応の代償が必要となるわ。だからこそ禁術扱いして、厳正な許可制の下、研究が行われているの」

一応人造魔導師の研究についても禁術に含まれるのだが、今回はそちらに目が行くことはまずないだろう。死者蘇生というのはそれだけのインパクトがあるのだ。もちろん軽視することはできないだろうが、それでも死者蘇生の過程程度にしか扱われないうことは間違いない、といっても過言ではないだろう。

「……研究の内容は理論面に特化していたから、そこまで罪が重くなることはないはずよ。ただ……」

「攻撃についてはこちらではどうしようもないかな……？」

「ええ、攻撃を行ったという事実はどうしようもないわ。できるのは攻撃自体に正当性を持たせることだけど……そうなると管理局の正当性を損ないかねないわ」

プレシアが管理局に対して行った攻撃は正しかったとすれば、どうしても管理局が間違った行為をしていたことになってしまう。

「最後はロストロギアについてだが……これ所持だけでもダメなのか？」

「一応、申請と許可が原則として必須ね。それでも今回の問題はジユエルシードの違法収集だから……」

「何を持って違法な収集となる？」

「……管理局の呼びかけを無視して独自に集めていた、ってとこね」

結局、管理局へ攻撃したことが問題だという事である。

「つまり管理局への攻撃だけが問題なのか？」

「そうなってしまつわね……なんだかそう言われると『管理局に逆らったから悪』って理屈みたいね」

「？ 事実そうだろ」

リンディはマークの物言いにダメージを受けるが、マークからしたらなぜそんなことに傷つくのかわからなかった。

「為政者に逆らつのが悪いことだつて言つのは、どこの世界でも同じだ。為政者がルールを作り、それに民衆がそろつて従うからこそその平和だろ？」

リンディがへこんだのは、『逆らつものは皆殺し』と独裁者が叫ぶ姿を想像してしまつたからであるが、マークにとってはそれこそが自然な姿なのだ。世界の違いより、文明の違いというべきだろう。

「まあ、政治については別にいい。問題はどつちやつて管理局の権威に傷をつけず、プレシアを擁護すべきかだ」

「……そうね、話を脱線させたつてしょうがないわ。無難なのは娘を失つて錯乱状態にあつた、つてどこかしら？」

「つらいことがあつたら何をしても許される、なんて前例を作るわけにはいかないだろ？」

「マーク君……プレシア女史を擁護するのが目的なのよ？」

今の一言を言われてしまつと、大分手段が限られてしまつ。

「感情方面で攻めるのが悪いとは言わないが、それに頼りすぎたら危険だぞ？」

「言つてゐることはわかるけど……」

「……プレシアにも話を聞くか。彼女の言い分に何か適したものがあればいいが……なければ洗脳か、精神汚染を受けていたことにしよ

「う」

「そんな都合のいい……」

そこでリンディはふと思い出す。そういえば、管理局の理解の外にあり、マークが完全に把握している魔道書があの場合に存在したことを。

「そういえば、完全消滅まで確認してなかったな……管理局に行く前に確認したほうがいいか？」

「あなたは……いえ、それを管理局に信じさせることが？」

「信じさせるも何も、あれは闇魔法の魔道書だ。使い手から過去の記憶を喰らい、現在の人格を蝕み、未来の可能性を奪い、力を得る魔法だ」

そのあまりに大きな代償に言葉を失う。だが、あの場にいた男の影はそれだけではなかった。

「……かつて子供たちに、『母を連れて戻る』と約束し、その約束を果たすために死者の蘇生に手を出した男がいた」

それが『エレシユキガル』の記し手とリンディは理解するが。その結果は語るまでもない。未完成に終わったその内容を見ればわかることだ。だが、マークの話はそこで終わらなかった。

「長い年月を研究に費やし、死者の蘇生を可能とするだけの力を求め続けた。だが、あるときついに限界がやってきた」

それは寿命などではなかった。もっと恐ろしく、残酷な結果であった。

「……力を求め、男はすべてを代償とした結果、力を求めた理由すら忘

れてしまった」

すべてを死者蘇生のために捨てたがために、捨てた理由までも失ってしまっ。

「そんな……」

「すべてを失った男は、それでも力を求め続け、その魔手はあらゆる生命にも及んだ。『イーギル』と呼ばれる生命エネルギー、それを集め始めたんだ」

そのまま人を喰らうようになり、大陸に戦乱を呼ぶことで効率的に『イーギル』を集めようとした。故に『災いを招く者』と呼ばれることになる。

「ついにその手は自分の子供にまで及ぶが……最後まであの男はそのことに気付かなかったよ」

それは、なんて救いのない話であろうか……

「そんな奴の残留思念の残った魔道書を持っていたんだ。影響を受けないわけないだろ？」

「確かに……でも、魔道書に込められたプログラムを実体化させる口ストロギアなら確認されているわ。やっぱりそれとの違いを証明しないといけないわ」

「そっか……まあどうなるにせよ、プレシアの話を聞いてからだな」

「うまく説明できれば今のだけで十分よ」

そのような魔道書に影響されたのなら、むしろあの程度の暴走で済んだのが幸運と感じるだろう。

「そうと決まれば、すぐ確認に行きましょうー！」

「城まで送ってくれば、後は一人でやる」

「……お願いするわ」

はつきり言って、アースラから観測されただけでも『エレシユキガール』と『フォルブレイズ』の激突はとんでもないものだった。あの現場にいたクロノは、『個人が詠唱・溜め無しに使う魔法じゃない』と断言するほどだ。正直あのようなことがもう一度起こりかねない場所に、局員を送り込むなんてしたくない。

「こうしてアースラは、進路を庭園へと変更することになった。」

「それなのによくついてくる気になったな……」

「わたしはマークの相方だから。一人でなんて行かせないよ」

本来ならば管理局が後日大々的な調査を行うことになっているため、可能な限り速やかに魔道書の消滅、あるいは残存を確認しなければならぬ。そのためマーク一人での調査となったはずだったが、それにフェイトがついてくることになったのだ。

「万が一にも危険はないって。もしあれが残っていて俺らに危害を加える気なら、もう俺らは死んでいるわけだし……」

「それならわたしがついて行っても問題ないはず」

「……まあ、危険はないわけだが」

微妙に歯切れの悪い返答をするマークを見て、フェイトはあの魔道書の残存を確信する。『エレシユキガル』についてはアースラの全クラーにも伝えられているので、おそらくそこで語られなかった「何か」があるのかもしれない。

「でも、みんなにも話してよかったの？」

「そこはハラオウン艦長の提案だ。少しでもプレシアへの印象が良くなるようにするためだな」

今のところ結果はまだわからないが、魔道書の記し手への同情がそのままプレシアへ向くことも考えられる。魔道書の残留思念との同調があったのは事実なのだから。そのため、プレシアは読めないはずの魔道書の内容を知ることができたのだ。

「違う、マークはよかったの？」

「……」

なぜ話したのか、ではなく、話してよかったのか。

「……」の話を絶対知らせたくないのは、子供たちだ。だから、もう構わんよ。それに、教訓にはなるんじゃないか？ 死者蘇生を求めた者の末路ってやつで」

「そう……」

その言葉に込められたのは『もう隠す必要がない』ではない。『もう隠す相手がいない』というものだ。

「あ〜……こんな場所で話すことじゃなかったな」

ジュエルシードの暴走や傀儡兵との戦闘のせいで、ほんの数日前まで人の住んでいた気配なんてどこかに飛んで行ってしまったかのような廃墟だ。暗い話をすればどこまでだって落ちていける気がしてくる。

「だから、さっさと終わらせて帰ろう……」

「……うん、わかった」

フェイトは頷くしかなかったが、それも当然だろう。なんといつてもまだ10歳、実際この世に生を受けてからの時間はもっと短いの

だ。

だがマークにはそれで十分だった。今までどんな友であつても言う事のなかつた内容なのだ。この事を話すことができ、聞いてくれた人がいる。それがマークにどれほどの救いになっているか……

「……まだわからないだろうがな」

「？」

「いや、なんでもない」

軽く首を振り、マークはこの廃墟を駆け抜ける。フェイトはそれに飛びながら続いた。そして、2人は庭園の最深部へと再び降り立った。

「時間もないし、さっさと終わらせよう……」

『ずいぶんと待たせた割には、勝手な事を言う……』

「!!」

マークの声掛けに以前と同じように答えが来た。件の残留思念は変わらずそこにいたのだ。

「いろいろ立て込んでいてな……まあ、世間話もなんだし本題に入る  
う」

『そうだな……では一言で済ませよう、私を止めてくれたことを感謝する。そして、あなた以外に礼を言うことはかなわないようだし、もはやこの世に残る意味もない……私を滅ばしてくれ』

「礼など筋違いだ。……だが、それでお前の気が済むなら受け入れよう。介錯もしてやる」

「え？ え？」

過程をすべて省いた結論にフェイトは完全においていかれるが、意外なところからフォローが入った。

『そこにいるのとは昔からの友人だった。ともに大切な人を取り戻すための研究を行ったこともある……ほんの瞬きをする程度の時間だったかな』

「友人……？ ……！」

疑問が一気に氷解する。この男とマークが友人だったから、本人すら忘れた目的をマークが知っていたのだ。

「……結局、貴様が狂うのを止められなかったし、貴様の行いを止めることもできなかった。……もし、貴様に言わなければならぬことがあるなら、あの子は『預言者』が蘇生した。幸せな一生だったと聞く」  
『……そうか』

お互いに言いたいことをすべて言い終えたのだろう。わずかな沈黙ののち、マークが大剣を取り出す。

『烈火の剣……デュランダルか』

「不満か？」

『いや、申し分ない選択だ』

そうして、マークの一閃は男を両断する。おかしいことかもしれないが、フェイトが一切口を出せないほど、息のあった動作だったようにも思える。

「……『預言者』は、闇魔法を極めて『真理』に至った者だ。あの男には自我があつたが、『預言者』はそれすらなくしていた」

マークがフェイトの疑問を先取りして答える。それは、今は何も聞かないでほしいというささやかな主張だろう。フェイトは、男の居た場所に現れた『エレシユキガル』を見つめるマークのそばで自身の無



力さをかみしめていた。

そして数分後、思い出したかのように『エレシユキガル』を回収し、ほかの武器と同じようにしまつて帰路に就こうとした。だが、そこへフェイトが声をかける。

「わたしに、できることはないのかな……？ 相方なんて名乗っても、結局何もできなかった……」

「……それじゃ、ちょっと失礼して」

「え？ ヒヤッ！」

落ち込むフェイトにマークは一言声をかけ、フェイトのひざ裏と脇のところにへ腕を入れ抱き上げる。お姫様抱っこというやつだ。

「まままま、マーク！ なにを!？」

「まあまあ、落ち着いて。走るぞ？」

「ひっ!？」

具体的には何も言わず、マークは走り始める。もちろんフェイトへ負担にならないよう細心の注意を払いながら。

「マーク……?？」

「……なんて表現するべきかわからないけどさ、これでもフェイトがいてくれて助かってるんだ」

「え?？」

マークは少しだけ、今まで言葉にしなかったことを後悔する。いくら相方と言つても出会ってまだ日が浅く、10歳に満たない子供だ。今まで戦友として戦ってきた仲間たちは、人の心を読むことを学んできた貴族だったり、剣を交えればすべてわかるなんて言う奴だったりしたので忘れていたが、基本的に人とは言葉によって分かり合う存在なのだ。

「精神的なものだから、もっと言葉にして伝えるべきだったな。……不安にさせてすまなかった」

「……ホントに？ わたしは役に立ってるの？」

「役に立って表現には引かかるところがあるんだが……フェイトの存在には助けられてるよ」

「……そっか、よかった」

そうしてフェイトの体から少し力が抜ける。そこで腕にかかる重さが増したように感じたのは、信頼の重さというものか。マークはその重みを心地よく感じながら、アースラへと駆けて行った。

## 第18話 「準備万端」

「お帰りなさい、結果はどうだったの？」

「なんだ、見てなかったのか？」

「ええ、聞いても本局に報告しにくい事ばかりなんだもの……ならいつそ聞かないことにしたのよ」

「それは組織に所属するものとしてどうなんだ？」

ちゃんと建前も用意してあるのだが、リンディはあえてマークに本音で話した。今までいくつかの会話を聞いていたことや、それについて報告するつもりがないと実質言っているようなものだ。

「魔道書については残存を確認後、回収した。残留思念は消滅させたし、中身を見ない限り、これはただの本と同じだ」

「そう……あとは、マーク君のいていた精神汚染について証明なし、納得させる方法を考えるだけね」

「……まあ、魔道書提出を強制されないのならそれでいいか。だが証明と言っても、俺の証言と実証ぐらいしか手段がないぞ？」

さらに言えば、証言をするのはともかくとして実証は付き合う気が無い。わざわざ廃人を作る手助けをするほど、非情ではない。

「証言だけで十分よ。そのあとは私が何とかするわ……幸い残留思念の映像は残っているし」

「それならいいが……あまり長引くようなら強引に行くぞ？」

もしリンディがうまくやれないのなら、管理局の知らない魔法の一つでも開示すればいい。マークはその程度に考えていた。

「それはそうと、俺の剣と聖石はひょっとして回収済みか？ あそこ

にまだあるかと思っていたんだが見当たらなくなてな」

「ええ、回収しているわ。……そうね、食事しながらでどう？ そろそろいい時間だし、立ち話にするには長くなりそうですから」

「……長く、ね。まあいい、行くっか」

「あの……わたしは母さんたちと……」

マークたちが食堂へ向かおうとすると、フェイトが参加の辞退を申し出た。それに対しリンディが少し考え、提案した。

「そうね、テストロッサ家の皆さんも無関係でないわけだし、みんなで食べましようか？」

「聖石についてもか？」

「マーク君の状況について、よ。ミッドの常識に疎いあなたに、プレシア女史が助言するためでもあるわ」

「そっか、ならいい」

交渉のたびにカードを出し続けていたら、間違いなくマークの方が先にネタ切れになるのだ。なら助言を受け、カードを出し惜しみするのは正しい戦略だ。そして食事をしにプレシアたちがすすす部屋へ向かうことになった。

「まあ、話は分かったわ」

「ならいいだろ？ どうせ管理局に着くまでに話を合わせないといけないんだし」

「……そのとおりね、でもさすがに人数が多すぎない？」

「……まあ、いいじゃないか。アリシアも喜んでるみたいだし」

この場が集まったのは、マークと部屋の住人であるプレシア、アリシア、そしてフェイトにアルフ。管理局側としてリンディ、クロノそれにエイミィだ。4人部屋であるためそれなりの広さはあるが、やはりこの人数はつらいところがあるのだが……その窮屈さがアリシア

は気に入ったようだ。

「寂しい思いをさせてしまっていたのよ……だから、その反動かしらね」

「理由はなんであれ、一人でいるよりずっといい」

「2人でなにはなしてるの？」

「一足先に今後の話をね」

「ふーん……あ、おかあさんこれおいしいよー」

「そう？　なら私もいただこうかしら」

そしてプレシアも話を切り上げ、中央にある食事へと手を伸ばす。マークも一人でいてもしょうがないので、おとなしくそれに続いた。そこではばらく適当な雑談をしながら食事をしてが、クロノがついに本題を切り出した。

「それで、あなたの剣と石のことなんだが……」

「返すわけにはいかない、なんて言わないよな？」

「ああ、剣についてはすぐにでも返却する。問題は石の方なんだ」

「聖石に……？　ああ、ジュエルシードの封印か」

マークはクロノの言いたいことを察した。現在の聖石はジュエルシードの総数21個のうち、半数以上をそのうちに収めているのだ。そのまま返却というわけにもいかないだろう。

「大まかに言えば間違っていないんだが、おそらく認識の齟齬があるぞ？」

「齟齬？」

「ああ、あの石の内部を分析したんだが……ジュエルシードが一つにしか見えないんだ」

「それは……まさか、融合したとでも言っの？」

「そのまさかよ」

その会話にプレシアとリンディも加わる。

「……それで、何が問題なんだ？ ジュエルシートっていうのはもともと複数個同時使用が前提だったんだろ？ それがくつついたからって……」

「最大出力と増幅力が極端に跳ね上がっているんだ」

「あくまで計算上のことだけど……融合してしまったジュエルシート、『ジュエルオーブ』をほかのジュエルシートと一緒に使用した際発生するエネルギーは、今までの想定の実に300倍になるの」「300倍……」

その数字にプレシアは驚愕するが、マークにはいまいちピンとこない。もともと使い方を間違えれば世界を滅ぼす一品なのだ。最大出力がいくら上がっても、世界を滅ぼす可能性があることは変わらないので、何も変わらないと考えるのだ。

「いくら強力になったって、危険度はもともと上限いっぱいだったんだろ？ なんだか今更じゃないか？」

「それはそうんだけど……そういつわけにはいかないのよ」

リンディはマークの問いかけに苦笑して答える。だが問題はジュエルシートに収まるものでもないのだ。

「マーク君の言う聖石に複数個、同質のエネルギー源を封印すると融合の恐れがある。ここが問題になっているのよ」

「ああ、なるほど」

これは確かに一大事である。もともと国一つ滅ぼすレベルのものでも、聖石と合わせれば世界一つ滅ぼせるものになる。そんな認識が広がってしまえば、取り返しつかないことになるかもしれない。

「……あれって実は封印系のアイテムなんだけどなあ」

「封印が済んだ状態でも使えちゃったよ？」

「……やっぱり一度砕けたものを再利用ってわけにはいかないか……」

「一度、砕けた……？」

その問いかけにマークは、あくまで推論となるが、と前置きをして答える。

「オリジナルも、封印した力がたまらないように少しずつ外にあふれさせていたから、その隙間から干渉してしまうのはもともとありえたんだ。今回は例の魔法のせいで周囲の魔力量が異常だったし、さっきも言ったように一度砕けたことで隙間も広がっていたんだらう」

今後は封印具としては使えないな、とまとめる。

「聖石というのは、俺の居た世界にいた『魔王』と呼ばれる存在の魂を封印するためのものだ。そして2度目の戦いの中で最後の一つを除き、聖石は破壊されてしまった。何とか『魔王』は再封印したが、もし次があった時のため、聖石のかけらをより集めたレプリカと、一から作ったコピーを用意したんだ。

「コピーは再現率が低すぎて使い物にならなかったことも付け足しておこう。そして今回使ったのはレプリカの方というわけだ」

「……あなたの居た世界ではとんでもなく重要なものなのか」

そうなってくると、危険だからと言って管理局で回収するわけにはいかないだろう。マークの居た世界の神器であり、あくまで魂の封印までしかできていない『魔王』の存在もあるからだ。

「いやオリジナルもあるし、魔王の肉体は完全消滅させたから、そこま

で重要なものではない」

「そ、そうなのか……？」

「あくまで『対魔王戦』ではな。強力な封印具であることは変わらないし……」

「今回のことで増幅関係もできることが証明されてしまったし、ってとこかしら」

「そういう事だ。まあ、ジュエルシード、いやあの中にあるジュエルオーブは分離して提出する。今回はそれでもまんしる」

そう言って話を切るマークに、今回の件はこれ以上話し合う気が無いことが見て取れた。

「はあ……わかった、後で剣もオーブも届けるから分離を頼むよ」

「了解」

「それはそうと、今日は管理局についてからのことを話し合っくんじゃなかったの？」

話が落ち着いたのを見計らって、プレシアは自分たちの今後がどうなるか決まる話し合いの進捗状況を尋ねた。

「ああ、『エレシユキガル』に汚染されていたで押し通すらしい」

「思いのほか危険度の高い魔道書でしたし……ここで使わない手はないでしょう？」

「そう……じゃあ、聞かせてもらえるかしら？ あの魔道書はなぜあんなことをしたのかしら？」

「……」

それはマークが語らなかったことの一つだ。あの残留思念はただ力を求める存在ではなかった。そうでなかったから今ここにプレシアは存在できるのだ。



「私には聞く義務があるわ……あれが何かを伝えようと、残そうとしていたように思えるのよ」

「……なんてことはない。ただあの魔道書は、男の半生がしみ込んでいただけだ。……子供たちを守りたかったんだろ」

かつては、守るところか自分で傷つけてしまった。だから、自分と同じ道をたどる女を救いたかったのだろう。

「もし、あいつから何かを引き継ぎたいのなら、自分のやりたいことをやれ。それだけで十分だ」

「……わかったわ」

何も特別なことはない。あの男は家族で幸せに暮らすことを望んでいたのだから。マークはやはり詳しくは語らない。あるいはこれで十分だと思っているのだろう。

「だがまあ、やることはこれで終わりになるのかな？」

「大変なのは管理局に到着してからだからな。準備としては上々だろう」

マークは今までにやったことを指折り数えていく。まずはプレシアの裁判関係。

「これはほとんどリンディ任せだが、今やれることはないか……」

「そうね……精神汚染なんて言い訳があれば、そこまで長引かせず終わらせることは可能だわ」

次はフェイトとアリシアについてか。

「フェイトはほぼプレシアと同じ扱いで、アリシアはしばらく検査が続くことになるか」

「アリシアについては同意するが、フェイトについてはそこまで悪い立場にはならないはずだ」

「主犯がプレシア女史という事になるから、フェイトちゃんは立場上従わざるを得なかった、って解釈することになるわ」

「わたしは……」

フェイトが口を挟もうとしたが、プレシアに止められる。プレシアはもともと、できる限り罪を自身に集めて死ぬつもりであったのだから。

「わたしはべつにどこもわるくないよ？」

「でも長いこと眠っていたのは事実だからね。今は大丈夫でも、今後調子が悪くなるかもしれないところを、あらかじめ探しておかないといけないんだ」

「そうなんだー」

確かにアースラでは悪いところを見つけられなかったが、もっと設備が整ったところで調べればどんな結果になるかまだ分からない。最後は死者蘇生……と、そこでマークは疑問を持つ。

「なあ、俺の扱ってどうなるんだ？」

『次元漂流者』プレシアの件とは切り離して、ただそう扱うことになっている……あなたの使う魔法を何としても再現したいのだから。大抵のわがままなら通ると思っぞ」

「つまり最上のもてなしをして知識・技術を搾り取るって……司法取引をしようとは思わなかったのか？」

「下手に追い詰めて自暴自棄になられるのを恐れているんじゃないか？ 出身世界が見つかったらそうなっていたらどうな」

「このまま帰れないかもしれない、そんな負の意識から、暴走されたらたまらないという事だろう。できるだけ追い詰めないように、自主

的に情報を出させようというのだろう。

「なるほど……じゃあ、そこからへんも使わせてもらおう」

「あまりやりすぎないでくれよ？」

管理局に所属するクロノとしては、マークがどんな要求をするのかわからない。不安なのだろう。マークとしても、よっぽどのが無い限り無茶な要求をするつもりはない。

こうして、準備が整ったことを確認したマークは、ゆっくりと新たな戦場への到着を待つ。

## 第19話 「………決戦？」

「まずはたんけんをしようと思うの」

「探検か………どこを探検するつもりなんだ？」

管理局に着いて、マークとアリシアは客人として扱われることになった。ちなみにリンディ達は局員として今回の件の詳細を報告に、フェイト達は犯罪者として取り調べを受けることになっている。

「どうして………このへやだよっ」

「なるほど………付き合おう。まずはどこから行くっか？」

「うん………あそこっ」

マークは正直、アリシアが家族と一時的にでも離れることで落ち込むかと思っていたが、そんなことはなかった。むしろプレシアの方が落ち込んでいたくらいだ。

「ここは………」

「だついじょだね！ タオルとハブラシはっけん！」

本当ならアリシアの検査も同時にやることも検討されていたらしいが、マークをできるだけテストロツサ家の誰かと一緒に居させるために中止された。管理局内であり自由に振る舞ってほしくないが故の配慮だったのだが、管理局内で特に行動を起こす気のなかったマークには意味のない配慮であるのだが。

「奥は風呂かなっ？」

「うん、お風呂みたいだね」

だがマークにとっては正直拍子抜けだった。すぐにもプレシア

の裁判が行われると思っていたのだ。もっと忙しくなると思っていたのだ。それがふたを開けてみればアリシアと泊まる部屋の探検をすることになって、いささか空回り気味のマークであった。

「まあ、これはこれでいいんだけど……」

「うん……とくにかわったものは見つからなかったね？」

「そうだね……それじゃあ別の場所も探検してみようか？」

「ええと、やめとく」

「ここに来てアリシアはすぐに探検を始めたので、てっきり好奇心旺盛な子だと思つての提案だったのだが、まさかの否定が帰ってきた。

「おや……？」

「だって、ここはじこをしてる人がたくさんいるばしょなんでしょ？ だったらたんけんになったらじゃまになっちゃっしょ」

「なるほど……」

どつちやらアリシアは、マークの想像以上の『いい子』のようだった。どつちにも子供らしくないと思つてしまつが、だからと言つてマークの持つ『子供像』を押し付けるのも悪いので、この部屋でできる暇つぶしが無いか考える。

「おじいさんがよければだけど……わたし、『まおう』のはなしが聞きたい」

「魔王……ああ、聖石のか」

「うん……ダメ？」

「いや、構わないよ」

特に話したくない理由もなかったので軽く頷いたマークだったが、その直後に自分の軽率さを呪つた。5歳の女の子に話すにはいささか刺激が強すぎる。必死で血なまぐさいところを削り、救いのない部

分を拡大解釈する。

「そう……あれは、魔王が封印されて、数百年後の話だ。魔王の魂を封印した『聖石』は、かなり強い力を秘めていた。それを平和利用できないかと研究をしていた一人の皇子がいたんだ」

残念ながら吟遊詩人の才など持たないマークは、四苦八苦しながら史実から物語を紡いでいった。

「だが、魔王はしたたかなやつでね、聖石に触れた皇子を騙して、取り込んでしまったんだ」

「おつじさま負けちゃった!？」

てっきりこの皇子が『勇者』になる話だと思ったアリシアがつい口を出してしまったのを、マークは楽しそうに見ながら話を続ける。

「魔王に食べられちゃった皇子はね、わずかに残った力で助けを求めたんだ。皇子が最も愛した友人と、最も尊敬した友人にね。その友人達は勇者として、いろんな国を巡りながら魔王の手下である魔物を倒しながら、友を助ける手段を探すんだ」

「勇者って二人いたの？」

「ああ、双子だったんだ」

もはや半ば以上原形をとどめていないが、ここではそれを注意するものもない。

「魔王は皇子に扮して国の騎士たちにも勇者を倒すよう命令するが、騎士たちは皇子が変わってしまったことに疑問を持ち、一部が勇者と共に戦うことになる。そうして皇子の国を制圧して魔王を追い詰めたんだ」

「このときは逃げられてしまったがね、と付け足す。

「だが、魔王もやられてばかりではなかった。勇者が皇子の騎士たちと戦っている間に、魔王の魂を封印するのに必要な『聖石』を砕いて回っていたんだ。かつての封印は5つの聖石を使っていたものだったが、残り1つまでしてやられてしまった」

「ふわぁ、だいじょうぶなの？」

アリシアもよく反応してくれていたが、現在進行形で話を作っているマークは物語としての体裁が保っているか気が気ではなかった。

「そうして最後の聖石を手に、魔王の城へ勇者たちは乗り込んでいった。そこには強力な魔物たちと、魔王に操られたドラゴンがいて今までにない激戦となった。だが、各地を回るうちにできた仲間や手を貸したドラゴンと力を合わせて、勇者はとうにか皇子のもとまでたどり着いた」

マークは当時のことを思い起こしながら、戦場でも『カッコいいところ』を選んでアリシアに聞かせる。魔物の群れから祖国を守る騎士たち、危険を承知で勇者を助けるお姫様、前線で勇敢に戦う戦士たちの話は実にわかりやすい英雄譚として語られた。

「勇者は聖石を使い魔王の魂を封印して皇子は九死に一生を得たが、魔王は最後の力を振り絞り、自身の肉体を復活させたんだ」

魂のない肉体は暴れに暴れ、勇者たちの持つ『双聖器』をもってしても苦戦を強いられた。

「戦いは長く続いたが、ついに勇者は魔王の肉体を打ち砕き、世界に平和が戻ったんだ。これでこの話はおしまい」

「おお……おじさまはたたかいの後どうなったの？」

」の話を聞いて、アリシアはどつちやら皇子のことを気に入って様つたようだ。だが、いや、だからこそ言えない。

(王子は魔王の魂が抜け出た後、ほどなくして死んでしまったなんて…………)

「う…………ん、皇子は、魔王に肉体を乗っ取られていた影響で、しばらく体の自由が利かなくなってるね、愛する勇者の看護のもと幸せになったらいいよ」

ほかの部分がいくらか真実も含まれていたのに対し、この部分だけは完全に創作だった。だがアリシアはこれ以上突っ込んだことは聞かずに別の物語、ただし今話した物語の中の閑話と言えるような話を聞きたかった。要は勇者のその後や、戦士たちの恋愛話だ。

そんなことを話しているうちに時間は過ぎ、ようやくプレシアたちが戻ってきた。

「おかえりなさい！ お母さん、フェイト、アルフ！」

「お疲れ様…………先にシャワーでも浴びるか？ それとも食事に行きましょうか？」

「なんだか…………主夫のセリフだね」

それぞれただいまと言いながら部屋に入っていくフェイト達だが、その後ろにリンディ達もついてきていた。

「おや、監視……………にしては疲れが顔に出過ぎているな。ひょっとして、もうある程度の結論が出たのか？」

「結論……………とまでは言えないかもしれないわね。ちょっと厄介なことになってきたのよ」

「厄介なことになっているのは最初からだろ。どんなことだ？」



リンディ、クロノ、エイミィの3人を部屋へと招き、飲み物を用意する。その際マークは、ずれていると自覚しながら『冷蔵庫ってやっぱり便利だ』なんて考えていられる程度には余裕があった。

「ありがとう……そうね、でも今言っている厄介ことは、上層部の頭の固さよ」

「あの映像を見ても、自分たちの知らない世界があることを認めることができないなんて……さすがに予想外だ」

「……なるほどね、正しくは信じたくない、だと思っが……」

マークが話を聞いている限り、管理局には『この数多ある世界を守っている』という意識が強くなるように感じた。それが転じて『自分たちは上位の存在である』と思いついてしまったのだろう。

「若い奴によくあることだろう。いや、そういった考えができる程度に『ここは平和だった』というべきか」

「さすがにその物言いは老成しすぎて見えるぞ？ ……まあいい、とにかく上層部はマークさんの力をこの目で見ない限り信じられない、というやつが大半だ」

「まったく……物は言い方ね。要は彼の持つ秘術クラスの魔法のデータがほしいのじゃないっ」

プレシアの皮肉に、マークは心のうちで感心する。自分の常識になんてものを信じたくないだけでなく、実在するならそれを手のうちにしようという1度で2度おいしい作戦だ。

「だが、それなりのものを見せないとこちらの言い分は信じてもらえないんだろ？ だったら構わないさ、見せつけてやるよ」

「いいの？ ……なんて、どっしりもなくなってここに来た私たちが言えることじゃないわね」

リンディはそう自嘲しながら立ち上がり、マークもそれに続く。

「今からでも大丈夫？」

「それはこっちのセリフだ。もともとできる限り早く終わらせたいのだから、異存は一切ない」

「それじゃあいくぞ……ところで、マークさんは何をするつもりなんだ？」

「今から考える」

一応管理局に着く前からいろいろ考えてはいるのだが、インパクトがあつて、なおかつ知られても懐が痛まない、そんな技能が思いつかないのだ。そんなマークに苦笑しながら、この部屋に集まった全員で目的地へと向かった。

「それで、あんたたちはどんなことをお望みで？」

「またずいぶんと尊大な態度だな……まあいい、その『精神を汚染する魔道書』を提出すればそれでいい」

微妙に腹の出た中年の男の言葉に、尊大なのはどっちだとマークは思ったが口にはしなかった。もちろんそう思っているのを表情で表現するのは忘れなかったが。

「そちらが的確な対処ができるというのなら、それもやぶさかではない。だが、何の知識も持たない輩に渡すほど、俺は無責任ではないぞ？」

「なら、それを……」

「知識や技術というのは、一朝一夕で学びつくせるものではないぞ。それに適正というものもある。一人の管理者を作るために廃人を量産する気はない」

その危険度の高さにか、思わず男は息をのむ。もともと報告は受けていただろうに、とマークは呆れるが、情報として聞くのと実態を知る者からの警告は天と地ほどの差があったのだ。

「まあまあ、その辺にしといてくれないかしら？ あなたほどの気概を持つ人に睨まれて平然としていられる人材は、本局でも少ないんですから」

「ふ〜ん……まあいい。それで？ 代替案はあるんだろ？」

間に入った初老の女性にたしなめられ、マークは素直に引いた。おそらくどちらにとっても筋書き通りの展開だろうと思いつながら。

「ええ、もちろん……正直に言つて、危険と言つてもどれほどのものが把握できていないのが問題なんですよ。ですから、その片鱗を教えてもらえればこちらとしても納得できるようになるわ」

「ふむ……」

マークは軽くその言葉を反復して確認するが、特に裏があるようには聞こえない。それならばといくつか知識を広げる。

『山の隠者』と呼ばれる高位の使い手が居たんだが……その息子4人のうち、3人がただ生きていただけの存在になった」

「それは……」

比較的わかりやすい例である『血統』も、この魔法の前では重要な意味を持たない。あるいは比較的の高い適性を持っていたかもしれない存在でさえ、闇にのまれる可能性が高いという事だ。

「だから、俺はこの魔法に関して後継者のようなものを作る気はない。これ以上この件には触れないでほしい」

「……わかりました。ただ、もう少しその片鱗を見せてはもらえませ

んか？ それを最後に、闇の魔法に関しては、今後一切触れないことを誓いましょう」

「むっ……」

「マーク……」

フェイトが心配そうに名を呼ぶのを聞いて、決心する。できるだけ見た目が悪く、闇魔法を嫌悪するようなものを選択する。そうして選び出した魔道書は『ナグルファル』。本職なら必要はないのだが、マークはこの魔道書でブーストをかけないとこの魔法は使えない。

『召還』

そこに現れたのは鎧を着こんだ兵士のようにも見える存在だった。

「これは……召喚魔法！」

「ただし中身のない、な。亡霊戦士と呼ばれる存在だ。……見ない方がいいぞ」

微妙なニュアンスの違いにお互い気が付かないまま、フェイト達に忠告して、亡霊戦士の兜を脱がせる。

「……」

男はもちろん女性の方も顔色を変える。それを確認して戦士をあるべき場所へと返す。

「これでこの魔法がどんなものかわかってもらえたと思うが？」

「……ええ、よくわかったわ。それで、あなたは……」

「誤解するなよ？ これはあくまで闇魔法の一面に過ぎない。どんな魔法だって使い方次第なんだから」

女性がきつい眼で睨みつけてくるのを、両手を上げながら流す。実際『ナグルファル』は魔王に食われた皇子の使った魔道書であるため、かなり『負』の性質が強いものである。だが逆に、魔王討伐に使われた闇魔法も存在するのだ。

「失礼しました……それは私たちにとってもいえることですしね。ですが大丈夫なのですか？ あなたはかなり高位の使い手だと聞いたのですが……」

その言葉に、フェイト達も反応する。今までマークに異常と考える行動が無かった為考えることが無かったが、いったいどれほどの代償を払い力を得たのか。マークとしては余計な事を、と思える質問だったが、自分のことを心配しての質問であるため無碍にもできなかった。

「……時間をかけて学んだからな。そこまで極端な代償ではない。あの意味すらやましがられるかもしれんぞ？」

せいぜい未来の可能性の一部を失っただけ、肉体的な成長が失われただけと付け加える。それは言い換えれば老化することが無いともいえるため、マークはなかなか重宝していた。

「……そう、ですか」

「ああ、その程度だ……ところで、まだ名前を聞いてなかったな。ちなみに俺はマークだ」

「ミゼット・クローベルと言います。今後とも、良好な関係が築けることを期待していますよ？」

それはこっちのセリフだ、とマークが返したことで、今回の決戦が終了した。見せるものは見せだし、そんなに悪い結果にはならないだろうと思うマークの後ろでは、それぞれの思いを込めたまなざしが

あつ  
た。

## 第20話 「判決、そして……」

マークが管理局で闇の魔法を行使してから、瞬く間に時間が過ぎて行った。プレシアはフェイトと一緒に取り調べを受けつつ、入院しないで済む治療について話したりしていたが、治療はあくまでアリシアの検査のついでと言った色合いが強くて出ている。

フェイトは取調べだけだったのだが、何せ実行犯に当たるので、詳細を聞くためにプレシアより長い時間取調室に拘束されることになった。だが、その際は必ずマークがついてきたため、そこまで大変ではなかったようだ。

アリシアは基本的に客として扱われていたので、医療機関の検査を受ける程度だったのだが、プレシアの治療時間を取るためにいくつか余分な検査も行っていらしい。なのでプレシアが取り調べを受けている間は、部屋でマークの知る物語を聞いて過ごしていた。

そしてほかの面子と違いやるべきことが無いマークは、アリシアにする話をどうにかひねり出したり、フェイトについて行ってジュエルシード事件についてマークの視点から話したりして、なかなか退屈しない生活を送っていた。

「でも、そろそろこの生活にも飽きてきたな……変化がほしい」

「同感だね、あたしもそろそろ外に出たいよ」

マークの言葉に真っ先に賛同したのはアルフだけであった。だが、だからと言って後の3人が外に出るのに否定的かと言われればそうでもなかったわけだが。

「でも、リンディさんたちも頑張ってくれてるわけだし……これ以上迷惑はかけられないよ」

「もともと研究室にこもっていることが多かったのよ。娘たちが居ればこんな単調な生活も悪くわないわ」

「おるすばんにはなれてるから、だいじょうぶだよ?」

こんな感じである。本当ならプレシアも時間を気にしているだろうが、それを娘たちの前で見せるほど大人気なくはなかった。

「そりゃあ俺だって無茶を通すようなことを言つつもりはない。でもなあ……俺の居た世界はこれほどの技術力はなかったから、そろそろ土や風が恋しいんだ」

「そういえば、あなたの居た世界の文明レベルはCだったって言うていたわね」

よつは中世レベルの文明だと言えば分りやすいだろうか。ちなみに、蒸気機関のような生物以外の動力が広まったぐらいの文明からBとランク付けされるそうだ。

「ああ、そりゃあきついね。鉄の箱にでもおしこめられた気分ってとこかい?」

「そんなとこだな……ああ、なんだか息苦しくなってきた」

「だいじょうぶ?」

大丈夫、と答えるマークだったが、やはり見るからに覇気が無い。ただ半分以上は演技だろうから、プレシアたちはそこまで相手にしなかった。

「だけど、マークの魔法を見せてから1週間だし、そろそろ何か決まってもおかしくないと思うけど……」

それは誰もが思っていることだったが、なかなか言えなかったことだ。1歩進めば管理局への不満や批判になりかねない、繊細な部分でもある。一応犯罪者であるこの面子でそんなことを言えば、せつかくの有利な状況を崩しかねない。



「そう、その魔法で聞きたいことがあったのよ」  
「……まあいいだろう。なんだ？」

プレシアがやや冷や汗をかきながら、自然に見えるよう話題をそらす。ただ、話題をそらすためとはいえ、マークにはそれについて話すことに抵抗があった。

「闇魔法の範囲がよくわからないのよ……」『エレシュキガル』もかなり広い範囲の内容だったようだし……」  
「ああ、それが……」

マークは思ったより答えやすい内容に安堵しながら、プレシアの質問に答える。

「もともと『闇魔法』は『古代魔法』と呼ばれていたんだ。その中でも危険度が高いものを次第に『闇魔法』と呼ぶようになっていった。……大きな対価に強力な効果のせいかな？ さすがに詳しい経緯は知らないけど」

「なるほど……魔法の印象によってその名前が定着しただけで、実際は闇なんて関係ないのね」

「そういう事。昔見たものでは、広範囲凍結魔法まであったぞ？」

「……なぜか生物を対象から除外するという謎の効果までついていたが」

「なんだか、非殺傷設定みたいだね」

そんな話をしていると、珍しくノックの音が聞こえた。一同は顔を見合わせて、珍しい訪問者を迎える。

「ゆっくりしているとこ悪いな」

「なんだ、ハラオウン執務官か……どうしたんだ？」

「……いつまでそんな呼び方を続けるつもりなんだ？ クロノでいい」

そついいながら部屋に入ってきたクロノは最後に見たときから比べて、少しやつれたように見えた。目元にクマもあり、相当大変な思いをしていたのは想像に難くない。

「プレシア・テストロッサ、フェイト・テストロッサの処分が決まった。

……保護観察処分になるそうだ」

「ん〜、それってどんな感じになるんだ？」

「実質ほぼ無罪と言っていていいだろう。異例ともいえる処分だが、マークさんの持つ魔道書の危険性が認められた結果、と言えるだろう。ただ……」

フェイトたちはその結果に安堵し喜んでいたが、クロノがその結果にかなりの厄介ごとがついてきたような物言いに、すぐに表情を改める。いや、プレシアはもう気が付いたようで、クロノの言葉を遮り続ける。

「魔道書を管理局で管理することを主張する輩が多くなってしまった、ってところかしら？」

「……その通りだ。一個人が持つには危険すぎるという意見が大半を占めている」

「別にちゃんと封印はしているし、そこら辺の部屋に押し込んでおくよりは安全だと自負しているが？」

「管理局としての自負もあるだろうが、やはり個人より組織の方が強いと言われると……」

「どちらかと言えば逆でしょ？ 組織で管理した方がいいという建前で……いえ、失言だったわね」

プレシアは判決が出たとはいえ、いらぬ厄介ごとを呼びかねない発

言を途中で止める。だが、プレシアの言うように、管理局の名誉のためにもこのような危険性の高いものこそ手元に置いていたいのだろう。

「とにかく、俺が持つなら安全性を証明しろってことだろ？ かまわ

んぞっ」

「いいのか？ かなり面倒なことになると思うが……」

「ならないさ。ただ上層部にこう伝えてくれ『まず最初に俺が施した封印を観測してみる』ってわ」

確かに、どこにどのような封印があるのか知らなければ、封印を解除するなんて夢のまた夢だ。本来マークの友人が付け足した術式が無ければ、内側だけで完結した封印が解かれることはなかったのだ。マークの封印が解かれたことによって同格の封印であった『闇』の封印は解かれたが、マークが上位にいる封印は他者が手を出せるものではない。

「わかった、伝えておこう。それと、外出をする際には事前の申請などの手続きが必要なんだが……明日にでも持っていくよ。それと、マークさんの戸籍についても登録が必要だから、その記入も頼む」

「了解。……なんだか今更のような気もするがな」

「仕方無いだろう？ あなたの使う魔法は、いくらなんでも非常識すぎるわ」

「そりゃあ、「こ」の常識なんて知らないからな」

そつという問題じゃあ……などとつづけるクロノを放って、プレシアへと顔を向ける。

「とりあえず、よかったな。これからはお前しただい……手が必要なくらいくらいでも言ってくれ」

「ええ、あなたのおかげよ……感謝するわ」

プレシアとしては一つ聞いておきたいことがあったのだが、娘たちの前では聞くべきことではないと今回は何も言わなかった。だが、今後は意図的にその話ができる状況を作ることを決意した。

「で、戸籍の記入はここでもいいのかな？ え〜と……エミット？」

「エイミィです。まあ、ちゃんと自己紹介した覚えもないし、改めて名乗っておきますね？ エイミィ・リミエッタです。よろしく、マークさん」

「ああ、済まない……マークだ。以後よろしくエイミィ。それで……」

「はい、今回の登録はここですよ。すみません、マークさんの情報は秘匿情報になってしまうので、正規の場所でない分わかりにくかったですよね」

「いや、たどり着けたんだから問題ない」

次の日、テストロッサー一家が今後の予定を立てているうちに、面倒事を済ませるためにここまで来たマークであったが、出鼻をくじかれたような形となってしまった。

「それで、大丈夫なのか？ クロノは昨日死にそうな顔をしていたが……」

「あはは、私は昨日のうちに休ませてもらったから。最終的なチェックとかまでは手が出せないからね」

エイミィはそういいながら記入する書類を用意する。それを確認するマークであったが、どうも書類の形式はマークの知るものと酷似していたようなのでわずかに安堵する。

「こっちで記入が必須のところはチェックしてあるから、順番に書いて行ってもらえる？」

「了解」

そうしてマークは一通り用紙に記入を行う。とはいえ本当に基本的な事のみなので、そこまで時間をかけることなく記入を終わらせる。

「はい」

「どうも……うーん、名字はやっぱりないの？」

「そんな大層なものは持ってない」

「大層って……まあ、この世界ではファミリーネームなんてあって当たり前だし、何かないかな？」

「そうは言ってもな……」

あつて当たり前と言われても、今まで考えたこともなかったのだ。そう簡単に出てくるわけではない。

「ま、後日改めて申請することでもいいか。後は……2000歳？」

「ああ、かなり適当だが最低でも2000歳だ。いろいろわかるものを足せば、最高4500歳程度かな？」

エイミィとしては絶句するしかないが、実際その程度の時間は生きてきたのだ。もちろん後者は封印された時間も含まれているので、適当にもほどがあるが……

「いや、わかってたことだけど……ホントわたしたちの常識なんて通用しないんだねえ」

「悪かったな」

「うっん、悪くはないけど……あとどれくらい長生きするの？」

目の前にいるのが人の形をしたまったく別のものであると感じながらも、どこか実感がわかないため少しずれた質問になってしまったが、その質問は結果的に正解だった。

「いろいろ無茶をしてしまっただけ……あと100年も生きれば良いと  
ござる」

「あゝそれなら寿命という意味では、もう私たちと大差ないんだ……」

さすがにあと1000年生きます、なんて言われたらどうすればいいのかわからなかっただろうが、それぐらいならどうにかなるだろう。追記の欄に公式年齢は18とする旨を記入して、最終的に少し長生きな人、程度の評価になるのを願った。

「他には、性別、は問題なし。生年月日は冬……まあ問題ないかな？」

「これでいいか？」

「うん、残っているのはお互いの認識の齟齬を埋める作業だけ……  
こんな一朝一夕でできる作業じゃないからね」

そういいながら書類を片付けてから、エイミィは真剣な顔になって  
付け足す。

「これから、マークさんの故郷が見つかるまでこちらで生活すること  
になるけど……何か困ったことがあったら言ってね！ わたしやク  
ロノ君で力になれることなら、いくらでも力を貸すから！」  
「……わかった。何かあったら、君たちを頼らせてもらうよ」

そのあとちゃんと、相方の次くらいに、などと付け加えられる余裕  
がある様子を見せ、エイミィを安心させた。あくまで先輩から聞いた  
話ではあったが、次元漂流者の中で『帰れない』ことを知った者が自  
殺したケースがあったとか……

「あ、そういえば質量兵器と非殺傷設定について話してなかった……」

それを思い出したのはマークがたちさってしばらくたってからの

ことだった。

「それで、結構な時間出ていたと思ったんだが、まだ決まっていなかったのか？」

「ああ、フェイト達がプレシアの体調を気遣って、プレシアが娘たちが楽しむことを最優先にしてね。なかなか妥協案が出ないんだよ」

テストロツサー一家の部屋に戻ってきたマークは、どうにもお互いのことを考えすぎて動けなくなった親子を眺め見る。口を出したい思いもあったが、戦いのことしか知らないマークはそれを抑え自重する。だがそこへフェイトが話しかけてきた。

「マークも言ってあげて！ みんなで楽しまないと意味が無いんだってー！」

「そうだよ！ お母さんがそれでたおれたらいいみがないんだよ！」「……………しょうがないな」

そう言って、マークは3人が考えた計画表に目を通す。遊びについては専門外だが、これを行軍と置き換えれば何とかなるだろうと思っ  
ての行為だったのだが…………

「やっぱり駄目だな。わからん」

「わからんじゃなくて…………」

「フェイトとアリシアの計画から、休みを少しずつ減らして、プレシアの計画に休みを増やしたものを混ぜよう。それがいい」

マークは計画表に何が書いてあるのか理解できないままに、3人の計画を混ぜて新しいものを作る。かなり強引だが、硬直した場をかき乱すにはこれぐらいがちょうどいいだろうとの判断だ。そうして出来上がったものを3人に見せる。

「……これぐらいなら」

「まあ……」

「いいんじゃないかしら」

「え？」

思った以上にあっさりおさまってしまった場に、むしろマークの方が戸惑う。

「結局さ、3人とも頑固だから調整する人がいなかったただけなんだよ」

「(アルフ……わかってたならやってやれよ)」

「(あたしがやったらフェイト寄りになっちゃうからさ、手が出せなかったんだよ)」

これは大変だと、マークは思わず天を仰ぐ。下手をすれば遊びに行っただ先でも同じことが起こりかねないと思ったためだ。

(これは大変だぞ……)

マークは、おそらく監視役としてついていくことになるだろうクロノ達に、思わず同情の念を送った。



## 第21話 「蘇生の真意」

「なんで僕まで……」

「いや、わかっていたことだろ？ まあ、言いたいことはよくわかるが……」

「いいかげん受け入れなさい。それにしてもマーク、あなたは来ないつもりだったの？」

「一家団欒の邪魔をするのは無粋かなと思っていた。それに、戦い以外での遠出なんて初めてで、結構戸惑っているんだ」

今マークたちがいるのは、本局にほど近いとある自然豊かな無人世界だ。もともとは局員の慰安用に管理していたのだが、短期の休暇にわざわざ出てくる者はなく、長期の休暇をこんな近場で過ごす者もいなかったため知る人ぞ知る穴場スポットになっているらしい。

「無駄に金使ってるんだな」

「……」こは生態系がとても安定しているから、管理と言っても名ばかりでロツジがいくつもあるぐらいだ」

それも無人機械が手入れをしているため、年に一度機械を整備する程度で維持できるなかなかの優良物件なのだそうだ。

なぜマークたちがこんなところにいるのかと言えば、先日のテストロツサー一家が作った予定表にあった『ピクニック』が実現したためだ。ちなみにクロノは監視として、ロツジには中継連絡役としてエイミィが待機していたりする。

「おかあさん！ はやくはやく！」

「ア、 アリシア待って……」

「ふふ、 今行くわ」

そう言って足をわずかに速めるプレシアは、余命数か月とは思えぬ姿であった。

「……何か仕込んだのか？」

「仕込んだなんて大層なもんじゃない。ただちょっと体力の回復をしただけだ」

そう言って苦笑したマークは、ある夜のことを思い出していた。

「で、話っているのはフェイト達の前ではできない類のことなのか？」

「ええ……今後の生活に、あなたの力を借りたいのよ」

「ふむ、もう少し具体的に言え」

マークが調整した計画表をもとに、管理局に外出許可を申請しに行った日の夜。プレシアは一人マークの部屋へと訪れていた。

「あなたの回復魔法を、私に使ってほしいのよ」

「あのな……前にも言ったが、俺の魔法は戦場の魔法だ。病気の治療には何の効果も……」

「別に治療のためではないわ」

なに、とマークは眉をひそめるが、それに対しプレシアはある種の確信を持って告げる。

「あなたは、自分の回復魔法の効果を『傷の治療と体力の回復』と言ったはずよ。なら、私が吐血しそうになった時、気管部の傷をふさいだり、病気によって落ちた体力を回復させたりできないかしら？」

「なるほど……そういう事が」

思わずマークはプレシアの考えに唖る。確かにその理屈ならマークの回復魔法も使えることが予想されるからだ。ただ、問題もある。

「ひとつ、今まで試したことのない使い方だ。どんなデメリットがあるか見当もつかない」

「覚悟の上よ……私の予想では傷が治るとその部分が今までより分厚くなくて、最終的に窒息の恐れがある程度よ。もちろん、窒息するほど膨らむ前にわたしの寿命が持たないでしょうけど」

どうなるかはもつすでに考えてあったのか、などとマークは感心すると同時に、元いた世界とは技術や学問の深さが大きく違うのだと再認識された。

「もつひとつは、俺の回復魔法だって何もないところから発生しているわけじゃない。……寿命を削ることになるぞ？」

「もとよりこの命は、あの娘達のために使うと決めているわ。今更ベッドで過ごす時間が減ろうと、何の問題ないわ」

その言葉を聞いて、マークはあることに気付く。それはマークがプレシアをなぜ生かしたのか、その理由を彼女は勘違いしている、という事だ。

「ふむ……しかし、どうしたものか……」

「？ あなただって同意したことでしょ？ 何をいまさら迷うというの」

確かに、プレシアが治療に専念しないという方針は支持したが、それとこれとは話が別だ。だがそれをどう伝えるべきか……そうしばらく悩むマークであったが、ふと思考を打ち切る。魔法を学んでから思考に費やす時間が増えたが、もともとマークは考えるのは苦手なのだ。

「おまえは、俺がなぜアリシアを蘇生させたのか理解しているのか？」

マークは今回に限り相手を理解させるためではなく、自分の考えを押し付ける話し方をしようと決意する。そうして切り出した話は、プレシアにとっても時間を作り話しておきたいことであった。

「そう、それがわからなかったのよ……はつきり言って、あなたは『フェイトの味方』であって私の味方ではないでしょう？　なら、アリシアを蘇生させるのはあまりに使用した力と結果のつり合いが取れないはず……それなのになぜ？」

アリシアの蘇生を心から願っていたのはあくまでプレシアだ。フェイトのことを思うのなら、プレシアを助けて『家族をやり直させる』だけで十分ともいえるだろう。もちろんアリシアの蘇生はあるに越したことはなかったであろうが……

「確かに、俺はフェイトのために動いたが……微妙にその考え方はずれているな。俺はフェイトの『幸せ』のために動いたわけじゃない」

「は？　それはいつたい……」

「俺は、プレシアを幸せにするために動いたという意味だ」

プレシアはその答えに絶句する。意味が分からない。目の前の存在が理解できない。出会ってすぐの相手、それもマークが相方を名乗っていた少女に虐待を加えていた相手なのだ。それを幸せにするために動いたなんて、何がなんだかさっぱりわからない。

「……そもそもフェイトがあの時なんて言ったか覚えているか？」

それを聞いて、あの時のことを思い返す。そして気が付いた。

「一言一句同じじゃないが……」笑っていてほしい、幸せになってほしい『そう言っていたはずだ』

「ええ……そうね。だから、なの？　アリシアを蘇生させたのも、私がそれを望んでいたからっ。」  
「そうだ」

歪んでいる。確かに順序立てていけば、一応理由にはなっているが、結論となる行為がどこがおかしい。だが、そのどこがおかしいのかうまく言葉にできないのだ。

「だから、お前が自分を勘定に入れないことを俺は許さない。今後は、娘たちのためではなく、自分が幸せになることも考えろ」

「……それでも、『自分が幸せになることも』なのね」

「ああ『だけ』と言っても、それだけじゃだめだというのはわかりきっているからな」

そして、プレシアにはそれをどうすることもできないのだ。プレシアがたとえどんな言葉を使ったとしても、マークには届かないだろう。

(でも問題ないわ。私の言葉は届かなくても、あの子の言葉ならいずれ……)

プレシアのそんな思いをなど知る由もなく、マークは『ライブ』の杖を構えてさっそく回復魔法を行使する。当然のごとくその魔法は、プレシアの思惑通りの効果を表すことになる。

「……おい！　聞いているのか…」  
「ん？　なんだっ？」

思いのほか長くあの夜のことを思い返していたせいか、マークはクロノが呼んでいるのに気づくのが遅れたようだった。

「なんだじゃない……置いて行かれるぞ！」

「ああ、悪い」

マークは、テスタロッサー一家がいつの間にかずいぶんと先に言っているのを確認して足を速める。そこに再び、隣を歩くクロノが声をかけてきた。

「少なくとも、僕の知る限りあそこまで無防備になるのは初めてだな。

……何かあったのか？」

「いや……蘇生の後意識を失ったことがあったろ、それは入れないのか？」

「意識があるのに、だ」

「それなら、この世界で仲間ができたからかな？」

「ああ、なるほど……」

クロノは前を歩く3人を見て納得の声を上げる。そして、ふと思いつ出したかのようにそれなりに重要な一件を持ち出してきた。

「そう言えば、エイミィが質量兵器の扱いについて伝え忘れたと聞いていたが……」

「今じゃなきゃダメか？ この場を離れたりしたくないんだが……」

「すまない……ただこの後そのことについて話すから、時間をもらいたいとおかなければと思ってな」

「わかった。覚えておく」

できることなら今日のことが終わってから話してほしかったが、そういうわけにもいかないから今話したのだろつと納得する。マークは重要人物としてより『触るな危険』といった扱いになっていることを自覚していた。

「おにいさん、はーやーくー……」

「マーク、遅いよー!」  
「今行く!」

話をしているうちにまた歩みが遅くなっていたようで、前を歩いていた4人はもう景色のよさそうな丘のてっぺんにたどり着いていた。それを確認して、これ以上お姫様たちを待たせないようにマークは駆け出した。

(ああ、風が気持ちいい……)

ここまで余裕のある状況で駆け回ったことがあっただろうか。そんな思いを抱きながら、あっという間にフェイト達のもとへたどり着きその景色を眺める。

「おお……いい景色だ」

「ふふふ、でしょー」

「うん、今日はここにきてよかった」

アリシアが自慢げに、フェイトは感慨深くマークの感想に同意を示す。そして、この場に来ることに気おくれを感じているクロノを無理やり引っ張り上げ、シートを敷く。いくら回復したとはいえプレシアに走り回るほどの体力はないので、基本的にこの場にいることになる。

「おかあさん、またお花のかんむりのつくりかたおしえて!」

「えっと、わたしも……」

「わかったわ、こっちへいらっしやい2人とも」

さすがにそんなプレシアを置いてはいけないのか、フェイト達はこの場でしばらくゆっくり過ぎすようだ。それを横目に見ながら、マークはごろんと横になる。

「まざらないのかい？」

「アルフこそ……しばらく自然が感じられなかったから、今のうちに満喫しておこうかと思って」

「それで昼寝か？ ……まあ、気持ちよさそうではあるが」

やはりあの3人の親子の間には入りにくいのだろう。自然とあぶれた3人が集まってくるが、正直それで何をするわけでもなくただゆっくり時間が過ぎるのを楽しんでいた。

「はい、おこいさん」

「ん？」

それからどれほど雲を眺めていただろうか、突然伸びてきた手がマークの眼前に何かを差し出す。

「……ああ、花冠ができたのか。近すぎてなんなのかわからなかった」  
「や」

そう言ってマークは起き上がりながら、アリシアの差し出した花冠を受け取る。どうやらアルフもフェイトから同じものを受け取っているようだ。

「って、クロノは……寝ちゃってる」

「今日まで忙しそうだったしねえ。寝かshoいてやるっよ」

アルフがそう言うのにみんなでうなずき、フェイトがクロノの胸元に花冠を置く。

「それにしてもよくできてるな」

「でしょー！ がんばったんだよー」



「ああ、本当にすごいね」

そう言ってアリシアの頭に手を伸ばそうとして、彼女の頭にも花冠が乗っているのに気づく。

「おかあさんがつくってくれたの!」

「そっか、よく似合ってるよ」

「えへへ、ありがと!」

「フェイトも、かわいいよ」

「え! あ、ありがと」

同じように花冠を乗せたフェイトにも同様に感想を言つと、真っ赤になつてうつむいてしまった。

(褒められるの、慣れてないんだろっな)

その様子に微笑ましいものだけでなく、暗い部分も想像してしまうマークであったが、すぐに意識を切り替える。

「それで、」の後は?」

「うん、あっちの湖の方まで言ってみたいと思ってるんだけど……」

そう言って指差すのは、丘から少し下ったところにある湖だ。わざわざ荷物などを持っていくには近いが、プレシアを置いていくには遠い距離と言えるかもしれない。

「獣化したアルフに乗って行ってみればどうだ? それならすぐに戻ってこれるだろ」

「アルフ、いい?」

「任せときなつて!」

そうして獣化をしたアルフは、どの程度の速さになるのか見せるためか、フェイト達の周りを大きく一周した。

「おお、アルフははやいね！」

「わたしたちが乗るときはちゃんと加減してね」

《わかってるよ！ さあ、乗った乗った！》

そうして2人はアルフの背に乗りキヤーキヤー言いながら湖の方へと駆けて行った。

「あなたは行かないの？」

「行くさ。ただその前に……」

マークは杖を取り出し、プレシアに回復魔法をかける。

「マメな男ね」

「戦場では神経質なぐらいがちょうどいいんだよ」

そう言って、マークはアルフを追って駆け出す。その速度は人間離れしていたが、もとより死者蘇生なんてとんでもない魔法を使う存在なので、プレシアは自然と受け入れてしまっていた。

「楽しそうだな」

「あら、起きたの？」

「あれほど大声を出しているんだ。そりゃあ目も覚める」

そうして目線を向けなおした先には、2人の少女を乗せた狼と青年がほぼ同じ速度で縦横無尽に駆け回る姿があった。

「それで、私に何か用かしら？」

「特には…………しいて言えばマークさんについてか？」

「彼について？」

プレシアはクロノがなぜそんな話題を出すのかいまいちわからなかったが、それも次の言葉で理解する。

「彼は、この世界の常識に非常に疎いのは知っているだろう？」

「ええ、管理局にとって都合のいいことも悪いことも知らないでしょうね」

クロノは最後まで言わなかったが要は、その『都合が悪い事』をプレシアの方から伝えてほしいという事だろう。

「ちなみに言えばファミリネームすら持たないんだ。適当なものを考えておいてくれとは伝えたが……」

「そのような風習のない世界にいたのなら難しいでしょうね」

「そこからへんもフォローしてもらえないか？」

「わかったわ」

プレシアとしても願ってもない話だ。もとよりマークに対して何か礼を返さなければと思っていたのだから。

(それに、私が居なくなつた時あの子たちのそばにいてほしいものね)

特にプレシアが何かをしなくてもそうなるだろうが、それでもプレシアはマークに頼みたかった。ちゃんと自分の手で託したくなつたのだ。それだけにマークとのつながりが強くできる頼みなら、大抵のものは引き受けるだろう。

「それにしても……本当に楽しそうね」

プレシアは、自分の命の終わりを感じながらも、恐怖も未練もなく、

その光景を目に焼き付けていた。

## 第22話 「力の束縛」

「だいぶ遅くなったが、質量兵器とやらの話を聞こうじゃないか」  
「……本当に、帰ってから話すことになるとは思ってなかったよ」

ピクニックから帰ってきたマーク達はテストロッサー一家と別れ、伝え忘れていたという質量兵器についての話をしていた。

「そもそもなんで今なんだ？ 話す時間なんていくらでもあったらどう？」

「管理局では、あまり多くの人間が対応すべきではないという結論に達してね、実質あなたに仕事の話ができるのはアースラの面子だけなんだ」

「なるほど……」

プレシアの件やらマークの件で忙しかったクロノ達の仕事が落ち着くまで、どうしても時間が取れなかったのだろう。長い話になるのか、エイミィが飲み物を持ってきた。

「そもそも質量兵器が何を指すのかわかるかな？」

「……確かクロノが、俺の持っていた槍をそう呼んでいたな」

「うん、質量兵器っていうのはそういう魔法を使用しない武器のことを言っの」

「そして、基本的に質量兵器の使用を管理世界では禁止されているんだ」

その言葉を聞いてマークは眉をひそめる。これだけ聞くと、マークに武器の提出を強制してるようなものだから当然だろう。だが、この話には当然続きがあった。

「言うておくが、マークさんの持つ武器については所持については許可を得ることができた」

「所持については、ってことは使用するなってことか？」

「完全に禁止されるわけではないが……いくつか条件が付けられることになった」

「その最たるものが管理局への所属だね。まあ、管理局は万年人手不足だから優秀な魔導師はたいてい勧誘しているし、私たちからすれば無理な要求には感じないんだけど……」

最後にエイミィがつい言い訳じみたことを付け足すが、それでもマークは難しい顔をしていた。

「……確かにそっちの主張はわかる。俺の使った魔法の価値や、それ以外の持ち物、戦力としても手元に置いておきたい存在だという事はな」

マークの使った蘇生魔法はもちろん、『フォルブレイズ』など、マークがかつていた世界においても最高位のものだ。いくら違う世界とはいえこのクラスのもがそこらじゅうに転がっているなんてことがありえない以上、マークという戦力は非常に危険と判断されておかしくないのだ。つまりマークの存在は周囲の人たちにとって非常に極端な性質をもった存在なのだ。

「その通りだ。だが、君も理解しているだろ？ 基本的に、一般人が戦力を持つのは推奨されていない。力を持つ者は、ルールによって縛られていなければいけないんだ」

「それについても理解しているつもりだ。俺の力がこの世界に住む人々にとって『善性』であると認知されているならともかく、そうでない以上危険視されて当然ともいえるだろう」

「だったら……」

「だが、それでも俺には何をにおいても優先させるべきものがあるんだ」

たとえ世界を敵に回してでも、それだけは譲れない。そんな決意を感じ、クロノ達はつい言葉に詰まる。

しかし考えてみれば当然な話である。マークの持っていた『聖石』を思い出せばそれもわかるだろうが、その世界で最重要と言っている神器を一個人で扱う事の許された存在なのだ。『力』に対する責任というものを管理局以上に理解しているのだろう。

「俺はフェイトの相手だからな。一人でさっさとこの先に行く道を決めるわけにはいかない」

「……」

当然のように言っただけのけるマークに、クロノ達は言葉を失った。今までまじめに考えていたのが馬鹿らしくなってしまふ。

「まあ、本音はこんなところだが、実際自分が行ったことには責任を持たなきゃならないだろ？ アリシアの蘇生の件もあるし、しばらくあの二人から離れる気はない」

「いや……確かにその通りなんだろうが」

「……先に後半のセリフが出てこないもんなあ」

クロノ達が何とも言い難い気持ちになるのも仕方がない話だろう。もちろんマークとしては無暗に戦いの種をまくようなまねをするつもりはないので、フェイトが管理局入りを断るようなら常時監視もやむなしと思っていたりする。

「まあ、彼女にも管理局への勧誘はするし、そもそもしばらく地球で生活する許可も得るつもりだったし問題ないだろ」

「責任感の強そうな子だしね。ほぼ無実になったとはいえ、結構事件の二と気にしていたみたいだし……」

「そうだな……フェイトなら管理局入りを拒否しないだろう。まあ、

彼女がそう決めたら何の問題もないわけだが、間違っても強制はするなよ？」

もともとマークの提案で地球暮らしはほぼ決定していたようなものなので、進路を決めるまで時間はそれなりにあるのだ。今はまだそこまで深刻になる必要はないだろう。

「それじゃあ質量兵器についての話は終わりかな？　まとめちゃえば管理局の監視下になればいくらでも使っていていいって話だし」

「いくらでも、というのは困るが……まあ、そこまで強い制約はない。ただ『特別な許可が出ている』事は忘れないでくれよ？」

「了解した」

一応了解はしたが、これから戦う機会がそうあるとも思えなかったマークとしてはそこまで気にしていなかった。

「次は『非殺傷設定』のことだね」

「……ああ、あの不思議設定か」

「それも話してなかったのか……」

マークにとってなぜか防御ができない謎魔法という位置づけだが、そもそもなぜ戦闘用の魔法に制限を付けるのかよくわからなかった。

「一応言っておくけど、管理局の仕事は犯罪者の逮捕だからな？　犯

罪者を殺すことを目的としないからこそその設定だ」

「……まあ、それがこの法だというのなら従おう」

「ぜひそうしてくれ。それで、この非殺傷設定の術式をマークさんの魔道書に付加できないか？」

「うーん……」

「これに対してもマークは難しい顔をするが、当然と言えるだろう。」



全く違う魔法体系の術式を合わせるなど、それこそ数年、下手をすれば数十年かかってもおかしくない行為なのだ。

「こちらで術式自体は用意するし、スタッフも集める。実際できるかどうかかわからないが……」

「いや、それ以前の問題だ」

だが、マークはクロノの発言を止め、予想外の発言をした。

「俺は使うのが専門で、作る方はまるで駄目なんだ……だから無理。術式の再設定なんてできない」

「……そういうものなのか？」

本来であるなら、マークほどの実力があれば魔道書を書けないなんてことはないだろう。だが、マークが魔法を使うようになったのは『死者蘇生』のためなのだ。魔法の使用については問題なく行えるが、新たな魔道書を作れるほどではない。剣を振るう事と、剣を作ることが全く違う、という事と言えば分りやすいだろうか。

「そうなるともう一つの方法をとるしかなくなるんだが……」

「あんまりいい方法じゃないんだよねえ……」

「とりあえず聞かせてくれ」

この後クロノ達にとっては不本意な提案を、マークは『何の問題もない』と言って快諾した。

「それで『凶悪犯罪者用強制外部設定』を受け入れたの？ ……はつきり言って馬鹿じゃないの？」

「馬鹿って言うな……」一応マイナーチェンジはしているらしいから問題ないって話だぞ」

この提案を快諾したマークに、かえって焦ることになったクロノ達  
はとりあえずプレシアに相談することを提案し、設定をつけることは  
後日に回すことになった。

「……確かに資料を見る限りは、魔力の封印値も3割に抑えられてい  
るし、魔法使用に対する外部干渉も解除されているみたいだけど……  
設定の解除自体は管理局の許可がいるのよ?」

「それでも質量兵器は所持が認められたし、そこまで問題にはならな  
いと思うが?」

実はここにも認識の齟齬があった。管理局ではもちろん、プレシア  
でさえもマークの切り札は『フォルブレイズ』であることを疑ってい  
なかったのだが、マークの本当の切り札は別にあるのだ。これは魔導  
師を最大の戦力とする管理局の先入観としか言いようがないだろう。

「でも、マークが犯罪者扱いされているみたいでなんだかヤダな……」

「一応言っておくけど、俺も本来なら犯罪者として扱われてもおかし  
くないことをやってるんだからな?」

「そうかもしれないけど……」

フェイトも思わず口をはさむが、やはり年の功というべきか、すぐ  
に言いくるめられてしまった。

「まあ、どこかで妥協しなければならぬのだから、妥当と言えば妥当  
かもしれないのは事実でしょうね」

あくまで『非殺傷設定』が広まっている管理世界においての話にな  
るが、剣も魔法も十全に使用できる状態というのはさすがに問題があ  
るのだ。誰もが何かしらの制限を受けているからこそ安定するもの  
もあるからである。

「でも3割よ？　もしもの時は大丈夫なの？」

「最大出力が、だろ？　総量が減るわけでないし、何より全力で戦う必要がある戦場になんか立ちたくないしな」

「確かに実力ギリギリの戦場に立つようなこと、そう滅多にあることじゃないわね」

いくら管理局が人手不足とはいえ、実力の見合わない人員を戦場に送り出すようなほどではない。それにマークの攻撃力がいくら落ちたとしても、戦術面まで劣化するわけではないのだ。

「まあ、できれば封印を受けた状態がどんなものか確認はしておきたいがな」

「それなら模擬戦でも組ませればいいじゃない。管理局側としても、あなたの戦闘データが得られるなら喜んでやるでしょう？」

「それもそうだな……明日クロノにでも頼んでみるか」

「……ちゃんと手加減してあげてね？」

最大出力に制限がかけられるという事は、そのチェックのため、マークは自身の持つ最大の魔法を使うという事だろう。『非殺傷設定』をつけてからの模擬戦となるはずなのに、フェイトは心の底からマークの対戦相手となるクロノに同情をした。

「それで昨日あんなことを言っただのに……なぜここに居るの？」

「ん？　模擬戦するの止めたから、かな？」

「なんでまた……自分の実力を確認しておきたいと言っただけはあなたでしょっ？」

後日、てっきり模擬戦をやると思ってそれを見ようとしていたプレシアたちだったのだが、それに反してマークは封印を施してすぐに部屋まで戻ってきたのだ。アリシアでさえ割と楽しみにしていたので、心情的にはかなりもどかしい。

「いや〜よく考えてみれば必要ないかなって思ってた……一応『非殺傷設定』の発現だけは確認したぞ?」

「現状を確かめなきゃ落ち着かないんじゃないの?」

フェイトも心配するが、マークはそうでもないと前置きして話を進める。

「最大出力が3割落ちていることはわかってるし、それ以外の戦力の低下はないんだ。それにこれからは地球で暮らす予定なんだし、戦闘とは無縁の生活となるだろ?」

よほど不測の事態が無ければ戦う事なんてありえないのだ。それなら模擬戦で貴重な魔道書を使用するのも気が引けるといふものだ。マークはフェイトへの勧誘が、ある程度の年齢になってからになるだろうと勘違いしていた。

(それに、戦士は辞めると考えているわけだしな)

武力を捨てるわけではないのだから、力の確認ぐらいはとも思っていたのだが、その手段が模擬戦というのはなんだか違うんじゃないかと思いついたのだ。

「でも、おにいさんがたたかっていると、見てみたかったな」

「それじゃあ、今度演武でよければ見てみるか? 一応見栄えのいいものも覚えてはいるし」

「うん!」

実践的な闘技場だけでなく、武威を競うような場にも参加したことがあってよかったと、マークはこの時初めて思った。

## 第23話 「平穩の終わり」

「ふう、はっ」

マークは、手に持った『ハルベルト』を振り回す。

「ほう、はっ」

突いて、薙いで、振り下ろし、そして叩きつける。

「っっあー」

体ごとぶん回し、切り上げ、今度は逆回りに回転する。その様子は、素振りというには流麗で、演武というには無骨すぎた。

「ったあー」

大上段からの一撃を最後に、マークは動きを止める。それと同時に訓練室は静寂を取り戻した。いや、動きを止めたマークに近づく人影があった。

「庭園での立ち回りは見ていたけど……直接見ると迫力が違うわね」

「……ハラオウン艦長か」

「リンディでいいわ。前にそう呼ばれたと思ったけど？」

マークは覚えていなかったがそうは言わず、次に呼ぶときはそうしようとして決めて頷くだけにとどめた。

「同じを勝手に使うのはまずかったか？」

「そうね、施設の使用は申請をあらかじめしてくれれば助かるわ」

そう、時間が早朝という事もあり、マークはこの場所を無断で使用していた。一応連絡用のデバイスもまだ持っていたが、時間が時間なので使う気になれなかったのだ。

「でもどうして急に訓練をするつもりになったの？　今までそんなそぶり見せなかったのに……」

「アリシアに演武をせがまれてな。ちょっと練習をしておこうと思っただ」

「演武……確かに見応えはあったけど……」

それにしても人を『魅せる』要素が少なかったように思える。

「今のは準備運動のようなものだ。アリシアに見せるには戦場の匂いがきつ過ぎる」

それを聞いてリンディはようやく理解する。流麗にも、武骨にも見えたのに『魅せられなかった』のは、その技が見るためのモノではなく使うためのモノだったからであると。

「じゃあ、今からやるのが？」

「ああ、演武と言って差しさわりのないものだ」

そう言ってマークは『銀の剣』を出して構える。その姿は静かで、先ほどのハルベルト……ハルバードを振るう激しさとはかけ離れていた。

「……」

リンディが静かに離れるのを見計らって振るわれた一閃はやはり

静かであったが、美しく力強いものであった。それからさらに一閃、もう一閃とゆっくり流れるように剣戟が連なっていく。

(どっししたらこんな技術が身に着くのかしらね……)

無粋と知りつつも、つついそんなことを考えてしまうのは仕事に毒されているのか、と思いつつも思考は止まらない。魔法も一流を越えていると言って過言でないものだったのに、さらに剣まで修めているとは思わなかったのだ。そこまで考えて、庭園でも様々な武器を使っていたことを思い出す。

(『フォルブレイズ』が印象的過ぎたのかしらね……)

リンディ自身も魔導師であることも影響していただろうが、『フォルブレイズ』の方が魔導師にとってわかりやすくすごかったという事だろう。と、そこでマークが演武を終える。

「素晴らしかったわ」

「……まあ、剣士はいない世界みたいだしこれで何とかなるか」

「……今ので満足できないの？」

「知り合いに本物の達人が居たんだ。それと比べてしまえば、自然とこんな感想が出るってもんだ」

マークは自然に答えたが、リンディとしては『さらに上がいる』という事実を乾いた笑みしか出なかった。

「それで、こんな時間にどっししてこんなとこに？」

最初こそマークが勝手に動いたからだと思っていたが、それにしてもリンディが来るのは遅かった。ならば自然と厄介ごとかと思ってしまうのも仕方のない事だろう。

「あゝ特に何があったわけじゃないわ。……ただ、仮眠のつもりが部下に気を使われてしまっただけよ」「なるほど、アラームを止められたのか」

機械類には疎いマークも、さすがに身近な便利品については教わっていたため、リンディの言った意味も理解できた。

「おかげで半端な時間になっちゃってね、気分転換に散歩していたのよ」

「ゆっくり休めたのならそれでいいだろ？ それより、判決も出たのにまだまだ忙しそうだな」

「蘇生魔法のプロジェクトが立ち上がるのよ。現場にいた人間として、しばらくかかりつきりになっているの……他にもやらなきゃいけない事がたくさんあるのよ」

「そいつは……まあ、頑張れ」

リンディは恨めしそうにマークを見るが、マークは目を合わせようとしなかった。この件はマークが元凶だと言えるのだが、それを反省するつもりがなかったからである。

「まあ、決まったことをぐちぐち言っても仕方がないんだけど……」

「溜めこむよりはいいんじゃないか？ まあ、たとえ奇跡が起こって蘇生が完成しても、俺は一切干渉しないけどな」

愚痴ぐらいは聞くが手を貸すことはしない、そう明言するマークにリンディは苦笑する。

「強いわね……」

「今の会話のどこに強さを感じる要素があった？」

「長いこと探し続けていたことでしょうか？ それなのにもう干渉しな



いと言い切れるところよ」

「そもそも望み続けていた時間が違うんだ。やれることはやってしまったという事もある。ただ諦めてしまっただけさ」

それと寿命のこともあるかもしれない、とマークは心の中で付け足す。あと100年もない命なら、フェイト達において逝かれたとしても2、30年で後を追えるのだ。

「まあ、俺が蘇生魔法を諦めた理由なんてどうでもいい。話がないなら俺は戻るぞ？ そろそろ準備しないとみんなが起きてくる時間間に合わなくなる」

実際まだ少し早いけど、汗を流したりしてこの練習について悟られないようにしなければならぬ。マークはアリシアに『面倒な事を頼んでしまった』などと思わせたくないのだ。

「そうね……ああ、一つだけあったわ」

「どんな話だ？」

「フェイトちゃんに荷物が届いているの。朝食の後にも届けに行くわ」

リンディはそれだけ言うと訓練室から出て行ってしまった。

「俺、」とこの話をあの子たちに話すつもりないんだが……」

まあ、話さなくてもすぐに持ってくるみたいだしいいかと結論付け、マークも自分の部屋へと戻った。

「え？　なのはからビデオメールが？」

「ええ、一応昨日のうちに届いてはいたんだけど……こちらの都合で遅くなってしまったわ」

「い、いえ！ わたしもほんとに連絡取れるとは思っていなかったから……」

「ふふ、ここはクロノのお手柄ね」

その言葉でクロノがフェイトに手紙を勧めていたのを思い出す。

「そっか、後でお礼を言わないと……」

「ふむ……ちなみに『びでおめーる』ってなんなんだ？」

『『ビデオ』が映像記録』『メール』が手紙のことよ。つまり『文字の代わりに映像が入った手紙』と思っていればいいわ」

「理解した……と思う」

「まあ、見たほうがはやすいよ？」

プレシアの説明と、アリシアの勧めで、とりあえず何も言わずに『ビデオメール』を見ることになった。

「ほう……」

そこにはなのはが写っており、簡単なあいさつや、近況報告、友人の紹介やらいろいろ話している様子が見ることができた。

「……とりあえず元気そうでよかったな」

「うん……」

「理解することを諦めたわね？」

「もう『うづいうものだ』って思うことにした」

最初こそ原理などを理解できないものかと考えていたマークであったが、はっきり言って技術レベルが違い過ぎたのだ。その結果、最近ではこのような表面的な質問だけで終わるようになってしまった。

「まあ、それでも質問をやめないのは執念と言ったところかしら？」

「単語の最低限の意味を知っておきたいだけだ」

「ま、まあ、それはともかく、返事ってできますか？」

「ええ、局員立会いの下でなら映像記録を残して転送できるわ」

それにそういつと思っていたし、と付け足しながら手のひらより一回り大きいぐらいの機械を取り出す。

「これでビデオを撮るのか？」

「そうよ、使ってみる？」

そう言っってリンディはビデオカメラをマークに渡し、簡単に操作を教える。

「それじゃあどこで撮りましょうか？ 流石に局内の施設を記録に残

すわけにはいかないし……」

「ここでもいいじゃないか」

「え？ って、マーク!？」

確かにこの宿泊施設と大差ない部屋の映像が流れたって問題は無い。そう判断したリンディは、すでに録画を始めていたマークの行動を苦笑しながら見るにとどめた。

「も、もう撮ってるの!？」

「ああ、特に見られて困る格好でもないし構わないだろ？」

「確かにこの格好を見られても問題はないけど……」

「なら大丈夫だ」

「心の準備くらいさせて……」

この後一度録画を止めて撮り直すことになったのだが、マークの操作のせいかこの冒頭部が残っていたのはまた別の話である。

「じゃあ、録画を始めるぞ?」

そう言って今度こそ本番として撮影が始まる。ただ、一切の打ち合わせをしないで始めたことを付け足しておく。

「えっと、ビデオメールありがとう。なのは久しぶりで、アリサとすずかははじめまして、フェイト・テストロッサです」

「フェイトのおねえちゃんのアリシア・テストロッサです。よろしくね」

「母のプレシアよ。前回の件で迷惑をかけたことを謝罪しておくわ」

ビデオカメラを持ったマークが、アリシアがおねえちゃんって映像じゃそうは見えないよな、とつぶやくがアリシアに、だってじじっだもん、と軽く返されてしまった。

「マークもあいさつしない?」

「ん、俺は見てる方がいいや」

「そう……えっと、じゃあ」

そのまま何かから話せばいいのかと、フェイトが止まってしまっ。おそらく話したいことがたくさんあり過ぎてまとまらないのだろう。

「とりあえず現状報告でもしたらどうだ?」

「あ、うん。管理局に着いてからは取り調べとかいろいろあったけど、全部終わって『保護観察処分』に落ち着いたんだ。今は……リンディさんたちの仕事が終わるのを待っている状態かな?」

フェイトは申し訳なさそうな顔をしてリンディを見るが、当の本人は気にする必要はないとばかりに微笑んだ。

(まあ、プレシアのことは言いつらいいよな)

今テストロッサー一家が管理局にとどまっているのは、プレシアの簡単な治療をしながら過ごすためでもあるのだ。もしそれがなければ、早々に地球での生活を目指して動き出していたらう。だが、さすがにそんなことは言えない。

フェイトは話せないことは話さないまま、ピクニックに行ったことや、今後海鳴市に行くつもりであることを楽しそつに語った。

「わたしが伝えておきたいことは、こんなところかな？」

「じゃあ、これで終わりか？」

「……うん。じゃあまたね、なのは」

そつ言い終えたのを確認して、マークはカメラのボタンを押し録画を終わらせる。それと同時に緊張から解放されたフェイトが一気にがっくりくるのを笑って眺める。

「そんなに大変だったか？」

「だって、緊張しちゃって……」

「ん〜俺には分からない感覚だな」

マークはその強大な力もあり常に注目される存在であったためか、どうにもその緊張が理解できなかった。

「そついえば、さっきの録画中にも話が出たが……いつごろから地球に行くことになるんだ？」

「そつね……今ククロノが申請しているはずだけど、基本わたしたちも一緒に行くことになるわ。だから……早くても半年ぐらいたつてからかしら」

「準備期間と考えたらちよつどいいくらいかな？俺も一般常識とか学んでおかないといけないし」

リンディ達が管理局で早急に行わなければならない仕事が終わるのがそれぐらいなのだろう。プロジェクトの立ち上げにかかわる以上、それなりの時間がかかるのは仕方のないことだ。

「この子たちは現地の学校に通わせてもらえるのかしら？」

「ええ、もちろん。……でもさすがにアリシアさんをお姉さんとして登録することはできないでしょうけど……」

「ええ〜」

「まあ、その容姿じゃ仕方ないだろ」

外見年齢で行ってしまったえば、アリシアは5歳、フェイトは10歳ぐらいいの。あえてなのは同じ年齢にすれば、9歳としての登録になるだろうが。

「無理をすれば誤魔化せないかしら……せめて双子として」

「成長ホルモンが……とか、不可能ではないでしょうけど後で大変になりますよ？」

「周囲がどうとらえようが、本人たちが納得できればそれでいいじゃないか」

子供時代はともかく、大人になれば差異は減っていくし、魔導師である以上管理世界で生活する可能性が高いのだ。地球でまで無理な形を押し通して姉と妹を主張する必要はないとも思える。

「そう、かもしれないわね……」

「？ おい、どうした。顔色が悪いぞ」

「……ちょっと、急にね……」

「医務室へ連絡をするわ！ マーク君は回復魔法をお願い」

「了解！」

フェイトとアリシアが必死に母を呼ぶが、ただ大丈夫だと返すこともできない様子であった。

もともと、いつ急変してもおかしくなかったプレシアの容体だったが、この日ついに入院せざるを得ない発作を起こした。

## 第24話 「死と誓い」

「とりあえず良かったな」

「ええ、ちよっとやり残したことがあったのよ。それをやり遂げなければ、死んでも死にきれないわ」

一時は意識不明にまで陥ったプレシアであったが、何とか持ち直し一晩が過ぎた。意識が戻るまでずっと母を見守っていた娘たちも、しばらく前に安心したのか夢の中だ。

「それは危なかったな。俺としても、死ぬときは何の心残りもなく笑って逝ってもらいたかったからな」

「安心なさい。最初からそのつもりよ」

もしフェイト達がこの会話を、プレシアが死ぬことを前提とした会話を聞いたら怒るか悲しんだかもしれない。だが悲しいかな、二人の中では、否、この件に携わった人たちは近いうちにその時が来ることは仕方がないと受け入れていた。

「で？ その心残りはなんだ？」

「……あの子たちがいるときに話した方がいい気がするのよ。それが今後のためになるのかはともかくとして、ね」

「ふん、それまで持てばいいがな……それで、ここまで容体が急変したのはどうしてだ？ この手の病はゆっくりと進行していくものだと思っていたが」

マークのこの質問は、医学に詳しくないが故の質問だったつもりなのだが、この場にいた医師には『聞いていた話と違う！』という糾弾に聞こえたようだ。そのせいか顔を青くさせながらもこれ以上の不興を買わないように必死にマークの問いに答える。



「は、はい……私たちとしましても、今回の件は異常と考えます。前回の検査から考えるとここまでの急激な病状の進行は意味が分かりません……ここまで来ると突然変異か、よく似ているだけの全く違う病気だと言われてもおかしくないレベルです」  
「ああ、それについては私に心当たりがあるわ」

久しく感じていなかった畏怖を感じ自然といらだっていたマークを見て、もはや蒼白になってきた医師をかばうかのようにプレシアが声をかける。

「少し内密の話がしたいの、出て行ってもらえる？」

「し、しかし……」

「バイタルチェックはしているのでしょうか？ 急変したら戻ってくれ

ばいじゆじゆ」

「……わかりました、失礼します」

そのまま逃げるように退室する医師を見送る。

「ちすがにやり過ぎよ」

「最近居心地のいいところに居たから……それで、原因はなんなんだ？」

「……」

思わず沈黙してしまったプレシアだが、今更なかったことにもできないと開き直る。

「初めに言っておくけど、この事は想定していたわ。私が望んだからこうなったの」

「……前置きのようにも聞こえるが、それは答えを言っているようなものだな」

「ここまで聞いてわからないはずがない。間違いなくマークの回復魔法の影響だろう。」

「……ええ、そうよ」

「知っていてあの時話さなかったというのは業腹だが、まあいい。詳しいことを話せ」

「わたしの体力が回復して、同時に病巣部も元気になったというだけよ」

聞いたことがある人もいるかもしれないが、一般的に若いほうが癌などの病気は進行が早い。それは癌も宿主の一部であり、細胞分裂の速さなどが影響してくるからだ。

「怪我の治療は身体の活性化によって行われるから、それが影響して病気が一気に進行したのでしょうかね」

「……詳しい理屈はさっぱりだが、俺の扱う回復魔法は病気に対して逆効果だったわけだな？」

「それだけわかれば十分よ」

マークは一瞬苦い顔をするが、それをすぐに引っ込める。なんにせよプレシアはこの結果を自分で選んだのだ。ならばそれに文句をつける気はない。文句をつける気はないのだが……

「まったく、勝手な奴だ」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

つい出てきた憎まれ口も、プレシアは柳に風とばかりに受け流す。

「体力の回復がなければ外に出られたか微妙な所だったし、後悔はしてないわ」

「それならいい。あの子たちにもそれは伝えてやれよ」  
「言われるまでもないわ」

娘たちに『自分たちのために無理をさせてしまった』などと思わせないためにも、ここはしつかり言い含めておく必要がある。プレシアの意識は、すでに自分の死後に対して向かっていた。

「……今更頑張りすぎるなよ？ 中途半端になれば未練になるからな」

「問題ないわ。私がやらないといけないのはあと二つ二つだけよ。それは問題なく終わると確信しているもの」

「そうかい」

そこまで話してマークは席を立つ。なぜ病状が一気に悪化したのかわかることもできたし、二人だけで話しておきたいこともなくなったからだ。

「もう行くの？」

「ああ、後はフェイト達がいるときに、だろ？」

プレシアにも、マークに聞きたいことはもう何も無い。蘇生の真意も聞くことができたし、この男がどのような性格をしているのかも簡単にだが理解できたからだ。後は要求を突き付けるのみ。と、そこへ予想より早く今回の主役たちが登場した。

「おかあさん……」

「母さん……」

「(なんだか感じるものがあったみたいだね、連れてきたんだ)」

後ろについてきていたクロノがマークに耳打ちする。親子だからだろうか、フェイト達もプレシアの決意が伝わったのかもしれない。

「……仕切り直す必要がなくなったわね。これから話すことは遺言と  
思っちょうだい。もちろん聞いて行ってくれるわよね？」

「おかあさん……」

「……いいだろう」

プレシアが娘たちをなだめるのを見ながら、マークもプレシアとの  
最後の話を始める。

「まずは、心残りについてかしらね。この子たちをおいて逝かなけれ  
ばならないのは、もう死んでも死にきれない思いなのよ……だから、  
あなたに託したい」

「……わかった。神竜ナーガの名に懸け、フェイト・テストロッサとア  
リシア・テストロッサを守ると誓おう」

それはマークにとって最上の誓いだ。プレシアたちはナーガの名  
を知らないがそこに込められた決意は感じられた。

「だが今更じゃないか？ もともと俺の行動は……」

「あなたの口から聞きたかったのよ。疑っているわけではないわ」

今更そんなことを言われるなんて不本意だ、と言わんばかりの  
マークに対して、言葉にして欲しかったと言っつプレシア。つい最近、  
自身の言葉が足りないことを感じたマークに反論の余地はなかった。

「とにかく、あなたがそう言ってくれるなら心配はいらないでしょう  
ね」

言質を取れたからか露骨に安心するプレシアに、さすがのマークも  
水を差すようなまねはしなかった。

「もう一つ、よければ『テストロッサ』と名乗ってもらえないかしら？」  
「母さん!？」

フェイトがことさらに驚くが、名字が無いと不便でしょう、とだけ付け足す。確かにいつか適当なものを、と思っていたが中々いいものも思いつかなかったマークは黙って頷く。

「なんだったら義母とでも呼んでやるっか？」

「マーク!？」

「なかなか魅力的な提案ね」

「母さんまで!？」

実際のところ、マークはそのよう呼び方をするつもりはなかった。

(あと5年もすれば話は別だが……いや、フェイトにその気がなければ意味がないか)

今義母と呼べば、間違いなく兄妹の扱いになるだろうからそれは避けなかった。

「まあ、それはさすがに冗談として、次はなんだ？」

「あら残念……そうね、これはアリシアとフェイトに……私と同じような間違いは犯さないでちょうだい。私のように過去にとらわれることなく、ちゃんと未来を見て生きてほしいの」

「……うん、わかった」

「必ず……」

2人が本当にこの言葉の意味を理解できたのかは、まだわからない。だが、しっかりと伝えたいし、マークもいる。思ったよりもおせっかいで優しい親子もいる。これなら娘たちが多少どこるか、大幅に道を間違えそうになってもちゃんと正してくれるだろう。

「俺も一つ聞いておきたいことがある」  
「何かしら？」

もう話すこともなくなってきた中、マークが唐突に声を上げる。それはマークにとって重要な事で、プレシアが最後に語ろうと思っていたことだ。

「あんたは幸せだったか？」

「……ふん、何を言っているの？」

マークも知っているように、まだ幼い娘を亡くし、只々その蘇生にすべてをかけて生きてきた。その結果は、新しくできた娘に八つ当たりをして、やっと願いがかなったと思ったたらもうこの命は風前の灯と  
言う。

「決まっているでしょう、私は今幸せよ」

だが今は娘たちが居て、それを託せる人がいる。それだけですべてが報われる思いであった。

「そいつは重畳」

マークにもそれは伝わったのだろう。そして、それが聞けたのならもうここには用はない。そのまま止める間もなく立ち去ってしまった。

「……行っちゃったね」

「聞くことを聞いて満足したのでしょうか。それでも……」

あの去り方は『ここに用が無い』と言うより『ここに自分が必要な

『』と想っているように見えたのは気のせいであろうか。

(どちらにしろ私の出る幕ではないわね……)

それからしばらく、親子で今までと変わらない会話をしたり、今後  
のことを言い聞かせて娘たちを泣かせたりしながらゆっくりとした  
時間を過ごしたプレシアたちであった。

プレシアが亡くなったのは、それから二日後の昼であった。娘たち  
に見送られたその顔は、今までになく穏やかであったそうだ。

「まだミッドチルダには戻れないから、埋葬は庭園で行われたんだけ  
ど……なんで来なかったの？」

「話すことはもうないし、未練なく逝ったんだろ？　なら、俺は必要な  
いね」

「フェイトさんたちを託されたんでしょっ？」

ならそばにいてあげるべきだと言っリンディにマークは持論を述  
べる。

「そばにいただけが守るといふ事ではない。ちゃんと自分なりに受け  
止めなければいけない事だ」

「まだ子供なのよ……」

「だからこそそばなければならぬだろっ！」

怒鳴り返してしまったマークだが、すぐバツが悪そうに冷静を装い  
言葉を続ける。

「……自分なりの答えを得なければ、何もわからない俺らの言葉は届  
かないだろっ」

「……それでも夫を亡くしている身です。あの子たちの苦しみは

「……」  
「言い直そう。あの子たちは『俺らがその苦しみを理解できる』事が理解できないだろう」  
「……」

いくらマークたちが『わかる』と言っても、フェイト達が信じられなければ意味がない。

「ある程度落ちつけば、あの子たちから話しかけてくるだろう」

「……そのまま閉じこもってしまつ可能性は考えないの？」

「その時はちゃんと引つ張り出すさ。だが信じて待つのが先だろう」  
「？」

リンディには、その物言いは確信を秘めているように感じた。

「……すげいわね」

「慣れているだけだ」

戦災孤児など腐るほど見てきた、そう付け足すマークに啞然とする。

「そこはともかく、あのプレシアの娘たちだぞ？　そう簡単にダメになるものか」

方法は褒められたものじゃなかったかもしれないが、絶望の淵から這い上がるだけの意思を持った人物であったのは確かだ。

「ふう……私は甘いのかしらね」

「何を基準にすればいいのかわからないから、何とも言えない……  
だが、何事もバランスだろ？」



今回はマークが厳しく、リンディが優しく接することでバランスが取れるだろう、というマークにはもはや苦笑するしかない。

「どちらにしろ、注意して見守っていかなければならないのは変わらないわ」

そう言っつてこの場を離れるマークであったが、本心ではフェイトとアリシアが心配でたまらなかった。親しいもの、愛しいものの『死』によって変わってしまった存在を知っているからだ。

(下手に理解を示して反発されるのも問題だが……そろそろちゃんと話すべきかな?)

リンディに怒られたのをいい機会と思うべきか、などと思いつつフェイト達の部屋へと向かった。

「あ、マークー」

「やっときたね、おにいさん？」

「……思ったよりも元気そうで安心したよ」

部屋の隅でわかりやすく怒りを示すアルフは言わずもがな、フェイトもアリシアもお怒りのようだった。

「もう！ なんでこなかったのー！」

「いろいろ話しておきたいこととかあったのに……」

「えっと、ごめん」

どうやらしっかり考える時間を、と思ったのがいけなかったらしい。考える時間を作った結果がこれなのだと思いたいところでもあるが……

「よろしい！」

「……ちゃんと整理はついたみたいだな」

「うん、やっぱり悲しかったけど、母さんともしっかり話したことだったから」

そう言って笑って見せることができる2人は、やはり強いのだろう。そう認識を新たにしたマークに、アリシア達は宣言する。

「わたしはね、おいしゃさんをめざすの。おかあさんみたいな人たちを1人でも多くなおせるようにね」

「わたしはまだ具体的に決められたわけじゃないけど……道を踏み外しそうになった人たちを助けられるような人になりたい。もっと別の道だってあるんだよって、そう言ってあげられるように」

それを聞いたマークはこの上なく安堵する。この様子なら閉じこもることも、道を違えることもないだろうと。

「その言葉、確かに聞き届けたよ。俺もできる限り協力する」

もつとも、具体的に何をすればいいのかはリンディに相談することになるだろう。ほとぼりが冷めるまで地球で暮らすことが、遠回りになるかもしれない。

(一)の子たちは、それすらも糧にしそうだがな

その強い瞳を心強く思ったマークは、この子たちの味方であることを誇らしく思った。

## 第25話 「試験」

それからの時間は瞬く間に過ぎて行った。基本的に地球で生活するために、地球の文化の勉強と、ミッドチルダの法制度をいくつか延々と勉強し続けるだけ。時折フェイトのもとになのはからビデオメールが届き、その返事のビデオを作るときにはしゃいだぐらいだろうか。

「あの騒動を『はしゃいだ』で済ませるのか？」

「騒動だったって、俺が逃げ回って、アリシアがアルフに乗って追いかけてまわしただけだろ？」

「管理局をほぼ網羅する追いかっこを騒動と言わないでなんと云えと？ しかも録画したままだなんて……同の構造を外部に流すためにやったと思われてもおかしくなかったんだぞ」

現実としてはカメラに映るのを嫌がったマークを写そうと、アリシアが少し意地になってしまっただけのことだ。

「あなたが折れればそれで済んだことでしょうに……」

「いやぁ……あの話を聞いてからカメラを向けられるとどうも避けてしまっ……」

「……』写真を撮られると魂を抜かれる』ってヤツをか？ いったいどれだけ昔のことを……」

「俺からしたらこの技術力は、過去のモノなんかじゃないんだよ」

さらにマークを擁護するのなら、彼の持ち物の中に『魔王の魂を封印した神器』があったことを付け加えておこう。身近に実在した以上、絶対ありえないと切り捨てられなくなってしまったのだ。

「まあいいだろ、そのことは……それで、状況が動いたのか？」

「……ああ、プロジェクトへの情報提供も終わったし、ここでなきやでない仕事の類もすべて終わらせた。後はマークさんとフェイトの試験が終われば、何の問題もなく地球へ行ける」  
「そうか……」

マークたちはしばらく地球で生活をするつもりであったので、正式な局員となることはしなかった。だが立場上管理局の影響下にいる必要があったため、折衷案として『囑託魔導師』として登録することになったのだ。

「試験勉強の方はどうなんだ？」

「フェイトは順調みたいだな……俺の方は学ばないといけないことが多すぎていまいち進んでない気がする」

「試験は3日後だぞ、大丈夫なのか？」

「なんとかなるだろ」

その際試験を受けることになったのだが、戦闘能力はともかく、常識や教養に不安な部分があったためこころしばらく勉強を続けていたわけだ。

「……今日からは僕も試験対策を教えるから、死ぬ気で頑張れ」

「お手柔らかに頼むよ」

「それはあなた次第と言つものだ」

その後マークはクロノにしごかれることになるのだが、割と切羽詰まった状況にもかかわらずまったく危機感のないマークに、クロノの心労が増すばかりの時間となってしまうた。

そして肝心の試験では、クロノの苦勞の甲斐もあり、何とか基準点をクリアすることに成功したのだった。

「だがそれとこれとは話が別だ」

「当然だろ……これは実技試験なんだから手加減してもらっては困る」

フェイトも同時に試験を受けているため、初日にマークが筆記、フェイトが実技、2日目はその逆と言う形で試験が行われることになったのだ。マークたちに接触する人間を減らすためと言う名目で、実技試験の相手は必然的にクロノになる。

「……正直に言って、マークさんの実技試験は免除にしても問題ないんじゃないかと進言したかったが」

「これ以上下手な前例を作るわけにはいかない？」

「そついう事だ」

マークからしてみれば複雑ではあるが、ひそかにクロノとの再戦を喜んでいた。もちろん『戦士を止める』と考えている以上素直に喜べない事でもあるのだが……

(相変わらず矛盾しているなあ……)

己の内心に苦笑することしかできないが、長年戦場にいた本能が、勝つことを求められた義務感が、そして自身の種族の誇りがこのままの結果を良しとしなかった。ならば勝つしかないだろう。

「一応言うておくが、この試験はある程度の能力を示せばそれでいいからな。フェイトは勝たないといけないと勘違いしていたようだが、そんなことは断じてない」

「……そつだな、フェイトの敵もとらないといけないな」

「どつしてそつちの思考になる……」

クロノとしては、手札を隠したいとマークが思っていると発言であったのだが、どつやら逆効果のようであった。いや、本音を

言えばマークの『フォルブレイズ』を見て戦いたいと思う方がおかしいと思っっている。

(なんでこんなにやる気になっているのかは知らないが……覚悟を決めるしかないな)

管理局の思惑として、マークの実力を測りたいと思っているのは理解できる。かつてマークと戦闘したことがあるクロノに白羽の矢が立つのは、仕方がなかったと言えるだろう。そしてクロノには、戦うからにはそう簡単に負けるつもりはなかった。

『それでは、準備をしてください』

巻き添えを食わないために別室で合図をするエイミィの言葉に合わせ、クロノはバリアジャケットを展開しデバイスを構える。

もともと鎧を着こんでいたマークも『ハルベルト』を担ぎ、どんな攻撃がきても対処できる体勢をとる。

「魔道書じゃなくていいのか？」

「ああ、問題ない」

マークとしては、魔導師として遠距離で戦うであろうクロノに対するハンデ兼好んで使う武器というだけのつもりであったが、クロノにとって予想外のことであった。『フォルブレイズ』を警戒して接近戦を挑むつもりだったのである。だが、それならそれでやりようはある。

『それでは……始め！』

「！」

開始の合図と同時に、クロノは自身最速の『スティングーレイ』に

よる先制攻撃を行う。当たれば儲けもの程度の牽制であったが、マークはこれに対しハルベルトを打ち付けることで相殺する。

「まだまだ！」

「ほづ……！」

そこに追撃を加えるのは『ステインガーブレイド・エクスキューションシフト』タメが短かったため十分な数ではないが、それでも50近い数の刃が一斉にマークへと向かう。それをいつかの戦いのように、回避しながら相殺する姿にクロノはある確信を得る。

（やはり、バリア系の魔法を持たないのか！）

複数の魔力光弾を作り出し、マークに対して複数方向からの同時攻撃を仕掛けながらさらに思考を深くする。

（もともと『非殺傷設定』のない世界の出身だ。防御方法はまだ確立できていないはず！）

一撃でも当てれば勝機はあると確信し、さらにバインドを交え苛烈な攻撃を続ける。しかし、それはいつかの戦いの焼き増しにしかならなかった。

（当たらない……！ 1111までやっても!?!）

威力を度外視して限界まで数をそろえたにもかかわらず、マークはその攻撃を躲し、叩き落とし続ける。だがマークも防戦一方と言うわけではなかった。激しい攻撃の合間を縫って、あつという間に接近してくる。

「1111なものか……！」

「クッー！」

たかが一撃、されど一撃。マークの攻撃はバリアによって防がれたが、それでも攻撃の手を緩ませるには十分だった。そこへさらに連撃を加える。

(さすがにこの程度じゃ 防御に回るような愚は犯さないか……)

攻撃の割合は外から見ると、まだまだクロノ優勢だがその実は違う。マークに攻撃の余裕があるという事は、武器を切り替える余裕もできやすいという事だ。攻撃を躊躇し防御に回れば、一気に決められてしまうだろう。

(『フォルブレイズ』を使ってこない……使用に条件があったりするの  
か?)

マークが近接武器を使う事への深読みではあるが、クロノからしてみれば希望的な観測である。そうでも思わなければ戦えない。そしてその予測が事実だとしても、そう長いこと大丈夫なわけではないだろう。

(なら、賭けるしかない!)

本当は初撃に使いたかったが、マークがハルベルトを持っていたため断念した戦法に切り替える。

「接近戦!？」

「もとよりほかに勝ち目はない!」

もともと広範囲に高火力の魔法を扱うマークに魔法で挑むつもりはなかった。ハルベルトの攻撃範囲から出る動作を反転させ、杖状の



デバイスを思いっきり叩きつける。

「グッ！」

「はあああー！」

意表をついたためか、クロノの近接魔法『ブレイクインパルス』は、マークをハルベルトごと押し返す。だが、それだけであった。

「っのっ！」

「……」

その後が続けた連撃は、ことごとく防がれ反撃される。それはまるで、この距離が本来のマークの距離だと言わんばかりであった。

(まさか！ そんなことがあるわけ……！)

規格外の高火力魔法を持ちながら、近接戦闘もこなすマークに戦慄を隠せない。自爆覚悟で魔力刃、魔力光弾を打ち出すがことごとく撃ち落され回避される。そこにさらに追い打ちをかけるかのような声が届く。

「近接戦闘の方はこれぐらいでいいか？」

「何を……ガッ！」

刃を立てられたわけではない。ハルベルトの柄の部分で弾き飛ばされただけだ。だが、体勢を立て直して再び視認したのは、魔道書を構えたマークという絶望の具現。

『『ファイアー』』

「!!」

予想に反して使われたのは『ファイアー』だったが、それでも軽く見ている魔法ではない。その一撃はジュエルシードを宿した巨鳥ですら屠る一撃となるのは確認しているのだから。

「この、程度！」

「ほう、じゃあこれならどうだ？ 『エルファイアー』」

「！」

何とか回避し、防御して反撃を試みたクロノに対して、マークはあっという間に攻撃のランクを一つ上げてくる。その爆炎はクロノの視覚、聴覚を封じるだけにとどまらず、バリアジャケット越しでさえ皮膚を焼くような痛みをも与える。

「存外粘るな……だが、いたぶるのは趣味じゃないんだ。終わらせるぞ」

今まで戦いが長引いたのは相手に評価をさせるためであり、それも十分だろうと判断したマークはこの戦いを終わらせる魔法を選ぶ。

「こいつは、善戦したお前に対するサービスだ……うまく躲せたらもう一つつけてやる」

「……！」

魔道書を切り替える瞬間の隙を、クロノは全力の回避に使う。だが、マークが使用したのはそれで躲せるほど甘い魔法ではなかった。

「大地よ、怒れ『ボルガノン』！」

それは神器を除く、炎の魔法の最高位。大地を焼き尽くすかのような炎は、クロノを呑みこみ、この試験を終わらせる一撃となった。

「さすがにやり過ぎよ？」

「……「じめんなわい」

マークによって治療されたクロノが医務室へと搬送された後、マークはリンディに軽く説教を受けていた。軽く、で済んだのは『非殺傷設定』についての説明が中途半端な形でしか行われていなかったことが判明したからだ。

「いくら設定があっても人のやることに絶対はない。それぐらいわかる人だと思っていたんだけど？」

「あ……ホント、申し訳ない。軽率だった」

マークは、なのはの『スターライトブレイカー』を見ていたため、設定について過大評価をしてしまっていたようだ。だが、属性の違いを考慮しなかったのはやはり注意力が散漫だったと言えるだろう。

「少しよろしいかな？」

「……誰だ」

先程の反省点を考えていたマークに、初老の男性から声がかかる。マークの性質上、同員の側から話しかけられることは少なかったこともあり、いくらか警戒がにじみ出てしまったのも仕方のない事だろう。

「マーク君、こちらはギル・グラム提督よ。ほら、フェイトさんの

……」

「ああ、保護観察官か」

「急に話しかけてすまなかった……そういう事だから挨拶を、とっ  
ていてね。マーク・テストロツサ君」

「マークだけで構いませんよ。その名前は慣れないのでね」

そう言いながら握手を交わす2人であったが、マークは初めてフルネームで呼ばれてむず痒い思いをしていた。そんな思いを知らずに、グレアムは話を続ける。

「しかし今の戦いは素晴らしいものだったね。その若さで大したものだ」

「……まあ、戦場に立ち続けなければこれぐらいできるようになりますよ」

『若い』と言われることに疑問を持ちつつも、当たり障りのない言葉で返す。とはいえ、マークにとって真実でもあるのだが……

「その力を見込んで頼みがあるのだが」

「とりあえず聞きましょう」

「ふむ、一言でいえば、局の仕事を少し手伝ってほしいのだよ」

そう言って詳細を語ることには、近年増加の傾向にある凶悪犯罪者の逮捕だけでも手伝ってほしいとのことであった。

「こちらで居場所を突き止めるまではやるから、最後の一手だけだよいのだが……どうかな？」

「それぐらいなら構わないが……手柄を横取りされて憤るものも多くなるのでは？」

マークとしてみれば頼まれてやったことに対して逆恨みなどされでは、たまったものではない。だが、そこはちゃんと考えていたようですぐに答えが返ってくる。

「調査能力と戦闘能力が平均して高い者など、そう多くはないのだよ。戦闘はできるが逃げるのが下手な犯罪者もまた多い。危険な任務になるので報奨もいい」

もちろんほかにも色々なタイプがあるが、と付け加えながらマークの返事を待つ。対してマークは大いに悩んでいた。

(この話は確かに利点が多い)

拘束時間は少ないし、戦闘に自信のあるマークにとって危険はないと言って過言ではない内容。さらに特別手当なども出るというのだから、収入のないマークにとってこんなありがたいことはない。ただ一つある欠点は『戦士を止める』という意志に反する行為であることだけだ。

(だが現状、俺は戦う事しかできない……)

時間があれば何らかの技能を手に入れ、それを使い収入を得ることも可能だろう。しかし技能を習得するには時間がかかる。その間収入が無いのは、一般社会にとってつらいという知識は得ているのだ。

「わかりました……ただし、俺が辞めたいと言った時には辞めさせてもらいます」

「もちろん！ 本人の意思に反してまでやらせよとは思わんよ」

そのあといくつか条件を確認すると、感謝の言葉を残してグレாம்は去って行った。

「実動員は少ない、か……大変そうだな」

「いろんな世界を回ることになるから、求められるものが多くて成れる人が少ないのよ」

慢性的な人手不足、そんな中でマークの力は魅力的であったのだから。唯一の欠点は、本人に長く続ける気が無い事だろうか。

「まあ、それはとりあえず置いて……よかったの？　新しい魔法を使ってしまった……」

「新しいわけじゃ……そうだな、『フォルブレイズ』は見せているし、それより下のランクなら構わないさ」

まだ上のランクがあるのか、とリンディは誤解したが実際は同格が一つあるだけだ。後は他の属性のことだが、しばらくは隠しておいて構わないだろうと結論付ける。

「本当に呆れた実力ね……まだまだ底が見えないなんて」

「そうでもないぞ？　今回のクロノの攻撃を回避するのはかなり本気だったし、本来武器で相手の攻撃を受け止めるべきではないからな」

一撃でも喰らえばまずいことになるのを自覚しているマークにとって、前半の戦いは結構危なかった。後半だって近接戦闘をしながらの全方位攻撃は肝を冷やしたものだ。

「それでも、剣と魔法を同時に使えば容易に反撃できたでしょう？」

「……いや、そんな芸当はさすがにできない。だが、そういうばそんな芸当ができる武器があった」

「……」

リンディは余計な事を言ってしまったかと少し後悔した。

「あれでよかったのですか？」

自室へと戻ってきたグラムに対し、唐突に声がかかる。だが、その声に対して共通の認識を持っていて当然のごとくグラムは返す。それも当然、声をかけてきたのは彼の使い魔なのだから。

「下手に手を出して敵対されてはかなわんからな。少しでも地球から

離れる時間を作ればそれでよい」

目的の完遂まで、あとわずかというところまで出てきたイレギュラー。協力を得られるのであればそれが一番いいのだが、あのような不安定な立場の存在に事情を話すわけにもいかない。

「閻属性の魔道書をもつ者、か……彼の知識があれば別の手段を選べるかもしれない」

「さすがに危険すぎます。せめて信用できるか見極める時間がほしいのですが……」

「その時間を取れば、こっちの計画はもう終わってる頃になるだろうね」

結論として、不確定要素はなるべく蚊帳の外に居てもらうのがベストとなる。だが、地球暮らしを提案したのがマークである以上、必要以上に地球から離そうというそぶりを見せたら、何らかの疑いがかかるかもしれない。

「不確定要素があるとわかってても何もできないとは……歯がゆいものだな」

現状選べる最善の選択であるのは間違いないだろうが、それでもこれ以上手が出せないのが口惜しい。後は何事もなくことが過ぎるのを願う事しかできなかつたのだが、その願いはすぐに砕け散ることになった。

## 第26話 「襲撃」

試験が終わり、いざ地球へ！ というわけにはいかなかった。これから地球で生活するためには、ある程度の情報を前もって送らなければならぬということだ。

「ある程度文明レベルが高いと、個人情報とかをかなり国で管理しているところが多いのよ」

「億を超える国民すべてを管理しているだって？ とんでもないところだな……」

マークが今まで見たことのある最大の国でも人口2〜3000万だったのに、その数倍の人間すべてを把握しているなんて、はっきり言って最初は冗談かと思ったものだ。

「それが終わったら住居と生活用品の準備……まあ、2、3日で終わるから安心してちょうだい」

「……もういいや、細かいところはそっちにまかせる。それで、俺を呼び出した本題の方はなんなんだ？」

「ええ、フェイトさんたちの学校の件よ」

「学校？」

話を聞くと、義務教育なる制度があるとのことだ、フェイトとアリシアがその制度に引っかけられるらしい。

「入ることは決定しているんだけど……アリシアさんの学年がね……」

外見年齢に合わせると、どうしてもフェイトよりも下の学年になってしまうのだ。本人は『姉』である以上納得しないかもしれない。



「飛び級の制度があるところもあるし、同学年以上にできないこともないけど……」

「時間がかかる、か……」

そういつた特異な経歴を作るのが手間であるのはもちろん、それに見合った学力をアリシアが身に着けなければならぬ。そうするとかなりの時間が必要になるのは言うまでもないことだ。

「一応、外見年齢を上げる手が無いわけではないが……」

「あるの!？」

「人間を止めれば」

「……この話はなかったこととしておきましょう」

さすがに学校に入るために人間を止めるのは割に合わない。

「まあ、同じ学年になったとしても、周りの人がアリシアを『姉』と扱わないだろうし、別の学年のままでもいいんじゃないか？」

「言われてみれば……そうね、そう伝えておくわ」

「頼む」

こうなってくると学年だけでなく、いつそ学校も違うところに通った方がいいのではないかという話も出てくるのだが、こればかりは本人の希望に任せることになる。

「編入試験は今のところ問題なさそうだし、二人のことはいいかしら？」

「地球での生活は5年を目安とする、だっけか？ 迷惑をかける……」

「もともと長期休養の話はあったから問題ないわよ」

「」の話は最年少執務官となったクロノの体調を危惧したリンディ

の友人の提案だったのだが、まさに渡りに船と言ったタイミングであったのだ。それに保護観察期間が終われば、あくまでホームを地球においての話になるが、すぐに仕事に復帰することになる予定なのだ。

「それならいいが……まあともかく、これからもよろしく頼む。俺だけじゃ結局何もできないからな」

「そんなことはないと思っけど……私にできることならいくらでも」

こうしてお互いの協力を確認し合った二人は、地球での生活についての話し合いを続けるのであった。そんなことをしていたら、リンディのもとに突然通信が入った。

「緊急……こちらリンディ・ハラオウン。何かあったの!」

『艦長! 今、なのはちゃんのコに連絡を入れようとしたらつながらなくて……調べてみたら広域の結界の存在が確認できました!』

「なんですって!?!」

「結界……魔導師が戦う時に使っちゃったよな」

マークが軽く以前の戦いを思い返しているうちに、リンディは自分の権限の届く範囲に指示と申請を送る。その一連の流れは一流のそれであったが、一秒を争つかもしれない事態に、それだけでは間に合わないかもしれないとさらに思考を巡らせる。

「マーク君、本局の転送施設を使って先行してくれる? なんだか嫌な予感がするのよ」

「了解した」

『わたしも行かせてください!』

「フェイトさん……わかったわ、でも決して無理はしないでね」

『はい!』

おそらくエイミィと共に通信の場にいたであろうフェイトも同行を申し出て、許可を得る。間違いなくアルフも一緒に行くだろうからこれで三人だ。

「場所はわかる？」

「ここにはそろそろ長くいたと言えるからな、大丈夫だ！」

そう言って駆け出すマークに続く様に、リンディもアースラへと向かう。ただ、マークたちを本局に滞在させる都合上リンディも本局にいたため、アースラはしばらく実戦から離れていたのだ。スタッフがすぐに集まれる位置にいるとは限らない。

(最悪最低限の人数だけでの出動もあり得るわね……)

結界内の状況によってはかなり心もとない状況にもなりえる事態に、思わず舌打ちを漏らした。

「ナノハは!？」

「見つけた、あっちだよ!」

現場に到着し次第の索敵では、アルフが真っ先に発見した。さすがは狼を素体とした使い魔だと場違いな感想を覚えるが、それ以上の問題があった。

「遠い……!」

「フェイト、先に行け! お前が一番早い!」

「わかった!」

「アルフも可能な限りフェイトに続いて、フォローを!」

「あいよ!」

今回は以前の戦いとは違い、マークには『フェイトに協力する』と

いう縛りはないので、遠慮なく指示を出す。全速でなのはもとへ向かうフェイトを横目に、マークは三角飛びの要領でビルにのぼり、最短ルートで二人に続いた。

「くそっ、ナノハにはユーノも付いていたはずだろ!？」

それなのに戦闘が起こり、続いているという事は、少なくとものはとユーノのコンビと同格、あるいはそれ以上の存在がいるという事だ。

(いや、ナノハに切り札があることを考えれば格上の可能性が高いか……間に合え!)

そしてようやくなのはたちがいるであろう場所が視認できる範囲に着いた時、その場から赤い服の少女と、それを追うフェイトが空へと翔けて行った。

「また空を飛ぶ奴か……! ホントにどこかに飛竜でも転がってないかねえ!」

現状、飛行のできないマークにとって最悪の相性といっていい相手だ。最悪前線での戦闘をフェイト達に任せきりになりかねない事態に、悪態をつきつつ割れた窓からビルに入る。

「……大丈夫、とは言い難いようだが、間に合ってよかった」

「マークさん!」

マークの登場に反応したのはユーノだけで、その様子からなのはに相当なダメージが入っていることが予測できた。

「よかった……治療をお願いします!」

「言われるまでもない……状況は？」

「……わかりません。ただ、あの子が急に襲ってきたとしか……」

ユーノの話を聞きながら『ライブ』の杖を使用する。その回復速度はユーノの使用魔法の比ではなかった。

(悔しいな……ずっと隣にいたのに、こんなに何もできないだなんて！)

ユーノは自身の適正から、なのはを前衛にしなければ戦うことも難しいことに思わず唇をかむ。だが、そんな感傷に浸る余裕はないとばかりにマークはユーノに指示をする。

「ここだと、視界が悪すぎる。移動をした後なのはに防御を施し、戦線に復帰しろ。……できるな？」

「はい！」

「わ、私もまだ……」

「ダメだ、俺の回復魔法は優秀だと自負しているが、それでも怪我があった事実をなくすようなものじゃない……戦闘の継続は許可できない」

どれほど強力な回復であろうと、いや、強力であればあるほど体には負担となる。そういった意味では、今は戦場にいるため怪我の治療を優先しただけで、ユーノの回復魔法の方が優秀といえるぐらいだ。

「で、でも……」

「でもも何もない。いいから休んでいろ」

どちらにしる、デバイスとバリアジャケットを失ったなのはに戦線への復帰は不可能と判断し、マークは戦場へと向かう。敵はなのはを戦闘不能に追い込むほどの力を持つのだ。フェイト達だけでは荷が

重いかもしれない。

(遠距離からの援護……命中精度を考えれば『ファイアー』が妥当か)

そもそも囑託魔導師として活動するうえで、様々な制約を設けられているのだが、それでも負ける気がしなかった。

一つ、敵対者の身柄の確保を義務付ける。

かなりオブラートに包んでいるが、要は『間違っても殺すな』という事だ。この条件があるだけで、質量兵器の使用が許可されていても使いにくくなるが、もともとそのつもりであったので問題ない。

一つ、基本的に現場の局員の指示に従うこと。

これも問題ない。上官の命令通りに動くのは軍人の基本である。

一つ、『フォルブレイズ』の使用は、クロノ・ハラオウンあるいは、リンディ・ハラオウンの許可を必須とする。

さすがにこれはどうかと思ったが、神器クラスの魔法は他にもあるので呑んでおいた。もちろん、よっぽどのが無い限りは使わないつもりではある。

一つ、マークに施された封印の解除はクロノ・ハラオウン及び、リンディ・ハラオウンの許可を必須とする。

不殺を貫くのに『非殺傷設定』はとても便利な術式であるので、封印を解くつもりは現状全くない。

(他にもあったが、戦闘関係はこんなものか……)

改めて制約に問題が無いことを確認して、マークはフェイト達を探  
す。そして発見した場所は、やはりマークの手が届きにくい上空で  
あった。

《高度を下げる！ そこじゃ届かん！》

《アルフもいるから大丈夫！ このまま押し切れる！》

確かに、マークから見ても戦況はいくらか有利に進んでいる。だ  
が、それですむ相手ならなのは落とされることもなかったはずなの  
だ。だがそんな懸念に反して、フェイトとアルフのコンビは互角以上  
の戦闘を行い、ついに赤い少女をバインドで縛ることに成功した。

「終わりだね……名前と出身世界、目的を教えてもらおうよ」

フェイトが戦いの終わりを告げるかのように問いかけるが、マーク  
の中の疑問はそれで収まることはなかった。

「この程度なんて、そんなはず……」

「なんかヤバイよ……」

その想いを肯定するかのように放たれたアルフの警告に呼応する  
かのように、剣を携えた何者かが唐突に飛来し、フェイトを弾き飛ば  
す。

「フェイト……」

「シグナム……」

思わずそちらに意識をやったマークの隙を突くかのように、青い  
コートがアルフを叩き落とす。

(伏兵だと！ やってくれるじゃないか！)

「レヴァンティン、カートリッジロード」

「させるか！ 『ファイアー』！」

フェイトへ向かう女騎士へとマークは攻撃を加えるが、その一撃はたやすく切り捨てられ、その直後フェイトも叩き落された。

「マジかよ……」

相殺や受け止められることはあったが、さすがに切り捨てられたのは初めてだったマークは、思わずつぶやきながらもフェイトが叩き落されたビルへと走る。

(今の一撃、わざと気を引いてから放たれたからよかったが……それがなかったら直撃したかも知れなかったな)

先程の火弾を放ったものが居たであろう場所はすでにもぬけの殻であったが、これは思った以上に苦戦するかもしれないという予感に気を引き締める。

「……なんか言えよシグナム」

「大事な様で何よりだ、ウィータ……いや、思った以上の手練れがいるよつだな」

「……うるせえよ、こっから逆転するところだったんだ」

「そっか……」

それでも先程の攻防を見ていたためか、赤い少女には若干勢いがない。それを確認した女性は軽口に適当に返しながら、バインドを破る。



「ともあれ無事でよかった。お前が怪我でもしたら、我らが主が心配する」

「わかってるよ……もう」

少しむくれる少女に、回収して置いた帽子をかぶせ現状を確認する。

「実質3対4と数の上では不利だが、実力はその限りではない」

問題があるとすれば先程の火弾の男だが、集団戦から切り離せばそこまで脅威になることはないだろうと結論付ける。

「1対1と2対3に分けるが、異論は？」

「ふん、歴戦の騎士による連携ってやつを、見せつけてやるよー！」

そう勇んで飛ぶ少女から少し外れるように、シグナムと呼ばれた女性には火弾の魔導師へと向かう。もとより現在この場所は彼女たちの領域である以上、探索は容易い。

(見つけた！ しかし、こいつは……)

程なくして戦場を並はずれた速度で走る男を発見したシグナムは、進路をふさぐかのように降り立ちその姿に驚く。

「まさか一切の防具をつけずに戦場に出てくるような者だとは、さすがに思わなかったぞ」

「……何分、急な事だったものでな。鎧を着こむ暇がなかったんだ」

そんな男の返事に、シグナムは違和感を覚える。シグナムの知る魔法は『ミッド式』と『ベルカ式』の二つだが、そのどちらも防具の展開にそう時間がかかるものではない。だがその直後、そんな疑問を、

違和感を消し飛ばしてしまうだけの衝撃がシグナムに走る。

(すさまじい気迫だ……まさか、まだ十代であろうつにもかかわらずこれほどの気概を持ったものと戦うことになるとはな)

目の前の男が何処からともなく取り出した赤い槍を構えた途端、先ほどまでとは比べ物にならない存在感が放たれたのだ。しかしシグナムとて、その程度で気圧されるようなぬるい鍛え方はしていない。

「ベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将シグナム。それに我が剣『レヴァンティン』だ」

「……管理局囑託魔導師、ナーガー族の戦士マークだ。得物の銘は『フレイムランス』」

「いざ尋常の勝負と行こうか！」

「襲撃者の分際で……」

名乗りの直後の激突は派手なものにはならなかったが、それでもこの戦闘の趨勢を決める戦いになると、お互いが肌で感じる激突となった。

## 第27話 「戦場の想い」

「大丈夫？」

「うん、ありがとう、ユーノ」

新たに現れた敵に叩き落されたフェイトであったが、バルディッシュの防御により大怪我は免れた。さらに近くにいたユーノの治療もあり、戦闘の継続には何の問題もない。

「バルディッシュも、守ってくれてありがとう」

その言葉に、『当然のことだ』といった言葉を返す半身に笑いかけ、損傷部を復元する。そしてこの後の指示を仰ぐとしてフェイトはあることに気付く。

(そうだ……マークは視認できる範囲じゃないと念話ができないんだっ)

フェイト達から話しかけることはできても、答をもらうことができない。ならば自然とフェイトがこの後『こうする』と宣言し、それをフォローしてもらおうしかない。

「どうしたの？」

「ううん……ユーノ、この結界内から全員を同時転送することはできる？」

「……うん、アルフと協力すれば、だけど」

新しく来た敵に正面から叩き伏せられたことを考慮すると、戦闘で勝てる可能性は低い。マークに頼れば可能かもしれないが、一番の目的はなのは救出であるので、ここは引くのがベストであると判断す

る。

「わたしが前に出るから、その間にやってくれる?」  
「わかった」

マークはもう戦い始めているようだからそれは任せて、残りの2人をアルフと共に抑える形になるだろう。一度は何とかだったが、今度は2対2だ。厳しい戦いになるだろう。

《アルフ、マーク……これからユーノに脱出のため動いてもらう。アルフは結界抜きの手伝いもお願い……できる?》  
《厳しいけど……何とかやってみるよ!》

思った通り、マークからの返事はなかったが、それでもこれで目的は共有できたはずだ。

「それじゃあ……」  
「うん、行くっ!」

そうしてフェイト達も再び戦場へと向かう。その際不安そうにフェイト達を見るのはを見つけ、『大丈夫だ』と微笑み返す。

(そうだ……私たちの後ろにはなのはがいるんだ。絶対に、負けられない!)

決意を新たに、上空から迫りくる赤い少女に突撃する。

「はああああっ!」  
「でやあああっ!」

フェイトのバルディッシュと赤い少女のハンマーが衝突し、火花を

散らす。だが先程の一撃と段違いの重さに思わず飛び退く。

(そんな！ 何が……！)

「わりーがあっちの方が危ない奴みたいだからな……一瞬で終わらせてもらう！ カートリッジロード！」

「させない！」

その動作をユーノはチェーンバインドを放つことで防ぐが、それも一時的な事、回避の直後に赤い少女の持つハンマーがその姿を変え

「ぶっ飛べっ！」

「誰が……！」

スパイクのついたハンマーの反対から火を噴き突撃してくる少女に対し、ユーノが稼いだ隙に展開したフォトンランサーを打ち出す。

「効くかよ！」

「なっ?!」

だが少女はその攻撃を一切無視しフォトンランサーに突っ込み、直撃したはずなのにダメージを受けることなく接近してきた。フェイトはそのことを理解できず、一瞬ではあるが体が硬直してしまった。

「ラケーテンハンマー！」

「ぐっ！ あああっ！」

その一瞬により回避を行う時間を失ったフェイトは全力で防御を行つが、それで止められるような一撃ではなかった。最後の抵抗として自分から後方に飛んだものの、ダメージを殺し切るには至らず、ま

たもビルに突っ込むことになった。

「はああああっ…」

「じのっ…」

そこから少し離れた場所で、マークはシグナムと互角の戦いを繰り広げていた。いや、マークから言わせてみれば思わぬ苦戦と言ったものであるうか。

「魔導師ばかりだと……お前らみたいのがいるとは思ってなかったぞ」

「ふん、褒め言葉として受け取っておこう！」

そもそもの原因は、マークがこの地で戦うものは魔導師ばかりだと思っていたことだろうか。確かにマークの人間関係の中では、フェイトが最も近接戦闘を行える武器を持っていたし、その系統の戦闘方法の相手なら『フレイムランス』で十分だったはずなのだ。

(見通しが甘かったか……まあ、脆い得物を持ち出した俺が悪かった  
んだけども)

この世界の戦場のレベルを勝手に低く見積もり、本来魔法を使うために作られた槍で近接戦をしているのはある意味自業自得でもある。

「はっ…」

「おっ…」

そんな後悔ともいうべき思考が動きに影響したのか、今までにないきわどい攻撃が顔のすぐそばを通り、マークの肝を冷やす。そして、それを何とか躲してできた隙にシグナムはさらに攻撃を重ねる。

(フェイトほどの速さはないが、瞬発力があるな……一撃が鋭く、重い。死角に潜り込むのもうまいし、連撃も流れを理解している……)

相手の攻撃を躲し、受け止め、流して反撃をしながら、理想的なバランスのスペックを持つ騎士をつい観察する。その様子が余裕に見えたのか、シグナムはつい疑念を口にする。

「……本当に貴様、何者だ!？」

「一番最初に名乗っただろーが!」

シグナムが疑問に思うのも無理はないだろう。戦場に一切の防具をつけずに現れ、ヘルカの騎士と互角の接近戦をする魔導師など意味が分からない。

(しかも、奴は一切の傷を負っていないとなると……)

そうなのだ、マークはこの戦闘が始まってから一切の怪我を負っていない。これははっきり言ってありえない、異常と言って過言ではないことだ。

これは別に、シグナムと互角以上に戦うことがあり得ないと言っているわけではない。炎の魔力変換資質を持つシグナムと戦っておきながら、やけど一つ負っていないことがあり得ないのだ。

(余波が一切届いていない?　ありえん!　現に奴の衣服はとこどころ焦げているではないか!)

まだバリアジャケットをまとっていたのなら、鎧の一つでも着ていたのなら理解できる。だがマークは防具の類を一切付けてはいないのだ。それを異常と言わず何と呼べばいい?

「そーっ!」

「！」

つい意識が内側に向いたシグナムに鋭い突きが放たれるが、それを何とか弾き、距離を取る。さらに言えば、異常な事以外にもわからないことがある。

「……何をたくらんでいる？」「ここまであからさまだと、さすがの私も警戒するぞ」

「当然、逃げる算段だ」

「積極的に何をするでもないお前が？」「それとも、私を抑えていれば何とかなるとでも思っているのか」

そう、先ほどからマークは防御を中心に戦い、仲間を助けようとする気が見えないのだ。仲間が苦戦しているのがわからないわけではないにもかかわらずだ。

「あの程度なら、今後を思えばいい経験になるだろう。それに何もしないのではなく、する必要が無いんだ。俺らがここに来るまでに、何も手を打たなかったと思っっているのか？」

「……」

そう、マーク達は無理をしてまで戦う必要はないのだ。外にリンディ達がいる以上、いくらか時間がかかったとしても必ず増援があるのだ。

それに対し、シグナム達には増援が無い。もしあったとしても管理局に勝る増援はないであろう。時間がたてばたつほど、どちらに天秤が傾くかなどわざわざ言う必要がないことだ。と、そこで急にマークが顔をしかめる。

「まったくあの子は……なかなか人の言う事を聞かない子だな」

「何を……」



シグナムはマークの言葉に疑問を投げかけようとしたが、その言葉を最後まで紡ぐことはできなかった。目を見開き、それを凝視する。

「悪いが、これで終わらせる」

そのセリフと共に、マークがどこから取り出した新しい槍を構える。そこにあるのは、先ほどまでマークの扱っていた『フレイルムランス』が小枝に見えるほどの力を宿した聖槍。

「双聖器、炎槍『ジークムント』だ。半端な武器で全力を出すより、最高の武器で加減したほうがいいと判断した……誇っていいぞ？」

「ははは……ああ、確かにこれは凄まじい。そうだな、誇らせてもらおう……その槍の一撃を超えた後でな!!」

その言葉とともに、シグナムの纏う魔力が跳ね上がる。マークにはそれがシグナムの本来の力なのか、それとも生存本能が刺激されたことによる覚醒にも似た力なのかは判断できなかったが、それでもその一撃にすべてをかける意思は見て取れた。

「レヴァンティーン……」

相棒の呼びかけに答え、レヴァンティーンは三つのカートリッジを使用する。それはシグナムの限界を超えた強化であったが、目の前の脅威を考えればこの程度の無茶は許容範囲というものだ。

(そうだが、今やらせてほしいやるといつの……)

絶望的なまでの差を見せるマークに対して、それでも諦めるなどという選択肢はない。それは騎士として、家族として守るべき主のため

「紫電一閃！」

『『華炎』』

炎を纏ったシグナムによる極限の一撃、それに対するは、同じく炎を纏う槍によるマークの奥義。それは魔力付与攻撃というこの世界ではごくありふれた一撃。しかしその一撃はマークの人外の膂力と神器の威力という常識はずれの一撃に、さらに魔力という鬼手を足した極悪と呼べる一撃だ。

「うおおおおお………」

双方最大の攻撃は、この戦いに決着をつけ周りの建物を呑みこみ崩壊させるのに十分なものであった。

「……口先だけではなかったな。今の一撃は俺を越えるには足りなかったが、誇るに足る一撃であったぞ」

マークは目の前の碎けた剣を持つ血まみれで倒れた女騎士に向かって、聞こえていないとわかりながらも称賛を送る。もとよりマークに神器を扱わせただけでも相当なものであるのだ。この結果を責めることができるものは存在してはいけなさとマークは思う。

「ベルカの騎士か……もし出会い方が違えば、共に戦うこともあったかもしれないな」

剣を交えればすべてわかる。……とまでは言わないが、それでも何もわからないわけではない。シグナムの剣には、マークが羨むほどの『信念』に満ちていた。

「だからと言って、ここで逃がしたりはしない。何を望んでこんなこ

とをしたのかは知らないが、もうそれに手が届くことはないだろう」

そう言いながら、マークはシグナムに最上級の単体回復である『リカバー』の杖を使用する。

「まあ、俺の一撃もあっちには届かなかったみたいだな」

極大の一撃がぶつかり合ったせいか周りの気配が読みにくくなっているが、それでもあの子のしていることははっきりと感じられた。

「スターライトブレイカー……休んでるとは言ったんだがな」

そういうマークだが、なのはの気持ちもよく理解していた。自分の目の前で苦戦する友人をただ見ていただけなんてこと、10歳の子供が簡単にできることではない。

マークが急に方針を変えたのも、『見た目ほど苦戦しているわけじゃないから手を出すな』

との意味を含めたものだったのだが、どうやら伝わらなかったようである。

「……今からあそこに行っても間に合わないし、ナノハの一撃を合図にこの戦いも終わりかな」

そのわずか数秒後、桜色の閃光によって結界が砕かれ、戦闘が終わる。マークが、なのはに特殊な攻撃が加えられたと知るのには、そのさらに数分後のことである。

## 第28話 「誤解」

「それで、ナノハの容体はどうなんだ？」

「問題ないらしいわ。数日以内に完治するって」

「そうか……」

戦闘を終えて本局まで帰還したマークは、つい先ほどの戦闘で倒れたなのはの無事に安堵した。フェイト達は守るべき対象を守れなかったと落ち込んでいるようであったが、マークにとってこの結果であれば上々と言えるものであった。

「ところで、なのはにとどめを刺した一撃ってなんなんだ？ 非殺傷

設定だけではああはならんだろ」

「そうね、なんて言えばいいか……『リンカーコア』ってわかる？」

「いや……全く」

廊下を歩きながら、簡単なリンディの説明を聞くと、『リンカーコア』と言う魔力を生成する器官から直接魔力を奪われたとのこと、らしい。

「肉体にダメージはないけど、非殺傷設定とは全くの別物よ」

「何とも言い難い攻撃だな……またなんでそんな面倒なことを……」

「第一級搜索指定遺失物である『闇の書』を完成させるために必要な行為なのよ。『蒐集』と呼ばれていてね……とても危険なロストロギアよ」

リンディの言葉には、危険性を訴える以上の思いが込められているようにも感じたマークであったが、わざわざ聞き出すのもどうかと考え脇に置く。

「起こりうる現象は？」

「魔力を集め終わった後に暴走するの。無限に等しい再生能力付きだね」

「また厄介な能力だな……」

具体的な対処法を考えるにはもっと詳細なデータが必要だろうが、そもそも『無限に等しい再生機能』がある時点でほぼ詰んでいると言っていていだろう。対処としては暴走前に処分してしまうのがベストか……

「そっちは後で聞かせてくれ、それと俺の捕らえた女騎士はどうなっている？」

「まだ意識が戻っていないけど、しばらくは本局で拘留することになるわね。それにしてもよく捕縛できたわね……局の記録にある限りは、まともに対処できたことすら数えるほどのこと」

マークはリンディの感心した物言いに苦笑で返して、この事について明言は避ける。フォルブレイズに続いてほかの神器まで使用禁止にされたら、たまったものではないのだ。

「これから私たちは、『闇の書』の探索・対応を担当することになるわ。

……協力してもらえる？」

「もともと協力の約束はしているんだ。今更ひるがえすことはしないよ」

そう、マークは囑託魔導師の認定試験の後に、グラム提督に手を貸す約束をしているのだ。予想以上に面倒そうな事件であるとはいえ、約束を違えることはするつもりはない。

「ありがとう、助かるわ。……問題はフェイトさんかしら？」

「？ フェイトなら自分から手伝うと言ってもおかしくないだろう？」

これから家族になるかもしれない人が大変そうにしているのを、黙って見ていられるような子じゃない」

「……その話はまだしてないわよ。やっと和解できた母親が死んでしまつて間もないのよ？ それと、問題は逆よ……あまり仕事を手伝わせたら、年相応に遊んだりできなくなつてしまつてしまつてしょっ」

なるほど、と納得すると同時にマークの背中を冷たい汗が流れる。実はこの話をリンディに相談された次の日には、すでにフェイト達へと話してしまつていたので。

(あの子たちを形の上でも一人だけにしないっていうのは賛成だったからな……この世界の制度をあまり理解していない俺が、保護者の真似事をするよりずっといいと思うし、自分のことはやっぱり自分で決めるべきだろう)

話すだけ話したので、後は心の整理がついたところに結論を付けさせればいい程度にしか考えていなかったので、心情云々と言われると非常に耳に痛い。

「まあ、本人次第だろ……」

それでもなお、こつ結論付けてしまつという事は、もうこの性格を矯正するのは難しいという事なのかもしれない。

(いや、それよりフェイト達のことか……)

マークが脱線しかけた思考を元に戻そうとした時、そこに小さな影が立ちふさがった。

「ん？ アリシアか……一人で出歩くのは珍しいな」

確かに珍しいとは言え、今までもなかったわけではない。特にマークは連絡用と渡されたデバイスをまだ持っているので、調べればどこにいるかすぐ分かるから会いに来るといったこともあったのだ。

だがなぜ今、と疑問にマークが思っていると、アリシアがぽつりと言った。

「フエイト、けがしてた……」

「……ああ、なるほど」

マークはその一言で、アリシアの言いたいことを理解した。『なぜ、護れなかったのか』と問いに来たのだ。マークにも思うところがあったの行為だったのだが、今それを言ってもアリシアには言い訳にしか聞こえないだろう。

「悪かった」

「……」

それを聞くと、アリシアは何も言わずにマークのすねを思いつきり蹴飛ばして走り去った。さすがのマークも顔をしかめるほど痛かったが、何も言わずにアリシアの背を見送った。

「……何も言わなきゃ伝わらないわよ？」

「何か言っても伝わらない時もある……それに、あの時は助けに入る気がなかったのも確かだ」

「えっ？」

流石のリンディもこれには驚いた。その様子に苦笑しながらも、マークはその意味について説明する。

「敵に加勢が来るまでの戦いを見て、殺す気が無いのはわかっていたからな。それならどんな結果になっても格上との戦いはいい経験に

なる」

「万が一とか考えなかったの？」

リンディからしてみれば、我が子をなるべく勝算の高い戦場に送り込むよう苦心してきた今までを否定された思いだった。だがマークの答えはリンディの思考の斜め上を行った。

「万が一のない戦場なんてない。それなら、少しでも危険の少ない戦場で慣らしておいた方がいいだろう？」 戦場に立ち続けるなら、避けられない戦いもあるんだ」

その戦場は、圧倒的な格上が相手で『非殺傷設定』を使わない相手かもしれない。そんなとき今回のような経験が生きて、何とか生き延びることができるかもしれない、と。

「どうも騒動に巻き込まれやすい性質みたいだからな、フェイトの友人は」

「……確かに管理外世界に住んでいるにもかかわらず、この短期間に2度もロストログリアに関わるのはちょっと異常ね」

「話を聞く限り、必然性は多少なりともあるがな」

なのは高い魔力を有していた。だから事件に巻き込まれたという考え方だ。どちらにしろ、巻き込まれた後逃げ出さなかったのだから、資質はあると思われる。

(英雄の資質、か……確定はできないが、彼女なのかもしれないな)

マークの封印は、必要が無くなったから解かれたのだ。ではなぜ必要なくなったのか？ 共に封印された存在を滅せるものが誕生したからだ、とマークは考えている。



「まだ推測の域を出ないか……」

「何か心当たりがあるの？」

「心当たりというか、そういった宿命を持つ子なのかなって」

「宿命、ね……」

それは生まれたときから背負わされた役割か……リンディはそのようなものを認めたくなかったが、その言葉にどこか納得してしまった自分がいることにも気付いていた。

その後、リンディと別れたマークは本局の技術部に出向いていた。

「邪魔するぞ」

「あ、マークさん……タイミング悪いですね、ついさっきまでなのはたち居たのに」

「ん……まあ状況報告とかもあつたしな、後でちゃんとお見舞いには行くと」

ユーノが惜しそうに言うが、ここに来た本命は違う事なので軽く受け流す。ちなみにまだなのはと会っていないかったのは、境界のせいで戦闘中のデータが取れなかったらしい管理局に対して、口頭で説明をすることになったためである。ついでに、これを事細かに解説して管理局の面々をうならせていた。

「それで、こっちはどうなんだ？」

「はい、両機とも破損がひどいんですけど修復は可能です。あと局の人と話して、強度を上げようと試みているんですが……」

「難しいか……」

リンディも言っていたが、今後『闇の書』の担当になるのなら、今回のように途中で武器が破損するなど論外だ。だからと言って簡単に強化ができるのなら、そもそも今回のような事にはならなかったは

ずなので相当困難なのだろう。

「できれば頼みたいことがあったんだが……忙しそうだしまたにするよ」

「どんなことですか？ ……って、僕じゃなくて技術官の人に話さなきゃ意味がないですよね」

マークの目的の人を正しく理解しているユーノに軽く感心するマークだったが、しばらく頼めそうもないと思って軽く頼みたかったことを述べる。

「いや、防具について……『バリアジャケット』だったか？ それを俺用に作れないかと思ってな……あとは念話の代わりになる通信機か」「あれ？ マークさんは立派な防具を持ってたじゃないですか？」

そう言って不思議そうな顔をするユーノに、マークはその不便さのため息をつきながら訴える。

「着るのに時間がかかりすぎるんだ。ここに来るまでは行軍中どころか、戦時下においては常時着ていたし問題なかったんだが、ここでは基本的に着ていられないだろ？」

「なるほど、そうでしたね……ジュエルシードの時も、今回も、相手に合わせて動く形になりますもんね」

だからせめて破れない服を……と思つてのことだったのだが、タイミングが悪かったようだ。

「修理が終わったらまた来るぞ」

「お役に立てず、すみません」

「ユーノが謝ることじゃないって」

「あ、あのー」

そう言って立ち去ろうとしたマークに、ユーノが声をかける。

「その……僕に戦いを教えてくれませんか！」

「無理だ」

そう言ってマークはユーノの願いを一刀両断したが、それで諦められるようならもとよりユーノはマークに頼まなかっただろう。

「そこを何とか、お願いします……」

「お願いされてもなあ……それ以前に、なんでまたそんなことを？」

「……今の僕じゃ、なのはを守れないんです。でも、なのははきつと戦い続けるから、僕も力をつけないと……！」

そこまで聞いて、ようやくマークはユーノの言いたかったことを理解した。それと同時に、やはりマークにそれを聞くのは誤りであると判断する。

「とりあえず言わせてもらおうが、どんなに頑張ってもお前は戦場でナノハに勝つことはできないぞ……」

「うぐぐ」

別にユーノが弱いというわけではないとマークは思うが、ここは相手が悪いというほかないだろう。話を聞いた限りでも、一月足らずでフェイトの実力に迫る力を得た少女なのだ。それを前にしたら並大抵の努力や才能では越えるどころか、足元に立つことすら危ういだろう。

確かに、ユーノの『最前線に立つことになるだろうなのはを守りたい』という気持ちも理解できる。だからと言って適性のないところで頑張っても、双方を不幸にするだけの結果に終わるだろう。

「そ、それでも僕は！」

「言いたいことはわかるし、否定もしない。ただ、俺では教えられないだけだ。ほかの奴に頼め」

そう言って、今度こそマークは部屋から立ち去る。ユーノが直前に何か言いたげにしていたが、マークに教えられることはないのだ。

(そうだよな、この世界の魔導師を知らない俺に、ユーノに正しい戦術は教えられないんだ。それだけに惜しいな、彼は伸びるだろうに……)

ただマークと戦闘スタイルが違い過ぎるだけで、それなりに才能はあるだろう。そこまでわかってても、マークが教えてしまえば凡庸な魔導師で終わってしまう。できることと言えば模擬戦ぐらいだろうが、ユーノは単体で力を発揮するタイプではないのでやはり難しいだろう。

マークはそう結論付け、次の目的地へと向かって歩き去った。

「お、やっと見つけた」

「およ？ マークさんか、お疲れさま」

「マークさん……あ、その……」

ようやく見つけた目的の人物であるエイミィとなのはだったが、なぜかなのは様子がおかしかった。

「どうしたんだ？」

「その……指示を無視して」めんなさい！」

「ああ、なるほど」

直接指示を出したわけではなかったが、参戦は不許可としたのに出てきたことを謝っているのだろう。とはいえ、フェイト達が劣勢に立

たされているのを見て我慢できなかったというのを責めるのもさすがに酷だろう。

「まあ、とりあえず大事に至らなかつたのだからよかった。それに、正規の訓練を受けていないナノ八には難しい指示だったようだしな。今後は気を付けよう」

「え!？」

それはマークにとって『無茶な要求をして悪かつた』と言う意味だったのだが、なのはには『期待した俺が馬鹿だった』と言う意味に聞こえてしまった。

「魔力が回復しきるまで、無茶をしないでゆっくり休め」

「は、はー……」

一度悪く取ってしまったえば、後は連鎖的に悪い方へと考えてしまつ。これは戦力外通知か、足手まといにはもう期待しないという事だろうか……だがそんなのはの様子も、今はただ体調がすぐれないだけだとマークも、エイミイですらそう思ってしまった。

「……ふむ、思ったよりもダメージが大きかつたのかな？ もうちょっと話がしたかつたんだが、仕方ないか」

エイミイに連れられ部屋に戻っていったのはを見送りながらのつぶやきは、誰の耳にも届かず消えて行った。

「じゃあ、シグナムは管理局つてとこの人たちにつかまってもーたんか……」

「……ええ、まず間違いないと思うわ」

そこにいたのは、つい数刻前にマークたちと戦った騎士と車いすに

座った少女であった。

「ごめんなさいはやてちゃん……私たちの因縁につき合わせる形になっちゃって」

『闇の書』の守護騎士としての因縁と、主である八神はやてに嘘をついたことに心が痛む。だが、ここは守護騎士としてではなく、はやての家族として譲れない場所であるため、その痛みを気取られるようなまねはしない。

「わたしのことはええんよ……でも、シャマル達は今は何も悪い事なんてやってへんの」……」

その言葉にも黙ることしかできないのがつらい。そんな騎士たちの様子には気付かず、はやては今後のことを考える。

(過去を無かったことにはできないのだし、力づくで奪還するしかない)

(いや、そもそも管理局が以前と今の違いを把握していないだろうか、話し合えば道は開ける)

極端な考えが頭にうかぶが、情報が足りな過ぎる。かといって情報を集めるにはシグナムのことを考えれば時間がない。

(犯罪者として裁かれてしまっただけでは遅い)

(だが戦えばまた同じことが起こってしまう)

戦うにしても、相手は組織である以上多勢に無勢だ。話し合うにしても、10歳の少女に対等な交渉なんて無茶にもほどがある。結局はやてにはどうするか選べず、相手の出方を待つしか手はなかった。

だが、守護騎士たちにはそんな時間は残されていなかった。シグナムと言う騎士たちの将を失い、さらに切羽詰った状況に陥ってしまったのだ。

「だからって、やることは変わらない……」

「ああ……我等は、ここで立ち止まるわけにはいかない」

少女と男は、飛び立つ。それが主にたいする裏切りだとしても、為さねばならぬ。『闇の書』が完成すれば何とかなると信じて。

## 第29話 「海鳴市へ」

なのはの襲撃から丸一日たって、ようやくなのはに海鳴市への帰還の許可が出た。医師曰く『この若さで、これほどの量の魔力を奪われた前例はない。いくら回復が早いとはいえ、いや、早すぎるからこそもう少し様子を見るべきだ』と言われたためだ。

「お母さんもお父さんも心配してるよね……」

「そして僕は恭也さんに怒られるんだろうな……」

一応連絡は入れているとはいえ、襲撃を受け倒れたのだ。なのはの両親の心配は相当なものだろう。

なのはが魔導師となったことは、友人に目撃された後に両親と話をしたらしい。その時も、やはり一人で危険なことに首を突っ込んだことを怒られた。そんなことがあったのにまた家族に黙って出て行って入院までしたのだから、今回も相当怒られるだろう。

(まあ説明する時間もなかっただろうし、そのことはフォローするけど……ユーノは何をおびえているんだ?)

「でも怪我自体は大したことないし、検査も念には念を入れるためだったから、ちゃんと話せば大丈夫だよ!」

「僕たちも事情は説明するし、そもそもジュエルシード事件の際は最後まで戦うことも許可してくれたんだろう? そんなに心配することないだろう」

ちなみに今回海鳴市に来たのは、もともとここに住んでいたなのはと居候のユーノ(なのはが魔法のことを話してからは、人の姿で高町家で過ごしているらしい)、それにクロノとフェイト、最後にマークと子犬フォームとやらを採用したアルフだ。局員としてクロノがこの



一行の責任者になるのだが、周りから見ればマークが引率しているように見えるのは仕方のないことだろう。

「……やっぱりハラオウン提督も来たほうがよかったんじゃないか？」

「仕方無いだろう……艦長は今後の拠点の準備やらの手続きで手が離せないんだ」

高町家への挨拶は本来の責任者であるリンディが行うべきなのだろうが、最悪の事態を考慮すると1秒だって時間が惜しいのだ。だが、諸事情によりアースラがしばらく使えなくなってしまったため、新たな拠点を確保に奔走しなければならなくなってしまった。その結果アースラの2のクロノが出張ることになったのだが……

（はつきり言って不安だな……交渉事とかそこまで得意そうには見えないし……）

実際のところは、執務官であるクロノは全般的に高い能力を持つのであって、そもそもマークの基準がおかしいだけなのだ。

「それと、役職名は口に出さないようにとのことだったはずだぞ？」

「む、そういうクロノも『艦長』って言ったぞ」

「ぐう……使い分けなきゃいけない状況が長く続いたからな……どうしても仕事中という意識が無くならなくて」

「要努力だな」

確かに『闇の書搜索』という仕事ではあるが、場所が場所なので役職名を使うのはまずいと判断されたのだ。それなりに長いこと『母』と『上官』を分けてきたクロノにとっては大変かもしれない。

（まあ、フェイトもナノハも楽しそうだし……別にいいか）

一行は夜の郊外から高町家へと歩み続ける。季節は秋から冬へと移り替わる肌寒い道行であったが、なんだかんだでにぎやかな道程であった。

「……事情は分かりました。娘を守ってもらったこと、感謝します」  
「いえ、管理局に所属するものとして当然のことをしたまです」

なのはの父である高町士郎の感謝に、クロノは無難な言葉で返す。ただ士郎にも思うところはあろうで、かなり固い言葉になっているのは初対面であるマーク達も感じる事ができた。

「正直なところ、私たちは魔法について造詣が深いわけではありません。なのはが戦いに巻き込まれたことに気付くことすらできなかったんですから、協力できることなら精一杯やらせてもらいますよ」  
「助かります。さすがにここでは一切のつてがありませんから」

娘が危険にさらされていたのに、気付くことすらできなかったことを悔いるように言う士郎の姿は、なのはにとって逃げるなどと言う選択を考えることすらせず、ただ危険に首を突っ込んだことを怒られるより堪えただろう。

「まあ、名目上は確かに『護衛』だが、管理局ではもう襲われることはないだろうと予測されているそうだし……安心していいだろう」  
「そう……ですか……」

残念ながら確信を持って言えることではないが、それでも複数回襲われた例はないためそこまで心配する必要はないだろう。もし襲撃を受けたとしても、今回は最初からマークやクロノがいるのだ。

「俺から言わせてみれば、つまい言い訳ができたからちょっと遊びに

来たって言った方がしっくりくる」

「マークさん……その物言いはさすがにどうとかと思っぞっ。」

ちなみにマークが主張した裏向きの主張はフェイトの『編入試験』だ。もともとマークたちの住居にしようとしていた家では、闇の書探索と言う仕事の拠点とするには狭かったので新しく探すことになってしまったのだ。そのため立てていた予定が狂ったのを立て直すのに、『護衛』と言う仕事をつまく使ったのだ。

「まあとにかく子供たちは明日のこともありますし、今日のところは終わりにしましょっ？」

「そうですね……それではしばらくお世話になります」

「じゃあじゃあよろしくお願いします」

なのはの母である桃子の鶴の一声でこの場はお開きになり、フェイトはなのはの部屋に、クロノはユーノが借りている客間に、マークは恭也の部屋に泊まることになった。

「それで、まじめな話なんだが……」

「ちっきの話も不真面目だったつもりはないんだが？」

子供たちが休んでから、マークは恭也と士郎に先程の続きの話をすることになっていた。やはりマークが引率のように見えていたのだろっ。

「説明自体はちゃんと聞いているから問題ないが……管理局として、この一件はどう見ているんだい？」

「重要な案件ではあるようだが……今回ここに来た面子が一線級だ。増員は期待しない方がいいと思うぞ？」

「……さすがに若過ぎやしないかい？」

以前護衛の仕事をしたことがあるという土郎からしてみれば、形だけのことはいえ護衛としてきたのが3人と一匹と言うのは心もとないのだろう。さらに責任者が自分の半分の年齢にも達していないとなったら……

「いくら若いといっても、クロノは相応の努力を重ねて、その実力を上官に認められたからこそここに居るんだ」

「そうだね……失言だった、忘れてほしい」

「よろしい」

あえて偉そうに答えたマークに、微笑ましいとばかりの笑みを浮かべる土郎はやはりマークの実年齢を知らないのだろう。

(まあ、同員でもない人たちに一組織が教えるわけないか……キョウウヤは俺がマムクートだって知っているが、どうしようかな?)

少し迷ったマークであったが、自分からわざわざ話すことではないかと流すことにした。

「具体的なことは本拠地を確保してから始めるってことだから、今は娘が友人を連れてきたって感覚で構わないだろう。その後のことは家族で話し合うなり、同員と話すなりしてくれ」

「だからこうやって……って、マーク君は同員じゃないのかい!？」

「……友好的な関係を結びたいと思っている被保護者だ。そもそも、なぜそんな考えに至ったんだ？」

ジトリとした目を恭也に向けるマークだったが、気まずそうに眼をそらされた。

「あまりに普通に現れたから、もともと特殊な部署で働いていたんじゃないかって思ったんだ……ほら、潜入とか」

「そんな繊細な事、天地がひっくり返ったって出来ない。持つてる手札が良かったから、何とか話し合えただけだ」

いくら手札がよかったとしても、組織を相手取った交渉では使い手が未熟ならあつという間にむしり取られたらうに、などと士郎は思ったが口には出さなかった。

「それじゃあ協力者として、君は今後をどう見るかい？」

おそらく娘は手を引くことはしないだろう、と士郎は考えている。それは事実で、今まさにフェイトとなのはお互いの決意を語っていた。

「対策本部が置かれるという事は、この件は長引くとみて間違いないと思う。間違いなく戦いになるだろうが、保有戦力は引けを取らない以上よほどのことが無い限り無難な終わり方になるんじゃないか？」

情報が少ないからこれ以上のことはわからないな、と付け加えるマークに士郎もおおむね同意する。初戦の突発的なものでさえ1人確保することに成功しているのだ。準備が整えば、戦いが起こるたびに何かしらの成果を上げられるだろう。

「それなら問題ないかな？」

「……思ってた以上に寛容だな。知らないわけでもないだろうに」「その年でちゃんと理解できている君もすごいと思うよっ」

どれだけ万全を期しても、防げないことはある。だが、だからと言って娘の行く道を阻むのも違うと思うのだ。

「本人にその意思があるのなら、早い遅いは周りのエゴだと思っただ。幸い負けることも知れたみたいだしね」

できれば娘と共に戦うことになる君たちのことも知りたい、と言う  
士郎たちにマークは少しだけ自分の話をして、ぜひ手合わせを、と言  
われ続けることになった。

「ついに出了たわね、天の声の人！」

「残念だが神託を授けた覚えはないぞ、アリサ・バニングス」

次の日、フェイトの編入試験の付き添いでなのは通う学校に向  
いたのだ。そこで出会ったのはビデオメールにも映っていたなのは  
の友人たち、月村すずかとアリサ・バニングスだ。

「え〜と……天の声っていうのは、テレビなんかであるナレーション  
のことですよ？」

「む？ テレビになんて出了覚えもないぞ？」

フェイトとの出会いをひとしきり喜んだあと、アリサのマークに対  
する第一声がそれだったのだが、すずかの説明にさらに首を傾げる  
マークであった。それには苦笑しながらなのはが答えた。

「毎回ビデオメールに声が入ってましたよ？ それでも一回も姿が映  
ることが無かったから『天の声の人』って」

「なん、だと……」

大げさに驚くマークを見て、みんなが気付いてなかったのかと逆に  
驚いたが、マークが盗られた声が無いか確認し始めて、慌てて止める  
ことになった。

「今まで大丈夫だったんだから、盗られてないよ」

「映ってた私たちだって大丈夫でしょ？ 何を心配する必要があるの  
よ」

それでも不満そうだが、不安そうにするマークを見て、思わず笑ってしまった四人を責めることはできないだろう。

「もういい……フェイト、そろそろ時間だ」

「あ、うん……じゃあみんな、後でね」

短い時間であったが、何にも代えがたい友人たちとの出会いを堪能したフェイトは、編入試験では実力を出し切り、無事みんなと同じ学校に通うことになる。もっとも、この結果が本人に伝わるのもう少し後のことであるが……

「ねえシャマル、わたしも練習すれば魔法を使うことはできるんか？」

「ええ、確かに適正はあるでしょうけど……」

「なら、最低限自衛できるぐらいの魔法を教えてくださいへん？」

それは守護騎士たちの将が捕まった夜を越えたときであった。いまだどうすればいいのかわからないが、それでも何かをしなければと、必死で考えた答えでもある。

「どんな選択をするにしても、今のわたしじゃ足手まといにしかならん……」

「はやてちゃん……」

確かに今は足手まといでも、現状を良しとせず上を目指せばいくらだって変わる。否、変わらなければいけないのだ。家族を取り戻すためにも……

「わかりました……でも、これだけは約束してください。無茶な真似だけはしないで」

「うん、約束する！ これからよろしくな、シャマル先生！」

こうして少女は動き出す。もう一度、家族で笑いあえる日々を取り戻すため……そして、他方でも、それぞれの思惑を果たすために様々な事象が動き始める。

「予想以上の実力だね……」

「ええ、だが資料はいくつか手に入れることができた。……ここまでしてしまえば、もはや戻る道はない」

そう、ある男のデータとあるデバイスを手中に収めた今となっては、たとえことがうまくいったとしても犯罪者となるしかないだろう。

「実行は彼らが完全に動き始めた直後」

「何としても『アレ』を完成させなければ……」

その決意の一方で、今から行う行為への嫌悪も感じていた。だからであろうか……自分たちの行動が正しいと信じなければ動けなかった。邪魔をするものが悪と思わなければ実行できなかっただろう。

そう、信じなければいけなかったがゆえに、自分たちの行動が過激になっていくのに気づくことは最後までなかった。



### 第30話 「日常の想い」

「いらっしゃいませ〜……って、ナノ八達か」

「え？ え？ 何でマークさんが翠屋でウェイターやってるの!？」

「暇だったから手伝ってるだけだ。他意はない」

翠屋の制服を着たマークは、フェイトの編入試験やアリシアの公立小学校へ歩編入手続きなど、リンディに頼まれていた雑事を済ませた後、いつの間にか翠屋の手伝いをするようになっていたと、軽く説明した。

「それより入口からどけ。客の邪魔になる」

「マーク君、口調は？」

「他のお客様の迷惑になりますので、お席へ案内しますね？」

桃子に注意され、微妙に変な言葉遣いになったマークに案内されたのは、すずか、アリサの3人はそのままマークを質問攻めにする。

「暇だったって……アンタの仕事はなのはの護衛でしょ？」

「……今は」

「マーク君、フェイトちゃん、もう終わりにしちゃっていいわよ。も

ともと人数が足りなかったわけじゃないんだから」

「……」

「フェイトちゃんも手伝ってたんだ」

桃子の言葉で、隠れることを諦めたフェイトがカウンターの影から現れる。その姿はマークと同じように翠屋の制服であったが、さすがに本格的に店の手伝いをやらせていたわけではないだろう。

「制服似合ってるね、フェイトちゃんもウェイトレスやってたの？」

「あ、ありがとっ、すずか……ちょっとだけ、テーブルを綺麗にしたりするくらいだよ？」

真つ赤になりながら答えるフェイトに、なのはとアリサも褒め言葉を重ねる。マークはそんな様子を横目に見ながら、桃子からケーキと飲み物を受け取りテーブルに着く。

「モモ」からだ。フェイトも、エプロンを外せばここで過ごしても構わないそうだぞ」

「あ、うん、わかった」

休憩中に店員として扱われない最低限の衣装替えを行い、フェイトも席に着く。それからそろってお礼を言って、ようやく元の質問に話が戻った。

「いや、相手がいないのに何をしろって言うんだ？ 奇襲するのは基本的にこの地では不可能だしな」

「この世界で戦おうと思ったら、まず結界を張って外界と切り離さなくてはならない。そんなことをすれば何をしていたって気付くので、相手が攻めてこない限りはそこまで気を張っている必要はないのだ。」

「それで翠屋の手伝いを？」

「ああ、かつての戦友が酒場を開いたことがあってな。それを手伝った経験があるから、何とかできるかと思っただが……」

結果は微妙なものだった。大きなミスをするようなことはなかったが、営業に貢献するようなこともなかった。何度か接客態度を改めるように桃子に注意を受けたので、総合的にマイナスかもしれない。

「まあ、あんたの容姿に惹かれて店に入ったお客さんが居ればイーブ

ンでしょ？」

「もともとこの店は看板に困ってないだろうが」

アリサのフォローも軽く流したマークであったが、実はなのはたちが来るまでに何度か声をかけられていたりする。ただ、マークはそれを『いつもと違う人が居たから気になったって声をかけてみた』程度にし受け取ってなかった。マーク以上にフェイトに話しかける客の方が多かったのも一因かもしれないが……

「マークさんがそう思っているのなら、それでいいですけど……今日限定ですか？」

「いや、アルバイトとして雇ってもらえることになってる。局の手伝いが不定期だから、諦めていたんだが……何かと融通してくれてな」

さらに言えば、地球のことや管理世界について、知っておきたいことは山ほどあるのだ。戦い以外で収入を得たいとは思っているが、今はそれ以上にものを学ぶ時間が欲しいので週2日のみ翠屋で働くことにしたのだった。と、そこまで話したとき、事もあるうか店主が口を挟みに来た。

「本当は鍛錬に付き合っただけだね」

「シロウ……何で俺よりも巧い奴の鍛錬に付き合わなきゃならないんだよ」

「僕より強い人が何を言ってるんだい？」

士郎から見たマークの適性を言えば、明らかに間違った方向へと進んでいるように見えたので、つい口を出してしまった。そう言うて士郎は笑うが、平和を享受したいマークからしたら余計なお世話である。

「詳しく聞いてもいいですか？」

「もちろん……って言っても、『手合せと店の手伝いどっちがいい？』と聞いたら『手伝い』と言われたただけだね」

「そついえば以前、恭也さんとの手合わせも断ったんでしたよね？」

さすがの言を聞きマークに視線が集まるが、マークは取り合わずに士郎に別のことを問いかけた。

「そんなことより、用件があつてきたんだろ？」

「……はあ、まあいいけど。クロノ君から電話が来たんだ。『本局に顔を出すから来てくれ』だってさ」

「了解した。フェイト、ナノハ、行くぞ」

スズカとアリサはまたな、と言い残してあつという間にマークは出て行ってしまった。二人の魔法少女もあいさつもそこそこに慌てて出て行ってしまふ。

「なのはもフェイトも戦うのね……私も魔法が使えれば手伝えたのに」

「……今度わたしたちも何か手伝えないか聞いてみようか？」

士郎は、友達が戦っているのに助けることができない、と落ち込んでいる少女たちに声をかけようとして止める。剣士として一線級の力を持っているのに戦いに参加できない士郎もまた同じ思いだからだ。

「修復したデバイスの説明って、俺来なくてもよかつたんじゃないか？」

「マークさんは別の要件だ。……グレアム提督が話をしたいって「なるほど」」

話と言っても見当もつかないマークは首をかしげるしかなかった

が、それよりもフェイト達にとっての朗報が勝った。だが、デバイスの修理が終わったのかと喜んだフェイト達に対しては待ったがなかった。

「確かに修復は終わったらしいが、フレームの強化にもう少し時間がかかるらしいんだ」

「え？ 強化って？」

「以前聞いた時はかなり困難だって話だったと思ったが？」

クロノの話に首を傾げるなのは達だったが、続く説明を聞いて納得した。

「なるほど……あの女騎士のデバイスか」

「確かにすごく頑丈だったよね……バルディッシュじゃ受け止められないくらい……」

以前の戦いで捕縛したシグナムのデバイスからデータを取った結果、困難であったレイジングハートとバルディッシュのフレーム強化が可能となったのだ。その時の戦いを思い出したフェイトが少し沈んでしまったが、なのはと小声で何かを話すとあっという間に立ち直った。

「うん、次は絶対負けない！」

「意気込むのはいいが、熱くなり過ぎるなよ？」

何となく不安を覚えたマークであったが、あまりうるさく言ってる気を削ぐのも悪いと思い一言注意するだけに収める。そうして二人と別れたマークは、クロノと共にグレアムのもとへと向かった。

「失礼します」

「おお、久しぶり……と言うほどではないか、呼び出すことになって申

し訳ないね」

「いえ、重要な役職に立つものが下手に動けないという事は理解している」

「そう言ってもらえると助かるな」

軽く挨拶をして席に着いたマークは、出された飲み物が紅茶であったことに軽く落胆する。

「紅茶は苦手だったかな？」

「いや……」うちに来てコーヒーが気に入っただけだ」

グレアムはあまりにストレートな物言いに思わず笑ってしまいがらも、次からは「コーヒーを用意しておこう」と約束をした。

「それで、今回はどのような用件で？」

「……そうだね、先に話を済ませてしまおうか」

マークとしてもいささか性急かと思っただが、いつまでも呼び出された理由がわからないのは気持ちが悪かったのでさっさと質問してしまった。それに対して少し言葉を選ぶかのような間を開けて、グレアムは今回呼び出した用件を語り始めた。

「以前の武力要請を覚えているかね？」

「当然だ」

「そのことなんだが……君が『闇の書』捜索に加わることになったと聞いてね、どうしたものかと悩んでいたんだよ」

どういふ事だ？ そうマークは眉をひそめると、グレアムは言葉を続けた。

「いつ何が起るかわからない状況にある君に頼みごとをするのは気

が引けてね……とはいえこの手の任務は待機時間の方が長い」

「そういう事か……そこらへんは俺ではなくリンディと話してくれ。俺が居なくても戦局がそう変わらないと判断するなら、こっちに出向くことに反対はしない」

そう言ってマークは判断を管理局に一任してしまった。これにはさすがのグレラムも驚きを隠せない。

「い、いや……それは……いいのかい？」

「もともとこの話は、俺みたいなのに頼みたい任務があったから出た物だろう？ 流石に帰る間もないほど詰め込まれては困るが、余裕のある日程であれば構わないさ」

確かに管理局が人手不足であるからこそその申し出であったが、ここまで好条件で受けもらえるとは思っていなかった。……いや、それは違った。

「……貸しを作ってしまったようだね」

「おや？ この程度で貸しと思ってくれるのかい？」

その言葉にグレラムはしてやられた気持ちになる。ひよっとしたら、前回にこの話が出たときに乗り気でなかったのもブラフだったのかもしれない、と思えてきてしまう。

(とはいえ、前回もそうであったが結論は出ている)

できるだけ、それでも不自然にならないように地球から離れていてもらいたいのだ。ならばこの程度の貸しは許容範囲であるだろう。それに加えて、もう一つ手を打っておく。

「あと、役に立つかはわからないが……『無限書庫』も解放しよう。我

らとは異なる知識を持つ君なら、また違ったものが見えてくるかもしれない」

『無限書庫』?」

「次元世界のあらゆる情報が集まった場所だ。……ひょっとしたらマークさんの出身世界の情報も見つかるかもしれない」

首を傾げるマークに対してクロノが簡単に説明を加える。グレアムとしては『闇の書』対策にどうかと思っただけの提案に見せようとしたのだが、別方向で解釈されてしまったようだ。

「そうだな……今度覗かせてもらおう」

もはや帰る場所などないと思っただけのマークにとっては意味のないものだが、それでも好意として受け取った。

「用件はこんなところか?」

「ああ……仕事については後日、いや、いくつか資料が手元にあるから渡しておこう」

「準備のいいから」

なんだかんだ言って手伝ってもらったグレアムに対して苦笑を漏らしながらも、マークは資料を受け取りその場を後にした。

「そう言えば、シグナムはまだここに居るのか?」

「シグナム? ああ、女騎士か……居るはずだが、会いたいのか?」

「いや、あれがあれがそこまで強い意志を持ったのがどんな理由だったのか聞きたかっただけだ」

おそらく尋問の類は行われているだろうと予想したマークは、結果のみをクロノに尋ねるが良い返事は帰ってこなかった。



「思いのほか口が堅いらしい。いまだ何の情報も口にしていないとか……」

「ほう……意外、でもないか。強い信念を持った奴だったし」

そう納得するマークだったが、クロノからしてみれば情報を引き出せないのは思った以上にきつい。

「もしよければ話をしてみないか？ 実際剣を交えた君になら、何か

しらの反応があるかもしれない」

「いいだろう。いつだ？」

「一応申請をする必要があるから……今度なのは達のデバイスが完成したときにも」

「了解した」

もう一度あの騎士と話ができる。それはマークにとって思いのほか心躍ることであったのだが、本人はそれをあまり自覚していなかった。

### 第31話 「蹂躪」

「いや、これはもう一家に一人マーク君の時代だね。」

「……まあいいけど、それよりエイミイって俺のこと君」付けだったか？」

「いいのが、それで……。」

今まで行っていた作業がひと段落したところに挟んだ休憩では、残念ながらまだ荷物は箱の中であるため缶コーヒーでの一服となっていた。というのも、本日ようやく海鳴市への引っ越しが行われているのだ。

「前は『さん』付けだったよ？ ただ、これからここで生活するんだから、『君』にした方がいいかなって。ほら、私たち外見年齢はそこまです変わらないでしょ？ ダメだったかな？」

「なるほど、いや構わないさ。ただ、実際の年が年だからこんな呼び方をする奴は少なかったからな。」

慣れない呼ばれ方なので、いくらか反応してしまうだけ。それこそ呼び捨てか『殿』『様』等と呼ばれてばかりいたのだから、それぐらいは勘弁してほしいところだろう。

「それにしても、本当に力持ちだよな。予定より一時間も早く荷物の運び入れが終わっちゃうんだもん。」

「……そうだな、行軍なんかで荷物を運ぶのはそこそこ慣れていたらかな。」

「だが、ここを拠点とするのにここまで物資が必要だとは、正直思っただけだったよ。」

アースラの整備はそれなりに時間がかかるという事もあるが、それ

以上にかなり長い期間マークたちがこの地で過ごすための処置でもあるのだ。ひよっとしたらいずれ『管理局地球本部』として定着してくるかもしれない、などと益体もないことを考えるマークであった。

「それは認識が甘いつてもんだよ、クロノ君？ 特に闇の書の探索のため、かなり広範囲をカバーできる機材を持って来てるんだから」「そうだな……… 辺境に砦を立てるのに、生半可なものでは何の意味もないのと同じようなもんだ」

クロノはマークの微妙なたとえに思わず突っ込みそうになるのをこらえ、言われてみればとばかりに質問を繰り返す。

「……… 所謂いえばマークさんは元軍属だったな。 軍人として今回の件はどう見る？」

「ん〜、時間はかかっても、危なげなく終わるんじゃないか？」

「言い直そう……… 戦力的にはどうだ？」

マークの基準を聞くことで、マークの出身世界の戦士たちの実力を把握したいという思惑もある。だがそれ以上に、フェイトとなのは巻き込んだの戦いになることに対する不安があった。

「シグナムとの対比になるが……… 総合力ではクロノでも劣ることになるだろうな」

「それほどか………」

「ただまあ、元々とんがった能力を持つフェイト達なら勝ち目はあると思うぞ？」

総合力でいえばクロノの安定感や抜群だが、その分意外性というか、起死回生の一撃のようなものが無いのだ。そのため同じバランス型であるシグナムと戦うのはかなり厳しくなる。

「じつやって聞くと、同じバランス型で圧倒したマーク君の実力がよくわかるよね」

「いや、俺も膂力の突出型だぞ？」

そのマークの言葉に、思わず二人は固まってしまった。

「……確かに傀儡兵と戦っていた時にはすごい力だと思ったが、技も速さも十分あるだろう？」

「魔力もかなり高いし……それで突出型なの？」

マークはこれを聞いて思わず苦笑してしまう。確かに全体的に高い能力を持っていると自負しているが、それでも上には上がいることを知っているからだ。

「技については武器を思い通りに振るえる程度だし、速さだってフェイトのほうが速い位だぞ？ 魔力にしたってナノ八には劣るし」

だからと言ってマークは二人に負けるとは思わない。膂力に任せた瞬間的な速さならフェイトを越えると思っっているし、魔法攻撃にしたって神器を使わずともなのはスターライトブレイカーを瞬間的には越えることができる。

だが、フェイトのように相手の視界から消えるような機動はできないし、なのはと正面から撃ち合って勝てる魔法は使えない。

「それでも十分とんでもないよ!!」

「結局総合的な『速さ』と『魔力』では劣っていると見えるし、逆に膂力だけは追隨を許さないという自信がある」

それゆえの突出型だ。そして、それゆえに突出型にはそれぞれ弱点も多いのだ。よく言われるのは『力には技』と言ったものであるうか

……

「じゃあ、マーク君でもすごい技を持った相手とかだったら負けることもあるっ。」

「さすがに踏み込み過ぎだぞ？」

「あ、ごめん……。」

マークは管理局に敵対する気が無いとはいえ、それでも個として強い力を持った存在を危険視するものはそれなりにいるのだ。

「まあそうだな……俺の膂力を無効化できるほどの使い手なら恐ろしいだろうな。」

「結局答えちゃった……。」

「それほどの奴には会ったことが無いしなあ……。」

正直に言ってマークの身体能力を超える攻撃を繰り出すような存在は、英雄と呼ばれた存在の中でも少数派だ。

「竜殺しとか持ってこられたら話は変わるかもしれないがな。」

「あ……それも言っちゃった。」

「一応竜人族と言うのは管理局には伏せてある。真竜ナーガー族と言うのもな。」

「それでいいのか執務官……。」

少し、いやかなりお人よしな事を言う執務官にマークは呆れた顔を向けるが、お互い様だと返されてしまう。

「僕たちまで危険視されないように、弱点まで自分で答えてしまう君が言ってもな。」

「そうだね、説得力ないよね。」

「……ブラフだったりって考えないのか？」

「そんなこと聞く時点で語るに落ちているな。」

がつくりと肩を落としながらも、なんだかんだで甘い奴ばっかりだと、マークは自分の人との出会い良さに感謝しながら、引っ越し作業の続きに戻っていった。

そんな引越し騒ぎもひと段落し、フェイトはなのと同じ小学校に、アリシアは近くの公立校に編入をしたところに、ようやくフェイト達の新デバイスが完成した。

「強化しただけだから新デバイスってわけじゃないよ？」

「コア以外はほぼ新しいパーツに変更したって話じゃないか。新デバイスって言って過言じゃないだろ？」

「それでも違うんです！」

マークの微妙な表現に反発しながら、二人はデバイスを受け取りに行ってしまった。何がいけなかったのかと考え込みそうになるマークに、クロノは苦笑しながらさっさと答えを告げる。

「あのレベルのインテリジェントデバイスなら、もはや相棒と言えるからな」

「そうか……それじゃあ配慮が足りなかったな」

新しくした通信用のデバイスを使い謝ると、すぐにすぐに返事が返ってきた。

「……使ってみたかっただけじゃないだろうな」

「まさか、でも助かった。これで戦場での意思疎通には困らないからな」

「一応マークさんには前線指揮を執ってもらうことも多くなるだろうから、そのための投資だ。気にする必要はない」

まだ少し疑いのまなざしを向けながらも、フエイトの要請で作った新しい通信機について答える。

「簡易AIが組み込まれているから、念話と同じ要領で使えるはずだ。……細かいところはデバイス任せで問題ないから、かなりの効果範囲が望めるようになる」

「実際使いこなせるかは別の問題だがな」

そんな話をしながら、以前申請したシグナムとの対話……の前に、グレアムの用意した資料をある部署までとりに行った。

「あくまで犯人の個人情報をもとめたもので、居場所なんかは任務直前に聞くことになるんだな」

「さすがに居場所なんかの情報を持ち出すわけにはいかないからな」

その資料について目を通し、歩みが遅くなっていたところに緊急の通信が入る。

「どうした？」

「……ついに出たようだ！」

「そうか……彼らの大将との話は次回に持ち越しだな！」

そうして彼らは駆け出す。彼らの代わりと言わんばかりに、独房へと向かった存在に気付くこともなく……

「やっぱり飛行できるようにしないとダメかな……」

飛行ができないため戦場の端の方に転移されたマークは、前回と同じように全力で今回補足した相手のもとへと向かっていた。

「せっかく同時に戦場に来たのに、先制攻撃に参加できないなんて情

けなさすぎるって」

移動を始めて割とすぐに、上空で爆発が起こったのは確認している。だが思ったように移動ができず、対象を視認したときには、後から来たはずのフェイトとなのはが到着していた。

『状況は？』

『まだ始まっていない……と言いたかったが、なのはとあの赤いのが少し口論のようなものをした』  
『ほっ……』

曰く一対一の勝負を申し込んだ、と。マークとしては頭を抱えたくなりそうなことだったが、クロノはそこまで悲観している様子にはなかった。

『僕とユーノで闇の書の主を探す。だからマークさんたちで、彼らがある程度追い詰めてほしい』  
『なるほどね……』

ようは派手に戦って本命をあぶりだせという事だ。マークとしては一人ずつ確実にと思うが、短期決戦を目指すのならクロノの案の方が優秀だ。

「まあいいだろう」

「てめえ……」

「マークさん……」

鋼の大剣を取り出し、マークは戦場の中心へと降り立つ。それを見た、相対する赤い少女と浅黒い男が警戒を深め、なのはが熱くなっていたのを自覚したのか少し不安そうな顔をする。



「なのはは赤いのを、フェイトとアルフは俺と浅黒いのをやる。……  
白黒つけたいのなら俺らが終わらせるまでに何とかしろ」

「は、はー…」

なのはは勝手に対戦相手を決めたことを怒られるのかと戦々恐々  
だったのだが、それを認められ一安心する。それに対して騎士たちは  
念話でこの場を切り抜ける策を練っていた。

『ヴィータ、突破は可能か？』

『……結果を破るだけなら問題ねーけど、アレに背を向けるのは危険  
すぎだろ』

最初にあの男を見たときは一気に頭に血が上りそうになったが、そ  
の実力を認識して怒りは一気に引込んだ。仲間を倒した男のこ  
とを許す気などないが、それでも戦場で無用な無謀をすることはベルカ  
の騎士として決してない。

『わざわざこっちに聞こえるように言ったのは、我らの選択も同じと  
言う自信からだろっ』

『ああ、私がああ白いのを速攻で落としてザフィーラと合流……しか  
ねーな』

防護に秀でたザフィーラが戦局を保ち、攻撃に特化したヴィータが  
打ち砕く。単純だが効果的で……至難の業だ。

「それじゃあ……行くよー」

なのはの掛け声とともに、戦端は切られた。赤い少女となのはは上  
空に、浅黒い男とマークたちはその場にとどまる。

「……そういえば騎士とっていたな。名乗りが必要か？」

「そうだな……ヴォルケンリッター『盾の守護獣』ザフィーラだ。貴様は？」

「管理局囑託、ナーガー族が戦士マークだ」

「……同じく囑託、フェイト・テスタロッサ」

「フェイトの使い魔アルフ」

名乗りが終わるも、この戦いの中心であるマークとザフィーラはまだ動かない。ザフィーラとしてはもともと時間稼ぎが目的なのでおかしくないが、マークがなぜ動かないのか周りには理解できなかった。

「……来ないのか？」

「圧倒的不利はそっちだろ？ 初手は譲ってやるよ」

「……」

ザフィーラにとってこれは有利な展開と言えるはずだ。先ほども述べたように彼の目的は時間稼ぎなのだから。だが、マークの言葉は毒のようにザフィーラに染み込んでゆく。

『実力をお互いに把握していない初撃が、最初にして最後の好機』

『たとえヴィータが戻ってもダメージが無いわけではない』

『それに奴らにはまだまだ仲間がいる』

それらの考えがザフィーラの背を押す。目指すは『初撃決殺』アレさえ倒せば何とかなるといふ甘い誘惑にのまれる。

「かあっ！」

「なっ!?!」

それはマークにとっても予想外の一撃。すなわち、無手による攻撃。人の身にて繰り出せる最短最速の一撃は、大剣と言う武器を待つ

たマークに反応はできても防御まではできない一撃となるはずだった。そう、そのはずだった。

「ば、かな……」

あたりに響いたのは肉を打つ音ではなく金属音。速度も、狙いも、タイミングも完璧だった。必中だったはずの一撃は、マークの常識はずれの力によって引き寄せられた大剣によって阻まれたのだ。

「さすがに無手のまま突っ込んでくるとは思わなかった……が、これで初手は終わりだ」

「!!」

大上段からの一撃を皮切りに、反撃が始まる。否、これはもはや蹂躪と言って過言ではないだろう。マークの一撃は、ザフィーラの防御の上からダメージを与えるに十分だった。もちろん『盾の守護獣』の名は伊達ではない。

「ぐ、があああああー！」

声を張り上げ、全力で防ぎ、弾き、流し、堪える。フェイトもアルフも、見ていることしかできない苛烈な攻撃の中、ザフィーラは耐え続ける。

(思ったより固いな……だが、あっちの勝負が終わるまでは持たんか)

そんな攻撃を加えながら、マークはなのは達の戦いを観察する。確かになのはが押しはいるが、このペースでは間に合わないだろう。できるだけ、フェイトが見ていても大丈夫なように流血が起こるような攻撃は控えているが、限界は近い。

(それにしても……フェイトはまざれないか)

それが連携の問題か、追撃を行うほど非情になれないのかはまた後で聞かなければ、と思ったところでマークは異変に気付く。

(まだ……耐えられるのか?)

もうマークの想定した限界は越えた。だが、それでも目の前の敵は倒れない。

「やるな……」

「こんな、所……で、倒れるわけにはいかない！」

「……そうか」

そこでマークは目の前の男の評価を改める。この男は限界を偽っていたのだと。その証拠に一気に攻撃のレベルをあげても、まだ喰らい付いてくる。

「余裕のあるうちに……か」

「ぐっ……」

戦いを長引かせるための知恵か、マークもなのはに決着をつけさせたいと思ってしまったが故の罠だろう。だが、その罠も敗れた。ならばもうザフィーラに手は残っていない。マークは最後の一撃を繰り出すべく刃を放つ。

「はあああああ……」

「おおおおお……」

そしてついにマークの繰り出した横薙ぎの一撃を、ザフィーラは防ぎ躲しきる。ダメージは少なくないが、それでも防ぎ切ったと……

「普通だったらな。だが、俺が普通じゃないのは、初撃を防いだ時点でわかっていたはずだ」

「そ……んな」

圧倒的膂力によって無理やり大上段に構えを直し、繰り出されようとする一撃を前にし、ザフィーラにできることは残されていなかった。

そして剣は天より翔け、鮮血が舞った。

### 第32話 「焼き増し」

その戦いは、フェイトの想像をはるかに上回るものであった。初撃こそ危なっかしく見えたが、それ以降は完全にマークが戦況を支配していたと言つて構わないだろう。

《……これって手を出していいのかね?》

《一応、フォローするようには言われたけど……》

はっきり言つて必要ないだろう。ザフィーラは完全に防御に回っているにもかかわらず、マークの攻撃を防ぎ切れていない。手甲によつて攻撃を流し、躲しているが、それでもマークの尋常じゃない膂力によつて繰り出される一撃に体が流れ、弾き飛ばされている。もっとも、それ以前に……

《攻撃できるスペースは作ってくれてるみたいなんだけど……怖くて入れない》

《万が一あれに巻き込まれたらと思つたらねえ……》

例えるのであれば、削岩機に手を突っ込むようなものであるのか? 手を入れるスペースが見えていたとしても、二の足を踏んでしまうのは仕方のないことだろう。マークは重量武器を扱っているはずなのに、そうフェイト達に思わせるほど武器を軽々と扱っていた。

だがフェイト達がそんなためらいを抱いているうちにも、時間は進んでいく。具体的に言えば、マークの暴風のような攻撃が苛烈さを増していった。

《おい、ね》

《……うん》

マークが何かを言ったが、フェイト達の位置からでは聞き取れない。もはやその戦いに入り込む隙は欠片もなく、フェイト達にできることは残っていないかった。残っていないと思ってしまう。

だからマークが最後の一撃を大上段に構えたとき、マークに対して振り下ろされた一撃に反応することすらできなかった。

「……正直、手傷を負うのは久しぶりだ」

「幸か不幸か、これ以上ないタイミングだったと思ったんだが……」

大きく下がったマークは、負傷し血を流す右腕をかばいながらも大剣を空から降りてきた相手に向ける。その先にいたのは、先の戦いでマークに敗れ、捕らえられたはずのシグナムであった。

「なぜ、などと無粋な事は言わん。戦場に立つのなら叩き伏せるのみ」  
「……本来なら、貴殿との再戦は望むところではあるが、この場では私にとって優先すべきことが多すぎる」

そう言ってマークが更なる闘志を燃やすが、シグナムはそれを冷静に受け流した。

《引くぞ》

《……可能か？》

《……やつは飛べん。高度をとれば問題ないらしい》

《……信じよう》

「はあっー」

マークたちにとってはわずかな沈黙である数瞬を終え、ザフィーラの一撃が狭き戦場となっていたビルを打ち砕く。当然のようにマークは隣のビルへと跳び移り、シグナム達は高空へと離脱する。

「ほう」

「っアルフー！」

「あいよっー！」

マークが思い切りの良い離脱に感心したのと同時に、フェイトとアルフが騎士たちを追い空へと駆けて行った。

「はあっー！」

「むんっー！」

フェイトは上空に逃げた騎士を追い、その速さを生かした一撃を加えるが、これをシグナムは容易に弾き飛ばす。

「速いな……だがこの程度で墜ちる我らではない！」

「元より、一撃で墜とせるなんて思ってない！」

そう言って再びぶつかり合う二人は、その一撃を持ってお互いを強敵であると確信する。

「……私は、ヴォルケンリッターが将、シグナム」

「……管理局囑託、フェイト・テストロッサ」

それは認めたからこそその名乗り。そしてその名乗りには、フェイトが思ったものとはまた違った反応があった。

「なるほど、テストロッサか……」

「何を……」

その言葉に納得の意が込められているのを感じ、思わず眉をひそめる。



「なに、それならばその年でこの実力と言うのも納得出来るというものだ……手加減はできんぞ?」

「最初からそんなの望んでない!」

シグナムの言う事はフェイトには半分もわからなかったが、それでも三度ぶつかり合う。

(考えるのは後でいい……とにかく、マークはここに来れないんだから、私たちがやらないと!)

それは責任感が、あるいは相棒の欠けたところを補える喜びか。

(……なるべく怪我をさせないよう、などと考えていたらこっちが墜とされかねん。だが全力で戦えば、殺さずに済みます自信が無いな……)

だがそれは、主の進む道を血に染めないという誓いに反することだ。今回はさすがに時間が足りず準備できなかったが、シグナムには次からは何とかできる当てがあった。ならば今回は撤退のみを目指し戦うことにして、その旨を仲間たちに念話で話をつける。

「……あの中に混じることができないのは残念だな」

《マークさん、大丈夫なんですか!》

《ああ、敵に加勢があったが、今はフェイトたちが戦ってる》

戦局が動いたことを感じたユーノが、マークに確認を入れる。それに対し無難な返事を返しつつも、マークは現在の戦場の把握を行う。

《闇の所の主は?》

《ぼくの方ではまだです……》

《それじゃあ外の可能性の方が高いか……厳しいな》

結界内と言う限定された空間でユーノが見つけれないのなら、闇の書の主はこの中にいないというのが妥当だ。だが外は探さなくてはならない範囲が広すぎる。そうとうな運がなければ見つけることはまず無理だろう。

《それより！　なのはたちは大丈夫なんですか!?!》

《……中々善戦しているようだし、大丈夫そうだぞ?》

《マークさん!》

《そうは言ってもなあ……》

一騎打ちを挑んだのはに加勢をするのは無いし、フェイト達もなかなか気合が入っていたので手を出し辛い。とはいえその程度の理由で全く準備をしないのも無いか、と観念したマークは、自身の切り札をその身にまとう。

《何かあればこれでどうにかする……まあ、安心しろ》

《……信じますからね》

実際念話でしかお互いを把握していないので、ユーノはマークが何をを用意したのかはわからない。そんな状況の中マークが用意したものが、宝石の原石のようなものをぶら下げただけのペンダントにしか見えない物だと知ったら、さすがに本気で怒っていたかもしれない。

(……魔道書の方も用意しとこつ)

仲間との間にわざわざ亀裂を作るような趣味はないし、何より切り札を使わないに越したことはないのだ。命中精度に不安はあるが、射程・威力は申し分ない。と、そこまで準備したところでクロノから念話が入った。

《すまん、しくじった！ そっちに攻撃が行くぞ！》

そうして降り注いだのは黒い雷。ただし結界にぶつかり、いくらか対処に猶予があったのは幸いだろつ。

《ある程度は俺が相殺する！ あとは各自で防御しろ！》

そうして発動するのは、マークの持つ最大の射程を誇る炎の魔道書。

「『メテオ』！」

マークの手元から発せられた炎は、その名とは趣を異なり空へと昇って行った。本来であるのならこの後標的に向かって降り注ぐのであるが、狙いが上空であったためか減速することなくさらに上昇し……ついに結界を破った黒い雷と一瞬の拮抗を持って爆散した。

「……まあ、ちゃんと威力は削ったからこんなもんか」

マークの『メテオ』は相性の問題もあったためか黒い雷に貫かれてしまったが、それでもかなり威力を減衰したらしい。本来雷系魔法に弱いはずのマークの魔防を貫くほどの攻撃力は保てていなかった。

「それにしても、なんというか……既視感と言うやつか？」

今の一撃を知っている気がする……マークがそんなことを考えたその時だった。

《みんな無事か!?!》

そこへクロノからの念話が入る。タイミングから考えて、またしばらく通信なんかができなくなっていたのだろう。それに対し、結界内にいた面子が次々と無事を報告し、最後にマークも問題ないことを知らせた。

《！ マークさんも大丈夫だったのか……》

《おい、その驚愕はどういう意味だ？》

《い、いや別に深い意味は……！》

マークの無事にことさら驚いたクロノは、そのことを突っ込まれてしどろもどろになる。が、観念したのかその理由を白状した。

《正直、魔法に対する耐性は低いと思っていた》

「なるほど……今までが今までだったし、その認識も間違っていない」「確かに、言われてみればマークが魔法の直撃を受けたことは見たことないかも……」

そろそろ結界の効果が無くなるためか、一か所にみんなが集まってきたため念話を取りやめる。念話は便利ではあるが、直接話した方がやっぱりいいな、などとマークは思っていた。

「別に魔法に弱いわけじゃないぞ？ お前らが使う『非殺傷設定』とやらに対応できてないだけだ」

「それを耐性が無いというんじゃない……そうか、だから今回は無事だったのか」

そう納得するクロノだったが、何やらよくわかっていない人がいるようだったのでそれを言葉にする。

「彼らは『非殺傷設定』を使っていなかった。だから今回はほぼダメージが無かったんだろ？」

「え!？」

「まあ、それであっているかな？　だが、相殺していなければ流石にダメージは通ったと思うぞ？　特に雷系とは相性が悪いからな」

クロノの説明に驚くなのはを無視して、マークは話を進める。なのはの驚きに反応したのもいたが、それ以上になのは自身でさえもマークの言葉に興味を持ったからだ。

「雷系って相性悪いの？」

「ああ、あれは基本的に竜の鱗を砕くのに適した魔法だからな」

「そんな話は聞いたこともないが……ミッド式の魔法でもその理が成り立つのかは調査が必要だな」

「えっと……そのこととマークさんってどんな関係が？」

フェイトが微妙に不安げな声で尋ねるが、マークはただ自分の弱点だけ告げる。だが事情を知っているクロノはともかく、ユーノとなのはにはなぜそんな話になるのかわからなかった。

「俺が竜族とのハーフだからな」

「ちよっ！　……いいのか？　そんなに簡単に話してしまって」

「心配してくれるのはありがたいが、そこまで長いこと秘密にしておく気が無いからな」

自分がせつかく隠したことを、簡単にはらすマークに慌てるクロノであったが、それをマーク自身が切り捨てた。今も使う気はそんなに無かったが、それでも話す意味はあると考え直したためだ。

それでも、どんな事情があったとしても、初めて聞く者にとっては呆けることしかできないほどの衝撃を伴う内容であるのは変わりがないのだが……

「とにかく、二歩進んで二歩下がった様な戦果だったが、それでも状況

は進んでいる。フェイト達の強化デバイスもうまく機能しているみたいだし、どうとでもなるだろう……今日はこれで解散か？」

「……そうだな、後日に今後の方針を詳しくまとめるとして、今日はこれで終わりだ。マークさんはちょっと報告を手伝ってくれ」  
「わかった」

いくつか納得できないことを残したが、それでも今回の戦いは終わった。だがマークには、ついに自分が感じた違和感のことを話題にすることはなかった。

「なにはともあれ、シグナムが無事でホンマよかったわあ」

「心配をおかけして、申し訳ありませんでした」

「まっただけだって……でも、どうやって脱出して来たんだ？」

無事シグナムが帰還を果たしたことに喜ぶ八神家であったが、それでも状況が大きく変わったわけではない。複雑になりつつある現状をつまく切り抜けるのは、並大抵の実力で果たせることではないのだ。

「……私の脱出を手引きした奴は『闇の書に望むことがある』と言っていた。鵜呑みにするのはどうかと思うが、もとより大きな組織と云うのはいくつもの意志が混在する場所だ」

「わざわざ敵対を選ぶ必要はない……という事か？」

「でもわたしたちが苦労してやってきたことを、横から盗って行ってしまう可能性だってあるわ。馴れ合つのは危険よ」

目指すところは同じなのだから、同盟関係とまではいかななくても、協調してもいいのではないかと。いくら怪しげな連中とはいえ、敵対関係に無い存在は救いになることもある。

だが現在の主である八神はやてではなく、闇の書に望みであるのだ。完成の瞬間後ろから……という事だって十分あり得るだろう。

(ある程度のリスクは容認しなければ、アレを倒すことはかなわない)  
(別にあの人を倒す必要はないのだ。むしろ正式な局員でない以上、交渉の余地だってあるかもしれない)

また極端な考えがはやての脳裏によぎるが、まだ選ぶことはできない。どちらにしろ、一度はシグナムを倒した『マーク・テストロッサ』に対してどんな対応を取るかと言う問題となるだろう。

「とにかく、今は管理局にこの場所がばれないよう行動するべきやろな……シヤマルが前言ったことを、続けよか」

「……それが妥当でしょっね」

それは複数の世界を渡り、そこでわざと発見されるという事。残念ながらある程度場所は特定されているだろうから、その範囲をできるだけ絞らせないようにするための行動だ。

幸いと言うべきか、マークと言う人物は戦う意思を持たないものを攻撃するような非道はしない。もちろん敵対すれば容赦はしないだろうが、敵対したとしても人の話を一切聞かなくなるような人でもない。

「それじゃあ、とりあえずの方針は変わらずやな……みんな、無茶だけはせんといてな？」

主の言葉に騎士たちはうなずき、ひとまず話し合いは終わる。だがはやては最後まで気付かなかった。なぜ、自分がマークと言う存在の人格を断定できたという事に。そして、騎士たちがどのような決意を秘めていたかという事に……

### 第33話 「不信」

「それで、昨日はなぜあんなことを言ったんだ!」

「ん、あんな事って?」

ヴォルケンリッター達との戦闘から一夜が明け、フェイトとアリシアが学校へと行くのを見送った直後だ。クロノの問いにとぼけた返事を返したマークは食卓へと戻りコーヒーをおかわりしていた。

「わざわざあの場で正体と弱点をばらしたことだ!」

「ああ、それが……」

「それは私たちもぜひ聞きたいわね。……隠しておきたかったんじゃないの?」

昨夜の事後処理に忙しく、あまり寝てないだろうリンディも口をささむ。そんな中でも子供たちにしっかり朝食を作り、見送りまでするのだからできた親なんだろうとマークもこの場では見当違いな事を思う。

昨夜は自分から話題を誘導し、なるべく違和感が無いように話したつもりだったんだが、と前置きするが、どうやら話し方の問題ではなく話したことが問題のようだった。

「そんなに焦るな、ちゃんと話すって」

「……はあ」

「貴方が焦らすようなまねをするからだろ……」

リンディが思わずため息をつき、クロノも少しいらだちを見せながらも席に着く。そこへエイミィが2人に飲み物を持ってきたのを確認して、ようやくマークも話し始めた。



「……もともと絶対秘密にするつもりはなかったんだ。もしそのつもりだったらフェイトにだって話はしなかった」

「じゃあ、いずれ管理局にも話すつもりだったの？」

「それなりに時間をおいて『見定めた結果、信用に値すると判断した』ってアピールをしながらな」

無闇矢鱈と信じたのではなく、自分なりの理屈があって信じたのだと印象付けたかったと、マークは訴える。そうでもしなければ利用しやすいと思われかねないと考えたわけだ。

「……もともと話すつもりだったというのはわかったわ。でもなぜあの時だったの？ 時を選べば、もっとゆっくり浸透させることができることぐらいわかっていたでしょ？」

そう、戦闘直後で他の部署の魔導師がいるときにわざわざ話す内容ではなかった。あのような場で突然話したせいで、それこそ余計なうわさまで流れてしまっている。

「確かにその点については軽率だったと思うが、そうでもしなきゃ余計な事をフェイト達に聞かせることになったと思ったからな」

「余計な事？」

『「管理局内に内通者がいる」……まだあの子たちには味方を疑うようなことはさせたくない」

「……」

それはあの戦場に捕縛していたはずのシグナムが現れたことから、もう確定事項として扱われている。ただどんな方法を使ったのか、一晩たった今でも脱出経路や手引きした人数など一切わかっていないのだ。

「あの子たちは俺と違ってお前らを、引いては管理局という組織を全

面的に信頼しているからな。どんな理由であろうとそれを覆してしまえば、もはや何を信じていいのかわからなくなってしまうだろう。」

個人的な理由から動いたものが居ただけならまだいい。その動いた奴というのが何らかの派閥の一員だったりしたら……

「組織に対して、嫌悪感を抱きかねないわね」

「現場の被害を無視して、足の引っ張り合いをしていることになるからな」

「そして、管理局を経由せずに個人で動きでもしたら……」

「危険人物と認識されてしまうかもしれない……ってこと？」

「まあ、かなり極端な事を言っているという自覚はあるがな」

だが、子供というのは平気で極端な事に走りかねないのだ。あるいは妥協というものを知らないと言ってもいい。

「まったく……あの場でよくそんなことまで思いついたわね？」

「これでも、お前らの何十倍も生きてるんだ。経験則ってやつだよ」

「……そんなに長く生きてるんだったら、もっとうまい話のそらし方をしてくれ」

まあそれももっともなんだがな、とクロノの愚痴のような呟きにマークが苦笑しながら答える。

「本局に内通者がいるという話題を越えるものが、これ以外思いつかなかったんだ」

「……確かに、そんなものがいくつもあつたらたまらないよね」

そして、ここまでやったとしてもフェイト達はいずれ内通者の存在に気付くだろう。

「結局は自己満足だな」

「それでも、マーク君が守ろうとした思いは、あの子たちに伝わると思  
うわ」

それはそれで恥ずかしいな、などと言った後、マークはいきなり顔  
つきを改める。

「それで、今後をどう見る？」

局内に内通者がいるとなれば、下手をすればこちらの手の内を完全  
に知られたという事もありうる。今後のプランを、どう変更するか、  
あるいは誰にどこまで話すかが重要になってくる。

「戦闘の映像は見せてもらったから、ここに居る面子はとりあえず信  
用している」

「……とりあえず、なんだな？」

「ああ、その気になれば周りに悟られずに裏切ることができる奴の存  
在を知っているからな」

あれは王に仕える聖騎士だったかな？ などと、かなり物騒な事を  
付け加えるマークは、その内容とはかけ離れた郷愁の念を感じる瞳を  
していた。

「まあ、とりあえずであるうと、信用があるならいいわ。……本局への  
連絡は、極力信用を置ける人物に、レティとグレアム提督あたりなら  
問題ないでしょう」

「基本方針は特に変更はしない……というより、ほかに手段がない。  
魔力反応を探して、発見し次第人員を向かわせ捕縛する」

「既知の者が無く、索敵と世界間転移ができない俺には、口が出せん分  
野だな」

「適材適所ってやつでしょ！ それより、高空に逃げられて戦えるの

「？」

事実、昨夜の戦いではフェイト達に任せる結果になってしまったので、マークの参戦は難しいだろうとエイミーは思ったのだ。フェイト達に証言もあり、マークは陸戦魔導師として登録されていたりする。

「まあ、空中戦もできなくはないが……できれば遠慮しときたいな」  
「あ、可能なんだ……」

ちなみにこの返答により各々が想像した空中戦とは……

クロノが、以前マークがフェイトに『飛竜でもいたら……』と言っていたと聞いていたため、『竜騎士』のようなものを想像し、

エイミーが、自身のイメージする『竜人族』という言葉から『背中から竜の翼が生えたマーク』を想像し、

リンディが、半ば投げやりに『真竜ナーガー族』という言葉から『竜に変身して戦うマーク』を想像していた。

誰も具体的な戦闘法を聞かなかったのは、万に一つ自分の想像を肯定されたくなかったからであった。

「ま、まあとにかくだ！ 内通者の目的もわからない以上、こちらの打てる手も限られてくるわけだが、何か思いつくものはないか？」

特にマークさんは、闇の魔道書と呼ばれるものを所持しているんだ。なんでもいいから気付いたことは教えてほしい」

「何か、ねえ……そういえば、闇の書の攻撃に、何というか……既視感のようなものを感じたが……プレシアの時みたくはつきりわからなかったんだよなあ」

「……それでもやはり、マークさんの故郷の何かが干渉している可能

性あり、か」

「うーん、状況的には、あの時の次元干渉攻撃に似てなくもないかな？」

言われてみれば、とマークもエイミィの言葉に納得する。あの時も結界の外から雷による攻撃が行われていた。

「そうになると、案外俺が感じた既視感というのも、それとナノハの魔力だったりするかもな。……ほら、あの子はもう蒐集されているし」「もしそうなら手掛かりにはならないな……」

残念なような、ほっとしたような微妙な表情をするクロノだったが、今はそれ以上に考えるべきことがあると、気を引き締める。

「本局からの情報にも細工をされる可能性はあるか？」

「ん〜……そうあからさまにしてきたらかえって内通者の特定が容易になるし、そんなに多くはないだろうけど……」

「その数少ない一手を、重要な情報の隠匿に使われたら厄介ね……」

やはり本局にも、信頼できる人物を情報収集に向かわせる必要があるかもしれない。

「人員も足りなければ情報も足りない……はあ、マーク君が参加するから、長引くことはあっても大変なことになることはないと思っただのに」

「戦力的にはそう変化してないぞ？ クロノが戦った『仮面の男』も、見る限りはシグナムより劣るし……数という面でもまだこっちの方が勝っているしな」

とはいえ、かなり見通しの悪い状況になったのも事実だ。これからは戦場に立つものより、後方支援に回る者の負担の方が大きくなるの

は間違いないだろう。

「まあ頑張れ、応援はしてやる」

「えー、応援だけ？ 手伝ってくれても誰も文句は言わないよ!？」

「なかなか無茶を言うな……」

軍師もやったことのあるマークならやってやれないこともないが、その前に学ばなくてはいけない事が多すぎる。

「その機械の操作や、組織の状況他、すべてちゃんと教えてくれるなら構わないぞ?？」

「あゝ無理です、ごめんなさい」

最終的に楽になるのはいつになるかわからない、それまでの負担は倍増という道をエイミィは選べなかった。

「俺みたいな素人の助けを期待するより、信用できそうなやつに声をかけてみるべきだな」

「うう……それができるんだったら苦労しないよう」

嘆くエイミィに苦笑を向けながら、これ以上話すことが無いことを確認したマークは、本局へと出かけることを告げる。

「グレーム提督に頼まれた依頼をこなしてくる」

「まだ腕の怪我が治ってないだろう？ 大丈夫なのか?？」

確かに昨日シグナムによってつけられた傷はまだ治っていない。マークの使用する回復魔法が自分に作用しないとのことで、通常の治療を行ったためだ。

「」の程度問題ない。戦場に出る以上、死にさえしなければたとえ腹

に風穴があこうと十全の戦闘力を維持して見せよう」

「いや、頼むからそんな怪我をしたらすぐ後退してくれ」

結局マークは、怪我を心配するクロノ達を押し切り本局へと行ってしまった。

「確かにマーク君ほどの実力があれば、多少の怪我は無視できるんでしょっけど……」

「まあ、下手をこくような性質じゃないし問題ないと思う」

この後、マークが非常識なことをやらかすのではないかとじわじわと不安になっていくことになるのは、クロノ達は思ってもいなかった。

「はあ、昨日の夜にそんなことがあったなんてね……」

「表面上はこんなに平和なのにね……マークさんの怪我は大丈夫なの？」

この時期の屋上は寒く、昼休みとはいえその場にいるものは少なかった。より正確に言えば、4人しかないという、秘密の話をするには絶好のスポットとなっていた。

「私も最初は不思議だったよ。でも結果って便利なんだな〜って、何となく納得しちゃった」

「マークの方は大丈夫みたい。一応包帯巻いてたけど、たいしたことないって言ってた」

不用心のようにだが、そこら辺の対策はバルディッシュ達が何かをしているらしい。この場に人が来る心配はないと言っ。

「なのはが入院したり、天の声の人も怪我するほどなのに……ねえ、本

「当に私たちにできることはないの!？」

「え、ええと……」

「さすがに……前線も後方も、それなりに訓練が必要だし、難しいと思うよ?」

わかっていても、苦境に立つ友人を放っておけないと思ってしまうのは、仕方のないことだろう。ただ、当の本人たちは苦境に立っている気などさらさらしないようであったが。

「仕方無いよアリサちゃん……それにしても、マークさん自分の種族とかばらして大丈夫だったのかな?」

「すずかはそればかりね? ……でもそうね、やっぱり異世界なわけだし、エルフとかドワーフだっているんじゃないの?」

「わたしは聞いたことないなあ……フェイトちゃんは?」

「うーん……わたしも無いかな?」

やはり異種族というのは相当珍しいらしい。だがそうなると当然、自分が人間とは違う生き物だと言ってしまったマークが、どのような扱いを受けるのか気になってくる。

「マークが使った魔法が管理局でも再現できないものだったから、今は丁重に扱われてたよ?」

「でも少数派は肩身が狭くなってくるもんだし……人と違うところが増えれば増えるほど、ね」

だがそれはマークにだってわかっていたことだろう。それならなぜあの場で? ……と思わなくもない。

「何かあったのかな?」

「……仲間として信用されたと思えばいいんじゃないかな? ……弱点攻撃から守ってほしい、とか」



「うん、とりあえずはそつするつもり」

すずかとアリサは、何となくだがマークのやりたかったことが分かった。それぞれそれなりのお嬢様なのだ。中には見たくなかった、知りたくなかった出来事にも遭遇している。そして大切な親友たちにも、わざわざそんな暗いところを教えるつもりはあまりなかった。

(でも、羨ましいな……)

すずかは思う。自分の正体を、弱点を教えられるほど信用された友人に、嫉妬を覚える。そして、その場にいることができない自分がどうしようもなく悲しい。

(わたしもそこに行きたい……ううん、絶対に、行く！)

諦められないのなら、頑張るしかない。そして幸いというべきか、すずかにはそれを実現できる可能性を持った肉体がある。

比較的聡明であったとしても、やはりまだ子供だという事だろう。なのはが当然のように戦えていたのも原因かもしれない。だが、それでもすずかは、魔法に頼らない、身体的な能力を駆使して戦場に立つことを誓った。

### 第34話 「内への牽制」

「リーゼアリアとリーゼロッテ、ね……自己紹介はいるか？」

「別にいいわ。ナーガー族のマークさん」

「昨夜のことがあってから、クロスケに大体聞いたからね。聞いたことはもちろんあるけど、今聞くべきことじゃないし」

マークは以前から依頼されていた犯罪者の捕縛のため管理局に赴いたのだが、そこから現場に向かう際にこの二人をつけられたのだ。

「……グレாம்提督の使い魔、と言っていたか？ 基本的に指導と監督が役目で、手は出さないが自分の身は自分で守れると思って大丈夫か？」

「もちろん！」

「わたしたちが手を出さないといけないような状況になるようなら、今後あなたにこのような仕事は任せられないと判断することになりますね」

「それなら問題ないわ」

最低限のことだけを再確認したマークは、さつさとターゲットが潜んでいる建物へと足を踏み入れる。もう少し話すことがあると思っていた二人が、慌ててそれに続いた。

「えっと、目標については確認しないのかな？」

「ロイ・ルーズベルト、テロリストとして目下指名手配中。砲撃魔法を得意としている……これぐらいで問題ないだろ」

「じゃあ建物については？ 周囲について……」

「そのくらい、見りゃわかるだろ」

目標の居る位置は……と、リーゼロッテがさらに問いただそうとし

だが、マークの足が迷いなく動く様子を見て止める。どうやっているのかはさっぱりだが、マークにはもう居場所の見当がついてるようだった。

「……あのなあ、こんな建物の中で潜伏に向いた場所なんてそう多くないんだぞ？ それに加えて、資料に乗っていた目標の経歴なんかを考えればある程度予測できるだろう」

「なにそれ？ 一体どんな技能なのさ……」

「軍師、あるいは参謀の技能だな。相手の行動を予測して何手も先を讀んで、初めて策が成り立つんだ。居場所の予測なんて基本中の基本だぞ？」

もちろん予測だけじゃなく、人を使って確認できるならそれに越したことはないんだがな、と付け加える。だが、リーゼ姉妹はこれを基本と言ってしまうようなマークに対して、開いた口がふさがらない思っていた。

「……でも、まだそこにいると決まったわけじゃ……」

「……いま、先行させたサーチャーで確認したわ。ドンピシャよ」

「便利な魔法があるんだな」

資料と言っても紙の二丁三枚、まさかと思ってサーチャーを放ったが、マークの言葉を裏付けることにしかならなかった。

「これができなきゃ参謀を名乗れないっていうのなら、管理局からその役職はほとんどいなくなるでしょうね……」

「あ〜……あくまで俺にとってはだぞ？ そもそもリーゼエリアが使った魔法があるなら、こんな予測にあまり意味はなくなるからな。リアルタイムで敵の位置を把握できるなんて、敵の行動予測なんかよりずっと有用じゃないか」

そもそも軍師の基本と言ってもマークの知る軍師は少なく、自身を加えても両手の指に届かなかつたりする上に、そのすべてが大規模の戦争を勝利へと導いた規格外なのだが、残念なことにそれを指摘できるものはいない。

「まあそう思っているのならいいけど……それより、昨夜マーク君が『竜族』って名乗ったって本当？」

「本当だ。とはいえ、それを証明するようなものは今のところこれだけだな」

「なにそれ？」

リーゼロッテの疑問に答えるべくマークが取り出したのは、昨夜のペンダントだ。はっきり言って、これを証明と言われてもわかる人しかわからない代物である。

「……何らかの力を秘めているようだけど、魔力じゃないわよね？」

「俺はこれを竜石と呼んでいる。竜のエネルギーによって形作られた石だ。……エネルギーってのは、生命の持つ力とでも解釈してくれ」

「つまり、この石を使えば竜の力が手に入ると？」

「……エネルギーの使い方を知っていれば使えるかもな」

ただし、それを行うためにはマークから知識とモノを奪わなければならない。そんなことに労力を使うくらいなら、まっとうな訓練を積んだ方がましな結果になるだろう。

「まあ、そんなことを企むような奴は、我が全身全霊を持って屠らせてもらおう」

「はは……一応囑託とはいえ局員なんだから、屠っちゃだめだよ？」

リーゼロッテは一応先輩として注意をしておくが、実際そのような事が起こった時、マークを制止できる自信がこれっぽっちも湧かな

かった。

「……テリウスには、貴方みたいな実力者がたくさんいたりするのかしら？」

「今はわからんな……まあ、元腹黒宰相か黒竜王子ぐらいなら期待できるだろうが」

半ば独り言のつもりだったリーゼアリアの一言を拾ったマークは、自身の希望も含めた返事を返す。とはいえ神器クラスの強力な武器を失った彼の世界に、新たな英雄クラスの人物が現れた可能性は低いだろう、との予想も心の中で付け加える。

その答えがあつたことに驚きながらも、リーゼ姉妹はひそかに安堵した。どんな理由かは知れないが今のマークの出身世界には、マークほどの使い手がほばいないという事だ。やはり管理世界に住むものとして、余所の世界の方が強大な力を持つという事は受け入れられないのだ。

「話はここまでだな……いくぞー」

話しながら来たせいも、いつの間にか犯人がいる部屋の前まで来ていたのに気付かなかつたリーゼ姉妹は、マークの声掛けに反射的に構えるが戦闘は始まらなかった。

「とりあえず出てこいー 言いたいことがあるなら聞いてやるぞ？」

「ちよっ、マーク君!!」

他の事件ならまだしも、今回の件はテロリストの捕縛が任務だったので。このような声掛けがプラスに働くとは思えない。そして、その想いを裏付けるかのように、砲撃魔法の一閃が走り、マークに直撃した。

「はあ！ まさかこんな素人が来るなんてなあ！」

「流石にこれはないわよ！ 大丈夫なの!？」

「今の非殺傷なかったよ!？」

当然のように回避行動をとっていたリーゼ姉妹が顔を青ざめ、犯人がまず一人と笑みを深める中、爆炎の中からそれは当然のように現れた。

「一応さ、主義主張のある奴なら、と思っていたんだが……先制攻撃をして高笑いするような奴なら話なんて聞く必要ないよな？」

「は……？ 無傷、だと……」

今回は突発的な戦闘でなかったため、当然のように鎧を着こんだ状態であったマークには、まったく意味のない一撃であった。構えることもせずに立つ姿は、何ら手を打つことなく今の攻撃を無効化したのだと強調するかの様ですらあった。

「……感傷だな。ただ共通点が一つあっただけで、話がしてみたいと思うだなんて」

「17、17の……」

思わず自嘲するマークに杖が向けられるが、それに対して特に対処をするわけでもなくただ立ち尽くす。だが、それだけで十分であった。ただそれだけで杖を向けた男は何もできなくなる。

「無様だな……自身の能力を疑い、俺を恐れた時点でお前の負けだ」

そう、マークが何をしたわけでもない。男が彼我の実力差を感じ取り、勝手に何もできなくなっただけ。もし自身の力を信じるか、敵に向かう勇気があればこのような事にはならなかっただろう。

「う、うあああああっ！」

それはあまりの力の差による恐怖か、一度は硬直した男であったがそれを振り切り、砲撃を放つ。

「無駄だ」

だが今度はその一撃がマークの体に届くことすらなかった。マークが取り出したのは『炎の剣』。その剣による無造作な一撃で、男の砲撃を切り払ったのだ。

「う、そだろ……これは何の冗談……！」

そうして男は現実を認識する間もなく、マークの投じた炎にのまれ意識を失った。

「まあ……こんなもんか」

マークは男の意識が途絶えたのを確認し、今だ剣にくすぶっていた炎を払い鞘に収める。やはり鎧を着こんでいるときは、得物が腰にあった方が落ち着くなという程度のことだったが、あまり質量兵器を身につけるのは推奨しないといさめられることになるのはもう少し後の話である。

「圧倒的だったね……」

「AAランクだったか？ クロノの一個下のランクと言ってもあの程度なのは誤算だったな」

「誤算って……」

バインドが使えないマークが、手作業で男を縛りながらの言葉にリーゼ姉妹は反応する。これではまるで、もっと強い相手の方が都合

がよかったみたいではないか。

「あ〜……昨夜の件は知ってるだろう？ 内通者のことだ」

「！ まあ、そりゃあね」

「ちゃんと聞いているわ……でも、機密になっていることだから、こんなところで話すのはいただけないわ」

「ん、悪かった……とにかく、俺が実力を示せば牽制になると思っ  
てな。生半可な覚悟で手を出してきたとは思えないから、手を引くこと  
はないだろうが……」

「……」

確かに、とリーゼ姉妹は納得する。A Aランクの砲撃を正面から喰  
らって無傷という防御力も、砲撃を切り裂く剣術も、そして相手の防  
御を貫いた炎の魔法も、どれ一つとして軽く見ていいものではなかつ  
た。

「まあ、囑託になるときの試験の映像もあるだろうし、そこまで効果が  
あるとは思えないが……下手に手を出せばやけどじゃすまないぞ、つ  
てことを示すにはこれが一番手っ取り早い」

「……ひょっとして、昨日の今日でこの依頼をこなそうって思ったの  
はそれが狙い？」

派手な魔法を使ったわけではないが、実力は示せたはずである。こ  
れにより少なくともマークに対する警戒度が上がれば、下手にアース  
ラの面子に手を出すことはできなくなる。戦場でヴォルケンリッ  
ターに手を貸すにしろ、この男を敵に回せば正体がばれる危険がひと  
きわ大きくなることだろう。

「いや、内通者への警告はついでだ。流石の奴らも今日は動かないだ  
ろうって思ってな。なるべく地球に居たいが……約束してしまった以  
上仕方がない」



「確かに二日連続で管理局に捕捉されるようなへまはしないでしょ  
ね……」

昨夜の件はシグナムの捕縛が響いて焦っていたのだとすれば、次は  
相当慎重に動くだろうという予測もたつ。そうなればしばらく犯罪  
者の捕縛に回っても問題ないだろうとマークは考えていた。

「まあ、索敵なんかは手が出せないんだ。俺は俺のできることをやら  
せてもらおう」

そう言っつて縛り上げた男を担ぎマークは歩き出す。後に続くリ  
ゼ姉妹は、予想以上に規格外であったマークの言動のせいか、帰りに  
口を開くことはなかった。

「まったく、すずかも思った以上に重傷ね」

本人は昼になのは達の話聞いて何を思ったのか、アリサに図書館  
の本の返却を頼み早々に帰宅してしまった。

『「やりたいことができた」ね……まあ、本好きのあの子からしてみれ  
ばしばらくここには寄りたくなくなるのもわかるけど」

たとえ返却だけのつもりでも、ついつい本棚に向かって逝つてしま  
いそうになる衝動を抑えるのは大変だろう、とそんな葛藤をする友人  
を思い浮かべアリサはクスリと笑う。ただそのやりたいことについ  
ては眉をしかめたくなる思いであつたが……

「友人としては応援すべきか、嫉妬すべきか悩むところよね……」

話を聞いていればいやでもわかるその感情を応援すべきか、親友を  
取られたことに嫉妬すべきか……まあ、まだ特に周りがどうこう言っ

時でもないだろうと、しばらくは嫉妬することにしよつと結論付ける。ただ、それ以外の感情もあることに、少しだけ胸が痛くなる。

「みんな、何かしらやりたいことを見つけちゃうなんてね……あーあ、なんだか置いて行かれた気分」

そうはいつても、いまだ10歳にすらならないことを思えば、まだまだ時間はたつぷりある。これから中学、高校、そして大学へと進めばもつといろんな道が見えてくることを思えば、今やりたいことを決めてしまつのも早計だと思える。そう思っても、わかつてはいるが

……

「……ダメねえ、……せつかく図書館に来たわけだし、何か気分転換に読んでみよつかしら？」

気分を変えるには何がいいかと考えながら、適当に棚を見て回る。とはいえ、図書館なんてめつたに来ないから、どんな話がどこにあるのかいまいちわからず困っている、ふとある人が目に留まつた。

「車椅子……？　つて、ダメじゃない！　危ないわよー」

「えっ？」

思わず声をかけてしまったのは、目的の本に手を伸ばし、微妙に車椅子の後輪が浮きそうになっていたように見えたからだ。

「まつたく、誰かに声をかけなさいよ！　転んで、怪我してからじゃ遅いのよー」

「う、うめんなやろ？」

そのやり取りが本人たちが思っていた以上の音量であり、駆け付けられた司書の人に怒られることになったのは仕方のないことだろう。

「あゝ、とりあえずごめんなさい。驚かせちゃったわね」

「べつにええよ、それより、心配してくれてありがとーな」

司書の人に軽く怒られ、目的の本を得てから談話スペースに移動し、二人は他の人に迷惑にならない程度の小声で話をしていった。

「それじゃアリスちゃん普段は図書館にはこーへんの？」

「そうね、今回は友達日本の返却を頼まれて……せっかく来たんだから何か読もうかって思ったのよ」

最初こそぎこちなかった会話も、ものの数分で打ち解けることができたのは、やはり子供同士ゆえであるつか。

「はやては結構ここにきてるんだっけ？ それならお勧めの本とかあったりする？」

「そやね、……どんなジャンルがええか教えて貰える？ いわゆる乱読家やから、大抵のもんならおすすめのをいえるけど」

「そうね……せっかくだし、剣と魔法のファンタジーみたいのある？」

それなら、と勧められた本は、長年愛されてきた円卓の物語だったり、映画化もされた魔法学校に行く少年の話だったり、アニメにもなった異世界に召喚された少年が貴族の女の子の使い魔になる話まで、多種多様なものであった。

「おすすめ多すぎでしょ……」

「……まあ、自覚はしてるで？ でもせっかく図書館にいるんやし、いろんなものの中から選ぶんもええやろ？」

「それもそうね」

そうしてアリスが選んだのは、数年前にアニメ映画化もされた魔法

使いの話だった。

「ええの？ 勧めておいてなんやけど、剣はあんまり出てこーへんで？」

「いいわよ。……魔法使いの成長の話だったかしら？ 副題の『影との戦い』ってのも気になるし」

「まあ大まかに言えば。一応学院やら竜退治やらもあるけど、ヨーロッパの方の物語やったはずやから、日本人が思つとる魔法とはちよつと質が違つて？」

「はやて……アンタはこの本を勧めたいの？ やめさせたいの？」

「そら面白い思つた本やし、勧めたいんやけど……」

今まで人に本を勧めたことが無いから、微妙に自信が持てない。そうはやてがいうと、アリサは笑って切り捨てた。

「万人にとって面白い本なんてないでしょ？ あとは好みの問題なんだから、自分はこれが好きでいいじゃない。おすすめなんてそんなもんでしょ？」

あとで感想も聞かせるから連絡先教えなさいよ、というアリサに、はやては笑顔に戻り答えることができた。

### 第35話 「それぞれの思惑」

「……以上が今回のロイ・ルーズベルトの捕縛までの経緯となります」「ふむ、やはりと言っべきか……一筋縄ではいかない相手のようだな」それはより正確に言うのであれば、ロイ・ルーズベルトという犯罪者の捕縛の報告ではなく、マーク・テストロッサという外部協力者についての報告というべきものであった。

「試験の際の回避能力・近接戦闘能力、更に高火力の魔法に加え、今回の件では戦略面でも高い能力や、強大な防御力に魔法を切り裂く技も持つことを見せてきたという事か」

「戦力という一点においては間違いなくエース級……というより、彼の居た世界において英雄であったと言われた方が納得できますね」

この場に本人が居れば、大笑いしながら否定しただろう。マークが強いという事は間違いだが、どこかの英雄のように逆境を跳ね除ける力はないのだ。別の言い方をすれば、マークの力というのは『万に一つの勝ちを引き寄せる』ものではなく『万に九千九百九十九の勝ちを得る』というものだ。勇者と魔王のうち、魔王側の力の在り様と言った方がわかりやすいであろうか？

「……現状そろった情報で考えると、間違いなく蒐集が終わる前にヴォルケンリッターが敗れるな」

「事実彼らの将は『対一』の戦いに敗れていますしね」

これが『対二』、『対三』になるとわからなくなってくるだろうが、あそこにはクロノもいるのだ。そんな極端な勝負には、まともに対処できる時ならばありえないだろう。

「戦場から排除するのは難しいか……遠ざけるにも限度はあるが、何とか直接対峙させることは避けなければならぬな」

「いくらか情報を流しましょう……とはいえ、彼自身の行動はそのままでコントロールできないのでいつかはかち合うでしょうが」

リンディ達の装備では、常時広範囲を索敵し続けることなどできない。ある程度順番に見て回るような形になるだろう。その範囲・時期を伝えれば、完成間近まで時間を稼げるかもしれない。

そんなことを考えたからであろうか、グレアムは以前の事件の際リンディが感じたという違和感について聞いたことを思い出した。

「……確か彼女が言っていたな。ジュエルシード事件の関係者は、集うべくして集ったかのようだった、と」

人が、物が、まるで導かれるかのようにな所に集った事件であった。そして今回、また同じ場所で事件が起ころうとしている。

「事が済んだら、一度調べてみるべきかもしれないな」

何か原因があるのなら、それにふさわしいものが見つかるかもしれない。もしもそんなものがあるのなら、それはマークと言う人物を引き寄せるレベルのものだ。何らかの処置をする必要があるだろう。

そんな先のことを考えるグレアムは、やはり認識が甘かったといふべきであろうか。まだ彼は、手を尽くせばマークを戦場から遠ざけ、一時的になら排除できると信じていた。

「まったく、信じられないわね」

「重ね重ね申し訳ないな……ここに戻った理由が理由だったもんでなかなか、な」

それは11月も終わろうとしていた時、すずかの一言によってよう

やく果たされたことであった。すなわち月村家の訪問、マークと忍の再会である。フェイトとアリシアが遊びに行くのについて行く形で、ようやくそれを果たしたのであった。

「まあ、事情がうちのなのも関係してくることだ。そう責めないでやってくれ」

「だからってちょっと挨拶に来るぐらいの時間は取れたでしょうに……」

「いや、こればかりはいずれ行かなければと思いつながらも先延ばしにしていた俺が悪いんだ。いかな叱責も甘んじて受けよう」

恭也がとりなすが、確かにジュエルシード事件でマークは忍達に世話になったのだ。それにもかかわらず帰還後の挨拶を一月にもわたる後回しにしたことはちゃんと謝罪すべきだろう。

とはいえここまでしっかり反省を示されれば、まだいい足りない文句を言うのも憚られる。

「……はあ、もういいわ……その代わり、いくつか話を聞かせてもらおうからね」

「ああ、わかったよ」

そうして語るのにはマムクートについてだ。すでにフェイトに話したことがあるので、そのことを思い起こしながらとなるのでやりやすかったのだろう。マークの口はいつもより軽くなっていた。

「マムクートと言うのは、別名竜人族とも呼ばれる種族のことだ。かつては完全な竜であった存在がその身を保てなくなり、より世界に適した姿である人の姿をとったことが始まりと言われている」

やはり当人から聞くのは衝撃なのだろう。神妙な顔をする忍達であったが、続くマークがハーフであるという言葉に、常とは違った言

葉を返しマークを困惑させた。

「へえ……ママクートって人との間に子供を作れるんだ」

「いや、まあ……そうなるな」

もともと人型ですらない竜と人が結ばれ子をなせるというのは、忍にとって重要な事だ。たった一人の妹がそんなことで道を諦めてほしくなかったのだ。

(まあ、あの子はかなり本気みたいだし、そもそも可能性が無いわけじゃないってのは重要よね)

最近体を鍛え始め、恭也にも剣を習いたいと言い出したことから、もう何を言っても止まらないと忍は確信した。幸い同い年であるなのはと言う先駆者もいるし、そこまで危険では無いのだろうと、そう思っていた。

ただそんな思いを知らないマークからしてみれば、何やら急ににやにやし始めた忍のことが不気味に見えてしょうがなかったわけだが……

「ま、まあ、そんな経緯があるせいで、ママクートっていうのは基本的に生存競争に敗れた敗者なんだ。俺は役目を持っていたからその後も生き続け、今このときに目覚めることになったというわけだ」

「ん？ 何らかの役目を持っているというのは初耳だな」

「ああ、あまりこの時代に生きる者たちにとっていい話じゃないからな……つい話しそこなっていた」

できることなら自分の手で済ませたいのだがと言いながらも、それが不可能だと知っているかのように話すマークは言葉を濁す。がだ、ここまで聞いて引き下がる忍達ではなかった。





マークの疑問にすずかも剣を習いたいと言い始めたことを伝える。もちろんすずかの思いは、なのは達の力になりたいのだろうともう一つの理由で隠して。

「……まあ同年代と比べれば身体能力も高いし、剣士としての適性もあるかもな。友の助けになりたいという思いだって否定することはしないが……」

「戦場に出たことのあるあなたから見たら不安だろうが、それでもかなり強い意志を持って挑んでいる。せめて目指すことは認めてあげてほしい」

実際訓練方法を指導した恭也が言うには、普通なら泣いて逃げ出してもおかしくない訓練を施したそうだが、それにもかかわらずまだ続いているらしい。

「本人が選んだというのなら、俺に口を出す権利なんてないだろうが……生半可な努力ではナノハたちの足手まといにしかならないと伝えといてくれ」

「え？　なのはちゃん達ってそんなに強いのか？」

「単純に魔力を競うものであれば、俺の知る中でも上位の150人くらいには入るぞ？」

それを聞いてなんだか微妙な顔をする忍達であったが、その150人と言うのはすべて他の世界の英雄たちだ。その中に十歳にならないうちから名前を連ねるといふ事がどんなにとんでもない事なのか、マークはわざわざ言う様な事をしなかった。

「どちらにしろ、今回の事件が終わればしばらく戦うことはなくなるだろう。それまでに参戦できるほどの技が簡単に身につくわけないだろ？　基礎からみっちり鍛えてやるといい」

「元よりそのつもりだ。……だが正直なところ、俺が思っていたより長引いているように感じるんだが大丈夫なのか？」

マークとしては、無用な心配をかける意味はないと思うのと同時に、実際戦場に出たものの家族に虚偽の報告をすべきではないという思いがせめぎあった結果の沈黙だったのだが、忍達にはそうは取れなかった。

「そんなにまずいの？」

「そう言っわけじゃ……」

だが言葉を濁してしまった時点でマークの失態であろう。仕方なく現状について白状するしかなかった。

「……内通者ねえ、それは確かに子供たちには言えないわ」

「いくら内通者とはいえ、管理局が傾くようなことはしないだろう。ある意味不測の事態をなくすための手だと思えば、そう悪い手じゃないんだ」

「敵の行動のコントロールか……もしそっち方面なら、ある程度情報を仕入れたところで局内で公開し、一気に殲滅と言った作戦か？」

はつきり言って希望的を通り越して楽天的な見解だが、そうであつたら後腐れが無くていいのだ。……まず間違いなく違う目的である以上、意味のない想像ではあるが……

「内通者を探るためいろいろと現場でやってはいるんだが、簡単に尻尾を出してくれなくてな……それどころか索敵にわざとかかって、こっちが駆け付けたところには逃げ出しているといった挑発までされる始末だ」

「うわぁ……ストレスたまりそうねえ」

実際クロノはかなりきている状態だ。なのはやフェイト達が学校に行っていたり、就寝した後の時間にそついった挑発をされているので、おもな被害はクロノとマークにもろにかかってくるのだ。

「挑発が目的だと理解しているようだし、うまく受け流さないといけないという事もわかっているようだが……実行するのは難しいんだろっ」

「そりゃそつでしょう……むしろ平気な顔をしていられるあなたの方がおかしいわよ」

挑発だとわかっていても、目に見えるところに居る敵を捕縛できないというのはどうしてもストレスになってしまつものだ。もちろんマークとクロノの立場の差と言うものも関係しているだろうが、それにしてもマークは平常心過ぎる気がしないでもない。

「言っただろ？ いろいろやっているって……」こちらにも策があるなら落ち着いていられるもんさ」

「そしてそれをクロノ君には教えてないのね……趣味が悪いわよ？」

忍の指摘に苦笑するマークだが、お互いなせ策を伝えないのかは理解している。何処から策が漏れるかわからないからだ。

「なんだかんだでリンディや俺が本局に顔を出さないといけない機会が多くなってきた……まあ、事件はここだけで起こっているわけじゃないし、仕方のない事ではあるんだがな」

「結果、クロノ君が追いつめられて来ている、か……」

おそらく内通者がどこかでほんの少し手を加えているのだろう。それでも理不尽な命令でもないため、ほんの少しずつ削られることになっているのだ。

そんな効果的な手を打っているにもかかわらず自身の影すら見せずに行うその手管を、マークはかなり評価していた。

「策とは言ってもかなり行き当たりばったりなものだ。とはいえ、もうすぐその策を使えるタイミングが来るから、まあクロノのストレスを吹き飛ばす程度の戦果はもぎ取ってやるさ」

そう言って笑うマークはやけに迫力があり、忍と恭也はやはりマークも平気そうな顔をしてそれなりのストレスをため込んでいたのだと理解させられることになった。

「ふう……これは思ったより大変なことになるかもしれないわね」

「本当に……その、僕も聞いていいことなんですか？」

リンディはある人物との会談を行うために本局にまで来ていたのだが、予想以上に大変な相手であったため、少し前から無限書庫にて闇の書の情報を集めていたユーノに同行を依頼したのだ。

「いやなら断ってくれていいのよ？ ……正直、こんな立場じゃない

きゃ断りたいぐらいだもの」

「その物言いは正直すぎますって」

最初は闇の書について情報を提供できるかもしれない、その程度の相手かと思っていたのだが、実際本局まで来てその名を聞くと、予想以上の大物であった。

「聖王教会の預言者様、ね……噂程度には聞いていたけど、関わり合いになるとは思ってたわ」

「予言に闇の書に関すると思われる記述と、竜と思われる言葉が見つかった……でしたか」

上層部はそれなりに気にしている予言らしいが、それでも的中率はそう高くないとか……いずれも噂であるが、個人的に闇の書に因縁もあるし、組織のしがらみとしても会わないわけにはいかない。

「それでもタイミングが良すぎる……マーク君と接点を持つためのこじつけの可能性もあるのよ」

「なるほど、それで今一番闇の関係者の中で闇の書に詳しいだろう僕に白羽の矢が立ったという事ですか」

マークの情報は秘匿されてはいるが、それでも人の噂と言うのは止められるものではない何処からか聖王教会にも話が入ったのだろう。

せめてマークから甘い汁を吸いだそうとしていく輩くらいは止めないか、と思ったりリンディはユーノと結託して相手のあら捜しに出るほか手が無かったのである。

「もちろん本当に予言に闇の書やマーク君が関係している可能性もあるし、予言した本人は何の悪気もない可能性だってあるわ」

「本当に、責任重大ですね」

せめてもの抵抗として、予言者本人と護衛1人が本局に来ること、と言う無茶な要求をしたのだが、それすら実行したのだから教会の本気具合がうかがえるというものだ。

「とはいえ、ここまで来た以上は腹を括りますよ。僕は、戦場では役に立っていないだ……なら、戦場以外で助けになることをしないと」

「……まあ、期待しているわよ、ユーノ君！　ここで一発、できる男だってそこを見せつけてやりましょうー！」

人の上に立つものとして、なのはが撃墜されて以降ユーノが悩むさまを見ていたリンディは、ここぞとばかりにユーノを焚き付ける。

そうして向かう先に居た少女との会話は予想以上に混沌とした情

報を得ることになり、後日マークの意見を聞くために再度集まることになったのであった。

### 第36話 「思惑を超えるため」

「……正直に言っただけならば、わたしはこんな策に頼りたくはない」  
「そりゃまあ……あたしだって進んでやりてーとは思わねーけどさ、それでも今は手段を選んでられねーからな」

シグナムの本音に同意しつつも、現実を見据えたヴィータがその想いを否定する。もはや彼女たちには躊躇しているような時間はないのだ。

「それはわかっている……主はやての状態は悪化の一步をたどっている。このままでは闇の書の完成よりも、体の限界のほうが早く訪れるだろう」

「ああ……今までの状態を続けるわけにいかないなら、もうあいつらを倒すしかないんだ」

今までは俗にいう魔獣などと呼ばれる魔力を持った獣からの蒐集を主にしてきたが、管理局とのにらみ合いを続けたままの蒐集に限界が訪れたのだ。

そのため、管理局の魔導師の中でも上位の魔力を持つてであろうものからの蒐集を行う事で、その遅れを取り戻し、相手戦力を削り、動きやすくなるような計画を立てることになったのだ。

「そうだ、そして今の我らが勝利を収められるものは一人しかいない……」

正確には、『より確実に勝利して、蒐集を行える相手』と言うべきだろう。白い少女はもう蒐集を行ったため除外し、黒い魔導師は正規の訓練を受けているとのことなので大事を取って除外。緑の少年は戦線を離れたとのことで除外することになる。最後にシグナムが直接



対決で敗北した、私服で戦場に來た青年を除外すればあとはもう一人しかない。

「今日、フェイト・テスタロッサを討つ……！」

今回の策が内通者からもたらされたものだからということとは、もはや関係ない。騎士たちは己が主を守るため戦う事を決意したのだから……

「待って……ちょっとでいいから待って……一体どうしてこうなったの!？」

エイミイの悲痛な叫びは、残念ながら答えを返せる者が居ないものであった。最初から予定されていたものはいいい、急用が入ったのも仕方がないだろう。ただそれが運悪く重なってしまったのはどうにも受け入れがたい事であった。

まあ、それでも一度叫んだせい少しは落ち着いたようだが……

「リンディ提督はアースラ関係で、クロノは闇の書の情報をまとめるために本局に行くって」

「うん……アースラの武装追加、『アルカンシエル』のことは以前から聞いていたし仕方ないんだけど……本当だったらクロノ君が同時に本局に行くのは避けたかったんだよね」

「マークさんが召喚される前に情報を整理しておきたいって話でしたっけ？ えっと、聖王教会でしたか」

前回リンディが会談を行ったという事はなのは達も聞いている。その結果マークが次回の会談に参加する必要ができたことも。よって早急に情報をまとめ、万が一にもマークが聖王教会に取り込まれることを避けなければならぬ、と言いつのが管理局上層の意見であるらしい。

「まあ、別に仲が悪いわけじゃないけど、やっぱりマーク君の存在はシヤレにならないカードだからね。自分のトコに居てほしいっていうのはわかるよ」

「ん……組織の迷惑なんかはわからないけど、マークがそばにいた方が安心できるのは間違いないかも」

フエイトからしてみれば、マークであればどんな事態でも最終的にはなんとかしてくれるという信頼ともいえるものだが、この発言の仕方でも周りにもそう聞こえるかと言えば答えは否である。

「んふふ、まあそれについてはまた別の機会に詳しく聞くとして……そのマーク君が居たからこそ、艦長とクロノ君が同時に出かけられたのに、どうしてアルバイトに行っちゃったのかねえ」

「あはは……」

「ここでいうアルバイトが翠屋であったのならまだいい。それならば緊急時にすぐに呼び出せたのだから。問題はグレアム提督の要請による武力協力のため別の世界に行ってしまったことだ。それも『ちよっと出かけてくる』と言う簡潔な書置きと、送られてきたであろう資料をリビングに置いただけで……」

「しかし、この内容なら仕方ないって思えちゃうのがねえ」

「どっという内容なんですか？」

「つい7時間前に偶然発見された反管理局を掲げる武力集団のアジトの制圧任務……しかもニアSランクが一人いるかなり大きなところだよ。さすがにマーク君1人じゃなくて武装隊がついて行くみたいだけど……」

そう言ってエイミィは資料に目を通すと、やはりといった表情を見せ言葉を付け足す。

「隊長がAランクのトコだね……たぶんだけど、ほかの部隊にはもう任務が振り分けられていたんだろっね」

「本当に管理局って人手不足なんだね」

どんな理由があったにしろ、外部協力者であるマークを主軸に置いた作戦をとらざるを得ない状況にあるのならば、そういった解釈もできるだろう。だが管理局だって馬鹿ではないのだ。普段ならいつでも投入できる戦力を相応の数用意している筈にもかかわらず、今回に限ってAランクの部隊しか残っていないというのは異常なのだ。

(偶然なんて言ってるけど、このタイミングってことは間違いなく内通者の手が加わってるんだろっね……とはいえ今回のことだけじゃ証拠は出てこないよねえ)

内通者からしてみれば、マークは最優先で戦場から排除したい相手だというのは簡単に想像がつく。そして、それをなしたという事は

……

「って、今まさに闇の書の騎士たちが動き回ってるってこと？」

それも内通者により前線の戦力が損なわれていることは知られているだろうから、今までになく派手に動いていることだろっことを、エイミィは想像する。そして、そんなエイミィの予想を裏付けるかのように、室内にアラート音が響き渡った。

時は少しさかのぼり、マークは管理局の廊下を足早に歩いていた。内心はこんなものんびり動く余裕はないと思っただけながらも、余裕のないさまを管理局に晒すつもりはまだなかった。

(とはいえ、今の地球に残ってる戦力はフェイトにアルフ、それになの

はただだ……まず間違いなく、奴らは動くだろう)

情報が流れているという前提の思考だが、おおよそ間違った思考ではないとマークは確信している。この依頼を断ることも考えたのだが、それだといたちこつこつが長引くだけと判断した以上、どうにかして内通者の思惑を越えなければならぬ。そのためにあらかじめある人にあることを依頼し、準備をしてきたのだ。

そのような決心を抱き、マークは今回の任務に同行する隊との顔合わせを行うブリーフィングルームの扉を開け、行動を開始する。

「話は聞いているだろうから余計な自己紹介は省こう。マークだ」

「貴方が……自分は……」

「話は現場に移動しながらするぞ。隊長を含め、30名全員そろっているな？　なら行くぞ」

「は……？」

言う事だけ言って転送ポートに向かうマークを呆けたように眺めた隊長は、本気でマークがこれ以上ここで話をする気が無いことに気が付き、ほかの隊員に合図をしつつ抗議をしながらマークに走り寄った。

「な、何言ってるんすか！　相手は1000人を超える魔導師がいるんすよ！　相手が逃げないように包囲をしながらほかの部隊の到着を待つって繊細な任務なのに、何の話し合いもしないまま現場に向かってどうしようってんすか!!」

「包囲もしないし、他部隊の到着も待たん。速攻で行って、終わらせる」

今度こそ絶句して立ち暗みを起こしそうになるのを、隊長は気力で防ぐ。一応上層部からこの民間協力者の言う事はなるべく聞くように言われていたが、流石にこれはひどすぎた。

「そ、そんなの……！」

「悪いが時間が無い。策と呼べるほど立派なものではないが方針としては、俺が中央を突破するから他の隊員を率いて討ち漏らしの対処をしてくれ」

「ホントに策なんて言えないっすね！ 特攻でもするつもりですか!？」

「何も特別な攻撃なんてものじゃない」

ただ敵の居る所へ攻撃をするだけの何の変哲もないものだ、そんな返しをするマークに隊長は憤りを越えてもはや脱力するしかなかった。それにより若干冷静になった隊長は、ただできないと言ってもマークが止まらないことを理解し、それならば詳細を話し合う事で諦めさせようと試みた。

「……まあ、とにかく急いでいるのはなんとなくわかりました。でも、勝算はあるんですか？ いくら急いでも急ぎ過ぎて失敗して、永久に帰れなくなったら本末転倒っすよ？」

基本的に拠点の攻撃には、防衛側の三倍の人員が必要と言われてるのはご存じっすか？ あと敵大将はニアSランクっす。はつきり言っただけの隊では戦いにならないっすよ？」

「……AAランクの魔導師にすら圧勝できる実績がある。問題は飽和攻撃だが、それなりにでかいアジトラしいからな、1/3程度は休息しているだろう。襲撃箇所在即座に集まれるほど密集した陣形ではないだろうから、緒戦は10人も集まればいい方だろうっさ」

その後集まってきた奴らを順次撃破すれば数の利は覆せる、などと至極当然のようにマークは言うので、隊長も一瞬その通りだと納得しかけてしまう。

「いやいやいや、なんすかその机上の空論は！ 確かに今の話の限り、相手の大将は何とかできる実力があるんでしょうけど、それは万全の

状態のときつすよね？ 連戦に次ぐ連戦の後じゃそんなの……」

「？ 敵陣を突破して敵大将と当たるなんて当たり前だろ？ その程度の消耗は最初から織り込み済みだ」

「一体今までにどんな戦場を越えてきたんすか……」

確かに実力者が敵陣に風穴を開け、敵大将を討つというのは常道だろう。ただしその実力者が複数いて、別の人物がそれぞれの役割を行う場合だ。同じ人物が敵陣に風穴を開けると敵大将を討つのをやるなんて、正気の沙汰ではない。

ただそれをできて当然のように語るマークに説いても仕方のない事だろうと、隊長は別の説得を考える。

「そもそも、敵増援が来る前に倒し切れるんすか？ 緒戦の10人だって馬鹿じゃないでしょう、増援が来るとわかっていれば防衛に回り、時間を稼ぐ事だって十分あり得ます」

「こちらの戦力を認識する前に倒し切れば問題ない。ただ敵陣中央に駆け抜けるから討ち漏らしが出るだろう……その対処と、俺が倒した輩のバインドによる捕縛を頼みたい」

答えになってない答えが返ってきて隊長は今度こそ確信する。根本的な常識が違う、と。マークの中で戦い自体は勝利するというのもはや確定しており、問題はその速さになっているのだ。

隊長がそもそも敵を倒せるのかと聞いても、マークが答えるのは敵を倒した後の対処の話をしているのがその証拠だろう。

（これってもう説得は不可能って意味か?! いや諦めるな、ロイド・リーダー！ 今回の事件に対処するために作られた急造部隊とはいえ、俺は隊長で部隊の奴らの命を預かる立場なんだから！）

だが悲しいかな、所詮急増部隊の隊長とマークの立場の壁は厚かった。もともと上層部からマークの意見を最大限実現するように言わ

れていた隊長に、マークを止めることは叶わなかったのであった。

「ああもつ！ 部隊の中で3〜4人でチームを作ってフォローし合え！ 撃破した相手は必ず捕縛し、戦闘行為に復帰させないように徹底せよ！ いいか、必ず集団で行動しろよ？ 逸れたらそこで終わりだと思え！」

転送ポートから世界を渡った後なので手遅れ感はあるが、突撃ギリギリまで抗議しては士気にかかわる……そう判断した隊長は部隊に指示を出し、何とか戦える体裁を整える。

それに伴い先頭を歩くマークの気配が変わる。表面上は先程と変わらず淡々とした歩調と態度だが、その纏う空気が戦場のものへと切り替わる。その空気が隊員の間流れていたこれから無謀な戦いに赴くという厭戦気分を取っ払い、喰らい突きさえすれば何とかなるんじゃないかと言う希望を抱かせる。

「……隊長、ひょっとしてこの人無茶苦茶凄い人なんですか？」

「知らんよ、もつ……」

そういえば最近オーバーSランク相当の民間協力者が委託試験を受けたという噂があったか、などとつぶやく隊長の言葉に、先ほどの質問をしたマークよりわずかに年下であろう隊員は目を見開く。

「どんな戦いをするのか、目に焼き付けておくべきですかね？」

「まず生き残ることを考えとけ。すべてはそれからだ」

隊長のごもつともな言葉に気を引き締めた隊員は、個人所有の拳銃型デバイスを展開し、わずかに手を加えることで戦闘の準備が完了したことを示した。

それに他の隊員が続くのをちらりと見て、マークはわずかに不思議そうに言った。

「武装隊の装備は固定じゃないのか？」

「最低限の装備は支給されますが、人によっては個人的に持ち込むものもあるんですよ。まあ、この隊はとりわけ多いっすけどそこは気にしないでください」

自分もその一人であることを示すように片手剣型のデバイスをわずかに持ち上げる隊長に、マークはわずかにうなづくことで納得を示す。

「戦闘継続が不可能と判断したら呼べ、転送魔法も用意しておく。……よし、じゃあ行くぞー！」

マークは装備している鎧とは釣り合わない魔道書を取り出すと、一気に駆け出す。そして、あっという間に敵アジトにたどり着いたと思ったら、瞬く間に巨大な炎弾を作り出し、門を消し炭に変えた。

「なんつー威力……」

「呆けるな！ 来るぞ!!」

早期警戒の結界でもあったのか、門の内側に居たのは予想より多い16人であったが、門の破壊に巻き込まれたのか体勢を崩しているものも多い。そんな中、わずかに居た無事な奴らが射撃魔法を使おうと杖を向けるが、マークの方が圧倒的に早かった。

「エルファイアー」

その一言のみで再び巨大な炎弾を作り上げたマークは、それを正面の敵へと向けた。先ほどの門を破壊した一撃とは比べ物にならないくらいゆっくりと進む炎に敵の魔法が突き刺さるが、そのすべてを焼き尽くし、ついに敵陣にたどり着き炸裂した。



「えげつねえっすね……」

「手当たり次第焼かれるよりましだろ？」

何とか直撃を避けた奴らも、その余波によって立つことすらできないでいる。マークの後ろにいる部隊の連中は速やかに腰の抜けた連中にとどめを刺し、捕縛していく。

その様子を確認したマークは隊員たちに軽く指示をだし、未だ炎のくすぶる廊下を再び駆け出した。

「もう行くんすか!？」

「自分も！」

他の隊員を捕縛に残し隊長と隊員が続くが、はつきり言って自分たちが必要なのか疑問に思うレベルの道行であった。

遠距離攻撃ができる隊員はわずかながら援護射撃を行い、それができない隊長は気絶した敵をバインドで縛り上げていく。

ただしマークの攻撃はその比ではない。爆炎が、爆風が、敵を薙ぎ払い、建物を破壊し、この地を炎の赤に染めていく。その攻撃の後の残り火ですら、バリアジャケット越しに本来その一撃が死に至るものだと思ひ知らせる。

「……煉獄の王、とか呼んでも笑われないような気がしますね」

「笑われないっていうより、笑えねーよ」

「あー、地獄の王様っていうのなら、古代ベルカに倣って『冥王』とでも呼びますか？」

そんな軽口をたたきながらも作業のように隊長は気を失った敵をバインドで捕縛し、隊員は運悪く直撃を受けなかった敵に射撃魔法による慈悲の一撃を加える。

状況は圧倒的優勢であったが、マークは内心舌打ちをしたい状況で

あった。

（敵大将が出てこんか……くそっ！　すぐにも決着をつけられる状況にしておきたいのに……！）

おそらくマークをできる限り消耗させてから戦いたいのだろう。ただでさえ思っていたほどの進撃速度が出ないことにいら立つマークが、なかなか出てこない敵の大將をなじりながらも戦闘を続けていると、タイムアップを告げる通信が入った。

「ふむ、時間切れか……」

「はい？」

はた目から見たら淡々と進撃をつづけていたマークは、ふと思いついたかのようにそう一言言って立ち止まる。その行為に対する説明は、隊長が質問をする前にマークの口から発せられた。

「時間が無いとあらかじめ言っていたらどう？　俺がもともと関わっていた事件の方で動きがあったと、ロウラン提督から連絡があった」

リンディが信頼できる人として挙げたレティ・ロウラン提督。彼女にフェイト達が出動した際に、マークに連絡を入れてもらえるように頼んでいたのだ。

「もともと今日中に動きがあることは予想していたし、この仕事が終わるのが遅くなったら、帰った時にはすべて終わっていただろう」

だからこそ、速攻で終わらせる必要があった。本来の計画であった包囲戦になれば、最速でも数日はかかっていただろうから、無茶を言って正面突破を行ったのだ。

「じゃあ、これでも遅かったってことっすか……？」

今まで武装隊を伴って、できる限りの速度で敵地に突貫したにもかかわらず、まだ敵の大將とは戦いすら始まっていない。この状況で離脱なんてこともできない以上、マークは間に合わなかったという事だ。

別にこの場にいる誰が悪いわけではないが、その事実には隊長たちがうなだれる。

「まだだ、まだ終わりじゃない……。」

「え？」

そう、まだフェイト達が出動しただけであって、戦いが終わったわけではないのだ。ならば出し惜しみなんかしている余裕はないと、マークの手にはいつの間にか魔道書ではなく『烈火の剣』と呼ばれている大剣があった。

「三下はほぼ駆逐できたし、後は敵大將を獲るだけだ！」

もともと、簡単に突破できるような足止めだと思っていたのが間違っていたのだ。確かにマークは強いが、それがもはや過去の栄光であったというのを自覚していなかったという事だろう。ただでさえ封印される前、術式を製作するのに10年近く戦場を離れていたのだ。

(ちなみに再び目覚めて半年ほど……これは戦士を止めると言って訓練をしなかったツケというやつだ)

より正確には、戦士を止めると言うておきながら戦場に身を置き続けたツケか。だが、今そんなことを悔やんでも何も始まらない。

（頼むから、俺が戻るまで持たせてくれよ！）

そうしてマークは改めて駆け出した。一分一秒でも早く、仲間たちの、大切な相方の居る戦場に向かうために。

### 第37話 「横やり」

「まったく……一体この身に何が起っているのやら」

管理局に捕捉されるためにいくらか戦闘行為をする必要があったシグナムは、その地に居た魔獣を倒し切り、その手に抱いた違和感をかみしめていた。

(これは、間違いなく強敵と呼べるだけの能力を持っていた……だがなぜだ？ この攻撃が、防御が『ぬるい』と感じてしまうのは)

シグナムの経験は、今目の前に倒れている砂竜とでも呼ぶべき巨大な魔獣が強敵であったと判断している。だが実際戦った感想としては、その高い能力に反して迫力に欠けるものだったと言わざるを得ない。

「いや、そもそもあの一撃を知ってしまえば、そのような感想に至ってしまうのも仕方がない事と言えるか……なあ、フェイト・テストロッサ？」

「何の話だが、さっぱりわかりません」

急な問いかけだったにもかかわらず、遅滞なく返事が返ってきたことにシグナムは驚かない。逆に、来て早々何らかの問いかけをされたフェイトもまた驚くことはなかった。

「なに、至高の一撃を知ってしまえば、通常なら必殺と言われる一撃ですら凡庸な一撃となり下がるといふ事の確認だ」

「それなら……理解できます」

星光の輝きや業火の理を知ったフェイトにはその気持が理解で

きた。特にマークの最大の一撃を受けたであろうシグナムには、かつて手も足も出ない一撃を受けたフェイトにとって共感できるものがあった。

「まあそのような感傷など、為さねばならぬ使命の前では何の意味も持たんがな」

「それもわかります」

主を救うためならば、死地に向かう事すら厭わないシグナムと、かつて母のために管理局と敵対してきたフェイトは、ふしぎなほど似かよった性質をしていると言えた。

そして、だからこそお互いを理解できる。話し合いの余地などなく、自身の目的を果たすか、一度壊れるまで決して止まらない、と。だが、それでもフェイトは言葉を投げかける。かつて自分が誓った通りの自分であるために。

「……………どうしても、戦わなくちゃいけないんですか？」

「……………くどいぞ、フェイト・テスタロッサ」

「それでも、です。これしか道はないと思い詰めて、周りが見えなくなつて苦しんでる人を助けたいと思つて私はここに居るんですから」

確かにシグナムはこれ以外の道が見えない。それでも間に合うかどうかかわからず苦しんでもいる。だがなぜフェイトはそのことに気付けたのか……………

「意外とわかるもんですよ？ わたしも少し前まではそうでしたから」

その言葉は、シグナムをわずかにゆるがせる。それはすなわち、フェイトも過去苦しんで、そこから救われたという事に他ならないか

らだ。

そして、その言葉から思い浮かぶ男のことを、意識がかすみゆく狭間に聞こえた『共に戦えたかも』などと言う言葉をシグナムは脳裏から消すことができなかつた。

(何を馬鹿な事を……そんな不確定な希望に、我らの主の行く末を任せることなどできん！ それに、闇の書のことを最も理解している自分たちでさえ、このような手段しか思いつかなかつたのだ。部外者に何ができると言う！)

だがシグナムはその揺らぎを、強い否定の言葉でふたをする。見かけからは想像もできないほど長い時間を戦場で過ごした経験は伊達ではないのだ。

「……それならば、言葉だけで我らが止まらないことも、また理解できよう」

「はい……それでも、言葉を交わさない理由にはなりませんから」

たとえ話し合いが決裂に終わるとわかっていても、意志を示すことは大きな意味を持つのだ。

そうして二人はそれぞれの武器を構える。己が意志を貫き通すために武器を握る姿に、もはや迷いなど欠片もない。

「それでは……」

「いくぞー」

砂地であるにもかかわらずそれができたのは飛行魔法の応用なのか、お互いに力強く踏み込みぶつかり合った一撃は、当然のようにシグナムに軍配が上がる。いかに強い意志を持つとが、体格差により発生するパワーの差を埋めることまではできなかつたのだ。だが最初から力比べで勝てると思って無かつたフェイトに、そのような一瞬の

勝利は意味をなさない。

「はあっ……」

「っぐ……」

体をひねり離脱し、直後に神速の一撃目を繰り出すフェイトに、今度はシグナムが押されることになった。だがそれもまた一瞬の優勢に過ぎない。速さを除くすべてのスペックを上回るシグナムが、いくらか押されたとしても、それを押し返せないわけがない。

「バルディッシュ、カートリッジロード……」

フェイトは咄嗟にカートリッジを使い出力を上げシグナムの剣をはじくが、本来の動作とかけ離れた動きゆえに発生した隙も大きかった。

「レヴァンティーン……」

その際にカートリッジを使用した躊躇のない大上段からの一撃は重く、フェイトはいつかのよじに大地に叩きつけられる。

しかしフェイトだってその時のままではないのだ。強化されたバルディッシュは折れることなく主の手にあり、本人にも戦闘に支障が出るようなダメージは見られない。

(やっぱり強い……ちょっとでも気を抜いたら、あっという間にやられかねない……)

正直、フェイトには速度で翻弄すれば何とかなるといふ希望的な考えがあったのだが、今の攻防でそんな甘い考えは完全に打ち砕かれていた。速度差による一瞬の優位も、経験と技によって瞬く間に意味をなさなくなるのは、もはや戦慄を覚えるほどであった。



だが、戦慄を覚えたのはフェイトだけではなかった。

(想像以上の速さだ……！ 防御と合わせて、以前とは違うという事か)

いまだ総合力では自分が上であると確信を持って言えるシグナムであったが、フェイトの速さはその差を覆すに足る速さであることを感じたのだ。

「だが、時間をかけるわけにもいかない！」

「そう簡単にやれるとでも……！」

再びぶつかり合うもカートリッジで強化したフェイトと、強化を施さないシグナムの一撃はほぼ互角。本当ならシグナムも強化を施したいところであったが、ほぼ毎日しかも長時間戦場に立っていたため残りのカートリッジ数が心もとない。

だが、互角程度ではまだシグナムの優位は変わらない。それだけの技術と経験の差がフェイトとシグナムの間にはあったのだ。

(速度と行動パターンの把握を優先して、その後一気にけりをつけるべきか……ギリギリだな)

それは仮面の男から聞いた介入までの制限時間だ。武装局員が来るまでに確実に蒐集を行うため、一対一をする時間をあらかじめ決めていたのだ。必要なこととはいえシグナムにとって不本意極まりない事であったので、なんとしても手を出される前に決着をつけたかったのだが、やはりそう簡単にはいかないようだ。

その一方でフェイトも形勢逆転を狙って思考を巡らせていた。

(このまま戦いが続けば、削り切られる前に増援が来るはず……あくまで、私とその前にミスをしなければ、だけど)

高機動戦が続く現状はほんのわずかにフェイトが劣勢であるといった程度だが、それは一瞬で崩れかねない均衡なのだ。こんな極限まで集中した状態を増援が来るまで持たせるのも、かなりの賭けとなるだろう。

(でも、シグナムはきつと私のミスを待つような消極的な選択はしない……ならもうすぐ仕掛けてくるはず！)

そして、フェイトの予想は見事に的中する。お互いの攻撃を裁く際に適度に距離を取り、最後の一撃を放つ間を作ったのだ。

シグナムが勝負に出るためにカートリッジを使用し、レヴァンティンをシュランゲフォルムに切り替える。それは今までのような直線的な攻撃ではなく、変化に富んだ攻撃に切り替わるという事だ。

(今のわたしじゃ、アレを完全には避けきれない……！)

いくらフェイトが速いと言っても、連結刃による変幻自在の攻撃を躲し切るには経験が足りない。だが同時に、あのような繊細な動きが片手間で行うことはできないことも容易に予測できる。

(一度振り切れれば、倒せるはず……！)

狙うはシグナムの攻撃直後、連結刃を長剣に戻すまでの間に全力の一撃を叩き込む。そう決断したフェイトは集中力を高めながら、周囲に合計5つのプラスマランサーを展開する。

お互いに準備は万全。集中も極限まで高まった彼女たちを開始の合図はいらなかった。フェイトが踏み込むのと同時にプラスマランサーを発射し、そこにシグナムの連結刃が迫る。

「ッ……ッ……」

浅くだが脇腹を切り裂かれながらも、フェイトは連結刃を躲しシグナムへと迫る。プラズマランサーは連結刃に阻まれるも、その役割を十分に果たしたと言えるだろう。

「はああああ……ッ！」

バルディッシュを振りかぶり、飛行魔法が使えるフェイトにとって一足飛びに踏み込める位置にまで至り、そこでまだ連結刃を振り切っていないことを知る。

どのような軌道をたどったのか再びフェイトの前に現れた刃は、今度こそ驚愕に声も出せないフェイトを貫かんと迫り、その場にいた三者の間を裂くように奔った火閃に弾き飛ばされた。

「なっ!？」

フェイトの驚きはいつの間にか現れた仮面の男の存在に、シグナムと仮面の男の驚きはフェイトを守るかのように戦場を切り裂いた一本の矢に対してのものだ。

三人が三人ともこの場に現れるはずのない人物を思い描き、どんな手段を使ってきたのか、その場に想像通りの人物が現れたことを確認する。

「マーク……！」

「まさか……どうやって……！」

「……！」

最も色濃く驚愕を現したのは仮面の男であった。それも男の立場を考えれば当然であろう。彼からしてみれば、下手をすれば数日かかるような任務を振られたにもかかわらず、ここに、この時に現れたのだ。さすがに彼の戦場でなにが起こったのかまではまだ知らないの

で、もう任務を無視してやってきたとしか思えなかったが、それもまたありえないという事を彼は知っていた。

(彼は誰よりも自分の立場を知っていたはずだ……隙を見せればすべてをむしり取られかねないのに、いったいどうやって！)

それだけマークの持つ術式は魅力的で、ちょっとしたミスに付け込んででもそれを得たいと思う者も多いのだ。まあ、今回に限って言えばマークは力技で何とかしてしまっただけだが……

もちろんそんな思いを知る由もないマークは、ただ現状の把握に努めていた。

(今のシグナムの一撃……初見では俺でも喰らっていただろうな)

マークの攻撃を受けた直後に元の剣の姿に戻っていたが、連結刃なんてシロモノを見たのはマークの長い戦場の経験の中でも初めてだった。

傍から見ていたマークにすら、フェイトがその一撃を躲しきれたかに見えたのだ。マークが矢を放った本来の目的は、仮面の男がフェイトを横から攻撃しようとしたのを防ぐための一撃だったのだ。

(まあ、結果オーライだったからそれはいいんだが……予想より状況は悪かったみたいだな)

二対一、いや、フェイトが仮面の男にまったく反応できていなかった以上、伏兵として控えていたのだろう。そしてその事実是最初からフェイトが目的であったことを示すものだ。

その事実とマークの今回の狙いが交錯し、どう動くべきか一瞬迷う。だがその一瞬も敵は待ってはくれないのだ。

《フェイト、前!!》

「え？ ツ!!」

その一撃はこの場で最も驚きの少なかったシグナムのものであった。十重二十重に罫を張ろうが、マークならそれを越えてくるのではないかと云う、自分を倒した強敵に対する信頼とも呼べるものがあったと言えるだろう。

かろうじて防いだフェイトも、脇腹の傷のせいか受け止めることはできず大きく弾き飛ばされる。それもマークの位置から離れるように……

「くそっー」

もともとマークの射程の遙か外であったのを無理やり介入していたのだ。存在に気付かれていなかったならともかく、気付かれてしまった今となっては弓による攻撃はほとんど意味をなさないだろう。

それにもかかわらずマークは手に持つ炎の弓『パルティア』に矢をつがえ、弦を引き絞る。

(炎の魔法は速度が圧倒的に足りないし、何より攻撃範囲が広すぎてフェイトを巻き込みかねない……ある程度の速度と、狭い効果範囲を持つ攻撃はこれしかないんだ！)

しかし先程までいた戦場で犯した失態がマークを蝕む。勝負を急ぎ過ぎた、あるいは平常心を欠いていたというべきか、ニアSランクの魔導師相手に手痛いカウンターを喰らってしまったのだ。鎧と生来の頑強さによりなんともない様に振る舞ってはいるが、並の人間なら上半身と下半身がサヨナラをしていただろう一撃は、流石のマークにもダメージを刻んでいた。

とはいえ、本人の感覚では戦闘に支障をきたすほどのダメージではないし、何よりダメージを言い訳にするつもりは欠片もなかった。

《こっちに近づいこつとか考えずに回避を優先しろ！》

《でも！》

《読まれているからむしろ危険だ！ 俺の方で何とかするから！》

狙うべきはフェイトに攻撃を加える一瞬だが、マークのことを警戒されているという事と距離が離れすぎているという状況のため、容易に散開され躲されてしまう。

しかし、フェイトがシグナムと仮面の男からわずかに距離を取る事ができた。気休め程度の距離だが、フェイトの速度ならこれでもしばらく時間が稼げるだろうとマークは『パルティア』をしまい、『リワープ』の杖と『鋼の大剣』を取り出す。

(短距離転移用だが、目測で1300程度……問題ない！)

マークの持つ中でも稀有な存在である『自分を対象とする』事の出る杖だ。それを使用し、改めて切りかかるシグナムとそれを防ごうとするフェイトの間に大剣を盾にしながら割り込むように転移をする。

「マークー！」

「ほっ……転移までできたのか」

二人の驚嘆の声を聴きつつ当然のように自然落下するマークは、戦場を地上に移すためフェイトの腕をつかみ引きずり落とす。

地上に降りると持っていた『リワープ』をしまい『ライブ』の杖を取出す。そしてあつという間にフェイトの治療を行ってしまった。

「……まだ戦えるか？」

「問題ない……とは言えないけど、大丈夫。やれるよ」

「よし、なら優先するのは仮面だ。アレを倒せば今後の展開が楽になるはずだ」

「? うん、わかった」

フェイトが見る限り、戦闘力が高そうなのはシグナムの方であったため少し首をかしげるが、とりあえず頷く。これでようやく二対二で戦う態勢が整ったが、マークは直前の戦闘でのダメージがあるし、フェイトだって治癒魔法を使用したとはいえ消耗度はシグナムより数段ひどい。

(現状だと互角と言ったところか……『フォルブレイズ』は許可が必要だし、さっきの戦闘で使ってしまった烈火の剣『デュランダル』を使うか?)

それともこのまま管理局の増援がつくのを待つか……そこまで考えたとき、マークはこの場に結界が発生するのを感じた。

「これは……!」

「ラケーテンハンマー!」

結界がミッド式であったため増援が来たのかと思った瞬間、背後から攻撃を受ける。何とか再び鋼の大剣を盾としようとするが……

(受け……きれない!)

咄嗟に受け止める体勢から受け流す方向に変更するが、わずかに遅かった。その一撃は鋼の大剣の剣身を削り、流した方向に一筋の溝が掘られる結果となった。

「何であなたが!?!」

「……いや、赤いだけじゃないみたいだぞ」

フェイトの驚愕に、マークはさらに鬼札が加わったことを告げる。

その視線の先に居たのは盾の守護獣であるザフィーラがいたのだ。

「なるほど、こっちが誘い出した気でいたが、実際は逆だったという事か？」

「我らの決め事がうまく嵌ったただけだ。まさかこれほどの状況を作れるとは思っていなかったさ」

それは戦場に『マーク・テストロッサ』が現れたら最優先の撃破目標とする、というものだ。その決まりの通りに集まったら仮面の男が結界を張り、このような状況が偶然出来上がっただけなのだ。

だが今となっては結果がすべてだ。一時的に対策本部の戦力を薄くして、敵をおびき寄せ捕縛するというマークの考えは覆され、マークとフェイトはかなり消耗した状態で4人も敵と対峙することになってしまった。

(ナノハとアルフは振り切られたか……結界がある以上すぐに駆けつけるのは難しいだろうが、ミッド式なら解析を期待できるか？ いや、わざわざ内通者が張った結界だ。そう簡単にはいかないだろうな)

いくつかの戦術をシミュレートしたマークは、いつになく消極的な案を採用する。それは攻撃には出ずただひたすら防ぎ続けること。

(「こっちはフェイトとの訓練もやってないが、あの騎士達は違う……数多実践を越えてきた猛者に、生半可な連携など隙にしかならないだろう」)

ならば攻撃をせずになるべく隙を減らす方が、まだ最終的に勝つ見込みがあるはずだとマークは結論付ける。

最悪フェイトだけは逃がす手を構築し、切り札の使用も検討したマークは剣身を削られた鋼の大剣を構える。その目からはいまだ諦



めや自暴自棄の輝きは見られず、シグナム達は改めて敵の強大さを認識する。

「それじゃあ第二幕と行こうか！」

その言葉こそが開戦の号砲となり、この戦場へと響き渡った。

### 第38話 「防戦・反撃・切り札」

「はああああっ！」

「ぶっ！」

鋼と鋼がぶつかり合い、轟音と火花を散らす。ただそのこと自体はシグナムにとって思惑通りで、マークにとっては舌打ちに値する事態であった。傷ついた剣をかばいながら戦おうとしたマークの行動を、シグナムの一撃が上回ったのだ。

(ちっ！… 足場が悪い！)

あまりにシグナム達が普通に動いていたからつい忘れていたがこの戦場は砂地であり、何も考えずにいれば動きが阻害されるのは当然のことであった。

「どうした？ 以前戦った時はこんなことでつまずきはしなかっただろっ！」

「こっちはお前らみたいな便利な魔法が使えないんだ、よっ！」

マークはシグナムを正面に対処しながら、後方に回ろうとした赤い少女に牽制の一撃を加える。いくら悪条件が重なっているとはいえ、敵の動きを見過ごすほど間が抜けてはいなかった。

「ぶんっ！ やるじゃねーか！」

「お褒めに預かり恐悦至極……なんて、この程度で言われたって嬉しくないな！」

お互いに言葉を交わしながらも武器を交える手は止まらない。いや、この場合は武器を振るいながらも言葉を放つことを止めないとい

うべきか。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン」

「今更だな…… ナーガ族が戦士マークとこいつは銘無しだ。ただの量産品、戦場に数多ある剣の一振りだ」

ただし、とマークはシグナムとヴィータ相手に剣戟を交わしながら続ける。

「越えてきた戦場は、決して凡百のものではない！」

ただの量産された剣でありながら、英雄の持つ聖剣に匹敵する戦歴を持つ大剣。神器には及ばずとも、歴戦の戦士にふさわしい得物だ。

その大剣の一撃は大地を穿ち、歴戦の騎士を相手取るのにふさわしい威容を見せる。

「ッ……」

その一瞬の隙を生み出したのは、間違いなく油断によるものであった。シグナムはマークを知っていたからこそその力を危惧し、結果この状況を作り出すことに成功した。

だが、マークの持つ『炎槍』を知っていたからこそ、『大剣』を振るうマークを甘く見てしまった。

「そ……」

「っく……」

だがその一瞬の隙をマークは見逃した。より正確には、マークの戦場はシグナムの戦場よりほんの少し広く、そちらの方へその刃を向けた。

「そう簡単に、俺らをやれるだなんて思うな！」

シグナムにとってはもう一つの戦場であった場所に、マークが青銅のナイフを投じる。それはこの場にいる、マークにとって唯一の仲間に対する援護射撃。その投擲は仮面の男に、ザフィーラに弾かれるも、フェイトが危地を脱するに十分な時間を作り出す。

この場にいるマークたちの敵が四人で、マークがそのうちの二人と戦っているのなら逆もまたしかり。フェイトもまた、ザフィーラと仮面の男の二人を相手取っていたのだ。

《助かった！》

《防御と回避を優先しろ！ 盾は攻撃しやすいだろうが、あれはもともと攻撃を受けるのが役目だ！》

余裕が無い様子のフェイトに助言を行いつつも、マークは二つの戦場が近づきすぎたり離れすぎたりしないように細心の注意を払う。できることならもっと近くで戦いたかったが、そうするとフェイトの持ち味を殺しかねない。お互いがフォローしあいながら戦うには、共に戦った時間が短すぎるのだ。

(飛行魔法とあの速度があれば、そう簡単にやられはしないだろう……なんて、気休めにも程がある！)

それでも幸い攻撃力の高い相手は自分の方に集まっているから、一つのミスで墜とされることもないはずだと、マークは自分に言い聞かす。だが、その程度の助勢・助言で互角に戦えるようなら誰も苦労はしない。拳打を主体と置いた戦いをする二人に、フェイトは瞬く間に追い詰められていく。

「あまり我らをなめるな！」

「よそ見しながらあたしたちに勝てるなんて思わねーことだ！」

「じのっ!」

そしてフェイトを助けようと動くマークの隙を見逃すほど、シグナムもヴィータも甘くない。振り下ろされた剣と戦鎧がマークの大剣を盛大に叩き、軋ませる。

追い詰められそうな仲間の援護を行う事で、マークも次第に余裕を失っていくという悪循環。戦いの天秤は間違いなくシグナム達に傾いていた。

「バルディッシュ、ソニックフォームを!」

その状況を覆そうと先に動いたのはフェイトであった。自身の装甲を極限まで排除して、より一層の速度を得るという諸刃の剣のようなシステムは、確かにその有用性を示すことになる。

「でやあああ!」

「なっ!」

「いつのまに!」

その速度はザフィーラと仮面の男を振り切つてなお止まらず、マークたちの戦いに割って入ることすら可能にした。しかし、その速度ですらシグナムとヴィータに一撃を加えるには至らない。否、フェイトには最初から一撃を加えるつもりなどなかったのだ。半端な一撃を加えて警戒されるのではなく、より強大な一撃でひとり墜として貰おうと考えたのだ。

「華炎」

次の瞬間に振り下ろされた一撃はまさに必殺。武器に属性が付加されてないため無色の魔力付加となったが、大地を抉る一撃は二人の騎士を吹き飛ばし、決して軽くないダメージを与えることに成功し

た。いや、その表現は誤りか。

「なんつー一撃……！」

「いや、奴の一撃がこの程度のはずが……！」

そう、今の一撃はあくまで『軽くないダメージ』しか与えられなかった程度のものであり、マークの本来の一撃には遠く及ばなかった。

それもそのはず、マークはこの戦いでの戦果をモはや諦めていたのだ。勝ちを得に行くにはリスクが高すぎると判断した以上、これ以降の戦いはどのように損害を抑え、手札を切らずに済まそうかと考えていたのだ。

そんな中フェイトが賭けに走り、チャンスを見出したとしても、それに即座に反応することはできなかった。その結果が先程の中途半端な一撃に繋がったのだった。

《悪い、しくじった……》

《うっん、わたしも先に合図をすべきだったから……》

だがこの一連の連携で、マークはその誤差に気が付いた。それは共に戦う経験以前の問題で、そもそも戦いの心構えからすれ違っていたという事に。

(ああ、くそ！ 何が相方だ、何が仲間だ!! そうであるなら信じて当然のことだろうが!)

直前の戦いで自身の衰えを感じ、自覚のないままに委縮していたのだろう。それに加え、フェイトを『相方』として以上に『守るべきもの』として見ていたのだろう。

(戦場に立つのなら、そんな考え侮辱にも程があるってもんだろ！ 確かにまだ年若く成長中だろうが、相方なら対等であるべきだろう)

！)

ならば、相方がまだ諦めずに戦っているのだからと決意を新たにしたところに、フェイトに一度は振り切られたザフィーラ達が即座に追いつき、マークたちに襲い掛かる。しかしマークはそれを危なげなく大剣ではじき、今度こそ共に戦うためにフェイトに声をかける。

「思っままに飛び回れ……安心しろ、髪の毛一本傷つけさせはしない！」

「！ わかった！」

それは勝利をつかむための賭けであった。後方支援をさせるより、その速度を存分に発揮できる前線の方が危険ではあるがお互いの持ち味を発揮できる。それでも相手の数の利まで覆せるほどではないので大剣はそのままに、左手にナイフを構える。

フェイトの愚直な突進を見ながら、マークは思考を加速させる。それは先程までの防御のためのものとは違い、敵を討つための思考。そして戦局は逆転する。

「まさか、これほどは……！」

「読まれている……いや、もはや掌握されているというべきか！」

フェイトが戦場を縦横無尽に駆け抜け、マークのナイフが迸る。言葉にしてみればそれだけのことだが、たったそれだけのことで四人も戦士が圧倒される。

「基本的にはさっきまでとやっつてることは変わってないのに！」

そう、フェイトだけならばいくら速かろうがこの人数ならば補足できないはずがないのだが、その瞬間をマークのナイフが狙い撃つ。それならばとマークに向かおうとすればフェイトの速度につかまり、ま

たマークの大剣に迎え撃たれ止めることがかなわない。

（一瞬で、戦局をひっくり返すというのか！）

先程までとは完全に逆になったこの状況に、シグナムは驚愕を隠せない。最初からマークとフェイトにこれができたのなら問題は受け入れられたらう。だがそうではないのだ。先程までフェイト達にはこれができなかったからこそ、シグナム達の優勢が実現していたのだから。

（一瞬で、ここまで成長するというのか！）

魔力が強くなったわけではないだろう。技術が向上したわけでもないだろう。ならば成長したのは精神力か？ どれにしろ、このままではシグナム達に勝機はない。

実際のところ、フェイトにはこれほどの高速戦を続けることは難しいし、マークにしたってナイフの残弾は多くない。あと数分もすれば崩れる状況であったが、それを許すマークではない。この状況が数分のものならば、その数分ですべてを終わらせるつもりであった。

「だが、まだまだ……まだ倒れるわけにはいかない！」

フェイトの神速の斬撃を紙一重で躲しつつ、シグナムが咆える。それに伴い、ヴィータとザフィーラもその力を、速度を増していく。その意志が、決意が肉体の限界を超えた力を発揮させるのだ。

その想いを打ち砕かんとマークが一步前に出たとき、魂からの叫びが戦場に響く。

「主を、その命を救うため、このような所で倒れるわけにはいかないんだ！」

「え……！」



それは己を鼓舞するための叫びだったのである。しかしその叫びは戦うべき相手にまで届いてしまつ。その叫びに、フェイトの神速が一瞬の迷いを見せてしまつ。

「フェイトー」

「ッー」

その声に自身の速度が鈍ったことを知るが、もう遅い。マークのナイフも、フェイトが最速で駆け抜けることを前提に投じられていたため、シグナムを捉えることなく空を切る。

そうしてシグナムの渾身の一撃は、フェイトに振り下ろされる。

「やせるかッー」

だがその一撃に対し、マークは強引に割り込んだ。それは先程と比べてフェイトとマークの位置が近く、さらにマークが決着をつけようと一歩踏み込んでいたからこそできた荒業と言えよう。

しかしそんな細かい理屈はどうでもいい。ただこのシグナムの一撃に、装甲を削りに削ったフェイトは耐えられないと感じたから、無理やり割り込んだというだけだ。

「……ッー」

マークは奥歯が割れるほど歯を食いしばり、力の限りで大剣を下から振り上げる。もはや撃ち合うには、弾くにはタイミングが遅すぎたのだ。シグナムのレヴァンティンに十全の力が乗った状態であるのに対し、マークの大剣には三分ほどの力しか伝わっていないような有様であった。

それでもマークの渾身の一撃はシグナムの一撃とぶつかり合い、均衡を保つ。どれほど不利な状況が重なるうが、マークの膂力はその状

況を凌駕する。それはマークが人をはるかに超えた膂力を持っていただけからこの均衡であった。だから、その結果起こったのはごく当たり前のことと言えよう。

それは小さな異音であったが、決定的、致命的な異音であった。

次の瞬間、大剣は砕け散り、大剣のあった空間をレヴァンティンが奔る。全力を振り絞っていたマークは、それを認識することはできても反応することは叶わず、シグナムの一撃に切り裂かれた。

(馬、鹿か……何をやって……)

おそらくマーク対策として非殺傷設定を使っていたのだろう。飛びそうになる意識をkarouじてつなぎ止めながら、マークは剣身を失った柄を握る。

思考は濁り、かつ走馬燈がごとくという矛盾した状況になりながらも、何が起こったのかは理解していた。

(剣の限界か……)

それは人の武器である剣を、人以上の膂力で振り回したのだから砕けて当然の帰結であろう。それが神器であるのなら、人の常識を超えた武器であったのなら起こらなかつた現象であつただろうが『鋼の大剣』は違う。

いかな戦場を越えようが、どれほどの意思を込めて振るおうが所詮は量産品。どれだけ至高に近づこうとも、決してそこには届かない平凡な武器に過ぎなかつたのだ。

(……まだ、生きてる)

自然とまわり続ける思考は、濁っていても的確に次の段階へと移行

する。先程何が起こったのか理解したなら、次は現状を把握しようとし始めたのだ。

剣が砕かれた。

一撃をもらった。

四肢に欠損はない。

武器もまだこの手にある。

敵はまだ目の前にいる。

ならば

「華炎」

柄だけになった大剣にあらん限りの魔力を注ぎ、目の前の敵を迎撃する。その生涯のほとんどを戦場で過ごした男の、反射的な行動であった。

「がっ……！」

一瞬のうちにあまりに多くのことが起こった為、シグナムは半ば混乱の中にあつた。渾身の一撃を放つに当たり、なぜかフェイトの動きが鈍ったことに始まり、マークの乱入に、冗談のようにあっさりと砕けた大剣。そしてシグナムの一撃がきれいに入って倒れようとしたマークからの奥義というカウンター！。

ただ唯一両者にとって幸運だったのは、大剣の剣身が砕けていたことであろうか。それによりマークの一撃から物理的要素が排除され、単純な魔力による攻撃となったのだ。だが両者のダメージは甚大だ。

そしてそこへ、当然のように追撃を加える存在が居た。

「マークー！」

「ッー！」

朦朧としながらも奥義を放ったマークであったが、その意識がおちていたわけではなかった。いくらか鈍ろうが神速の域にあったためか、それなりに離れてしまったフェイトの呼びかけに覚醒するが、それとほぼ同時に胸部に焼くような痛みを覚える。

「想像以上にてこずったが、これで終わりだ。……貴様の魔力をいただくぞ」

「そうは……！」

させまいと剣を振るおうとするが、その直前にバインドで縛られる。そしてそれはフェイトも同様だ。マークですら、いったいいつの間にもやられたのか全く分からないほどの手際であった。

「フーかテムエ、いつの間にも！」

ヴィータのそれが何に対しての言葉かマークには分からなかったが、マークは自分の中から何かを抜けていくのを確かに感じていた。

（これは……！）

魔力を使い過ぎた感覚ととてもよくていたが、全く違う事がマークには理解できた。

（魔力じゃない……もっと根本的な何かを吸っているのか!?)

しかし今は何が吸われているかは問題ではないと判断し、あらかじ

め考えていた対応策を実行する。

（奴らが魔力を収集していたのは知っていた……そして、魔力を奪われるのなら、それ以外の力で対応すればいい！）

次の瞬間、マークを中心に何かが炸裂する。それはいまだ管理世界にて認知されていない力であり、マークにとって生まれたときから慣れ親しんだ力であった。

『竜石』それは竜の力をその内に秘めた、神器を押しつけ切り札と呼ぶにふさわしい一手。

それはマークを縛っていたバインドを引き千切り、マークの背後にいた仮面の男を吹き飛ばす。さらに足元の砂を大量に巻き上げ、その場にいるすべてのものの視界を奪った。

「今のは一体……？」

「流石に答えられないな……これは、俺の切り札だから」

シグナムが思わずつぶやいた一言に、ごく自然な一言が帰ってきた。それはまだいいのだが、その声が発せられた場所がおかしかった。

「ッ……」

騎士たちが声のあった方へ向き直る。それはすなわち、彼女らの視線が集まっていた爆心地とは全く違う場所にその声の主が現れたという事に他ならない。マークの強襲にはその場の全員が警戒していたはずなのに、それにもかかわらず見逃したことになるのだ。

「そんなに驚く」とはなさ……ただ、『俺は飛べない』って先入観が

なければ気付けたらだろうか」

その言葉にシグナムは背筋が凍る。それは今まで優位を保てると思っていた領域が失われたことを意味していたからだ。

そこでようやく、砂に覆われていた視界がようやく晴れる。そこにいたのはやはりマークであり、捕縛されていたはずのフェイトであった。

（いや、それ以上に、あれが、本気のマーク・テストロッサという事が……！）

自分たちに気付かれずに移動できた以上、そこにフェイトが居ても何ら不思議はない。ただ、そんなことよりもマークに起こった変化の方が重要であった。

「……耳と、翼か……他も見えないところで変化があると思った方が無難か？」

その確認するような声音に、マークは口角を少し上げることによって答える。シグナムの言うように、外見上の変化はその二点に尽きる。

耳が細長く伸びて、その身を包めるほどの大きさの、鱗に覆われた一対の翼が生えていた。

だがそれ以上のことを確認する前に、外部からの強大な一撃に結界が破られる。

「ふむ、なのはのスターライトブレイカーかな？　ともあれ、こちらも援軍が来たようだ」

「……ヴィータ、シグナムを連れて離脱しろ」

「そんなことできるわけ……！」

「全滅さえしなければどうにかなる！　行け！」



に来たのはとアルフにおとなしくバインドで縛られ、連行されることになった。

「今度はザフィーラが……」

その夜、報告を受けたはやては眠れない一夜を過ごしていた。それは家族がまた一人管理局につかまってしまった戦闘が原因であった。

（大事な家族が捕縛されてしまったんや……今までのような日和見は、もうしていられへん）

それは、管理局との対話が戦争という二択に、答えを出さないといけないという事だ。だがそんな選択が簡単にできるようなら、はやては今日まで迷い続けることはなかっただろう。

しかしそれでもはやては一度たりとも弱音を吐くことはせず、今日まで堪え続けてきたのだ。そんな彼女を、毎夜のように誘惑し、励ます声があった。

（諦めてしまえ。そもそも組織を相手して個人が勝てるはずないのだ）

（諦めてはいけない。そもそもこの問題は勝ち負けの問題ではない）

（戦え。世界が我が望みを認めないのなら、そんな世界は必要ない）

（戦ってはいけない。相手を否定して得られるものなど何も無い）

はやてはそんな言葉の数々に、それぞれ納得できるものと反発を覚えるものがあつたが、どうしても最後の一步が踏み出せなかった。だがその声は情け容赦なく、はやてに答えを出すことを急かし続けた。

その明け方、はやてはついにそのような状況に堪えかねたのか倒れ、病院に入院することになった。



### 第39話 「未知へ」

「な、何やってるんだマークさん！ 安静にしておくように医師にも言われていただろ!？」

「別に戦場に行くつもりじゃありませんし、これぐらい問題ない」

「自分がどんな怪我をしているのか少しは自覚しろ！」

ザフィーラの捕縛後アースラに帰還したマークは、医師の診察を受け絶対安静を言い渡されていたのだが、病室を抜け出して会議室に向かっていたのをクロノに発見されていた。

医師曰く、

『鎖骨の骨折に肋骨にもひびが入り、腹部にも強い衝撃を受けたのか腹筋や内臓にもダメージが見られる。どんな無理な動かし方をしたのか右腕の筋繊維にも断裂が見られるし、リンカーコアもその八割近くが沈黙している』

という状態とのことだった。激痛にのた打ち回っていても何の不思議はない、という状態を越えて、なぜ意識を保っていたのか理解できない。とのコメントもいただいている。

そんな状態にもかかわらず、平気な顔をしてふらふらとろついていたマークだったが、続く言葉に本気でこの程度の怪我どつてことないと思っていることが証明される。

「確かに内臓が傷付いているとか言われたけどちゃんと治療はしてもらったし、これ以上やれることが無い。なら別に寝ていようが座っていようが、怪我を悪化させるような事さえしなければ構わないだろ」

それに、聞いておかないと落ち着かないことも多いからな、そんなことを付け足すマークに、クロノとしても一定の理解を示すほかな

い。

「確かに今回の件のことを含め、話しておかないといけないことは多い……だが……」

「後回しにするのは無した。お前のことだ、シグナムの件もあの時一日早く話していればと考えたことぐらいあるだろ？」

「……」

まったくマークの言つとおり、内通者の手引きによりシグナムに逃げられる前に、何かしらの話が聞けていれば……そんな考えをしなかったと言えば嘘になってしまっただろつ。

「わかった。ただし、マークさんはベッドで休みながらだ」

「仕方無い、それぐらいの妥協はしよう」

そうして数分後、マークの病室に主要なメンバーが集まり話し合いが始まる。

「マーク……体は大丈夫なの？」

「ああ、問題ない。今横になってるのだって、クロノがうるさいから仕方無く横になってるだけだし」

「あなたは……はあ、まあいい」

フェイトの問いかけに対して軽く答えるも、どうしても強がりに見えてしまうのは仕方ないことだろう。ただわざわざフェイトの罪悪感を大きくする必要はないと、クロノは文句を引っ込める。

これもまた幸いというべきか、シグナムの一撃はマークの鎧を切り裂くには至らなかつた為、外見上の怪我はほとんどないのだ。もちろん鎧は歪み、修復を行う必要があったが、フェイト達はマークのダメージが非殺傷の魔力ダメージとリンカーコアのものだけと思いついでいた。

「その前に、あなたのその……状態について聞いてもいいかしら？  
ほら、怪我じゃない方の」  
「じつちのことか？」

マークが自身の耳に触れながら聞き返すと、リンディは頷くことで答えた。戦いが終わり、何をどうやったのかまではわからないが翼をどこかに仕舞ったマークであったが、その長く尖った耳まではどうしようもなかったようだ。

「一言で言ってしまうば、mamkurtとしてあるべき姿……とでも言えればいいかな？」  
「流石に簡潔過ぎるよ……」  
「そうは言っても……他になんて言えばいいのかわからん」

mamkurtがもともと竜であったことは話しているし、マークがmamkurtと人のハーフであることも話している。今回の件で人としての側面より竜としての側面が強くなり、そのためいくらか容姿が変更したのだと続けるが、いまいちピンとこなかったようでもみんな難しい顔をしている。

「竜の力を解放したって思えばいいかしら？」  
「まあ、そんな表現が妥当と思う。生命力や筋力がいくらか強化されたが、それでもまだ人と大差ない性能だ」

結局マークにとっても感覚的な事しかわからないので、それでよしとした。事細かに説明しようにも、遺伝子がどうとか言われてもマークにはさっぱりだったのだ。

「それじゃあ本題に入ろう……まず、独房のザフィーラにつないでくれ」

「……本気で彼も話し合いに参加させる気か？」

「気になる言葉もあったしな。……ひよっとしたら、彼の協力も得られるかもしれないぞ？」

「……」

マークの言葉に思わず反発しそうになったクロノであったが、フェイトからも気になる言葉を聞いている。

『主の命を救うため』だったか？

「ああ、それについて確認してやれば、これ以上の戦闘も避けられるかもしれないしな」

話し合いにより問題の解決ができたのなら、これ以上戦う理由がなくなる。場合によっては闇の書の主にも執行猶予が付く事態もあり得るだろう。

「歴代の守護騎士ともかなり違う点が見られるのだから、なら『過去を越える何か』が起きている可能性も考えられる」

「……そうね、戦わずに済むのならそれに越したことはないわ」

いろいろ思うところもあるのだろうが、リンディは今回の件の責任者として決断を下す。今まで長い年月をかけ、ついに何の取っ掛かりも掴めなかった一件なのだ。この機会を逃すべきではないというのは、とても正しい判断と言えるだろう。

もちろん、個人的な感情まで納得できるとは限らないが、それでもこの場で文句を言う者はいなかった。

「と、いっわけだから話せ」

『……いきなりだな。とはいえ、敗者の責務というやつか……仕方あるまい、俺に答えられることには答えよう』

「……」

画面越しにザフィーラがマークの唐突さに呆れながら答える様子に、どうしても違和感を覚える面々であったが、唯一そのことが気にならない様子のマークがさっさと主導権を握り、話を進めてしまふ。

「まあ安心しろ。お前が答えられないことは答えなくていいさ。今回聞きたいのはシグナムの言っていた『主の命を救う』云々についてだ」  
『……』

確かに主や仲間の居場所、能力などについて聞かれることを想定していた以上、それらに比べたら答えやすい問いではあるのだが、それでもザフィーラはすぐに答えることができなかった。

「答えにくいか？ それならまず俺の予想から聞かせてやろう」

だがマークはこうなることを予想していたかのように、即座に言葉をつむぐ。それはすなわち、闇の書の主の現状にある程度予想がついているという事に他ならない。

「まず、お前らの主が物理的な命の危機にある可能性は無いだろう。そんな事ならお前らは蒐集なんて回りくどい真似をする余裕はなく、その危機に立ち向かっているだろうからな」

ザフィーラは無言を貫くが、これを肯定と受け止めマークは話を続ける。

「次は病の可能性だが、これもまた無いだろう。病を治そうというのに、いくら魔力を集めたって意味はないからな」

魔法で病を治せないという事は、プレシアの一件でマークも理解している。それに、これらの理由ならザフィーラが口を重くする理由に

はならないのだ。

「だから、闇の書の主の命を蝕んでいるのは、もっとお前らにとって重要なもの、闇の書自身のせいだと予測できるわけだが……反論はあるか？」

『……いや、無い』

ついにザフィーラが認めたことに、なのはとフェイトが息をのむ。

「じゃあ、あなたたちは……」

自分たちのせいで主が傷付くのを、どんな気持ちで知ったのだろうか。そして、どんな気持ちで魔力の蒐集を行っていたのであるうか。

「……お前らの行動から推測するに、闇の書の完成をもって主の命が救われる、もしくは救う手段が得られると置いていいか？」

『相違ない』

「それならわたしが……」

魔力を提供すればいい、そう提案しようとしたフェイトをマークが止める。

「まあ、お前らの事情は分かった。だが、こちらで得た情報と矛盾がある。それ以外にも追加された情報もあるし、それについて意見を聞かせてもらおう」

『……わかった』

そこで一度ザフィーラへの視線を切り、リンディへと向き直る。

「確か、歴代の主たちはほぼ必ず暴走しているという話だったと思うが？」

「確かよ。管理局で保管していた映像資料はあなたも見たでしょう」

そのリンディの言葉にマークは頷く。基本的に封印は不可能と言われる闇の書対策として、ユーノが調べた無限書庫以外にも調査の手は伸ばしていたのだ。その筆頭が11年前の事件であり、その結末はマークももう知っている。

「これらの映像を見る限り、彼の言う事の信憑性は低いと言わざるを得ないよね……」

「でも、守護者がそのことを把握できてないっておかしくないですか」？

エイミィが資料映像を出し、なのはが意見を述べる。ザフィーラもその映像を見て口を閉ざしてはいるが、その目がこのような事は信じないと語っている。

「まあ、表面上はここまでだな……ここからは管理局の手も届かなかったところからの情報だ。ユーノ、頼む」

その何気ない一言に、ザフィーラとリンディがピクリと眉を動かす。特になのは達には通じなかったようだが、ここからはどちらの手も入っていない、つまり改竄された可能性のない純粹な情報だと宣言したに等しい。

『信用できるのか？』

「俺だって魔道書は腐るほど見てきたし、それを保管していたところも山ほど見てきた。その経験が大丈夫と言っているから信用して問題ないだろ」

「……結局は勘なのね」

リンディが呆れるが、マークが死者蘇生を求め研究してきた時間は

伊達ではないのだ。それこそ数多世界の情報を集めた無限書庫の、その総数の2割に匹敵する数の書物に目を通してしているのだ。

友好関係においてもマムクートの大賢者や、知識欲により人を越えた神将、同じく死者蘇生を求めた男とも研究を共にしたこともあり、物の真贋を見抜く能力は古今東西並ぶ者はいないと断言できるほどといえよう。

もちろん、マークはそのような経歴を語ったことはないのですが、この場では理解されることはなかったが……

「僕も、遺跡の調査や探索を生業とするスクライアー族の出身です。こういった情報の取捨選択には自信があります。だから……」

『……とにかく、聞かせてもらおう』

結果として、調べた本人の言葉により話を聞く体勢にはなった。それをザフィーラが信じていることができるかはまた別の問題ではあるが、こうして話ができるだけでも十分なほどの前進であろう。

「まず、闇の書というのは正式な名前ではなく、本来の名称を『夜天の魔道書』と言っそうです」

それからユーノによって語られたのは、今までの闇の書の印象が覆るような内容であった。

曰く、本来の目的は各地の偉大な魔導師の術を研究するためのもの。

曰く、歴代の持ち主による改編のため、破壊の力を振るうようになつた。

曰く、転生及び無限再生機能は、旅をする機能と破損データの自動修復機能の暴走である。



曰く、持ち主に魔力を強制的に蒐集させる機能が追加されている。

曰く、書の完成後、蒐集した術式の検証のためか、持ち主の魔力を強制的に使用する。」

曰く、元々は主を守るためのものだったのか、システムの強制介入時には主を書が呑み込み、転生する機能もある。

「と、まあこんなところですかね？」

「何ともまあ……原形をとどめてないな、これは」

マークの端的な感想に、思わず面々が同意をする。ザフィーラは思い当たる節があるのか黙り込んでいるが、検証すべきことも多いので今は放って置くことにされた。

「主を蝕んでいるのは強制蒐集をさせる機能という事か？」

「うん、一定期間蒐集が無いと主の魔力資質を侵食されるようになっていくみたいだ」

これ以外主を蝕むものはないから、そう付け足すユーノもまた確信を持っていくようであった。

『確かに……主は蒐集を拒絶し、我らがその行為を行う事を禁止していた』

「術式を集める魔道書として、ある意味究極の機能ではあるが……完全にあるべき姿が逆転しているな」

主のために術式を集める魔道書が、術式を集めるための主に変わっているという本末転倒な事態だ。ただ効率だけを求めた悪魔の所業、呪いとも言つべき機能だろう。

そして、予測をはるかに上回る改編を経ていた魔道書に、マークは一つの疑問を投げかける。

「……守護騎士プログラムは？ こんな話をして正気を保てる以上、夜天の書の中でも割と独立したシステムだと思って構わないか？」

「まだそこまでは……でも、その推測は正しいと思います」

『確かに、これだけの話を聞いて、闇の書に対し疑惑を抱いているにもかかわらず、俺はこうしてここで考えを巡らせている……』

「闇の書が、ただ力を得るための魔道書であったのなら、守護騎士に造反の可能性など残さないはずよね」

「つまり、闇の書の原型が『夜天の魔道書』と言う研究書と言う可能性が極めて高いと考えてよさそうだな」

それは持ち主に絶大なる力をもたらす『闇の書』が、魔道の研究のための研究書である『夜天の魔道書』のなれの果てであることを共通認識とするための確認であった。

そしてこの場に出てしまった結論に、思わず気が重くなる。闇の書の主は、少なくとも当代の主はただの被害者だ。もちろん守護騎士たちが人を襲ったという事実は残るが、それにしただって情状酌量の余地がある。

「ただ問題は、どうやって主を救うか、か……」

マークの言葉に答えられるものはなく、具体案が出ることなく解散することになった。結局ザフィーラにも理論的な反論は思いつかなかったのか、考える時間を与えることになったが、残る時間が少ないことは誰もが感じていた。

「……それで、なんで僕だけ残されたんだ？」

「アリシアをこれ以上一人にしたくなかったからな。リンディの役目は母親だし、お前ぐらいしか話せる相手が居なかったんだよ」

それがただのいいわけであることは誰もが感じていたが、それを指摘するものはいなかった。時間が時間だったことを幸いとして、なのはとフェイトを遠ざけ話すことなど数えるほどしかないからだ。

「内通者のことか……」

「ああ……治療中に、エイミィからあの時起こったことをあらかた聞いたからな」

特に管制システムがクラッキングされたことと、仮面の男の動きについてだ。エイミィ自身は何もできなかったと嘆いていたが、内通者のことは仕方ないとして、その後の対応については上々と言っているものであったとマークは思っている。

「地球のシステムに干渉できる面子だけでも、それなりに絞れるだろう？」

「時間をかければ大抵の局員は……」

「その時間をかけられるような奴、そんなにいないはずだ」

万年人手不足と言われる管理局で、地球に干渉できる下地をつくれる人物はそう多くないはず。そういうマークに不承不承の体でクロノは頷いた。

「それと仮面についてだが、リンカーコアを奪われた際に接近したが、あれはまやかしの類だな……実際の体格はもっと小さく、細い」

「そんなことまでわかるのか!？」

幻術で容姿を変えていることまでは予測していたクロノだったが、マークがそれを見抜き、具体的な体格まで判明するというのは予想外にもほどがある。

「……昔、変装が得意な友人に散々からかわれたからな」

顔はもちろん、体格や能力、性格にいたるまでそっくりに変装する……否、あれはもはや変身であった。そんな奴が日々手を変え品を変えからかいにやってくるため、それなりの時間をかけたが、マークは変身の類の見極め方を理解したのだ。

懐かしい過去を思い出すと同時にいたずらの内容も思い出ししまい、ついその表情に黒いものが混ざる。

「あ、ああ……とりあえず、その、内通者の特徴を聞かせてもらってもいいですか？」

「ん、悪いな……」

思わず敬語になったクロノに、思い出の中から帰ってきたマークが知り得た情報を告げる。

「苦勞をかける……本当なら、今回捕縛するつもりだったんだが……」

「いや……あなた以外なら、この程度の損害ですまなかつただろう」

独断で突っ走り、結果失敗したマークが謝るも、クロノはマークが無難に動いた時のことを想像し、謝罪の必要は無いと言い切る。

「どちらにしろ過ぎたことだ。今はこれからのことを考えるべきだろう」

「今その正論は耳に痛いな……考えるべきは二つある」

クロノの言葉に即座に思考を切り替えたマークは自身の考えを述べる。

「二つ目はザフィーラの説得だ。今ある情報だけじゃさすがに信用が足りないだろうから、もうひと押しになる何か欲しい」

「こちらが主を助ける理由が妥当か……なのは達は純粹に助けることを望むかもしれないが、組織が動くにはもつと俗な理由が欲しいところだな」

ただ助けたいからと言われても、ザフィーラ達守護者にとっては不信が残るだろう。管理局にとっても利益になる、そんな理由があった方がむしろ信用できるものなのだ。

「まあ、理由付けはクロノに任せる。俺はもう一つの方、主を救う方法について案を出そう」

「……ひょっとして当てがあるのか？」

「ああ」

そう言ってマークが取り出したのはある宝玉。もしこの場にフェイトがいたならば、見覚えがあると言ったであろうその宝玉は『炎の紋章』と呼ばれるものだ。

「……それは？」

「ん〜……使用者の意思を具現化する宝玉、とでも言えばいいかな？」

『ファイアーエムブレム』と呼ばれる宝玉で、本来は『封印の剣』として使用されるんだが……」

そう言いながら、今度は装飾の施された流麗な剣を取り出し、柄の部分にその宝玉をはめ込む。

「一応『封印の剣』なんて言われているが、それはあくまで初代の担い手が『封印』を強く願ったからで、二代目は逆に『解放』の力を願って使用している。だから、この力を正しく使えば夜天の魔道書から闇の部分を取り離すことも可能……なはずだ」

「……………どう？」

その話の最後の言葉を濁したマークは、どうしようもない欠点を告げるかのよつに確信を告げる。

「俺では過去の担い手が発現させた『封印』と『解放』を使うまでしかできない。適性と言つてべきか……新たな能力を発現させられるほど、この剣に認められていないんだ」

「それは……それじゃあ意味がないじゃないか」

「ああ、だからこれをレイジングハートに仕込んでもらいたい」「なっ……」

いくら手段があつても、それが使えなければまったくの無駄でしかない。だがマークだってそんなことはわかっている。だから、担い手になり得るものに託すのは当然のことだろう。

「いいのか？」

「最善の結果を得ようとしたら、それ以外手が思い浮かばないから……ただし、いつか必ず返却してもらおう」

もともとマークは人の身に余る強大な力を封印する役目も担っていたのだ。その役目をまげようというのだから、相応の強い願いがあるのだろう。いや、それはもう示されたことであつたか。

「ナノハには期待しているんだ。だからその意志がまつすぐ育つように手を貸すのが先人として……いや、自分勝手な老人の勝手な思いだ」

「……あなたがそつというのなら、使わせてもらおう」

自身の不始末のけりを他人に任せるせめてもの償いか、あるいはもはや役目を終えた老兵の戦場に再び出るための言い訳か……何はともあれ、マークの持つ神器の中でも頭一つとびぬけた一品がなののは手に渡ることになつたのだが、当の本人は知る由もなかった。

## 第40話 「戦支度」

「それじゃあマークさんは前のなのはちゃんみたいに……？」

「うん、魔力を盗られてしばらく戦線離脱するって……でも、マークさんは魔力を全部取られる前に逃れたから普通に戦えるのになって言ってたよ」

「一応絶対安静って言われてたけど、ひよっとしたらまた病室を抜け出してるかもしれないくらいだよ」

「なに？ またってことはもう抜け出した前科があるの？」

守護騎士たちとの戦闘の次の日、いつものように学校に来たなのは達はアリサとすずかに昨日のことを話していた。最初こそマークが蒐集されたことに苦い顔をしていたが、今は苦笑に変わっている。

「じゃあ、守護騎士の一人を捕縛して、情報もある程度手に入ったのね？ それじゃああとは敵のアジトを確認し次第、危険な魔導具を封印して終わりってこと？」

「うん、今マークさんの提供してくれたアイテムをレイジングハートに付けてくれてるから、それが終わったらわたしの方は準備完了！」  
「本拠地についても捕縛した守護騎士と交渉中だけど、クロノが今年中にはどうにかするって言ってた」

そして、ここまで条件がそろった以上、無理に守護騎士を探して戦闘を行う必要が無くなったのだ。最終決戦は交渉に変わるだろうとのことだ。

「ならやっとはやてのことを紹介できるわね」

「今まではいつ召集されるかわからなかったから行けなかったけど、もう大丈夫だからね」

少し前にアリサが知り合ったという少女と会いたいというのは前から言われていたことだったが、いつ戦いが起こるかかわからない状態で会いに行くのはなかなかハードルが高かったのだ。

「きつとすずかちゃんとは特に気が合っただろうね」

「そうでしょうね、あの時すずかが自分で本を返しに行ってたら、間違いなく友達になってたと思うわ」

出会った場所を思い、自分たちが紹介された時のことを想像するのはアリサは同意する。

彼女たちはまだ知らない。この日常が、戦場と薄皮一枚隔てたところにあるという事を。そして、その薄皮が今にも裂けようとしているという事を。

「……これで最後、か」

そのころマークは、病室にてアルフが回収してくれた鋼の大剣の破片に、最後の手入れを行っていた。ジュエルシードの時に最期を迎えた魔道書と同様に、これもまた思い出の欠片として保管されることになるのだろう。

ただ、かつてからは想像もできない自身の行為に、自然と言いつのよ様な言葉が口からあふれる。

「確かに俺は武器を雑に扱っようなまねはしないが、破損に気を付けることはない。戦いが終われば手入れも行うが、壊れればそこまでだと割り切るだろう。実際に、今まで使いつぶしてきた武器は三桁を確実に超え、ひよっとしたら四桁に届きかねないしな」

それでも、今持っている武器だけは例外なのだ。

「今の俺が持つ武器はすべてかつての戦友からの餞別で、形見だ。こ



れを消耗品として捨て置くことはしないさ」

形見と言える武器を破壊されたマークだったが、それをしかたがないことだと穏やかな表情を浮かべながらさらに言葉を連ねる。

「形あるものはいつか滅びる。だが過去はなかったことにはならないんだ。そして、過去は今を縛るものではなく、支えるものであるべきだと思うようになったんだ」

それは、武器が破壊されたことは重要じゃないというのと同時に、今後の誓いでもあった。

今までマークは平和を謳歌し幸せになることを目指してきたが、それはマークがそうしなかったからではなく、友に願われたからである。そしてマークの今の行動は、相方であるフェイトを助け、共に在りたいというものだ。ただここで問題となったのは、フェイトのいる場所が戦場であったことだ。

それゆえに発生した矛盾を、マークは変化の過程として容認していたのだが、ついに限界を感じた。そして出した答えが先程の言葉となったのだ。

つまり、友の願いを踏まえてなおフェイトと共に在ることを願ったのだから、それを優先するべきだという結論を出したのだ。

何も劇的な経験の内から導き出したわけでもないし、絶対の真理と言うわけでもないその結論は、マークの経験から導き出した、今のマークがそうすべきと考えたという答えだ。

(まあ、別に幸せになることを諦めたわけでもないし、かまわないだろ?)

マークが心の内でそう尋ねても、もちろん答える者はいない。――

応、マークにはかつての戦友たちが何と答えるか簡単に想像できたが、それでもそれは想像でしかない。

「……ダメだな」

一人でいるとどうしても思考が悪い方へと傾いてしまうと、マークは剣の破片をしまい、ニット帽を少し深くかぶることで耳を隠して部屋を出た。

その数十分後、部屋に訪れたクロノの額に青筋が入ったのは、必然と言えるだろう。

「えっと、それじゃあ旦那は暇を持って余してここに遊びに来たんすか？」

「そう言った解釈もできるが……いや、そんなに睨むなって、ちゃんと用があつてきたんだ」

マークが訪れたのは、先日の戦闘に参加した部隊の隊長と銃使いの隊員だった。ちなみに銃使いが隊長と一緒にいたのは、マークや隊長について回っていたので他の隊員から隊長補佐と認識されてしまったためだ。

「それじゃあいったい何の用っすか？ こっちは見ての通り忙しいんすけど」

それはあまりに無茶な戦闘を行った弊害と言つべきだろうか。本来の作戦を無視してしまったツケは外部協力者のマークではなく、部隊の責任者である隊長に向かつてしまったという事だ。報告書や始末書、その他諸々山のような作業がデスクに積み重ねられていた。

「それじゃあ、それも含めて……こちらの都合に付き合わせ、迷惑をかけたことをここに謝罪しよう、申し訳なかった」

「……」  
「……」

その頭を下げる姿に、あまりの理不尽さに憤っていた頭が一気に冷却され動きを止める。それは隊長たちにとってあまりに衝撃的な様子であった。

「……何かしらの反応が無いとこちらも困るんだが」

「……いや、なんて言えばいいか」

「正直意外ですね」

隊員改め隊長補佐の言葉は、マークにとってもある程度納得できるものであった。それは先の戦いでは隊長の言葉を無視してあれほど勝手な行動をしたにもかかわらず、今この場で頭を下げるという行動が全く同一人物に見えないという事だろう。

「まあ、あんなことをやっておいてと思われるも仕方ないだろうが、これでも戦場を共にする者は大切にしたいと思っているんだ」

あれほど無茶な突撃をして……そう反射的に言いかけた隊長であったが、現実が見れないほどの無能ではなかった。

「まあ、確かにあれほどの戦場で、死者も重傷者も出ていないし……相当気を使ってくれたんでしょうけど」

「貴方も死んでもおかしくない一撃をもらいながらも、即行で次の戦場へ行ったことも聞きましたし……」

こうして謝罪したのならそれでいいかもと言っと思いと、こんなことでの死にそうな思いをしたことを清算できるものかと言っ思いがせめぎ合っ。

しかしマークもそれぐらいは見越していたのだろう。せめてもの

お詫びにと、一つの腕輪を差し出した。

「……………」

「まあそつだろつな……………」だから、あくまでこれは『贈与』ではなく『貸与』と言う形で受け取ってもらえないか？ 期限は一年で、効果は

……………説明しない方がいいかな

「効果？」

あくまで貸すだけだと言い出したマークに、何の意味があるのかと思った二人だったが、続いた言葉に考えを改める。

「あゝ、何というか、これを装備していると特殊な効果があるんだ。だが、人に知られたらちょっと問題になりそうだからここは伏せておこう」

「そんな問題になりそうなものをお詫びにされても困るっすよ」

「人体や精神に害はないから安心してくれ。問題っていうのは数が無く、大勢に配れない事だ」

つまり下手をすれば取り合いになったり、嫉妬やらなんやらで大変なことになるとマークは説明を付け加えるが、二人からしてみればどうにも胡散臭い。

「……………」おいティータ、お前がつける。隊長命令ってやつだ」

「ちよっ!? ロイド隊長、流石にひどくありませんか!」

「……………」せめて俺が居なくなっただけからやれ。ちなみにその腕輪の名前は『魔道士の腕輪』だ。すぐにはわからないだろうが、一年もあればいくらか効果は出るだろう」

他の隊員に会えなかったのは残念だが、と言いながらマークは用事は済んだと部屋を後にする。それからしばらく腕輪の押し付け合いが続いたが、最終的にティータが指輪をつけることに決定した。

マークが言わなかったことなので当然ではあるのだが、その『魔道士の腕輪』が、魔力の成長を促進する効果を持つという事を、彼らは知る由もなかった。

マークがロイドたちと話していたその時、クロノはマークを発見することができぬまま、約束の時間を迎えグレアムへの報告へと訪れていた。

「ふむ……彼はもう少し、自分の言動が他者に与える影響と言うものを自覚したほうがいいな」

「まったくです」

その言葉に深く同意を示したクロノの様子に、グレアムは苦笑する。グレアムからしてみれば、クロノもまた周囲に多大な心配をかけた一人なのだから。その意図が通じたのか、クロノはやや視線をそらしながら本題に入る。

「マークさんの怪我は、数日も安静にしていれば完治……と言うわけにはいかないそうですが、戦線に復帰できる程度にはなるそうです。ただ問題は……」

「リンカーコアの方かね……」

そう、なのはと違ってマークはそう若くない。それどころか、これ以上が無いほどの高齢なのだ。現状リンカーコアの回復は絶望的とまで思われている。

「過去のデータによると、10代後半の魔導師なら7〜9割の回復が一般的であり、その回復には約一週間から二週間がかかっています。ですが……」

「例外はあるし、何よりマーク君は2割ほどが蒐集を逃れている……か」

もちろんこのデータが役に立つとはクロノは思っていないが、周囲を納得させるにはいいデータだと思っている。

「とりあえず、彼については経過を見るほかあるまい。それと、もう一つの話は本当かね？」

「はい……」

グレアムはその瞳をかつてなく鋭くして、クロノの示したデータに目を通す。そのデータは『UNKNOWN』の文字も多く入っているが、いくつかはとんでもない数値をたたき出していた。

「マークさんの提供していただいた『ファイアーエムブレム』をレイジングハートに仕組んだ時の理論値です。残念ながら、十全に性能を発揮できるほどの強度がフレームに無いため、実戦でここまでの数値は出ませんが……」

「いや、十分だろう。特に理論上とはいえ、干渉値は他のデバイスの追随を許さないレベルだ」

それこそ闇の書の自己修復プログラムを反転させ、自壊させることも夢ではないほどの干渉力と言えるだろう。

「正直に言って、これこそ封印を施すべきではないのかと進言したくなるほどの性能だが……」

「やめてください……」

その理不尽なまでの力に、つい余計なことを口走ってしまったグレアムをクロノが窘める。これは闇の書対策の鍵であると同時に、マークの持つ神器でもあるのだ。管理局の総意としても、まだマークとは敵対したくない。

「ふむ……ともかく、これで闇の書をどうにかする手段を手に入れたわけか」

「はい……それで今回このことを報告した狙いですが、この事を局内に広めてほしいのです」

「なるほど」

確かに、闇の書を封印・破壊する手段が手に入ったことが広まれば、内通者が闇の書にちよっかいを出す理由が半分だが無くなるのだ。

「残るは闇の書の力を利用したがる輩ですが……それならば何の気兼ねもなく潰せます」

クロノの憤怒の念ともいえるものが滲み出すが、グレアムは動じない。なぜならこの部分に関しては、二人は同類であると言えるからだ。

だがクロノはその想いを振り切り、穏やかな表情でグレアムに告げる。

「だから、もういいんです。後は僕たちがやりますから」

「それは……」

限界まで言葉を削られたひとことであったが、それだけでグレアムには十分であった。

(内通者が誰か、もうわかったようだな)

決定打となったのはマークの告げた仮面の男の特徴だったが、この時点で特定しきったのは間違いなくクロノの力である。そしてそのことを胸に秘め、言外に手を引くようにというのもまたクロノの本心である。

「それでは、失礼します」

「ふむ……」

言うべきことを言い切ったクロノが席を立つのに合わせ、グレラムが最後に贈るべき言葉を探す。探すのだが、かけるべき言葉は見つけることができなかった。

(これが、裏切るといふ事なのだろうな……)

どんな言葉を思いついても、それを語る資格が今のグレラムには無いのだ。応援することも、祈ることさえ許されない。

今の彼にはただ無言で、部屋を後にするクロノを見送るほかなかった。

「……はあ、それであっちこっち逃げ回ってるわけ？」

「逃げ回ってるわけじゃないぞ？　ただ、一人で寝てるのに飽きたから散歩に出てきただけだ」

「それを逃げ回ってるっていうのよ」

隊長たちとの話の後、ついに本局を飛び出し地球までやってきたマークは、月村家へとやってきていた。

「別に家に帰りづらかったり、翠屋にも行きづらいからここに来るのもいいけど、そうじゃない時に来ても罰は当たらないわよ？」

「いろいろ学ぶことも多くてな、なかなか時間がとれなかったんだよ」

そうやって傍らに控えているノエルの入れた紅茶に口をつける。未だ地球や管理世界の常識を学び続けるマークは、自由にできる時間は少ないのだ。とはいえ、そろそろ情報や知識としてだけではなく、経験を積んでおくべきかとも考えている頃なので、今回の脱走はいい機会になるかもしれない。



「それにしても、これって毎日やってるのか？」

「毎日じゃないけど……あなたが翠屋でバイトをすることになったおかげで、結構な頻度でやってるわね」

「ふーん」

そう言っただけで忍と共に眺める先では、さすがと恭也が鍛錬を積む姿があった。忍の話によると、アリスの友人と連絡がつかずにお開きになってしまったという事だった。

「実際に二人の鍛錬を見るのは初めてでしょう？ どう？」

「ふむ……」

少し考え込むかのように唸ったのちに、マークは二人についての感想を述べる。

「まずはキョウヤだが……やはり双剣は珍しいと思う。とはいえ剣筋はまともそうだな。奇をてらったものでなく、筋の通ったものだ」

「小太刀二刀御神流って言うらしいわ。詳しいことまでは知らないから解説とかできないけど」

マークの知る限り、双剣を実践レベルで使う者など片手の指で足りる程度しかいない。マークもやってみようとしたことがあったが、結果は散々なものであった。

「身体性能は剣士の典型……片手で剣を扱ってる分少し力が強めかな？ 極端な欠点も見当たらないし、まあ、いいんじゃないか？」

「……その感想は、中堅クラスととっていいのかしら？」

「ま、中の下くらいかな？ この環境なら上等だろ」

身近に戦場もなかったのだから、これ以上鍛えるのは無理だったただ

ろつというマークに忍も納得する。いくらか修羅場を超えた程度では、本物の戦場を越えたものから見てしまえば物足りないという事だろつ。

「じゃあさすがは？」

「……流石の俺も、あの年の剣士は知らないな」

魔道士として後方に立つものなら、さすがと同じくらいの年で最前線に出られるものを知っているが、剣士として戦場に立てるレベルの存在は初めてだった。

「一応参考までに言っておけば、俺の知る戦士系統の軍人の最年少はたしか13歳位だったはずだ」

「その軍、大丈夫なの？」

忍の一言に、マークも苦笑するほかない。そついうのも、マークが今まで所属した軍の半数以上が、十代というとても若い大将を据えていたからだ。

「大丈夫、少なくとも魔王や魔竜なんかと対等に戦える軍だ。と、それはいいとして……ススカの評価だが、同年代なら並ぶ者はいないと言つて過言じゃないだろう」

「あら、想像をはるかに超える高評価ね」

あくまで同年代の内であることを強調したマークであったが、それにしたつて大したものであることに変わりはない。

「……ちゃんと一人の戦士として評価したら、新人兵士か駆け出し戦士と同じ位だ。まだまだ未熟であることに変わりはない」

「新人だろつが駆け出しだろつが戦士として見れるレベルなんでしょ？」

まともにも認められるまで10年かかると思っていた忍にとって、この評価は正直焦りを呼ぶものであった。だが、実はマークの感想も似たようなものとはさすがに思わなかっただろう。

(ある程度戦えるようになった今の時期が一番危ないんだよね……『できるよつになった』って気持ちが強すぎて、周りが見えなくなる奴は実に多い)

ましてすずかはまだ子供であるのだし、その傾向はより強くなるだろう。とはいえ、その気持ちを折ってしまえば戦場で使えなくなってしまうので、なかなか指導が難しい時期なのだ。増長させず、卑屈にもさせずに教え導くというのは、少なくともマークにできることではない。未だ若い恭也にも難しいだろう。

「武装で補うのがベストか……何か用意できるか？」

「難しいわね……というより、できればまだ戦わせたくないんだけど」「状況は待ってくれないからな。念のため身を守れるようにしといて欲しいんだ」

それこそがマークが今日ここに来た本当の目的だ。もちろんすずかたちを危険な所へ連れて行く気などないが、闇の書の件がある。

「万が一だが、俺らの対処より闇の書の完成のほうが早い可能性がある。その暴走から身を守る手段を持ってほしいんだ」

「必要なの？ 別の世界で起こってる事なんですよ？」

蒐集されるのは魔力を持った者のみなので、あまり危機感を持っていなかった忍だったが、続く言葉に考えが甘かったことを思い知らされる。

「管理局の把握した闇の書の主の潜伏場所候補の中に、人の住む世界は少ない。主がランダムで選ばれる以上、この世界の住人が選ばれる確率は結構高いんだよ」

そして、人はそう簡単に日常を捨てられる存在ではないし、『木を隠すなら森の中』なんて言葉もある。闇の書完成まで無人世界に隠れるなんてことはありえないだろう。

ひよっとしたらこの世界で闇の書が暴走するかもしれない。そして、剣を一本持っているだけで生存できる確率が増えるかもしれない。マークにとって、未熟な戦士に剣を持たせるには十分な理由だ。

「もちろん、武器を持ったことで喜び勇んで危険な所に出て行って死ぬ可能性もあるし、どっちもどっちなんだがな」

「縁起の悪いこと言わないでよね……」

簡単に死ぬ可能性を口に出すマークに軽く抗議する忍であったが、必要な事であることはわかるので、その言葉に力はない。

「ちゃんとっておけば、すずかも無謀な事はしなれと思うし、武器を持たせることは仕方無いとしましょう。ただ……あの子に合うものを作るとなると時間がかかるわ」

「いくら身体性能が高めとはいえ、まだ体は小さいからな……まあお前には世話になってるし、俺の持つてる武器なら細身の剣かレイピアあたりを……」

マークは、そう言って考えているうちに、ふと思いだした。なかなか強力な武器であるにもかかわらず、マークには使えない武器が存在したことに。しかも細身の剣に次ぐ軽さを誇るため、振り回すだけなら問題ないだろう。

「と、まあシノブという話合った末、スズカに俺の剣を貸し与え

ることにした」

「え、と……ありがとございます？」

「もう少し詳しく説明してくれないか？ 俺にもよくわからないんだが……」

善は急げということ、さっそくすずかに剣を渡すことにしたまではよかったが、その過程の説明をすっ飛ばしたマークの言葉に、すずかはもちろん恭也も付いてこられるはずがなかった。

「本物の剣を持つことで剣士としての自覚を持たせると同時に、常に起こりうる万が一への備え、ってどこかしらね」

「……かなり抽象的だが、何となくわかった。すずかは？」

「えっと、力を持つことを自覚して、ちゃんと考えろってこと……ですか？」

「まあ、そんなところかな」

実際は万が一への備えといった側面の方が強いが、心構えをしておくという意味ではどちらでも構わない。

そうしてマークが取り出したのは、刀に酷似した外装を持つ剣であった。

「直刀……まさかあなたが刀まで持つとは思わなかった」

「カタナ？ なるほど、ここではこの形状の剣をそう呼ぶのか……それはともかく、これは精霊の加護を受けた導きの剣『マーニ・カティ』だ。神器には及ばずとも、それなりに強力な武器だから、大事に使ってくれ」

「は、はい……」

そうして『マーニ・カティ』は、マークの手からすずかに渡り、かすかに輝いたかと思ったら、すずかの手の甲に吸い込まれるかのようにならなくなってしまった。

「えっ!？」

「問題ない、昔俺が施した封印に手を加えたただけだ。正確には、すずかの掌を出現位置に固定し直したというものだが……呼べば出てくる」

マークの言葉通り、すずかが呼んだら『マーニ・カティ』はその手に収まった。いくら軽いとはいえ、それでも木刀の倍以上の重さがあったのだが、何とか振り回すことぐらいできそうである。

「心構えができるまで鞘から抜くな。手入れの仕方は……またにしよう」

「はい……ありがとうございます……」

それからマークはお守りとして、すずかに技と幸運の成長率を高める『剣士の腕輪』を渡す。その際すずかが真っ赤になりながら受け取った理由を、マークは不思議に思うだけで考えることをしなかった。

(まあ、スズカはこれでいいだろう……精霊に認められなければ抜くことができない以上戦場に出ることはできないし、最低限の護身にもなる)

そうしてマークは、忍に一時的に進入禁止域を作る『光の結界』を、恭也にマムクートの鱗を編み込んだ『腹巻き』を渡し、逃げるように去っていった。

ちなみにマークが効果などを教えたのは『光の結界』のみで、ただお守りとして品を渡された恭也は『腹巻き』を使うか結構深刻に悩んだことをここに付け足しておく。

## 第41話 「闇をのむ魔」

「だから大丈夫だって言ってただろ？」

「だからって地球にまで逃げる必要はないだろう！ あと少し発見が遅れていたら、あなたの捜索に数百人規模の人員を投入する計画まで立ち上がっていたんだぞ!？」

病室から逃亡したマークが発見されたのは、そろそろ夜も更けてきた時間だった。正しくは、マークは地球における本拠地に玄関から帰ってきたのだから、発見という表現はおかしいかもしれない。

「マークからしたら大したことじゃないのかもしれないけど、みんな本当に心配してたんだよ?」

「ホントだよ! 出かけるときはちゃんとどこに行くのか言っとかないと! わたしだってできるんだよ?」

「あー……」  
「ゴメンナサイ」

フェイトとアリシアに怒られてようやく謝るマークだったが、おそらく反省したのは脱走したことではなく、行き先を告げなかったことに対してだろう。フェイトにすら、次の時は書き置きを残して失踪する未来を思い描くことができた。

「それで、何をしていたの? わざわざ地球に来たのには理由があるんでしょ?」

どうやって本局から移動したのかは後回しにして、リンディはその目的を明らかにすることを優先した。

いくら本人が問題ないと言っても、マークが怪我をしている事実は変わらないのだ。それにもかかわらず今行動を起こしたという事は、それだけマークが焦っているという事だと判断したのだ。

「一応……ね。俺の魔力も蒐集されたし、闇の書の暴走が起こった時の対策を少々」

「……確かに今どれだけのページが集まっているか把握できてないけど、もついつ暴走してもおかしくないと考えているの？」

「念のためだ。打てる手を打っておかないと、後で後悔することになるからな」

とはいえ、マークがやったのは月村家、高町家、アリサ・バニングスにお守りを渡しただけだ。ただしそのお守りのいくつかが、ロストログアに含まれる可能性のある力を持つ物であることはさすがに黙っている。

「だから後悔しないためのお守りをアリシアにも用意……しようと思っただけだ」

「できなかったの？」

「いや、どうにも極端なものしかなくてな」

アリシアになら神器クラスの逸品を出すことに抵抗はないが、それをしてしまえばリンディが大変なことになってしまう。具体的に言えば、上層部への説明やら書類の作成やら……流石のマークもこんなことでいらぬ恨みを買う趣味はない。

「無難なのは、一時的に魔法への抵抗力を上げる消耗品か、持ってるだけで効果を発揮する類の装備品か……」

「消耗品とかはやめてもらっていい？ 絶対解析したいって言い始めるのが出てくるから……装備品の方ならマーク君の持ち物という事で何とかするから」

「なら……ちかな？」

そう言って取り出したのは宝玉だ。ただし以前に忍に換金を頼ん



だものとは大きく異なり、一目で何かしらの力が込められているのがわかる。

「わぁ、きれい……」

「これは『ルドルの宝珠』と呼ばれるもので、効果は防御力の上昇。まあ、一般的な成人男性にナイフで突かれたとしても、傷一つつかなくなるだろう」

「……あれね、不可視のバリアジャケットを展開するアイテムと思えば何の問題もないわよね」

どうやらリンディの中で『越えてはいけない一線』を越えてしまつたらしい。無理やり自分の常識の中で処理することで、今回の出来事を無かったことにしたようだ。確かにアリシアが持っていればその程度の効果なので、その認識でも構わない。

(例えばフェイトが持ったら、障壁を張らなくても恭也の攻撃位ならノーダメージで済むことになるとか……言わない方がいいよな)

情報は宝とはいえ、世の中には知らない方がいいこともあることを再確認したマークであった。

「えっと、その……マーク？」

「どうした、フェイト？」

マークがいらぬことを再確認していたら、フェイトがためらいがちに話しかけてきたのだが、どうしてかもしもじして要件を言わない。何か言いにくい事なのかとあたりをつけ、マークは決心がつくまで待つ構えを見せたのだが、そうすると今度は落胆したように肩を落としてしまった。

「えっと……」

「じつん、やっぱいいや……明日も学校だし、わたしは寝るね？ おやすみなさい」

「……おやすみ？」

「おやすみなさい」

部屋に戻るフェイトに、アリシアも続いて行ってしまった。はて、どうしたのかと首をかしげていたら、エイミィから窺めるように指摘をされた。

「きつと、フェイトちゃんもお守りが欲しかったんだよ」

「バルディッシュもいるし、必要ないだろ？」

「必要不問題じゃなくて、マーク君のお守りだつてことに意味があるんだよ」

「ふむ……」

そうして考え込むマークだが、いまいち理解できているとは言い難かった。戦場においては効率を優先していた弊害だろう。

（そういえば、傭兵の間では『 を持っていれば流れ矢に当たらない』とかいうジンクスがあったとか…… が何かは覚えてないけど）

当時はまだ流れ矢に当たろうが、何の痛痒も感じないような戦い方だったため聞き流していたが、しっかり話を聞いていれば今のフェイトの気持ちもわかったかもしれない。そんな見当違いの考えをしているマークであった。

「まあ、私がどういってもしょうがないんだけどさ、それはマーク君の今後の課題として……艦長、マーク君に話があるんじゃないかなかったですっけ？」

「ええ……聖王教会があなたとの会談を求めているって、以前話した

かしら？」

「いや、初耳だな」

少し前にリンディがユーノを伴って行った会談の際、次回はマークも参加するという話になっていたので。だがマークは意外なほど精力的に動き回り、中々機会を作れないでいたのだが、今回の戦線離脱を受け、先方には良い機会に捉えられたら良かった。

「なるほど、予言か……まあ、聞いておくに越したことはないだろう。それにしても、聖王教会か……」

「何か心当たりでもあるの？」

聖王教会という言葉にどこか感慨深げに反応したマークに、リンディはひょっとして今回の件が起こるきっかけのようなものに心当たりがあるのではないかと感じたが、マークは首を横に振るだけであつた。

「そうだな……一週間後ぐらいに会えるよう整えてもらえるか？ それまでにリンカーコアの修復と、戦闘勘を取り戻すのをやっつくから」

「修復って……治療じゃなくて？」

「ああ、自然治癒だと数十年はかかりそうだからな。欠けた部分を新しく作る事にする」

またとんでもないことを言うマークに、もはや呆れることしかできない管理局の面々であつた。

「それで、なんでこんな僻地まで来たんだい？」

そこは僻地も僻地、管理局の把握した世界の果てとでもいっべき場所であつた。マークはリンディに無理を言つて、『エルファイアー』と

『メテイオ』の魔道書を解析させる約束までして、ここに一週間なんの監視もなくとどまる許可を得たのだ。

「それなのに……何でアルフがいるんだよ……」

「フェイトに頼まれたからねえ……魔力のほとんどが使えないマークのことが心配だからって言われちゃ、アタシじゃ断れないよ」

「……」

余計な事を、とつい思ってしまつが、善意からの行動だとわかつてしまつので口に出すことはできなかつた。何より、こういった行動ができる子だから一緒に行動したいと思つたのだから、文句を言う方が筋違いというものだろう。

「はあ、仕方ないな……ただしここで起こつた事は他言無用だ。破ればたとえおまえでも容赦はせんぞ？」

「了解！」

マークのため息交じりの忠告にアルフは元気に答える。

「それで、何のためにこんなとこまで来たんだい？」

「……今から行つ術式を、誰にも知られないためにだよ」

そう言つて取り出したのは、闇の魔道書『エレシユキガル』と淡く輝く結晶であつた。

「今まで使つてきたものとは別物つてわけかい？ ……詳しく聞いても？」

「エーギルを使用した、リンカーコアの再生、いや修復……生成というのが正しいかな？」

それは死者蘇生の研究過程にて作られた、人造生命体の創造の術式

の応用だ。『イーギル』と呼ばれる生命エネルギーによって稼働するその術式は、確かに管理局の持つ知識の先を行くものだ。だが、術式自体はあくまで『先を行く程度』でしかない。

「管理局だって死者蘇生の研究をやってんじゃないか？ それならいずれ通る道じゃないか」

その程度なら隠さずとも、遅いか早いかの違いにしかならないはず。確かに術式については、アルフの考える通りであるとマークですら思う。ただ、術式を動かすエネルギーについてはその限りではないのだ。

「この術式に使う『イーギル』というエネルギーは、魔力より使い勝手の良いエネルギーなんだ」

それこそ、怪我の治癒から能力の強化、即戦力となる生命を創造できるレベルの使い勝手の良さだ。しかも基本的に創造者の命令には絶対服従だし、使い魔のようにその存在の維持に力を消費したりもしない。

「なんなんだい、その馬鹿げた仕様は……」

「この存在を『モルフ』と言うんだが……って、話がずれたな。問題はそのイーギルの集め方だ。基本的には闇の書の蒐集と変わらないんだが……奪われるのイーギルと言うのは、わかりやすく言えば生命エネルギーのことだ」

その結果は言わずともわかることだろう。つまりまとめると、イーギルとは非常に強力かつ使い勝手の良い力である。そして、集めようと思えば生物を殺さなければならぬという、非常に効率の悪い力でもある。

だが、それは逆に『殺せば殺すだけ力を得ることが出来る』という



（確かに複雑な魔法陣だったけどさ、ほんの数秒でリンカーコアの再生をやっちゃうなんて、規格外にもほどがあるってもんだよー！）

とはいえ、マークはかつて死者の蘇生すらやってのけた男だからこれくらいはできて当然だろうと、アルフは自分を無理やり納得させる。

「あれ？ でも、ここには一週間居るんじゃないかいたかい？」

「ああ、後の時間はちょっととした訓練だな。戦闘勘を取り戻す……そうだな、せっかくアルフがいるんだし、組手にでも協力してくれ」

「ちよっ!? アンタの相手なんかしたら、命がいくつあっても……!」

「問答、無用!!」

訓練用の剣を取り出したマークは、及び腰のアルフに嬉々として切りかかった。

「……」の一週間、何をやらかしたの？」

「ちよっとした組手だ」

指定された期間が過ぎて辺境の地からマークたちは回収されたのだが、魂が半分抜けかけたアルフを見て真っ先にそんな質問が出てしまったリンディに、マークはまじめな顔で答える。もちろん、その組手が八つ当たりであった事は秘密である。

「魔力もある程度回復したし、勘も戻った。後は聖王教会と話をつけて、闇の書の件を終わらせたらしばらく休めるかな？」

「そうね……本来地球へは休みに来てたんだし、問題ないと思うわ」「それならさっさと終わらせよう。闇の書と竜の記述が見つかったんだっただか？」

アルフを別室で休ませ、マークは今回の会談の内容を改めて確認す

る。聖王教会に所属する『カリム・グラシア』のレアスキルによる『預言』の一文に、闇の書と竜と思われる記載が発見されたというものだ。

「……何かしらの危機に関する予言の可能性もあるし、ザフィーラにも会談の内容を聞かせてみるか？ 協力的になるかもしれないぞ」

「逆もまたしかりなんだけど……一週間、何の成果も挙げられなかった私たちが言っても説得力が無いわね」

今まで通りにしていても情報を引き出せる可能性が少ない以上、賭けに出るのも悪くないという事だ。ただし、教会の重要人物に直接会わせるわけにもいかないので、会談を別室で聞かせるのみとなる。

「心境に変化があればそれでよし、無ければちょっと強引に行こうか……」と、ここか？」

「ええ、一応言っておくけど、不用意な言質は与えないようにしてね？」

「了解」

マークはリンディの注意に軽く答え、服装を整える。一応重要人物に会うという事でいつものワイシャツと言っわけにもいかず、局員の制服を貸し出したのだ。もちろん管理局にとって、マークはこちらの所属であるという事をアピールするためでもある。

そしてついに会談が始まった。

「初めまして、聖王教会所属カリム・グラシアです。こちらが私の護衛の……」

「シャッハ・ヌエラです。以後お見知りおきを」

「あ……管理局囑託のマークだ。それとも、ここに呼ばれた理由を考えれば、ナーガ一族と名乗るべきか？」

すでに全員との面識のあるリンディを除いた自己紹介はつつがな



く終わるが、いつもは割とすぐに本題に入りたがるマークが、珍しく別の話題を口にした。

「聖王教会……歴史上の偉人を崇拜する宗教だと思うが、少し話を聞かせてもらってもよろしいか？」

「あら、興味がありますか？」

「俺の知り合いにも、聖王と呼ばれる王が居たんだな。別人だとわかっていても、やはり気になる」

「まあ、それはすごい偶然ですね！」

マークは素直によるこぶカリムを見て政治的な要素の薄さを感じ好意を持つが、逆に護衛のシャツハにはカリムに取り入ろうとしているようにみられ警戒されてしまっていた。

「マークさんの知る聖王とは、どのような方なのですか？」

「一言でいえば武闘派かな？ 戦があれば最前線で指揮を執るような奴で、剣の才もある。カリスマもあったし、仲間思いで俺の考える理想の王の一人だ。……もちろん欠点も多かったがな」

最後に付け加えられた一言について微笑ましく思ってしまったカリムも、自身の知る聖王について語り始める。

「伝承において最後のゆりかごの聖王と呼ばれた方は女性でありながら、当時武技において最強と呼ばれていたそうです。マークさんの知る聖王と違い、剣を扱う事はなく徒手による戦いをする方だったそうですが、古代ベルカの乱世を平定するきっかけとなった人物とされています」

「ふむ、共に武闘派とは……これは意外と共通点とがありそうだな」

同じく聖王と名乗る者の共通点に、マークは思わず感情が高ぶるのを実感する。自分の友に近い存在があるというのは、思いのほか

うれしい事だったようだ。

「共通点ですか？ ……そうですね『聖王の印』として、右目が翡翠、左目が紅玉のオッドアイが有名でしょうか？ もう一つは虹色の魔力光ですかね」

「ほう……！ 今俺が語った聖王の娘が、左目に聖王の印……こっちでいう『聖痕』があった。そして、聖王の儀を行う地が『虹の降る山』といわれていた」

「あら！ 流石に同じとはいかなくても、本当に似ているんですね！」  
「あ、あの……そろそろ本題の方に……」

「このままだときりが無くなりそうな気配がしたためか、シャツハが恐る恐ると言った体で割って入る。それでようやくこの会談の目的を思い出したのか、カリムは慌てて予言の原文と訳をモニターに出した。

「もうちょっと話を聞きたかったんだが……」

「えっと……じゃあ後日教会の方へ招待しますね？ いろいろな資料などもそろえておきますので」

「期待しておくよ……で、これが闇の書関係の予言か」

リンディもこの会話には口を出しかけたが、それよりも早くマークが預言書の原文に集中しだしてしまったため、注意し損ねる。

「はあ……前回聞いた話では『魔の宿りし闇と光を纏いし竜が相対するとき、大地は絶望に満たされ溢れ出すだろう』と言ったものでしたか」

「かなり強引な訳しかたであるというのは自覚していますが、概ねその通りです。もう少し詳しく言えば、闇の部分に『英知の結晶たる……』と言った一文があり、この事から闇の書のことではないかと推測されました」

さらに前回の会談後に、ユーノの集めた闇の書のデータの中から解読に流用できそうな部分をかき集めた結果、さらに不穏な文章になりつつあるらしい。

「意識になりますか、『闇の書が魔にのまれた』と言った意味になるのです。こちらとしましては、闇の書にさらなる改悪がなされたところ……」

「でものもまれたというのなら、別の何かに吸収されたと言った解釈も……」

つい考察を重ねるリンディとカリムであったが、闇の書に対してはもう話尽くされていると言っている状態なのだ。問題は……

『光を纏いし竜』……「こちら問題なのです。残念ながら管理局の把握する竜種の中に、光を示しそうなものはおりませんし……」

「……まあ、神竜である俺のことと思うのが妥当かな？ それより、正面から戦えば互角か、竜の方が劣勢であるみたいな表現だが、そんなの管理世界に存在するのか？」

「本当に竜なんですね……元々闇の書は無限再生機能を持つそうですし、それならば真竜と互角と言うのも考えられます」

いくら再生能力を持つとはいえ、一撃で跡形もなく消し飛ばせば再生も何もないだろう。そこまで考えたマークだったが、そもそもそれができないから劣勢にならざるを得なくなるのだと考え直す。

(ならば相手は一撃でやれないほどの巨躯を持つものか、あるいは……)

「そうか、転生機能があるから……いや、それでも被害が大きくなるようならひと思いに……さて、それが絶望があふれるという言葉で、すなわち転生させることでより被害が広がるような……」

「マーク君？」

突如ぶつぶつと思考を垂れ流すマークだったが、ある程度まとまったのか今度は預言書を読み始めた。

「何か分かったんですか？」

「ん〜……もし俺が戦って劣勢になるなら、それ相応の理由があるはずだと思ってるな」

「まあ、そうでしょうね……つまりその理由から考えたら、闇の書を呑みこんだ魔の正体がわかるという事ですか？」

「そんなとこだな」

そう言いながら預言書の言葉を訳す。いや、訳すというのは適切ではない。マークの予想した答えと言うゴールに、予言書と言うスタートからたどり着けるかというパズルのようなものだ。

「……嫌な結論だな。ひょっとしたら手遅れかもしれないぞ」

「えっと、マークさん？」

「悪いが、この話し合いはここまでにさせてもらおう」

「ちよ、ちよっとうー」

パズルの結果は最悪。無理をすればそう読める、ではなく、答を知ってしまえばそれ以外の解釈ができない、と言うレベルの適合具合だった。

マークは部屋を出てすぐに、走りながらザフィーラへと通信を開く。今回の話し合いの内容を聞けるようにしていたためか、マークの持つ通信機でも念話が可能であった。

《聞いていたな？》

《もちろんだ……》

《じゃあ単刀直入に言わせてもらおう……主の居場所を言え。今の預

言を信用するなら、俺が何とかできるかもしれない最後の機会だ》

《……》

《もちろん予言が真実である保証もないし、何より俺の考えが正しいとは限らない。さらに言えばもう手遅れの可能性もあるかな》

マークの想像が正しければ、闇の書をのみこんだ魔と言つのはいつかアリシアに話をした『魔王』である可能性が高い。

そして魔王と言つ存在は人の絶望を糧とし魂を喰らう、すなわち人と言つ存在の敵だ。

《選択肢は二つ。俺を信じるか信じないか……》

《信じよう》

《……ほう、まだ俺が危惧していることを説明もしていないのに？》

マークの問いかけに即答したザフィーラに、むしろ挑発するかのようになり再び問いかける。だがザフィーラの答えは思いのほか共感できるものであった。

《戦場で拳を交えた人物だ。信用できるかどうか程度の判断はつく》

《ハッ、確かに！ 俺も、お前らに対して出会う時が違えばと、考えたことがあった位だしな！》

そうして出た結論をやっと追いついてきたリンディに伝え、ザフィーラを案内役として釈放させることを要求する。

そしてザフィーラに聞かされた目的地に、流石のマークも表情を陰しくすることになる。

(ああ、この速度から察するに、奴にこの場が知られたか……)

それは突然の出来事であった。

(本当なら、闇の書の完成を待ちたかったのだが……やはりそれほど甘くはないか)

いつもはやての脳裏に響いていた攻撃的な声が急に近づいて来て、また離れて行った。いや、より正確には、その声に本来いる場所を盗られ、そこから弾き飛ばされたような感覚であった。

(何が起っているかわからぬか、憑代よ?)

それと同時に体の感覚まで失われていき、最終的には自分の体の中に閉じ込められたような感覚を得た。

(ほう！ なかなか適切な表現ではないか！ ああ、確かに我がこの体を奪ったことで、貴様の魂は行き場を失っている。閉じ込められたという感覚はそのためだろう)

その言葉に、じわじわと不安と恐怖が滲み来る。この声は何を言っているのか、この声は何をやるうとしているのか……肉体を奪われているためか、はやてはその答えがするりと自身の中に入ってくるのを感じる。

「どうしたの、はやてちゃん？」

《ダメや！ 逃げて!!》

急に顔を伏せ動かなくなったはやてに、シャルマルが戸惑った声をかけた直後、はやての念話による警告が発せられたときにはもう遅かった。

「ガッ、ハッ……！」

「風の癒し手、か……一思いにやるのもいいが、それだけでは詰まらんな？」

一瞬でシャルルの首を捉えたのははやての左腕であり、その声もまたはやてのものであった。だが、違う。シャルルは必死に、はやての姿をした何かを見極めようと、言葉を紡ぐ。

「な、なにも……の……!?!」

「見ての通りだ……だが、そうだな、しいて言うのであれば……」

はやての形をした何かの表情が、ぐにやりと歪む。それは狂気に彩られた狂喜で、見るものを戦慄させる。

「我は『魔王』だ」

「ま、お……!?!」

苦痛と困惑、そして恐怖がシャルルの表情を彩るのを、恍惚といった風情で眺める姿は、まさにその言葉がふさわしい。魔王と名乗ったはやての姿をした何かは、で横になっていた体を起こし、ベッドの上に立ち上がることでシャルルの体を宙に浮かす高さを得る。

「あ、ぐっ……」

「ああ、その顔もまたいいが、まだ足りぬ……ときに、貴様はどのような表情が好みだ?」

それは答えを求めるものではない。はやての姿をした魔王は、右手に膨大な魔力を集め、その漆黒の魔力を剣の形に固定する。

「我は、そう……近しいものを目の前で殺され絶望する表情が非常に好みだな」

《やめ……!?!》

はやてが制止をする暇もなく、漆黒の剣は振り下ろされた。

## 第42話 「三つ巴」

リンディを説き伏せザフィーラの先導で向かう先に巨大な魔力を感じたと思ったら、海鳴全域を覆う結界までが発生するという事態に、流石のマークも険しい顔つきを通り越し無表情になっていた。

「おいっ！ 何があったー！」

『海鳴大学病院で魔力反応があったの！ 反応した量が量だったから、緊急で広範囲結界を発動したんだけど……！ ゴ、ゴメン！ ちょっとなのはちゃんたちの方でも問題があったみたいだから、ちょっと待ってー！』

「一人でやるうとするな、分担して情報をさっさとよこせ！」

対処に手間取るエイミィを怒鳴りながら、マークは結界により人気が無くなったのいいことに本気の疾走を始める。それは不条理にも、四足で走る獣型のザフィーラの疾走に並ぶものであった。

《主の通っていた病院だ！》

「くそっ！ 後手に回ったか……だが、病院なら跳べる！」  
《ぐふあっ!?》

闇の書の主である八神はやての家などと言われても、マークには場所がわからなかった為に行えなかったが、病院と言う公共の施設が目的地に変わった為、ザフィーラの首根っこをつかみ『リワープ』の杖を使い一気に転移を行う。

だが、マークの考え得る最速を持ってすら事態の進展には間に合わず、病室から放たれた閃光に切り裂かれる人影が堅い地面に投げ出されるのを、見ていることしかできなかった。

「シャマルニ！」



「おい、生きてるか？」

人化したザフィーラが人影に駆け寄り、マークが閃光の発生源からその二人を隠すように立ちふさがる。そして、その手に握るのは炎槍『ジークムント』という最悪を想定した装備であり、その警戒は残念ながら無駄になることはなかった。

「ふんっ、あと半月もあれば闇の書も完成できたものを……いや、貴様の名を聞いた時から、こつなることは予測できていたがな。なあ、神竜の末裔マークよ」

「全く、嫌な予感ばかり当たる……まあ、思っていたより浸食が進んでいないみたいなのがせめてもの救いと思っべきかな？ 魔王フオデスよ」

閃光の奔った後のがれきから出てきた少女の姿をした魔王に、ため息をつきながらマークは言葉を返す。状況は最悪でこそないが、極めて悪いと言わざるを得ない。

「主に何があったというのだ……！」

「はやてちゃん……魔王って……」

「……簡単に言ってしまうえばあは、かつて肉体を滅ぼされ魂を封印された魔物たちの王。人の絶望を糧とし、魂を喰らう存在だ」

「概ねその通りだ。そして心の闇に付け込み、このように肉体を乗っ取ることもできる。……大切な家族を再び失うかもしれないという恐怖に付け込むのは、実に簡単だった」

「キサマッ……！」

マークの言葉に続き語る魔王フオデスは、ザフィーラに睨まれながらも実に楽しそうであった。

だからマークは、やはりこの存在が人にとって猛毒であることを確信する。そしてはやてと呼ばれた宿主に、この猛毒に耐えられないだ

ろつという事を。

「本当に残念だ……あの騎士たちを心酔させた主と会つのを楽しみにしていたんだが、この手で殺さないといけなくなるなんてな……！」  
「ほう？ 貴様のような甘い奴にそれができるのか？ 前日も優王女が事を為すのを見ていることしかできなかった男が！」

共に変化は一瞬であった。魔王は闇の書を片手に漆黒のバリアジャケットを装着し、マークも管理局の制服が破れるのも構わず紺の鎧を展開する。

「消し飛べっ……！」  
「滅びよ……！」

魔王を倒すために創られた双聖器である炎槍ジークムントと、闇の書によって得た膨大な魔力がぶつかり合う。その攻撃の余波は病院の一角を吹き飛ばすが、双方にダメージを与えるには及ばない。

「マーク！ どういう事だっ!!」  
「悪く思っな、っていうのも無茶な話か……だが、お前の主はすでに魔王に肉体を乗っ取られた状態だ。だから、事を起こす前にせめて俺が殺してやる」

「何が『せめて』だ！ そんなこと、決してさせるものかっ!!」

かつての魔王の所行を見てきたマークには、これから魔王が行うであろうことが手に取るようにわかる。だが、騎士たちはそんなこと知りようがないのだ。

ザフィーラが拳を握り、重症であるシャマルすらもその援護をしようとして立ち上がる。その姿は数多戦場を越えたマークから見ても眩しい騎士の姿であり、魔王の内にはやてにとっても希望であった。

「なかなか良い決意だ。だが、ここは意志の力だけで踏み込める戦場ではないのだよ」

しかし、その小さな希望こそがマークが恐れ、魔王の待っていたものだったのだ。ザフィーラとシャマル、そしてマークを、海鳴全域を覆うように幾十幾百もの魔法陣が紡がれる。

「な……………」

「これは……………?」

そこに現れたのは、世界を黒く染めるほどの魔物の群れ。骸骨の兵士である『スケルトン』に、魔力によって蘇った死体である『ゾンビ』が、さらには人の上半身と馬の下半身を持つ魔物『タルヴォス』等が地上を覆い、空には浮遊する巨大な目玉に根が生えたような『ビグル』と、翼持つ魔物である『ガーゴイル』がひしめいていた。

「くはっ、やはりいいものだな、小さな希望を持った直後に絶望へ叩き落される者の顔と言うのは…」

「我ら守護騎士は、この程度の障害を前に絶望などしない！」

「ああ、ああ、そうだろうさ愚かな騎士達よ。だが、貴様らの主は違うだろう? 自分が助かりたいと思ったがゆえに、大切な人たちが傷付き苦しみながら死んでいくのだと、そう知らしめるには十分な光景だ」

「……………」

ザフィーラはあまりの怒りに思考が一瞬で沸騰しそうになるのをギリギリのところまで耐え、射殺さんばかりに魔王を睨みつけるにとどめる。このような状況でも、守護者としての理性が無謀な特攻をするのを押しとどめた。

それでもやはり冷静ではないのだ。その睨みつける相手が魔王であるのと同時に、自らの主であるはやてであることが繋がらなくなる

程、彼の感情は憤怒に満ちていた。

「さあ戦え、か弱き者どもよ。せつかく生かしてやっているのだ、せいぜい好い声で哭きたまえ？」

魔王の号令のもと魔物たちが奔り、戦いが始まる。騎士は魔物に阻まれ魔王にたどり着けず、竜は姫ごと魔王を殺すと宣言した。囚われの姫を助け出す英雄は未だ現れない。

「一体何がどうなってるの!？」

「まあまあ、落ち着きなさい、なのは」

「だってここは結界の中なんだよ！　なのに、なんでみんながいるの!？」

はやてのお見舞いに行くお土産として、ケーキを持って行こうと翠屋に寄ったなのは達だったが、そこで急に結界に閉じ込められるという事態に遭遇していた。

その事態に動揺したなのはであったが、周りにいるアリサやすずか、この店のパティシエである桃子にバイトの忍は冷静……いや、結界に興味津々であった。

「エイミィ、とりあえず何があったか教えて？」

『ちよ〜っと待って貰えるかな！　……お待たせ、とても強い魔力反応があったから、広範囲の緊急結界が作動させたの。今マーク君が向かってる』

「……うん、ここからでもわかったよ。次は、なんでみんなが結界内に居られるのか教えて貰える？」

そんな中、一見冷静に対応し始めたフェイトだが、その実は全く逆だ。つまり、なのはとフェイトは自分が知っている分野が急に理解できなくなったことに、恐怖を感じているのだ。

『予想で申し訳ないけど……マーク君が渡したお守りのせいみたいだね。微妙にだけどこちらの計器にも反応があるよ』

「じゃあ、マークさんのお守りのおかげでこの結界の外に弾かれなかった、ってことですか？」

『流石に絶対とは言えないけどね』

お互いの認識がわずかにずれていたが、事実確認としては問題がないのでスルーする。

『アリシアちゃんはすでにアースラに避難しているから、みなさんもすぐに……！』

避難してほしい、という言葉は最後まで続くことはなかった。それもそのはず、魔王の為したことは、少なくとも管理局の常識の遥か外にあったのだから。

「すごい魔力……！」

「これって……召喚魔法!？」

なのはとフェイトの言葉に反応した面々が翠屋の外を見ると、いくつもの魔法陣が展開され、そこからスケルトンやゾンビを代表とした魔物たちが現れるのを見ることになった。

『嘘、何この数……これは百や二百じゃ……！』

ついモニターに表示された反応の数をつぶやいてしまったエイミイは、すぐさま失言に気付き顔をしかめる。

「……やはり、僕たちは避難できないね」

「ああ、流石にそんな数の相手をなのは達任せるわけにはいかない」

「姉として、この戦場に妹を残して逃げ出せないよー！」

結界の発生とともに姿が見えなくなっていた三人が、それぞれ得物をもって店内に現れる。ただ、高町家の長女である美由希は、なぜか忍に対してわたわたと言いつきを始めたが……

それはともかく、エイミィとしても彼らの気持ちはよくわかる。だが局員の立場としては、民間人を戦場に置き去りにするなんて決して許可できない事であるのだ。だからこそ、この場で責任をとるものとして判断する必要があるのだ。

『……局員として、魔法事件に巻き込まれた一般人を保護する義務があります』

「だが僕たちは……！」

『だけど！　ここは管理外世界です！　現地住民への過度な干渉は禁止されています！　保護を強制することもしません！』

それは半ばやけになった言いつきであったが、確かに正論でもある言いつきであった。

「恩に着るよ」

『そう思うのなら、無事に帰ってきてください。貴方たちの命を背負うつもりなんて、欠片もないですからね』

「うちらとしても、背負わせる気なんてさらさらないよ」

士郎はマークに渡されたお守りである『パピスの守り』を腕に巻きつけ、これからの方針を掲げる。

「僕たちはともかく、桃子さんたちは避難させてほしい。それと、情報の提供はこれで最後に……情報提供を続けたら、さっきの言いつきが効かなくなるからね」

『避難の件は了解しました。すぐに転移を行います。ただし、情報は

今後も送りますよ？ 流石に後は勝手にやれ、なんてこと言いませんって』

エイミィはそう言って転移を行おうとしたが、ここでまた問題が起こる。否、正確には、魔王に先手を打たれることになった。

『えー！ 嘘、転移の妨害!？』

それはアリシアを避難させた直後に打たれた一手であったそれは、これ以上逃がしはしない、憑代の絶望と成れという最悪の一手。

その悪意を感じ背筋が震える思いであったが、残念な事に気を取り直すような時間はない。

「明らかにこちらを見ているね……」

「囲まれてしまえば対処のしようが無い！ 魔物の少ない方へ一度退く」

幸いなことにゾンビどもは扉から店内に押し入ってくるような知能が無いようだったが、そこが出入り口であることはわかるのか、集まってきている。このままではいつまでも入ってこないという保証がない。それならば逃げ道が確保できる位置取りをするべき、と判断する。

『経路は指示します！ 武装局員の到着まで、何とか持ちこたえてくださいー』

「父さんと美由希で道を切り開いてくれ。俺が殿を務める」

「そんな！ 道ならわたしが……!」

「ダメよ、なのは」

撤退の方針を打ち出す恭也に反論するのはであったが、まさかのアリサからのダメ出しを出される。

「だって、お兄ちゃんたちはバリアジャケットとかの防具が無いんだよ!? だったら……!」  
「それでもだよ。マークさんから切り札をもらったんでしょ? なら、なのはちゃんの戦うところはここじゃない。わたしたちは大丈夫だよ」

なのはを宥めるすずかの手に、一振りの剣が現れる。それはマークが護身用にと渡した精霊を宿した剣であり、精霊に認められない限り決して鞘から抜けないはずの剣であるはずだった。

そう、それにもかかわらず今すずかの手にある剣は、その剣身を晒していたのだ。

「で、でも……」

「それに、匂いは元から断って言うでしょ? これは、なのは達にしかできない事なんだから!」

さらにアリサが声を上げるが、それでもなのはが決断するひと押しにはならなかった。だがこの光景を見て、フェイトはジュエルシード事件の一幕を思い出していた。

「……行くっ、なのは。そもそも土郎さんたちがここに残るって言い出したのは、なのはの助けになりたかったからだよ? だから、ここでののはが足を止めたら、みんなの思いを不意にってしまうことになると思うんだ」

「フェイトちゃん……」

一度目を伏せるなのはにみんなが注目するが、次にその目を開いた時には、そこにいつも通りの不屈の闘志が宿っていた。

「うん、もう大丈夫」



「じゃあ、わたし達が入口にいる魔物を討ちますから、みんなはそれに続いてください！」

そう言ってバリアジャケットを展開する二人に続き、戦える者たちは自身の武器を構える。

「それじゃあ……いきますー！」

フェイトのフォトンランサーとなのはのアクセルシユーターが奔り、翠屋の入り口付近にいた魔物を駆逐する。それに士郎と恭也が続き、みんなが出る空間を確保した時には、二人は自身の立つべき戦場へと飛び去って行った。

『海鳴臨海公園に向かってください！　そこが一番手薄です！』

「了解した……行くぞ！」

「はいっ！」

先陣を切る士郎と美由紀の剣筋に迷いはなく、スケルトンやゾンビを一太刀のもとに切り伏せていく。組織立った動きのない魔物たちなら、いかに大群とはいえこの二人にとっては木偶人形と同じだ。

それでも多数の力と言うのは強大で、どうしても士郎たちの手の届かない個体は存在してしまう。

「さて、あれほど大口を叩いたんじゃ、ダメでしたじゃ済まないわね」「最初からそんな終わり方をするつもりはないでしょ？」

アリスはマークから受け取った『妖魔の術符』、魔道を使えない物でも魔法攻撃を可能とする符を構え、すずかはマーニ・カティを構える。

「いけえ！」

「はあっ！」

術符で相手の体勢を崩し注意を引き、すずかがとどめの一閃を加える。二人で一組の堅実な戦い方は、現状文句のつけようがなかった。

「「こちらも負けてられないな！」」

なのは達が中央へ向かった影響か、数こそそう多くないが難しい撤退戦の殿を務める恭也も、前を走るみんなから離されないように、それでいて近づき過ぎないように細心の注意をしながら戦う。

「まあ、出番が無いのはわかっていたことなんだけどさ……」

「そういじけないで、周囲の警戒でもしてましよう？　意外と重要な事よ？」

そう忍を宥めながら桃子は、足止めを一時中断し離れすぎないようにこちらへ戻る恭也の後ろに何かを設置する。

「えっと、それは？」

「マーク君のお守りで『フレイボム』っていう、魔法でできた……」

最後まで桃子が説明する前に、その『フレイボム』を踏んだ魔物が爆発とともに炎に包まれる。

「……地雷？」

「そんな感じのものらしいわ」

忍は結局戦いに参加できないのは自分だけかと少し落ち込みながら、魔物の動向を広い視点で見ながら戦士たちに指示を飛ばすのであった。

「「こんな雑魚で壁の代わりになると思っているのかっ！」」

「まさか、ただの露払いだ」

空に数多浮かぶガーゴイルやビグルを炎槍の一振りで薙ぎ払い、その背の翼を広げ魔王に一瞬で接近するマークであったが、その一撃も莫大な魔力によって形成された障壁によって防がれる。

だが、マークの神器による一撃を何の代償もなく防ぐには至らなかったようで、障壁を支えるため突き出された腕から鮮血が奔る。が、その傷も闇の書の自己修復機能により、瞬く間に治癒してしまう。

「憑代がどうなったって知らんという事が……！」

「はっ！ その憑代ごと殺そうとしている奴のセリフとは思えんなあっ!!」

その傷がマークの一撃によるものではなく、その一撃を防ぐのに必要な魔力を無理やり引き出したためだと悟ったマークが責めるが、目を見開き狂喜する魔王の反論に口をつむぐ。

「誰が好き好んでこんなことをやると……！」

《え……？》

それでも反射的に出てきてしまった咳きは、事もあるつか憑代とされた少女に届いてしまう。

「なんだ、憑代は気付かなかったのか？ そやつ一見無表情だが、内心は我に対する怒りと己の無力に対する怒りで満ちておるぞ？」

「黙れ」

マークはより一層激しく炎槍を振るうが、その言葉を止めるには至らない。

「くくっ、凶星をつかれて怒ったか？」

「ふんっ……どんな感情を持つのが、俺のやることは変わらない。俺にはその小娘より優先すべきものがあつたというだけのことだ！」  
《……小娘やない》

かすかな呟きに、マークはわずかに動きを鈍らせる。マークは知らないが、はやてにも選択の時はあつた。その時ははやての結論は『自分の幸せのために、他人に迷惑はかけられない』というもので、その想いは今も変わらずここにあるのだ。

《あなたに殺される、わたしの名前は……八神はやてや》

決して死にたいわけではない。だがそこには、決して譲れない信念があり、それが故に後悔などない。

「……ああ、確かに聞き届けたぞ、ハヤテ……俺は、お前を殺す男の名前はマークだ」

そこにあつたのは悲しい決意。自分が助かるために、他人を危険にさらすことはできないという英断を下した少女に敬意を示すように、マークはかすかに唇を動かす。

その名、その命の輝き、確かにこの魂に刻み込んだと。

だがそのような悲痛さを欠片も見せることはなく、マークは奥義を使うべくわずかに距離を取る。それに対し、今まで余裕すら見せていた魔王の動きがわずかに鈍る。

『月光』

「この、小娘がああっ!!」

必殺を込めて繰り出されたそれは、相手の防御の一切を貫く至高の

一撃。さらに神器の力が上乘せされた以上、内部からはやてにその動きを妨害されたことも合わせ、迎撃すらできるものではない。紛う事なき、この戦いを終わらせるに足るものであった。そう、その一撃が魔王に届いたなら……

「ダメエエエッ!!」

「ッー!!」

叫びとともに奔った桃色の閃光がマークの眼前を通り、奥義を妨げる。追撃を行おうにも、はやてから再び肉体の主導権を取り戻した魔王に先と同じ一撃を当てるのは困難であると判断せざるを得ない。

「ナノハ……」

「その子は、はやてちゃんは……」

「邪魔だッー!!」

「ぐうっ……!!」

マークからはやてを守るように割って入ったなのはを蹴り飛ばし、直後に振り下ろされた漆黒に刃を炎槍で受け止める。

「残念、今が入れば憑代の精神もそれで終わりだったろうに」

「そんなこと、誰がさせるかよっ!!」

今のなのはの言動で、なのは達がすでにはやてと既知であることを察したマークは、合流前に勝負を決められなかったことを悔いる。

「なぜ攻撃してこないのか疑問だったが……これが目的か、魔王!!」

「その通りだよ、神竜。掛け替えのない友人をこの手で屠る……これほど愉快な演目も無かるっ?」

何十何百の罵詈雑言がのど元まで出てくるが、それを飲み込み思考

を巡らせる。なのは達の言いだすことは簡単に予想がつき、それを為すのは事実上不可能と言って過言ではないからだ。

「……今の言動がすべてだ。諦める」

わざわざ語る必要などない。はやての肉体は魔王に乗っ取られ、止める術などない。マークが蹴り飛ばさなければ、その命はなかったのだぞと。

「……諦めません」

《なのはちゃん……》

それでも、だからと言って『はい、そうですね』なんて言えるものではないのだ。なのはにとってはやては大事な友達で、それを見捨てるなんてできるはずがない。

「マークさんに比べれば、わたしなんて何もわかってない子供で、ただ駄々をこねているだけなのかもしれないけど……！　それでも、諦めることなんてできませんっ！！」

誰になんて言われようが、それこそがなのはにとって譲れない信念なのである。そして、そんな信念を見せた相手を甘く見るほど、マークは自身の力を信じていない。信じていないが、今のなのはにはやてが救えると考えられるほど楽天的にもなれなかった。

「……ならば勝ち取れ、奪って見せろー！」

文句を言うだけならば誰だってできる。だが、文句を言って泣きわめこうが、何が変わるわけではないのだ。

ならばとるべき道は一つしかない。力を示し、証明すること。望まぬ結末を打ち砕き、夢見た未来を勝ち取るほかない。

「やってみせますー!」

「そんな根拠のない信念で、我をどうにかできると思っているのか!!」

なのはが気炎を上げ、魔王がその姿を嘲笑する。だが忘れてはいけない。マークは『勝ち取れ』と言ったことを、それはすなわち、譲るつもりはないという事だ。

マークは変わらず双聖器である炎槍『ジークムント』を構え。

魔王は漆黒の剣を霧散させその手に『闇の書』を開き。

なのはは新生したレイジングハートをフルドライブモードに切り替える。

そうしてここに、戦いは第二局に突入し、さらに苛烈さを増すことになる。

## 第43話 「劣勢」

それは一瞬の出来事であった。文字通り死ぬ気で魔王の足止めをしたはやては、再び肉体の制御を奪い取られてしまった。それは先程より強く、そして深く魂が押し込まれるというおまけつきで、もう二度と先程のような妨害はできないだろうと確信させられた。

「とはいえ、こんなことになるのは予想外や……」

そこにあつたのは永劫に続く闇である。ただ、その場に恐れを抱くようなことはなく、むしろこの場は魔王からその精神を守るための避難場所のようにも感じられた。

もちろんそう感じたのは、何も根拠のない事ではない。はやてはその根拠である二人の男女に改めて向き直り、説明を求める。

「当然、いろいろ説明してくれるんやろな？」

「もちろんです、主よ」

「まあ、聞きたくないといわれても聞いてもらうつもりだったし」

その二人の男女のことは、この場所がはやての内側とも呼べるころであるからか、どんな存在か自然と理解できた。

銀髪の女性の方は闇の書の管制人格であるが、魔王に書の大部分を乗っ取られた状態にある。そして銀髪の男性の方は、かつて魔王に肉体を乗っ取られ大陸に戦乱をもたらした存在。そう、それはいわば

……

「……先輩、とでも呼びましょうか？」

「やめてくれないかな、君を後輩にするつもりはないよ」

男は苦笑しながら否定するが、現状はやてはその道を全速で転がり



落ちている最中だ。つまりそこから導かれる回答は一つしかない。

「逆襲の一手があるん!？」

「やっぱり頭の巡りがいいね、会話が楽でいいよ」

「とはいえ、どれも決め手に欠ける手ですので、過剰な期待は持たないようお願いします」

男は気楽そうに、女は深刻そうに前置きをするが、すでに決意を固めたはやての前にはさほど効果は無かったようだ。

「どれも外からの手助けを前提としたものですが……一つは守護騎士プログラムを利用したものです」

「君の肉体を取り戻すことを諦めて、プログラムで仮初めの器を作りここから出る。当然人ではなくなるから、外に出た後何かしらの処置を得ないと存在できなくなってしまっけど、一番成功率は高い」

しかし、魂にかかる負荷がとても大きく、成功して外に出られても廃人になってしまう可能性も高い。

「流石に選びにくいんやけど……次は？」

「二つ目は魔王の魂の封印だね」

「元々魔王を封印していた『聖石』がまだ闇の書内にありますから、やはり外からの後押しがあれば可能と言えば可能でしょう」

ただし、魔王もそのことは理解しているだろうから、最も警戒されている策であるだろう。

「それって誘われてるって意味とちゃうん？」

「まず間違いなく、最後の方法ですが……」

「意志の力で魔王を肉体から追い出す……さっき君が魔王から肉体をわずかに取り戻したけど、その完成版ってところだね」

「……死ぬ気でやって止めるまでしかできんかったんやけど？」

事実上不可能と断っていいだろうそれは、一応成功例があったりする。ただその人物は、初回の魔王討伐を行った5人のうちの1人で『聖女』と呼ばれる伝説クラスの人物だったりするが……

「魔王を極限まで弱らせてもらえれば、理論上は可能です」  
「今の魔王の再生能力とか見たら想像できへんけど……」

微妙に自分の体のことを言っているとは思えないセリフだが、過剰な魔力放出に耐え切れず吹き飛んだ腕が次の瞬間には完治しているのを見てしまえば、そんな感想になっても仕方のないことだろう。

「まあ、それは置いて……結局選択肢は無いと同じやな」  
「いや、選ぶ道ならもう一つあるよ？」

その言葉に、人を捨てるしかない諦めた少女が顔を上げる。だが、最後に残された選択肢も相当なものであった。

「何もしない」  
「……それはアカンやろ」  
「それでもないよ？」

外にいる人たちの選択にすべてを委ねる。あるいは信じて待つというのは、性急に事を進めるより辛く、難しい道であるのだ。だがここで、今まではやてに選択肢を示すだけだった管制人格から始めて否定的な言葉が出る。

「正直そればかりは賛同しかねます。外にいる方たちのうち最も強い力を持つ方が魔王討滅を目指していますから、静観しても事態は好転しないかと思われれます」

「でも、今後どんな状況になるかとこれ以上成功率が下がることはないんだ。それならあの子たちを信じてみるのも手だよ？」

「しかし、あのような極限の戦闘を続けられる保証はありません！  
いつ決定的な事が起こるか分からない以上、一刻も早く離脱しておくべきです！」

「彼が居れば、仲間をそう簡単に死なせるようなことはないよ。そうでなければ流石にこんな提案はしないって」

はやてを置いてけぼりにして口論を始めた二人であったが、今日この時まですでに散々討論した議題であったためか、比較的早く静かになる。だがはやてには口論の内容により気付いたことに意識が行ってしまっていた。

その反論の仕方に、聞き覚えがあったのだ。それは常日頃からはやてが性急に事を勧めないように諫め、戦ってはいけないと諭し続けた声の持ち主であった。

「いつも私に警告してた声の片割れ、あんたやったんやね」

「……それは今話すことではないよ？ そんなことより、これからどうするか決めないと」

「そやね……」

幸い、外には魔王と戦った経験のあるマークがいる。はやてを助けるようとしてくれる友人と騎士がいる。

そしてこの身の内にも、はやてを守ってくれる騎士が居て、頼りになるかもしれない先輩がいる。

「まあせっかくこれだけの好条件がそろったんやし、最高のハッピーエンドでも目指してみようやないかっ！」

魔王が絶望を糧とするならこの希望が毒となれと、はやては高々と宣戦布告を謳いあげた。

「エクセリオン、バスターツ！」

なのはの放った一撃が魔王とマークの間を貫き一時的に距離を開かせるが、すぐにまたマークの炎槍が魔王に迫る。もちろん魔王も黙ってはおらず、数十に及ぶ血塗られた魔力刃がマークやなのはに襲い掛かる。

そんな姿を横目に見ながら、フェイトはザフィーラとシャマルからこれまでの経緯を聞き出していた。

「……じゃあ、マークははやてに取りついた魔王と戦ってる、って解釈でいいのかな？」

「そうだったら何の問題もないのだけど……彼ははやてちゃんごと魔王を討滅するつもりよ」

その会話の間にもザフィーラはスケルトンの頭部を打ち砕き、フェイトはゾンビを両断し続ける。幸いと言って言つべきか空を飛んでいた魔物どもは、マークやなのはの攻撃に巻き込まれほぼ壊滅状態にあるため、上空からの奇襲は最低限しかない。

「マークがそんなこと……！」

「事実だ。空を見ればわかることだろう？」

それでもフェイトは信じられなかった。いや、そもそも彼女がマークたちの戦いからそれとて騎士たちのもとに来たのも、そのことから目をそらしたかったからかもしれない。

フェイトにとってマークは母と姉を救った英雄でもあったのだ。それがフェイト達の友人を手にかけてようつとしているだなんて、そんなこと認めたくなかった。

「……マークがそうするなら、そうするだけの理由があるはず」

『フェイトちゃん！』

そんなフェイトの盲信とも思える発言をエイミィも危険に感じるが、それは杞憂に終わる。フェイトにとってマークは英雄であるだけではないのだ。

(……マークは、わたしのことを相方だと言ってくれた。わたしがマークの相方だと言っていてもいいと言ってくれた！)

その言葉があるから、フェイトはマークのことを『英雄』と言う偶像としてではなく、『人』として見ることができる。

「エイミィ、魔王について何か分かることはない？」  
『ちよっと待って……今調べてるよ……』

だからフェイトは、マークに考えがあって行動しているという可能性の他に、マークが私情で動いているかもしれないという可能性に気付くことができた。

(わたしも母さんのためになって言って、いろいろやっちゃったから……)

フェイトも、母であるプレシアもかつては自身の感情に任せて犯罪を行ってしまったのだ。マークだって激情に流される可能性もあるかもしれないと考えることができた。

『あったー！ 昔の会話のログに、魔王の封印についても！』

それはジュエルシート事件の直後の会話であったが故に残されていたもので、その記録の発見をきっかけにフェイトも当時の会話を思い出し始める。

「そうだ……『聖石』だ！」

『わたしもお兄さんに、ま王の話を聞いたおぼえがあるよ！』

フェイトが当時の会話を思い出したのと同時に、ブリッジに来ていたアリシアも声を上げる。それはマークと本局で過ごした時間に聞いた英雄譚。まさかこんなことに役に立つとは思わなかったが、人生何が起こるかわからないものだ。

「その話、我らにも聞かせてもらえるか？」

「シグナム……」

「シグナムだけじゃねーぞ！」

「えっと……ヴィータ？」

そして、ついに他の世界へ蒐集に出ていた騎士たちが帰還する。さらにあと数分もすれば、本局に増援の要請をしているだろうクロノ達も到着するだろう。

「魔王をどうにかする手段はマークが知ってるはずだから、まずはマークに別の選択肢を選べるだけの余裕を持たせないと……！」

「……なるほど、今の彼は魔王と戦っただけで精一杯と言っわけか」

結局フェイトが出した結論は、『マークには魔王をどうにかする手はあっても、力が足りない』というものであった。この推測はほとんど正解と言ってよかったが、ある一点だけは決定的に間違っていた。

確かにフェイトやなのは達が力を貸せば、魔王を倒すことはできるだろう。それにヴォルケンリッターやクロノ達が加われば、より確実になるのも間違いじゃない。だが、はやてを救うにはこれでもまだ足りないのだ。

「ザフィーラはシャマルを守りながら後退してくれ。戦線に復帰でき

るまで回復するには、もう少し時間がかかるだろうっ？」

「わかった」

「……仕方ないわね」

「共同戦線を張るのに異論が無いのなら、臨海公園に向かって下さい。そこにアリサ達がいるから」

しかし彼女らにはそのことを知るすべはない。いや、知っていたとして何が変わるといえるのか。

答えは『何も変わらない』だ。まこと残念なことに、ここには無理だといって友人を、家族を見捨てられるような賢い選択をできる者はいなかった。

「ふんっ、ジークムントを使ってこの程度かっ！」

「ちっ、防戦一方のくせに何を言っか！」

上空で続く激戦は、未だ均衡を保っていた。いや、お互い決め手に欠いた状態による停滞に陥っていたといった方が正しいかもしれない。

マークの神器による一撃は必殺を保ち続けているし、魔王の肉体の破損を無視した防御はいまだ鉄壁を誇っている。そしてお互いがこの状況を打破することができなくなった理由が、はやてを救おうとこの戦いに割って入って少女であることを、当の本人だけが知らない。

(魔王がなのはを狙って、俺がそれを阻止している……か。それにしても、ここに割って入ったはいいが、何をすればいいのか全く分かってないな……)

そう、はやてを助けるといって一心で乱入したのはであったが、ではどうすればはやてを助けられるのか全く見当もついていなかった。もちろん、あの時なのはが来なければ決着がついてしまっていたのだから、その行動を責めることもできないのだが……

「いい加減に諦めたらどうだ？」  
「誰がっ！」

もはや何度目かもわからない一閃は、またしても自壊と再生を代償に止められてしまう。だが、マークはこうなるとわかっていてもこの攻撃を止めることができない。もしこの猛攻がやめば、魔王の一撃が確実になのはを貫くだろう。

(せめてあと10年……いや、5年もあれば違う選択もできただろうに……！)

たとえ力不足で翻弄されっぱなしとはいえ、魔法を知って一年足らずでこの戦いに介入出来た少女なのだ。肉体を乗っ取られてしまっではいるが、それでも死を覚悟し魔王の動きに内側から干渉できる少女なのだ。どうして今この時戦わねばならないのだと、マークは忸怩たる思いでいっばいであった。

「戦いの最中に考え事とは、余裕だな」  
「ッー！」

攻撃の手は緩めていなくとも、人の弱みを決ることにたけた魔王はマークの考えることを容易く看破する。

しかし、魔王がこの一点を攻撃することはついにできなかった。それを防いだのは戦場に轟く雷撃であり、炎を纏う剣戟であり、すべてを破壊する巨大な鎚であった。

「む……」

「これ以上、あなたの好きにはさせないッー！」

「魔王如きには過ぎた器だ……！」

「はやては返してもらっッー！」



タイミングはほぼ完璧であった。魔王がマークへの攻撃に意識を裂いた直後であったにもかかわらず、それでも魔王には届かない。その事実は新たに参戦した者たちを少なからず竦ませる。が、はやてを救える可能性を前にしたら、この程度の脅威何度だって振り払える。

「マーク、聖石を使わせて」

「ネタは全部上がってんだ、いまさらとぼけんのは無しだからな！」

「ほう！ 聖石を知っているのなら話は早い」

マークがかつての自分の口の軽さを悔やむ間もなく、魔王が口をはさむ。そして魔王は、マークが止める間もなくはやてを救う方法を暴露する。

「聖石による私の封印……なるほど、それであればこの憑代を救うことができるだろう」

そうして魔王が闇の書から具現化したものは、マークの持つそれよりはるかに力があると一目でわかる石であった。

畏だと断ずることができたなら、どんなに簡単だろうか。かすかな希望を与え、それを絶つことにより大きな絶望を得ようとする魔王の策だとわかっていても、偽りの希望だという事ができなかった。

「あれが聖石……」

「そうだ。この世で唯一残った聖石であり、貴様らが憑代を救う最後の手段だ」

だが、魔王のその一言にマークは一つの事実を思い出す。そしてそれに導かれるかのように、もう一つの神器の存在を思い出してしまふ。それは偽りの希望を本物にする策であり、策を超えた奇跡を起こす術であった。

しかし、その策を見抜かれてはいけない。何が起こるか知られていては、その効果も半減してしまうからだ。

(俺の念話も危険か……魔王に隠れながら、みんなに作戦を伝えられるか?)

それでも、その可能性に気付いてしまったからにはやるしかない。失敗したときの代償は、その命で支払えばよいのだから。

(もとより、あの日失ったはずの命だ。未練はない)

思考は刹那に、この言葉の真意が伝わることを祈り、マークは最後の戦いを始める。

「あれは5個あった内、魔王に砕かれなかったただ一つの聖石。そして魔王を倒す最後の手段『ファイアーエムブレム』だ」

「え？ それって……」

「ああ、確か貴様らはそう呼んでいたらしいな」

かすかに疑問を挟んだのは、マークの言葉は通じたのか確認することはできない。どうにか魔王の前から抜け出したいが、マークが戦線から離脱すればそこで勝負が決まりかねない。

「つまり、アレを奪取できれば……」

「はやてを救えるんだな！」

「くくっ、やれるものならやってみろ！」

二人の騎士が先走り魔王の持つ聖石を奪おうとするが、残念ながらスペックが違い過ぎる。なんの術式も展開していなくとも、魔王がその膨大な魔力を放出する腕を振り回すだけで騎士たちは近づくこともままならないのだ。

そしてその事実、魔王の気に召さないようであった。

「まさか、これほどの……！」

「なんだ、この程度か？ やはり最低限間引く必要がありそうだな……」

「さがれえッ!!」

その警告は、魔王の魔力に翻弄されている騎士たちに届いても実行することはできず、マークは舌打ちをこらえ前が出る。騎士たちともかくとして、広範囲魔法を使われてしまえばフェイトが危ない。

「ふん、燃えつき消えろ……」

「貫き穿て！ 雷帝の鎚『トルハンマー』！」

魔王相手に出し惜しみをするような馬鹿な真似はしないと云わんばかりに、マークは今まで使用を避けていた魔法の使用を選択する。それはマークの持つ魔法の中でも闇の魔法を除けば、最高の威力を誇る神器による雷の一撃であった。

だが、この選択は誤りであったと言わざるを得ないだろう。所詮は研究書だと、マークは闇の書の力を軽く見てしまっていた。

「業火の理『フォルブレイズ』！」

それは、この世界にきてマークが使った最高の炎の魔法であり、竜との戦争に使われた『竜殺し』の神器であった。火竜すら焼き尽くす業火は魔王の魔力を受け、マークの放った雷撃をむさぼり喰らう。

そこに均衡などなく、行われるのは一方的な蹂躪。ただでさえリンカーコアが傷付いた状態であり封印までなされているマークでは、肉体が壊れるほどの魔力を扱う魔王に抗えるはずもなかった。

数瞬後に起こった爆発はマークを飲み込み、この場で唯一魔王と対等に戦えるはずの竜が墜ちた。

「マークッ!!」

「まさか……一撃だと!」

「安心しろ、命に至るほどの手ごたえは得られなかった……それより、よそ見とは感心しないな?」

「しまッー!」

すぐさま落ちていくマークを追うフェイトに対し、そのあまりの威力に戦慄し硬直してしまったシグナム達。これだけ聞けば不覚を取ったのは硬直したシグナム達に聞こえるかもしれないが、そうではない。

フェイトは、マークを追う事で魔王に背を向けてしまったという事だ。そしてその背に、魔王の無慈悲な一撃が迸った。

そんな致命的な事態が起こっている戦場の一角でも、また絶望的な戦局に追いやられていた。

「ッー! 武器がもうもたない……!」

「こっちも術符切れよ……!」

最初に手札を切らしたのは美由希とアリサであった。しかしそれも仕方のないことだと言えるだろう。それと言うのも、比較的敵の少ないルートを選んだというのに、あまりに魔物の数が多すぎたためだ。

「こっちのフレイボムも品切れよ」

「追って来る魔物も増えてきている……!」のままじゃ支えきれないぞ!」

そして戦つものが減れば進撃速度も自然と衰え、結果追いつがる魔物が増えるという悪循環。もはや一行の命運は尽きかけていると

言って過言でない状況であった。

「まだよ……これで足止めくらいできるはず…」

そんな状況でも忍はあきらめず、マークから譲り受けた光の結界を後方に展開し追いつがる魔物を遮断する。

「忍……こんなものがあるんなら……」

「効果時間が短いのよ！ 魔物が集まって一気に来られたら防ぎきれないでしょ!？」

一時的に後方の魔物の足止めに成功するが、こんなものは気休めにもなりはしない。事実結界の効果時間が終わり、たまった魔物が一斉に襲ってきたらその時点で全滅は確実なのだ。

「恭也、すずか、土郎さんに合流して道を切り開いて！ 公園にたどり着いて迎え撃てれば希望はあるはず！」

「了解！」

「わかった！」

忍の指示に即座に動く二人であったが、土郎も合わせもはや疲労は隠しようがない。劇的な進撃は望めないだろう。

だが、そんな中一筋の希望が舞い降りる。

「アリサちゃん、すずかちゃん…」

「シヤマルさん!？」

「加勢する！」

特にザフィーラの参入には緊張を隠せない面々であったが、シヤマルと共に来たことからすぐに受け入れることができたのは幸いだったであろう。また一人戦い手が増えたことで、何とか公園にたどり着



のラスボスって奴？」

「違うでしょ？ ラスボスは中央の方だから、せいぜい中ボスか小ボスじゃない？」

思わず軽口が出たのは絶望感を拒否する逃避であったのだろうか、忍達の前に現れたのは一体の巨人。一つ目で、巨大な斧を担いだサイクロプスであった。

さらに、悪夢のような現実はこれだけでは終わらなかった。後方に残してきた光の結界がその効果を失い、魔物の大群が改めてこちらに向かってきたのだ。

「これは、流石に……」

その言葉は最後まで紡がれることは無かったが、誰もが同じ言葉を思い浮かべていた。

## 第44話 「星の光」

「油断じゃ、ないな……まだまだ闇の書に対する認識が、甘かったか……」

マークは自身のダメージを確認しながら、ゆっくりと立ち上がる。『フォルブレイズ』に焼かれたことに追加し、高所からの落下のせいかな節々が痛む。

(四肢の欠損はないし、五感も正常に働いている。……ただし、翼膜がやられたな。飛べなくはないが、空中戦は厳しい)

やはり『竜殺し』である神将器の威力は凄まじかったが、マークがただの竜でないことが幸いした。もしマークがただのママクートだったら、もう二度と立ち上がることは無かっただろう。

だが、そんなことはどうでもいい。そんなことよりも目の前に横たわる少女の方が、マークにとってよっぽど重要であった。

「……マー、ク……? 無事……だったの?」

「お人よしにも程があるぞ、フェイト……」

この期に及んでまだマークの心配をするフェイトに、マークは人知れず唇をかむ。右腕と、左足が無い。さらに腹部にも穴が開いていた。

「……致命傷だ。さすが魔王と言っべきだな。人の壊し方をよく知っている」

「……そう」

もはやマークの知る最上級の治癒魔法を用いても、今のフェイトを



救うことはできないだろう。それほど的確に、魔王はフェイトの体を壊していた。このわずかな時間すら、マークに無力感を味あわせるため意図的に作ったものだろう。

「……………」  
「……………」

おそらくフェイトにもその思惑がわかったのだろう。フェイトの謝罪には、この命をマークに背負わせてしまふ事への後悔ばかりがあった。

しかし、今回は相手が悪かった。魔王は、マークの戦闘力こそ危険視していたが、かつて彼が最も力を入れていた研究は死者蘇生であり、生命の創造なのだ。

「謝罪なんていらぬ。どいつもこいつも、俺を舐めすぎだ。仮にも神と呼ばれし竜の末裔だぞ？ 死神ごときに後れを取るつもりはない」

さらに言えば、病気は専門外だが怪我はその範疇ではない。そして治癒魔法がダメでも、マークにはもう一つの手段を持っていた。

「幸か不幸かは各々の主観によるだろうが……………」

マークは闇の魔道書と竜石を取り出し、つい一週間前に行ったばかりの術式を展開する。

「俺より先に死ぬると思つなよ？」

戦場の一角で起こった奇跡は、イーギルの感知ができないものにもまだ理解されることはなかった。

そしてその奇跡を目にしたのは、主の危機を前にし不調を押しつけてアースラから出てきた、掛け替えのない使い魔だけであった。

「フェイトちゃんー！」

《ダメッ!!》

魔王の一撃をくらい墜ちていくフェイトを追おうとしたなのはを、聞き覚えのある少女の声が止める。

「は、はやてちゃん!？」

《今追いかけたらフェイトちゃんの二の舞や！ だから、今は堪えたって!》

「ほづ、まだ外に干渉できるのか……」

まったく同じ二つの声に混乱しそうになるのはであったが、本能的にこの念話の主が魔王の策略などではなく、はやて本人であると確信する。しかし、それとこれとは話が別だ。

「で、でもフェイトちゃんがー！」

《下にはマークさんも居るんや！ あの人がいる限り、そう簡単に最悪なんて起きへん!》

その言葉には、思った以上になのはの耳にすんなりと入っていた。そもそも死者蘇生すら行える人なのだし、さらになのはの知る限り最強の魔導師で戦士なのだ。それを思えば、むしろマークが戦線を離脱した状態で魔王の前に立つ自分たちの方がよほど危険な状態だと、なのはは現状を理解する。

そして、なのはの意識が切り替わったことを確認したはやてが、この場を切り抜ける提案をする。

《私が魔王の次の行動を念話で伝えるから、協力して時間を稼いで!》

「そんなことできるの!？」

「まあ、我の魂と同じ器の内にあるのだ。その程度は可能か……」

驚愕するなのはヤシグナム達に、あるうことか魔王から肯定の意が返される。いや、それ以前になぜ魔王は今まで沈黙していたのか、この機に攻撃してこないのか？ そんな疑問を感じ取ったのだろう。魔王が自明の理とばかりに、自身の行動原理を披露する。

「十二分に力を発揮し、十重二十重に策を巡らせろ。そうして万策尽き、剣折れ矢尽き果てたときの貴様らの絶望を、我は愛でたいのだよ」  
「……趣味が悪いなんてもんじゃねーな」  
「褒め言葉として受け取っておこう」

ヴィータが露骨に嫌悪を示すが、魔王にとってその感情こそが糧となるのだ。わずかな希望を抱かせ、突き落とす。その精神的な落差をより大きくすることが魔王の生きがいと言って過言ではないだろう。だが、その傲慢ともいえる考えこそが今のなのは達を生かしていると思えば、これ以上の皮肉はないだろう。

《それでも、我らがチャンスを得られることに変わりはない。一瞬でいいから、奴の慢心を超えれば、勝ち目はある！》

少なくとも、魔力量においては天と地ほどの差があるのだ。相手が手を抜いてくれるというのならそれに越したことはない。さらにはやてがある程度でも魔王の攻撃の先触れを教えられるのなら、かすかではあるが可能性が見えてくる。

さらにここで、頼もしい援軍が到着する。

「僕たちの存在も忘れてもらっては困るよ」  
「遅れてすまない……だが、おかげで人員もある程度確保できた」  
「ユーノ君、クロノ君も!」

無限書庫から駆け付けたサポート型の魔導師であるユーノに、あま

りの魔物の数に追加の援軍を要請していたオールマイティーな戦い  
ができるクロノが、ようやく戦線に到着する。

「武装隊も、下の方の駆逐が終わり次第合流する手はずになっている  
から……」

「ほう！ 駆逐と来たか！ だがまだ甘いな……数をそろえた程度  
で、我に届くとも思っているのか!!」

「させないっ……」

個の質では魔王に届かないと判断したクロノが増援を口にするが、  
残念ながらそんなことどころにかできる相手ではないのだ。なぜな  
ら魔王とは文字通り『魔王』であり、数でおせる程度であればその  
ような名で呼ばれることは無かったのだから。

再び放たれようとする強大な魔力放出を防ごうとなのはもディバ  
インバスタ による砲撃を行うが、正面から撃ったところでは気休め  
程度にもなりはしない。

荒れ狂う魔力はなのは達を翻弄するばかりか、街を砕き廃墟とす  
る。それは撃墜された二人がいるであろう場所も含まれる。

「こんな……フェイトちゃん達は!？」

「うるたえんなよ、高町なのは……こんな程度でどうにかなる奴なら、  
もうとっくに勝負はついている……」

「我らの目標は奴の持つ聖石！ 主の警告を聞きのがすな!」

さらに濃くなっていく絶望にのまれそうになった一同を叱咤した  
のは、やはり歴戦の騎士であった。

先陣を切って突撃する二人の雄姿に、なのは達も続く。

「さあ、存分に抗い、咆えて見せろ！ そのすべてを、我がすべからく  
葬り去って見せよう!」

その姿に歪んだ嘲笑を見せながら、魔王は魔力弾による迎撃を開始した。が、魔王は気付いていた。撃墜からそれなりの時間がたつにもかかわらず、未だマークが復帰していないことに。

動きが読めない神竜の重圧は、魔王ですら無視できるものではなかった。

時を少しさかのぼり、海浜公園では土郎たちがまさに死闘の最中にあつた。土郎の反対を押し切り、一行最大の攻性戦力である恭也が単身でサイクロプスに挑み、他の面子が何十という魔物の群れが近づくのを防いでいる状態だ。

「いい加減、倒れるッ!!」

すでに数十の斬撃をサイクロプスに与えた恭也であつたが、血まみれになりつつも未だその巨体は倒れる気配を見せない。それほどまでにサイクロプスの肉体は頑強であつた。

だが、それ以上に恭也を消耗させていたのは、サイクロプスの肉を叩き切る手ごたえだ。スケルトンやゾンビとは全く違うその手ごたえに、その精神を大きく蝕んでいた。

(ああ、クソッ！ 気持ちが悪い、なんだこれは……これが本当に戦うという意味だということか!?)

そして、恭也の戦いが長引くほどに、魔物の群れを押さえる面々もきつくなっていく。特に顕著であつたのは土郎と美由希である。体力こそシャマルによって回復されていたが、すでに潰れた刃での戦闘にも限界がある。

(このままじゃ、持たない……どうにかして状況をひっくり返さない  
とー)

だから、ここですすが自分かどうにかしないとイケないと思ってしまったのも、仕方のないことだろう。この激戦の中、拳を武器とするザフィーラを除き唯一十全の攻撃力を維持していたのは、『マーニ・カティ』と言つ通常の武器とはかけ離れた精霊の加護を得た剣を持っていたすずかだけだったのだから。

「シャマルさん！　ここを少しだけお願いしますー！」  
「すずかちゃん!?!」

しかし、すずかは無理をした程度で魔物の群れを殲滅することなどできないことをすっかり理解していた。なら、何をすればこの状況を覆せるのか？

(あの二つ目を討つ！　それが最速の方法のはず！)

たった一体で恭也と戦うサイクロプスを討てば、当初の予定通りの戦場に戻るはずであると考えれば、これ以上の手があるとは考えられなかった。

故に、最高最大の一撃をその巨体に加えるためすずかは駆ける。狙うべきは、皮膚の強度など一切関係ない、すべての生物の急所。

(あの目を貫くー！)

夜の一族の身体能力を余すことなく用いた一撃は、神速には及ばずとも、常人の速度をはるかに超える。だが、いかにすずかが速かろうと、その一撃はあまりに愚直過ぎた。

その時魔物が何を考えていたのかはわからないが、自身に攻撃を加える恭也を無視し、その巨大な斧をすずかに向けたのだ。

「  
」

死んだ、と思った。もはや駆ける足は大地を離れ、刃は突き出されていたため回避などできない。自ら斧に向かって突撃するような形で、短い生涯に幕を下ろすことになってしまったと、そう思った。

そして、その次の瞬間、風が吹いた。

海からの風ではない。かといって街から吹いた風でもない。ではどこから……そこまで考えたときに、すずかは靴底に着地の触感を感じる。斧はすずかを捉えられず、助かったのだと理解し振り返ると、そこには頭部を失った魔物が倒れ伏していた。

「……え？」

「ッ呆けている暇はない！ 戻るぞ！」

「は、はいっ……」

一部始終を見ていたはずの恭也の一声で我に戻り、再び魔物の群れと対峙するために走り出す。その身に残る不思議な感触については後でマークに聞くことに決め、刃を構えたその時、ついに待ちに待った援軍が到着した。

「もう大丈夫ですよ。後は俺たちに任せてください」

その言葉に続く数十人の武装局員の登場に、アリスを筆頭に手札を失っていた面々が崩れるように座り込む。そして順次撃破されていく魔物たちを見て、ようやく剣士たちもその肩から力が抜ける。

まだ戦場にいることは各々理解しているだろうが、それでも死地から抜け出し気が抜けてしまったのは仕方のないことだろう。いくら彼らが強かったと言っても、彼らは正式な訓練を受けた兵士と言っわけではないのだ。

「じゃあ、僕らにできることは終わりかな……」

その眩きは、翠屋から海浜公園を駆け抜けた皆の気持ちを代弁していた。魔導師たちの戦場は空にあり、彼らにはそこにたどり着く術がないのだ。もちろん、術があったとしても今の士郎たちでは何の役にも立たないであろうが……

そんな士郎たちの視線の先では、ザフィーラはすでに戦場へと飛び去り、シャマルが応急処置を受けている。局員は魔物の討滅や護衛も行き、忙しそうに走り回っている。

そこへマークからあるものを預かった狼がやってくるのは、もう少し先の話である。

「紫電一閃！」

「フランメ・シュラーク！」

シグナムのもつレヴァンティンが、ヴィータの持つグラーフ・アイゼンが炎を纏い、魔王を挟み込むように放たれる。だが、その攻撃も今までと同じように、片手間のような動作で防がれてしまう。

「こんなっ……」

「クッ！」

「チェーンバインド……」

シグナム達が弾き飛ばされるタイミングに合わせて、ユーノが拘束を行おうと魔力の鎖を打ち出す。しかしこれも障壁のため魔王の体には届かない。

これになのはやクロノの砲撃が加えられるのだが、やはり障壁により防がれる。こんな戦いともいえない状況が、なぜか続いていた。

「……………」

そう、魔王はなのは達をあしらいながら、間違いなく別の人物を警



戒していた。散発的な反撃も敵を仕留めるといつ意思是感じられず、ただここに居ないマークに対して隙を見せないことを重視しているのが、はた目からもわかるほどだった。

「それほどまでにマーク・テスタロッサが恐ろしいかっ！」

「……誰にモノを言っている。我は魔王だぞ！」

《広域！ 横やっ！》

シグナムの安い挑発に魔王が乗る。魔王にとってマークは、一度ならず二度までも自身を封じた怨敵なのだ。それを警戒して当然と思う一方で、たかが一個人を警戒しなればならないことに屈辱を感じていた。

それゆえの爆発は突然でこそあったが単調であり、はやての警告もあり難を逃れることに成功する。横薙ぎの広範囲攻撃は何もとらえることなく霧散し、その魔王の背をアクセルシューターが打ち抜く。

「ちくちくと……！！ 闇に染まれ」

《ッ！ 全力離脱！》

はやてが慌てて魔王の意思を読み取り警告を発するが、それでも使用魔力の上限を無視してしまえば魔王の攻撃の方がなのは達の離脱速度より早い。

そして、そのことを勘と経験から理解したなのは達は、極端な方法を選択する。

「シグナムさん！ 道を作って！」

「わかった！ レヴァンティン！」

強敵を相手取る一体感は、最低限の言葉でお互いの目的を理解できるまでに高まっていた。それが故に、なのはの呼びかけにシグナムはポーゲンフォルムを展開し、最大の魔力を持って矢をつがえる。

「翔けよ、隼！」

「遅い、デアボリック・エミッション」

やはり初動が速かった魔王の方が術式の展開が速い。魔王を中心に魔力が全方位に放射されるが、それにいまさら動じるほどシグナム達も柔ではない。

「シュツルムファルケン！」

「行くよ、レイジングハート！」

膨大な魔力が迫りくるのにもひるまずに放たれた一撃は、一条の光となって魔王への道を示す。それに続くのは突撃砲撃仕様のレイジングハートを構えたなのはだ。

それは拡散する一撃に対して、一点に集中した杭のような一撃であった。なのははシグナムの一撃に導かれ、ついに魔王に接敵する。

「この、小娘があ!!」

「エクセリオン」

この時初めて、魔王がなのはに目を向ける。それはたかが人間如きに自身の攻撃が抜かれた驚愕か……ともかく、ここに至りようやくなのはが魔王と竜の戦場に足を踏み入れた。

「バスター！」

ゼロ距離砲撃により炸裂する魔力はなのはすら飲み込む爆発と化すが、それでも魔王を倒すにも、聖石を奪うにも至らない。否、正確には瞬時に回復され、ダメージの欠片すらも残らなかった。

「そんな……」

「……ひょっとして、怒らせただけで終わりってことか？」

そう、いかに戦場に立つことが叶おうとも、未だ魔王との力量差は歴然。この一連の攻撃の後に残ったのは、憤怒に染まる魔王と言う絶望の具現であった。

そしてその目がなのはを標的と定めたとき、ようやくマークの反撃が始まる。

「ッー」

それは魔王がなのはを潰そうと魔力を放出しようとした直後、その背を取るように転移光を伴い現れた影が雷の大剣をもって魔王を襲う。

突然の不意打ちに、攻撃に回そうとした魔力を強制的に防御へと回す。それは確実に肉体への負担となり腕から血がにじむが、所詮その程度でしかない。

「っのっ……っ」

しかし、その攻撃以上にそれを放った者への驚愕が魔王の肉体を硬直させる。それはつい先ほど、墜ちたはずの少女であった。

「貴様……っ！」

「フェイトちゃん!？」

「バルディッツシュー!？」

周囲の言葉を完全に無視し、カートリッジを使用し、更に一度は失った右腕に力を込め圧力を上げる。そしてついにその一撃は、ただマークでないというだけで力を抜いた魔王の障壁にひびを入れる。

「なっ!？」

だが、その程度はできて当然なのだ。魔王によって一度は砕かれた腕であったが、今はマークの持つ竜石のエネルギーを込め造られたものなのだ。その持つ力が、見た目通りだなんて道理はない。

そして当然、この一撃でマークの反撃が終わる道理もまた無かった。

『月光』

かすかに聞こえたマークの声は遙か下方。ビルの屋上に立つマークの持つ槍では空にいる魔王に攻撃は届かないはずだった。

しかしマークの持つ神器はその理を凌駕する。それは古より伝わる始まりの神器の一つ。万物を貫く槍『グラディウス』。それは数ある槍の神器の中で、数少ない投擲を想定したつくりをしたものであった。

「くそがああああ!!」

魔王は余裕などかなぐり捨てて対物理・対魔法の障壁を合わせて四つ展開するが、その程度で止まる神器では、奥義ではない。瞬く間にその防御を貫き、障壁を展開していた右腕を消し飛ばす。それは精密な障壁の制御により攻撃をそらした魔王の妙技であったが、同時にこのような大雑把な攻撃でマークの反撃が終わるとも考えられなかった。

(次はごっから………)

自動的に再生が行われさらに魔力が搾り取られる中、マークを警戒する魔王であったが、追撃はマークからではなく、またしても転移された存在から行われる。

「旅の鏡だっ!」

それは攻撃に意識が行っていたときに挟まれるからめ手の類であり、はやてを救おうとする者たちの切り札であった。そしてついに鏡からのばされた手が、聖石をつかむ。

それと同時に、魔王を封印すべくこの戦場にやってきた少女の音が響く。

「はやては、あんたみたいのに絶対渡さないんだからっ！」

「わたしたちの友達は、返してもらいます！」

アルフの背に乗って出てきたのはアリサとすずか。その手にあるのは聖石のレプリカだ。さらにその瞬間に合わせるようにマークによって戦場にふりまかれた百近い数の「コピー」が、シャマルの手にあるオリジナルと共鳴しその力を増幅させる。

シグナムやヴィータ、遅れて戦場にたどり着いたザフィーラもばらまかれた聖石を手に祈りをささげる。

「  
」

もはや声にならない魔王の絶叫は、なのは達に勝利を目前のものと錯覚させるには十分なものであった。

そう、思い出してほしい。この聖石を利用した封印は、魔王が最も警戒していた事象であり、聖石はつい先ほどまで魔王の手にあったことを。

「え？」

その呆然とした空気が漏れるような声を出したのは、誰だったのであろうか。だが、それも仕方のないことだろう。あとわずかで封印がなされると信じた直後、そのオリジナルの聖石が砕け散ったのだから。

そしてオリジナルに共鳴していたがゆえに、レプリカ・コピーも同時に碎け散る。それは最後の希望が潰えた瞬間であった。

「と、そう考えるほど我は馬鹿ではないぞ!!」

そう、魔王を知る者にとって聖石が畏であることは明白であったのだ。確かにレプリカやコピーの存在は魔王にとっても想定外であっただろうが、その大本が掌握された状態ではそんなもの誤差と同じだ。

だから、マークがそんなものを切り札としない事も、魔王にとっては確信を持てることだった。

「なら、防いで見せるー!」

「言われずともー!」

傷付いた翼で魔王の上を取ったマークは、最後にして最大の一撃を準備していた。それはトルハンマーの時とは違い、封印を解除した正真正銘の本気の一撃……否、五連撃であった。

「奥義『流星』」

本来剣士の奥義であるそれは、神速の五連撃をたたき出すもの。それを魔法に応用したマークは、五つの光を背負う。

「星の光に抱かれて消えろ、至高の光『アーリアル』」

「深遠なる闇よきたれ『ナグルファル』!」

静かに詠われた詞により、光はまさしく流星のように魔王へと殺到する。それに対し、魔王の呼び出した闇はその光を激しく喰らい……最後に光が爆ぜた。

そして訪れた静寂。その沈黙は、戦いの結果を見守るだけでなく、はやてが無事に解放されたことを祈るものでもあった。

しかしマークだけは違う。この一撃が決まっていれば、はやては跡形もなく消し飛んでいるし、生き残っていれば、この戦いにマークが負けたという事だ。

(もう、魔力はほとんどない……もし、生きているならば……信じさせてくれ)

そして光が収まり、視界が戻ろうとしたときに、その答えが出た。それは激痛と共に、マークの敗北を告げる一撃であった。

「じ、ふっ……！」

《マークさん!!》

「流石に、今の一撃は効いたぞ……瞬時に回復するはずの傷が、未だ癒えぬほどにな！」

翼が傷付き、機敏に動けないマークの胸を貫いたのは魔王の右腕。心臓こそ逃れたが、鮮血を吐くその姿は、はた目から見れば致命傷とも呼べる傷であった。

「だが、我はいまだ倒れていない……切り札を切り損なった貴様の負けだ!!」

「あ、ああ……俺の負け、だ……そして……」

お前の勝ちだ。

その呟きは、魔王に向けられたものでないことは明白であった。そのことを魔王が訝しむが、気付いた時にはもう遅い。

よく、あれだけの言葉で気付けたな。

光が集う。それは魔王がふりまいた莫大な魔力であり、マークが放った神器の一撃に使用された魔力である。

そして、この瞬間までよく耐えた。

本当にわずかなヒントしかなかった。それは炎の紋章こそ切り札だという言葉と、かすかな期待。それだけで正解を導き出した少女は、やはり英雄の器であるとマークは確信する。

もう、我慢する必要はない。全力で、その想いのすべてを叩きつける！

そして、ついに魔王がその真意に気付く。それはユーノの隠蔽の結界に包まれた、マークたちの真の切り札。

「スターライト」

カートリッジが排出され、さらにその輝きに力が宿る。しかし魔王の腕は未だ神竜の胸を貫いており、放すことはできない。この手を離せば、その時こそマークの切り札が切られるだろう。

(まさか、この時を見越していたとでも言っつのか!?)

切り札を切らない事で魔王の注意を引き、今もまた、切り札を切っていないが故に魔王はこの手をはなすことができないのだ。

「ブレイカー！」

炎の紋章により、その意志を力に変えた炎を纏った一撃が二人に迫り、飲み込んだ。



## 第45話 「英雄の誕生」

星の光が迫る中、それは必死で打開策を考えていた。その思考はかつてないほどの回転を見せ、さながら自身も含め世界が止まっているように感じるほどであった。

まず第一の候補が、あの光を防御しきる事であろうか。

（不可能だ。あの光には、憑代と我を切り離そうとする意志が込められている）

より正確さを求めれば違った表現になるだろうが、概ねあっているため今回はそれで良しとしよう。

防御をしようにも、直前に受けた神竜の魔法を迎え撃ち、障壁で防ぎ、相殺しきれなかった部分をダメージの即時回復と言う形で凌ぐのに、瞬間的に使用できる魔力をほとんど使いつくしてしまったのだ。もはやあの光を防ぐことは叶わない。そして、切り離されてしまえば、肉体からはじき出されてしまえばそれに生き残る道はない。器を失った魂は、光に焼かれ消滅するほかないのだ。

では第二の候補として、あの光を回避するべきであろうか。

（可能だ。ありったけの魔力を使えば、憑代と切り離される前に攻撃範囲から逃れることはできる）

だがそうすれば、今この手で貫いている神竜を解放してしまう。温存されていた神竜の真の切り札が使われて、憑代ごと消し飛ばされてしまうだろう。しかしこの選択には多くの利点もある。

（憑代を救えなかったという傷が、奴らには残るだろう。そして、我は闇の書の機能を持って転生ができる）

それが闇の書のほとんどの機能に乗っ取っていたからこそその選択であり、この場では最善の選択であるはずである。だがしかし、最善だからと言って誰もがその選択ができるとは限らないし、最善とは言え正しいとは限らないのだ。

(この選択は、魔王である我が神竜に敗れるという意味だ……それだけは、断じて許せん！)

それは今までの様な封印とは異なり、完全に敗北するという事だ。折れると表現してもいい。魔が竜に屈するともいえよう。そうやってしまえばいかに魂が無事でも、精神が健在であろうと、まったく意味がないのだ。

ならばどうすればいいのかを考え、考え、考え抜く。そして思考の果てに、魔王はついに答えを得る。

(そうだ、憑代を捨てればいい！)

あの光は、八神はやてを魔王から救うという意思が込められているのだ。だから、その肉体を捨てればその効果を十全に発揮できなくなる。

神竜の胸から憑代の腕を抜けば、奴は切り札を切れるようになるのだ。ならば決ったまま捨て置けばよいのだ。

ではその捨てた後はどうするのか。

(簡単だ、別の体を使えばいい！)

幸いにも、代わりとなら器はすぐ近くにある。それは自身の内に、皮肉にも、はやてを助けるために用意されたものだった。管制人格が、最愛の主を助けるための器となるはずのものであった。

(まだまだ……まだ終わらんぞ!!)

魔王が決断を下したまさにその時、ついに星の光は竜と魔王の二人を飲み込んだのだった。

なのはの放ったスターライトブレイカーは、結界を破壊しないよう上から下への攻撃であったためか、はた目からはさながら天罰にも似た光の柱に見えた。が、その中身ははやてを魔王から解放することに力を注いでいたため、見た目ほどの破壊力があるわけではなかった。

その証拠に、星の光が薄れていく先にあったものは、砲撃にのみこまれた街は変わりなくそこにあり、直撃を受けた人物も傷を負った様子は見られなかった。

「マーク！」

「はやて！」

だが光の中から出てきたものは、見守る者たちの予想を大きく裏切るものであった。魔王を宿していた八神はやてと、それに貫かれていたマークはいい。しかしそこにはさらに、漆黒の剣を持ち二人に襲い掛かる銀の長髪の女性の姿があった。

「だ、誰!？」

「あれは……まさか管制人格!？」

その存在がなんなのかを最初に看破したのはシグナムであったが、流石になぜあのような事になっているのか……まるでマークが管制人格からはやてを庇っているかのように見えるのかまでは理解できなかった。

そんな混乱をものともせず、真っ先に動きを見せたのはやはりフェイトであった。それもそのはず、フェイトからしてみれば管制人格は全くの未知の存在であり、マークやはやてに切りかかる敵でしかなかったのだから。

「マーク！ はやて！」

「ちっ！ 邪魔を!!」

「フェイトちゃ、っぷ！」

フェイトが割って入ったことで発せられた言葉に、この場にいる面々はおおよその事態を把握する。はやてが自身の肉体を取り戻し、銀髪の女性の中に魔王が居るのだと。

しかし自体が把握できたから、はやてが魔王から解放されたからといって安心するにはまだ早い。未だ魔王は健在と言えし、マークは胸を貫かれ文字通り血反吐を吐きながら戦っているのだ。

「いい加減……しっしっしっ！」

「ここまで傷付いた貴様を前に、退くわけがなかるっ！」

さらに言えば翼にダメージが残り、はやてを抱えた状態のマークでは、いかにフェイトの援護があろうと魔王の攻撃をいなし続けるのは難しい。だが、ここにいるのはその二者のみではないのだ。

「加勢するー！」

「いったんさがって治療でも受けてるー！」

戦場に割って入るクロノと剣と鉄槌の騎士に魔王は露骨に嫌な顔をするが、すぐに驚愕を表す表情に変わる。

「部品如きが、なぜ我に逆らえる!?!」

「知った事か！」

《私が切断を行った》

その声にこたえたのは、闇の書の管制人格であった。元々闇の書の完全起動の遙か前に起動可能な守護騎士プログラムは、数多あるプロ

グラムの中でもかなり独立性が高いものであった。それに加え、管制人格がはやてを救うためにいろいろ準備していたこともあり、機能の一部を切り離すことに成功していたのだ。

そして、それを為すために管制人格は闇の書の本体、すなわち魔王と共にはやてから切り離された肉体にとどまることになってしまったのだ。

《魔王フォデスが侵入しその制御を乗っ取ったことで、防衛プログラムは失われた》

魔王と言う特大の異物を排除しきれなかったというのは、すなわちそういう事だ。そのおかげで管制人格もいくつかの機能をはやてに残すことができたのだから、皮肉としか言いようがないが。

それ以外にも利点はある。いくら魔王とはいえ、複雑化した闇の書のすべてのシステムを把握することは叶わず、また防衛プログラムが健在だった際は自動的に行われていた事象も、すべて魔王自身が行わなければならないなくなったのだ。その誤差はたとえコンマ数秒かもしれない。決して無視できるものではない。

もちろん良い事ばかりではない。

《今までの暴走では無秩序に扱われていた力が、魔王の意思の元に統一されたともいえる》

今の魔王のスペックは、闇の書の暴走とは比べ物にならないと思っ  
ていいだろう。その最たるものが、今も魔王が握る漆黒の剣である。  
今までなら広範囲攻撃に使用されていた魔力のすべてが濃縮された  
一振りには、たとえ竜の鱗であろうと容易く切り裂くことが可能である  
う。

それらを踏まえて、管制人格は己が願いを言う。

《勝ってください。滅してください。わたしは、これ以上主を傷つけ

ることをしたくない》

その言葉と共に魔王の、否、管制人格のほほに赤い雫がこぼれる。肉体の制御はすべて魔王が握っているにもかかわらず流れ落ちたそれには、いったいどれほどの願いが込められていたのか。

その想いを受け止めそれぞれの武器を構える戦士たちの影に、少女は静かに涙を流す。

「わたしのことは助けておいて、自分は消えようなんて、そんなん認められるわけ……。」

「現実問題として、倒すことすら困難だと自覚しろ。認めたくないからと言って目をそらせば、被害は増すばかりだぞ?。」

マークの言葉に歯噛みするはやてであったが、その実誰よりも現状を理解していたと言って過言ではない。一時とは言え魔王に肉体を乗っ取られ、その思考を垣間見たのだ。

だからこそ、はやても決断しなければならなかった。

「抜くで?。」

「ああ」

はやはその感触に顔をゆがめつつも、マークの胸からその腕を引き抜く。さすがのマークもこれには激痛をこらえ歯を食いしばる。だがそれも一瞬。即座に歪んだ胸部の鎧を外し、剣を構える。

「ちよっ! 戦う気なん!?!」

「当然だ。まだあいつらに魔王の相手は早い」

とは言えマークとて重症だ。構える剣もいつものような重量武器ではなく、片手で操れる重さの神器である氷剣『アウドムラ』だ。戦力がおちるわけではないが、マークの手に馴染んでいるとは言い難

い。

「……だめや。やっぱりそれは私がやらなアカンことや」

「なに……!？」

はやてに押されたマークは、簡単にバランスを崩す。そしてその隙にはやては自身に残された闇の書、否、夜天の書の欠片の機能を使い飛翔する。細かい制御まではできないが、シャマルに魔法を習っていたため、簡単な事ならばできるのだ。当然はやてだけでは戦闘など夢のまた夢だが、ここには心強い味方がまだ残っていた。

「頼むで、先輩！」

《だから僕は先輩ではないと……まあいい、せつかく魔王に一矢報いるチャンスなんだ。全力でやらせてもらうよ》

それは魔王の魂の片隅に残っていたかつての被害者のひとり。管制人格が自身の代わりに据えた、魔王からはやてを守ることに力を注いだ同志であり、魔道のプロフェッショナルだ。そして闇の書の中にあつたことも合わせ、残り少なくなったはやての持つ書の機能を使う事に不足はない。

「風刃」

その魔法は、魔王と戦うための神器の一つであり、マークの扱える最高位の風魔法。はやては書にこの魔法が残っていたことに感謝しながら、剣十字を模した杖を振るう。

「みんな、下がって！ 『エクスカリバー』！」

魔王と戦っていたフェイト達の間をすり抜け、碧い風が奔る。だがはやての練度が低すぎるためか、それとも先輩の補助が下手なのか、

十全の効果が発揮されることは無く、魔王の障壁の前に簡単に四散する。

「……まずは感謝を……あなたが私のもとに来てくれたおかげで、わたしは新しい家族に出会えた」

《主はやて……》

戦闘に突如割って入り語り始めたはやてに、管制人格が答える。

「もう一つ……わたしを魔王から守ってくれたことも、こうしてわたしがわたしのままでいられるのも、あなたのおかげや」

一度は突き放され、出遅れたマークが戦場に戻る。それにより、魔王も軽率な事ができない硬直状態が出来る。

「そんな幸運を送ってくれたあなたを、もう呪いの魔道書だなんて呼ばせへん……」

先程の砲撃で魔力を使い果たしたなのはや、アルフに乗ったアリサとすずかも、戦場の中心から僅かに離れてこの状況を見守る。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

《ありがとうございます……「じゅいませす……」》

はつきり言って、もはや完全にはやてとのつながりを断たれた今の闇の書にとってこの言葉は大きな意味を持たないだろう。しかし、管制人格にとってこの言葉はどれほどの意味を持つだろうか。だから、この言葉ははじめであり、誓いだ。

「……あなたを、滅します」



《はい……お願いします》

その決意を聞き届け、まだ戦える戦士たちが改めて構えを取る。だが、それらの決意と同等の感情を出すものもやはりいたのだ。

「不快な……」

せめて心安らかにと願う者たちのなにもかもを嫌悪の対象とするのはやはり魔王だ。そしてもう一人、よい感情を持たないものが居た。

「結局、こつなるんだな……」

かつて救えなかった者たちを想い、また救えなかった自身に嫌悪さえ抱くのはマークだ。誰よりも早く切り捨てなければならぬと説いた彼こそが、誰よりも救いを求めていたというのも皮肉なものだろう。

だが、事実として管制人格を、リインフォースを救う手段はもはや存在しないのだ。一個の生命として存在していない彼女は、もはや魔王から切り離すことはできないほど同化してしまっていた。だからせめてとマークは願い、力を解放する。

『せめて、その精神が残るうちに終わらせよう。もし次があるのなら……否、無粋な仮定は止めておこつ』

「マーク!？」

フェイトを筆頭とする驚愕は、巨体へと変化したマークに対するものであり、その発する強大な力を感じた故だ。

碧い鱗に覆われたその身、天空に座すその姿は、単体での最強の具現化に相違ない。

「これが……竜……」

『そうだ。これが、かつて世界を二分した竜の力だ！』

「喰らって、たまるものかッ……」

咆哮と同時に高まる力は光となり魔王を滅せんと迫るが、魔王の全力の回避行動により、半身を消し飛ばすのにとどまる。

『逃れられると……！』

『待ったあ！ 今が続くと結界が持たないよ！ 今結界が途切れたら街がとんでもないことになっちゃっ！』

更に追撃を行おうとしたマークをエイミィが止める。確かに結界を破壊してしまえば、被害は免れないだろう。だがこの躊躇は、まぎれもない隙となってしまう。

魔王はこのわずかな時間に最後の切り札を切る。それはかつてないほど巨大な召喚であり、最強の死体。その物体は、竜化したマークの倍以上ある巨躯であった。

「いずれ再生させる予定であったが……仕方あるまい」

「う、そ……なんて大きさ……」

それは、ある世界において恐怖と絶望を振りまき倒れた魔王の肉体。それを魔王はゾンビとして呼び出し、操っているのだ。その圧倒的な存在感は、とてもじゃないが死体とは思えなかった。

『見かけ倒しの腐肉だ！ 恐れる必要などない！』

マークが檄を飛ばし腐肉と化した巨躯と対峙するが、自由にプレスを使えないのが痛い。結界を傷つけないよう慎重な戦いを強いられることになる。

これにさらに人間サイズの魔王の援護までつけば、マークとて危う

い。

「させない！」

「シグナムは魔王を！ わたしとヴィータ達はあのデカイのをやったる！」

フェイトが魔王とマークの間に割って入り、はやてが腐肉に広域魔法を放つ。残った者たちもそれぞれが適した相手に向かっていくが、ここに例外がいた。

「わたしは……見てる事しかできないの？」

「なのは……」

それは切り札を既に使用し、魔力もほぼ使い切ってしまったものの嘆きであった。そして、嘆いたままで終わらない者こそが、真に英雄と呼ぶべきものである。

「……集めてみせる……さっきので足りないのなら、もっと……もっと！」

もともとスターライトブレイカーの最も大きな利点は、自身の魔力だけでなく周囲に散らばった魔力を使用する点である。ならばより強く、より広くから集めることができれば、決定打に足る一撃をはぐくむこともできるはずなのだ。

「だからお願い……力を貸して……」

その祈りは相方であるレイジングハートに、そしてその奥にある秘宝『ファイアーエムブレム』に。

「集え、数多なる星々の輝きよ……」

その祈りに答えるかのように、レイジングハートがゆっくりと力強く輝き始める。だがその輝きは、なのはの眼下で戦う者たちにも届いてしまう。

「くっ！　まだ撃てるというのか!？」

「邪魔は……させないー!」

砲撃のチャージに気付いた魔王がそれを止めようとするのを、フェイトが食い止める。ここに至り、フェイトは速力・膂力共に管理世界トップクラスを実現していた。

だがそれも長続きはしない。フェイトの本来の実力が、マークの創った腕について行かないのだ。それ以前に、フェイトの怪我は無かったことになったわけではない。今まで気力でカバーしていたが、それもはや限界である。

「いくらなんでも、初陣でこれはないやろ……!」

『ぜいたくを言うな……敵は確かに強いが、味方もこれ以上ないほど強力なのだぞ!』

マークとはやてもなのはの変化に気付いて、腐肉が上空へ攻撃しないように気を付けていた。愚痴を言いつつもはやての攻撃は強力で、マークの詰めは確実に腐肉を切り裂いていた。

だがそれも長続きはしない。はやては魔王に乗っ取られていた時のダメージがあるし、何より今使っている魔法は、夜天の書の切れ端を集めて無理やり使っているようなものだ。マークにしたって、竜化して胸の傷がふさがるわけではない。精神力で補える時点はとうに過ぎ死力を尽くしている状態、いつ限界を迎えてもおかしくないのだ。

『だからと……』

「諦める気なんて……」

「欠片だつてないんだから！」

シグナムの連結刃が奔り、ヴィータの巨大なハンマーが腐肉を打つ。クロノが各員の攻撃をつなぎ、ユーノとザフィーラが敵の攻撃を妨害する。

そんな中なのは集束は進み、ついには臨界を迎えるがまだ、止まらない。限界を迎えた肉体がきしむような感覚を覚えるが、なのははさらなる集束を続ける。

「限界？ そんな物知らない……！ 絶対……負けられないんだから！」

それは本能的な直感であっただろうか……なのはは誰に言われるまでもなく、今撃てば魔王を倒すことはできても、滅するには足りないと理解していた。求める一撃は、転生機能をも凌駕する究極の一撃。

そして次の瞬間、ついになのはの意志に秘宝が応えた。

「まさか、これは……！」

『覚醒……炎の紋章が応えたのか!？』

魔王と神竜の驚愕をよそに、もはや限界に至ったかと思われた集束が、さらに加速しながら圧縮率を高めていく。

「させるものかっ……」

魔王が文字通り死力を尽くしフェイトを振り切りなのはに迫るが、覚醒を足したなのはに向かうには遅すぎた。

「スターライト」

静かに言葉を紡ぐその姿は……

「ブレイカー！」

まさしくマークが望んだ英雄の姿そのものであった。

「終わった……の、かな？」

「……たぶん……うっん、きっと」

戦いを終えた戦士たちが、無事だったビルの屋上で腰を落とす。唯一重症だったマークのみがアースラの医療スタッフに囲まれているが、竜化したときの生命力の差のせいか、もうほとんど傷はふさがっているとのことだ。

『闇の書の転生はこちらでは確認できなかったよ。ただ、本当に消滅したのか、それとも逃げられたのかまではさすがにわからないね』

「そうですね……」

魔王なんて規格外な存在を宿していた以上、断定はできないとのことだが、それでもやるべきことはやったのだと、はやては寂しそうに笑う。

戦いの後は着々と修復され、元の街並みを取り戻しつつある。その作業が終わり、境界が解かれるまで、彼らは何をすることもなく、その場に佇み続けていた。

## 第46話 「いまだ見えぬ明日」

「それじゃあ、まずはフェイトの体について語ろうではないか」  
「いえ、なんていうか……言いたいことはわかるのだけど……」  
「もうちょっとマシな言い方はできないのか？」

マークの微妙な言い回しに、リンディが困ったように、クロノが呆れたように文句を言う。ただマークはそのような感情に気付いているだろうに時間ももつたいないと、特に言い換えることはせず話を続ける。

魔王との戦いから一夜が明け、ようやく戦闘に参加した面子が話のできる状態に戻ってきたのだ。その全員参加の話し合いの前にこうしてフェイトやリンディ、それにクロノにエイミィだけで話し合いたいとマークが持ちかけたのだ。

「とにかく認識を統一させよう。まずは管理局が、俺らが撃墜されてからをどのように把握しているのかを知りたい」

「……マーク君に続いてフェイトちゃんが墜とされて、マーク君がそれを治療し戦線に復帰、ってだけだね。死者蘇生すら行える存在なら、手足の一本や二本再生させることができても不思議じゃないって」

「やっぱり……何をしたかはちゃんと見ていたってことだな」

マークからしてみればできれば見られなくなかった術式だったが、あの時躊躇していればフェイトの命は無かったのだから仕方がない、と割り切る。それ以上に……

「アレを再生とみている限り、解析するのは不可能だし……」  
「……声に出てるよ？」  
「おや、失礼」

マークはエイミーの忠告にわざとらしく口をふさぎ、今のが失言であつたことをアピールする。それは言外に『この場を不用意な発言をしておけない場所』にしたいという提案。すなわち取引がしたいという事だとリンディは結論付ける。

「そんな気遣いはいらさないわ。それとも私たちは信用ならない？」

だが、リンディはマークの配慮を切つて捨てる。マークからしてみれば後々迷惑をかけないようにと云つ配慮なのだろうが、もう遅いのだ。少なくともリンディ達はマークを切り捨てるといふ選択肢を取ることができないほど、マークに情がわいてしまっている。

「……好意的に見ているからこそなんだがね。まあいい、その代わりに後で文句を言つなよ？」

「もちろんよー。あ、でも場合によっては愚痴ぐらい付き合つてね？」

マークはさも仕方なさげに言うが、顔にはわずかに笑みが浮かんでいる。リンディもニコニコしているし、これでは最初からこうなることは織り込み済みだったようにも感じる。

「順序立てて言うつとだな……フェイトの治療を行ったが、俺の行った治療は特殊なものであるから今後が予測できない。よつて『プロジェクトF』の情報を開示してもらいたい。と言つのが一つ目だ」「確かに面倒なことになりそうね……でもプロジェクトFは……」

リンディはマークの一言で笑顔が一瞬で真顔に戻り、次いでフェイトを軽く窺う。このプロジェクトはフェイトにとってあまり良いものでないのは、周知の事実であるからだ。

しかしマークからしたら、過去よりも今の方が重要だった。いやそれ以上に、プロジェクトもフェイトを構成する一部として、見るこ



ができているのかもしれない。

「フェイトの手足も、正確に言えば『再生』ではなく『創造』だ。形は合わせているが、他人のものをつなげたと言った方が正しいし……」から説明しないとダメか」

マークは簡単な説明をしたが、周りの反応を見て途中で断念した。そして『エーギル』のところから解説を始める。もちろん伏せるべきところは伏せたが、それでも結構な時間を喰ってしまう。

「要するに、今のフェイトさんの腕はマークさんの『エーギル』と言う生命エネルギーでできていて、それがもたらす影響がわからないからプロジェクトの情報を用いて最適化したい……これでいいかしら？」表面上はな。肉体全部を作れば『モルフ』と言う存在になるんだが、一部だけというのは俺も初めてやったから」

リンディがまとめたことに、マークが一言を付け足す。ただし今リンディが言ったことも事実なので、まず裏側の理由が漏れることはないだろう。

「本命は、検査の名目で定期的に術式を使う理由を作る事。俺の創った手足が成長しないことを隠すためだ」

「成長しないという事は、ひっくり返せば老いないという事……擬似的な不老不死まで可能だなんて思ってもいなかったわ」

リンディはマークが隠そうとしていたことの予想以上の大きさに、流石に頭を抱える。フェイトも自身の体の一部が不老となったことに驚きを隠せず、不思議そうに動かしたりなでたりしている。

「って、フェイトに話してなかったのか!？」

「話すような時間があったと思ったか？」

フェイトの驚き様からそう察したクロノが怒鳴るが、マークに呆れるような声音で返されてしまう。それでもこんな重大な事を勝手に、と言っ思いが消えていないクロノをみて、恵まれているとマークは感じってしまう。

(不服なら切り落とすか?)

ついそう言ってしまうようになったのをマークは堪え、当事者であるフェイトに向き直る。が、何かを言う前にフェイトが手足の仕様について問いかける。

「これって、マークで出来てるってこと?」

「まあ、そうとも言えるな」

「……なら、この腕が感じたことが、マークに伝わったりする?」

「それは流石に無い筈だけど……」

「そっか、なら大丈夫だね」

それだけで納得してしまうフェイトに、マークは少し心配になる。もう少し危機感を持った方がいいんじゃないかとも思うが、これがフェイトの信頼の証だと思えば注意もしにくい。

「……まあいい、それで資料はもらえるのか?」

「そうね……部外者に見せるのはまずいから、管理局に研究員として所属することにすれば何とか、ってところかしら」

「それが妥当な所だろうか」

組織として厄介な前例を作らないためには、やはり建前が必要という事だろう。さらに言えば、マークにとって管理局への所属は今回の話し合いの必須事項でもあったのだ。まさにリンディの提案は渡しに舟であった。

「なるべく早く手をまわしてくれ。……今は、とりあえずの応急処置として性能を落とすか」

「え、弱くするの？」

「ひ、必要ないよー」

エイミィを筆頭に皆が不思議そうな顔をし、フェイトがなぜかその処置を行う事を拒否する。それをマークは半眼で睨みつけ、右腕の付け根あたりを軽くつつく。

「あ、ぐっ……」

「やっぱり……腕の力に体がついて来てないんだ。こんな状態が続いたら壊れるぞ？」

いくら相手が魔王だからと言って、たった一戦しただけでちよつとつつけばうすぐまるほどの激痛を感じるほどである。マークは呆れながら注意するが、それでもフェイトは目に涙を湛えながら首を横に振った。それは痛みによるものではなく、自身の無力を悔やむものだ。

「でも……これぐらい強くないと、魔王クラスとは戦えない……助けたいと思っても、何も……」

「だからと言って腕一本で出来ることもない。誰かを助けたいと思った時にベッドの上ではしょうがないだろ？」

だがそのような感情だけでは、正論を覆すには至らない。フェイトも過ぎた力は身を滅ぼすとわかっているはずである。わかっているも、それでも願いのため力を求めてしまつのが人間というものかもしれない。

今回は幸か不幸か過ぎた力を手に入れ、魔王と渡り合ってしまった。それでも力を与えることができる存在であり、また諭すことがで

きる存在でもあるマークがいた。

「あと五年の間は地力を磨け。そうしたらその力に見合った強化をしよう」

「……………わかった」

マークの説得にフェイトが折れ、これでこの話は終わるかとも思ったがそうはいかなかった。マークが創る腕は、そこまでフェイトに合わせられなかったのである。

「わたしって……………マークが再現できないほど弱いのか？」

「いや……………肉体を形づくるのに最低限必要なエネルギーを用意すると、この強度になってしまっただけ……………」

今度こそ泣きそうになってしまったフェイトに、マークはわたわたと言い訳をする。そこへアリスアが起きてきて『フェイトを泣かせた！』とマークに飛び蹴りをかましたり、なかなか騒がしい状況になっていくのだが、クロノ達は止めようともせず来客があるまでただ眺めているだけであった。

「それでフェイトちゃんの体はどうなったんですか？」

「俺が直した部分の強度が、大体元の四割増しってところで落ち着いた。しばらくはバランスを取るのに苦労するだろう」

結局後から来た面々に騒動の理由を軽く説明する羽目になってしまい、わざわざフェイト達にだけ説明したのも半ば無駄になってしまったことにマークはわずかに脱力する。実はこの騒動が無くて、なのは達はフェイトの怪我を気にしていたので結局話すことになっていたのだが、マークはそのことを完全に失念していた。

「それじゃあ改めて……………昨夜の戦いのことを……………」

「その前にええですか？」

気を取り直して本題に入ろうとしたマークに、はやてが待ったをかける。そして確認するのは、まるで昨日の戦いが無かったかのように平然としているマークの体について。

「マークさんの怪我は……えっと、大丈夫なんですか？」

それははやてにとって、魔王との戦いの中で一二を争う重要な事項であった。一夜明けた今でも、はつきりと思いだせる。鎧を砕き、肌を裂き、肉を貫き、臓腑を潰した感触は、はやての右腕にこびりついていた。

だが、マークからしてみれば数多く経験した戦場の一つの数多負った怪我の一つでしかないのだ。だから、答える言葉はほんの一言だけ。

「問題ない」

「まあ、今回に限っては事実よ。さすがは竜の再生力ってところかしら」  
「？」

マークがあまりに簡潔に答えたのを、リンディがさりげなく事実を隠しながらフォローする。しかし『今回に限って』とわざわざつけるあたり、普段のマークの自己申告が信用されていないのがうかがえる。

「そう、ですか……」

「……お互い殺し合って、生き残った。それだけだ」

それでも罪悪感を持っている様子のはやてを見かねてか、マークはわずかに言葉を付け足す。事実マークの一撃だってはやての腕を消し飛ばしたりしていたりするのだ。だから罪悪感を覚える必要など

ないと、言外に語る。

「さて、今度こそ本題に入るぞー！」

その場の空気を切り替えるかのようにマークは手を叩き、この場に集まった面子を見渡す。最初からいた面子に加え、なのは、恭也、忍、すずか、はやてにシャマルが今回の話し合いのメンバーだ。

ちなみに高町夫妻は翠屋があるため、アリサは家族が今回のことを知らないため、シャマル以外のヴォルケンリッターは円滑な話し合いの邪魔になりかねないため欠席である。ちなみに……

「一応、質問は預かっているから問題ない」

「伝言で『今度そのエルフ耳触らせなさい』って……」

「話し合いであるのなら、人数をそろえても邪魔にしかならないのはわかる。不意打ちなどする必要が無いほどの力の差があることも理解している」

……  
という事で、参加できない者も納得するらしい。それはともかく

「基本的に、昨夜の戦いは管理局として特に一般人に干渉することはしない……で、いいんだな？」

「ええ、みなさんが巻き込まれたのはマーク君のアイテムを持っていたからと言う線が濃厚ですから。流石にそれらのものは回収させてもらうことになりましたが」

もともとマークがアイテムを渡したのは、闇の書が暴走した際の自衛の手段といった要素が強かったため、事件が終わった今恭也達に断る理由は無かった。ただ、自衛以外の理由を強く持つ者にとってはそうはいかない。

「持ち続けるという選択肢を選んだら、どうなりますか？」

「ちよつと、すずか!？」

「えつと……?」

それはなのはやマークと同じ場所に立ちたいと願うすずかには当然の選択ではあったが、マークのアイテムを無理やり取り上げるといふ選択肢のないリンディは、本来の持ち主に伺いを立てるしかない。

「……………アリと言えば、アリかも?」

「ちゃんと説明してもらえろ?」

それなりに長い時間考え込んで出したマークの微妙な結論に、リンディが詳細を要求する。それに対しマークは少し困った風に頭をかき、あくまで今後の案の一つとしてだが、と前置きして話し始めた。

「最後に話そうと思ってたんだが……はやての今後についてだ」

「え、すずかちゃんの話やなかったん?」

いきなり話が飛んできたはやてが首をかしげる。だが、続く言葉に全身を固くする。

「魔王に乗っ取られた存在であるはやてを危険視する存在は、必ず出てくるだろう。もちろん魔王と独力で戦える俺も他人事じゃない」

「それは……………」

無いとは言えない。魔王にしるマークにしる、個人で持つには大きすぎる力なのだ。ちよつと慎重な人間ならば、魔王に乗っ取られた過去を持つ人間や、正体のはっきりしない存在に対し対策を練ることぐらい考えるだろう。

「だがうまく使えば有用な力でもあることは確かだし、何より魔王の

消滅は確認できていない」

「なるほど、魔王対策として自分たちを売り込んでいくつもりか……  
確かにそれならば邪険に扱われることはないだろうが……」

明確な脅威があるなら、マークたちの存在はむしろ歓迎されることになるだろう。だが、確実に本題からずれている。

「マーク君の考えはわかったけど、それとすずかちゃんの剣はどういう関係があるの？」

「まあ、話は最後まで聞け。……最初は魔王対策で好意的な関係を結べるだろうし、一度できたつながりはそう簡単に切れない。だが、魔王の脅威が忘れられてきたら？ 俺たちのことを直接知らない者が管理局の上層に収まったら？」

考え出したらきりがないとはいえ、俺達の力が脅威になることに変わりはない。その感情を抑えるために、できるだけ純粋な管理局に所属する強者が欲しい」

「それがわたし……？」

「正確にはナノハとスズカだ。スズカが前衛に立てば、ナノハも十全の力が発揮できるだろう」

少なくとも出身世界すらわからないマークより、魔王に乗っ取られたことのあるはやてより、すずかの方が信用はしやすいだろう。そしてなにはには、マークと敵対していた過去もあるし、魔王を退けた実績もある。

「確かに……並外れた実力者が三組もいれば、どれか一つから度を超えた脅威を感じることもなくなるでしょうね」

「魔王の脅威が失われるまで時間はあるし、これが俺の考える理想図だな」

「……わるいけど、返事は後日に。少し家族で話してからにさせて」



もちろん、マークの持つ案はこれだけではない。それこそマークの出身世界を探すためとか理由をつけ、管理局にさらに手を広げさせるのも一つの手であるだろう。マーク自身が、管理局の上層に食い込むような手柄を上げてしまつのもありだ。

「どんな決断をするにしろ、できる限りのフォローはしよう。まあ、最終的に一番苦勞するのはリンディ達だがな」

「お手柔らかにお願いするわ……」

最後の最後に丸投げするようなマークのセリフに、話し合いの場に苦笑が漏れる。ともあれ結論は、はやてたちが管理局の現状をある程度知ってからになる。

「先に今後について話すことになってしまったけど、はやてさんたちの処遇についても言っておかないといけないわね……」

「……はい」

ある程度弛緩した空気が、リンディの言葉によって再び引き締まる。だがそれもすぐにマークの一言で打ち砕かれることになった。

『『夜天の書』は、聖石より魔王の封印を受け継いでいたが、当代でついに封印が破られる。善戦むなく当代の主は魔王にのまれるも、現地の協力者により解放。魔王の撃退に成功する……でござるだ？』

「ヴォルケンリッターによる魔力の蒐集は、魔王の封印の強化のため……管理局と敵対したのは、魔王の存在を可能な限り世に出さないためってところかしら」

「……はい？」

マークとリンディが語りだした『シナリオ』は、魔王にすべての責任を押し付ける都合の良い作り話であったが、事実はやては何も悪いことをしたわけではないのだ。はやてに取らなくてもいい責任を取

らせるなんて選択をする気は無く、そのためならこの程度の虚偽は許容範囲だろう。

「流石にそこまで甘えるわけには……」

「子供は大人に甘えるものよ？」

「そうだ。それに話が分かりそうなやつには真実を報告する。これはあくまで表面的な話だ」

夜天の書の欠片しか残っていないとはいえ、はやての持つ魔力は強大で、集めた術式も九割がた健在だ。はやてを味方に引き込むのを肯定する者もまた多いだろう。

「今は流されておけ。その方が『扱い易い』と考える奴が多くなって楽だ」

「……マーク君の時は大変だったんだよ！ 危険性と有用性が上限いっぱいって感じで！」

エイミィが当時の苦勞を延々と語り、半ば泣き落としのような形ではやてに都合よく流されることを同意させる。

「ここまで来たら話は早い。はやてたちを被害者の立場に持っていない、魔王の危険性を訴えるだけで今回の事件は終焉を迎える。もちろん細々とした手は山ほど打つ必要があるだろうが、少なくとも大事に至ることはないだろう。」

「あとは、あなたが隠していた神器の件かしら？」

「聞かれなかったから言わなかった……じゃ、済まないよな」

リンディに睨まれ、両手を上げ降参を示すマークはすぐに代替案を出す。

「俺の鱗を差し出してなんとかならないか？ これを貫ける魔法を開

発すれば、対竜魔法の研究が進むだろ？」

「貴方の使った神器の効果などの説明も必要よ？ あと、フォルブレイズ同様使用制限が設けられると思っわ」

「まあ、提出を求められないだけよかったと思おっ……」

まだいくつか懸念事項があったが、ここまでで一度話し合いを終了させることになった。と言うのも、マークの神器の話が思いのほか長くなりそうなのと、はやての処遇を局の総意として確定させなければならなかったからだ。もちろんすずかと忍の話し合いの時間を設けるためでもあったが、すずかを見ていると説得の余地はなさそうである。

「じゃあ、シロウの分はまたにするとして……」

「ああ、これだな」

最後に恭也と美由希からアイテムを回収する。忍やアリサ、桃子はもう使い切っているため回収できないが、仕方のないことだろう。

「ところで、美由希のこれはなんだったんだ？」

そんななか、消耗品でありながら結局使われなかった美由希に渡した小瓶に対する疑問を恭也が投げかける。

「それは……俺の知り合いの竜の涙だ」

「飲めば効果があるって聞いてたけど、飲み辛くて……」

美由希が言い訳を述べるが、多くの人が同意する。赤の他人の涙を好んで飲みたいとは思えないからだ。

「……」一時的に身体能力を上げる効果があったのに「

た。マークが規格外な効果を述べても、やはり苦笑しか起こらなかった。

## 第47話 「それぞれの望む道」

今回の話し合いが終了となった後、みんなそれぞれ思うところがあつたのか、バラバラに出て行ってしまふ。例外は管理局組だがリンディは本局に飛んでいき、クロノはまだ本調子でないのか倒れるように寝てしまつた。最終的に部屋に残つたのはマークと、伝達事項があるエイミイだけであつた。

「結局さ、マーク君ってフォルブレイズクラスの武装をいくつ持つてるの？」

「たくさん」

これから話すことの前振りとして、エイミイがダメもとで尋ねてみるが、やはりというべきだろうか抽象的な表現で済まされてしまふ。だが流石にそれだけで済むとは思わなかつたようで、マークもそれなりの説明を行う。

「俺が神器と呼んでる武装は確かに強力だけど、あれは元々『対魔王』『対竜』用に特化した武器というものだ。人に対しての使用は想定されていない」

とはいえ、『対魔王』『対竜』用の神器が人に対して使えないわけではないし、『対人』用と言って差し支えない神器も存在しているのだ。言い訳としては弱いという事は、マークも十分に承知している。

「まあ言いたい事はわかるけど、流石にあの威力になつたら使用に制限をかけなきゃ周りが落ち着かないよ。なのはちゃんのスターライトブレイカーみたく、わかりやすい欠点があれば話は別だつただけだ……」

「チャージ時間か……一応俺の魔法でもそう言つた動作が無いわけ

じゃないんだが……」

近接戦で剣士と等速で攻撃を行える時点で、そんなもの欠点として認識されないだろう。

「とにかく、炎の魔法『フォルブレイズ』に、雷の魔法『ツールハンマー』、最後に光の魔法『アーリアル』……この三つは使用に許可が必要になると思うよ」

「やっぱり……だがちょっと待ってくれ。神器クラスの魔法に制限をかけるのは、主に威力が問題だったわけだろ？ それなら、今の俺はリンカーコアが損傷していることも考慮に加えてほしい」

そういえば、とエイミーも思いを巡らせる。現状マークのリンカーコアは蒐集によるダメージにより、最大の約七割しか活動していない。これに非殺傷設定を付加する封印の効果も加えれば、マークの魔力は約五割まで落ち込むことになるのだ。

「確かにこの状態で切り札まで禁止は流石に酷だね……理論上は、出力が半分以下にまでおちてるんだし」

「ついでにこれ以上魔法を禁止されたら、剣で戦うほか無くなるって事も伝えてくれ」

「了解」

確かに強敵と戦うのに強力な魔法が使えないとなれば、能力に制限の加えられていない剣に頼らざるを得ない。そうなってしまえば、何のための魔法の制限だという事になってしまう。

「あ、剣と言えば……魔王の障壁を貫いたあの槍だけ……」

「わかってる。あれは人に対しては使わない」

あの槍とは、万物を貫く槍『グラディウス』のことであるが、実は

障壁を抜いたのは槍の力だけではなく、マークの奥義あったことである。もちろんそんな誤解は訂正せず、ただ槍の使用のみを制限することのみ告げる。

世の中には知らない方がいいことも多いのだ。

「……他の武器についてはスルーだね。計器は魔王の魔力のせいでも時振り切れてたし、映像だけならそこまではわからなかったみたい」「まあ、魔法の方が見た目は派手だからな」

結局魔王の障壁を抜いたのが『グラディウス』だけだったというのも大きいだろう。特に『ジークムント』などは、シグナムの一撃に酷似していることも見逃された要因であろうか。

「とりあえず、俺に対する制限はそんなところか？」

「後日、リミッターが正常に作動しているかチェックしに、本局へ顔を出す必要があるかも。もともと犯罪者用の封印だし、一時解除は想定されてなかったらしいから」

「わかった」

そうして一通りの話が終わると、マークは立ち上がり玄関へと向かう。

「あれ、出かけるの？」

「ああ、ちょっと話をしとかなんといけない奴がいるからな」

「そっか、気を付けてね」

エイミィはなんとなくすかずかのところかとあたりをつけ、魔王戦の事後処理に戻りながらマークを見送る。前線組とは違い、後衛組は戦いが終わった後こそが本番ともいえる。まだまだやらねばならないことは、山のように残っているのだ。

「……クロノ君早く復帰してくれないかな？」

マークが出て行った後、戦闘でも事務仕事でも頼りになる少し年下の男の子のことを思うエイミィの声は、誰にも届くことなく消えて行った。

「はやてちゃん……本当に大丈夫なの？」

「もう、何度も大丈夫やて言つとるやろ。シャマルは心配性やな」  
「でも……」

話し合いが終わりすぐに病室に転移したはやてであったが、それでも顔色はあまりよくない。昨夜の戦いで最も重症であったのはマークだったかもしれないが、総ダメージ量が多かったのははやてなのだ。騎士たちが心配するのも当然と言えるだろう。

「まあ落ち着け。石田医師も特に体に変調をきたしているわけではない、と言っていただろう。ゆっくり休めば問題ないはずだ」

「そうは言っけどよー……」

ザフィーラが諭すも、ヴィータが不満そうな声を出すのも仕方ないことだろう。だが、ゆっくりしていられた時間すらそう長くは続かなかった。来客を知らせるノックがあり、シャマルが扉を開けるとそこにマークがいたのだ。

「何でお前がここに来てんだ！」

「話すことがあるから来たんだよ」

顔を見せた瞬間に噛み付いてきたヴィータに、マークは苦笑しながら返す。ただ騎士たちの表情からは警戒心がにじみ出ており、自然と空気が張り詰めていく。



「ま、まあ、立ち話もなんですし……」

「いや、」のままでもいい」

「そう……ですか……」

なんとかその空気をどっにかしよつとしたはやてであったが、この緊迫した空気を作っている原因の片割れにもすげなく断られてしまふ。

そんな主の気持ちを知ってか知らずか、シグナムが口火を切る。

「それで、何の用だ」

「まあ、いろいろと確認にな」

早々に話を終わらせ出て行け、と言つ意思を隠しもしないシグナムから視線をそらし、マークははやてだけを視界に収める。

「闇の書の機能はどこまで残ってる？」

「……闇の書やない」

「じゃあ夜天の書だ」

マークははやての決して譲れない主張をあっさりとし、質問を続ける。はやてはなぜわざわざここでこんな問答をするのかと疑問に思いながら、自身の内にいる『先輩』へ確認を取る。

「……結構、意味をなさない欠片も多いし、まだ整理もできとらんみたいやから、正確には……」

「それで構わん」

「えっと……術式の記録と解析……それと最適化もできるみたいや。自動修復プログラムは切り離されてもうたから、欠片に残った術式から復元可能な魔法はおよそ九割。守護騎士プログラムは完全な状態や。」

管制の子がいなくて代理の『先輩』が見とるんで、今把握できるん

はこんなもんです」

隠し事は一切せず正直に答えたはやてであったが、その答えを聞いて考え込むマークに不安を覚える。

《わたし、なんか変な事言ってもうたか？》

《いえ、特におかしなことは無かったと思いましたが……》

その考え込む時間がやたらと長く感じ、ついシグナム達に念話をしてしまうが、彼女たちにもここまで考え込む理由はわからなかったようだ。もっとも、マークに悪感情を抱いている騎士達では、彼の思惑を図ることは難しいと言わざるを得ない。

それからさらにじっくり数分は思考を巡らせたマークが、ようやく次の質問を行う。

「その九割の中で俺の……異界の魔法はどの程度ある？」

「マークさんの魔法はかなり優先的に回収しとるから、ほぼ全部や？」

使用できるかは別として、はやてが生き残るため必要となる強力な魔法、特に対魔王用に使えるものは全て記録してあった。

「……俺がこっちに来て使ったことが無いものまで把握しているなんてな」

「蒐集はリンカーコアから直接やっとならしいし、そういんもんやないの？」

実際マークは風刃『エクスカリバー』の使用を確認していたため、自身の魔法が習得されていたことは特に驚かなかったが、その習得数は予想よりはるかに上だった。死者蘇生は特殊すぎて始めから蒐集はできていなかったそうだし、イーグル関係が魔法扱いされていなかったのがせめてもの救いか。

「まあ、」の程度なら問題ないか」

それでも予想外だったのはその程度。あまりよろしくない想定では死者蘇生やモルフ作成まで習得している可能性もあった以上、かなりやりやすい状況ともいえる。

（もちろん、俺のことが信用できずに黙っているという可能性も……無いか）

本来なら想定しておくべきなのだろうが、信用云々はともかく、はやてが何の考えもなく黙っていることはないだろうとマークは考える。仮にも魔王に寄生されたにもかかわらず生還した『聖女』とでもいべき人材だ。

それに危険性を理解して黙っているならそれでよいし、何も考えてないならマークが手を出す必要もなく自滅するだろう。

「とにかく、現状は理解した。念のため言うておくが、できる限り神将器系統の練度を上げておけ」

「え、双聖器系統じゃなくて？」

はやてがマークの魔法を知るからこそ通じる言葉であったが、神将器が対竜武装であり、双聖器が対魔王武装のことだ。つまりマークの忠告は会談の『対魔王用の戦力として売り込む』と言う言葉と矛盾するわけだが……

「魔王にはもう勝利したんだ。もう、アレに人と戦う気概は残っていないさ」

魔王のように魂だけの存在となった以上、勝敗といった概念は大きな意味を持つ。魔と言う存在そのものがなくなるわけではないが、魔

王として存在し続けることはできないだろう。

「再び『魔王』としてこの世に存在することになるのは、早くて数千年後ってとこかな？」

「それって対魔王とかの意味がなくなるんじゃない……」

そこまで想定しておきながら、魔王の生死が不明となっているのは、明らかに今後がマークにとってやりやすいように情報を操作した結果だろう。

「別に完全消滅したわけではないし、何より『書』の方は健在だ」

「……」

はやてのもとにある欠片はともかく、本体の方はまた十年程度で転生することになるという予想だ。もはや魔王が存在しなくとも、その本体に魔王が封じられていたという過去は、もはや消えることはない。

「悪いが仮想敵として存分に使わせてもらう。お前らが周囲に認められるまでに必要な時間を作らなきゃならないからな」

「……」

まだあの子のことを『闇の書』と呼ぶしかない自身の無力さに、はやては思わず唇をかむ。しかし、そんな自分に向けた怒りは長くは続かない。怒りは決意に、八神はやてと言う存在を管理世界に必要なものとして、あの子の汚名をそそぐのだ。

「何かするときにはリンディ達に伝える。しばらくはこっちでバランスを整える」

「……恩に着ます」

それじゃまたと、マークは騎士たちに睨まれながら病室を後にする。もとよりはやてを殺そうとしたマークは騎士たちから嫌悪されるのは想定内であったし、三すくみを作ろうとしている以上、むしろこのような関係は望むところと考える。

だが、一つだけマークの想定の外にある存在があったため、その効果は半減する。はやての内にいる『先輩』は、それなり以上にマークのことを知っていたのだ。結果、マークに殺されかけたはやて本人がマークのことを擁護することになるのだが、それはもう少し先の話である。

「それで、結論は出たのか？」

「……平行線だな」

ところ変わって月村家において、姉妹の話し合いはお互い妥協点を見出すこともなく延々と続いていた。せめてもの仲裁役として恭也もいたが、どうしても忍寄りになり役目を果たせていない。

「この間はいいって言うてくれたじゃない！」

「あそこまで危険なものだなんて聞いてないわ！」

二人の話を要約するとこんな感じである。すずかはまだ管理局とかわる許可を得た気になっていたが、忍としては以前の話と危険度が桁で違うという事か。

「事実魔王戦は管理局の想定の外だったし、シノブがあんな戦場に身内を送りたくないという考えもわかる。だが、事はスズカの将来にかかわる話でもある。本人が望んでいるのに『危険だから』と言って否定するのもどうかと思うぞ？」

とりあえずマークは姉妹の間に割って入り、ヒートアップしていた二人を落ち着かせる。感情的になっては進む話も進まなくなる。

「そうかもしれないけど……とにかく、流石にあのレベルの戦場へ行くことは許可できないわ。すずかはなのはちゃんと違って魔法が使えないんでしょ？　すずかが持っている力が管理局の求める力でない以上、そう簡単に認められないわ」

「それは……」

すずかも言葉に詰まるほどの正論であった。すずかが魔法を使えない以上、質量兵器に頼った戦い方になるが、それは管理世界において禁止されているものだ。

忘れがちなかもしれないが、次元漂流者であるマークにしたって特別に許可されているのは質量兵器の所持であって、使用については奨励されていない。魔王戦と言う特殊な状況や、魔力を使用した奥義によってなんとかグレイゾーンを走っている状況なのだ。

（まあ、裏ワザが無いわけではないが……どうしたものか）

マークの持ち物の中には魔力を強化する特殊なアイテムも存在しているため、すずかを魔力持ちにすることも可能なはずである。ただし、それだけでなのは達に並ぶほどの魔力が手に入るわけではないし、何よりすずかが忍に認められる材料とはならないだろう。

「……この問題、俺が預かるわけにはいかないか？」

「マークさん……」

「いや、すずかの戦いは見ていたが、初陣とは思えないほど筋が良かった。魔王クラスとの戦闘が頻繁に起こるとは思えないし……そうだな、フェイトにも言ったが、五年の間様子を見よう。そこまでに一定のラインを越えれば、という事でどうだ？」

これで少なくとも五年間は実戦に出ることはないだろうし、さらにこの意志が長く続くかも見られる。マークと言う強者に預ける以上、

意志が続けば将来的に戦場に出る可能性が高くなるが、危険性は段違いだろう。

(真つ向から反対するよりはまし、ね)

結局勉強などもおろそかにしないようすることといった条件をいくつか付け足し、五年間の修業期間を設けることになる。そして話し合いがひと段落したところで、さすがが戦闘中に感じた違和感をマークに告げる。

「……風、か」

「はい、一つ目の巨人と戦った時に、背中を押されたような気がして……」

マークは軽く考えるが、『マーニ・カティ』に風の属性などついてはいない。精々関連があるとすれば、それは前の持ち主が風の属性を持つ草原の少女だった位だろうか……

「詳しいことはわからないが、悪い事では無い筈だ。きっと、彼女が力を貸してくれたんだろう」

「……まあ、そのおかげで助かったわけですし……」

その想像は、とても微笑ましいものであった。剣に担い手の意思が宿ることを見たことがあるマークにとって、決してありえない事とも思えなかった。

だからすずかは嫉妬を覚える。マークの言う『彼女』が誰かは知らないが、親しい間柄だったのだらうと思うと、どっしりようもなく羨ましかった。

## 第48話 「見えぬ想い、感じる想い」

はやてに話を聞き、強くなる意志があることを確認した。少なくとも騎士たちはマークに良い感情を持っていないのは確認したので、管理局には『マーク対策』として持ち上げてもらえるはずである。

すずかについては保留となってしまうたが、『マーニ・カティ』を扱えた以上このまま放置するにはあまりにもつたいない人材であると言えよう。後々は竜と戦える力を持った、『マーニ・カティ』と同じく精霊を宿す剣である、『ソール・カティ』を手に、なのは達と共に在ってほしいとマークは思っている。

なのはは一応『ファイアーエムブレム』について再度説明する必要があるだろうが、特にマークから求める物はない。マークが何もせずとも、彼女は身近な誰かを救う『英雄』としてあり続けるだろう。ついでに『魔王』に対する牽制として、管理局が動いてくれれば言う事はない。

最後にフェイトであるが……マークは彼女についてのみ、どうしたものかと頭を悩ませていた。

「一番いいのは、ナノハやスズカと組んでくれることだったんだが……流石に今からは無理だよなあ」

管理局から見た今のフェイトの立場は、はっきり言ってマークの被保護者と言った印象が強いだろう。あるいは逆に、管理世界に疎いマークの保護者と言ったものかもしれない。何が言いたいかとさえば、フェイト・テストロッサはなのは達よりマークに近いと認識されているのだ。

「やらに言えば、彼女の手足は俺のイーギルで出来ていて、俺のメンテナンスが必要である……なんて、今後ますます離れられないじゃないか」



誰もいない公園のベンチに座り、ぬるくなった缶コーヒーをあおりながらマークはため息をつく。

もともとマークにはフェイトから離れるつもりはなかったが、ただでさえマークと他のメンバーの実力差は大きいのにマークとフェイトがコンビになれば、なのは達が対抗するのは難しいのを通り越して絶望的になりかねない。

(だからといって、俺がなのは達を表立って強化しすぎるのも問題だし、相方であるフェイトを強化しないのは不自然だ)

ではどうやって三組の力の差を整えるか、この点についてマークの知識はあまり役に立たなかった。そもそもマークは普通の人間がどうやって強くなっていくかを知らないのだ。

(俺の周りの人って、どいつもこいつも英雄クラスだったからなあ)

簡単に言えば、天賦の才があったり、他人の数倍の努力を当然のようになれる人だったり、実戦で己を高めることができる人だったり、あるいは類稀なるひらめきがあったり、周りの言葉を受け入れる度量や柔軟性がある人ばかりだったのだ。

ひよっとしたら凡人もいたかもしれないが、良き師、良き仲間、良き戦場に恵まれた凡人はもはや凡人ではない。

「まあ、結局壁を越えてくれることに賭けるしかないか」

「何を賭けるの？」

マークは自身の独り言に返事があったことを驚きつつ振り返ると、そこには出かけていたはずのフェイトがいた。

「……そりゃ同じ町にいるんだし、会う可能性は皆無じゃないけど」

「えつと、ごめんなさい?」

「いや、謝るような事でもないんだけどね」

何となく独り言を聞かれた気恥しさを感じたマークであったが、それで謝られるのも居心地が悪い。それでも一呼吸おいて平常心を取り戻し、改めてフェイトに向き直る。

「用は済んだのか?」

「うん、とりあえず今日は。……思ったより長引きそうだけど」

そのフェイトの一言で、今まで何をやり外に出たのかを悟る。フェイトは早々に新しい手足の慣らしをやっていたのだろう。よく見れば頬が紅潮し、結構な運動量をこなしたあとが見られる。

「軽く走るだけでも痛むだろうに……」

「うっ……さ、さすがに全力で走ったりはしてないよ?」

『『してない』じゃなくて、『できなかった』だろ?』

右腕・左足はイーギル量の調整など行い性能を下げたとはいえ、それでも元の四割増しの性能だ。ものすごく極端な事を言えば、時速10kmで走る右足と時速14kmで走る左足は同居している状態なのである。今回はただ、走ろうとすると腕が痛むから、と言っのが主な理由だろうが、こんな状態でまともに走れるわけがない。

「そんなに焦る必要はない。堅実に、日常生活から慣らしていけばいい」

「それは、そうかもしれないけど……」

マークからしてみれば焦ったって何の意味もないのだが、フェイトは一刻も早くこの状態に慣れて、魔導師として復帰したかった。

(マークの理想の未来の中に、わたしの名前は無かった……)

三すくみの筆頭はマーク、なのは、それにはやてだ。その中心人物であるなのにはさすが付き、はやてには守護騎士たちがつく。だがマークには個人でこの二組と渡り合う実力があり、それがどういう意味なのかと思うと、どうしても悪い方へと考えてしまう。

(わたしが居たら、三すくみが成り立たなくなる？ マークの考える未来に、わたしは邪魔になってない?)

事実フェイトの立ち位置はどうしたものとマークも悩んでいたが、翻せばフェイトの未来を一番気にしているとも言える。もちろんマークにとってそんなこと言うまでもない事なのだが、自分に自信が持てないフェイトに対してはやはり言葉にしなければ伝わらない事であるのだ。

「今までできたことができなくなって焦る気持ちはわかるが、今は体を休める。エーギルが充実しているから感じにくいかもしれないが、体が回復しているわけじゃない」

「わかった……」

マークの考えがわからずとも、心配されているのはわかる。そうなればフェイトは折れるしかなく、体を休めることに同意する。

そういう事で、今は休息こそが急務という事で家に帰ったマークとフェイトであったが、そこに現れた書類の山、正確には空中に現れたデータの数に驚く。

「なんなんだ、これは？」

「……簡単に言えば、大至急報告せよって言う報告書の山」

「アースラの計器が魔王のせいで逝かれたって話は聞いているか？」

そのせいで僕たちが報告しなければいけない事項がとんでもない数

になっただんだ……」

つまり、アースラで観測したデータをそのまま送ると言ったことができなくなったため、現場のスタッフの推察で報告することになってしまったという事だ。映像も残ってはいないが、重要な所が大量の魔力のせいでゆがんだり観測できなかったりしている。

そのため休んでいたはずのクロノまでもこの書類地獄に駆り出されているのだ。

「えっと、わたしで手伝えることなら……」

「いいの!? じゃあバルディッシュにデータを送るから、お願い! できたら確認するから私にデータをまわして!!」

みなまで言う前にエイミーが捲し立てる。次の瞬間には、数十ものデータがバルディッシュに送られてきた。

「……」

「手伝おう」

「……お願い」

マークの申し出をフェイトは受け入れる。本職の人たちの邪魔にならないように、フェイトの部屋で作業を行う事にする。基本的に書類仕事に縁のない二人であったが、フェイトはその学習能力の高さから、マークは並外れた経験量から、最初の方に何か所か直しを入れることになったが、何とか報告書を仕上げることに成功する。成功させてしまった。

そうなると当然のように、次のデータが送られてくる。最初こそエイミー達もそれこそ猫の手すら借りたいのだろうと思いい、苦笑交じりで手伝っていた。

「……フェイトちゃん達、どうしたのかな?」

「事後処理にはさすがに長い気がするけど……管理局では相当な問題になってる可能性も否定できないからなあ」

簡単な話し合いから一週間、なのは達は管理局から何の音沙汰もなく、日常生活に戻っていた。

「半年前は、フェイトちゃん達がどうなったのかすぐに教えて貰えたのよ……」

なのはのつぶやきに、ユーノは答える術を持たなかった。ただ前例のない事態に混乱しているだけなのか、それともただの協力者には聞かせられない事態になっているのか判断がつかなかったからだ。

それでも特に行動を起こさずに待っていたのは、管理局がどんな決断をするのか怖かったからだと言える。

「……はやてちゃんにマークさんは大丈夫かな？」

「マークさんの魔法を思えば、大丈夫だと思うけど……」

しかしマーク本人の攻撃力を思えば、もはや気休めにしかならない。

（竜化時のプレスは、なのは達がやっとの思いで貫いた魔王の常時展開していた障壁を薄紙のように切り裂いて、それに戦場に張り巡らされていた結界を、直撃でないのに破壊しかけていたし……）

下手をしたら、次元航行船すら一撃で落としかねない火力なのだ。せめてもの救いはその攻撃範囲の狭さだが、それが気にならないほどの威力であった。

それだけでも危険視されて余りあるのだが、それに加えてはやての存在もある。

(蒐集の効果がどこまで及んでいるかによって、マークさんの存在の利点が無くなりかねない……場合によっては『比較的御しやすい闇の書の主さえいればいい』なんて考える人が出ないとも限らない)

だからこそマークは三すくみを考えたのだが、完成までに時間がかかりすぎる。魔王が行方知れずで対処の必要があるとはいえ、この先予断を許さない交渉になるのはユーノでも簡単に想像できた。

その結果、三すくみの重要人物となるのははこの一週間、すぐ目と鼻の先にあるフェイト達の家に行くことすらできなくなっていた。

「僕はそこまで神経質になる必要はないと思うんだけどなあ」

「でも、万が一とか考えたらなんだか怖くて……」

確かに、自分の軽率な行動がはやてやマークを危地に追いやってしまつことになったら……そう考えると恐ろしいが、まだそこまで繊細な事にはならないだろう。

「三すくみは、マークさんの考えた一つの理想的な未来図だよ？ 今はまだそんな構図になってないんだから、気にする必要はないって」「そうかもしれないけど……」

結局、情報が無いから動きようがないのだが、情報を仕入れるためには動かないといけないという矛盾。フェイトはやてのために、向う見ずな行動を起こした少女とは思えないほど腰が引けていた。

そんな硬直状態を破ったのは、一人の来訪者であった。

「悪いな、突然訪ねたことになって」

「いえ、連絡はしてくれたのはわかりましたから……」

やってきたのはマークであったが、どうやら手違いがあつてなのは連絡が回ってこなかったようだった。真相としては、一週間かけて

ようやく報告書の類を捌いた一同がダウンし、残ったマークは翠屋の連絡先しか知らなかったのが原因だ。翠屋からなのはに連絡されるまでの間に、マークが高町家に到着してしまったのだ。

「でも、マークさんは元気そうですね？」

「まあ、あいつらも竜と体力で比較されたくないだろうさ」

「……なるほど」

ユーノは、一週間どころか一月だって不眠不休で戦えるというマークの答えに言葉もない。ただ一言、『好き好んで休みもなく動いているわけじゃない』と付け加えられたときは、マークもやはり疲れているのだと知って安堵したものだ。

「じゃあ、休む間もなくこっちに来たという事は、急いで伝えないといけないことがあるってことですか？」

「お、ありがとう……いや、今のところ早急に伝えないといけないことはないさ。ただ『覚醒』したナノハの状態を確認しときたかっただけだ」

「『覚醒』？」

なのはが淹れたお茶に礼を言って受け取ったマークは、今回訪れた理由を簡単に述べる。曰く、『ファイアーエムブレム』によって潜在能力を解放された状態になっているという。

「確かにあのときは、集束がいきなり加速されたけど……あれが『覚醒』の効果ですか？」

「それだけじゃなくて、身体能力なんかも底上げされている筈だ。私見だが、二割ほど魔力も強化されているぞ」

「……」

元々とびぬけて魔力が高かったのだが、それがさらに二割も強

化されたのだ。別に特殊な訓練をしたわけでもなく、一瞬でそれを為したという『炎の紋章』の力に啞然とする。

「その反応を射る限り、理解できたようだな。仮にもエレブ大陸で秘宝中の秘宝だ、それぐらいはできる」

「それぐらい……」

管理世界にも、一時的に能力を上げる装備もある。カートリッジシステムがその筆頭だろう。だが、永続的に能力を上げるような装備は、ロストロギアにだって存在しない。仮にまだ発見されてないだけであっても、それが何のリスクもなく実行されることはないだろう。

「とにかく、この効果については秘匿しろよ？ 勘違いした奴が『自分にも使わせる！』って大挙してやってくる未来しかないからな」

「わ、わかりました……って、回収しに来たんじゃないんですか!？」

「まさか！ 魔王を退けた英雄様から武器を取り上げようなんて、そんな恐れ多いことこの小心者にはとてもとても……」

言葉尻の僅かな違和感に反応するのはを、マークはわかりやすくおどけてからかう。ただ、わざとらし過ぎたせいかなのはもすぐに驚愕の表情から真剣な表情に変わる。それを確認したマークは、仕方なしに肩をすくめ表現を改める。

「今ナノハの装備を弱体化させる利点が無い。できることなら対竜魔法である至高の光『アーリアル』も渡したいぐらいだ」

「……マークさんが魔王戦でその魔法を使ってくれて、本当によかったと心の底から思いますよ」

あまりなのはを強化した跡を残したくない以上、マークが使用した魔法を使わせては逆効果だ。とはいえ技術的な問題が多く、渡すとし



ても十年はかかっただろうが……  
それと、ここまでの会話でマークは一つ確信を得る。

(「うちがニすくみを目指しているとかわかっていても反発しないってことは、戦い続ける意思があるってことだよな……スズカもナノハも、今の生活の何が不満なのかねえ」)

二人の戦う理由を知らないマークとしては、否、知ったとしてもわざわざ戦場に出たいと思う心の動きは理解できないだろう。もっとも、二人を戦場に駆り出そうとしているマークがそんな感想を抱くのも不相应というものだろうが。

「……『ファイアーエムブレム』には、担い手を守る力も働いている。うまく使えば、持ち主の傷を癒すことも可能だ」  
「本当にとんでもない代物ですね……」

さらにとんでもない効果を公開したマークは、疲れた顔をしているユーノを眺めながらなのは入れたお茶に口を噤る。

「……甘くないな」  
「え？ 緑茶ってそう……」

マークがぼつりとこぼした感想に、なのは達はそれがどういう意味か一拍遅れて思い至る。

まあ、これはこれで……などと言いながらゆっくりお茶を啜るマークの勘違いを正すべきか、なのは達はかつてない難題を前にした数学者のような顔で見ていたとか。

「とりあえず……退院が決まっておめでとう、はやて」  
「明日の検査で問題なしだったら、やけどね」

ところ変わって海鳴大学病院にて、アリサはいつものようにはやての見舞いに来ていた。

「ほぼ決定事項でしょ？　すずかたちを捕まえて、近いうちに退院祝いのパーティーでもやるからそのつもりでね」

「別にそんなんええよ。すずかちゃんもフェイトちゃんも忙しそうだし、なのはちゃんとユーノ君の間には入りにくいし……やっけ？」

「それとこれとは話が別よ。エルフ耳が何かやってるみたいだからここには来づらみたいけど、みんなはやてのことは気にしてるし、退院のことを聞いたなら喜ぶわよ……」

アリサの連日のお見舞いの言い訳を、パーティーを断る言い訳に使おうとしたはやてだったが、一刀両断されてしまう。はやても含め、三すくみのことをみんな気にしているようだが、アリサからしたらいい迷惑だ。

「まったく……せつかくみんなで友達になれたと思ったのに！　絶対一発ぶん殴ってやるわ……」

「ま、まあまあ……マークさんかて、良かれと思ってこの方法を選んだんやし……」

「だったら尚更よ……こんな方法がベストだなんて……」

怒りが収まらない様子のアリサはだんだん声が大きくなっていくが、それでも「こ」が病室だと思いだし、声を押しさえる。

「大体、なのははやてぐらいの力量の人ぐらいたくさんいるでしょ？　まだ初心者に毛が生えた程度の子供に、何をさせようとしてんのよ……」

「まあ、それは居るやろっけど……」

問題ははやてが魔王に乗っ取られたという事と、なのはがそれを降

したという事なのだが、それを言ったところでアリサの怒りは収まらないだろう。

「まあいいわ。別に私が勝手に友達集めてはやての退院パーティーやるだけなんだから、文句は言わせないわ」

「大丈夫なんかなあ……」

かなり強引な事を言っているようだが、アリサにも考えはちゃんとある。

「対外的には、一般人のわたしが、偶然アンタたちと友達になって、みんなを紹介した。あんたたちは私に魔法のことを話せないから、仕方なく参加しているって言ってくればいいのよ」

書類しか見てないような上の連中が、現場のことなんてわかるもんか！ そう吠えるアリサに、はやては感心するほかない。

（そう言えばマークさんは、『自分たちを知らない奴が上に立ったら』って言うてたし、逆に言えば、『わたしたちを知ってる人』が味方であれば何の問題もないんよね……）

マークやはやてが管理世界に牙をむくことが無いと知っていれば、わざわざこれを敵に回す必要はない。むしろそんな無駄に敵を作って何になるというのだ。そこまで考えて、はやてはよつやくマークの真意を理解したような気になった。

「結局、あの人は口だけの人なんやね」

「ん、なんかいった？」

はやてのつぶやきは興奮したアリサには聞こえなかったようだが、はやてはなんだか嬉しくなる。新しい家族との出会いや、優しい友人

との出会い、そして不器用な竜との出会いに感謝の念を送る。

「いや、本当に、アリサちゃんと出会えてよかったなあ〜って」「べ、別にこんなの大したことじゃないわよ。ちよっとタイミングがずれば、すずかだって同じこと言っただらうし……」

頬を赤く染めて何やら言い訳を続けるアリサを見ながら、はやてはいつまでもニコニコと微笑んでいた。

## 第49話 「退院パーティー」

「はやて、退院おめでとうー。」

「！！！！おめでとうー！！！！」

「ありがとうねー。」

後日の検査も問題なく済み、月村邸にて『八神はやて退院おめでとうパーティー』は、問題なく開催されることになった。

参加者はパーティーの提案者であるアリサと場所を提供したずか、主賓のはやては当然として、なのはとフェイト、ユーノさらにアリシアも無事に参加している。それに加え、忍と恭也に美由希、エイミヤアルフにヴォルケンリッターが最初に退院を祝う一言を述べたから、少し離れたところで軽く料理をつまみながら話をしている。

「流石にリンディさんとクロノは忙しくて来れなかったけど、マークも用事が済み次第来てくれるって。」

「お父さんたちも翠屋があるから無理だって……でも、お祝いのケーキは持たせてくれたから。それにしても、アリサちゃんもよくこのメンバー全員に声をかけようと思ったね。」

はやての退院を祝いたい気持ちは十分にあるが、それでもやはり気まずいのか、フェイトとなのははぎこちない表情を浮かべていた。

アリサとしては気に入らないが、それも仕方のないことだ。マークの三すくみの考えは、マークやはやてが管理局にその力を危険視された時の対策だ。マークにはやて、それになのはの力が均衡し、互いを抑止してこそ効果を発揮する。

それなのにこの三人が仲良くして一つのグループであると認識させてしまえば、最悪の場合は全員が危険因子とされかねない。

「そこまで気にする必要はないわよ。大体、あんたたちが仲良くして

もそれを告げ口するような人なんて、ここにはいないでしょ？」

「そうだけど……」

確かに、話が上に行かなければ危険視されることもないだろう。今はリンディ達が順次報告を行っている最中であるわけだし、まだはやて達の情報は本局に十分に集まっていないだろう。今後危険視されるかもしれないと、その可能性を恐れ過ぎて本心に乗っ取った行動ができないというのは違うような気がする。

「確かにエルフ耳みたいに『最悪への備え』は必要かもしれないけど、それも過ぎればむしろ害悪よ」

「過ぎたるは及ばざるがごとし、やね。まあ、わたしがそんなこと言うのも問題かもしれないけど、もうちょっと肩の力抜いてもええんとちゃいっ」

ある意味予想通りの問答をする少女たちを横目に、年長組でも同じような話が展開されていた。

「で、彼はどう考えているの？」

美由希の問いかけは、この面子の中で誰よりもマークの近くにいたエイミーに対するものだ。とはいえ、問いかけられた本人も難しい顔で肩をすくめざるを得ない。

「そんな話をする暇なかったって……でも、どちらかと言えば人間関係より力の差を埋めることの方を気にしてるようだったかも」

「確かに、いくら三すくみとか三つ巴の関係があっても、あの人に並ぶ力が無ければ何の意味もないからな……」

なのはも大変だ、そののんきに語る恭也を軽くにらみながら、それでも忍は軽く疑問を述べる。

「なんて言うか、戦力関係のバランスとるの下手そうな印象があるんだけどなあ……………」

より正確に言うのなら、交渉事全般得意そうには見えない。そして、そんな印象を持ったのは忍だけでなかったらしく、賛同の声が上がる。

「あー、結構力技で解決するタイプだったのに同意だね。『こうするのが正しい』相応の対価は払う』が基本かな？ 細かい気配りとか、根回しだとか、そういうところは駄目みたいだよ」

「……………結構な言われ様だな」

エイミィの容赦ない批評に、恭也がわずかに同情の念を見せる。だが、マークと管理局の交渉の窓口になっているエイミィの言葉に偽りはないだろう。

「……………そもそも交渉の必要が無かった。あるいは、別の者に任せていたという事か」

「前者の方が可能性は高いんじゃない？ マーク君の居た場所がどんなところだったかにもよるけど、戦いにおいて彼の力は誰もが欲しただろうしね」

シグナムの予想を、忍が補足する。売り込む必要などなく、むしろ『ぜひ来てください！』とお願いされる立場、または、すでにどこかの国が何かに使える存在であったと忍は推測する。

「うーん……………私も最初はそう思ったんだけど、どうも違うみたいなんだよねえ」

「むしろいい事っ」

しかし、その予想もエイミィは否定する。その理由を少し言いにくそうにしながらも、結局小声で話し始める。

「マーク君ってさ、次元漂流者なのに故郷に帰りたいたとか、そういうしたこと一切言わないんだ……」

『……まあ、少し自制心のあるものならそうだろう。帰りたいた言っ  
て帰れるようなら、次元漂流者とは呼ばれまい』

「それもそうなんだけど……納得出来るかは別の問題じゃない？」

未練がましく『帰りたい』と連呼するような性質でもなかるう、そのような考えが透けて見えるザフィーラの一言に、理性と感情が別のものだとエイミィは告げる。

そう言われてしまえば、守護騎士たちは黙るしかない。理性と感情は別……結果だけ見ればはやてを救った一人であるマークのことを、彼女たちは快く思っていないのだから。

「とにかくさ、次元漂流者って、ここで何があるうと対岸の火事で、帰還を第一に考えても不思議じゃないと思うんだ」

「……それにもかかわらず、事件の解決に動いたのは不自然ってことか？ でもそれぐらい……」

ありえない事じゃない。日本にだって『一宿一飯の恩』なんて言葉もあるぐらいだし、保護されたマークがそう考えても別に不思議と言うほどのことではない。そう考えた恭也であったが、そこで一つの違和感を覚える。

「……半年もの間、一切帰還を望まなかった？」

恭也が覚えた違和感を形にする前に、美由希が言葉にする。そう、あれほどの力を持つものなら、元の世界でもそれ相応の立場があったはずだ。それにもかかわらず帰還の意思を見せないのは、やはり不自



然だ。

「うん。そこから考えると、こんなことあまり言いたくないけど……マーク君の帰還は望まれてないってことだと思っ」

「望まれていない？」

疑問に思っ忍達だったが、今回の一件を思い出し考えを改める。

「今回マーク君が危惧したのは『過ぎた力を持つもの』として危険人物に指定されること。あくまで可能性だけど、元いた世界で同じような目にあったんじゃないかな？」

こうして考えてみると三すくみの考えは、マークにしてもいささか性急で物騒な考えだ。ジュエルシード事件の時のことを思い返せば、なのは英雄として持ち上げ、はやてを被害者に仕立て上げるだけと言っ方がよっぽどマークらしい。

「……」この予想が当たってたら、仲間や、命がけで守った人たちに裏切られたようなものですよね……」

「ま、まあ、確認したわけでもないし、本当にただの予想だよー！」

シャマルの言葉に、もともとマークに良い思いを抱いていない守護騎士達でさえも、この話には顔をしかめる。思った以上に暗い雰囲気になってしまいエイミィが慌てて弁解するも、この空気が浮上してくることが無かった。

「な〜に祝いの席でそんな暗い表情してるんだ？ 特に守護騎士共にとっては主の快復だろ、まさか不満があるわけじゃないだろうな？」

離れている子供たちにその状態がきづかれる直前、そんな空気を切り裂いたのは用事があって遅れてきたマークであった。マークは先

程までの話題の人物の突然の登場に跳ね上がるエイミィを不思議に思いつつ、軽い挑発に反発する守護騎士たちを無視して、パーティーの主賓のもとへ向かう。

「とりあえず、退院おめでとう、ハヤテ。祝いの品でも用意しようかとも思ったが……その足が全快するときまでとって置く方向でいいかな？」

「ありがとうございます。別に二回とも祝ってくれてもよかったですよ。」

マークははやてのいたずら半分のちゃっかりした返事に苦笑しながらも、祝いの席に何も持参しなかったのはやはりまずかったかと少し反省する。

「じゃあ祝杯も兼ねて秘蔵の果実酒でも……」

「子供に何渡そうとしてんのよー！」

スパンツ、とマークの頭を引っ叩いたのは忍だ。流石にお酒を小学生に振る舞おうという行為はやり過ぎだと判断したらしい。

「何って……リキアで軍師やってた時にもらった葡萄酒」

「そういう問題じゃない！ お酒は二十歳になってからー！」

「あはは……まあ、わたし達が二十歳になったらいただきます」

そう言う事なら仕方ないかと、マークが一步下がったところにエイミィもやってきて葡萄酒を取り上げる。

「何を……？」

「もちろん君もだからね、十八歳」

「……もう冬になったし、十九歳という事にしといてくれ」

一瞬何の事だか分らなかったマークだが、そういえば戸籍の登録の際に、表面上は18歳にしておくと言われたことを思い出した。

別にマークには普段から酒をたしなむ習慣はないが、禁止されるとふとした時に飲めないというのがつらく感じるものだ。

(この世に生を受けて数千年……まさかこの年で禁酒されることになるとは思わなかった……)

思いのほかがつくりと肩を落としたマークに罪悪感を抱きそうになるエイミィであったが、見かねたユーノが別の話題を持ち出してくる。

「そ、そういえばマークさんの用事ってなんだったんですか？」

「ん？ あ、まあ、アレだ……ちょっと本局まで……鎧の修理が可能か聞きに行ってたんだ」

そして後悔する。片方ならともかく、少なくともはやてとマークの両名を前に話していい内容じゃないだろう。平気な風を装って『どうだったん？』と、マークに結果を聞くはやての類も引きつっていた。

マークもこの話題はやはり話したくないのか、眉をしかめながらも言葉を返す。

「……『必要ない』って言われた」

「……はい？」

「だから『必要ない』って言われた」

その様子から、マークはこの話題ではなく、対応した技術者に不満を抱いていたことがわかり、何人かがそっと胸をなでおろす。

「えっ？ っ？ っ？ 意味？」

フェイトが周囲の反応に苦笑しながら詳細を聞くと、何とも言い難い内容であった。

マークが壊れた鎧を見せたときの第一声が『アンタなんで生きてんの？』だったらしい。一つ付け加えると、鎧には右胸部に大穴があった状態である。

次は材質の検査をしているときに『一体どんな扱いをしたらこんな大穴があくんだ？』と言われたらしい。一つ付け加えると、持ち主は目の前でびんぴんしている。

最後は見積もりが終わった時に『これ修理する意味あんの？』と来たらしい。一つ付け加えると、この鎧は実用性や性能より見栄えを重視している。

(これはまた……立場の差による認識の違いとしか言いようがないわね)

一つ目は簡単だ。マークは戦闘で破壊された鎧の修理を頼んだはずだ。それなら鎧の持ち主は、鎧に大穴があくような一撃を受けたはずなのだ。常人なら死んでない方がおかしい。

二つ目は仕方ないことだ。マークの素性を説明しなければ誰も、鎧を着ているときにこの大穴がつけられたとは信じられないだろう。結果、保管方法あるいは運搬等が雑だったとしか考えられない。

三つ目はむしろ善意からだろう。本人が使用しているという以上、どんな理由であれ胸部に穴が開くような鎧の使用は諫めるべきだ。技術者には、その鎧にどんな由来があるかなど知るはずもないのだ。

(第三者視点から見たら、恐ろしいほど嘔み合ってたんでしょっね……)

きつと、今頃リンディのところにて技術者の方から文句がいつているだろう。フェイトに宥められるマークを見て、エイミィは苦笑しながらも話を進める。

「それで鎧は結局どうすることになったの？」

「アースラに残ってる映像記録を基に、外見のみ再現と言う形になるだろうな。流石に実用レベルまでの修復は困難だろうという話だ」

「あ、修復はちゃんと頼んだんだ」

交渉は決裂したのかとも思ったが、そこら辺はすっかりやったらしい。ただし今後使う防具についての話まではしなかったそうだ。

「あれ以上同じ空間に居たら、本気で殴ってたかもしれない」  
「……………」

技術者は、知らず知らずのうちに九死に一生を得ていたようであった。

「おっと、愚痴ばかり言って悪かったな。無粋な輩はこれで退散するよ」

「えへ、せっかくやかからこっちに居ればええやん……………ハーレムやで？」  
「僕は男だよ！」

「こんなちびっこいハーレムなんていらんよ。五年後に出直して来い」

「半端にリアルな数字ね……………このロリコン！」  
「意味は分からなくても侮辱されてるのはわかるぞ？」

無視しないで！ と叫ぶユーノをスルーし、笑みを浮かべながらマークは子供たちの席から離れる。

それに一步先んじる形で席に戻っていた忍とエイミィは、今度は静かに敵意を燃やす守護騎士たちの存在に頭を抱えていた。せめても

の幸運は、マークが彼女らに敵意を持っておらず、のんきに食べ物をつまんでいることであるのか。

「アタシらのことは眼中にないってことか……！」

訂正する。これはこれで厄介であった。

「別に……敵意を向けてくる相手に友好的に話しかけるのも、喧嘩を買つのも疲れる」

「まあまあ、祝いの席でそんなぎすぎすしない！ やっぱり笑顔でないうー。」

言外に無駄な体力を使わせるなど言いたげなマークであったが、挑発する元気はあるらしい。本当に喧嘩が始まる前にエイミィがとりなした為どちらも引き下がるが、こつして沈黙を得るとどうしても直前の会話が思い出される。

「そう言えばマークは三すくみをどう思ってるんだ？」

「なんだ、藪から棒に……」

その会話を務めて忘れるため、恭也は無理やり会話を絞り出す。言ってしまうから少し後悔しかけたが、マークは何でもないように答える。

「まあ目標かな？ 目指す場所が明確な方がいいって、何かの本に書いていた気がしたから」

「……………それだけ？」

思わず再度問いかけるが、もちろん自己防衛のためもあると付け加えられる。

「えっと、言いにくいんだけど……アルカンシェルもあるし、そこまで危惧はされなと思うんだけど……」

エイミイの一言にきよとんとするマークであったが、これも後日わかった事であるので仕方ない。アースラとは別の部隊が魔王の魔力を観測し、対処可能であると判断したとのことだ。

管理局最大の攻撃力を誇る魔導砲は、たとえ竜化したマークであっても理論上葬り去る力を持つ。マークの力も、決して対処できない力ではないのだ。

「そうなのか？ それじゃあ三すくみは必要ないか」

「結構あっさり……それなら、武器の類も全部公開したほうがいいんじゃない？ 手の内が知られていれば、対処方法も考えてもらえるでしょ、そうすれば自然と驚異も……」

「流石にそれは怖いな」

一度示された目標はそう簡単に無くならない以上、なのは達はマークに並ぼうと努力を続けるだろう。そうであるなら、殊更三すくみの関係に固執する必要はない。

ただ、続く忍の提案にはマークも賛同することは無かった。個人を信頼することはあっても、組織を信用することはマークにとって難しかったのだ。

(そうはいったものの、やっぱり三すくみは欲しいな……)

少し話をしたことで口が滑らかになったのか、自然な会話に移った。しかしその後もマークはそのことばかりを考えていた。表面上は同意をしたものの、マークは自身が人ではないという事を身に染みて知っている。だからこそ人を愛おしいと思うのだが、同時に恐ろしいとも思うのだ。

（どちらにしろ……別方向でも防衛策を考えておくべきかな？）

今は知らないことが多すぎる、そう考えマークが行動に出ることはまだなかった。そしてそんなマークの姿を見続ける少女がいたことに、気付く者はいなかった。



## 第50話 「久々の休日」

ようやく一息付けたリンディは、親友たるレティ・ロウランと久しぶりの食事に来ていた。とはいえ食事とは名ばかりで、今回に限っては愚痴とヤケ酒と言った方がしっくりくる荒れ模様であった。

「全く……少しは現場に立つ私の身にもなってみろって話よ……」

「天竜に魔王少女の処遇のこと？ それとも新たな英雄である星光の魔導士かしら？」

どれもアースラ預かりの問題児たちの二つ名である。とはいえ一般職員にまで流布しているものではなく、正確には一部の事情を知る者たちの隠語のようなものでもある。

「一人ずつならまだ対処のしようもあったけど、全部まとめてなんてもはや狂気の沙汰よ……まあ、他の所が引き継ぐなんて言い出したら、絶対拒否するけど」

「やりがいを感じてるってことでしょ？ ならいいじゃない。こっちは大変なのよ？ 局員の平均レベルの底上げなんて、人員不足の今やることじゃないでしょ」

マークたちへの処遇はとりあえず様子見といった意見が多いのだが、どこにだって極端な事を言い出す輩は存在するものだ。そしてその妥協案として出されたのが『武装局員の再訓練』だ。マークたちの戦闘に介入できる武装局員の育成を主題としたこの計画は、早急に結果を出せと言つ無茶な指示と共に、成長の見込みのある局員の引き抜きという、人員不足時にあるまじき手段が使われている。

「確かにあの映像を見せられたら、エース級の育成が必要だってのもわかるけど……」

「確かに普段からの人員不足については聞き及んでいるけど……」

二人とも、何より無い袖は振れないことも大いに理解していた。

「マーク君の話では、魔王の出現は闇の書と同じようにしばらく余裕ができるって予測だけど、ひょっとしたら魔物がどこかで発生するかもしれないって」

「聞いているわ……非殺傷設定に慣れきった今の局員では対処は難しいかもしれない、でしょ？」

これこそが人員不足を無視してまで再訓練を行う理由だ。これから起こるだろう魔王という災害への対策として、発生したての魔物を利用する。できればマークに戦闘訓練を頼みたいという者もいて、なかなか混沌とした状況になってきている。

とにかく、人員の強化をするなら今しかないのだ。そんな理由もあり、今までスポーツ競技者という事で控えられていた、ミッドチルダで行われている公式魔法戦競技会の上位入賞者などにも勧誘が行われるという話も出ている。

「マーク君の要請したある研究記録の代償として、さらに情報を引き出そうとする馬鹿もいるし……」

「死者蘇生プロジェクトの方ね……ロストログリアの実物はあっても、解析の方は遅々として進んでないみたいだし、『ここまで情報があるのなら』って大口叩いてしまって引けなくなったって話よ。自業自得ね」

それでも死者蘇生の実在を知ってしまった者たちにとって、『できませんでした』では済まなくなってしまったのだ。それこそ言いがかりに近い言い分でマークから情報を引き出そうとする程度に、彼らは追い詰められ始めていた。

「さらに人員不足の問題はマーク君の一族の力があれば……なんて理由で彼の故郷を探す者がいるって噂もあるわね」

「流石にこれは無いでしょ。天竜様一人でも持て余してるのに、これをさらに増やそうだなんて正気の沙汰じゃないわ」

「このような感じで、本人のあずかり知らぬところで問題が多発しているのだ。流石にはやてやなのははまだ話題に上がっていないが、それも時間の問題であろう」。

「はあ……そうなのよ……武装とか竜化の問題とかもあるのに、はやてさんのこともなのはさんのことも、結構な難題なのよねえ」

「なのはさんのことはフェイトさんも含めて、今は囑託や外部協力者だけど、ちゃんと訓練学校に入れて正式な局員にしたいって人たちもいるみたいよ？」

それもあったか、とリンディは頭を抱える。なのははともかくとして、フェイトは死者蘇生関係もありしばらくミッドチルダに近づけたくないというのが本音である。

はやての……というより守護騎士たちの行為の一応言い訳は作っているが、これはマークの証言が中心になってしまふ。この方法はプレシアの時にも使ったので、今回もそれで押し通せるという保証はない。

彼女たちの貴重な休日は、この後も延々と続く愚痴によって過ぎ去っていった。

「……というわけです。申し訳ありません、結局闇の書を取り逃がすことになってしまつて……」

「いや……それは仕方あるまい。むしろこれほどの存在を相手取って無事帰ってこられたことを喜ばうではないか」

「それでも、です」

その一方でクロノは、グラムに対し今回の件の報告を行っていた。報告とはいっても個人的なものであるので、堅苦しい書類などを持って来ていたわけではないが、『後は任せてほしい』と勇んで出撃した結果がこれでは何とも肩身が狭い。

「では言い直そう。報告にあった魔王の危険性は、闇の書の暴走以上と思われる。それに対し闇の書の暴走ですら一人の死者も出さずに事態を収束させた者は、過去に誰もいない。……これは十分、誇ってもいい功績だ。気に病む必要などない」

「……ありがとうございます」

だが、クロノがどう考えていようと、この結果は最善に近いものであり、文句のつけられる存在などいないのだ。むしろこれでクロノが下手な謙遜をしようものなら、大抵の局員は立つ瀬が無くなってしまふ。

「だがまあ、納得できない気持ちも理解できる。局も魔王対策に動いているし、わたしも全力で支援させてもらっつよ」

そう、いくらこれが最善に近い結果だったとはいえ、闇の書は健在といえる。今回が何とかなったと言っても、次につながるなければ何の意味もなくなってしまう。

そのような考えもあり気を引き締めるクロノの前に、グラムから一つのデバイスが置かれる。

「これはっ」

「もう少し早くに完成させられれば良かったのだが……マーク君の提供してくれた魔道書から、興味深い術式が見つかったね。それを搭載するのに予想外に時間がかかってしまったんだ」

その術式とは、増幅式とでもいうべき代物だ。マークが提供した

『ファイアー』と『エルファイアー』の魔道書の差異を検査した結果見つかったその式をさらに分析し……ついにミッド式のデバイスに組み込むことに成功したのだ。

「実験機にカテゴリされてしまったため、最低限の安全しか保障されていないが、同一魔法効果は、現在武装隊で正式採用されているデバイスの二倍近くなる」

「それほどの……」

もちろん、その増幅式を搭載したのが最新鋭のデバイスであったこともあるだろうが、それを加味したとしてもとんでもない強化具合だ。

「元々氷結魔法の強化用として作られていたのだが、この増幅式との併用が難しいらしくてな……システムを組み直すのにさらに時間がかかってしまった」

もちろん、時間をかけた甲斐のある一品になったが、と付け足すグレラムは満足げである。

「マーク君から提供された術式を使用したという事もあり『竜杖アスカロン』と名付けられたこの杖だが……先ほども言ったように実験機でね、まだ使い手が決まっておらんのだよ」

そこまで言うてから言葉を切るグレラムに、クロノは苦笑を返す。確かに未完成の実験機かもしれないが、強くなれる可能性が目の前にあるのにそれを見逃すクロノではない。

「僕にモニターをさせてください。執務官は実戦も比較的多いですし、マークさん達の件もあり、本局に顔を出す機会も多いですから適任でしょう」

「ああ、よろしく頼むよ。……ただ、くどいようだが実験機であり、最低限の安全しか確保されていないという事を忘れないでくれたまえ」  
「わかりました」

グレアムの念押しに、クロノは気を引き締めながらデバイスを受け取る。これで魔王と戦える力を得たと思うと同時に、この力がマーク達への牽制であると理解して僅かに顔をしかめる。

だが、そんなことを考えている余裕などない。今だってはやての処遇を決める会議が行われているし、マークの竜鱗の解析も進められているのだ。

「しかし……彼は今後どうするつもりなのかね？ 対魔王戦の切り札とされてはいるが、それは上層部の者にしか通じない身分だ」

死者蘇生のこともあり、基本的にはそれ以外の者たちにとって、マークはただの次元漂流者でしかない。そんな状態では切り札としての力を発揮できないし、それ以上に融通を利かすのが難しくなる。

「しばらく地球で隠居するというのは、ジュエルシード事件の後の方針でしたからね……はやてやなのはと三すくみを作ると言っていました、それもやめるみたいですが……」

「確認しておいてくれ。……犯罪者の確保ばかりでなく、護衛の任務も……いや、それをするにはまだ信用が足りないか？ とにかく、できるだけ多くの人と接する機会を、こちらでも用意しておこう」

フエイトのこともあり、研究員のような身分でいることを望むかもしれないという前に、グレアムが今後の展望をわずかに指し示す。それはより多くの人と関係を持たせることで、一人でも多くの味方を作らせるためであり、三すくみなんかより、よっぽど効率的な自己防衛方法だ。

ただし、これをするの研究時間が大幅に削られる可能性もあるの

で、マークからすると有難迷惑かもしれない。

(研究するのと人脈を作るの……自分が二人必要だとか言いそうだな)

そこまで考えたとき、ふと、クロノはある考えに思い至ってしまっ。

「……そう言えば、プロジェクトFの情報は、どこが管理しているんですか？」

「ん？ ……確か、死者蘇生プロジェクトの方で管理しているという話だったかな」

噂では、無駄な大口を叩いて追い詰められているという話の所だ。それを思い出したとき、とても嫌な予感に背筋が震えたが、そんなことは流石に無いだろうと否定する。

(考えすぎだ……そうだな、明日から数日ほど休暇を取ろう。きっと疲れているんだ)

リンディやエイミイが聞いたら卒倒しそうな考えを浮かべつつ、クロノは帰路についた。ちなみに、帰宅したクロノがしばらく休むと聞いたエイミイは真っ青になり、次の日二日酔いで帰宅したリンディを見たときはいつそ真っ白になっていたという。

「そんなわけで、ぜひお知恵を拝借したいんや」

「拝借ってたってねえ……そもそもなんで仲違いしてるのかもよくわからないし」

ところ変わってバニングス邸。はやては五人の友人たちに、ある相談事を持ちかけていた。

「別に敵対してたからってわけじゃないんだよね？」

「うん、彼女たちもわたしとなのはには普通に接してくれてるし、クロノ達にもちゃんと交渉相手として接してたみたいだし」

その相談事とは、守護騎士とマークの関係についてである。この間のパーティーで明るみに出たのだが、どうにも仲が良くないらしい。三すくみも取りやめるとの話であるし、はやてからしたらできれば仲良くしてほしいかった。

「お互いがお互いのことを嫌ってるのかな？」

「うーん……マークさんも微妙に挑発してたみたいだし、お互いって思ってた方がいいかな？」

ユーノたちはマークが来る直前の会話を知らないため、自然とそう言う結論へと落ち着くことになる。

「じゃあ、出会った時から順番に考えてみようか……マークが最初に戦ったのはシグナムだったよ」

「わたしたちが初めて守護騎士の人たちと遭遇した時だね」

フェイトとなのはが思い起こすのはヴィータによる襲撃であったが、はやてのことを思い微妙に詳細を省きながら説明する。とはいえ、魔王戦の後になるが、はやても騎士たちに事の詳細は聞き及んでいるので、その心配りのみありがたく受け取っておく。

「マークさんは特にシグナムさん達に対して、何か感想とか言っただけだった気がする」

「クロノに『強い信念を持った騎士だ』みたいなことを言ったらしいよ」

「……なんや、意外良い評価に聞こえるんやけど？」



事実マークの守護騎士達への評価は高いのだが、残念なことにそれを知る者はここにおらず、それを察することができるほど、マークも守護騎士たちの話をしていなかった。

「それじゃあ、むしろ出会った当初は敵対こそしていたけど、人格的には好意的だったってことかな？」

「そう言えばシグナムも、敵対してた割には嫌悪感とか見せとらんかったで？」

唯一当時のシグナム達を知るはやてが言うには、強敵として警戒こそしていたが、嫌悪などの感情は見られなかったという。

なら原因は魔王戦となるのだろうか。

「はやてちゃんと戦ったからとか？」

「それだったらわたしも嫌われてるはずだよ？」

「それにわたしはマークさんとの戦いのこととか、別に気にしとらんしなあ……………」

それ以前に、魔王に乗っ取られたはやてとは守護騎士たちも戦っている。しかし仲違いの原因が戦いに無いとすると、ますますわからなくなってくる。

「わたしたちが知らないうちに話をして、その時に何かあったってことになるの？」

「流石にそれは無いと思っけど……………」

そんな時間は無かったと言いたいところだが、マークはふらりといなくなつて、いつの間にか帰って来ることも多い。一番印象に残っているのは病室からの脱走だが、それ以外にもちよくちよくいなくなつていたりする。

「考えてわからないんだつたら、強引にいつてみる？」

「強引って……何するん？」

「例えば……お互い不満を直接全部言わせて、思いっきりケンカさせてみるとか？」

「……『なかなかやるじゃねーか』『お前もな』みたいな感じ？」

「そう、そんな感じ」

アリサの案に、河川敷で殴り合うマークとシグナムを想像するはやて達であったが、どうにも相打ちで二人が倒れている姿が想像できなかった。もっとも、日本の文化に疎いフェイトやユーノにははやての様な想像には至らず、半年前のジュエルシードをかけた決闘が思い起こされることになった。

「ま、まあケンカはともかく、ちゃんと話し合う機会を作るのはいいと思うよ」

「そ、そうだね、ケンカは別として、ちゃんと言葉を交わすことは必要だと思うよ……」

少し顔をひきつらせながら、ユーノとフェイトは意見を述べる。そもそもマークとの一対一はシグナムとザフィーラがやっているのだが、どうやらはやてはこの案が気に入ってしまったようだった。

「流石に全力で戦うのはアカンやるから、いろいろ制限してもらえば……」

「制限した時点で思いっきりとは言えないと思うよ？」

「まあ結果使わずに、派手にならないようにとか言えば大丈夫じゃない？」

フェイト達もそれならそうひどい事にはならないかと納得してしまい、こうして守護騎士とマークの模擬戦が決まってしまう。

「その後もうしばらく、彼らを集めるための策が練られることになっ

たが、当然のように本人たちに内緒で事を進めることになったのは言うまでもないだろう。

## 第51話 「作戦開始」

「いつもは私が先に休みをもらうことが多いから、今回はクロノ君たちが先に休むことになったんだ」

「ん、それはいいが、なんで俺がその補佐役に残されているんだ？」

「まあいいじゃない、どうせプロジェクトFの資料が来るまで暇なんじゃない？」

「一応、今回の戦いで使った武器の手入れを、腰を据えてやりたいんだが」

マークはそんなことを言いながらも通信用として支給されているデバイスを取り出し、エイミィの仕事を手伝う用意をしている。以前『なんだかんだで手を出してしまう性格』と忍に言われていたが、まさにその通りであった。

「ああ、報告書の類はもういいよ。というより、マーク君たちに手伝わってもらえるレベルの報告書はもう残ってないから」

「……結構、これ手を出していいのかなって思えるのがあった気がしたけど？」

「……できれば見なかったことにしてくれないかな？」

そう言えばあまりの忙しさに『もうちょっとぐらい……』と基準が甘くなってしまった時もあったかもしれない、とエイミィはひそかに冷や汗を流す。

マークはそんな姿に軽くため息を漏らしながらも、この会話を無かったことにするために一度席を立ち、飲み物を入れることにする。

「ありがとう」

「どういたしまして……で、書類の類じゃないんだったら、何を補佐しろって言うんだ？」

いつものお茶を入れて席に戻ってきたマークはいぶかしげに尋ねるが、エイミィは当然のように武器の話だよ、と答える。

「……俺が書いた報告書の中に、武器の報告はあった気がしたけど？」  
「それとは別に、もっと詳しいことを知っておきたいんだよ。あ、これは管理局がじゃなくて、私たちが、だね」  
「なるほど」

確かに、近い人にはマークにできることをある程度は理解してもらった方がいい。共に戦う者との連携は当然として、可能ならばその情報をつまく使って、マークがつまくこの世界に溶け込めるように取り計らってもらいたいところだ。

「納得してもらえたみたいだし……まずはこの剣でいいかな？」  
「……ああ、ロイド達と反管理局団体を制圧した時のか」

エイミィが最初に出した映像は、おそらくロイド隊の隊員から提供されたものだろう。敵の大将を仕留めるのに使用した大剣が鮮明に映されていた。

「えっと、局の方には炎の変換資質を利用した技で通っているけど、これ剣の能力だよな？」

「両方かな？ 炎が出たのは剣のおかげだけど、魔力を通したのは『華炎』って言う……いわゆる奥義だな」

「……ちょっと反応に困るなあ」

剣についての話がメインのはずだったが、このマークの説明では『魔力付与斬撃』が奥義扱いであることの方に目がいついてしまった。ちなみに管理世界において、近接戦での武器に対する魔力付与は基本中の基本だ。

もちろん、なのはのディバインバスター並の魔力を一撃の斬撃に乗せられる存在はまずいないので、基本の究極がすなわち奥義であるともいえる。

「何で困るのかわからないが……名称は烈火の剣『デュランダル』で、神将器と呼ばれる武装だ。その由来はエレブ大陸で起こった人竜戦役において活躍した……まあ、勇者の剣だな」

「その勇者がマーク君？」

「そんなわけないだろ」

人と竜の戦いに、混血であるマークは手を出すことはほとんどなかった。それでも戦役時にこの大陸にいたのは、この地に住む竜族を別の世界に繋がる『門』へと導く役目を担っていたからだ。

「まあ逃げた奴もいれば、残った奴もいた。戦った奴らはほとんど死んだが、生き残った奴らのために、砂漠で隠れ里を作ったりもしたな」  
「……」

懐かしそうに語るマークに帰りたいのか尋ねたくなったエイミィであったが、寸でのところでのその言葉を飲み込む。その様子に気付いたマークは、話がずれてしまったと、改めて武装の説明に戻る。

「経年劣化も含めてかなり弱っているが、それでも対竜戦闘では無類の力を誇るだろっ」

「……全盛期の力を持たないことを喜ぶべきか、それにもかかわらずこれほどの力を持つのかと恐れ戦くべきか、迷うところね」

映像にあるニアSランクという強者の守りを薄紙の様に打ち砕いた一撃を見て、エイミィはやはり微妙な感想を漏らす。

ちなみに『デュランダル』が業火の理『フォルブレイズ』や至高の光『アーリアル』と同列の神将器であると付け足したときの方が反応

がよかったので、可能ならば魔法系の神器と一緒に語った方が理解しやすいのだとマークは理解した。

「次は魔王と戦った時に使った槍かな？」

「えーと……そうだね、前半戦で使った炎の槍と、後半戦で使った防御を貫いた槍。それに使用こそしなかったけど、竜化する前に取り出した剣も強力なものだよね？」

「……よく見てる事で」

二振りの槍はともかく、剣まで追及されるとは思ってなかったマークが苦笑するが、あの戦いで半端な武器を使用したと思うほど、管理局は甘くないのだ。

「最初に使った槍がマギ・ヴァル大陸において、魔王と戦ったための武装である双聖器の一つ炎槍『ジークムント』で、投擲に使った槍が万物を貫く槍『グラディウス』だな。最後の剣が炎槍と同じく双聖器の氷剣『アウドムラ』だ」

残念ながらこれらの武器と同列の魔法は使用していないため、エイミィにそのランクをうまく表現できないかもしれないかとも思ったが、その力を示すのは『対魔王』の一言で片が付いた。

「『グラディウス』の方は……アカネイア大陸における三種の神器の一振りで、俺が知る限り最も古い神器だ」

「最古の武器が最強って……やっぱりロストロギア級なんだね」

いにしえに創られし、現代では再現できない神器……そしてそれに続く最高位の武装は、管理世界においてロストロギアと呼ぶにふさわしいものであった。

もっとも、マークはただの一言も『グラディウス』が最強だなんて言っただけだったりするが……

「まあ、俺がいた世界では……聖書とか魔書とか例外はいくつかあるが、基本的に魔法より武器の方が上位にあったからな」

「やっぱり聖剣とか魔剣とか？」

「それもある」

もつこここまで来たら『まだ強力な武装を持っているのか』と、いちいち驚いたり呆れたりするのも億劫になってくる。エイミイはマークがお茶を入れ直しに立った隙に、小さくため息をつきながら考える。

(本局の意向としては、早くミッドに移住してほしいんだろうなあ……)

それには監視がしやすくなるという意味もあるが、何より管理局に対して帰属意識を持ってほしいからだろう。フェイトとの関係を見る限り、ミッドをホームと認識すればよほどのことが無い限りこれを攻撃するとは思えないからだ。

事実として、敵対する者には基本的に同情などをすることはあっても容赦はしないが、味方と認識したものには意外なほど甘いのだ。

(死闘を演じた割には、はやてちゃんに含むものを持たないみたいだし……懐が広いって言うべきか、無頓着というべきか悩むね)

少なくともエイミイには、自分の胸に風穴を開けた相手の退院を祝う事はできないと思う。

そんなことを考えながらお茶を入れ直すマークを眺めていると、玄関から扉の開く音が聞こえてきた。

「ただいま」

「おじゃまします」



「お帰りフェイトちゃん、そしていらっしやいなのはちゃん」「ふむ、ちょうどいいな。お茶を入れてるんだが、飲むか？」

マークの申し出を、フェイトはまたすぐ出かけるからと答えることで柔らかく断る。その横でなのはが少しひきつった笑みを見せていたが、マークはわずかに首をかしげるだけで引き下がった。

「それでその、すずかの家に行くんだけど……マークも来ない？」  
「えっと、すずかちゃんに剣を教えることになったんですよね？ 全く来ないって、少し落ち込んでましたよ」

その直後になぜか月村邸に行くのに誘われたマークは、状況がいまいち理解できずに思わずエイミィの方を見てしまう。  
それがどうやら伺いを立てているように受け取られたようで、別に「かまわないと言われてしまう」。

「別にここに居てもやることないし、非常時に連絡がつくようになっ  
ていればどこに居ようがすぐに出動できるでしょ？ それに闇の書  
関係は落ち着いたわけだし、そう呼び出されるようなことはないよ」  
「……………わかった」

いつの間にもすずかに剣を教えることになったのか疑問に思いつつ  
も、マークは出かける準備を始める。それをほっと安堵のため息をつ  
きながら待つフェイト達に、マークは気付けなかった。

「(これでこっちは何とかなったね)」  
「(うん、後ははやてちゃんだけど……断られる姿が想像できないし、  
大丈夫だよね！)」

ちなみに教える云々については『この件を預かる』というくだりか  
らのすずかたちの勘違いなのだが、マークも自分と同じ人から外れた

存在であるすずかなら教えられるかもと、割と乗り気だったりする。そして時を同じくして、八神家でも似たような会話が繰り返り広げられていた。

「私が……ですか？」

「ええ、今はなのはのお兄さんに教わってるらしいけど、やっぱり魔導師の人にも見てもらった方がいいと思って……」

「それやったらシグナムに頼んでみようかってことになってな。これからすずかちゃんちに行くし、さっそく声をかけよって」

アリサと共に一度帰宅したはやてが、騎士たちに話の経緯を伝える。管理世界で戦うことになるのなら、やはり魔導師に（正直は騎士であるが）教わった方が近道なのではと考えたのだと。

「正直、私は人にものを教える柄ではないと思っていますが……」

「そんな難しく考える必要はないわよ」

「ちよっと稽古を見て、手合わせして、長所と短所を指摘する……そんなもんでええと思うし、そこまでしっかりとした師弟関係を結ぶわけやないんやから」

意外なほど気乗りしないシグナムに少々焦る二人であったが、これも別段不思議な事ではない。シグナム達守護騎士は、ある程度の経験による成長はあっただろうが、最初から完成した状態で作られた存在だ。成長の過程を知らないし、ただ歴代の主に従うだけだったので、他者に指導するイメージが持てないのだ。

「(うーん……これじゃ予定通りというわけにはいかんか？ 日を選らんどつたら年を越してしまいそうやし……)」

「……また何か企んでいるんですか？」

そのやり取りを聞いた瞬間に、今回守護騎士たちを連れ出すのを諦

めたアリサは思わず頭を押さえるが、思わずつぶやいてしまったのはや  
ての一言を拾ってしまったシグナムは、ため息をつきながら外へ出る  
準備を始める。

「え？ 今話の流れで、なんで準備を始めるの？」

「まあ、家族だからかしらね」

アリサの疑問に答えたシャマルも、すでに外出の準備を整えてい  
る。というのも、この半年の間に、はやてのちょっとしたいたずらや  
サプライズがあったのだ。ただ、その中に不快になるようなものは無  
かったので、何となく気付いても現場に一度足を運ぶのが慣例になっ  
ていたりする。

しかし、今回は友人も巻き込んだ大規模なもののようなので、それ  
がどんな結果になるのか気になるようで、ヴィータやザフィーラもつ  
いて行く気が満々である。

「(流石に全員一遍はまずいかも……?)」

「(手間が省けたと思うわよ！ ……そうとでも思わなきゃ、やってら  
れないわよ！)」

今度はちゃんと内容が聞こえないように小声で話しながらも、幸先  
はかなり不安である。一対一ならともかく、全員を宥めながら話をさ  
せられる自信は全くなかった。

だからと言って来るなどとは言えない。もし言ってしまうえば、今回の  
件がいつもと違うことを強調するようなものだ。

(「みんな」と考えるのも変やけど……フェイトちゃん達、失敗しとっ  
てくれへんかなあ)

三十分もない月村邸までの道のりは、はやてとアリサにとってとて  
も長い道のりとなったそうだ。

## 第52話 「和解への一歩」

フェイトとなのはに誘われ月村邸にやってきたマークは、さすがが抜き放った『マーニ・カティ』をみて、思わず目を細めていた。

「懐かしいな……この剣身を見るのも、本当に久しぶりだ」

「あれ、マークさんの剣なのにですか？」

「いや、俺の剣じゃない」

さすがの問いかけをマークは否定し、一同の首を傾げさせる。それに対してマークは、持ち主であることと使い手であることはイコールではないとだけ告げる。

「うーん……ユーノとレイジングハートみたいなもんかな？」

「……何となくわかりました」

マークの話に、一足先に月村邸にやってきていたユーノだけが納得の意を見せるが、彼もこの事をつまぐ説明できないように説明を求めらるるのは達の視線を前に、思いつきり目を泳がせていた。

「とにかく、俺では使えない剣なんだ。はっきり言って、それを無理に使うぐらいだったら『木の枝』を振り回してた方がまだ」

「……精霊の加護って極端なんですな」

事実として『マーニ・カティ』が無ければ生き残れなかったかもしれない少女にとって、場合によってはこれが『木の枝』にも劣ると言われれば言葉に困るのも無理はない。

「まあ『マーニ・カティ』は格別だ。正直に言って、ここまで使い手を選ぶ武器はそうないからな」

ただ、『マーニ・カティ』を超える武器ならたくさんあることは付け加えておく。マークの居た世界の武器屋で売っていた『銀の剣』だって、攻撃力なら五割増した。

「まあ剣の力は置いていて、鍛練を……」

「何でお前がここにいんだよッ……」

そして十分に『マーニ・カティ』を堪能したマークがようやく指導に入ろうとした時、唐突に怒鳴り声が響き渡った。そちらへ振り返るとここまで案内して来たであろうファリンの後ろに、八神家一行とアリサがいた。

「……なるほど、そういうことか」

「何一人で納得してやがるッ……」

何となく現状を理解したマークが、怒鳴るヴィータを視界に収めつつも子供たちを見やると、何やら謝罪と納得のアイコンタクトをしていた。

「おい、聞いてんのかッ……」

「ああ、そんなに怒鳴らなくても聞こえてるさ。……だが、お前だってちょっと考えればわかる事だろ？」

そのはぐらかすような答えにまた怒鳴り返そうとしたヴィータであったが、マークにわからないと思われるのも癪であったので仕方なく推理する。

結論はすぐに出た。それはマークもすずかにアドバイスをしに来たなんて言うものではない。自分たちの主が友人と結託し、マークと引き合わせたというものだ。

(アイツの考えたニすくみも廃案になったわけだし、仲よくするに越したことはねーんだろーが……)

理屈の上ではそれが正解だとわかっているけど、主がそれを望んでいるとわかってても、それでも感情が納得しない。

(つーかコイツなら仲間だろうが、それが最上だと判断したら切り捨てる！ そんな奴、信用できない！)

半ば以上、マークに敵意を向けることを許すための言い訳であることを自覚しつつも、それでも感情を止めることができない。ただ、あながち間違いでないのが恐ろしいところである。

(まあ、極力そんなことはしないがな)

いまだ睨み続けるヴィータに苦笑しつつも、正確にその内心を読み取り心の中で反論する。仲間を切る必要があるなら、それは仕方ないことだと思う。だが、それがその時最も効率がいい程度のメリットしか無ければそんなことはやらない。

(せめて最終的な損害をそれなりに減らせる程度のメリットが無いと)

つまりそれぐらいのメリットがあれば切り捨ててるのだ。もちろん、犠牲を最小にして成果を得るのがマークの軍師としての基本方針だ。時間や物資をいくら使っても、犠牲が無いに越したことはない。それに加え『指先一つで歴史を変える』とまで評価されたその実力が、基本方針以外の点でも優秀であったことを示している。

「それぐらいにしておけヴィータ。これ以上は主はやての迷惑になる」

「……ちっ」

自分よりも激しく反応したものが居たため冷静さを保てたシグナムが諫め、ひとまずこの場を収める。だが内心はヴィータとそう変わらない。むしろマークの実力を認めているがゆえに、なぜはやてを殺すという解決法を取るうとしたのだとヴィータより強い憤りを感じていた。

「まあ、そっちが俺のことをどう思っっていようが構わないが……管理世界に居辛くなるような真似だけはするなよ?」

「そこまで考え無しじゃねーよ……」

もう素直に忠告をしているのかケンカを売っているのかわからない発言をしつつ、マークははやてに視線を向ける。

「それで、わざわざこんな場を用意したんだ。落としどころぐらい用意してるんだろ?」

「え? あ、え」と……その……お互い本音をぶつけ合えば、少しは仲良くなれるかなーって思っただけやから……」

一触即発の空気に委縮していたはやては急に話を振られたことに驚き、そして落としどころなんて全く考えてなかったことに焦る。今回は本音で話し合えば和解できるんじゃないか、ただそれだけしか考えてなかった。

だがマークはその答えに一瞬虚を突かれたような顔をしてから、それなら仕方がないなと笑った。

「そつだな、まずは話し合っべきだったな。前言は撤回しよう。お互いの気が済むまで、存分に話し合おうじゃないか」

「……はやてがそつ言っなら、わかったよ」

マークはどこか懐かしいものでも見たかのように、ヴィータ達はしぶしぶと話し合いに同意する。だが同意したのはいいが、マークにはこれと言って語るべきことなどないわけだが……

「そんなわけだし、先手は譲る」

「そっちはなんもなくて、こっちはっかり文句言っなんて、まるでアタシ等がいちゃもん付けてるみたいじゃねーか……」

「そんな」と言われてもなあ……」

まるでマークがヴィータ達を悪役にしようとしているかのように思われたらしく、話はこじれてしまっ。その怒りの矛先をのらりくらりとかわしつつ、結局のところヴィータ達がこんなにも意固地になっているのは、怒りのやり場がないせいだろうとマークは推測する。

(自分の主を殺そうとしてた奴が目の前でへらへらしてたら、そりゃあ冷静ではいられないよな)

そんな感想を抱きつつも平然と殺し合った相手の隣に立ってるマークは、別に感情が壊れていたりするわけではなく、ただ単に慣れているだけだ。どうにも彼の隣に立つ友は、懐が広いというか寛大というかおらかかというか……たとえ敵対したものが相手でも話せる人物であることが多かったのだ。

だが、まともな感情が芽生えてたかだか数か月の相手にそんなことを求めても仕方がない。なら怒りのやり場を整えてやるのが一番だろう。

「……」のままじゃ話が進まない。いつそこっちで話をつけるか？」

「望むところだッ！」

「なんでそうなるん!？」

マークが拳を作るのに即行で同意するヴィータであったが、これに



ははやて達も驚く。最初こそ河川敷での喧嘩みたいにならないかと思っていたはやてだったが、予想以上の険悪さにやめるべきだと思っていたのだ。しかし、そんなはやて達の思いとは裏腹に、マークはさらに挑発を続ける。

「別に四対一でも構わないぞ？」

「誰が……」

その挑発にヴィータはあえて乗り、一瞬で騎士甲冑に姿を変えマークに怒りの鉄槌を振り下ろす。それは魔王戦に参加し、マークの実力を知るが故の不意打ち。せめてはやてに槍を向けたことに一矢報いるためのものであったのだが、それも甲高い音を立て弾かれる。

「ちよっ、ヴィータ!？」

「マーク!？」

あまりに急な開戦に驚く面々であったが、それでもフェイトは咄嗟に周囲に結界を張る。これはエイミィの方でも観測されたが、通信しなかったたので訓練で何かやってるのかな、程度にしか思われなかったようだ。

「やるじゃないか」

「うるせえ！ それより、その武器はなんなんだよっ！」

抜き打ちの速さを称賛するマークに怒鳴り返すヴィータであったが、その理由はふざけるとしか思えないマークの持つ武器にあった。

「……ねえ、あれってフライパンよね？」

「えっと……」

「私にもそう見えるわ」

あまりのことに絶句する一部の思いを代表するアリサの質問に、マークの相方であるフェイトですら言葉に困るが、今見ているものが現実であるとシヤマルの一言によって確定する。そう、今回マークが使っている得物は、紛う事なき調理器具である『フライパン』であった。

しかし、そんな得物を持ち出したマークであったが、別にふざけているわけでもなければ、手を抜いているわけでもなかった。

「……あのフライパン、ヴィータの一撃を平然と受け止めているように見えるのは気のせいか？」

「ああ、私にもそう見えるな」

そのことにいち早く気付いたのはザフィーラとシグナムだ。闇の書事件の際マークが使用していた『鋼の大剣』ですら激戦に耐えられずに粉碎されたのに、ただの『フライパン』がヴィータの一撃でへこむことすらないというのは明らかにおかしい。

「正直、フライパンで戦ってるエルフ耳もギャグにしか見えないし、それについて真面目に考察してるのもシユールなんだけど……それで、あなたたちは参戦しないの？」

「騎士として、」のような場で多対一をする気にはなれんし、私とザフィーラはすでにあの男に敗れているからな」

「私は後衛型だから、彼とじゃ戦いにならないわ」

微妙に内心を隠したアリサの質問に、シグナム達が応える。マークの戦いを見れば見るほどシグナムのやりきれない気持ちは大きくなるが、現状で私怨が残る状態で手合わせというには、騎士の誇りが許さなかった。

(それでも、本音で語るのなら問いただす必要はあるのだろうか……)

シグナムがそう心に決めるとき、少し離れたところではヴィータが割と本気で歯噛みして悔しがりながら、マークに猛攻を仕掛けていた。

「何でそんな得物使っていないながらここまでやれるんだよ！」

「そんなって……これでも負の女神の加護を得た神器なんだぞ？」

「は？」

激しく撃ち合い拮抗していた状況の中、思わず呆けて止まってしまったヴィータに、マークは思わず一撃を加えてしまう。パークン、という音が鳴ったが何とか加減できたよう、ヴィータのダメージはせいぜいこぶができた程度だろう。

「あ、悪い……じゃなくて、以前に正の女神と戦った時、負の女神が加護をくれるっていうから貰ったんだが……当時はまだまだ若かったからな。ちょっとぶざけてすり替えてみたんだ」

「なにやってんだっ!？」

「負の女神にも、当時の仲間にも怒られたな」

実際は怒られたとかいうレベルではなかった。ヒトの未来をかけた一戦でのこのぶざけた行為は、割と本気でマークの評価を一転させたのだ。それでも腐っても神竜というべきか、マークは『フライパン』を片手に竜鱗族を蹂躪し、精霊相手に無双したため、最終的には笑い話で済んだのだ。

ちなみに正の女神が『フライパン』で引っ叩かれたことは、まともな武器で切りかかれるよりある意味ダメージが大きかったというのが後年の女神の感想であることをマークは知らない。

「まあ、加護と言っても俺からしたらとてつもなく頑丈になる程度の効果しかないんだけどな」

「……しょうもない加護だな」

実際はヒトの身では傷一つつけられないはずの女神と戦うのに必須の加護なのだが、神の名を持つ竜の血を引く存在であるマークにとってはその程度のものでしかなかった。

少しばかり氣勢がそがれたヴィータだったが、マークの言葉の内容を吟味すると、再び怒りが帰って来る。

「何で……」

「ん？」

「何でそんな力があるのに、テメエはッ!!」

それはシグナムと同じ疑問。否、疑問というには守護騎士たちは賢すぎた。それでも女神と対峙したという話は、心の内にくすぶる思いを言葉に変えさせるだけの力を持ってしまったのだ。

「神様とも戦ったんだろ？ 魔王とも戦ったことがあったんだろ!?  
なのに、なんで……!」

「解放を狙って失敗すれば、それ相応の犠牲を払うことになる。……  
魔王を倒すという事と解放するという事は全く違う力があるんだ」

そう、殺す力と救う力は決してイコールで結べるものではない。マークの選択は、前者を振るうものとして最も効率的な選択なのだ。だが、必然性があったからと言って納得できる類の話ではない。

そして、守護騎士たちはそれらのことがわからないほど愚かではなく、飲み込めるほど達観してはいなかったという事だ。

「まあ、こんな話は年寄りの言い訳ととっていい。ただ、ハヤテとはしっかり話し合っべきだと思っぞ?」

「どっぴいっ意味だ!」

さらに激しくなる剣戟の中、マークは初めてヴィータにとってわからないことを言う。

「あの子、結構自分の命を軽く見ている節がある。流石に殺すと言った俺に同意するのは達観のしすぎだ」

「……………」

その一言に、感じたのは驚愕か恐怖か。あるいは別の感情だったのかもしれないが、それを確認する前に、マークの一撃がヴィータの意識を刈り取った。

「へえ……………これが女神の加護を得た『フライパン』か」

「その昔、夜襲を受けたときに戦闘に使ってしまったので以来武器として保管している。……………これを使って料理なんかしたくないからな」

ユーノが『フライパン』を見る目にわずかな期待が見えたため、マークは一応の忠告しておく。その一言だけで顔をひきつらせたという事は、マークが何を言いたいのか理解したという事だろう。誰だって敵兵の血肉のついたフライパンで作った料理など食べたくはない。

と、そんなことを話しているとヴィータを寝かせてきた八神家一行が戻ってきた。

「あ、ヴィータちゃん大丈夫でした？」

「シャルルの診察では、軽い脳震盪という事だ。数刻もしないうちに目を覚ますだろう」

念のためシャルルも付いていると付け足すシグナムに、一同はほっと溜息をつく。

「俺って信用無いのな」

「別に信用してないわけじゃないけど、頭はやっぱりデリケートなど

「ころだから」

少し落ち込んでいますとアピールするマークを、フェイトがフォローする。その様子を見て苦笑しつつも、シグナムはマークに向き直り今回の一件を終わらせるべく言葉を紡ぐ。

「結局、我等の思いは主はやてを傷つけたことに対する怒りがほとんどだ。……それも、勝手な思いだと理解しているが、やはり貴方を許せそうにない」

「シグナム……」

主がさほど気にしていない、否、むしろ魔王に乗っ取られ傷つけたことの方を気にしている以上、この怒りは主の意にそぐわない余計な事だとも思うが、それでも守護騎士たちはこの場でマークを許すことはできなかった。

とはいえ、ヴィータと戦うマークを見て、一応マークの言い分も聞いてある程度すっきりしたのも事実だ。

「またの機会に、今度は私も手合わせ願おうか？」

「構わんよ。まあ、結果はわかりきっているがな」

「言ってくれる……！」

マークの挑発に好戦的な表情を浮かべるシグナムであったが、以前ほど嫌悪の情は感じられなかった。

それからすずかに顔を向け、今回の件を謝罪する。

「庭で戦闘を始めてしまい申し訳なかった。またの機会にわずかながら指導をするという事で、今回の件の謝罪としたい」

「はい、わかりました。それでは、またのおこしを楽しみにしています」

とりあえず後を引かないように真面目に答えたさすがに頭を下げ、これ以上面倒事を起こさないようにとシグナムとザフィーラは屋敷を後にした。はやてはヴィータが起きたらそろって帰るつもりらしい。

「それじゃあ、遅くなったが鍛練を始めるか」

「はいー！」

「せっかくだし、わたしたちも参加していい？」

「いいぞ？　ただし、俺は人にものを教えた経験がほとんどないから、最初は加減できないぞ？」

フェイトを筆頭に参加を申し出る子供たちに一言釘をさすが、マークとて鬼ではない。一応最初の鍛練は、人の作ったマニュアルに沿って行う予定ではある。

「エレブ大陸、リキア同盟の一つ、キアラン領で聞いた『兵士強化マニュアル』……一応兵士じゃない分少し減らして、いや、スズカたちの体力を知るためにも全部やってみらった方がいいか？」

精兵ですら悲鳴を上げかねないマニュアルを思い起こしながら訓練内容の一端を言い渡すマークに、すずかたちは喜び勇んでついて行ったとか……

## 第53話 「邂逅」

一言で簡潔に述べると、すずかたちの鍛錬は『失敗』した。マークの用意したプランにすずかたちはついて行けなかったのだ。

まず最初に新しい手足に慣れていないフェイトが脱落し、次にあまり体を動かすのが得意ではないというなのはがギブアップした。アリサもそれなりに頑張ったが、そもそも体を鍛える目的もないので途中でやめてしまい、最後まで残ったすずかは全行程の三分の一程度終わったころにマークが止めた。

「これって、訓練を受けた兵士をさらに鍛えるためのマニュアルなんじゃないの？」

というのが、途中から鍛錬の様子を見た忍の意見であったが、一応このマニュアルを作った人物の趣味が『新兵の訓練』だったことから、その可能性は低いとマークは思っている。

それでもできなかったことを根性でやれというほど無情ではなく、いくつかの無茶な項目を抜いたプランを、さらに学校などに通うことを前提にさらに削り整えることになった。

「やっぱり俺には人材育成とか無理だな」

「そう簡単に諦めるな。一度請け負ったからには最後までやり遂げる」

訓練の翌日、ある書類を提出するために管理局の廊下を歩く中、何か悟ったかのように情けないことを言うマークに、クロノは半ば呆れつつも忠告する。

そりゃ放り出すつもりはないけどさ……等と言いつつマークであったが、プランの修正のためにと取り寄せた教導資料のあまりの多さにクロノもさすがに同情の色を見せる。



「一応リーゼ達にも声をかけてみるか？ まあ武装局員の再訓練が行われるという事で、時間が取れたとしても本当にわずかになってしまっただろうけど」

「それも魅力的だが、先にキョウヤと話してみる。後は数日様子を見ながら調整して、それでもだめならアドバイスをもらおう」

クロノの師でもあるリーゼ姉妹であったが、彼女らは管理局でも有数の実力者であるらしい。魔王という規格外が存在が認知されてから再訓練計画が持ち上がるまでの間に、耳の早い者たちから教導の依頼が山のように来ているらしい。

先日グラムに報告に行ったときクロノが聞いた話では、それこそ猫の手だって借りたいと言っていたとか何とか……

「まあ、スズカの訓練についてははまだ五年間という時間があるからいい。問題はこっちの方だ」

「……そうだったな」

そう言いながら、マークはある窓口に目的の書類を提出する。受付の女性はその内容を確認し驚きつつも、機械的に書類を処理してマークに新しい書類を渡した。

「……また別の所へ行かなきゃならないのか」

「仕方無いだろ、管理局というのは大きな組織なんだ。一か所で何でも処理できるはずがないだろ？」

「それもわかるが、面倒なことには変わりはない」

盛大に愚痴を言うマークを諫めるクロノであったが、内心ではあっちに行ってこっちに行ってというのに辟易としているのに変わりはない。

「それはともかく……これで正式に局員になったわけだが」「実感が無いな。技術士官とかいう役職になるんだっただか？」

そう、本日マークたちが本局に来たのは、正式にマークが局員として所属するための書類の提出と、マークのために創られた特殊な部署への配置及び研究室の貸与というイベントのためだ。

それも技術士官という言葉の通り、所属直後から三等陸尉なる階級が与えられているという厚遇である。

「多くの権利を与えるための階級という事だが、当然権利には義務も付きまとう。要はあなたにしがらみというものを作らせたいんだらう」

「そういう事は思っても口にしないもんだぞ、クロノ。……まあ、『プロジェクトF』関係の技術は医療に应用が利くようだし、ある程度の技術提供は当然の事だらう」

お互いに利用し、利用される存在というのが納得できないのかクロノの口調にとげが見えるのを今度はマークが咎める。マークの感想としては、クロノはなかなか理解があるように見えて潔癖だったり、融通が利かないように見えたら、意外と話せるという良くわからない部分がある。

むしろ、利益で動く関係の方がわかりやすく有難かったりするのだが……

「とにかく、エーギル関係のものでなければ大抵の技術は提供しよう。もちろん公開が危険だと思ったものについてはその限りではないし、リンディにも声をかける」

「そこら辺の見極めは信用している。……さてあとは制服を受け取って、魔導師ランク認定試験の申し込みと、研究室の使用許可証、『プロジェクトF』の研究許可と資料の請求、アースラからの個人転移許可申請と……」

「もついい、聞きたくない……」

正式な局員となったことで、今まで見逃されていた申請やら許可やらが山のように必要となったことを嘆くマークであった。

「ここがお兄ちゃんの研究所になるところ？」

「ああ、そうだな。……たしか『生命の研究をするにあたり、不測の事態が起こった時隔離しやすいように辺境の施設を使用するのが決まり』らしいぞ」

後日、新しい年を迎えてしまったところにすべての申請・許可がようやく済み、研究所へ顔を出すことになったのだが、今回はこれにアリシアが同行することになった。というのも、アリシアが目指すのは『医者』であるため、この研究が為になるのではないかと頼みこまれたのだ。

実際研究に参加させるのは別として、施設を見ることぐらい問題はないだろうと二人で研究所に行くことになったのだが、ここでマークは自分の考えが甘かったことを思い知らされることになった。

「辺境での研究というのは別にどうでもいい……今まで『ヴァロール島』みたいな人の手に入っていないところでの研究が無かったわけじゃないからな」

それに比べれば、この場所が昔、違法研究者の根城であったことや、旧式の機材しかないことなど全く問題にならない。いや、機材については旧式以前の問題なのだが、それも含めそれ以上の問題があった。

「……人がいないね」

「……つい最近まで、放棄されていたらしいからな。今回俺が使用することになって、無理やり体裁を整えたらしい」

そう、この施設の案内ができる人材がないのだ。ただでさえマー  
クの知識がミッドのものに追いついていないため、設備の多くが用途  
不明でこれでは研究のしようが無かった。

「とりあえず中央の管理室に行ってみようか？」

「管制室の方が正しいんじゃないかな？」

「……」

地球に住むことになり、多くの同世代と接するようになって言葉が  
より流暢になったアリシアの言葉に、マークは答える術を持たなかつ  
た。

そして流石は元違法研究者の根城というべきか、通路に案内板など  
があるはずもなく、数十分の間通路を行ったり来たりする羽目にな  
るのであった。

「いや、なかなか楽しませてもらったよ」

「……誰だよ、アンタ」

やっとのことで中央の管制室までたどり着いたマークたちを、謎の  
紫髪の男が迎えた。その男の顔には笑顔が張り付いていたが、鋭い金  
の瞳を持つ目は決して笑っておらず、興味深いものを観察するかのよ  
うな冷たさを宿しており、アリシアは思わずマークの背に隠れてしま  
う。

もつとも、ある一定以上の才覚を持つ研究者には共通した視線でも  
あるため、マークはさほど気にすることもなかったが……

「おっと、これは失礼……わたしは人体に対する研究を主にしている  
流れ者でね、ジェイルと呼んでくれたまえ」

「ふーん……そう言えば、『プロジェクトF』の発案者もジェイルとい  
う名前だったと記憶しているが、何か関係があるのかな？」

「おや、よく知っているね……だが、残念ながら私からは何とも言えな

いね。クローニング技術など、詳細はともかくとして誰でも知っていることだし、この技術を用いて何かをしようという考えは、それこそ新暦前から星の数ほど提案されていたことだろうな」

プレシアの研究資料から原案を考えた人物の名を知っていたマークが視線に力を込めるが、ジェイルと名乗る男は飄々と受け流す。

ここでマークが何かしらの確認を取っていれば何かが変わったかもしれないが、あいにくとマークは正式に局員になったばかりで、局員としての教育すら受けていない。一応囑託の試験を受けたときにある程度の知識は学んでいるが、それを実践で生かせるほどミッドの常識に明るくなかった。

「それで、なぜアンタはここにいるんだ？ 案内や先任がいるとは聞いてなかったが」

「個人的な興味だよ。それとも趣味というべきかな？ 少し耳の良いものなら、君がこの世界で何を為したか知らない者はいないからね」

つまりマークが死者蘇生を為したことを知って、この機会に会いに来たという事だろう。先程も述べたように、ここは辺境である。それも違法研究者が根城にできる程度に管理局から離れており、さらにマークが研究する内容のこともあり、常駐のスタッフは置かないことも納得させている。

ジェイルがそう言った事情を知るのであれば、管理局のそれなりに偉い人である可能性が高いか、とマークが結論付ける。それと同時にジェイルも何を思ったのか、ある提案をしてきた。

「しかし、君はこの世界の技術には疎いのだろうか？ それなのに一人の案内人もいないとは……よければ機材の用途だけでも説明しようじゃないか」

「む……それは助かるが、いいのか？」

「かまわないよ」

「なら、頼む」

ジェイルの顔には変わらぬ笑顔が張り付いていたが、よく見ると頬が紅潮しているようにも見える。マークにはそれが英雄を目前にした新兵のように見える、何となくその提案を受け入れてしまふ。

ちよつとアリシアに腕をつねられてしまったが、後日改めてどこかの局員に案内を頼むのは気が引けたし、何よりこの男が何を求めてここに来たのかしつかり見極めたいという思いもある。

「……そしてこれが細胞の成長促進に使われる培養液の活性化を行う設備になるね。現在では治療術式の検証に使われる人と同じ構成をした肉塊を作るのに使用されることが多いが、部位欠損……腕などを失った者に移植する腕を作ったりするのに使用されている」

「なるほど……実験動物の次の段階か……全く、人というものの業は深いな」

「否定できないね……竜である貴方には不快な話だったかな？」

「いや、昔は不治の病と呼ばれていたものが様々な試行錯誤によって決して危険な病ではなくなった例を知っている以上、このような話で不快になることはない」

その試行錯誤をしている段階で死んだ人も大勢いることを知るマークにとって、自身にとって優先順位の低いものである実験は、気持ちのいいものでこそないが不快と言って切り捨てられるものではないこともよくわかっていた。

ただアリシアにはまだそう言ったことが理解できるはずもなく、殺すために生き物を作るかの話は、それはもう不快そうな表情を浮かべていた。

「ふむ……お嬢さんには少し刺激の強い話だったようだね」

「……」

ジェイルに話しかけられ顔をそむけるアリシアであったが、そこには嫌悪以外の感情も確かに見て取れた。それは羨望か嫉妬か、あるいは自分に対する怒りかもしれない。自分がまだ理解できない世界に当然のように立つ二人に対する感情は、アリシアには整理しきれぬものではなかった。

「大雑把ではあるが、機材の説明はこんなものかな？ これ以上詳しく説明していたら、日を跨いだって終わらないだろうしね」

「十分さ。そもそも俺は紙の上で理論を作っていたタイプの術者だ。取扱説明書でも見てなんとかするさ」

どの機材で何ができるのかだけでも知っていれば、さほど困ることはないだろうというマークの自信は、ジェイルから見ても自身の能力を過信する愚か者には見えなかった。

その姿を確認して目的は果たしたかのように踵を返すジェイルであったが、最後にふと思いついたかのようにマークに問いかける。

「そう言えば、君はどのような目的をもってこの研究を行うことになったんだい？」

「ん？ 一言でいえばフェイトの治療のためだが……」

「いやそうではなく、『プロジェクトF』のような生命に関する研究のそもそもの始まりはなんだったんだい？」

「……」

マークがこの世界に来る前に求めていたのは死者蘇生だ。それもかつての友ともう一度会いたいという願いから生まれたものだが、実はもう一つ、死者蘇生の前に追究したものがあつた。

『不老不死』

友が死ぬ前に、死に別れる前に、もっと、ずっと、共にありたいと

いう願い。もつとも研究が完成する前に友はその命を終えたいし、何より不死など望んでいなかったことをマークは知っていたため、その話を誰かにしたことは無かった。

後年、何の因果か擬似的な不老不死を実現させる技術を得たマークであったが、その技術を本気で使おうと思ったことは無かった。

そして、そんなマークの心の奥底でくすぶる思いを表層まで浮き上がらせるような問いかけをする者もまた、かつて無い事であった。

「……人は、脆すぎる。最初はわずかな薬から始まり、治癒魔法などの技術を学んでいたら、自然とここまで来てしまったというだけの話だ」

「なるほど」

マークの答えにジェイルはただ頷き、あるべきところへと帰っていった。

「それで、今話題の天竜様とやらはいかがでしたか？」

「ふむ、最初は多少警戒していたようだが、案内をしているうちにそこまでの警戒は感じなくなっただね……相当なお人よしかな、あれは」

ジェイルがあるべきところへと帰ったところで、当然のように出迎えた女性……いや、少女は、真っ先に目標との接触について尋ねる。

尋ねられたジェイルは、軽くかつて自分のすみかであった場所出会った男について考える。その時はこれが孤高の存在とされた竜の実態かと失望したものだが、人としてあるのならこれも当然のことかと考えなおした。だがそれでも、マークはジェイルの予想した存在とはかけ離れていた。

「個体として最強とされる竜の力に加え、人の英知と技巧を持つ存在……そんな夢のような生命だと思っていたんだが、これは当てが外れたね」



「実態は竜と人から、長所も短所も受け継いだ極端な存在……というところでしょうか？」

「……そう考えるのが妥当かな」

そんな不安定な存在、期待外れもいいところだとも思ったジェイルであったが、それでもある点から、ただマークを不安定な存在と切り捨てることはできなかった。

「数千年にも及ぶ経験……か」

「はい、自称ではありませんが、二千年から五千年ほどの期間を生きてきたという話でしたね」

そう、マークがジェイルの真意を探ろうとした時の目は、ジェイルの知るなによりも深かった。ジェイルがその過去を尋ねたときににじみ出た気配は、人の身ではたどり着けないと思えるほど濃い何かがあった。

だからこそ惜しいと思う。もしこの存在が、もっと、もっと純粋な存在だったらどれほどのものになったかと思うと……

「……試してみようか」

その日より、彼の研究所で新たな生命が誕生したことを知る者は、彼とその隣にいた女性だけであった。

## 第54話 「被害者」

それは魔王戦から一月も経とうとした頃だったか、マークは久々にリンディと一対一で話し合うことになっていた。

それも万に一もフェイト達に聞かれないよう、アースラの艦長室にこもって話し合うというほど徹底している。

「そんな奴らほっとけばいい……とは流石に言えないな」

「わかってもらえて何よりだわ」

思わず本音が出たマークを一目で睨みつけるリンディであったが、それもすぐに疲れ切ったため息に変わる。それだけ今回の問題は根が深いものであった。

「そうは言ってもな……今回は一人の死者も出さなかったんだろ？」

ならそれで最上の結果じゃないか」

「被害者にとってはそうはいかないってことよ。それなりの数の局員が被害にあってるし、何よりベテランどころが再起不能になってるから……」

その問題とは、守護騎士たちの襲撃事件のことだ。

今回の闇の書はその多くの魔力を魔獣などから蒐集していたが、それでも魔道師からの蒐集が無かったわけではない。そして、その蒐集を行った魔道師の半分以上がランクダウン、もしくはリンカーコアに致命的な欠損を抱え引退せざるを得なくなった者が居たのだ。

「軍人であるなら、任務中の怪我は自己責任だろうに……」

「一応管理局の補償はあるのよ……」

マークの突き放した発言をリンディが苦笑しながら訂正するが、と

てもじゃないがマークに納得できるものではなかった。

「あのなあ、これはそういつい問題じゃないだろ？ 確かに職務を全うした軍人に補償は必要だろう。まあ今回は全うしたと言えるか疑問も残るが……」

リンディはマークの物言いに反発を覚えるも、辺境施設の警備についていた被害者たちが賊になすすべもなく倒されたことを考えると、何も言えなくなってしまう。

結果として施設に手を出されることは無かったが、成果を出さなければ役目を果たしていないと言われても反論できないのだ。

「戦場に立つのなら、その命を賭けてしかるべきだろう？ それにもかかわらず、魔力を失っただけで泣き言なんざ片腹痛いわ。その程度で文句を言うぐらいなら、最初から軍人なんてなるなって話だ」

侮蔑というべきか、心底見下した様子のマークを見ると、一瞬被害者の弁護をしている自分を含めた同員の多くがいかに低い意識しか持っていないかのようにすら感じられたが、そもそも世界観からして違うのだから、そこまでの覚悟を持たなかったからと言って被害者を悪く言うのも間違いだと思う。

「本来であるなら、警備には十分な実力は持っていた人たちよ？ 今回の襲撃者が想定以上の実力を持っていたのだから、負けてしまったからと言って悪く言うのは……」

「だから、負けたのが悪いって言ってるんじゃないって。……いや、警備をしていた以上、不審者にやられたことを悪くないというわけじゃないぞ。ただ、負けたにもかかわらず命があるだけ儲けものなのに、いつまでも文句を垂れ流しているのが馬鹿らしいんだ」

確かに、歴代の闇の書の被害者はそのほとんどが亡くなっている。

それを思えば、魔力を失っただけで五体満足で生きているのだからはるかにマシな方だろう。

だが、それは歴代の被害者と比べた話で、当代の被害が無かったことにはならない。被害者に『命があることを感謝しろ』などと言うのは、まさに火に油を注ぐようなことだ。しかしそんなことは関係ないと言わんばかりに、さらに畳み掛けるかのように、マークは主張を続ける。

「大体、管理局が決めた処分に納得しないで、更なる罰をもって主張しているなんて、人の話を聞く気があるのか疑問だな。被害者でも加害者でもない第三者が様々な要素を鑑みて、それで妥当だと判断した結論なんだぞ?」

「まあ、闇の書の過去の所業を考えれば……」

「それがそもそもおかしいんだって。闇の書なんてただの道具だろ?」

なんで過去の持ち主のやったことまで持ち出すんだよ

「それは……」

「当代はやむに已まれず蒐集を行ったことになっている。それで納得できないなら、そいつらに魔王をどうにかさせればいい」

「……マーク君、あなた弱者の気持ちかわからないってよく言われたでしょ」

公式では、蒐集は魔王の封印のためという事になっており、魔王の脅威を思えばこの程度の被害は仕方がないというのが管理局の見解だ。しかし、より多数を救うため少数を切り捨てるとするのは正しい判断かもしれないが、切り捨てられる少数が納得することは決してないのだ。

それでもなお納得しろというマークの言葉は、強者からの押し付けに他ならないだろう。

「……悪かったな。どうせ俺は人の心まで理解できない半端ものだよ」

「あ……」

あまりに被害者のことを考えないマークへのちょっとした皮肉であった言葉は、想像をはるかに超える効果をたたき出してしまふ。

普段はさほど気にしていないとはいえ、やはりマークは竜であるのだ。よっぽど特殊な条件下でなければ人には届かない力を持つ以上、どうしたってその考え方は圧倒的強者のものになってしまう。

「ごめんなさい。流石に言い過ぎたわ」

「構わん、事実だ……一応気をつけてはいたんだがな」

そう言っただけで表面上は平静を保つマークであったが、やはり堪えていられない。リンディもこれ以上余計な話はせずに本題に入る。

「それで今回マーク君にこの話をしたのは、貴方の技能を提供してもらったからなの……どんな技能なのかは言わずともわかるでしょうっ」

「……ああ、リンカーコアの再生か」

そう、マークは魔王戦の直前に自身のリンカーコアの再生……正しくは再創造とも呼べる修復を行っていた。その技能を用いればこの問題を、被害者の実損を無くしことではやてに対する反感を無くすことができるのではないかとリンディは考えていたのだ。だが現実はその優しくは無かった。

「無理だな」

「え、なんで!？」

「エーギルが無い」

より正確に言っただけならば、赤の他人に使うような、と頭に付けるべきだろう。マークのエーギルとは、竜の力を封じた竜石と同義だ。自身

のコアの再生に、フェイトの手足の創造、さらに竜化に使用しただけでその力はほとんど使い尽くしている。

もちろんほかに竜石が無いわけでないが、その数は有限。余分など欠片だってありはしないのだ。

「ランクはいまいちわからないが、ロイド隊の中央値のコアを作るとして……そうだな、一つ作るのに五人もいれば可能だが？」

「……本末転倒よ」

それは五人の生贄があればBランクのコアが作れるという、意味のない情報。マークもリンディを諦めさせるために言ったのだろう、その目にはほんのわずかなやる気も感じられなかった。

「本題がこの話だというなら、これで終わりだな」

「ええ……」

期待していたものが全く役に立たなかったことに肩を落とすリンディであったが、ふと別の可能性を思いつく。

「ねえ、そのイーギルを取るのって人からじゃないといけないの？」

「いや、別にその辺に生えてる草からだって取れるぞ。効率を考えなければな」

イーギルは生命力とほぼ同義であるため、命ある全ての存在が宿している。ただしその量は己の意思を持つ者ほど多く、より強大な精神・より強力な肉体を持つ者、例えば竜や英雄と呼ばれるものならばそれこそ数万人分のイーギルを持つことになる。

「それじゃあ害獣……人の害になる獣を狩ることでイーギルを……」

「何百匹狩らせるつもりだ？ そんなことに時間をかけるくらいなら無限書庫にこもった方がまだましだ」

マークの故郷の情報があるかもしれないほぼ唯一の場所ではあるが、探索が得意ではないマークでは一人でももっても成果が出る可能性は限りなく低い。そのような無駄とも呼べる時間を過ごした方がましだと言つという事は、たとえエーギルがあつたとしても被害者を治すつもりが無いのだろう。

「そつ……」

「リンディの考えることもわからなくもないが……わざわざそいつらを戦場に戻す必要はないだろ？」このまま引退させてやれって」

リンディはその言葉を聞いて、ようやくマークの真意を知る。要はこの男、せつかく五体満足で戦いから身を引く機会ができたのだから、無事なうちに戦場を去れと言いたいのだ。わざわざ危険地帯に戻って来るなど言っているのだ。

もちろんこれはリンディがマークの発言から感じたことであり、実際の考えとは違つかもしれないが、それでも命があつてよかったと考えていることだけは間違いないと思う。

「まあ、その分からず屋どもが引き下がらずに何かしらの行為を続けるようなら、ハヤテの所に届く前に俺の方へ誘導してくれ」

「……了解」

これは典型的な『他人に厳しく、身内に甘いタイプ』なのかとリンディは結論付けたところで、今回の話し合いを今度こそ終了した。

「ちよつとー、それ、どついつ事なん!?!」

「どついつって、言葉通りの意味だよ」

はやての叫びにも目の前の銀髪の青年は平然とした態度を崩さず、淡々とした答えを返すのみであった。

本来であればはやての声に守護騎士たちが駆け付けたであろうが、ここではそのような事が起こることはありえない。ここは本来他者が入り込めるような場所ではなく、現状唯一の例外がはやての目の前にいる青年であった。

「リインフォースの代行を辞めるって……本気なん？」

「本気だよ」

そう、ここははやての心の内側。かつて魔王に追いやられた場所であったが、今は青年が夜天の書の欠片を管理する特殊な場所となっていた。

「はつきり言って、僕がいつまでもここに居るのははやてにとって良い事ではないんだよ。一つの肉体に一つの魂が宿るなんて、この世の理に背く事象なんだから」

「その言い分はわからなくもないけど……それがどうして代行を辞めることにつながるん？」

「あのね……これでも僕は世間から見れば魔王の残滓なんだよ？」

「……」

青年の言葉に、はやては何の反論もできずに黙り込むことしかできなかった。はやてを救う手助けをし、リインフォースから主を託された青年は、どれほど善行を積もつが魔王の内にあつたという事は変えられない。

「あなたやって魔王の被害者やる!? それに、この世界であなたのことを知ってる人なんて……！」

はやては自身の言葉がすべて出尽くす前に、青年のことを知っているだろう唯一の存在のことを思いだす。



「そうだね、マークは僕がかつてやったことを全て知っているよ。……だから、例えばここにある欠片で夜天の書を新たに作ったとしても、そこに宿ることはできない」

「そんな……」

かつて青年は、自身の弱さを元凶に魔王の封印を解き放ってしまった。それにより不幸になった人たちのことを思えば、今更どのような顔をしてマークの前に出られるというのだろうか。

この事實は、はやてに命の恩人の一人を消滅させるか、あるいはマークに差し出すかの二択を強いるものとなるのしかかる。はやては未だ幼いとはいえ、この青年をかくまう事がどれほどの危険をリンディ達に強いることになるかぐらいはわかってしまったのだ。

「欠片は全てまとめてあるから、後はこの世界の魔導師か……難しいようならマークに頼めばなんとかしてくれると思う。魔道書型にして外に出して、それから新しい管制人格を作るのがベストかな？」

黙ったままのはやてに今後の最適解を示す青年であったが、はやての理想がわからないほど鈍くは無かった。

『十年後に再び現れるだろう闇の書を回収し、リインフォースを取り戻す』

それまで新しい管理者を作る気などなかったし、青年についても現状を維持して後年に新たな器でも作るつもりであったのだろう。

だが、それを行うにははやての精神は幼く、今だって青年の影響を受け続けている。この状況が長く続けば、最悪はやての精神が青年に同化してしまう可能性もある。

「流石に今日明日でいきなり同化することはないけど、知識の一部はもう流れているみたいだし、数年以内に境目がなくなると思っね」

知識ならまだいいが主義思想・性格性質まで同化してしまったら、人生の期間・濃度の問題で確実に青年が上位の同化が起こるだろう。

「……それでも、時間が無いわけやない。魔王だって何とかなっつんやし、今回だって……。」

「基本的に僕を救おうとして、それに同意してくれる人はいないと思っつよ?。」

マークにとってはもちろん、管理局や守護騎士にしたって魔王は敵だ。いくらはやてを救ったとはいえ、青年の味方をするような変わり者はそうはいないだろう。

(シグナム達は……私が言えば手伝ってはくれるやろうけど、積極的に動いてはくれへんやろな)

はやてのために、独断で蒐集を行うなんてことも辞さない気質の持ち主だ。場合によっては、嫌いなマークに頭を下げてでも青年の処分を頼みかねない。

(なのはちゃん達なら……)

相談することはできるかもしれないが、打開策が出てくる確率は低いだろう。むしろ相談することで他の人たちにばれる確率の方が高く、容易に相談するのも二の足を踏んでしまう。

そうして青年を救う手段を模索し始めたはやてをおいて、青年は自身の活動を極限まで遅滞させる。気休め程度だが、こんなことでもないよりは同化を押しさえられるのだ。

(場合によっては、ちょっと強引な手段も考えておかないといけないかな)

それは守護騎士たちが主を救うためのとった思考と非常に似通った考えであることに、青年はまだ気が付いていなかった。

「父さま、一応闇の書の被害者の方たちと話をつけてきましたよ」

「そうか、どうだった？」

ところ変わって本局では、グラムとその使い魔であるリーゼ姉妹が忙しく動き回っていた。

「はい、思っていた以上に過激派と穏便派に綺麗に分けられましたね…… 前回の被害者の筆頭であるハラオウンが主の擁護に動いているというのは、やはりかなり影響しているみたいですね」  
「そうか」

少しおざなりな返事を返すグラムであったが、こちらも上層部の中でも比較的話の分かる面子への連絡を行っている。その内容は、やはり今注目の竜と魔王についてであった。

「将来を期待された若い魔導師の中にもいくらかランクを落とした子もいましたが、こうまで反応が分かると少し複雑ですね」

「エリートコースからは間違いなく外れることになるから…… そんな時こそ、その人の本質がわかるというものだ」

期待していたものが過激派に行ってしまったり、そうでない者が穏健派に来たりといくつか予想外な事態もあったが、何とか形になりつつあった。

それというのも、少しでもマークたちの味方を作るための工作であった。

「敵が目の前にいた方が、味方を作りやすいですね。ロツテが見に

行ったロイド隊の方はどうなってるのかしら」

「ああ、先ほど報告にきてすぐに出て行ったよ。……こちらは再訓練後から動くことになりそうだな」

現状、マーク達とかかわった数少ない部隊のうちの一つである。うまく使えば、本人が駆け回ることなく本局スタッフに好印象を植え付けることができるだろう。

印象操作に派手に動いていると思われたくないので少数で働きかけているのだが、これでいくらか落ち着くことができるようになるだろう。

「ロッチは『猫の手だって借りたい』と言っていたがね」

「……地球のことわざでしたか？ 確かエイミィが通信で言っていた覚えがあります」

魔王戦直後の書類地獄の時の話である。

「死者蘇生プロジェクトチームや、技術部の方でも動いてもらっているからな。聖王教会の方からも、マーク君との会談をという声があるらしいが……」

「そちらはさすがに上で止まっているらしいですね。魔王の問題だけで手いっぱいみたいですから」

「元々ミッドに移住する予定もあったとの話で、地上本部の方からも情報を求める声があるようだ」

「……」

元々歴戦の勇士として顧問官という立場にあるため様々な所から相談がきているグラムであったが、その相談内容はいつの間にか使い魔であるリーゼアリアの想定を超えたところまで来ているらしかった。

こうして報告をしている最中であってもグラムは端末から目を

離せないぐらいだ。

「難しいことかもしれないが、これはチャンスでもある」

そんな中、改めてグレアムは目的をリーゼアリアに伝える。

「できるだけあの子たちに手を出しにくくなるように、複雑に糸を絡めよう。安全に、自由にあの子たちが生きていけるように……」

それは、はやてを生け贄にしようとした贖罪であった。クロノがグレアムたちを見逃し求めたものであった。

だが、そんな暗い空気を紛らわすかのような陽気な声で、グレアムは他の話を始める。

「そうそう、クローベル統幕議長殿からも護衛の話がきていたな」

「……勧めていたのは父さまでしたよね？ 彼の護衛があれば、真竜と対等な話ができるかもしれないって。おかげでアルザスに視察に行くことになるよ、スケジュール調整係が嘆いていましたよ？」

武装局員の再訓練計画も見直しの必要ができたそうですしと続けられ、さすがのグレアムも少しことを急ぎ過ぎたかとひきつった笑いを見せた。

## 第55話 「新たに進む道」

辺境の研究施設。かつて違法な研究を行っていた次元犯罪者の居城であった場所に、彼らは居た。

白衣をまとった青年は、普段使ったりしないはずの片眼鏡をかけてモニターに移った数値を見比べ、検査着を着た金髪の少女はその青年のことを、固唾を飲んで見守っていた。

「ん〜……とりあえず、現状の数値はプレシアの予測からそうはずれていないみたいだな」

「そうなの？」

片眼鏡をかけた白衣の青年、マークは研究所が解禁されて最初に手を付けたのは、検査機器の扱いであった。いくらマークがかつて生命関係の研究をしていたとはいえ、別世界の技術である『プロジェクトF』の知識を早々に使いこなせるわけもなく、せめて現状のデータだけでもとっておこうと考えたのだ。

その結果は上々。フェイトの肉体は右腕と左足を除き、プレシアが予想した通りの成長を遂げていることが判明した。

「流石にこの数値の意味をすべて理解できているわけじゃないけど………どいつもこいつもこの誤差の範囲内ってことは、やっぱりプレシアって優秀だったんだろっな」

「うん……自慢の母ちゃんだよ」

誇らしげにするフェイトを微笑ましく思いつつも、マークは検査結果へと思考を向ける。今はまだ誤差の範囲内であるが、それでも確実に想定範囲から外れ始めている数値は存在するのだ。

(致命的とまではいかななくても、体のバランスは崩れ始めているか

……脳の分泌物も増えているみたいだし、やっぱりこの施設で新しい手足を作って移植したほうがいいかもしれないな」

もちろんそれをやるにはプロジェクトへの理解が足りず、実行には数年の時間が必要となってしまうので現実的な考えではない。

しかし、フェイトはマークの心配をよそに、予想された数値をいわずに上回りたいとさえ考えていた。

（予想通りの実力じゃ、まだ足りないんだ……なのはみたいにはやてみたいに、マークの予想を超えられる位、強くないと……！）

フェイトは誓いを新たにし、マークは今後の研究課題について頭を悩ませていると、モニターの端にある通信の申請が届いたことを示すランプが点滅し始めた。

「……どうやって許可するんだっけ？」

「えっと、確か……」

普段の通信はかなり簡易化されたものを使っているマークにとって、この研究施設の機材は複雑すぎた。助けを求められたフェイトも流石にこのような施設の管制をいじったことはないのだが、それでも頼られた以上あやふやな知識のもとコンソールをいじる。

「あ、繋がったみたいだよ？」

『遅い……』

「なんだ、クロノか……仕方ないだろ？ こっちの世界の技術に触れて、まだ一年もたってないんだから」

数分の時間を要し、ようやく申請を受諾したマーク達の前に大きく映ったクロノは一言目に大声で怒鳴り上げた。本来数秒で済むはずの作業にもかかわらず数分もの時間を待たされたのだし、一言文句を

言つぐらひは許されるだろう。

『だからせめて指南役ぐらい置いておけと言ったんだ。清掃機械の手が届かない場所だつてあるだろう？ その規模の研究所なら、維持も含めて二十人は欲しいところだろうに……』

「エーギル関係の情報が流れるのが怖い。もちろん俺だつて注意するが、俺の知らない方法で何かをされたらどうしようもないからな」

エーギル関係の知識は、今のところマークの内にしかない。数少ない例外を述べるとすれば、災いを招く者と呼ばれた男の記した『エレシユキガル』と、確実性には欠けるがマークの魔法を蒐集した『闇の書』だけだろう。ちなみに前者はマークが封印しており、後者は蒐集の対象外であつたというのが公式な見解である。

『……まあ、危険な知識の流出を防ぐという考えには同意するが、現実問題として一人でその規模の施設を維持するのは不可能だろう？』

「あーもう、わかつた。じゃあ掃除だけ頼むから、五人ほど信用できるのを用意してくれ」

煩わしそうにそう言うマークに、クロノはため息をつきながらもその人数で妥協する。お互いにとって不本意な結果に終わったように見えるこの交渉であつたが、その実両者ともそれぞれの目的はしっかりと果たしていた。

マークは自分から求めることなく、クロノに半ば押し付けられる形で施設を維持する人材を手に入れ、クロノは誰の目も届かない状態になつていたマークの研究施設に管理局の人材を送ることができた。わざわざこんな面倒なプロセスを踏んだのも、研究室レベルではなく、一人で維持するのが困難な研究所レベルの施設を渡されたマークにできるせめてもの抵抗であつた。

「それで、本題はなんなんだ？ 一ここに人を置けっただけじゃないだ



る？」

『ああ、マークが公式に局員になったことで、研究室を持ったことは一般にも公開されてしまったんだ。それでぜひともあなたに会いたいと言っ人が……』

「拒否する」

割と重要な前置きを終え、ようやく本題に入ろうとしたところをマークは即座に切り捨てる。正直に言って、マークには研究関係の人脉をつくる気などさらさらなかった。

『話は最後まで聞け！……その人なんだが、あまり大きな声では言えないがちょっと特殊なクローン体の娘たちがいるらしくて、マークの研究に参加させてほしいとの話なんだ』

「これはまた……流石に即断しかねる問題だな」

まだ何の研究も始めていないし、何より面倒事のようなので断ってしまいたいと思う一方で、フェイトと比較できる対象を手元に置くことで研究がはかどるかもしれないとマークは考えてしまう。

クローンもマークがどう反応するかわかりかねたからこそ、本人に伝えたのだろう。もっともマークがどのような理由で悩んでいるかまではわからなかっただろうが……

『一応今は本局第四技術部が見ているらしいが、もっと生体について詳しいものの意見が欲しいとかいろいろあつてだな……』

「プロジェクトFみたいなのは元々違法研究の類だったからな……堂々と研究できることになった俺のところには話が来たのか」

最初は藁にも縋る様な思いでマークに話を持ってきたのならこの話を受けてもいいかなと思っていたマークだったが、他に頼れるところがあるのなら無理をしてまで手を出す必要が無いと結論付ける。

「研究の申請こそしたが、まだ一切の研究を始めていない。いや、それ以前の問題だ。その娘たちには悪いが」

「マーク、できればその子たちのこと助けてあげられないかな？」

「情報が無いと判断のしようがない。今度、依頼主と会う機会を設けてほしい」

『……了解した』

その娘たちに自分を重ねてしまったらどうフェイトの一言で、あつという間に考えを翻すマークの姿に苦笑しつつも、クロノは了承の意を伝える。どんな理由であれ、マークが社員とつながりを持つのは悪い事ではない。むしろ推奨されるべきである。

それにもかかわらずマークが今回の話を断ろうとしたのは、ひとえに優先順位の問題であり、この話に関わることで得られるだろう不確定な何かより、関わらないで得られる時間を重要視しようとしたのだ。……あつさりと折れてしまった以上、もはや関わらないという選択はしないだろうが。

『じゃあ先方の予定を聞いて、後日面会できる場を整えよう』

「ああ、よろしく頼む」

特にマークの予定などを聞くことなくクロノは回線を閉じてしまおうが、なんてことはない。基本的にマークのスケジュールを管理しているのはクロノとエイミィなのだから、マークに改めて予定を聞く必要はないのだった。

今後季節が変わるにつれ、執務官は副職で本職はマークのマネージャーと呼ばれることに悩むことになるのは、もうしばらく先の話である。

「それじゃあこっちも処置をしたら帰ろうか」

「処置って？ 研究にはまだ手を付けてないんじゃないの？」

立ち上がり部屋を移動しようとするマークに続きながらも、フェイトは疑問を述べる。数値に問題は無く、特に何か手を加えなければならぬものに心当たりが無かったのだ。

「ああ、だから今日やるのは手足の長さを調整だけだ。違和感を覚える前にこまめにやっておかないといけないから、これからは定期的に検査と調整を行っていくことになる」

「ん、わかった」

一度に行われる調整はそれこそミリ以下になるだろうが、マークは譲る気はないらしい。実はマークの創った手足は日に焼けたりもしないので、夏はさらに調整の頻度が多くなるのだが、それはもう少し先のことだとマークは黙っていた。

そしてマークはフェイトを従える形でこの施設の地図を取り出し、処置室へと歩みを進めた。

「それでは早速はじめようか」

「はい……よろしくお願いします……」

シグナムの声掛けに元気良く返事をしたはずかは、『マーニ・カティ』を模した木剣を構える。その姿は日々の訓練の跡が見受けられ、短期間にこの構えを教え込んだ恭也の実力が垣間見えた。

(いかな、今は余計な事を考えるべき時ではない)

逸れかけた思考を正し、改めて木刀を構えるシグナムであったが、彼女から攻撃を仕掛けることはない。これはあくまで訓練であり、訓練であるからにはある程度流れというものが存在するのだ。

そして心構えができたのか、一呼吸を置いてはずかはシグナムに切りかかった。

「へえ……ずいぶん綺麗に戦えるようになったのね」

「ああ、あの木剣が軽いという事もあるが、ずいぶん剣を振るうのに慣れてきたみたいだな。最初のころとは雲泥の差だ」

シグナムとすずかが試合をしている場所から少し離れたところで、忍と恭也がその様子を観察していた。

ただし今回の訓練で重要な点は、剣を綺麗に振れるかの話ではない。恭也は自分との組手の時に気付いた欠点、他の人が相手の時でも出るかを見極めようとしていた。

「それで、そろそろその欠点とやらを聞かせてくれてもいいんじゃない？」

「……剣を振るのは確かに巧くなってきているんだが、一向に強くなってきているように感じないんだ」

「なるほど……スポーツなんかでも聞く話ね」

そう、すずかの技術は間違いなく向上してきているのだが、それにより強くなっているかと言われると疑問に思ってしまう状態なのだ。もっとも、剣を習い始めた時期を考えれば比類なき成長速度だとも思うので、今が『そういう時期』である可能性もあるかもしれない。

「ただ、やっぱりできることをやっておきたいからな。それで今日シグナムさんに稽古を頼んだんだ」

そう言って視線を向けた先では、攻守が入れ替わりすずかに猛攻を加えるシグナムの姿があった。

(……巧いな、とても剣を持って一月程度とは思えん)

加減をしているとはいえ自身の剣を捌き続けるすずかに感心しつつも、恭也の言っていた『気になる点』について剣を交えて気付いた

点をまとめる。

(気迫の問題かもしれんな……)

一番に感じたのはその一点である。すずかの剣からは『より丁寧』『より優しく』と言った意志が見え隠れする。

その意志を読み取ってすぐには理解できなかったが、少し考えれば多少なりとも共感できた。要はすずかにとって『マー・カティ』がとても大切な剣であるという事だ。だから戦う時も剣を傷付けないようにする気持ちが、戦いに出てしまっているのだろう。

(己の武具を大切にするといいのは良いが……これはさすがにやり過ぎだな)

はっきり言ってしまうえば武器を庇い、剣戟に十分な力が乗っていない。これでは同格どころか格下にだって勝てるかどうか怪しい。だが、それですずかが簡単に負けるかと言われればそうでもなかったりする。

「本当に巧いな……よくここまで捌けるようになったものだ」  
「……………」

すずかは言葉で答える余裕はなくとも、その表情に喜色をにじませることで答えとする。本来攻撃よりも防御の方が難しい筈なのだが、すずかは繊細な武器の扱いにより防ぐでも躲すでもなく、攻撃を捌くことに長けた戦いを身に着け始めていた。

それでも所詮は十歳の少女であり、剣を握り始めて一月の見習い剣士だ。疲れにより動きが鈍り始めたところに木剣をはじかれ、あっけなく勝負がついてしまった。

「はあ、はあ、はあ、……ありがとう、じやいました」

「ああ、予想以上の腕だった」

呼吸も粗く疲労困憊な様子 ofsuzukaとは対照的に、シグナムは汗一つかかず涼やかな顔をしていた。それが今の力の差なのだと、suzukaは今後のさらなる努力を胸の内に誓う。

「……………」

「……………」

呼吸を整え、更なる指導の言葉を待つsuzukaであったが、シグナムは微妙に苦い顔をしてなんと声をかけるべきか思い悩んでいた。

(なんと声をかけるべきなのか……………見つけた欠点を示すのは容易いが、これは下手に言ってしまうえば、せつかくの繊細さを失うことになるかもしれない……………)

やはり人に教えるのは難しいと改めて実感しつつ、今この場では答えを出せないと結論付ける。

「いくつか気付く点はあったが、これは私が言うべきことではないな。後で恭也殿に聞くといい。剣技については、特に防御で光るものがあつたな」

「は、はい…」

欠点の指摘方法は恭也に丸投げして、良かった点をいくつかsuzukaに伝える。これが自信に繋がればいいと思えるだけわかりやすい言葉で伝えようとする姿は、中々堂に入っており『人に指導なんて』』と言っていた人物とは思えなかった。

「はい！ とりあえず今回はここまで！ すずかは体が冷えないように、早く汗を流してきなさい」

「うん！ それじゃあ失礼します、シグナムさん」

さすがが屋敷へと戻るのを見送る二者は、その姿が見えなくなったのを確認してから本題へと移る。

「どうでした？」

「思い切りの良さが足りない……とでも言えばいいか？ 少なくとも、勝てる剣技ではないな」

「やはりそう見えますか……」

そうして恭也から語られたのは、組手をすればするほど積極性が無くなり防御へと意識が割かれていったという事であった。

「隙を指摘しすぎたという事は？」

「それはない。ちゃんと組手の終盤まで指摘は避けているし、攻撃の時より防御の時にこそ指摘している」

カウンターに委縮して攻められなくなる様な指導の仕方をするほど愚かではない。だがそうになると、なおのこと防御に力を注ぐのかわからなくなってくる。

「まずは守りから……などという事ができるほど戦いとは優しくないぞっ」

「ああ、できるだけバランスよくとは言っているんだが……」

現実にはターン制などなく、攻防は切っても切れない関係にある。さすがだってそれがわかっていないはずはないのだが……

「かといって、あまりうるさく言えばあの防御が失われる可能性もあるし……」

「それは私も同意見だ。あの剣捌きは、間違いなく今後の武器になる

だろっ」

まだまだ未熟ではあれども、素人目ですら巧いと思わせるだけの技であるのも確かである。せっかくつかみかけた技巧をわざわざ捨てる危険を冒すのもどうかと思う。

恭也も魔導師と戦うのに適した剣技など知らないし、シグナムはそもそも指導者としては素人だ。

結局二人は結論を出すことができず、後日土郎とマークに相談し、場合によってはリンディに魔導師の教官を紹介してもらおう事にした。



## 第56話 「仕組みられた出会い」

魔王との戦いから何かと忙しく動き回っていたクロノ達がやっと一息つけるようになったのは、なのは達がそろそろ終業式を迎えるころであった。

今回の事件が闇の書だけであったのならもう少し早く片が付いたであろうが、奇しくも魔王などと言う存在が現れ、マークが竜と化して戦ったことで処理しなければならぬ案件が爆発的に増加したためであった。

「中でもマークの竜化についてはかなり面倒なことになった……いや、こればかりはまだ話がついたとは言い難いな」

「厳密に言えば先天的な技能と呼ばれるものに分類されるんだろうけど……まあ、より分かりやすくなのはちゃんねの『集束』と同じように、レアスキルとして登録されることになるみたいだね」

クロノとエイミィの説明を聞きながら、マークは登録に必要な書類へ記入を行う。今回の上層部の会議でマークの処遇がやっと確定することになり、今まで保留となっていた書類が多数必要となったのだ。

「普段はもちろん、緊急時でもできるだけ使用を控えてほしいとのことだが、流石にこれはマークの判断に委ねられることになっている」

「マーク君の持つ神器級の武装と同じ扱いと思ってくれたらわかりやすいかな？ こっちで封印したり、制限を加えることはできないから、口約束のレベルでもいいから『使わない』って言わせたいみたい」「……了解。安易な使用は控えよう」

魔王が現れるという特殊な状況だったとはいえ、『アーリアル』を筆頭に高位の魔法をかなり使った自覚があるマークは、しばらく自重し

ようと心に決める。

「研究関係はかなり自由にやることが可能だが、今やっていること以外のものに手を付けるなら申請の書類を出してくれ」

「人事からは『助手が欲しいなら言え。半月以内には用意する』って伝言を預かってるよ」

今のマークは『プロジェクトF』の把握で忙しく、助手よりも教師の方が欲しいという本音を飲み込み、頷くにとどめた。

「あとは局員としての教習かな？」

「研究員としての入局だが、マークの能力を思えば実践に出ないというのはいえぬ。いろいろな事情があったとはいえ、士官になったんだ。それ相応の業務を担って貰わないと困るという事だろう」

「え〜……」

一応マークも生体研究という忙しい日々を送っている。魔王対策として、何度か訓練中の武装局員へ指導を要請されてもいる。はやくに悪意が向かないよう、片手間程度だが被害者の会とかいう連中ともかわわりを持ち始めてもいる。いろいろ迷惑をかけている手前、アーラの業務の手伝いも行い、すずかの訓練にも顔を見せている。

そしてそれらの忙しさをフェイト達に見せないように気を使っていたのだが、さらに業務が増えるとなるとそれも難しい。

(フェイト達なら、何か手伝えることはないかって聞いてきそうだな……)

あくまでこの世界、この国でのことではあるが、子供というものによく遊び、また学ぶべき存在だ。ならばこの世界にいる間だけでも、そのように在って欲しかったのだ。

だがマークが管理局で本格的に働き始めたら、責任感の強い、いや、

誰かの役に立つ存在でありたいという意識の強いフェイトは間違いなく管理局への入局を決意してしまっただろう。

「どうしても嫌なら、研究に専念すると言えればいいと思うが……」

「いや、ここで断って印象を悪くしたくない。組織に所属する以上、義務は当然果たすべきだからな」

この一言のために、正式な局員として単独で現場に出る前に、後日訓練校に通うことが決まったマークであったが、この事を知ったのはとフェイトも一緒に通う事になったというのは余談である。

「とりあえずはこんなもんかな？」

「ああ、後は形だけでもデバイスを作って終わりだ。そう言えばバリアジャケットを作ってもらったか……」

以前修理に出した鎧は返却され、砕かれた『鋼の大剣』や『ギガファイアー』の魔道書と共に保管してある。そして返却の際に依頼したバリアジャケットの作成と、武器のデバイス化はすでに完成の報告を受け、受け取るだけとなっている。

「この後ナカジマ夫妻に話を聞くことになってるから、その後にも受け取る予定だ」

「そうか、やっと予定が噛み合ったんだっただな」

夫のゲンヤが魔道の資質を持たない尉官という事と、妻のクイントは最前線に出られる実力を持った捜査官という事で中々予定が合わなかったのだが、ようやく時間が取れたのだ。

この二人と、現在娘たちの体を見ている第四技術部での話し合いは、資料を見たマークにとってあまり気が進むものではなかった。

「やっぱり専門外だと思っただが……」

「機人だったか？ まあ、念には念をとか気休めとかの類かもしれないし、そこまで気にする必要はないだろう」

純粋なクローン体ではなく、体内に機械を入れた機人という存在。マークはこのような相手に対し役に立つような知識は持ってないし、参考にできるとも思えなかった。

そうはいつてもいままさら約束を反故にするわけにもいかず、とうとう当日を迎えてしまったのだった。

「面倒事が起こらなければいいけど……」

マークは軽くため息をつきつつ、クロノ達に書いた書類をわたし約束の場所へと歩みを進めるのであった。

「本日は忙しい中時間を作ってもらって感謝する。時空管理局陸上警備隊所属、一等陸尉のゲンヤ・ナカジマだ」

「同じく首都防衛隊所属、陸曹長のクイント・ナカジマです」

「え、えっと、本局第四技術部所属、メンテナンスタッフのマリエル・アテンザです」

「あー……本局総合特殊技術部所属、二等陸尉のマーク……だ」

とりあえず定型の挨拶をした四人であったが、そんな中微妙に言葉を濁したマークの挨拶はやはり目立つことになった。しかしそのことに軽い疑問を持つことはあっても、わざわざ深く突っ込む者はいなかった。

「とりあえずはじめまして……マーク三尉と呼んだ方がよろしいですか？」

「あ、ただマークでいい。それと敬語もいららない、と言っても軍属には難しいか？ おっと、それ以前に上官がいる以上俺が言葉を崩すのも問題か……」

「いえ、私も敬語は得意な方ではないので本当にいいのなら崩させてもらいますか？」

「俺も構わんぞ？ それに今回の件は、どちらかと言えばプライベート寄りの一件だからな」

これまでいた軍では常に最上位の位置にいたためやらかしたマークであったが、今回は相手がおおらかで助かった形となる。今後は気を付けようとひそかに思うマークであったが、長年の習慣を即座に変えられるものではないと知るのもう少し後の話である。

「それじゃあ失礼して……誰に俺のことを紹介されたか確認させてもらっていいか？」

「え？ グレாம்顧問官だけ……聞いてないの？」

首をかしげるクイントに対して、ちょっと確認したかったただけだと軽く答えるマークであったが、その裏ではため息をつきたくなる思いであった。

(どつにもわかりやすい奴ばかり俺のところに来ると思えば……俺がかかわる人物の選別までやってんのか)

簡単ではあるがマークの管理局に対する印象の操作というべきだろう。できるだけ話していて気持ちの良い人物をあてがい、闇の書の被害者の会のようなわかりやすい敵対者を送ることで行動を予測しやすくしているのだろう。

(別にそこまでしなくても管理局に敵対なんてしないのに……まあ、良き出会いがあるのはありがたいけどな)

そこまでグレாம்に対する考察を終え、クイントに向き直る。ここにいる面子もグレாம்の選別した『気持ちの良い人物』であるなら、

せつかくの出会いを無碍にするのも馬鹿らしい。

「それじゃあさっそく本題に入ろうか。あんた達もそっちの方がいいだろ?」

「まあ、な。なんたって娘の一大事だ。一刻も早く専門家の意見を聞きたいってのが親心ってもんだろ」

場合によっては性急と言われるだろう展開も、今回のようなケースでは信頼を得られることもある。双方とももっ少し人柄を確認したいという思いもあっただろうが、それもこの一言である程度分かるというものだろう。

ゲンヤはもとより知り合いであっただろうマリエルに資料を出すように視線を向ける。

「はい、ある程度の情報は前もって届いていると思うけど……」

「ああ、その身に機械を埋め込んだ機人と呼ばれる実験体を保護した、という話だと聞いている」

マークのあまりに率直な言葉に若干頬をひくつかせるマリエルであったが、迂遠な表現で説明をまごつかせるのもどつかと思い直し、できるだけ簡潔に詳細を述べる。

「一言で言ってしまうえば、調整がうまくいかなくて結構危ない感じなの。年齢は七歳と五歳で、成長速度との兼ね合いが……」

「なるほど……」

基本的にマークの悩みとはほぼ同じであった。フェイトは手足一本丸ごとであるのに対し、ゲンヤとクイントの娘たちは体内に機械を入れているかの違いがあるので、深刻さの度合いは大きいのだろう。

「更に体内の機械なんだけど戦闘を前提とした強度で作られていて、

まだ幼いあの子たちには負担になってるみたいで、すぐに熱を出してしまったりして調整にも支障が出ているの」「……」

最初こそ専門外だと高をくくっていたマークであったが、予想以上に共通した問題があることにその考えを改める。それからさらに細かい仕様についても説明されて心が折れそうになったが、何とか最後まで話を聞いたのはそのおかげといふべきだろう。

「とりあえずクローン生成時に起こる問題について、いくつかまとめて資料を持って来ている。参考にしてみてください」

「わかりました」

机器人に対してどこまで役に立つかわからないが、プレシアが研究の初期にまとめていたものを基にした資料をマリエルに手渡す。一応、前もって渡されていた資料から考えられる問題点を手当たり次第あげていたのだ。

さっそく目を通し始めたマリエルを放置しゲンヤとクイントに向き直ったマークは、とりあえず思いついた考えを述べてみる。

「成長については俺も行き詰ってるから何とも言えないが……その機械を非戦闘用に改めることはできないのか？」

「俺らがその程度考え付かないと思ってるのか？ サイボーグとは違って体の中身をゴっさり交換できるような存在じゃ無いんだ。今は機能にリミッターをかけたり、一部パーツを下位互換しながら騙し騙しやっている状態だ」

ゲンヤの物言いがとげとげしいのは、それだけマークに期待していたからこそだろう。だが、まだすべてを説明する前から過剰な期待を押し付け失望している形になっていることに気付き、すぐさまバツの悪そうな顔をして謝罪するあたり、やはり悪い人間ではない。

「やっぱり話を聞いてすぐに打開策が思いつくはずもないわよね……」

「ああ、一時的なら生身の肉体の強化とかで凌げるかもしれないと思うが……」

「できるの!？」

根本的な解決にはならない。そう続けようとしたマークをクイントの驚きが遮る。

「一時的なものでしかないが……可能か不可能かではいえる可能だ。ただし、その何度も使える手段じゃないな」

「そう言えば、次元漂流者だって話だったわね……」

恒久的に能力を上げるアイテムもあるのだが、そちらは初対面の相手に使うつもりはないマークであったが、一時的な強化ならその限りではない。もちろんマークの持つアイテムは補給の当てがないので、長期にわたって使用を続けることが難しい。

「……一月、三週間、半月でいいからなんとかならない?」

「……やってやれないことはない」

肉体の強度を上げるだけであれば、そのような用途の杖と薬がある。持っているだけで加護が得られる武装もあるが、さすがにそれを貸し出すとは思わない。

(そう言えば薬の使用は奢められていたよつな……)

ふとリンディとの会話を思い出し、とはいえやれると言ってしまった手前仕方がないので後日代用品を用意することに決めるマークであった。



「じゃあ、これは鍛えるしかないわね」

「大丈夫なのか？ それに、そんな短期間で何とかなるものなのか？」  
「やらないよりはずっとましでしょ？ しばらくこっちに時間を取れるように仕事はあらかた済ませてきたし、最低限体のバランスが取れば熱を出して寝込むなんてこともなくなるでしょうし」

希望的観測も含まれていそうなクイントの主張にマークは黙りこむ。体に過剰な負荷がかかり熱を出しているのなら逆効果ではないかと考えるが、強化により適切な負荷になれば体を鍛えるのにちょうどよくなるのか判断に困ったためだ。

「まあ、ほどほどにな」

「それくらいわきまえているわよ」

念のため一言注意して、後日もう一度話し合ってから娘たちを鍛えることに決める。杖に込められた強化魔法はともかく、薬については研究所で解析して身体に害がないことを確認してから使用を検討することになる。

「思ったよりは進展があったと言っていていいかしら？」

「根本的な解決にはなっていないがな」

「こんな話し合いの二つ二つで万事解決するようなら、今回お前さんを紹介されることなんてなかったらどう？」

「そうですね、この資料があればある程度の問題は洗えますし、それ以上はちょこちょこ改善していくしかないと思いますよ？」

マークにしてみれば進展が無かった話し合いだったが、クイント達はそう思っていなかった。実際に出た成果以上にこのような問題に向き合う仲間が増えたことは、クイント達の助けになっているのだ。

「まあ、成長や部分強度の問題は俺も積極的に対処しなきゃならない事だったし、今後の研究はある程度共有することを約束しよう」

「ある程度？」

「俺の本来の研究課題は死者蘇生と不老不死だが？」

「……いい、そんなの知りたくない」

最後にしっかりと協力を公言し、これにて第一回の話し合いは終了となった。

それに伴いマークはマリエルに対し、研究者としてではなく一人の戦士として改めて話しかける。

「それじゃあこっちの要件をいいか？」

「はい……」こちらが完成品ですね

「あら、デバイス？」

部屋を出ようとしたナカジマ夫妻であったが、ついマークたちの会話が耳に入り口を出してしまった。

「はい、第四技術部総出で仕上げた自信作ですよ！ と言っても剣は持ち込みでしたし、バリアジャケットのデザインも指定されましたから、私たちがやったのはいかに要望のスペックに近づけるかだけでしたけど……」

「それが重要なんじゃない」

そう言いながらスペックシートを出すマリエルの手元をクイントが見ると、なかなか興味深い数字が並んでいるのが見えた。ただそのシートをマークは見ることはなく、さっそくデバイスを起動しジャケットと剣を展開していた。

「ふむ……やはり強度は落ちてしまったか」

「要望にあったカートリッジシステムを組むのにどうしても……外装

の強化も検討しましたが、そうになると剣のバランスが変わってしまうので最終的には87%の数字になっています」

元の銘を『リガルソード』という、片手持ちのロングソード。シグナムの持つレヴァンティンと同様に柄の部分にカートリッジを組み、その部分が少し弱くなったという事だが、剣身に濁りは無く、名剣に数えられる一振りだという事が見ただけでわかる造りとなっていた。そしてバリアジャケットであるが、残念ながらこれを見てジャケットだという表現をするのは問題と言えよう。

「甲冑？」

「もともとマークさんの持っていた鎧のデザインをそのまま使用しています。これは物理的な強度は少し落ちますが、魔法に対する抵抗値は間違いですよー」

以前の鎧と区別するためか、少し明るめの蒼を基調としたものとなっているが、今までのバリアジャケットの常識に無い鎧姿は新鮮さを越えて奇妙にさえ見えた。

「これはちょっと……動きにくいんじゃない？」

「慣れているし、問題ない」

マークからしてみれば、魔法によって造られたこのバリアジャケットは以前のものより動きやすいくらいだったのだが、それを聞いたクイントは頬をひきつらせていた。

「ふむ、強度に関しては十分だ。これほどのものは元の世界でもそう見なかったし……ああ、これならば問題ない」

「よかった、これで駄目だしされたら私たち路頭に迷う……」

「次はこの剣を頼みたい。バリアジャケットは後日設定してもらおうから置いといてくれ」

「……………」

名剣を扱う楽しさより、マークという重要人物から預かった得物をいじるといふプレッシャーが技術部全体を覆って息苦しかったのだ。それにもかかわらず次の剣、それも先のものより強い力を持っていると思わせる剣を渡されてしまったのだ。

そんなマリエルの嘆きを理解するものには無く、マークは『ソール・カティ』に望むスペックを語り、クイントとゲンヤはただただ感心の嘆息を漏らすのであった。

## 第57話 「秘めた想い」

「行きますー！」

「ああ、本気で来い！」

なのはの宣言と共にすすかずかとフェイトが左右に分かれ、それぞれマークに迫る。それを受けて立つつもりで『ハルベルト』を構えるが、初撃から牽制というには高火力な一撃が放たれようとしていた。

「デイバインバスターー！」

「単純すぎるぞ！」

桜色の光はマークに一直線に向かい、いとも簡単に躲かれてしまう。だがそれも仕方のないことだろう。いくらなんでも正面からの直線的な攻撃を躲せないという事はない。

「隙ありいー！」

「無いって！」

実際に隙が見えたわけではないだろうが、すすかの気合を入れるための一喝に律儀に返事をし、マークは『マーニ・カティ』の一閃をその手の得物で軽くはじく。

しかしすすかもその程度のこととは予測していたのだろう。マークがそのあまりの手ごたえの無さをいぶかしむ間もなく、すすかの連撃が叩き込まれる。

「おっと！」

「まだまだあー！」

その連撃から一步下がり逃れようとするマークに対し、己を激する

叫びと共にさらにすすずかは踏み込む。

そんな鬼気迫るすすずかの連撃であったが、このような激しい攻めが十秒だって続くはずがなかった。マークは連撃の切れ目を的確につき、『ハルベルト』の柄を振りすすずかを遠ざける。

「ハアッ！」

「なんの！」

一度は上昇したフェイトはすすずかの連撃に加勢しようとするが、急降下による加速を得たバルディッシュ・ザンバーですらわずかに及ばず、余裕をもって『ハルベルト』ではじき返されてしまう。そして最大の一撃をはじめられたフェイトは体勢を崩し、マークはそこへ容赦なく横薙ぎの一撃を叩き込む。

……はずであった。

「やせませんっ！」

だがその背後には一度さがったはずのすすずかが『マーニ・カティ』を構え現れる。地を這うかのような低く鋭い踏み込みに、限界まで引き絞られた体から放たれる一撃は鋭く、マークは両足を大地から離すという曲芸のような回避を余儀なくされる。

「シューッッッ！」

「ッ！」

そこへ聞こえるのは、今回マークの相手をする三人の内で最大の攻撃力を持つ少女、なのはの渾身の叫び。

合計八つものアクセルシュートの光弾がマークに迫り……

「ふう、落第だ」

次の瞬間にそのすべてが圧倒的膂力によって振り回された『ハルベルト』によって迎撃されてしまった。

「えっ…」

「っっっっっ」

驚愕するなのはとフェイトは、マークが『ハルベルト』から『エイルカリバー』の魔道書に切り替えたのに気づく間もなくバリジャケットの一部を引き裂かれる。

「なのはちゃん、フェイトちゃん!」

「周辺の状況把握は必要だが、いくらなんでもこっちから意識を外し過ぎだ」

「っっっ」

ぼんつとすすずかの後頭部に軽い衝撃が走りあまりの驚きに振り返ると、視界の端にとどめていたはずのマークがあきれ顔をしながら魔道書で肩を叩いていた。

「とりあえず降りて来い。少しばかり解説してやるから」

「は、はっ…」

破れたバリアジャケットの修復を行いつつ降りてくるのはとフェイトを待つ間に、マークはつい先日の会話を思い起こしていた。

「それで、いつまでこんな中途半端な状況を続けるつもりだい？」

「中途半端っ」

フェイトとアリシアが学校へと行き、クロノ達が仕事を始めてからマークが研究所へ出かけるまでのわずかな隙間にアルフから投げかけられた質問は、マークにとっても予想外なものであった。

「一応さ、アタシだっているいろいろ見てるんだよ？ アンタが研究やら仕事やらを言い訳にして、フェイト達と過ごす時間を少しずつ削ってるのだからわかるんだよ」

「……いや、義務は果たさなきゃならんだろ」

「それが言い訳なんだよ。今までだったら断つてたりしてたことを今になって受けたりしてるのも、万が一アンタが管理局に否定された時を見越して動いてるんだろ」

「……」

マークはアルフの主張を聞き、面倒そうな顔から聞き分けのない子供を諭すような顔に切り替える。だが、アルフはマークの主張を聞くことせずに言葉を続ける。

「そりゃアンタの言いたいこともわかるよ？ 組織が相手なんだから保険をかけておくべきとか、出る杭は打たれるとかいろいろんな理由があつてそうすることを選んだらさっや。」

「……でもさ、アタシにはやり過ぎに見えるんだよ。アンタが最悪な状況に陥ることを前提に動いているような気がしてさ、最悪の事態にならないように動いているように見えないんだよ」

「それは……否定できないな」

確かにマークは最悪の事態に陥ってもなんとかリカバーできるように準備をしているが、最悪の事態に陥らないように準備をしているとは言い難い。リンディやグレアム達がそちらの方面に力を入れているので早々に事態が動くことはないだろうが、本人にその気がなければ遅いか早いかの違いしかないだろう。

「もっとアタシらのことを信用してくれよ。そりゃあアンタみたいな戦闘力も持ってないし、「コネも何もないけどさ、それでも一人であるよりずっといいだろ。」」



「まあ、考えておくれ」

「マークー」

その場は逃げるかのように研究所へ転移してしまったマークであったが、ゆっくり考えればアルフの言葉には領かざるを得ないものが多々あった。

(特に、最悪の事態が起こることを前提としているってところがな……)

その口の中でつぶやくマークは、何となく自分がどのような思考の元に動いていたのかを知ることになった。

(幸せになるためではなく、不幸にならないようにってどこかな?)

それは『〜になりたい』『〜をしたい』といった希望ではなく、『〜になりたくない』『〜をしたくない』と言ったずいぶん下からの目線でいたことに気付かされてしまったのだ。

常に一番下をみていれば、そこに届かなければ相対的に『幸せ』と言ってしまうという基準の低さ。

「今回考えていた最悪は、管理局が俺と言う存在を危険と判断し排除するという結論を出すこと」

そして回避すべきはフェイト達がマークの排除に巻き込まれることであった。

だからマークはフェイト達との関係性を薄めるために仕事を増やし、マークがいなくなっても問題ないように研究を急いでいたのだ。

だが、それも気付いてしまえば続けたいとは思えなくなってしまう。被害を最小に抑えるために周囲との関係を断つなど、何のために生きているのかわからなくなってしまう。

「……とりあえず、今度スズカに稽古でもつけてやるか」

考えを改めたところで引き受けた仕事がなくなるわけではないし、研究を辞める理由にもならない。一つ一つやるべきことを消化していくことに決めたマークが月村邸にて稽古を行うことになったのは、この数日後であった。

「まずは、せっかくの三対一なのにバラバラに戦ったことだな。密な連携なんかは期待していなかったが、順番に戦うだけというのはあまりにひどいぞ？」

「……はい」

なのは達も今回の訓練が急すぎたからとか連携できなかった言い訳はいくつかあったが、マークの言っていることに間違いは無かったので頷くしかない。

「それじゃあ個別に……まずはナノハだが、相手に攻撃力を知らしめるといっ点で初撃にディバインバスターを使ったのは良かったと思うぞ。ただ、俺が体勢を崩したのにアクセルシューターで済ませたのは大減点だったかな」

「あれは射線にすずかちゃん達が残る可能性が高かったから……」

「スズカは遠距離攻撃ができないんだから敵の近くにるのは当然だろ？ それを考えた位置取りは後衛の基本だ」

とはいえ今まで前衛・後衛を考える必要が無い戦いが多かったのもわかっているので、今後ゆっくり慣らししていくように伝える。ちなみにマークも味方を射線に入れないように戦うのに苦労した経験があるので、今後も継続してアドバイスをすることも約束する。

「次はスズカだが、前回見た時よりだいぶ巧くなってるみたいだな。」

視野を広く持とうとするのはいいが、先に目の前の相手に集中することも覚える」

「はー..」

この三人の中では最も経験の少ないはずかには、特に大きな減点は無かった。剣をあわせて気になったことはあったが、それは後で再度確認することにして最後の少女に視線を向ける。

「最後にフェイトだが……お前は何がしたかったんだ？」

「えっと……？」

今までの二人と違った指摘に戸惑うフェイトであったが、とりあえず先程に自分の行動の理由を告げる。

「遠距離からの攻撃はなのにはかなわないから任せて、一瞬でもマークの動きを止めようと思いつきり……」

ザンバーフォームと強化された右腕であれば、勢いをつけてぶつかればマークを止められると思ったのだ。しかし思惑通りにはいかず容易に弾かれてしまい、逆に隙を見せる結果となってしまったというわけだ。

それを聞いたマークとしてはなかなか複雑な思いであった。

「確かにこの中ではフェイトが一番力があるだろうし、物理攻撃に走りたくなるのもわかるが……フェイトの一番の武器は速度だろ？ 攻撃力に傾倒しすぎたらそのせつかくの持ち味を殺すことになるぞ」「それは……」

マークの忠告に思わず言葉が詰まる。もともとザンバーフォームは、ジュエルシード事件の際の決闘でなのは防御を削り切れなかったという一点から作られたのだ。

どちらかと言えば欠点を補うためのものであり、フェイトの長所とするには心もとないものであった。それが新たな右腕を得て、変わってしまった。

フェイトの知る限り最大の攻撃力を持つマークに次ぐ攻撃力を、一時的とはいえ身に着けてしまったのだ。弱体化させて、今はそれほどでもないにせよ、力を得たという事実は変えようがなかった。

「大剣を扱うには体格が足りない。今の右腕では力的にも微妙だ。せつかく他の奴らには無い速度があるんだから、それを捨てるのはあまりにも惜しいと思うな」

「……」

マークの言葉は正論であるとフェイトも思う。速度という長所を潰してまで攻撃力を上げるとするのは、あまりにも馬鹿らしい。馬鹿らしいとは思うが、それでも時の庭園の最下層で寂しそうに立つ大剣を持ったマークの背中が目に焼き付き離れなかった。

(バルディッシュを斧としてではなく、鎌としてでもなく大剣とした理由を察して欲しかったな)

結局、今後も戦い続けるのなら長所を潰す装備を多用するわけにもいかない。ザンバーフォームは基本的に封印と言う形を取らざるを得ないだろう。ついでに攻撃力の低下は免れないわけだが、そこはマークも考えていたようで、フェイトに一つの装飾品を渡す。

「それは『ファアラの力』と言って、炎の精霊ファアラの加護を得た指輪だ。一時的に攻撃力を上げる効果がある」

「あ……ありがとう」

マークは闇の書事件の際にフェイトに渡しそこなっていた装飾品をやっと渡せたことにひそかに安堵し、フェイトも以前自分だけ渡さ

れなかった装飾品をもらって素直に喜ぶ。

ただ、この一連の流れをひそかに嫉妬する者がいたことには、誰ひとりとして気付かなかった。

「それじゃあ最後にスズカは俺と手合わせをするから、ナノハは射線を探してみる。フェイトは一撃離脱の隙を探せ。……もちろん、探すだけでなく実際にやっても構わないからな」

「はい…」

三人とも元気に答え、それぞれの得物を構える。それを確認したマークは、今回はすずかのためと思い『マーニ・カティ』と同系統の剣である『ヴァーグ・カティ』に手をかける。

するとなのがここについてに堪えきれずにマークに尋ねる。

「えっと……デバイスの方は使わないんですか？」

「ん？ ああ、『リガルソード』か……この剣はいい剣ではあるんだが、好みじゃなくなてな。デバイスにして強度も多少落ちたし……同員の目があるところでもなきや使う気はあまりないな」

一応固有武器ではあるのだが、上位互換の剣が存在するためそこまでの執着が無いのだ。デバイス化をするにあたり不都合が起きても許容できる固有武器として提出された『リガルソード』に、気のせいかわるデバイスやレイジングハート、果ては『マーニ・カティ』からも同情の気配を感じた。

「……質問が無いなら始めるぞ？ あと、手取り足取りって言うのは性に合わんからな、見て覚える！」

「……」

抜剣術とでもいうべき初撃はすずかの目でも見切れる速度に抑えられてはいたが、それでもなお強力であった。危つく吹き飛ばされそ

うになりつつも何とか受け流し、次撃に備えるべく正眼に構える。  
一戦目とは異なり二十分近く続いたこの稽古の後に、結局事細かに三つほど攻撃用の型を教え込まれたというのは余談である。

そのような物理的な激戦が行われていた月村邸とは違い、無限書庫では精神的な激戦が行われていた。

『ねえ、もう諦めたら？』

『嫌や！ 絶対にあきらめへん！』

訂正しよう。激戦と言うには一方的過ぎた。以前の話し合いからお互いに譲ることなく主張をぶつけ合っていると言えば聞こえは良いが、これは駄々をこねる子供を諭す親のような雰囲気があった。

『僕は、早く正式な二代目を作ってほしいんだけど……』

『わたしは、あなたに代理を続けてもらって、リインフォースを取り戻したいんや……』

何度繰り返されたか数えるのも馬鹿らしくなる主張を続けながら、はやては管制代理の『先輩』を守護騎士のように肉体を持たせる術を探していた。

それと同時にリハビリと魔法の勉強、さらには復学の準備までしているのだから、はやての精神力は並々ならないものがあると言えるだろう。

(マークさんかて言葉は結構厳しいけど、それも私たちのことを考えてくれているからや……ちゃんとメリットが言えれば、先輩のことだってわかってもらえるはずや……)

『何度も言うついでにだけ、聞こえてるからね？ そこまで甘い人

……竜じゃないと思っつや』

『……』

心中の決意も感じとられ、流石に無粋だと思つはやては放つて置き、先輩ははやてに気付かれないように自身の懸念について考える。

(マーク……今は僕の存在がばれたら容赦なく消滅させられるとはやては思っているけど、そう簡単に消滅させてはくれないだろうな)

確かに敵には容赦をしないが、話が分からないこともないのだ。むしろつい先ほどまで敵対していたとしても場合によっては肩を並べることが出来るほど寛容であるところもあるのだ。はやて達が頼むのであれば、彼の持つ知識で新たに肉体を作る事も有り得るだろう。いや、頼むまでもないだろう。

(でも、僕はそんなことは許されない……)

彼の弱い心のせいで、いったいどれほどの命が失われたか……それを知りながら生き永らえることができるほど青年は強くなかった。今日この時を生きているのは、強い未練のためと言うより魔王の気まぐれと言われた方が信じられると思つていた。

(彼なら、生きて償えと言つたらうな……)

はやてに先輩と呼ばれる青年の無二の友人は、とても強かった。そして友人の戦友であるマークなら、きつと同じことを言つたらうことも予想がついた。

だから逃げるのだ。幸い魔王の中にいたのは事実であるし、自分の危険性なら山のように語る事ができる。

(そう、できるだけはやて達に迷惑をかけないように……)

その決意ははやてに知られることなく、静かに固められていった。

そしてその三日後。

管制人格が暴走したとの連絡が、アースラの下に届くことになった。



## 第58話 「再開」

アースラへとある連絡が行く少し前、その時……いや、つい先ほどまでマークは研究所におり、マニュアル片手に四苦八苦していたのだ。

「まったく……フェイト達が春休みに入るから、こっちはしばらく来ないつもりだったのに」

それにもかかわらず研究所に足を向けたのは、施設をしばらくあけるのにくつつかの処置が必要であったからなのだから仕方がない。理由があったとはいえしばらく忙しくしていたのだし、これからはちゃんとフェイト達に向き合っていくと決意したのだ。

それを初っ端から邪魔されたため、マークの機嫌はあまりよくなかった。

「微妙に覚えのある感覚なんだが……何だったかな？」

処置を終えたらさっさと帰ろうと思っていたマークであったのだが、そこへかつてどこかで覚えた気配を感じ、わざわざ魔王戦で傷付いたままの翼を広げて来たのだが……

「何で武器を突き付けられなきゃならんのだ……」

「すみません！ でもわたし急いでるんです！ 申し訳ありませんが治療術か……」

「そっ思っんなら武器をしまえよ……」

駆け付けた先に居たのは赤毛で青い服を着た少女であり、マークにとって見慣れない妙な武器……銃剣と呼ばれるものであった。

少なくとも治療を頼む者の態度ではないかと判断し、マークは武器

を取る。選んだ武器は『トマホーク』。重量があり扱っものを選ぶが、高威力であり、遠距離攻撃も可能な投げ斧だ。

「まあ、何を急いでいるのかは知らないが……とりあえず恐喝・障害未遂でいいか」

「え、ひよつとして役人さんでしたか!? い、いま捕まるのは非常に困ります! 早く妹を止めないと大変なことを……!」

「話は……そうだな、リンディがエイミィあたりにしてくれ!」

早々に聞く気無くしていたマークは無慈悲に言い捨て、その手にある『トマホーク』を全力で投げつけた。

「ちよっ! まっ!」

ゆっくり話をするつもりはなかったが、かといって戦闘をするつもりもなかった少女は目を見開き慌てて手に持った双銃を両手剣にして受け止めようとする。が、その一撃はあまりにも重すぎた。

(うっそ! ホントにこの人は人間ですか!?)

自身の不調を差し引いても、さすがにこれは無いと思えるほどの衝撃に受け止めることを諦めて弾き飛ばされるように後方に飛ぶことで何とか受け流すが、それは完全にマークに読まれてしまっていた。

「怪我については心配するな。ちゃんと加減するし、治療もしてやる」

相手から離れることもできると思っていたが、いつの間にか接近して『ハルベルト』を大上段に構えるマークをみて、少女は詰んだことを理解しながらも大剣での防御を試みる。

しかしその防御ごと叩き伏せるかのような衝撃が走り、次の瞬間には意識が闇に包まれてしまった。

「……思ったより脆かったな」

そう言えば治療を求めるような言葉を発していた少女がマークの感じた実力に全く届かなかった為『やり過ぎたかもしれない』と冷や汗を流すが、地上に降りて確認すると幸いなことに目立った外傷はなかった。

マークがほっと一息つきクロノに引き渡そうと通信を開こうとしたまさに時、目的の人物から連絡が入った。

「お、いいタイミングだ。今、変なのが研究所の近くにいたから……」  
『なんでこんな時に！ いや、いい、それは後回しにして八神家に向かってくれ。管制代理との戦闘が発生したらしい！』

「……もっと詳細を言え」  
『ああ、こつちも情報をよこしたユーノが戦闘に入ったようで詳細はわかっていないんだ……とにかく、魔王の残した時限式トラップの可能性もあるし、一刻も早く頼む！』

相当焦っているのか、言つべきことを言い終えたクロノはマークの足元に転がっている不審者に気付くことなく通信を即座に切ってしまう。一瞬だけ本当に後回しにしようかなどと考えてしまうマークであったが、せっかく無力化したのだしと、とりあえず担いで現場に向かうことにした。

「……体格の割には重いな」

とてもではないが本人には聞かせられないような独り言をつぶやきつつ、マークは『リワープ』の杖を使い、短距離転移を行う。

この時マークは自分では冷静であると判断していた。管制代理についてはある程度想像できていたし、八神家で事が起こったというのなら周りには守護騎士たちがいる。ユーノもいるとなれば、なのは達

もいるだろうから大丈夫であると。

だが、それは違った。マークは、この世界で目覚めて初めて自分の武器の存在を、投擲したまま回収していない『トマホーク』の存在を忘れてしまっていた。それは無意識のうちはこの件が大事になると感じていた焦りからか、あるいは、その場にいるだろう誰かのことを気にしすぎたためか……本人すら自覚していない感情に答えられるものはいなかった。

「ちっ、堅いな……」

「……ナンダ、ソノ程度力？」

シグナムのもう何度目になるかわからない直撃は、突如現れた重厚な全身鎧を装着した男に何の痛痒も与えられなかった。相手の存在が不鮮明であり攻めあぐねているのも事実ではあるが、これ程の守りを持つものはシグナムの記憶にもそっいるものではなかった。

(主の相談と言つのはこれのことだったのか?)

視線の先にいる守護騎士たちの小さな主はなのはやフェイト、それにユーノと協力して管制代理を務めていたらしい銀髪の青年と戦闘を行っていた。確認をしようにも戦局は劣勢であり、お互いに声をかけるような余裕はなかった。

「ヨソ見力……死ヌゾ？」

「ッー」

実際はよそ見とは言えない程度の戦況把握であったのだが、この場においては違ったようである。シグナムは鎧の男により高速で突きだされた槍を打ち払い何とか回避するが、その装備にたがわぬ重さに抗い切れずに二の腕に手傷を負ってしまう。

「シグナム！」

「シグナムさん！」

体勢を崩すシグナムの援護に入るのは同僚であるヴィータと、なのは達と同じように相談に呼ばれていたはずかだ。だがヴィータの一撃は盾に防がれ、すずかに至っては防御の必要性すら感じられなかったよつで甲高い金属音を響かせるのみであった。

「たった二人相手にこれほど苦戦するとは……………」

「ほとんど攻撃が通らないのが痛いわね……………機動力が低いのがせめてもの救いってところかしら」

傷の治療のために引いたシグナムの代わりにザフィーラが前に出る。その間にシグナムとシャマルは打開策を模索するが、そもそも攻撃が通らないのだから難しいと言わざるを得ない。

「あの必殺技みたいなのは駄目なんですか？」

そこへ割って入ったのはアリサだ。彼女もまたはやてに相談を受けに足を運んでいたため、「この戦闘に巻き込まれていたのだ。

「正面からは難しいな。隙を作ろうつにも最大クラスの攻撃が必要になりそうだし……………この人数では不安が残る」

「それに切り札を切ってしまったら、はやてちゃん達を助けに行くのも難しくなっちゃおうし……………」

確実に倒そうと思えばシグナムのシュツルムファルケンとヴィータのギガントシュラクの挟撃がベストだが、アリサやすずかを守りながらの実行は困難であった。

《管制代理はあの重装騎士を召喚していた……………下手に離れると新たに

何か召喚される恐れもある《

《すずかちゃんのこともあるわ。あの回避能力はすごいけど、バリアジャケットも着てないし離れるのは不安ね《

かといって後方にすずか達を下げればいいというわけでもなかった。鎧の男ははやて達との分断が役割のようで、下手にすずかやアリサを遠ざけようとする守護騎士たちをおびき寄せするためそちらを狙って来るのだ。

(ともかく増援を待つのが最善か?)

消極的な案ではあるが、増援が見込めるのであれば無理に勝負を急ぐ必要はないと判断したシグナムは治療を終えて再度剣を構えるが、次の瞬間にその案を放棄することになる。

「つくー!」

「あぶねえー!」

「すずかちゃん!」

確かにきわどい戦い方ではあったが、均衡を保っていたはずのすずかがいきなり膝をついたのだ。だが、それも仕方のないことだろう。なのはやフェイトと言う前例を見て守護騎士たちも失念していたのだが、もとより十歳の子供に前線で戦い続ける体力精神力を求める方が間違っているのだ。

とっさにヴィータとシャマルがフォローに入るが、それはかえって連携を崩すことになってしまった。

「くそっ、ザフィーラー!」

「わかってる!」

ザフィーラーが即座に前面に出て三人を庇うが、鎧の男の槍を正面か

ら防ぐのはさすがに難しかったようで、防御ごとすずか達のもとへは  
じき飛ばされてしまう。

「紫電」

次の一突きで一か所に固まってしまった四人を突かれるわけには  
いかないと、シグナムは玉砕覚悟でレヴァンティンを振りかぶり

「ッー閃！」

鎧の男へと振り下ろした。

「……やったの？」

「いや、確かに今までとは違い手ごたえはあったが……」

反撃をせずに防御を固めたのだろうか、決定的な手ごたえまでは無  
かった。そのシグナムの言葉通り、今の一撃で数メートル後方に押し  
やられたが、鎧の男ははまだ健在であった。

いや、それだけではなく、シグナムの一閃は確実にダメージを与え  
ていた。

「っ、兜が……！」

そう、今の一撃で鉄壁と思われていた鎧の一部を砕くことに成功し  
ていたのだ。だが、そこから出てきたものがまた守護騎士たちに衝撃  
を与えることになる。

「……屍……」

「アア、セツカクノ配慮ガ台無シデハナイカ」

そう屍はその姿を見て青くなる少女を見下ろし、いかにも残念そうに言う。だが、逆に相手の実態を知り歓喜する者もいた。

「アンデットが相手なら炎が効くんじゃない!？」

その一言はアリサのものであった。守護騎士たちは知る由もないが、ゲームの知識を咄嗟に言ってしまったのだが、結果としては間違いいではなかった。

屍は特に炎が効果的と言うわけではないが、魔法攻撃に対する耐性は物理防御に比べてそう高くなかったのだ。

「ま、試してみる価値はあるか」

「このまま増援を待つよりよっぽど良いな」

「……来イ」

屍は一瞬だけ、炎を使うと聞いて離脱するすずかに目を向けるが、すぐにヴィータとシグナムを迎撃するために構える。次の瞬間には今までのうっ憤を晴らすかのような一方的な戦いになるが、それでも屍は最後まで倒れることなく、合流を防ぐという任を果たすことになった。

その一方で、空では戦いとも呼べない展開が続いていた。

「プラズマランサー!」

「バルムンク!」

フェイトの雷を纏った魔力弾であるプラズマランサーが管制代理の逃げ道を無くすように包囲するのに対し、それをはやてが魔力で作った剣で迎撃をする。

「はやて!」



「はやてちゃん！」

「じゅめん……でも待って！ もうちょっと話を……！」

「だから、いくら話したって変わらないこともあるって言っているだろっ？」

管制代理を庇うはやてに対し、フェイトとなのはは責めるようできて何とも言えない視線を向けるしかない。戦いながら少し事情を聴いただけではあるが、管制代理がはやての恩人であるのなら、戦いたくないという気持ちもわからないわけがないのだから。

だが管制代理の強大な魔力を前に、戦わないという選択ができるほど甘くは無かったのである。

『ミール』

「ディバインバスター！」

「先輩！ ……なのはちゃん！」

はやてに先輩と呼ばれた管制代理の放つ球状の闇魔法『ミール』と、カートリッジを一つ使用したなのはのディバインバスターがぶつかり相殺される。そう、話し合いを望んでいるのははやてだけで、相手である先輩は今更話をするつもりなどなかったのである。

「さっきから言っているだろう？ 話がしたければ、僕と戦って勝て

ばいって」

「そんなの……！ 第一、戦いの後なんてない、先輩は命の限り戦うつもりやる！」

どうやって実体を得たのか、それをはやて達が知る由もないが、よほど特殊な裏技を使っているだろうことはわかる。そしてその体が不安定であることも……

だから、選択肢は二つに一つ。先輩と積極的に戦って消滅させるか、消極的に戦って消滅させるかである。

「やっぱり、説得しようなんてせず問答無用で戦うべきだったかな？  
……まあ、君たちが戦ってくれないのなら仕方がない、別の相手を  
探すよ」

「やせませんー」

戦線を離脱しようとした先輩をユーノがバインドを使って止める。  
とはいえ予想されていたのか、左手一本しかバインドをかけることが  
できなかった。

「ユーノ君!？」

「ダメだよ……この場で決着をつけないと、はやてが夜天の書を完全  
に掌握出来てないと判断されるから!」

「ッ……」

現時点でもすでに危うい……否、付け入る点を作ってしまったている  
のだ。万が一先輩が誰かに戦いを挑むことになれば、どれほどの問題  
になるかわかった物じゃない。

「責任を取るのは……はやてを庇っているリンディさんたちが、ある  
いはマークさんに責任が及べば、下手をすれば戦争になるかもしれない  
」

「そんな、何でそこまで……!」

「そうだね……魔王に食われるとき、このままでは死んでも死にきれ  
ないと思っていた。何もなさずに死ぬなんて、許されない事だね」

ユーノの指摘に愕然とするはやてであったが、続く先輩の言葉にあ  
る程度同意してしまう。

はやてだって、魔王に飲まれた時はこのまあ死んでしまうなんて許  
容できなかった。

「こんな僕でも、まだやり残したことがあるんだ」  
「でも……。」

はやては言葉を詰まらせる。本当は山ほど言いたいことがあるのに、それをつまぐ形にできない。だが先輩ははやてが言葉を作るのを待つようなことはせず、『ミイル』の閻弾を準備する。

「先輩……」

「彼が鼻屑にしている子は駄目だろうけど、それ以外だったら大丈夫かな？」

「ッ……」

そう言って先輩はユーノへと『ミイル』を飛ばす。なのはがユーノを守るうと動き始めるが、すでに準備を終えていた先輩の速度には及ばない。だが、速度に関して言えば、なのはを超える存在が隣にいるのだ。

「へえ、今のを躲せるんだ」

「舐めないで……さっきから、戦えと言っ割には本気じゃないんでしょっ」

フェイトの指摘に、思わず先輩が関心の意を示す。しかし、気が付いていたのはフェイトだけではない。なのはだってそのせいで思いつきり戦えていないし、はやては先輩の目的を知っている。

「やっぱり、こういうのは向いてないね……仕方がないね、できればこういっ事はしたくなかったんだけど……」

「何を……」

そう言って、先輩は黒い光を放つ『なにか』を二十ほど周囲に展開した。それは攻撃力を持つとは思えない小さなものであったが、何と

も言えぬ嫌な気配を放っていた。

「それは……？」

「これは『闇の欠片』だよ。まあ、ちょっと指向性を持たせて、発動したら戦闘行為を行うように設定したけどね」

「なっ!? 止め……!」

先輩の考えを理解したはやてが止めようとするが時すでに遅く、二十の欠片は海鳴全域へと飛び去ってしまう。

「うん、これで僕と戦う理由ができたかな? 一定時間をおいて、もう一度欠片をばらまくと言えばもっといいかな?」

「先輩!」

先輩を責めても、もう遅い。こんなことをしてしまえば管理局も黙ってはいないだろうし、何よりはやて自身も人を傷つけるような行為を許すわけにはいかない。

「……とりあえず、連行させてもらいます」

「できるものなら」

「ここまで来てしまえば、私情より優先しなければならないことがあると、フェイトがバルディッシュを構える。それに応えるように先輩も構えるが、ここでまた別の存在が介入する。」

「なっ! バインド!」

「はあ、いい、王様……でいいかしら? ちょっとお話があるのだけとお時間よろしく?」

フェイトはもちろんなのは達もバインドで拘束したのは、桃色の髪をした少女であった。さらに手に持った銃剣をなのは達に向け、先輩

を『王様』と呼ぶ姿はどこか飄々としているが、その瞳の奥には確固たる意志をたぎらせていた。

「……いいだろう。やはり、様式美にはこだわらるべきだろうしね。そこらへんに撒いた雑魚を倒してから来るといい」

あまり遅いようなら次を撒いてしまっぞと付け足しながら、先輩は桃色の少女について戦場を去る。抜け目なく地上で戦っていた重装騎士も回収されていたのだから、本当に隙がない。

あまりの急展開に呆然とするのは達であったが、それも駆け付けたマークとクロノによって現実へと呼び戻される。

静かになった戦場で、彼女たちが唯一わかったのは、また厄介な事件が始まったという事だけであった。

## 第59話 「指針」

戦いが終わり、アースラではなく月村邸に集まった面々は沈黙の中にあつた。だがそれも仕方のないことだろう。彼らは先程の戦いで起こった事を、正確に理解できないような存在ではなかった。

それでも、皆が黙ったままでは一向に先へと進まない。

「…………最悪のシナリオとして、管制代理の離反及び暴走という事が確定すれば、リンディ提督が責任を取ることになる。もちろんハヤテもこれまで通りの生活を続けることは不可能だろう」

「…………はっ」

マークの指摘に、はやては項垂れながらも返事をする。今後先輩の放った欠片が何らかの被害を出せば、この最悪のシナリオへ一直線だろう。

「だが、あくまで今回の問題を身内だけで片づけることができたら…………」

本局への報告は、せいぜい『身内のケンカであつた』程度のものであつたとなれば、そこまで大きな問題にはならないだろう。

幸いクロノとマークが到着したのは戦闘が終わつた後であり、管制代理はまだ管理局と事を起こしていないのだ。

「でも、そんなことしたら…………」

「リスクとしては、失敗した時の罪状が増えるぐらいだな」

そう、もし情報を秘匿して被害を出そうものなら現状とは比べ物にならない重罪だろう。それはかなりのハイリスクもいいところなのだ。だが現状が負けこんでいる以上、一発逆転を狙うにはそれ相応の

チップが必要と言っわけである。  
そして最大の問題は……

「この手段を選ぶと僕とマークの手はもちろん、アースラの設備すら使えない……分が悪すぎると言わざるを得ないな」

「……はい」

「ちなみに次善の策は、管理局と協力して管制代理を討滅。僕らとはやては相応の罰を受ける……というのが最も危険が少ない」

「こちらは現状の負け分のみで支払いで済むが、最初に言われたように今までの生活を維持することはできないだろう。」

「さて、現状把握は十分か？」

「この賭けに乗るか、それとも降りるか」

「わたしは……」

心情的には先輩を助けたいと思うが、その賭け金がリンディ達の立場である以上容易な決断はできなかつた。だが時間は待ってくれないし、一刻も早く決める必要がある。

だから、はやてが最後の決断を下すための後押しを求めたことを非難すべきではないだろう。

「成功率は……マークさんは、もし私たちが賭けに出たとき、どれくらい勝つ可能性があると思うっ？」

それは希望を振り切るためか、それとも万が一の可能性にすぎるためか、本人ですらわからない問いかけであった。

その選択を人に委ねる問いかけに対し、マークは少し失望しながらも正直に答える。

「そつだな……お前とナノ八が組めば、大抵の無茶は押し通せるだろ

「おれ」

「……はい？」

つい聞き返してしまったことを責めることができる者はいないだろう。それほどマークの答えははやて達の予想からかけ離れたものであった。

「おい、何の根拠があつて……」

「仮にも英雄と聖女だぞ？　この程度どうにかできないでどうするんだよ」

まるで結果がわかりきっている問題の答えを聞かれたかのような、むしろ『なんでこんな簡単なことがわからないんだ？』とでも言いたげなマークの答えは、反論をする気も失せるような確信が込められていた。

だが、あまりの気負いのない言葉であつたせいも、かえつてはやては肩をすかされたような気分になつてしまつていた。

「……どうも、」

「ああ、結局そうなるのか……仕方ない、よく考える。管制代理を庇つたことは、ハヤテにとって間違えだつたのか？」

なお決断できないはやてに、マークは今回の件の根本を問いかける。はやてとしては、これは否定せざるを得ない。

「たとえ何度やり直すことになつても、わたしは先輩を庇つたと思つ」「間違えたなら正す必要があるが、正しいと思つていることを曲げる必要はない。……もちろん無知による決めつけや妄信は良くないがな」

そう言つてマークは席を立つ。「ここまで言つてしまえばはやても



奮い立つだろうし、そうなればマークとクロノはここに居てはまずいのだ。

「まあ、頑張れ」

「え、でも、その、クロノ君……」

「ただのケンカだって言うのなら、さっさと仲直りしてくれ」

「……うんー」

クロノも結局ははやての背を押し、マークに続いて部屋を出る。が、本当にははやて達に任せきるといつわけではないから出てきたのだ。休暇を取って、個人的に動くつもりは満々であった。

しかし、それもマークのせいで実行することは叶わなくなる。

「じゃあ、クロノはこれを使え」

「……何のつもりだ？」

「じつじつつもりだ！」

そう言ってマークはクロノにあるものを持たせて、はやて達の居る部屋へと踵を返した。

「あれ、マークさん？」

「いや違う。今から私のことは『シリウス』と呼んでくれ」

「……」

突然戻ってきたマークに目を丸くするのはの前には、思わず頭を抱えるクロノと、目を隠す鋼の仮面を装着した自称シリウスが堂々と立っていた。

「えーと、じゃあマークさんじゃなくてシリウスさんと、クロノ君じゃなくて……そうやね、シリノ君でええか？ は、わたしらに協力してくれると思ってええですか？」

「そっち仮面の名前はマルスの方が個人的にはいいんだが……ああ、  
そう思ってくれてかまわん」

「……せめてシロノにしてくれ」  
「つぶく」

仮面をつけただけで正体を隠したと言い張る、あまりの言い訳の適  
当さに思わず苦笑するはやて達であったが、そのことは一切気にせず  
マークもといシリウスが応える。その姿がどうやらツボに入ったら  
しく、フェイトがなのはの膝に伏せてプルプルしていた。

ちなみにクロノもといシロノは、紺色に金の細工が施された仮面を  
つけている。

「……いいのかよ」  
「知らん」

そんな中マークの言動にかなり呆れ気味なヴィータたちが小声で  
話していたが、それもかなり投げやりなものであった。

「それで、目標はとりあえず管制代理を捕縛でいいのか？」

「えっと、先輩さんと……あとこっちの鎧の人とピンクのお姉さんを  
相手にすることになるのかな？」

「あと、闇の欠片ってあの人が言っていた奴だね」

そう言っただけなのはとユーノがデバイスに記録していた画像を見せ  
る。マークとクロノは一通り画面を眺め、何が起こっていたのかを把  
握した。

「……先輩とやらの目的がいまいちよくわからないな。はやては何か  
心当たりがあるのか？」

「それは……」

「ふん、とんせ馬鹿らしい理由なのだろう」

「やっぱり知り合いなの？」

映像を見てから何とも言えない渋い顔をしたマークは、思うところがあったのかつい茶々を入れてしまう。そしてそこを指摘されてしまえば、もう知らないでは済まされないだろう。

「……戦友の友人程度の知り合いだ。言葉を交わしたのは、片手の指で足りる程度しかないな」

「え、敵対しとったって聞いたけど？」

それははやてが先輩から聞いていたマークとの関係。先輩は私欲により魔王を蘇らせてしまい、その末に隣国の王族に打たれたという事と、その王族とマーク等マムクートが協力関係にあったという話だ。

「間違っではないが……そもそもはやての言う先輩も皇族で、隣国とは同盟関係にあった。幼少のころは共に学ぶことがあったと聞いている」

「マークの戦友がその隣国の王族で、その王族とはやての先輩が友人、か……」

それが魔王の復活と共に戦争がはじまり、最終的にはマークの戦友……後の『碧空の勇王』が魔王を討ち終戦となった。

「正直、話を聞いた限り皇帝の資質は皆無と言っていい甘ちゃんだ。今回のことも深慮遠謀があるとは思えん」

「……昔のことは知らんから何とも言えへんけど、今回の目的は『ちゃんと終わらせる』って言うことだよ」

その内容は先輩の消滅を前提としたものであったこともあり、はやては詳細を聞くことなく拒否してしまったのだが、現状を鑑みると聞

くだけ聞いておけばよかったと悔やまれる。

「理由がなんであれ捕縛するのに変わりはないし、適当に痛めつけてやれ。欠片も何が起こるかわからないし……ハヤテとナノ八の二人で速攻で終わらせろ」

「では、我々は鎧の方を……」

「いや、ヴォルケンリッターには闇の欠片とやらの対処を頼みたいから、そっちはスズカに譲ってくれ」

「えっ!？」

その振り分けに思わず一同がマークの正気を疑う。先程の戦いでは、さすがの剣は鎧の男を傷つけることができなかったのだから、その反応も当然だろう。

「自分の弟子を死なせる気か!？」

「いや、スズカの回避能力ならフォローできる奴を一人置けば充分だろ。そもそも『マーニ・カティ』ならあの守りを貫くのは可能だぞ？ ずすかの力を考慮すれば……数字で表現したらわかりやすいかな?」

自分も鍛錬に付き合ったためか、シグナムもマークに怒鳴り詰め寄るのだが、涼しい顔で受け流される。

「えっと……あれの物理防御が大体30位で、スズカは基本20程度だけど、さっきも言ったように『マーニ・カティ』は特別だ。ちゃんと使えばあの手の相手には35程度の威力が見込める」

「じゃあ、アタシやシグナムはどうなんだよ！ アタシらだって騎士なんだ！ 剣を始めて一年たたない子供に劣るなんてありえねーだろ!？」

ヴィータ達とて全力でこそなかったが、手を抜いていたわけではな

いのだ。それなのにすずかならダメージを与えられると聞いて、内心穏やかでいられるはずがない。

「えっと……ヴィータならグラーファイゼンを持った素の攻撃力は35に届いてるぞ？ ハンマーなら鎧を切らなくてもダメージは通せるから実質アレに対する効果は50は越えるとも言える」

「は？」

「まあ盾で防がれている以上、ダメージにならないのも道理だな」

つまり当たっていれば大ダメージは見込めたという事なのだが、うまく防がれていたという事だ。今までの敵と違い一切バリアを使われなかったので、なぜかダメージが通らないと錯覚させられてしまったのだろう。

魔力を一切使わない武技に、完全に翻弄されてしまっていたというわけだ。

「ちなみにシグナムのレヴァンティンは30程度と鎧の防御力とほぼ互角で、ザフィーラが25位かな？」

「ほう、ちなみにマークの攻撃力はどれほどなんだ？」

最初のすずかの数値には疑問が残ったが、続けられた数字には妥当性を感じたシグナムは興味深そうに尋ねる。

「ん〜、俺……じゃなくて、マークの場合は武器によってだいぶ変わるからな……お気に入り『ハルベルト』ならば、40位かな？ もっと頑丈な武器ならもう少しいくだろうかな」

物理攻撃においては最高クラスと言っていいだろう。ただしここで気を付けておきたいのは、武器さえ頑丈なら更なる攻撃力が望めるというところだ。この場でいうつもりはないが、マークが女神の加護を受けた『フライパン』を持てば、『ハルベルト』の攻撃力を上回る。

もちろんシグナム達も武器の形状変更やカートリッジシステムを使用することで、更なる攻撃力の上昇が見込まれる。今話したのは基本的な目安でしかないのだ。

「ちなみにその基準で行くと、わたしらはどうなるん？」

「ハヤテは……使用術式にもよるが、魔法攻撃力なら30程度はいくかな？」

「へえ……」

「ちなみにナノハのディバインバスターが33で、フェイトのザンバーフォームなら27かな」

比較対象が無ければ分かりにくいだろうと追加された評価は、今一つだったようでピンと来なかったようである。

「うーん、シグナムの魔法防御がシールドなしで20位。ザフィーラが28ぐらい……それにマークの『エルファイアー』が32ぐらいって言えばわかるか？」

「いま挙げた面子はみんなAAランク以上だし、もうちょっと一般的な基準を提示したほうがいいんじゃないか？」

何とか理解させられないかといくつか例を挙げる自称シリウスに、自称シロノがアドバイスを送る。

「……魔王戦の時援護に来た部隊の隊長の魔法攻撃力が22位。ああ、ユーノの攻撃力が15位って言った方がわかりやすいか？」

「わ、わたし達ってそんなに強かったんだ……」

正式な訓練を受けた部隊の隊長の五割増しという、管理局の中でも上から数えたほうが早いという攻撃力を実感し思わず顔が引きつるなのはであったが、ここで驚くのは早すぎた。

「ちなみに魔王戦で使用した二発目のスターライトブレイカーの威力は180オーバーだぞ」

「うわぁ……………」

もっともあれは周囲に散った魔力を再利用するという特殊な魔法であり、戦場によってはかなり威力が上下してしまう。特にあの時はマークの神器クラスの魔法が使われていたからこそであり、それが無ければだいぶ威力は落ちたと思われる。

「っと、話がずれたな……………とにかく理論上はスズカでもダメージは与えられるんだ。戦うことに問題はない」

「だが実際傷一つつけられなかっただろ？」

「ああ、試験にはちょうどいいだろ？」

話を戻したマークに反論するシグナムであったが、その目的を聞いて絶句する。

「馬鹿な！ 実戦なんだぞ!？」

「訓練じゃ分らないこともあるだろ？ 何よりスズカの意識の問題だしな……………なあ、剣を使うのは怖いか？」

マークの放ったその言葉は、すずかの問題を理解しているもの言葉であった。

初陣で思わぬ活躍を見せたすずかに起こっていた問題……………それは最後の一太刀、サイクロプスの首をはねた一撃であった。

「生まれながらの戦士には、魔法で戦うものには理解しづらい問題だろう。……………こんなことを言う俺も理解しているとは言いが、生き物に刃を向けることにストレスを感じる者がいることは知っている」

「……………はい、正直、甘く考えていました」

マークの確認に、少し躊躇しながらもさすがは自身の感じている恐怖を認める。サイクロプスも魔物とはいえ、スケルトンやゾンビとは違い生き物と思えてしまったのだ。

切った直後はまだ実感がわかなかったが、時間がたつにつれじわじわと生き物を切ったことを感じ、訓練での木刀すら振るえなくなってきたのだ。

「もし、屍相手でも戦えないようならそれまでだ。その時は剣を置け」「わかり、ました……」

有無を言わせないマークの裁定に、さすがは渋々と頷く。それからさすがのフォローにユーノ、ピンクの少女はクロノが担当することに決まり、残りのメンバーは自然と何が起るかわからない闇の欠片対策という事になる。

「そう言えば、俺がこっちに来る前に捕縛したのがピンクの少女に似た衣装を着ていた。関係者かもしれないし、適当に対処していくれ」

「そういう事はもう少し早く言え！ 違法渡航者ならエイミー達にも話ができるし、第三者は早急にどうにかしよう」

「あの娘、管制代理のことを王様と言っていたのが気になるな……アレのことを知っていたのなら皇子になるはずなんだが」

管制代理とは関係の薄いところならアースラのスタッフが手を出せると言うクロノに、マークが映像から気付いた点を述べる。

管制代理の過去を知らないのに、迷わず彼に話しかけたという事は必ず何かがあるはずだ。

「そう言えばいい忘れていたが、管制代理はネクロマンサーだ。魔導師としての実力はもちろん、亡霊戦士の召喚も行つから油断するなよ」



「了解や！」

「わかりました！」

こうして、クロノがアースラに戻る以外は必ず二人以上で動くように念を押し、行動を開始する。

捕縛対象は管制代理にピンクの少女。

討滅対象は重装鎧の屍と二十ある闇の欠片。

「……なんで、どうしてこうなったの!？」

「知らないよ、そんなこと」

半ば狂乱状態にあるピンクの少女キリエと、呆れながらもはやてから切り離れた闇の欠片を入念にチェックする管制代理は、話し合いをしているうちに重大な齟齬に気が付いたのだった。

「いわゆる並行世界って奴かな？ おそらく、君の望んだものは僕たちの存在の対価として次元の狭間に消えたんだと思うよ」

それは夜天の書が闇の書と呼ばれていた時から感じていたことだ。魔王と言う存在が闇の書に入る余裕があったのは、元々あった何かを押しつけたのではないかと、ずっと感じていたのだ。

では押しのけられたものはどこへ行ったのか？ 当然、マークが封印されていた門の中、すなわち世界と世界の狭間である。

「発見は……何百年かかるかわからないわねえ」

「君の体を見る限り不可能じゃなさそうだし、気長に頑張りなさい」「そういうわけにはいかないのよー」

おざなりに慰める管制代理に反発しつつも、キリエは詳細を語らずに一人で思索を続ける。その顔には紛う事なき焦燥が浮かんでおり、

元々お人よしの管制代理としては放って置けなかった。

「……一人、大抵の事は解決できる人を知っている。彼は半分神様だし、もし君が協力してくれるなら紹介してもいいよ?」  
「なんか、すごく胡散臭いんだけど……でも、手段を選んでる場合じゃないわよねえ」

言葉を聞く限りはしぶしぶと、ただし表情はそれに伴っていないかった。得物を狙う猛禽のような鋭さと共に、目の前の男を見据える。

「条件は?」

「僕が敵対していた娘たちと戦うこと。ただし時間稼ぎが目的だから、怪我をさせないようにね」  
「……了解」

そしてここに一つの契約が成る。そして善は急げとばかりにキリ工は出て行ってしまい、この場には管制代理と鎧だけが残る。

「消滅したとばかり思っていたけど、存外しぶといね」

「……」  
「まあいいか……」

返事が無かったことに少し失望しつつ、僅かに左腕を上げる。

「今度こそ……僕は、最後まで僕でいるために」

その左腕には、鈍く輝く小手が填められていた。

## 第60話 「決意の開戦」

「それで、マークの攻撃力の最高値っていくつなの？」

「今はシリウスと呼んでくれて……まあ、現状なら神器クラスの魔法で80に届かないくらいかな？」

各々の役割が決まり別行動を始めたマークとフェイトは、ビルの屋上を飛び跳ねて闇の欠片を探していた。そしてフェイトは別行動になったのを幸いと、先ほどの話で語られなかった部分に踏み込んだのであった。

それに対し呼び名を訂正するマークもといシリウスは、魔力が制限されていることを加味して答えるが、どうにもフェイトには納得いかないらしい。

「でも、なのはだって……」

「いや、あの子は特別だぞ？ 俺が知る中でも、あれほどの魔法を扱うやつなんて片手の指で足りる程度しかいないんだから」

マーク曰く、あれほどの高威力の魔法になると伝説となった神将や聖戦士などでも追隨するのは難しいとのことだ。

「アイツらがナノハに負けるとは言えないが、単純な威力なら人族最強と言ってしまうていいだろうな」

「……」

さらに続けられた言葉に、なのはが遠い存在になってしまったような心寒さを覚えたフェイトであったが、それを察したのかマークが少し乱暴に頭を撫でつける。

「マ、マーク？」

「別に、そつだと言って何かが変わるわけじゃない。俺のように、人と竜が結ばれた証だっているんだ。何の心配もいらななさ」

「……そっか、そつだよね」

人と竜の共存の証であるマークを前にしたら、フェイトはなのはその違いなど些細な事だと簡単に納得できた。

マークに人族最強とまで言わしめたなのは隣の隣に立って本当にいいのかなど、馬鹿らしい不安であったと確信できた。

「ありがとう、マーク」

「……だからマークって呼ぶなって」

フェイトが変わらず偽名で呼ばないことに呆れるようにしつつも、小声で感謝に対し返事をしたことをフェイトは聞き逃さなかった。

その照れ隠しに思わず笑みを浮かべるフェイトであったが、それも軽く咳払いし本題に入るため引き締める。

「……それで、私はどこまでいけると思っ？」

それは、フェイトがずっと感じ続けていた劣等感の発露であった。万全の状態ではなかったとはいえ、魔法に出会ったばかりのなのはに敗れ、クロノにも負けて、その後も戦闘でまともに勝てた覚えがない。そんな事実がフェイトから自信を奪っていた。

本来ならここで励ますべきなのだろうが、マークは戦闘関係についてはどこまでも厳しかった。

「フェイトは凡人だ。間違ってもナノハやハヤテと同レベルで考えるな」

「……」

正直、フェイトはマークにこのような事を言われるとは思っていない

かった。なのはやはやてほどの魔力量は無くても、同世代はもちろん、管理世界でも上位の魔力量があるのだ。攻撃力では劣っても速さなら勝ると、そう言ってもらえると思っていた。

「ナノハは攻防に優れた魔道師だ。確かにフェイトと比べ速さこそ劣るが、攻撃速度はカートリッジシステムでその欠点は埋まりつつある。さらに、攻撃を回避できなくても防ぎきるだけの防御があるし、機動力を必要としていないんだ」

さらに補足すれば、なのははある程度攻防に使用する魔力を機動力に回せば、一時的とはいえフェイトに追隨するほどの速度が出せる。流石に超えられたりはしないが、圧倒的なアドバンテージにできるほどの差ではなくなるのは春の決闘でも証明されている。

今はまだ圧倒的な差ではないのでフェイトも勝ちを拾えるであろうが、あと五年もすれば、フェイトの適正ではダメージを与えることすら難しくなるだろう。

先程おさまったばかりの感覚が再びフェイトを襲おうとするが、続くマークの言葉に霧散させられる。

「だけど、ナノハはフェイトの友達だろ？ 共に戦うのなら力を競う必要はないし、何より才能ある奴らって言うのは才能が無いものが支えなきゃ立てない」

「それってどういっ……？」

「言葉通りの意味だ。いくら才能があっても、発揮できる場面が用意されなければ意味がない」

たとえばなのはの才能が『望んだ結果を引き寄せる』というものだったとして、なのはが最高の結果を望める状況を作り出すのは周りにいる者たちがいなければ意味がない。

今のフェイト達の役割はいわば『発射台』とでも言えばいいだろうか。

「そして、その役割は誰にも代われない。……信頼が必要だからな」  
「……」

フェイトは静かに、その言葉がしみ込むのを感じた。しみ込み、理解した。

「はやてが『先輩』と存分に向き合えるようにするのが、今回のわたしたちの役割」

「そういう事。どんな物語だって、脇役なしじゃ語ることとはできないもんだ」

ただやみくもに最善を尽くすのではなく目指すべき地を得た以上、フェイトの実力があれば失敗することはまずないだろう。

そう確信したマークが改めて闇の欠片を探そうと視線を巡らせたとき、彼の眼に信じられないものが写った。

「どうしたの？」

「いや……古い……そう、古い戦友、いや世話になった人に似た人を見つけただけだ」

「え!？」

その言葉に驚きフェイトはマークの視線の先に目を向けるが、さすがにどの人かはわからなかった。

「いい、今は関係のない話だ」

「で、でも……」

「優先順位を忘れちゃいけない。管制代理の件は、一刻も早く済ませないといけない事だ」

どう考えても本人でないし、ただの他人の空似の可能性の高いの

だ。マークはそう言って赤毛の女性から目をそらし、再び欠片を探すために移動を始める。

だが、関係ないと言いながら、マークはリアクションが隠せなかったのだ。そう思うとフェイトにはどうしてもその背中が無理をしているようにしか見えなかった。

《……エイミィ、あそこにいた人たちの映像だけでも残しといて！》

《それはいいけど……あとから探すって、難しいよ！》

《それでも！ 万に一つかもしれないけど……マークと似たような状況の人なのかもしれない！》

本当に万に一つの可能性を上げて、自身の行為の正当化を図る。マークが思わず目を見張るほどの衝撃を受けたのだ。まるつきり関係が無いとは言いにくいと感じたのだ。

だがそれはそれ。今やるべきことを自覚したフェイトは意識を切り替えて、今度こそマークの背を追う。しかし、その足もすぐにまた止まることになってしまう。

「今度はどうしたの？」

「……魔封じの気配がする。まさか、これも闇の欠片なのか？」

フェイトには分からなかったが、マークにはかつて相對した存在に似たものを確かに感じていた。マークの気配が探索のものから戦闘のものに変わったのを感じ、バルディッシュを構える。とはいえ、魔封じなるものが本当に居るのだとすれば、マークのとるべき選択はたった一つしかない。

「フェイトはナノ八達と合流してくれ。対象を確認してくる」

「でも、いくらマークでも一人じゃもしものことがあった時……」

「相手が魔封じなら、魔導師は近づくとべきじゃない。それに、今の俺は魔法を使わない方が強い」

確かに相手が本当に魔封じ……魔法を封じるものならば、魔導師であるフェイトでは足手まといにしかない。人を呼ぶとしたら守護騎士達だが、マークとは不仲であるためこれも憚られる。

結果として、フェイトはマークとここで別れて行動することになったのだが、マークからしたら装甲の薄いフェイトを一時的とはいえ一人で行動させることの方が不安であった。

「何もなければ、それに越したことはないが……万が一のためだ」

そう言ってフェイトに一つの術をかける。より正確には、フェイトの右腕に。付加された術式は、確かに強力だが同時に危険性も高いものであった。

「遅滞魔法？」

「ただの活性……とは言えないか。まあ、気休めと言つかお守りみたいなものだし、気にするな」

内容については誤魔化しながら、術式を付与し終えたマークは今度こそ移動を開始する。フェイトにしても、明確な目的を確認した直後であったため、もやもやしたものが少し残ったがこの場にとどまることなくなのは達のもへと向かって飛び去って行った。

一方そのころ、守護騎士たちは海上にて闇の欠片を搜索していた。彼女らの主曰く『先輩は、闇の欠片をぶつけてくるはず』と言っ言葉を信じた結果、どこを探しても必ず欠片が見つかると考えたためだ。一応シャマルが探索を行いながらの移動であったので、警戒をしながらも余裕のあるヴィータがとある疑問を話し出した。

「なあ、ところではやてはなんであれのことを『先輩』って呼ぶんだ？」  
「……………そっつえば」



「今までの主の中に、あのような者はいなかったはずだが……」

自然と歴代の主の内の一人ではないかと考え即座にその考えを否定した騎士たちは、それではあれは誰なのかと首をかしげる。もっとも、闇の書時代のことは所々記憶を制限されているので、絶対には言い切れないが……

「マークが彼のことを知っているようだったが……」

「フーことは、あいつらも古代ベルカの出身ってことか？」

そのような予想を口にはしたが、内心ですぐさま否定する。使用する魔法体系が全く違うのだから、それはまずありえない。そうなる、やはり過去の主である可能性も限りなく低くなる。

それならと次の可能性を検討しようとした時、シャマルがストップをかける。

「それについてははやてちゃんに後で聞きましょう？ それより、来たわよ」

「来たか……できれば最初は様子見と行きたいが、時間が無い」

「よっしゃあ！ 初っ端から全力でぶっ飛ばせばいいんだな！」

「だからと言って逸るなよ、ヴィータ」

魔力を高ぶらせ結界を張り、戦闘の準備を整える騎士たちの前に現れた欠片は四つ。そしてその姿は、騎士たちもよく知る形をしていた。

「こいつは……」

「なるほど、さすがは管制代理と言っわけか」

シグナム達の前に現れたのは、武骨な鎧をまとった見間違うはずもない自分たちの過去であった。

「趣味がわりーな……」

「だが、我等を足止めするには申し分ない存在だ。これは、流石に無視できない」

ヴィータが自分と同じ姿をした欠片を嫌そうな顔で見ると対し、ザフィーラがその有効性を語る。目の前にいる自分たちは、はやくに出会う前の自分たちである。はやての騎士となった今を是としている以上、名ばかりの騎士であった過去を嫌悪してしまうのは仕方ないことだろう。

そして、嫌悪しているのはシグナムだけではなかった。

『……決闘を申し込む』

「ふっ、一対一が希望か……いいだろう、私もお前のことが認められない」

かけらの模した過去のシグナム達にとっても、戦いから遠ざかり、鎧すら纏わなくなった未来の自分たちを認めたくは無かったのだ。戦う事こそを存在理由としていたがゆえに、それを否定されることが許せなかったのである。

「待って！ わたし達の目的は……」

「問題ない。すぐに終わらせる……」

「アタシらがニセモンなんかには負けると思ってたのか!？」

シャマルの制止を振り切り、シグナムとヴィータが加速する。共に振りかぶり、最大の一撃を加えんとし……

「紫電一閃！」

『紫電一閃！』

「ラケーテンハンマー！」

『ラケーテンハンマー!』

全く同じように動く欠片たちに迎え撃たれる。その威力は全くの互角であり、そのことに驚愕する。

「ニセモンの分際で!」

『平和ボケ如きが!』

ヴィータ達の罵倒に続く連撃も、吸い込まれるかのように相手の攻撃に重なり相殺される。その隣では、ザフィーラとシャルルも全く同じような事になっていた。

剣が、戦鎚が、拳が、糸が、フェイントが、機動や補助魔法、特殊技能すらも重複し、火花を散らす。本人にとっては不本意だろうが、傍から見てみると表情を除けば上等な演武にしか見えないだろう。

《くそっ、どういう事だ!? これほどの複製など、そう簡単に作れるものではない筈だ!》

《魔力量、武装、身体能力、さらに戦術面までもほぼ完全にコピーするなんて……尋常な術者じゃないってことね》

驚愕を通り過ぎて少し冷静になり相手の評価を改めるとともに、思念を飛ばし相談するシグナムとシャルルだが、ここで初めてコピーとの差が生まれる。

『シュランゲバイゼン!』

『渦巻く嵐!』

「なっ!」

「っく!」

前衛・後衛の違いはあるが、共に攻守にバランスのとれた騎士であった二人は辛くもコピーの攻撃を防ぎきる。それとともにコピー

達から距離を取り、いましがた発生した違いについて思考する。

《今、何があった？》

《流石に今のことだけじゃ……》

戸惑いを感じながらも、可能性は見えた。先程は劣勢に傾いてしまったが、それは戦況が動くという事の証明だ。すなわち……

《勝利することも可能と云うわけだ……！》

《しばらく分析を優先するわ。ちょっと無茶な要求をするかもしれないけど……》

《それが必要な事ならば問題ない！》

このまま長々と戦い続けるわけにはいかないと、シグナム達は力を温存しつつ勝機をはかる。直接言葉こそ交わしていないが、ヴィータとザフィーラもすぐさまシャルの解析を待つ姿勢を見せる。

目の前に戦いに集中した守護騎士たちは相手の思惑通りに事が進んでしまったことに、足止めをされ大局からはじき出されてしまったことを理解し歯噛みするしかなかった。

そして守護騎士たちが戦いを始めたころ、なのはとはやては管制代りとの戦いに割って入ったピンクの少女と相対していた。いや、相対と言っには、緊張感が欠如しているかもしれない。

「それじゃあ、彼って本当に神様のような人と知り合いなの？」

「そやねえ……まあ、アレは人やないけど、肉体が無くなっても存在できるような超常の存在やし、認めたくはないけど間違いやないかな？」

「うー……これはどうするのが正解なのかしらねえ……」

表面上は思いつきり悩んでいる少女を攻撃するわけにもいかず、た

だ途方に暮れるなのは達であったが、問答無用で戦闘よりは良かったのかと思いき直して少女と話を始める。

「一体何が目的で今回の件に介入したんですか？」

「欲しいものがあつたんだけど、当てが外れちゃってねえ……代替案を提示してもらったんだけど、まさか本当だったとは思わなくて」

「はあ……」

何とも要領を得ない返事に、なのはも気のない返事をかえさざるを得ない。二度目の邂逅で一番に聞かれた『彼って神様みたいな知り合いがいるの？』なる質問に関係しているのだろうが、これだけではさっぱりわからない。

「……私たちに話してくれませんか？ 少なくとも、あの人が言う神様みたいな知り合いよりはよっぽど頼りになる人を紹介できますよ？」

「「こつちも事情があるから、公的機関には頼りにくいよね」

「今は管理局関係なく動いてますから、大丈夫ですよ！」

なのはが説得をしようとするが、どうもグレーゾーンと言うか、後ろ暗いところがあるようで首を縦には振らない。

のらりくらりと交渉を続け、これは戦闘もやむなしかとはやてが考え出したころ、ようやく事態を強制的に動かす存在が降り立った。

「これって……」

「わたしと……なのはちゃん!？」

そこに現れたのは闇の欠片。それもバリアジャケットの色こそ違うが、なのはとはやてを模したかなり強力なものだと予測されるものであった。

そのまま戦闘が始まるかと身構えたなのは達だが、予想に反して事

務的な声と口調でピンクの少女と話を始めた。

『キリエ、伝言です』

「な、なに？」

『第一戦は、その二人の足止めをお願い』

『……だ、そうです』

「わかったわ」

キリエと呼ばれたピンクの少女は、現れた二人の欠片の無機質な応対に気おされながらも、肩を並べて戦う意思を見せる。それを確認したなのはやての欠片が、機械のようにグルンと首を回し、自分の「コピー」の異質な動きに頬をひきつらせるのは達にも顔を向ける。

『貴方たちにも、伝言です』

「な、なんですか？」

『守護騎士と言つ例外を除いたコピーは、蒐集を行った時のデータを使用している。有象無象はともかく、ちょっと洒落にならないのも作ったから、頑張つて』

『……だ、そうです』

「それって……！」

どういう意味か、分からなかったのは一瞬だけ。なのははその言葉の意味を理解して顔を真っ青にする。唯一この中で蒐集された人物を把握していないはやてが首をかしげるが、なのはの言葉で事の重大さを理解する。

「シャレにならないって？」

「確かに、マークさんも蒐集されてたの……」

その答えを聞いて、悟る。生き残る方法はただ一つしかない、と。

「……一分、一秒でも早く終わらせな」

「そしてみんなと合流。マークさんの「ピー」を全員がかりで攻略しないよ」

「ちよっと！ 何その必死さ加減!？」

もはや戦いにくいなんて言っている余裕はなくなっていた。もとより三対二と不利な状況なのだ。無駄なことなど一切考えないとはかりに構える姿などは、まさしく戦士の極致の体現であった。

そして海鳴にて探索を行う最後の一組であるすずかとユーノは、一度高町家の道場により、その足で存分に立ち回れる臨海公園へと到着した。到着して、今更かもしれないけど、と前置きをしながらユーノは一言、最後の確認を取る。

「ねえ、すずか……戦えるの?」

「……道場に寄らせてもらって、考えてみたんだけど、やっぱりわたしはどんなに覚悟しても人は斬れないと思う」

紡がれた言葉は、まさかの否定。ならなぜここに来たのかと慌てるユーノに、すずかは静かに続く言葉を選ぶ。

「でも、戦いたいって気持ちは、止められない。なのはちゃんやフェイトちゃん達と同じ舞台に居たいって気持ちは、無くならない」

「そ、それならエイミィさんみたく後方で……」

「でも、一度剣を持ってしまったから……見てられないよ」

後方の仕事が重要であることは、十分に理解できる。だが、戦う手段を知ってしまったすずかは、もう後方にあることなどできなかつた。ならば、選択肢は一つしかない。

「だからわたしは、人を斬らずに戦う」

「え？ でも……」

「わたしは、武装破壊で戦場に立ち続ける……！」

静かな決意に、ユーノは絶句する。難しいなんて話ではない。困難なんてもんじゃない。限りなく絵空事に等しい夢物語だと、そう言わざるを得ない決意だ。

だが、その決意を聞き届けた者がいた。

『絵空事で終わらせる気が無いから、この場で決意を語ったのである  
じっ』

「はい。貴方を捕縛して、この決意を証明して見せます」

その場に現れたのは、管制人格に仕える重装騎士。それもこの地に呼び出されてある程度時間がたったためか、言葉が流暢になっていた。

「目標があなた自身でなければ、思いっきり振れます。……そして、私の剣でもその鎧を裂けると、マークさんが保証してくれました」

『奴が保証したのなら、事実我が鎧を裂くことは可能だろう。神軍師とまで言われた彼の眼力は、古今並ぶものが無いと聞く』

「そうですね……なら尚更下手な剣は見せられませんね。その逸話に泥を塗るわけにはいきません」

最高潮に高まった緊張は、ユーノをその場に縛り付ける。魔導師の、それも本来は学者である彼では、人外であるすかと騎士の威圧に、完全に気おされてしまっていた。

「今はただの月村すずかですが……この戦いに勝ったら、剣士と名乗らせてもらおう予定です」

『くくっ、今はただの屍だ……が、あえてこの場は名乗らせてもらおう  
じ』



未来ある少女の、剣士と名乗るか否かの血統の相手が名無しだと箔がつくまいとばかりに兜を脱ぎ、重装騎士は高らかと名乗り上げる。

『我が名はヴィガルド！ かつて、国を滅ぼした暗愚な皇帝である！』

その咆哮と共に、すずかの『マーニ・カティ』とヴィガルドの『スレンドスピア』が交差する。それも、以前のような柔らかな交わりではない。お互いがお互いを叩き砕かんばかりの轟音と、閃光にすら見える火花に彩られた激突である。

「負けませんっ！」

『打ち勝って見せよ！』

「じつして海鳴に、三つ目の戦いの火ぶたが切って落とされた。が、当然これだけでは済まされない。

『お構え下さい』

「なっ!？」

硬直していたユーノの後方から突如声が響き、思わず飛び退いてしまふ。だが、声をかけたと思われるローブの男はそれで何をすることもなく、ユーノを眺めていた。

「えっ!?……?」

『貴方と同型の魔導師のデータが得られなかったため、あなたの相手は私となります』

「……………それって、僕はその他大勢に数えられてること?」

『いえ、その他大勢の足止めには、デスガーゴイルなどの魔物型が配置されていますので、そう言っただけではございません。ただ、この肉体のモデルとなった者の名をかたるわけにもいきませんので、彼のように

に名乗るわけにはいきませんので、ご容赦ください』

「あ、そうですね……」

丁寧な言葉遣いについて頭を下げそうになるユーノだったが、目の前の存在も敵であることに違いはないのだ。気を引き締めて、改めて相対し……その瞬間にスフィア生成と言う先制攻撃をくらう事になった。

「って、ええ!？」

『いつまでも呆けないでください。すでにここは戦場です』

(そこはさすがにたちみたく、ちゃんと向き合ってからでよかったんじゃないのか!?)

やたらと説教くさいセリフを言うローブの男に心の中で罵倒の言葉を吐きながらも、ユーノは即座に防御からの反撃の手を整える。

ただ、さすが達の戦いと比べ、自分は戦いには向かないと、心の片隅で思うのであった。

## 第61話 「逆鱗」

「それじゃあ君の目的は故郷の復興のため、闇の書に眠る『砕けえぬ闇』とやらを回収すること……でいいのかい？」

「正確には、それをしに来た妹を回収することです！」

アースラの医務室にて、マークが拾ったという違法渡航者……アミティエ・フローリアンのマークの研究所に近づいたのは全くの偶然出会ったという主張と、その妹と思われるピンクの少女の行動からひとまず『白』と判断された。

「しかし、すぐに意識が戻ってくれて助かった。あまり長く意識が戻らないようだったら、本局の方に移送しなければならなくなっていたからな」

「あはは、体が丈夫なのが取り柄ですから！」

そう言っであっけらかんと笑うアミティエ……アミアであったが、別に怪我が軽かったことを僥倖と言っわけではない。本局の一部の連中に『マークの研究所に近づいた存在』と思われるのを避けたかったというだけだ。

もしそうなっていれば、何かあの世界で得た物は無いかという聴取で、それこそ数か月単位で拘束される結果となってもおかしくない状況なのだ。

「……それで妹のことだが、ちょっとここでは言いにくいことに巻き込まれている」

「えー！ キリエってば、もう何かやらかしてるんですか!？」

「やらかしたというより、火薬庫の隣で花火して遊んでるような状況と言った方がいいかな？」

不安そうな顔をするアマタであったが、こればかりはどうしようもないとクロノは思う。本人はいたって真面目なのだろうが、管制代理とマークの関係に割って入ってしまったようなものなのだ。

マーク本人に言えば否定するだろうが、マークが管制代理の映像を見たとき、軽い失望と軽蔑がよぎった様にクロノには見えたのだ。ほとんど関係は無かったと言っていたが、そのわずかな関係も最悪に近いものであったことは想像に難くない。

そんなわけで、今マークと直接相対すれば、管制代理に味方した存在もまとめて消し飛ばしたりしないかと、少なからぬ不安を覚えているクロノであった。

「知り合いと敵対関係に近い状態にあるから、最悪巧く捕縛するように言っておく」

「そんなー」

今度は悲痛そうな顔をする網多であったが、今かかえている問題を即座に解決しないといけない以上、流石にキリエとやらを庇う暇はない。と、クロノは考えたのだが、アマタの考えは全く別の者であった。

「身内の問題で、これ以上人様の手を煩わせるわけにはいきません！

どうか、妹の件は私に任せてくださいー」

「………わかった」

アマタの主張に渋々頷くクロノであったが、今回選択肢などあってないようなものだ。例え否と言ったところで目の前の少女がおとなしくしているなどあり得ないと、この短時間で理解できた。勝手に動き回られるよりは………そう考えれば、同行させた方がはるかにマシである。

「ただし、こちらの指示には従うこと、それだけは絶対に守ってもらう」

「わかりました！」

たしかに重症とは言えないが、マークの攻撃はそれなりのダメージをもたらしていただろうにもかかわらず元気に返事をするアマタに、感心半分呆れ半分の視線を向けるが、残念ながら気付いてはもらえなかったようだ。

ともかく、後はどのようにして管制代理の情報を得たのかなどの聴取かと思いを改めたとき、エイミィから予想外の通信が入った。

『欠片が！ マーク君で！ フェイトちゃんが！』

「落ち着け！ 流石にこれじゃ分からないぞ！」

エイミィには事情を説明し、しばらくの間海鳴の状況は見えて見ぬふりをしてほしいと頼んでいたにもかかわらず通信してきたのだから、よほどのことだろうと気を引き締めていたのだが、あまりの興奮で要領を得ない状態であった。

思わず一喝して平静さを取り戻させ、今度こそと耳を傾けるが、その情報を聞いた時思わず固まってしまったのは、仕方がないことだと思いたい。

『闇の欠片の一つが、マーク君の姿をして出現！ 一時単独行動をしていたフェイトちゃんと交戦を開始しました！』

「じれって……」

フェイトがなのは達のもとへと飛んでいた最中、ミッド式でもベル方式でもない妙な結界にとらわれていた。

もっとも、マークと言う例外の見本市のような人がいたためこの程度で驚くフェイトではなかったが、警戒は最大限に、いや、おそらく管制代理の仕業だと予測できていた。

(マークと同郷の……)

その事実だけで、少しだけ話を聞いてみたいと思ってしまったが、その誘惑を振り払い敵の動向を探る。そして、今回のフェイトの相手として用意された存在を見つけてしまった。

『逃亡阻止の結界だ。外部からの干渉を阻止することはできないが、有象無象が入ってきてきても意味がないことは、この姿を見れば容易に予想できるだろう』

「そ、んな………」

青年の装いは、とても立派と言えるようなものではなく、胸当てやら小手と言った最低限の無骨な装備を付けた、まさしく傭兵といったモノであった。だが、どれほど装いが変わろうとも、その人物を見間違えるようなことなど、ありえなかった。

「マーク………」

『ああ、神竜のコピーに相違ない』

その回答に一瞬で血の気が引くフェイトであったが、何とかこらえる。まるで走馬灯のようにいつになく高速で回転するあたまは、単独での状況の打破は不可能と判断を下し、即座に最も頼りになる存在へと念話をつなぐと……

「えっ？ な、なんで………」

『……あれ？ オリジナルはいないのか？』

マークとの念話が繋がらない事に、顔色が真っ青を通り越して白くなりかけるが、おかしなことにコピーまで困ったかのような声を上げたのだ。

「え、え？」

『うっん……』わっつてどっついたらいいのかな？ 僕はオリジナルと君の二人を相手するように言われてただけ……どうせ一人なら、オリジナルの方がいてくれた方がもっとやりやすかったのに』

いったい何が目的なのか、さっぱりわからなくなりそうなことを言うマークのコピーは、あっけにとられるフェイトをしり目にしばらく唸った後、ようやくいい案を思いついたとばかりにポンっと手を打つ。

『ただ待ちぼうけをくらうのも馬鹿らしいし、先に始めちゃおっか』  
「ッー」

どこかふざけたような態度のままコピーは武器を構えるが、これに対してもフェイトは驚きを隠せない。

「レヴァンティン!？」  
『ああ、オリジナルの武器は、君たちのデバイスほど深いつながりが無くてコピーできなかつたんだ。仕方ないから、一番コピーしやすい武器をつてことだよ』

扱いなれない武器による戦力の低下と思うべきか、全距離対応の武器を持ち強化されたと考えるべきかと一瞬フェイトの頭をよぎったが、弱体化は期待しないでおくべき時を引き締める。

そして、マークに術式を付加された右腕を撫で、気持ちを落ち着けながらこの場を切り抜ける策を練る。

(勝利はまず無理……なら逃げる？ うっん、結界もあるし、そう簡単に逃げられるはずがない)

ならば戦う他無いのだが、やはりマークがこちらの状況に気付くま

で時間を稼ぐ以外の策は思いつかなかった。

(切り札は、とっておく。幸い、私は舐められてるし、余計な警戒心を持たせるべきじゃない……！)

回避にすべてを賭ける気にはなれず、バリアジャケットはライトニングフォームを選択する。とはいえ、気休め程度の差でしかないだろう。

『準備はできたみたいだね……それじゃあ』

「プラズマランサー！」

たとえ卑怯と思われるようとも、そう思いながら先制に放った六発の雷撃は、マークのコピーに全方位から突撃する。マークの魔法は複数発同時展開するのが困難なものであるので、一発位はと、そう思っていた。だが、そんな思惑も通用せず、当然のようにそのすべてを炎弾によって迎撃された。

「その魔法……なんでっ！」

『オリジナルも使っていた』『ファイアー』だよ、って、言いたいのはそっとういう事じゃないか。レヴァンティンのおかげで本来困難な連射もいくらかやりやすくなったってことだよ』

「……………」

その言葉を分かりやすく証明するかのように展開された炎弾は、実に四十五発。それらは必死に距離を取りながら障壁を準備するフェイトをあざ笑うかのようにつぎつぎりで回避できる速度、間隔で発射される。

「っく、っくっ…」

『ほら、集中を切らしたら終わるよっ』



上下左右、強引な切り返して何とか回避するフェイトに次々と炎弾を見舞うコピーの姿は、まるでネズミをいたぶる猫のようであった。間近で爆発する炎弾をシールドで防ぎながらも、少しでもコピーの攻撃から遠ざかろうと最高速での離脱を試みる。もちろん背を向けるようなことはできないので、戦場から離れることはできず、コピーを中心に大きく円を描くような軌道となる。

『やっぱり速いねえー！』

十発近い数の炎弾がフェイトの後方で爆発するが、すぐに誤差を修正されてしまう。だがこれで大分数を削れたはずと、改めてコピーの方を確認すれば、最初とほぼ変わらないだけの炎弾がそこにはあった。

『魔力量には自信があるんだ。これぐらいの魔法なら、千は越えられるよ』

「……なのはは、よくあの時割って入れたね……！」

魔王とマークの戦いに割って入ったなのはを思えば、今の苦労はその半分に過ぎないと無理やり自分を鼓舞して、フォトンランサーを起動する。

(目指すはフアランクスシフト！ いくらレヴァンティンの補助があるにしても、流石にあれ以上の同時展開は難しいはず！)

遠距離で押されているとはいえ、近距離戦に持ち込む気なんてさらさらおきない以上、フェイトが取れる手段は決して多くは無い。最大攻撃力も劣るであろうフェイトは、物量作戦に出るしかないのだ。

「それでも……諦めるわけにはいかない！」

たとえ勝算が低かろうとも、ここで足掻くことを辞めるわけにはいかない。カートリッジで強制的に速度・攻撃力を底上げし、コピーの攻撃に備える。

急激に魔力を増加させたため、大気が震える。それが故に、コピーの一言を聞きのがしてしまった。

『少し足りないけど、今はそれでいいよ……最終的には、オリジナルがない状況で僕を倒してくれば、ね』

雷撃にまぎれて掻き消えた真意に、たどり着く者は未だいない。

「お前が魔封じの者……いや、ここまで来ると、もはや魔殺しか」

「た、確かに魔導殺しとは言われているけど……流石に初対面でそれはないんじゃないかなー！」

一方マークは、フェイトが自分のコピーと遭遇したことも知らずに、魔殺しの少年と相対していた。それも、マークの知る魔封じの者とは、完成度が段違いだ。

(効果範囲は極小……自身に対する攻撃魔法のみ無効化が可能。それでいて、広範囲の妨害もそれなりの効力を誇る、か)

マークが言う魔封じの者は、広範囲にわたり魔法を完全無効化したが、効果範囲外からの魔法攻撃は可能であった。さらに敵味方の区別なく無効化していた上、自我もほとんど食い潰されていたのだ。しかし少年は、魔法が無効化範囲に突入した瞬間に消滅させることができるといふ。

それは『出来損ない』と呼ばれていた魔封じと、目の前の少年とは比較にならないものであることの証明であった。

(だが、まだ完成はしていないのか……)

最大の効果範囲を絞り、自我を持たせるに至った魔殺しも、マークの目から見れば出力が不安定であった。

(こんな状態を持続させれば、数か月持たずに死ぬぞ。命を、イーギルを燃やして維持しているのか?)

イーギルを理解する存在がいることに驚き、本気で捕縛どころか消し飛ばすことを検討するマークであったが、それで立場を失ってしまいうわけにもいかない。

消滅させることは諦めるも、どちらにせよ魔殺しなんて存在をフェイト達の前に出させるわけにはいかない。これは、魔導師であるフェイトやなのは、はやてにとってはまさに天敵である。

マークがそのように分析する一方で、少年たちもマークのことを観察していた。

《ねえトーマ、あの翼……本物なのかな?》

《いや、リリィ……それも確かに気になるけど、今重要なのはあの剣でしょ》

鎧については理解できる。バリアジャケット、あるいは騎士甲冑と呼ばれるものだろう。そして、腰に吊るした長剣もデバイスであることがわかる。だが、その中でも異彩を放つのが、青年の構えた大剣である。

《あれって、質量兵器だよな?》

《ホントだ……あれ、でもこの時代って六課みたいな特例は存在しないはずだよな?》

そう、トーマとリリィの居た時代……現在から約15年後ですら、

管理局のごく一部でしか質量兵器の使用は認められていないのだ。であれば、出される結論は一つ……目の前の青年が、非合法的な活動をする存在という事。

《俺たち、そもそも見習いだし、ましてこの時代じゃ生まれてすらない可能性もあるけど……》

《管理局の局員だしね。流石に見過ごせないよ！》

この戦いがどのような結果をもたらすかは、今だけは考えないことにする。見つけてしまったのに放って置けるようなら、彼らは出会う事すらなかったのだから。

《それに、この時代で魔導殺しを知る人物なんだ。何かを知っているもおかしくない！》

自分たちだけじゃない。多くの人が苦しむきっかけを作った人物かもしれないのだ。それを見て見ぬ振りができるようには、なりたくもなかった。

「ど」からその知識が漏れたのか知らんが、お前のような存在を野放しにするわけにはいかな……手足の一本や二本、覚悟してもらおうぞ！」

「そつちこそ、アンタの研究で死んだ人たちの苦しみを、思い知れ！」

微妙に噛み合っているようでない会話を交わしながらも、二人は必勝を確信しながら激突する。

片や神将器、マークの持つ烈火の剣『デュランダル』は全盛期には一振り数十もの戦闘竜を薙ぎ払った古の神器である。

片や使用者に世界を殺す猛毒とまで言わしめた、トーマの持つ『ディバイダー966シユトロゼック・リアクテッド』は、結合分析機能を持つ究極の刃である。



（くっっ！ まさか、魔法を一切使わずにエクリプスドライバーと撃ち合えるなんて……背中の翼といい、この人キメラかなんかなのか！）  
そんな拮抗に致命的な変化が起こったのは、マークは優位を保ちながらも仕留められないことに苛立ちを、トーマは絶え間ない劣勢に焦りを感じ始めたところであった。

「っ！」

「くっっ！」

それにいち早く気付いたマークは、トーマを全力で弾き飛ばし、自身も大きく後退する。そして、改めてそれを確認し、マークの表情が憤怒に染まった。

一撃一撃の威力はトーマの持つ『ディバイダー』より、マークの持つ『デュランダル』の方が勝っていた。だが、『ディバイダー』の結合分断機能は、確実にその剣身を蝕んでいた。

すなわち、すでに剣を合わせて百合に届こうとしていたその結果、『デュランダル』がついに限界を迎えたのだ。

「よっっっ！ っれで……」

だいぶ楽になる。そう考えてしまったトーマは、決して間違っていない。剣を失った剣士など、もはや敵ではない。確かにごく普通の戦士ならば、魔法を封じ、武器を破壊した時点で勝負は決まるだろう。しかし、マークは人という範疇から半分はずれた存在なのだ。そのうえ、『デュランダル』は、マークにとって掛け替えのない戦友の形見とも呼べるもの。事情を知るものなら、これ以外適切な表現は無いらう。

少年は、竜の逆鱗に触れてしまったのだ、と。

## 第62話 「援軍」

海鳴の随所で起こる戦いはその激しさを増していたが、まだ戦いに参加していない彼は、遠視系の魔法を使いその戦いをのぞき見ながら、思い通りに進まない展開に眉をひそめていた。

「うーん……やっぱり、彼が戦線から離れたのは大きな誤算だったな……」

そうつぶやく“先輩”の視線の先では、おそらく今回の騒動で最強を誇る闇の欠片が、たった一人の少女を相手に無数の炎を撃ちまくっていた。その映像の中に、彼の求めた青年の姿はない。

「変な空間ができてるみたいだし、仕方のない事なんだろうけど……これじゃあ闇の欠片は二十個もいらなかったかな？」

現在起動している欠片は守護騎士に四個、なのはとはやてのコンビに二個、ユーノとフェイトに一個ずつで合計八個しか使っていない。

一応それに加えてすずかの相手をしている重装騎士の一個があるが、これは二十個の中に数えられていない。

「あと執務官に一個使う予定で、もう一個はマーク用で、問題は残りの十個……まあ、武装局員用にくつか使う予定だけど、それも含めて肝心の相手がいないんじゃないしょうがない」

魔王戦にまで出てきた局員なら今回も……そう思っていたのに当てが外れた次第である。

「……まあ、神竜の末裔である彼ならなんとかしてくれるかな？」

非常に他人任せな事を言う。先輩であったが、所詮欠片なんてただのコピーでしかないという正しい分析でもあった。この程度どうにかできないようであるならば、とっくの昔にマークは屍をさらしていたはずである。

今はまだ、事態の推移を見守るべきかと、彼は再び戦場へと視線を戻す。ちょうどそこでは、ようやく一つの結果が示されようとしていた。

《遅くなってごめんなさい。分析は大体終わったわ》

《ようやくか……いや、済まない。本気の自分たちを相手に時間稼ぎをすることが、これ程大変だとは思わなかった》

ついシャマルを責めるような口調となってしまったと謝罪するシグナムであったが、それも仕方のないことだろう。自身のコピーだけでなく、シャマルのコピーをも足止めして分析の時間を稼いでいたのだ。防御に徹していたためさほどダメージがあるわけではないが、それでも魔力と体力の消費は相当なものであった。

これからまだ十五近い数の欠片が残っている以上、できる限り温存したかったという思いもあり、かなりストレスがたまっているようであった。

《それで、どうだった？》

《コピー達は、あくまで自分のオリジナルと戦うことに執着しているの。もちろん、そこまであからさまじゃないけど、それ以外のことはおまけ位に考えているんじゃないかしら》

一番わかりやすかったのは、連携がほばないことだろうか。パツと見ではそこそこ協力しているようにも見えたが、よく見るとお互いの戦場をうまく躲した動作が連携に見えただけという、むしろそちらの方が困難なのではないかという妙な動作であったのだ。

その答えを聞いて、シグナムは納得する。コピー達は今の自分たち



を否定するために躍起になり、自分たちはかつての自分たちを否定しようとして視野が狭くなっていたのだ。

もしシャマルが冷静さを維持できていなかったら、完全に疲弊するまで自分との戦いを続けることになっていただろう。

《ヴィータ、ザフィーラ》

《なんだよ！》

《どうした》

激しく、そして静かに自分のコピーと戦っていた二人に、シグナムはヴォルケンリッターの将として、シャマルは参謀として指示を出す。

《自分との決着は後回しだ！ 今は、欠片を減らすことを最優先とする！》

《自分以外の欠片を攻撃して！ それも、一撃で終わらせるつもりで！》

過去の自分との決着をつけられない事は不満であったが、二人だつて最優先目的を忘れていたわけではない。即座に標的を切り替えた守護騎士達であったが、コピー達がそれを容易に許すはずが無かつた。

『逃げるなっ！』

『行かせんツッ！』

それぞれが己の標的を逃がさんと迫り……追いつくことなく、撃墜された。ザフィーラはシャマルを、シャマルはヴィータを、ヴィータはシグナムを、そしてシグナムがザフィーラを、それぞれ一撃で墜とってしまった。

「……なんか、すげーあっけないな」

「ああ、あれほど苦戦していたのが嘘の様だ」

激戦の余韻は、かすかな潮騒が聞こえてくるのみで、互角の戦いを演じた相手は音もなく消えてしまった。

まるで夢であったかのような何も残らない終りであったが、その身に刻まれた傷と疲労が、これが現実であることを証明していた。特に、元々防御が主体のザフィーラはともかく、ほとんど思考を同じくする自分を倒すため、相打ちモードキまでしたヴィータはかなりのダメージが溜まっていた。

「でも、なんか気に食わねーんだよな」

「気持ちわかるが、今は……」

「そーじゃなくてさ……あそこまで精巧なコピーを作っておいて、個人戦しかできないなんて欠陥を残しておくなんて、変だっただよー！」

「それは……」

ヴィータの不満は、てっきり自分のコピーと決着がつけられなかったことへのものかと思っただが、もっと根本にかかわる疑問であったようだった。

確かに、オリジナルと同格の力を持つコピーを作る事ができる様な奴が、その程度の欠陥が直せないわけがない。否、ただコピーすればそのような欠陥ができるわけがないのだ。もはや、わざと後付けしたとしか思えない。

「だが、いったい何のために？」

「最終的に私たちに勝たせるためとか？」

「それならばスタミナをわずかに削ればよいだけじゃないのか？」

相手の最終目標を推測できないものかと意見を重ねるが、一向に答

えが出ることは無かった。それにしたって、いつまでも話し合っているわけにはいかない。いまでも戦闘中の気配があるのだ。

「しかし、すぐに復帰は無理か……」

「問題ない、とは言えないな」

消耗が激しいのはシグナムとヴィータという、守護騎士たちのアタッカーである。今後これ以上のレベルの敵が控えているのであれば、無理をしても足手まといにしかならないだろう。

そう思い、シグナムとヴィータの治療のため一度帰還を考えた時だった。エイミィから増援を依頼する緊急のメッセージが届いた。それはフェイトがマークのコピーと開戦したという、とても信じたくないような内容だった。

「……まさか、本当に彼のコピーまで製作が可能なのか!？」

『それも、ただのコピーじゃないみたい……推定だけど、魔力量が三割ほどマーク君本人より多いんだよ』

「はあ!？」

その情報に驚愕する騎士達であったが、その観測結果は別に驚くことでもない、予想してしかるべきものである。マークのコピーは、マークを蒐集した時の情報から作られている。すなわち、マークがリンクコアを損傷して魔力が減じる前の状態のコピーなのだ。

まあ、今の問題はマークのコピーの性能より、守護騎士たちが強行して役に立てるかという事である。

「……仕方ないわね。私が治療するから、後のことは任せるわ」

「……お前とザフィーラの二人で行かせるよりは、マシか」

いささか単純かもしれないが、二人より三人という事で、シャマル

は戦線を離脱することに決まり、エイミイの補佐に回ることに  
な

「では……」

「行くぞ！」

方針さえ決まれば後は早かった。回復を終えた三人は即座に次  
な

時は少しさかのぼり、守護騎士たちがコピーとの戦いを続けてい  
た

「デイバインバスター！」

『デイバインバスター！』

共に放った魔法は、直射型の砲撃魔法。これだけであれば守護騎  
士

所からしか聞こえなかった事実が、この撃ち合いの結果を語って  
い

「自分には……それも、過去の自分になんか、絶対に、負けない！」

決意の込められた叫びを皮切りに、砲撃にさらなる魔力を込めら  
れ

そんな一撃をくらうも流石はなのはのコピーと言っべきか、その防  
御力が頭一つ飛び出していたこともあり、この一撃で沈むほど柔では  
な

『敵戦力値を上方修正、中距離戦は不利と判断  
』  
「考える暇なんて、あげないっ…」

しかし、立て直そうとする「コピー」に対し、なのはは突撃砲仕様で突貫する。「コピー」はかろうじてシールドで防ぐも、その推進力に押され二人して雲海へと消えて行くことになる。

「ちょ、ちょっとなにこれ!？」

『シャレにならない威力ですね』

「そっちはかり気にしといたら、足元掬われるで…」

それでもあまりの威力に慄然とするキリエに、冷静と言うより感情のない声で答えたのはやての「コピー」であったが、そこへはやての誘導弾「ブリューナク」が襲いかかる。

魔法を習い始めて短いはやてであったが、その莫大な魔力と勤勉さでそれなりの数と威力は確保できている。だが、それは「コピー」についても同じことが言えることであった。

『同レベルのスペックをもつ私には、貴女の攻撃は通用しません』

「アドバイスのつもりなん？ この手のお話はいくつか知っとるか、必要ないで…」

放たれた「ブリューナク」の全てを同一の魔法で迎撃した「コピー」の一言を、はやては当然のごとく切り捨てる。一人でいる時間は山ほどあったのだ。その間に読んだ本の数は数知れず、その中に試練の一つとして自分の影と戦うというものがあったのだ。

「物語の主人公みたく、正面から戦って自分の弱さを乗り越えて覚醒して…なんて言うのは難しいって思ったけど、別にこの場でそれをしなきゃならない理由なんてあらへん…」

『道理ですね』

「はあ……あつちはあつちで互角なんですよ？ わたしだっているこの状況じゃ、互角どころか劣勢でしょ」

なのはの力を借りて戦う気満々のはやてにキリエが突っ込むが、それはなのはの實力を甘く見ているとしか言えなかった。だから、その後に関こえたちよつと申し訳なさそうな声に、驚愕を隠すことができなかったのは当然と言えよう。

「お待ちせはやてちゃん」

「……え？」

そして姿を見せたのは、信じられないことに特に疲れた様子もないのはであった。それはなのはとコピーの戦いがなのはの圧勝であったという証拠であるが、先ほどのはやてのコピーの言葉もあり、容易に信じることができなかった。

とはいえ、事情を知る者からしたら順当な結果であるのだ。キリエははやてのコピーがオリジナルと同等のスペックを持つことからなのはもそうであると錯覚していたが、そもそもその認識からして誤りであるのだ。

ただでさえ蒐集が行われたのはレイジングハートが強化される前であるのに加え、なのはは魔王戦でその力を覚醒させている。つまり、なのはの「コピー」は装備・性能共にオリジナルに大きく劣っていたのだ。

「ちよつ、これでちよつやく対等やね」

『はい。予想よりかなり早いですが、これで二対二です。それは別としまして、この状況になった際の伝言を預かっています』

「……なんですか？」

はやての「コピー」の言葉から、この状況も先輩の予想の内だと知りわ

ずかに警戒するなのは達であったが、続く言葉に、その警戒も薄れることになってしまふ。

『これで、君がこの短期間にどれだけ成長したかわかってもらえたと思う。だが、急激な成長は歪みを生むことも覚えておいてほしい……だ、そうです』

「……覚えておきます」

どんな意図においてそのような助言を伝言として残したのか全く想像もつかないのはであったが、とりあえずアドバイスはアドバイスとして受け取っておく。

そして、話は終わりとばかりにレイジングハートを構えるなのは、剣十字の杖を構えるはやとコピーであったが、キリエだけは及び腰であった。

(冗談じゃないわよ……あの子からだってそれなり以上の魔力を感じたのに……！)

勝負はあっさりついてしまったようだが、なのはのコピーだって能力が低かったわけではない。それをごく短時間で倒してしまったなのはに、少なからぬ恐怖を覚えてしまっても仕方ないことだろう。

《……別に、最後まで戦えとは言いません。最初に述べたように目的は足止めですので、ある程度支援したのち私が倒れた後は投降してください》

《ちよっと、それ大丈夫なの!?!》

それは当然の疑問だろう。キリエだって自分の目的のためにここで戦おうというのだ。それなのに最後は捕まってもいいなど、相手が約束を守る気があるのかと疑いをもって然りというものだ。

《問題ありません。約束は紹介までなので、それ自体はこの街であれ  
ばどこに到って叶いますから》

《敵対関係なんですよ？ そう簡単に……》  
《来ますよ》

文句を最後までいう暇もなく始めようとするのは達には達思わず文  
句の一つや二つ言いそうになるが、二人だってマークのコピーとの戦  
いを控えて必死なのだ。もし責めるならば、この状況を作った先輩  
か、迂闊にも話に乗ってしまった自分かの二択だろう。

「行きますっ！」

「行くでっ！」

「あゝもう！ わかったわよやればいいんでしょ!？」

『それが賢明かと』

なのはとキリエ、はやてとコピーはそれぞれ前衛後衛につき、戦闘  
を開始する。杖とフェンサーが、魔法と魔法がぶつかり合い火花を散  
らすか、お互いの目的が交差する戦場で即座に決着という事にはなら  
なかった。

唯一の誤算は、お互いに同一のスペックを持つはやてとコピーはと  
もかく、杖を持つなのはと銃を持っていたキリエが互角の近接戦闘を  
繰り広げたことだろう。

「砲撃型の魔導師じゃなかったの!？」

「フェイトちゃんやヴィータちゃんと戦ってたんだから、これぐらい  
はできます！ そっちこそ、銃を持ってたのに何で剣になってるんで  
すか!？」

「可変機構は、男のロマンだって博士が言ってたわよ!」

律儀にお互いの疑問に答えながら続く近接戦の周りでは、なかなか  
ふざけた数の魔力弾が跳ね回っていた。



「そつちばかり魔力操作がうまいなんてずるいやろっ！」

『確かに私はコピーですが、貴女と同じ存在ではありません。精神構造の違いから、技能・戦術面には大きな差ができるそうです』

それでも性能面では同じであることに変わりはないので、結果戦況は硬直する。不本意ではあったが、コピーの思惑通りの推移であるというのはいづれまでもないだろう。

早期に決着をつけたいなのは達は苦虫を噛んだような顔をしつつも、拙速な攻めをすることなく機をつかがうしかなかった。

『逃げてばかりじゃ、どつにもならないよっ』

一方そのころ、フェイトはマークのコピーに対し防戦一方であった。否、防戦と言つものも誤りか、境界内と言つ限られた空間でコピーの放つ炎弾から逃げ続けていた。

時にはシールドを使い、時には飛翔の速度を変え、周囲の建物の陰に隠れ、フォトランサーで相殺し……手を尽くしていたが、それもはや限界に近かった。

(もつ盾にできる建物も少ないし、何より回避のパターンが読まれ始めてる……もう、追い詰められるのも時間の問題かも)

せめてもの救いは、マークのコピーの飛行速度がそう早くない事と、フェイトが対処できる程度の攻撃を意図して行っているという事だろう。とはいえ、いつまでも遊んでいるとは限らない。フェイトは一か八かの切り札の使い時を探っていた。

(問題は、この切り札がマークの魔法だったこと……当然コピーも対処できるだろうから、使いそこなえばあつという間に無効化されかねない)

だがそんな思惑も、隙が作れなければ何の意味もない。逃げに徹していても、万に一つの逆転の目が出ることはないのだと、フェイトは勇気を振り絞ってマークの「コピー」と改めて向き合う。

『そうだよ、そうでなくっちゃー！』

それは、ある種の刷り込みを破壊するための儀式と言ったところか。フェイトにしるなのはにしろ、戦闘においてマークを絶対と位置付けている節があると感じていた。

事実、軽い訓練であったことを差し引いても、なのは・フェイト・すずかの三人でマークに挑んだ時の結果は散々なものであった。これではいずれあるかもしれない、マークが敗北した相手と戦う時、実際の実力とは関係なく手も足も出ないなんてことになりかねない。

すなわち、このマークの「コピー」との戦闘は、そんな危惧を抱いた先輩からの“課題”であるのだ。

「打ち抜け轟雷、プラズマスマッシュャー！」

『焼き払え』『エルファイアー』！』

雷光と炎弾がぶつかり合い、攻撃性質の差かわずかながらフェイトのプラズマスマッシュャーがコピーの『エルファイアー』を貫通する。残念ながらコピーにダメージを与えられるほどではなかったが、それでもフェイトが戦えると信じるには十分な成果であった。

だから、それは小さな齟齬だったのだと思う。続くコピーの二連撃に、ほんのわずかだがフェイトの対処が遅れてしまった。

「っー」

『なっー』

最初の一撃と同じようにすれば防げていたはずであった攻撃は、そ

のわずかな遅れから先程の結果と逆転する。そして減衰した一撃とはいえ、装甲の薄いフェイトにとって、決して軽くない攻撃であることは語るまでもなかった。

「危ない！」

「フェイトママー！」

しかし、その攻撃からフェイトを守るものが現れたのは、いったいどれほどの幸運だったのだろうか。鮮やかな金髪の少女が一転集中の防御で炎を防ぎ、碧銀の髪の少女は炎を後方へと受け流したのだ。

『ママママ』

「え、誰？」

思わぬ危機を通り過ぎた安心感からか、妙にとぼけたような声で問いかけるコピーであったが、フェイトにとってもそれは同じであった。

疑問の目を向けられた二人は一瞬だけしまったと言わんばかりに顔をしかめたが、ここまで来ては仕方がないと開き直る。

「お話は後で。今は、アレをどうにかしてしましましょう」

「そ、そういう事をお願いね！ フェイトママー！」

「で、でもママって……え、え!？」

『なにを思っただんなことを……まあ、やることは変わらないか』

混乱するフェイトに対し、なんだかすべてを分かったかのような諦め顔をするマークのコピーであったが、時間は待ってくれないのだ。すぐさま構え直した二人には、先ほどの動揺は残っていなかった。

「よくわからないけど、お願いします……」

「まかせて……」

「精一杯やらせてもらいます！」  
『来い！』

三対一となって、新たな戦いが始まる。

## 第63話 「隠された目的」

「くそっ！ 現地への直接転移ができないなんて……！」

数ある戦場のうち、最も過酷なものとなるだろうマークのコピーとの戦場に向かおうとしたクロノ、もとい仮面をつけたシロノであったが、戦場に張られた結界に即座の介入を阻まれていた。

「ま、待ってください！ そんなに手ごわい相手なら、一人で行っても……」

「だからと言って、フェイト一人がいつまでも持つなんて楽観的な予想をするわけにはいかないだろ！」

それに続くアミタは、本心では早く妹のもとへと飛びたかったが、この状況で武器も取り上げられずに同行できているのがクロノと共に居るからという事を十分に理解していた。

だからクロノには冷静に、先にコピーを倒せるだけの戦力を集めてもらいたかったわけだが、それも難しいようだと言いつつ諦めるしかなかった。これは、自分が同じ立場だったら同じように居ても立っててもいらなかっただろうという、半ば親近感を感じていたがための諦めでもあった。

だが、せめて一刻も早く援軍へと言うクロノの思いも、やはり言うべきか闇の欠片に阻まれることになる。

「ッ、」のタイミングで……」  
「退いてください……」

現れたのは、リーゼ姉妹が変装していた仮面の男瓜二つの存在。唯一の相違点を述べるのであれば、白を基調としたデザインのミッド式のデバイスを持っているところであろうか。

しかし、クロノ達のこのような敵の相手をしている余裕はない。クロノは完全に殺る気のブレイズカノンを、アミタは銃から牽制の意を含む複数のエネルギー弾を放った。結果として回避を封殺するような攻撃となったのは、相手の力を知るという意味では僥倖だったかもしれない。そう、相手の実力をこの一撃で測ることになったのだ。

「え!？」

「なっ!？」

仮面の男は、回避は不可能とも思われた一連の攻撃を、こともあるうか大きく体を歪めて回避しきって見せたのだ。

「っ、塵気楼か!？」

『「」名答』

回避の種に気付いたクロノに対し、仮面の男は氷のつぶてを乱射する。それは魔法世界に少ない氷結系の魔力変換資質もちの証であった。

その攻撃を躲しきれずに僅かに被弾したクロノは、目の前の男がリーゼ姉妹のコピーではない事を、今更ながらに認識する。

「……………「ピー」ばかりが相手と油断していたという事か」

『ああ、思った以上に自己分析が速いな……………だが50点だ。私にもオリジナルは居るのだよ?』

「何?？」

アースラに集まった情報から知らず知らずのうちに管制代理などの例外を除けば闇の書の被害者ばかりだと、思考を誘導されていたことを悟るクロノに、仮面の男は少し不満気に訂正する。

それはまるで、クロノがわずかな情報から正解を導き出せなかったことを責めているように見え、少なからぬ戸惑いをクロノに覚えさせ

た。

「隙あります！」

そのわずかな停滞に終わりを告げようと、アマタの高火力技ファイネストカノンを放つ。が、この攻撃が仮面の男に届くことは無かった。

「ッ、何あれ！」

『自分の実力は弁えているよ。最初から、私一人で二人を相手にするつもりはないさ』

そう、アマタの攻撃はかわされたのでもなければ防がれたのでもない。射線に割って入った魔物の槍に妨げられたのだ。当然、魔物にはさほどダメージを負った様子は見られなかった。

「ガーゴイル……！」

『惜しいな、あれはデスガーゴイルと言っらしい……ガーゴイルの上位種で、とにかく固く、素早い』

クロノは魔王戦の時に交戦した魔物についてはマークから教わっていたが、その中にデスガーゴイルというものは無かった。いや、聞いていなくて正解だったかもしれない。魔物の上位種……これはクロノ達が思っている以上の強敵。

わかりやすく言ってしまうと、恭也が対一で倒しきれなかったサイクロプスと同格の存在なのだ。

『そちらも見たところ、二対二をするにはお互い連携などの訓練が足りないだろう？　ここは対一を二組、という事でいいかい？』

「……………」

相手の実力が未知数であることが気になったが、敵は管制代理によって造られた存在だ。二対二では自分たちの方が足の引つ張り合いになる可能性が高いと判断し、この提案を飲むことにする。

「行きますっ……」

この場から離れるように突撃したのはアマタで、それを同じく場所を変えながら迎撃したのはデスガーゴイルだ。だが持っている得物は銃と槍、射程距離の問題でアマタが負けるとは思えなかった。問題があるとすれば、同じ魔導師が相手であるクロノである。

『「こちらの話を飲んでくれて、喜ばしい限りだよ」』

「……僕だけが相手なら、確実に勝てるという事か!？」

『「この程度で冷静さを失うのかい？」』

仮面の男の言い分に思わず反発するクロノであったが、それもまた諫められてしまう。冷静さを失うほどの反発ではなかったと再び反論しそうになるが、そう言ってしまうえば相手の言を肯定したことになるような気がして、口を噤む。

『「そう、感情の爆発で強くなれるものは少ない。常に冷静に自分の力を把握し、相手の力を計らなければならない」』

「……まるで教官だな」

『「そうだ」』

「えっ？」

なおも説教を続ける仮面の男に皮肉を言ったつもりでクロノであったが、あるところが肯定の言葉が返ってきた。

目を白黒させるクロノであったが、仮面の男はそれにわずかな感情を含ませ答えを述べる。



『彼……管制代理の目的は、八神はやての教育だ。それに便乗する形で、いくつかの戦場が設定されている』

「教育……？ はやては『終わらせること』だと聞いていたみたいだが」

『終わらせるだけなら、わざわざこんな戦いの場を用意する必要はないよ』

ただ消滅するだけであれば、それこそマークと秘密裏に会談するだけで話は済んだだろう。それをせずに、こうして『敵対』という形をとったのは、はやて達に実戦に極めて近い訓練を積ませるためであった。

「……僕は、戦闘に対する教育の対象外という事か」

『そうだね、でもそれは戦わないという意味ではないよ』

この戦場の意味を自分に話すという事はそういう事かと納得するクロノであったが、これを仮面の男は否定する。

『その若さで執務官として働くお前の努力の成果を、この私に示してほしい。私の知らない十年を、この目に焼き付けさせてくれー！』  
「なっ……」

仮面の男の叫びと共に放たれたのはステインガーレイ、クロノもよく使う見慣れた魔法であった。それにもかかわらずクロノの口から驚愕が漏れたのは、その発動速度にあった。

「は、速い!?!」

『どつした？』の程度じゃないだろうー！』

次々としかけられる射撃、誘導弾、拘束の魔法はどれも特別珍しいものは無く、むしろ局員なら誰もが知っている魔法ばかりであった

が、その練度には目を見張るものがあった。

(術式の展開が速く、それでいて正確……タイミングや位置も抜群で、まるで隙が無い！)

あつという間に追い詰められそうになったクロノは直前の仮面の男の発言の違和感も忘れ、必死に魔法を躲し、防ぎ、打ち返す。幸い、以前受け取った竜杖アスカロンの増幅機能のおかげで防御や反撃をより強力なものとし、互角以上の戦いを演じられた。

『ははっ、なるほど増幅系の杖かい？ 確かにデバイスではいくらか先を行かれているようだが……当たらなければどうという事はない』

その言葉通り、仮面の男はクロノの攻撃を危なげなく躲していた。だがそれは、クロノの一撃が、余裕を持って躲さなければならぬほどの威力を持っているという事でもあったのだ。それほどまでにアスカロンの増幅率は高く、現段階で最高の杖と言う評価に偽りはなかった。

それに対して、仮面の男の攻撃はクロノの防御を貫くには今二つほどランクが足りない。そもそも仮面の男のデバイスは、本人だけでは使いこなせない氷結魔法を使うためにかなりの領域を使っており、後は処理速度の向上に割り振られている。十年前では設計されるまでしかできなかった理想の杖とはいえ、マークの魔導書にあった増幅式などと言う異界の技術が使用されたアスカロンに対し、スペックに開きが出るのは当然だろう。

だが、武器の性能差だけで結果が決まるほど戦場は甘くない。むしろ経験差のためか、仮面の男が幾分有利な状態を維持したまま戦局は硬直していった。

「1JG...」

『キケエエエーッ』

その一方で、アマタはデスガーゴイルに対して一方的な戦いを進めていた。

奇怪な叫びを放つデスガーゴイルの槍の攻撃範囲に決して入らないように距離を取り、遠距離からの射撃を行い続けることで安全かつ確実な勝利を目指していた。だが、それにしてもアマタの顔色は良くなかった。

「もっ…いくらなんでも固すぎるでしょ…」

そう、デスガーゴイルはアマタの攻撃に対し、何の痛痒も受けていないかのようにいつまでも追いつき続けるのだ。それに加え、アマタに迫りくるデスガーゴイルの速度は予想以上に速く、一切の予断を許さない戦局となっていたのだ。

(でも、ダメージが無いわけじゃない……精神構造の違いから、相手への攻撃を優先させているだけ！)

このような状況では、絶望的な状況の中でも自分のモチベーションを落とさないようにする鼓舞のように聞こえるかもしれないが、厳然たる事実であった。このペースで戦闘が続けば、間違いなくスタミナが尽きる前に相手の体力を削り切れるという確固たる自信があったのだ。

少なくとも、マークのように虚空から突然武器を出すようなことが無ければ、時間こそかかるが確実に仕留められる。だが、それでは意味がないのだ。

「そっだね……たぶん、時間をかけてしまったら、私は間に合わなくなっちゃっ」

そう、彼女が戦場に出てきたのは、妹を自分の手で止めるためなのだ。それなのにこんな相手に時間をかけてしまったては、何のためにここに来たのかわからなくなってしまう。

だから、彼女は武器を大剣に切り変える。

「リスクの方がだいぶ高くなってしまいましたが、仕方ありません！速攻で終わらせて見せます！」

『キケエエエエ』

『！』

足を止め、振りかぶった大剣とデスガーゴイルの持つ槍が交差する。火花が散り、轟音が鳴り響くが、それでもお互いの腕にこめられた力が衰えることは無かった。

結果が出るまではさほど時間はかからない。問題があるとすれば、別の戦場に近づきすぎてしまったことだけであった。

「ふう………」

激情を鎮めるために吐きだした息はとても熱く、空気を歪ませたように感じられた。その呼吸音は静まり返った戦場に響き、マークと戦うトーマの緊張感を否応なく高めていった。

(いや、いや………武器は破壊したんだ。これで、俺たちの方がだいぶ有利に戦えるはず！)

直に心臓をつかまれたかのような、そんな重圧を跳ね除けようと無理矢理ポジティブな考えを表面に出すが、それでも心臓が暴れ狂い、冷や汗が噴き出す。耳が外界の音を拾わなくなり、馬鹿みたいに心音ばかりが響いてくる。拳銃の果てには頭痛がして、視界まで歪んでくる始末だ。

それに対し、マークは冷静であると自分に言い聞かせていた。

(元々、神将器は竜殺しだ……半身が竜である俺が、気に入る筈はない。だから、平気だ)

もちろん、そんな自己暗示もまったく意味をなしていない。あまりの怒りに視界は明滅し、その手はかすかに震えていた。だから、そんなことに気付く余裕は今のマークに無い。

(代わりの武器は……却下だ。神将器クラスの武器が壊された今、他の武器を使っても同じ結果になるのは目に見えている)

破壊不能な性質を持つ武器もあるが、それもどこまで通用するか不明だからと言いつく言葉を重なる。弓などの遠距離攻撃も考えるが、自動防御があるため効果は薄いと判断する。

(魔法は当然論外だし……これを使う他無い)

その結論は、竜化を使うというもの。本来であるなら、神将器を破壊できるような武器を相手に武器を介さず戦うなど無謀もいとこるのだが、そこは都合よく気付かない。否、今までの思考は全て、最強の力を振るうための言い訳なのだ。都合の悪いことなど、考える筈がない。

次の瞬間、空気がきしみ一つの人影が戦場から姿を消す。そして新たな存在が、再びこの海鳴の地に舞い降りた。

「なっ!?!」

《う、嘘っ！まさか……ドラゴン!?!》

威圧感は、先ほどの比ではない。竜の目を直接見たら死ぬという話が古代には在ったと聞くが、そうだった話が後世に伝わるのも納得できるほどである。

ただ一つ、その威圧感を軽減させるものがあるとするれば、美しい鱗

に覆われたその巨躯を宙に浮かばせる翼にある大きな傷だろう。それのおかげで、この圧倒的な存在でも傷つけられないわけではないと、敵対するトーマ達に希望を抱かせた。

《ディバイドゼロ・エクリプスなら……!》

《トーマー!》

幸い、いくらか距離が開いていたため、遠距離からの最強の一撃を叩き込もうとトーマが考えたその時、リレイからの警告が響き渡り……光が奔った。

「ぐっ、がああぁっ!!」

《トーマ……!》

リレイの直前の警告が功を奏し、何とか直撃こそ免れたが、それでも躲しきれずに掠った左腕のダメージは甚大であった。

危うく引き千切られるかとも思えた衝撃で骨は砕け、筋肉はあちこちで断絶しているだろう。

《っ、痛覚信号を遮断! 肉体の修復を優先……今は、ブレス!》

咄嗟にリレイが行った作業は、戦闘を継続させるための最低限の処置であったが、トーマは何とか踏みとどまる。今倒れてしまえば、そのまま次の日を迎えることはできないと本能が悟ってしまったのだ。

先程の一撃は、躲さなければ間違いなく死んでいた。すなわち、相手はもう彼らを生かしておく気が無いという事だろう。その事実を感覚の無くなった左腕に感じ、何とか生きて帰る道を探る。

「遠距離戦は危険……それなら……」

『ふん、単純すぎる』

その巨軀に見合う死角の多さを利用した接近戦、その後の攪乱と逃走をもくろむトーマであったが、それはむしろ結果が脆すぎてプレスを何度も放てないマークの思いつきであった。

そう、マークにとって本来の戦闘とは、竜の姿で行うものであったのだ。そうであるからこそトーマの、否、竜を前にした人の考えなど、手に取るように理解できた。

「あ………」

傷付いた翼から機敏な動きは難しいだろうという淡い希望を打ち砕く巧みな動きで、マークはトーマの持つ『ディバイダー』に牙を突き立て、これを容易に噛み砕く。それはトーマにとって、唯一現状を打開できるかもしれない切り札を失ったという事と同義で、そんなことでもないことを容易くなされたという事実が頭が真っ白になる。

そして、この場で思考を止めるといふ事がどういふ事は、先の一撃で証明されていた。動きを止めたトーマに、続いて放たれた長い尾による一撃を避ける術は、無かった。

「いくらなんでも、脆すぎるだろ………」

確かな手ごたえを得たマークは竜化を解き、人の姿に戻り少年の姿を探していた。ごく一般的な局員として見たら、打倒した犯罪者の確保のための行動だが、マークのそれは違う。ただの死亡確認だ。

最初こそ確保を目的とされていたが、神器を破壊するほどの力があると知れば話は別。管理局で束縛するのは不可能、されどマークが監視する余裕もない以上確実に殺すべきと判断したのだ。……そこに、一切の私情が入っていないと言えは嘘になっただろうが……

それでもマークが文句を漏らすのは、未だ燻ぶるこの怒りのぶつけ所を失ったからにすぎなかった。

「お、あったあった」

瓦礫を避け進むこと数分、ようやく見つけた少年は、マークが竜の姿をもって全力で叩きつけたにもかかわらず、意外な事に原形をとどめていた。だが、マークの予想を上回ることはそれだけではなかったのだ。

「……生きてる？」

そう、確実に殺すに足る一撃を叩き込んだという感触を得ていたにもかかわらず、マークの目の前に横たわる少年には、まだ息があったのだ。

そのことに疑問を抱きつつも、まあ手間がいくらか増えただけと考えることを放棄する。そうして今度こそ確実に息の根を止めようと手を伸ばそうとした時、何かがマークの足を掴むのを感じ、そちらへとわずかに視線を向ける。

「……は……う、………………だけは……」

そこにいたのは、少年と同じくらいの年の少女であった。意識だけは辛うじて保っているようであったが、少年と同じく重傷で、放って置けば数刻もしないうちにその命の灯が消えることは明白であった。マークはそんな少女と、横たわる少年を見て得心する。すなわち、この二人はダメージを分け合ってマークの一撃をしのいだのだから、と。そして、どうやら少女は少年を守るため、何とか命乞いをしているのだから、と。

自分より、大切な誰かを助けようとする姿は、実にマークにとって好きな状況であったが、それとこれとは話が別だ。

「ま、だからと言ってお前らみたいな危険な存在を生かしておく気はないがな」

「……」



「俺はともかく、ナノ八達にとってはお前らの存在は致命的だ。お前らを捕縛して様子を見る余裕もない以上……」

「……なに？　おい、それはどういう……」

まともな聴覚ではただの呼吸音にしか聞こえないような、そんなかすかな訴えを聞いていたマークの眉がわずかに歪む。それに伴いマークの手が下りるのを見た少女は、ついに緊張の糸が途切れたのか意識を失ってしまった。

「くそっ……だが、あながち嘘とも言い切れない事を！」

意識が朦朧としていたせいかな断片的な言い方であったが、少女の言葉からマークはある可能性について考えが至ってしまったのだ。

「……」の時代のナノ八さん……ねえ」

それ以外の部分はマークの聴覚をもってしても聞き取れなかったが、それでもマークが想像を膨らませるには十分な一言であった。

すなわち、この少女たちが別の時代……それも、未来から来たという可能性だ。

こんな一言、普通であれば聞こえたとしても半死人の世迷言で済ませられるものであるだろうが、ことマークに限ってはそれも言えない経験があったのだ。

「俺の素性は知らないようだったが……流石に事情を聴く前に処分するわけにはいかなかったな」

思わずため息をつきつつも、意識を失う少年たちに『聖女の杖』を使用する。これも神将器に属する杖だが、その効果はいかなる怪我をも完治させるという規格外のもの。フェイトのように肉体が欠損し

ていなければ、という注釈はつくが、マークの持つ治癒の杖では最高位の効果を持つものである。

「魔殺しのせいで十全の効果とは言えないが、まあこれで死ぬことはないだろう。それより問題は……」

『その子たちは、私が見ていよう』

少年たちの処遇に困るマークに、横合いから唐突に声がかけられた。思わず『銀の大剣』を構えるマークであったが、その声の主を見て思わず目を見開く。

「お前……」

『残りかすである私にも、できることがあるというのはうれしい限りだ……だが、その前に事情を話さないといけないな』

そこに現れたのは、全身を赤土色のローブで覆った壮年の男……マークにとってはか今なお望んでやまない、かつての戦友との再会であった。

## 第64話 「守るべきもの」

「ハーケンセイバー！」

『遠距離でどうにかしよって言うのは、流石に甘いぞー！』

三対一となり、ようやく均衡を見せていたマークの「コピー」とフェイトの戦いであったが、それが長く続かない事は誰もが理解できていた。

《この密度の戦闘では、あと十分も戦い続けるのは難しいですね》

《同感！ 魔力的にも、体力的にも集中力的にも！》

《……そうだね、何とか隙が作れればいいんだけど》

アインハルトとヴィヴィオの発言に、フェイトも同意せざるを得ない。ただ一つ異論があるとすれば、フェイト自身は十分も持たない事だろう。魔力量は二人よりも多いし、実戦経験から集中力も勝るが、いかにせん一人で戦う時間が長すぎた。限界は、近い。

それでもフェイトは、元々この戦いは自分のものであるとこの場では余計な真面目さを発揮し、「コピー」と正面から戦う。雷と炎がぶつかり合う中、二人の格闘少女がフェイトをフォローしようとマークの「コピー」に迫る。「コピー」の言葉に触発されたというのもあるが、もともと遠距離戦は得意ではないのだ。

「はあああっ！」

「たあああっ！」

『おっ！』

口調こそおどけていたが、アインハルトとヴィヴィオの拳をかわす「コピー」の目は真剣だ。徒手格闘戦の経験がほとんど無い「コピー」にとって、慎重にならざるを得ないのだ。しかし、それでもなお二人は

「コピーの警戒の上を行った。」

『なっ!?!』

「今です!!」

それは、躲すしかないだろうと思い放ったレヴァンティンによる上段からの斬撃を、ヴィヴィオが両手を交差させ正面から受け止めたのだ。それはマークの常識では考えられない事で、思わずその身を硬直させてしまう。

そして、その隙を撃つのは、ヴィヴィオのパートナーであるアインハルトの役目だ。

「霸王断空拳!!」

足先から練り上げた力を一点に集中させた一撃は、轟音と共に動きを止めたコピーを弾き飛ばす。傍から見れば確実に沈んだと思えるような一撃であったが、それを撃ち込んだ少女の顔は晴れなかった。

「大丈夫ですか、ヴィヴィオさん?」

「は、はい。ただ、思った以上にあの一撃が重くて……アインハルトさんは?」

そう、マークの斬撃は全力の一点防御、セイクリッド・ディフェンダーの上からヴィヴィオの拳を傷つけていたのだ。そして、それはアインハルトについても変わらなかった。

「……予想以上に、いえ、本当に人かと疑うぐらい堅かったです。少し、拳を痛めました」

「コピーの武装はオリジナルのものをコピーできなかつたため鎧な

どの装備は一切なく、欠片がオリジナルの攻撃を防げる装備を生成できないと判断されたため、本当にただの服なのだ。それにもかかわらず殴った方の拳が壊れるなど、どれほどの強化かと背筋が凍る思いであった。

「今の足止め、どんな形でもいいからもう一度できる？」

だが、ヴィヴィオ達からしてみれば絶望的な結果も、フェイトからしてみれば希望の塊であった。疑問に首をかしげようとする二人であったが、それを切り札があると強引に納得させる。

もちろん、未来のフェイトを知るヴィヴィオを完全に納得させたわけではなかったが、それでも領かざるを得ない気迫がそこにはあった。

《どちらかと言えば、フェイトママは攻撃力が高いわけじゃなかったと思っただけ……？》

《でも、自信あるみたいでしたよ？》

アインハルトが感じた自信はヴィヴィオも感じていたことだ。それもありフェイトの切り札を信じたわけだが、その自信の源が詳細の知らない強化魔法だとは流石に思いもしない二人であった。

だが、詳細が分からないとはいえ、フェイトの自信に根拠が無いというわけではないのだ。

(マークが、私を一人で行動させてもいいって思えるだけの力を持った術だ。たぶん、あの時以上の……)

思い返すのは、はやてを乗っ取った魔王との戦い。あの時は右腕左足に半ば振り回されるように戦ってしまったが、もしその力を一撃に束ねて放てば、まさしく必殺にふさわしい一撃となるだろうことは、容易に想像できた。

「危険な役目を任せて」めん……でも、ちゃんと守るから」

「わかったー！」

「任せてくださいー！」

申し訳なさそうな、それでも強い意志を込めた瞳に、ヴィヴィオ達も力強く頷く。

「じゃあ、いきますー！」

「ソニックシューターー！」

アインハルトが突撃し、それをヴィヴィオがフォローする形で戦闘を再開する。対するコピーは、先ほどの攻防を分析しながら、これを迎撃する構えを見せる。

(特殊な防御スキル……だが、ダメージを完全に遮断できるほどではないのか？ それに加え、小回りの利く重い拳打……徒手空拳とはいえ、舐めてると痛い目に合いそうだな)

考えをまとめ、再び接近してくる二人のタイミングをずらそうと『エルファイアー』を放つコピーであったが、これもまた驚愕の結果を呼ぶことになる。

「霸王流　　旋衝破!!」

『はあ!?!』

あろうことが、アインハルトはコピーの『エルファイアー』を掴んで投げ返してきたのだ。それに対し、コピーは回避を考えずに帰ってきた攻撃と二人を迎撃することを選ぶ。だが、これは悪手と言って構わないだろう。わざわざ三人分の同時攻撃を受ける必要など、欠片もないのだから。

「アクセルスマッシュ！」

「はっ！」

『じのっ！』

自身の魔法にヴィヴィオの魔法と強打、それにアインハルトの追撃を剣一本で受けることなど流石にかなわない。それでも、コピーの剣速は魔法を切り裂き、アインハルトの拳を相殺することに成功する。残ったヴィヴィオの拳打は、左腕で受け止めダメージを最小に抑えようと試みるが、コピーに格闘戦の心得は全くないのだ。

『ぐっ……っ！』

左腕の防御をすり抜けたヴィヴィオの拳はコピーの胸部に突き刺さり、肺から空気を押し出す。そして動きが鈍ったところを見逃すほど少女たちは甘くなかった。

「はああああ！」

「たああああ！」

動きが鈍った中、クロスレンジで繰り出される連撃をコピーは甘んじて受け入れるしかなかったが、それで沈むような柔な体ではない。そして、二人の攻撃はコピーの動きを止めるだけの威力を持ち合わせてはいなかった。

だが、コピーは知らない。アインハルトの使う霸王流は、ただの格闘術ではない。戦乱の世に生まれた、徒手戦闘術なのだ。その技術には、当然対武器戦闘も含まれている。

「そう簡単に、思い通りにはさせません！」

『ちっ！』

そもそも剣を振らせない間合いの取り方から始まりその対策は多岐にわたるが、残念なことに「コピー」もいつまでもやられてばかりではいなかった。

『じっ！』

「くうっ！」

「アインハルトさん！」

剣による反撃を諦め、アインハルトを弾き飛ばしたそれはただの体当たりであったが、間合いさえ十分取ればどうにでもなる。一人がいなくなれば、十分に剣を振り回せるとばかりに視線をヴィヴィオに向けるが、空間ができて手を出せるようになるのはコピーだけでは無いのだ。

「プラスマランサー・ファランクスシフト！」

それは、フェイトが一人で戦っていた時の名残。飽和攻撃を指した跡だったため、まだ十分な数はそろっていないかったが、二人の援護には十分すぎる数であった。

ヴィヴィオへと奔る刃を複数の雷撃で相殺し、更なる追撃を行うべくスフィアの位置を修正する。

続くであろう一斉攻撃を警戒し、コピーが個々への注意をそらしたのは一瞬。だが、その一瞬こそ、ヴィヴィオの望んでいたものであった。

「っ！」

短い呼吸と共に放たれた突きは、コピーの顔面を指し、紙一重で躲かされてしまう。だが、それだけで十分であった。

『じっ！』



コピーの視界が揺れる。そう、ヴィヴィオは最初からクリーンヒットなんて狙っていなかった。当たるに越したことはなかったが、それでも動きを止めるのに、必ずしも綺麗な一撃を入れる必要は無かったのだ。

そして顎をかすめ、脳を揺らされたコピーにできた隙は、切り札を使うのに十分すぎるものであった。

「術式解放！」

その言葉とともに、フェイトの全身をある種の力が浸透していく。それこそがマークの言う『エーギル』なのだ、今のフェイト達にそれを知る手段はない。

今必要なのは、力に対する知識ではなく、この力を全てコピーに叩きつけることだけだ。フェイトは加速する意識の中、バルディッシュ・ザンバーに力を込める。

(間に合えー！)

体中を軋ませながら広がった莫大な力が、永遠に感じるほど長い一瞬で全身を駆け巡る。莫大なエネルギーを流し込まれた雷刃が、かつてない光を放つ。

「え？」

空気がはじけるような音が聞こえた気がした。その次の瞬間には、ヴィヴィオの目の前でコピーが何らかの衝撃を受け弾き飛ばされていた。

「まさか……フェイトママ？」

ヴィヴィオがその考えに至った時には、すでにマークが数十回は見えない何かに跳ね飛ばされていた。

『じの……一体何が!?!』

「考える暇なんて……あげないっ!」

元々機動力はマークを上回っていたのに加え、今回はマークが施した常識を超えた強化がある。その結果フェイトの速力は、完全にコピーの知覚を超えるレベルにまで達していたのだ。

だが、そこまで達してなお食い下がるのが、フェイトの前に立ちふさがるものがただのコピーではないことを証明していた。

『いつまでも、好き勝手出来ると思っつな!』

「なっ!?!」

間違いなく神速の域にあるフェイトの斬撃が、少しずつだが防がれ始めたのだ。いや、そもそも最初の数十もの斬撃を受け、なお健在であることからコピーの実力が垣間見えるというものだろう。

そして、徐々に対応されつつあるという恐怖に、ついにフェイトは屈してしまった。

「ああああああっ!」

神速に加え、限界を超えた強化が施された右腕による必殺の一撃。それでも、冷静さを欠いてしまえば、類稀なる一撃も凡百のものへとなり下がってしまう。

『なるほど……モルフの腕と、専用の強化術式か』

「う、嘘……!」

呆然とした眩きは誰のものであったか……コピーの持つレヴァン

ティンを半ばまで砕きながらも、フェイトの斬撃はそこで止められてしまう。さらにフェイトの使っていた切り札まで見抜かれては、勝ち目など残っていないようがなかった。

『正直、褒められたものではないな。こんな術で勝負をかけずに、ちゃんと粘っていれば増援も期待できただろうに……』

『確かに、それでも最終的には勝てたと思う……けど、わたしはともかく、あの子たちにけがはさせたくなかった』

罅迫り合いを続けつつ交わされるコピーの言葉には、僅かな失望と悔恨が込められていたが、フェイトは気付かない。しかし、コピーはフェイトの言葉の内に強い思いがあることに気付く。

『何を……？』

『顔も知らない子だけど、まったく意味が分からない子だけど、それでも……！』

そして、その想いに答えるように、フェイトの持つマークに渡されたお守りがその力を発揮する。

『……！』『ファアラの力』か!？』

『あの子が、わたしのことを『ママ』って呼ぶなら……絶対に、守ってみせる!!』

叫びと共に、フェイトの胸に下げたリングが光を発し、完全に止められていたバルディッシュが息を吹き返したように薬莢音を響かせる。コピーの持つレヴァンティンが悲鳴を上げ、更なる欠片をこぼすが、そんなことを気にする余裕などなかった。

『撃ち抜け、雷刃!』

『華炎』!』

二人の絶叫を最後に、視界が白く染まり、音が消えた。この場にはたすべての者がそう感じた次の瞬間、溜めこまれたものを解放するかのように、轟音が響き、爆風が吹きすさぶ。

そのすべてが過ぎ去ったあとに残されたのは、轟音や爆風に翻弄されグロッキーになった少女と、街を抉るようにその存在を主張する赤熱した大きなクレーターであった。

「ふ、二人とも……無事？」

「わたしは大丈……ぶ、です。ヴィヴィオさんは……」

「な、なんとか……」

三人は、お互いの無事と「コピ」がいない事を確認すると同時に座り込んでしまった。幸いなことに外傷はそれほどでもないで、疲労が原因だろう。

本当ならこのまま休みたいところであったが、残念なことに、三人に休む時間は与えられなかった。

「！ 何か近づいてくる」

「うう……もう少し休ませてくれたっていいのに」

フェイトの警告に対し泣き言をいうヴィヴィオであったが、隣のアインハルトは無言で立ち上がり構えを取るのを見て「流石アインハルトさん！」と感心しながらゆっくりと立ち上がる。ただ単にしゃべるのも億劫になっていただけであったのは、本人のためにも黙っておくほうがいいだろう。

「あれは？」

「……ガーゴイル、だね」

そこに現れたのは二体のガーゴイル、ではなく、その上位種デスガーゴイルであった。ただしその違いが分かるものはこの場にはなかった。だがそんなことは問題無いと構えを取る二人に対し、フェイトは立ち上がることにすらできなかった。

(まさか……「こんなに早く!」)

それは、限界を超えた強化の代償。前回の経験から筋肉痛ぐらいは覚悟していたが、これは想像をはるかに超えていた。感覚すら麻痺するほど壊れた体は、もはや立ち上がることもできない有様であった。もはや戦うこともできないと顔を青くするフェイトであったが、幸いなことにこの場で再び激戦が繰り広げられることは無かった。

「紫電一閃!」

「ラケーテンハンマー!」

「シグナム!」

「ヴィータさん!」

上空から不意を突く形で急接近し、デスガーゴイルをそれぞれ一撃で仕留めたのは、ようやく駆けつけたシグナム達であった。

「無事か!」

「うん、なんとか、一応ね……あ、この二人は私のことを助けてくれた人たちですから」

構えを取る二人とは異なり、立ち上がることも出来なかったフェイトに顔色を悪くするシグナムであったが、本人の言葉にとりあえず顔色を取り戻す。

「そうか……ご助力、感謝します」

「いえ、結局有効打は加えられませんでしたし……」

謙遜ととれる言葉に対し、そこに何かを悔やむような空気を感じたため、シグナムは続く言葉を飲み込み、話を変える。

「ところで、マーク……いや、今だけはシリウスだったか？ 奴はどうした」

「まだ来てないですよ」

「ってことは、お前ら三人でアイツのコピーをやったのかよ！」

「マークが分かれる前に強化の術を残して行ってくれたから……それのおかげだよ」

ヴィータの感嘆の声に、軽い否定の言葉を返すフェイトであったが、マークと言う存在が、たとえコピーであったとしてもそれだけで何とかなると思えない騎士たちには、簡単に流されてしまう。

「流石にこのまま戦闘は無理のようだな……一度帰還して、回復を行うべきだろう」

「そうだな……シャマルを帰すべきではなかったか？」

「結果論だろ？ アイツのコピーが残っていたなら、この編成がベターだったのは間違いないだし」

軽く方針を話し合う騎士達であったが、ここでまた状況が一転する。

「間に合った……いや、間に合わなかったのか？」

「なっ！」

「さっきの！」

「マークー！」

「おせーよー！」

つい先ほど倒したはずの存在が、再び目の前に現れたことに動揺し

構えるヴィヴィオとアインハルトであったが、フェイトとヴィータの反応にさらに混乱してしまっ。

「あ、こいつはオリジナルだ。ニセモンにその槍は持てねーだろ」  
「闇の書が神器をコピーできるような品なら、流石に現物をこの世に残していないぞ」

ヴィータのフォローにさりげなく危険な言葉で返すマークであったが、その言葉よりマークの持つ槍の方が気になったようであった。

「その槍は……」

「その前に、誰だお前ら」

マークのわずかに警戒が含まれた質問を遮られてしまっも、それも仕方ないことだろうと納得し、自己紹介をする。

「信じてもらえないかもしれませんが……今この世界より、十年ほど未来から来たものです。アインハルトと呼んでいただければ」

「同じくヴィヴィオです」

「……………」

沈黙がその場を支配するが、その沈黙はただ痛ましいものを見るものだけではなかった。

「そう言えばあの子、わたしのこと『フェイトママ』って……未来から来たって意味だったんだ」

「いや、流石にこれはねーだろ」

「まあ、本当のことを話す気が無いと言っ意思表示だろっ」

あれはそういう意味だったのかと納得してしまっフェイトに、言い訳としてもあり得ないと呆れるヴィータ、自分なりの解釈をするシグ

ナムと、とりあえず反応は判れた。だが、そんな周囲の反応を無視してお互いの目を見続けるアインハルトとマークには、全く違う緊張感に包まれていた。

(少なくとも、「」で嘘をついて警戒されるわけにはいかない……せめて、言葉ではないと」るで、信じてほしいと主張しないと！)

先程のコピーの実力を見た以上、間違っても敵対だけは避けたいというのは、誰もが思う感想だろう。下手に言い訳を重ねても嘘っぽくなってしまつと考えるアインハルトは、目をそらさない事でそう主張する。そして、その意図は正しくマークに伝わっていた。

(……未来から、か)

ヴィータの言うとおり、言い訳としては下の下だろう。しかし、突拍子の無いことを言つてマークたちを惑わすにしては、この理由はピンポイント過ぎた。

「……信じよう。だが、どんな理由でこの時代に来たのかは、また後に話して欲しい」

「はい、わかりました」

「おい……本当にこんな信用出来んのか!？」

マークの決断にほつと息をつくアインハルトであったが、これにヴィータが噛み付く。いや、今回はマークに対して噛み付いたのではなく、慎重を喫するためにあえて反対意見を言った、というのが正しいだろう。

「流石に背中を任せるほどではないが、肩を合わせるぐらいはかまわないだろう。そんなことより、今は時間が惜しい」

「敵のレベルは、隣を警戒しながら戦えるレベルを超えているぞ?？」



「そのお隣さんも、隣を狙いながら敵と戦えるレベルには達していないわ」

元々本気で反対していたわけではない二人は、肩をすくめるようにして了承の意を示す。そんな様をしり目に、マークはフェイトの体を診るため隣に膝をつく。

「……すぐには治療できないな。人の目が多すぎる」

「覚悟はしてたから。大丈夫、痛みは無いよ」

「麻痺してるだけだ」

診断結果は『継戦は不可能』であったが、アースラに返すことはできないと判断する。万が一ではあるが、容体が急変した時に傍にいるためだ。

「結構集まってるな……現状は？」

『まず、すずかちゃんとユーノ君が鎧と魔導師と戦闘中で、クロノ君が……じゃなくて、シロノ君がシリウス君の連れてきた子を連れて戦場に入って、敵と思われる存在に遭遇。なのはちゃんとはやてちゃんがそれぞれのコピーとピンクの子と戦ってる』

マークの現状確認にエイミィが応える。ちなみに、現在倒した欠片は守護騎士たちが六つ、フェイトが一つである。

「あ、俺がここに来るまでに二つ潰したから、全部で九つ終わったことになるな」

「じゃあ、確認できたのは十四個か……」

「あと倒してないのが一個、これは放っというていい奴を確認した」

つまり、残りの敵戦力は管制代理と鎧と十個の欠片という事である。

「……一度確認できているものを片付けるか。三組に分かれて増援を」

「いや、ハヤテと合流して終わらせよう」

「え？　すずかやクロノは!？」

シグナムの提案を跳ね除けようとするマークに、フェイトが待ったをかける。だが、マークはあくまでこの案を推し進めようと言葉を連ねる。

「こちらの余力が少ない。すべて倒さずに、大将を狙うべきだろう」

「そうかもしれないが……」

「相手にまともに戦う気があるなら、わざわざ仕切り直すこともしなかっただろ？　今回の戦いは、管制代理とハヤテの戦い以外はおまけにすぎんよ」

「おまけって……」

マークの言い様に苦い顔をする一同であったが、確かに納得できる部分もあった。そうであるなら本命を終わらせることこそが、今戦っている者たちへの最大のフォーローとなるのも道理である。

「わかった。では……」

「ああ、ハヤテとナノハの処へ行くぞ!」

掛け声とともに一斉に空に飛び立つみんなに遅れるのは二人、マークとフェイトであった。

「わたしは……」

「見学だな。ほら、行くぞ」

「ひゃっ!」

フェイトの傷付いた体を痛めないように、マークはそっと抱きかかえ舞い上がる。これからしばらく足手まといになるからと固辞するフェイトと、現地で見たほうが学べることも多いとゴリ押しするマークとのやり取りが続くことになる。

## 第65話 「欠陥剣士」

例え増援を送らないと決められようとも、その地で起こっている戦いがなくなるわけではない。その中でも極めて厳しい戦いをしているすずかは、無数の傷を抱え満身創痍の体であった。

『……まだ戦うと言っのか？ これでも、弱い者いじめは好かんのだよ』

「諦めません！」

無数の傷とはいえどれも浅く致命的なものには至らないと、すずかは自身を叱咤しながら『マーニ・カティ』を振るう。だが、その剣戟に初撃にあつたような力強さは欠片もなく、暗愚な皇帝と名乗った男の盾に容易くはじかれてしまう。

「うっ！」

『ふんっ！』

それでもなおステップを踏み、回り込み剣を振るうすずかに対し、ヴィガルドは確実に盾を合わせ防ぎ、反撃の槍を繰り出す。

その反撃の一撃は左の二の腕を浅く切り裂き、少しずつ、確実にすずかの体力を奪っていった。

『……確かに、その剣は我が鎧を裂くことができよう。しかし、我が身には至らぬ。届いたとしても、貴女では斬ることは叶わない』  
「それでも！」

その言葉に反発するかのように剣を振るおうとするすずかだが、徐々に脚も止まりだし、ヴィガルドを剣の間合いに入れることもおぼつかなくなっていた。

それでも諦めないのは、ヴィガルドの鎧に奔る斬撃の跡のせいかなまじ戦術を持ったことにより、引き際を見失ってしまったのかも知れない。

しかし、すずかとして何も考えずにいたわけではない。

「はあっー」

『むっ……………』

歯を食いしばり踏み込み、死力を尽くして放たれた一閃に、ヴィガルドは先ほどと同じように盾を合わせ迎撃しようとする。だが、すずかはその防御のタイミングをずらし、すり抜け何とか本体へと肉薄しようとする。

もちろんそんな付け焼刃な攻撃が通るわけもなく、片足を下げて間合いを外すことで簡単に回避されてしまうが、それでも盾を躲し肉薄したことは脅威と言う他無い。

(凄まじいな……………それだけに、惜しいと言わざるを得ん)

攻撃を躲されよろけるすずかを見て、かつての一国の主は思わず想像してしまう。もしこの娘が、この平和な世ではなく、戦乱の世に生まれていたら、どれほどの使い手になっていただろうか。

そんな元皇帝の思いを知る由もないすずかは、ただただ圧倒される現状に歯噛みしていた。

(剣を握って数か月……………上には上がいるっていうのはわかっていたつもりだけど……………)

甘かったという事だろう。本気を出せば、並の大人以上の身体能力を持ち、なおかつ『マーニ・カティ』という精霊の剣まで持っているのだから、どうにかなると思ってしまっていたのだと思知らされる。

だが、だからと言って諦めるわけにはいかない。人を斬らないと宣言した以上、剣士として致命的な欠陥を持つことになるというのわかっていたのだ。そんな欠陥剣士であり続けるためには、結果を示すほかない。

「ふう………」

徐々に動かなくなっていく体に反し、猛る意識を押さえつけ一つ息を吐き、剣身を鞘に収める。未だ基本的な動作しか知らないはずが使える技と呼べるものは少ない。そんな中教わったものは、この剣の前の持ち主が常から使っていたものだ。

『諦めた………わけが無いか。抜剣術か？』

「……………」

剣を収めたことからの推測に答えはないが、ヴィガルドは間違いないだろうと確信する。その確信ははずかの次の技に対してだけではない。現状をいくら続けようとも、決してはずかが折れないことも理解したのだ。

ならばと、ヴィガルドは槍を構える。体力的にも、間違いなく最後になるであろうこのまともな一撃を打ち砕き、引導を渡すと決める。

「……………」

残る力の全てをつぎ込んだ踏み込み。放たれた矢のように駆けるはずかを迎え撃つのは、槍による全力の突きである。そのリーチの違いから、剣を抜く間もなく迫る槍がはずかの目前まで迫り、全力で体を倒すことで回避する。

ブチブチッ、と髪が引き千切られる音を聞きながら、はずかは必殺の一撃を回避しきったことを知る。それに対し、ヴィガルドの驚愕はいかほどのものだったか。

(あれを、あのタイミングで躲すか!?)

正直、やってしまったかと肝を冷やした。直撃したと思った一撃は首の皮一枚と言う代償で躲された。そして、回避したはずかは、まだ最後の一撃を放っていないという事に気付き、この戦いの決着だと悟る。

鞘におさめられていた剣が迸る。彼女にとっても至高の一撃は、鎧ではなく、ヴィガルドの持つ槍を半ばから断ち斬った。

「くっ、はあっ……」

会心の一撃を放ちながら駆け抜けたはずかは、バランスを崩し大地を転がる。それでも剣士としての意地が転がる勢いのままに立ち上がり、今にも砕けそうになる膝を必死で支えなんとか立ち上がった。膝を震わせながら、剣を杖のように大地に突き立てかろうじて立つ姿はむしろ滑稽だったかもしれないが、そんな状態になるまで力を振り絞った甲斐はあったというものだ。

わずかに遅れて、切り落とした槍の片割れが地に落ちる音が聞こえる。それを聞いてようやく勝ったという実感がわいてきた。

『……素晴らしい回避と、一撃であった。まさかあの状態から避けられるとは思わなかったし、我が槍を両断するとは、もはや言葉もない』

ヴィガルドの称賛の言葉に、はずかはようやく顔を上げ振り返る。だが、そこにあったのははずかの予想したものは無かった。そこにあったのは憐れみである。はずかのとった選択を、責めるものであった。

『だが……なぜ、武器を破壊するにとどめた?』  
「え?」

『満身創痍の貴女とは異なり、我が身ははまだ戦える……人を殺さぬと言つ誓いに文句をつける気はないが、これは些か酷すぎる』

そう言われても、すぐかはすぐに理解することができなかった。というのも、すぐかは戦いの前に考えていた勝利条件が、敵の防御を貫きつることの証明と、武器の破壊の二点であったことが原因だ。

その条件を満たしたすずかにとって、ヴィガルドの批判は理解できるものではなかった。

「えっと……？」

『……要するに、今の一撃で勝利を決めたかったのであれば、貴女が十全の戦闘力を保っていなければならなかったという事だ』

首を傾げるすずかに、今度は呆れを混ぜながら説明するヴィガルドの姿は、

そう、確かにすずかは頑強な鎧を破ることができる。これを証明したことで、すずかは勝利する可能性を得たことになる。

次に、ヴィガルドは自身の武器を破壊された。これにより、戦士としての攻撃力はほぼ失われたと思っただろう。

これだけ聞けばすずかの勝ち揺るがないように見えるが、実際はそんなに甘くない。

『貴女はもはや、まともに剣を振るつ事も出来ないだろう。対して我が体力は十分。……槍こそ斬り飛ばされたが、これでも戦えない事は無い』

そして、その言葉を証明するかのよつに半ばから斬られた槍を振りまわして見せる姿に、遅延は無い。そこまでされて、よつやくすずかはこの戦いが終わってない事を悟る。否。

「……そんな……」



『せめて、腕なり脚を裂くなりしていれば、双方戦闘は不可能とすることもできただろうが……残念だ』

この戦いは、すずかの負けはもはや揺るがないだろう。体から力が抜け思わず膝をつきそうになるが、それでも、すずかは倒れなかった。いや、倒れることができなかった。

「それでも……わたしは……！」

『止まれぬか……だが、それでどうする？ ただでさえ体力は限界であり、力も技も我が身に劣る貴女に、手が残されているとでも？』

皇帝の言葉に、答える言葉はない。答えてしまえば、その現実を受け止めるしかなくなるから、答えるわけにはいかないのだ。

だから、すずかの代わりに皇帝は答えを告げる。

『斬れ』

「……」

『自らに制限を課して勝てる相手ではないと知ったはずだ。それでもなお勝利を望むのなら、人を斬らぬという枷を外せ』

それ以前に、所詮我が身は人ではなく亡霊と同じだと付け足すヴィガルドの声音は、むしろ穏やかであった。聞き分けのない子供を諭すような、そんな響きが込められていた。

だが、すずかは首を横に振る。

「できません。これは、わたしが人であるために必要な事ですから」

それはすずかにとって、どうしても譲れないものであった。

それは自分が夜の一族であることに起因する、心のどこかにある人ではないというコンプレックス。その力を使って人を傷つけてしまえば、化け物と呼ばれる存在に墜ち、戻れなくなってしまうのではな

いかという危惧。

だからこそ自身に対して制限をかけたのだが、戦場に立った者からしたら的外れな危惧であった。

『戦場に人であることが必要だと、そう思っているのか？』

「……………」

『人のまま戦場に立つことが、どんな事だかわかっているのか？』

ヴィガルドの問いかけは、すずかにも一応理解できた。兵士と言うのは、心に『スイッチ』を持ってしていると聞いたことがある。普段はその『スイッチ』を切り、戦う時だけ『スイッチ』を入れて敵を倒す機械になるとか……すなわち、戦場において人の情やらは無用の長物というわけだ。

もちろん、なのは達のように『非殺傷設定』が使えれば話は違ってくるだろう。だが、現実としてそんなものが使えないすずかにとって、参考にはならない。

『アレも欲しい、コレも欲しいが通用する場所だと思っているのか……』  
「手を伸ばさなければ、掴むことなんかできません！」

基本的な思想が違い過ぎる二人の言い分は、決して交わることはない。

戦場に立つものとして、その覚悟を叩き込むことを目的としていたヴィガルドにとって、これ程の誤算は無いだろう。

こうなってしまうえば、ヴィガルドにできることなど残っていない。精々、脅しをかける程度であった。

『生け捕りとは、相手より数段上手でなければ実現は不可能だ』

「……………今まさに実感しているところです」

『力だけでは足りぬ。その意志、精神……危険を冒すことに対して理解ある仲間もか……道のりは険しいなどと言っただけでは済まんぞ』

「覚悟の上です」

すずかの言葉は、ヴィガルドからしてみればまだまだ軽い。だが、それでもこの戦いでヴィガルドの武装を破壊するという結果を示したことも確かなのだ。

『……ならば、死人に語ることはもはやないな』

「それってどういう意味……！」

問い返すすずかの目が驚愕に開かれる。ヴィガルドの体が、足元から消滅を始めたのだ。

「何で？」

『もとより仮初めの肉体だ。役目を終えれば消えてなくなるのが道理である』

すずかがもう戦えず、語ることもつくした今、ヴィガルドは自身の役目が終わったと判断したのだ。本音を言えばヴィガルドにとってもこんな終わり方は不本意であったが、役目を終えた以上いつまでも居残っては誰のためにもならない。

『心残りはあるが、致し方あるまい……』

「待って……！」

思わずすずかは手を伸ばすが、それで消滅が止まるわけが無く、ヴィガルドはあっけなく消えてしまった。後に残ったのは満身創痍なすずかと、決定打が無く上空で戦い続けるユーノたちだけであった。

拮抗していたのはとキリエの戦況を変えるきっかけは、やはり外部からの干渉によるものであった。

それは戦場の遙か外側から高速で飛来し、二人が杖と剣を交えるその瞬間に激突してきたのだ。

「だれ!？」

「なに……っつて、お姉ちゃん?!」

「痛ったー!!」

『ケケエエエー……!』

その飛来物はいよいよ先ほどまで遠距離戦を行うため高速で戦場を飛び回っていたアマタであり、近距離戦を行うべく高速で追い回していたデスガーゴイルであった。

混乱しながらも突っ込んできた人物を確認したキリエは、なおもアマタに襲い掛かるうとするデスガーゴイルに反射的に刃を突き立てる。

「ああもう！　なんでこんなタイミングで!」

「ありがとうキリエ、助かった……じゃなくて！　流石にこれ以上の

勝手は、お姉ちゃん許さないんだからね!」

「えっ……」

ぎゃあぎゃああと擬音が付きそうな言い争いに押されて、蚊帳の外に追い出されてしまったたなのではあったが、言いあう二人に迫る影にっ  
い手を出してしまっ。

「だいたい……」

「そっちこそ……」

つい熱くなってしまった二人に迫るのは、デスガーゴイルの槍であり、気付いた時にはすでに回避は不可能な距離であった。そして反射的にお互いがお互いを庇おうと動いたその時、桜色の閃光がデスガーゴイルを飲み込んだ。

「……」  
「……」

「もう……姉妹でお話するのはいいですけど、周りをちゃんと確認してからにしてください！」

それなり以上に苦戦していた、あるいは苦戦を予想した姉妹にとって、そんな敵を一撃で倒されてしまったことに言葉が出ない。

さらに言外にはいえ、ケンカをするのはかまわないが手を煩わせるなど言われてしまえば、高速で首を縦に振るほかなかった。もちろん、なのはにそんな意図が無いのは言わずもがなである。

とりあえず欠片とは別枠なので、改めて投降を呼びかけようとしたのはであったが、乱入者であるアマタから事情を聴き、こちらの件は丸投げすることにしてしまう。

「……クロノ君が認めたんだったら、特にいう事は無いよ」

「ありがとうございます……」

さりげなくエイミイにも確認を取ってから、はやてと合流するため身をひるがえす。そうして残された二人であったが、もはや戦闘など、起こす必要が無かった。

「……あとは彼が約束を守るかどうかだけだし、もう何もしないわよ」  
「……それでも、皆さんにたくさん迷惑かけたんだから、その分はちゃんと償わなきゃだめだよ」

彼とは誰かとか、いくつか聞きたいことはあったが、とりあえずこれ以上の介入行為をやめたことに安堵するアマタ。

すぐには信用されないだろうからと、微妙に言葉を濁しながら妹を諭しながらも、しばらくはおとなしく待つことになってしまふ。

「向こうは決着がついたみたいやな」

『そうですね』

「まだ、戦うつつもりなん？」

『もちろんです』

なのはの決着を確認したはやて達だったが、それでこの場を埋め尽くす魔力弾をしまう事にはならなかった。が、莫大な魔力による牽制は、結局勝負がつかないまま終わることになってしまった。

なのはだけではなく、各地で戦いを終えた面々が、一斉にこの場に到着してしまったのだ。

「はやてちゃんー」

「じ無事で」

「どちらかってゆーたら、わたしの方が援護に行くつもりやったんやけど……出遅れてもーたなあ」

苦笑しながらも援軍の到着を頼もしく思うはやては、これにて決着とばかりに自身の「コピー」を改めて見やる。

『……では、決着としましょつか』

「そやね」

牽制に使っていた魔力を収め、決着の一撃を練る二人であったが、はやては「じ」で正面からぶつかることを良しとはしなかった。

「マークさんー」

「「じ」で俺に振るか……」

「じ」でマークに声をかけたのは、騎士たちは騎士であるがゆえにこの戦いに手を出し辛いだろうと判断し、なのは達は一言では足りないだろうと考えたためである。

少なくとも、この判断は間違いではなかった。呼びかけられたマークは苦笑しながらもすぐさま了解し、風属性の魔導書を取り出す。

『シエイバー』

たった一言の詠唱は瞬時に効果を表し、その風の刃ははやてのコピーの脇腹を大きくえぐった。

『ずるくないですか?』

「わたしは英雄譚の主人公とはちゃうからなあ……五分の勝負に乗る勇氣は無いんよ」

そうして無慈悲に放たれるはやての砲撃に、マークの攻撃によって不十分になってしまったコピーの一撃が抗えるはずもなく、あまりにあっけなく決着がついてしまった。

「いや、なんて言うか……避けられる危険は避けるべきやろ?」

戦いが終わった直後の沈黙に触発され、しなくてもいい言い訳をするはやてには、やはりどこか罪悪感があつたのだろう。

そのことに少し呆れるマークとは違い、騎士たちは主に余計な心労をさせてしまったとばかりに頭を下げる。

「はやてが気にすることじゃねーよー」

「はい、我等が事前に察するべきでした」

「我等の誇りは、主を守ることにあります」

だが、そんなやり取りを最後まで見ることは叶わない。この戦いの元凶が、深い闇と共に舞い降りた。

## 第66話 「和解」

突如、闇を纏い傲慢な笑みを浮かべ現れた管制代理であったが、それに反応したのは未来から来たというアインハルトとヴィヴィオだけであった。

他の面々は、どちらかと言えば怪訝そうな顔をしていたのだ。

「……あれ？ いろいろやったし、もっと過激な反応をされると思ってたんだけどな」

「そらまあ、正直何やりたいかわからんからなあ……」

その反応の薄さに若干の不満を表すが、管制代理が前に言い残したセリフから、欠片をすべて排除したら現れると思っていたはやて達にとって、この時の登場は完全に予想外であったため、何か思惑あつてのことかと些か困惑しているのだ。

とはいえ管制代理にも言い訳はある。はやて達の主戦力の大半が集まってしまった以上、もはや欠片だけでは手が出ないし、何より管制代理である自分と戦う気になってくれればそれでよかったのだ。

「……まだあまり戦う気が起こらないって言うのなら、もう一度欠片をばらまいた方がいいかな？」

「そんな面倒なことせんでも、今回はちゃんと戦つたる……もちろん、先輩の思い通りの結果にはせんけどねー！」

そう言うて杖を構えるはやて達であったが、管制代理としてはこの不安定な体を保つ術が思いつかなかつたため、思わずマークに確認の視線を向けてしまう。

「守護騎士プログラムの流用で何とかできるんじゃないのか？」

「それができるのなら、守護騎士がかつての主の手によってもっと増



「やされていたと思うよ？」

肩をすくめながらもこたえるマークに対し、管制代理もため息をつきながら答える。マークが知らないという事は、おそらくブラフなのだろうと判断したためだ。

だが、その答えは半分正解で半分は間違えであった。

「守護騎士プログラムを基礎にして、『エレシユキガル』の知識を使う  
！」

「それは…」

管制代理が瞠目し、マークの目つきが鋭くなる。その知識はエネルギーを、生命エネルギーを使うことを前提としたものである。マークが決して外部にその知識を漏らさないと誓ったものであり、その技能を使うという事は、マークを敵に回すという事だ。

その宣言に流石にあせる管制代理であったが、当のマークは大きく息を吐き面倒そうに頭を掻く。

「しゃーない……そこは俺がどうにかしてやるから、そんな死に急ぐようなまねするな」

「その方が助かるわあ〜」

杖を構えながらも相貌を崩すはやては、やはりマークがそういう事を期待していたのであるが、この事を口にする事にやはり緊張していたのだろう。だが、はやてはともかく、管制代理にとってこの事態は想像の範疇には無かった。

「……………なんで、僕を助けることに対して同意できるんですか？」

それは当然の疑問であった。かつて此処とは違う世界において戦った時は、とてもじゃないがこのように話ができることは無かつ

た。

マークは管制代理を敵視していたし、彼もまたそれが当然と受け入れていた。それが今はどうだったであろうか？

(かつては彼の仲間たちを傷付け、此処でも彼の同族を刺客に差し向けた……彼は仲間をととも大切ににする人だと聞いていたのに、なぜ?)

もちろん、管制代理にもいくつかの答えを予想できたが、その問いにマークは、意地の悪そうな笑みを浮かべながら答える。

「残念だったな。俺は、死にたがってるやつを殺してやるほど優しくは無いんだ」

「違う……それなら、あるときだって僕を生かすことができたはずなんだから！」

必死で首を振り否定する管制代理であったが、マークからそれ以上の発言は得られなかった。それでも、このまま生き残るわけにはいかないとはかりに焦り、更なるカードを切る。

「防衛プログラム……あれは魔王によって本体から切り離された結果、リインフォースの代理である僕に取りついたんだ。だから……」

「わたしと魔王を切り離れたのはちゃんが居る。問題あらへん」

「主の言葉を聞かない端末なんて……！」

「自意識があれば、そらケンカぐらいするやろ？」

「それに！」

「ねえ、もういいんじゃないかな？」

はやての肯定に言葉を荒げていく先輩であったが、その発言をフェイトが止める。その穏やかな声に意識が集まるのを感じ、マークに抱えられたままであるフェイトが少し恥ずかしそうにするが、すぐに管

制代理に向けた言葉を再開する。

「貴方が自分を許せないって思ってることは十分に分かったよ。でも、責任の取り方は一つじゃない」

「……」

「わたしだって、一度は道を間違ってしまったけど、それでも今こうしていられるんだから」

それは、フェイトにとって精一杯の説得であった。そして、守護騎士たちにとってその言葉は真実であった。

闇の書の騎士として戦っていたかつての自分たちの行いを背負うと言った主を助け、支えることで罪を償うのが正しいと、そう自信を持っていう事が出来たのだ。

だが、先輩にとって、この説得は全くの見当違いのものであった。

「……出来るわけがない」

「そんなの、やってみなきゃ……」

「そんなこと、ありえない！」

それは完全なる拒絶であった。今まで先輩から感じていた焦りが一切合財消え去り、その表情を恐怖が彩る。

「やり直せる？ やってみなきゃわからない？ そんなの、何も知らない子供の絵空事だろう！」

もはや、はやての内にあっただころに取り繕っていた余裕など欠片もない。そこにいるのは、怯えるばかりの少年でしかなかった。

「僕の選択によって、どれだけの命が失われたと思う？ マークさんは知っているでしょっ！」

「……魔王の復活は別にしても、国を二つ攻め滅ぼしているな。あれ

でも一国の頭だし、結果的に自国も滅ぼしたと言えるか？ 幸い王族が生き残ったから、後の復興は割とスムーズに進んだが、それでも相当な数の死人が出ていたはずだ」

かなりオブラートに包んではいるが、それでもなおおとんでもない被害だとわかってしまう。そして、管制代理がその被害を望んでいたものではないという事も。つまり、彼にとってはその死者の数は丸々、守れなかった者たち、守りたかった人々と同義であった。

そんな経験をしてきた少年に、やり直せるだなんて、信じられるはずがないのだ。

「だから、もう終わらせてくれ……縛られた魂を解放してほしいんだ」  
「……………」

いくら仮初めの肉体を滅ぼそうと、魂までは消えたりしない。もはや自力での消滅ができなくなってしまった先輩は、終わりを人に乞うしか手は無かったのだ。

だが管制代理という立場を手に入れた為に終わりをもたらす手段を手に入れたはやては聞き入れず、マークに至ってはまともに話ができるかどうかも疑わしい。ゆえに、問題を起こし、はやてに裁いてもらうしか手が無かったのだ。

「取り返しのつかない失敗を前に、死にたくなるのもわかるが……………」  
「そこで反論しようとするあたり、本気でわかってるとは思えないよ」

主を魔王に散り込まれるという失態を犯したシグナム達も、リカバーできた時点で取り返しのつかない失敗ではなくなっている。

先輩の過去に、説得の言葉を無くす面々であったが、それでもはやては諦められずに、答えの出ない問題を考え続ける。思わず噛んでしまった唇から血が流れるが、そんなことでよい案が出る筈もない。

しかし、時間は待つてはくれない。先輩は、はやての決断を急かす

ように行動を開始する。

「……覚悟が決まらないのなら、今度は僕も本気でやるよ。流石に死人が出れば、決められないなんて言えないよね？」

「やめっー！」

反射的に杖を向けようとしたはやてであったが、それすらも叶えられなかった。

「これはっー！」

「バインド!？」

一瞬で濃くなった闇が、はやてを、なのはを、ヴィヴィオやインハルト、守護騎士たちを縛る。その魔法はマークの持つ魔道書の中でもとりわけ危険度の高い魔道書であり、白の賢者と呼ばれたマークの魔道の師によって禁書に分類された暗黒魔法『マフー』と呼ばれるものによるものであった。

そして、それを為した先輩は、唯一束縛されていないマークに魔導書を向ける。

「ただ肉体を壊すだけでは止まらないですよ？　ちゃんと、魂まで打ち壊してくださいね」

「お前の事情なんて知らんよ」

「……肉体だけ壊しても、ハヤテの内に戻るだけです。そうなれば少しずつハヤテの意識を汚染してしまっ」

「マーク、降ろしてー！」

「いきますー！」

戦闘になると感じたフェイトがマークの腕の中で騒ぐが、その行為がなされることなく先輩が戦闘を開始する。しかも、その内容は……

「近接戦闘!？」

「至高ともいえる賢者を相手に、魔法で向かっていくなんて真似しないよー!」

「くっ!」

ミッド式、ベルカ式の術式をフル稼働し、一流の戦士並みの高速機動をする先輩は、左腕に装備した防衛プログラムの具現化である槍射砲を叩きつける。

マークは辛うじて炎槍『ジークムント』で受け止めるが、フェイトを抱えたままでは些か分が悪かった。直後に打ちだされた槍で、大きく弾き飛ばされてしまう。

「ッ! 賢者なんて名乗った覚えはないんだがな!」

「ちゃんと見てましたよ……王城に寄るたびに、手当たり次第に魔導書を読み漁っていましたよね?」

「それはっ!」

それは、マークの目標であった死者蘇生の為である。その頃の実戦では、確かコストパフォーマンスを重視して斧を使っていた覚えがあったのだが、どうやらフェイクと思われていたらしい。

なおも接近してこようとする管制代理の前に、フェイトが声を張り上げる。

「マーク!」

「無理!」

足手まといになるのを厭ったが故の叫びも、マークは一言で切り捨てる。もともとフェイトを同行させたのは、無茶な強化による体の変調があった時にそばにいるためであるのだ。つまり裏を返せば、現状何らかの変調をきたす恐れのある状態なのだ。

「いいのかい？ 流石に人ひとり抱えたままでは、戦えないだろう！」  
「そうだな……かと言って、アイツらにその術式をどうにかしろって言うのも、流石に無茶だろうしな！」

お互いの言葉の合間に、得物が火花を散らし、激突する。一見互角を保つ二者だが、どちらに分があるかなど言うまでもないことだろう。

片腕にフェイトを抱えるマークは、魔法をも重ねて使う先輩の手数に次第に押されていっていた。

《どうにか解除できぬーのか！》

《無茶を言うな！ この拘束力は、我等の知るバインドの比ではないー！》

《フェイトママがー！》

《ヴィヴィオさん落ち着いてください。でも、通常の手段で破壊できる類のバインドではないようですね……》

歴戦の技術も未来の知識も跳ね除けた拘束は、なるほど特殊なものなのだろう。だが、対抗はできずとも解析ができる存在がここにいたのだ。

「バインドと言うより、どちらかと言えば呪いの類ね、これは」

「敵意に反応するタイプ……ですか」

そのセリフは、つい先ほどまで喧嘩をしていた姉妹のものであった。

「わかるのか!？」

「まあ、一応ね」

「武装解除……うっん、そこまでやらなくても攻撃の意思を捨てれば、この拘束は解除されると思いますよっ。」

姉妹に言われ、即座に実行しようとするヴィータであったが、なかなかうまくいかない。ただし、失敗したのは少数派であったようである。

「なるほど……我らの中でも攻撃的な役割を持つヴィータでは難しいか」

「ザフィーラ!? おま、どうやって!?」

「……言われた通りだ」

はやてやなのは、ヴィヴィオ達も抜け出すが、ヴィータと、それにシグナムも脱出は難しいようであった。

「脱出できても、この条件では介入は難しいですね」

「……先に行くぞ」

敵意のみで行動を封じる呪いに二の足を踏んだアインハルトであったが、関係ないとばかりにザフィーラは戦場に向かい……見事に先輩の攻撃からマークたちを守って見せた。

「なっ!?!」

「意識を、完全に防御に向ければさほど難しくもないな」

「なるほど、盾の守護獣の面目躍如だな」

簡単な事ではないが、それができるからこそ『盾』なのだろう。だが、参戦できても攻撃できないことに変わりはない。先輩の攻撃力であれば、遠くないうちに最初の状況に戻ってしまうと、そう考えていた。

だが、その考えもあつという間に覆されてしまつ。

「見つけた!」



その一言は、はやてのもの。管制代理が使う魔法の全ては、自分の内にもあるという確信から探し出した一筋の希望。

管制がない事からそれなりの時間はかかったが、それでも数分で済んだことは運がよかったとしか言いようがない。いや、先輩がこの魔法をどう扱ったか予想したからこそこの速さで見つかったのであり、それを運というのは誤りであったか。

ともあれ、はやては戦場に立つ資格を手に入れたのだ。その魔法は

『スターライト・エクスプロージョン』！』

星の光は闇の呪いを打ち抜き、先輩に痛恨の一撃を加える。正確には、その一撃が与えた一瞬の硬直時間であった。

だが、その致命的な一瞬は、何事もなかったかのごとく過ぎ去った。マークは決定的なチャンスを見逃したのだ。

「どうして……？」

「ちつきからそればっかだな」

マークの言動に対して疑問ばかりぶつける先輩に、ついたため息を漏らす。そして、仕方がないと言わんばかりに、その理由を語る。

「今ここに、お前を裁きたいと願う者はいない」

当然だ。ここは地球であり、先輩が罪を犯した地ではない。だが、だからと言って罪がなくなるわけではないと思っている。

「では聞くが、お前が裁かれて誰が満足すると言っただ？」

「……」

「ちつきも言ったが、俺はお前を殺してやるほど優しくないんだ」

「……貴方の気は晴れるでしょうっ？」

「お前を殺して死んだ奴らが生き返るわけでないし、何より戦友には、お前が救われることを望んだ奴もいたしな」

先程は生かすことができたはずだと先輩が憤っていたが、魂の大半が喰われていた前はそれが不可能だったのだ。だが、今は違う。

「お前のことは気に入らないが……まあ、些細な事だ」

あまりに小さな呟きは、その腕に抱えたフェイトですらかすかにしか聞こえなかった。友の願いを叶えられるなら、確執は容易く捨てることができた。はやても望んでいるし、マークにとって先輩を滅ぼすメリットは皆無となったのだ。

「それで、どうする？ お前が惚れた女の願いすら無視するような輩なら……まあ仕方がない、殺してやるっ」

「僕は……」

初めて、望む言葉がかけられたが、これに先輩は答えることができなかった。長い年月の中、どうしても自分の愚かな選択ばかり責めてしまっていたが、そんな自分を救おうと尽力してくれた人がいたことを思い出してしまったのだ。

一度思い出してしまえば、安易に死にたいなどと言う事は、もはやできなかった。

「……幸い、此処にはお前に生きていてほしいと言う子もいる。精々、悩み苦しめばいいわ」

「マークさん……貴方は、本当に……」

ひどい人だと、口の中でだけつぶやく。もはや先輩には興味の欠片もないと言わんばかりに背を向けるマークと入れ替わりにはやてが

目の前にやってくる。

「……わたしがやったことは、余計なことやったかな？」

「……いや、きっと必要な事だったと思うよ」

確かに、マークに説得を頼めば今回の戦いは起こらなかつたかもしれない。だが、先輩の本音を聞くことはできなかっただろう。それを思えば、今回の騒動は決してマイナスばかりではなかつたはずである。

「わたしも、貴方の苦しみを全部理解できるとは言えへん……でも、もう一人で悩む必要もない」

「それって……」

「まだ子供かもしれないけど、それでもわたしは、貴方の主や。今までこのことはともかく、これからのことはしっかり背負ったるから安心してな」

はやてにとつて、騎士たちにかけて言葉と何ら変わりないものであったが、それは人の上に立つべく育てられた先輩が初めて聞く言葉であり、ずっと求めていたものであった。

「ああ、改めて、お願いするよ……我が主」

「な、なんやあらためて言われるとてれるなあ〜」

思わず頬を掻くはやてに、先輩は膝をつき頭を垂れる。

「私、リオンは、八神はやてに、我が魔道の全てと、絶対の忠誠を、ここに捧げます」

「あ、う……」

一言一言を区切り強調するような突然の真摯な宣誓に、流石に

戸惑う。だがそれもほんのわずかな時間であった。

「……こんなこと、急に言われても困っちゃうよね？ まあ、僕のけじめみたいなものだから、気にしないで」

「そ、そう？ ……あ、そう言えば、先輩の名前、初めて聞いたかも」

先程の宣誓をつやむやにするような緩い声にはやてものって、少しばかりリオンを責める。それに応える声はやはり穏やかで、少し前に会った緊張感などどこかに行ってしまったようであった。

「これにて、一件落着……ってか？」

「まあ、無事仲直りってところかな」

少し離れた場所で、ようやく拘束から逃れたヴィータの言葉に、マークも軽く同調する。管制代理の身の振りようは今後話し合うことになるだろうが、何とか内輪で片づけたのだ。大きな問題にはならないだろう。

それより問題は、未来から来たという子供たちのことだろう。

「えっと……」

「「」これらの問題に巻き込んで、悪かった。もう少し話し合えば完全に終わるから」

「は、はい」

ヴィヴィオやアインハルトからすれば、ついさっき全力で戦った相手と同じ容姿の存在に相對して少し気まずかったのだが、それもすぐに吹き飛んでしまった。

「……どんな問題があったのかは知らないが、安心してくれ。俺が、必ず何とかするから」

その声は優しく、絶対の意思が込められていた。それは、初対面であるはずの青年の言葉を思わず信じてしまえるほどしみ込んで行き、二人は知らず知らずのうちにこわばっていた体から力が抜けるのを感じた。

「シグナム、先にみんなを回収してアースラに戻ってくれないか？」

「構わないが……お前はどつするんだ？」

「先にフェイトを治療してくる。話し合いの最中もずっと、俺の膝の上に乗せておくわけにもいかないだろ？」

「さ、さすがに恥ずかしいよ……」

今だって十分恥ずかしかったのにと付け足すフェイトを見て、シグナムも苦笑せざるを得ない。戦いが始まってからもマークが離さなかったことから必要だったのだろうとは感じていたが、それとこれとは話が別だ。

「了解した。後は任せてもらおう」

「頼んだ」

その一言を残し、あつという間に転移して言ったマークを見送り、いまだ戦っているだろう面子の回収について考える。

(とりあえず、主はやてと、リオンとやらに話を通すか……欠片は、どうとでもなるだろう)

欠片を操っていたリオンがいるからと、楽観的な考えをするシグナムであったが、その予想はわずかに外れることになった。

## 第67話 「仲直り」

その他大勢をほっぽり出して研究所まで来たマークとフェイトであったが、フェイトの体はマークが思っていたよりも深刻な状態であった。

「むっ……」

「じめんなさい……」

「あ、いや、別に俺の見通しが甘かっただけでフェイトが悪いわけじゃないって」

手間をかけることに対する謝罪を軽く流し、改めてフェイトの体を診察する。肉体の損傷と言う意味ではマークの見込み通りであったのだが、深刻なのはその損傷に至った理由である。

「元々モルフは『イーギル』で出来てるから、当然それを操る素養があるんだけど……まさか手足だけでここまで操作できるとは思わなかった」

「つまり？」

「俺が用意した強化より、短時間に莫大な効果が出るように変革されてるんだ」

もう少し強化が過ぎれば、肉体が自壊してもおかしくないレベルまで効果が増幅されてしまった以上、これからはこの手の強化はそうやすやすとおこなえないだろう。

これは無意識に『イーギル』を操作したフェイトではなく、危機意識の薄かったマークを責めるべき事態だろう。

「すまなかった」

「うっん、マークのおかげで、あの二人を守れたんだもん。マークが悪

「い事なんてないよ」

「……そういえば、なんで、時間稼ぎに終始しなかった」

フェイトの言葉から、あの戦いでフェイトが無理をした理由を尋ねる。マークのことを知るフェイトが、そのコピー相手に勝負を仕掛けることに違和感を感じたためだ。

その問いかけに、少しかげまずそうに眼をそらしたフェイトであったが、観念したかのように静かにその理由を語りだした。

「あの子がね、私のことをママって呼んだんだ」

「……そうか」

フェイトは、その一言で何となく事情を理解したマークに一つ頷き、話を続ける。

「何であの子がそう呼んだのとかはまったく関係なくね、守らなきゃって、そう思ったら体が動いてたんだ」

それは、フェイトの持つ理想の母親の行動だったのだろう。あるいは、プレシアと言う母を持った証なのかもしれない。

その想いは素晴らしいものだが、それゆえにそのすべてを認めるわけにもいかなかった。

「確かに子供たちを守るうとする意志は尊いが……その方法は褒められたものではない」

「……はい」

「命を賭けて脅威を払ったとして、それで子供たちからすべての危機が去るわけじゃないんだ。まずは生き残ることを優先しなきゃならない」

その淡々とした忠告に、ほんの少し震えが混ざる。そのことに気付

いたフェイトが改めてマークを見直すと、その目から一筋の涙がこぼれる。

「自分の命を軽く見積もって、護りきれたとか変な自己満足して死ぬなんて、絶対に許さないから……」

誇りを語り合った騎士が、酒を飲み交わした傭兵が、その死を悼む間もなく散っていった。もう二度と、そんな場面を見たくなかった。それに、どんな戦いであっても、戦いの後と言つのは必ず存在するのだ。今回だって守護騎士たちがすぐに来なかつたら危なかつただろう。それを自覚したフェイトは、最初とは違う意味で謝罪する。

「……」

「分かればよろしい」

今度の謝罪はしつかりと受け止め、壊れかけの肉体に『エーギル』を注ぎ修復する。とはいえ作り直すような怪我が無かつたのは幸いで、作業自体はわずか数秒で終了した。

「それじゃあ戻るか」

「うん」

何事もなかつたかのように研究所を後にするマークの背中を見ながらも、フェイトは新たな決意を抱く。

もっと強くなる。マークにいらぬ心配をかけなくなれるように、護りたい人たちをちゃんと守れるように、と。

「で、なんでこんなに重苦しい空気になってるんだ？」

「マーク、あんなのがいるというのなら、先に言っておけ……」

さらっとフェイトの治療を行いアースラの会議室へとやって来た



マークとフェイトであったが、そこで待ち構えていたのはマークの言うようにやけに心労の溜まりそうな空気であった。

そしてその重苦しい空気を中心に居たのが、マークと戦った少年と少女を監視する一人の男である。

「ああそっか、あいつ等もいたんだっただな」

「おいつー」

「いや、悪い。完全に忘れてた」

会えて言い訳をするのであれば、信頼できる者に預けたという事で、すっかり意識の外に放り出してしまっていた、あるいは心のどこかで思い出したくなかったと思っていたのかもしれない。

一応リオンがいたためアースラには招待されたが、魔導殺しに遮られていて本当にマークとの接触したのかすら不明であった上に、当の本人が何も言っていないだったので、リンディ達では流石に持て余していたのだ。

「若いのはヴィヴィオ達と同類でいいのかな？」

「……ええ、俺はトーマ、彼女はリリイです。同類とはいっても、俺達がいいたのはヴィヴィオたちの居た時代より少し後みただけだ」

「そっくりだと思ってはいたけど、私たちがいた時代よりもさらに未来のトーマでよかったんだ……」

「で、そっちのが欠片ではあるが、俺の……まあ、一応同郷のもんで、名をムルヴァと言っ」

『ムルヴァだ』

時代は違つという少年トーマの言葉は、ヴィヴィオの一言によりようやく信用されたが、未来の人と言う意味ではそう大差が無かった。しかし、意味が理解できたマークのセリフの前半はともかく、一部の人間にとって後半の一言には思わず聞き間違いかとすら思ってしまった。

「……………同郷!？」

「かなり前に移住して、それ以来ほとんど顔も見えていなかったけど、間違った表現ではないと思う」

『我らの世代は特に数が少なかったからな……………絆は強かった』

「いや、絆がどうかじゃなくて……………って、我らの世代ってことは、同世代!？」

エイミィなどはマークが孤立しているのではないかと予想していたため、特に驚いていたが、それ以上にマークとこの壮年の男性が同世代という事に驚きを隠せないものはいなかった。

「最低でも20歳位差があるように見えますが……………」

「外見年齢と実年齢がイコールじゃないからねえ」

『実年齢でいえば、私の方が400ほど年上だった。尤も、今はともかく幼いころの外見上はすぐに追い抜かれてしまったがな』

「400?!？」

「それがまたひっくり返るって、いったいどんな身体構造してるのよ……………」

アインハルトの言葉に苦笑しながら答える二人の竜であったが、現在20歳に見えるかどうかと言つマークをジト目で見るリンディの言葉に同意するものは多かった。

だが、マークの不思議な年齢はタネが割れているし、生き物である以上同郷がいることもおかしくはないと考えるものもちゃんとした。

「ねえ、マークの子供の頃ってどんなだったの?？」

「あ、わたしも聞きたいです」

『ふむ、私が知っているのはほんの数十年だが……………一言でいえば悪童だったな』

「悪童?？」

『うむ、一族の宝剣を勝手に持ち出したりな……』  
「その言つ話は後にしてくれ」

フエイトとすずかがムルヴァの話に食いつくが、さすがのマークも恥ずかしかつたらしくバツサリと切り捨てる。

「一応最終確認として、アインハルトにヴィヴィオ、トーマにリリィ……それにアミティエにキリエの六人が未来から来たという事であっているか？」

「ええ、今あなたが区切った二人ずつの別口みただけだね」

マークの問いかけにはキリエが応え、周りも間違いないと首肯する。

それを確認したマークは未来組の六人を待たせてリンディと共に、はやてとリオンへと向き直り、今回の一件に決着をつける。

「今後はこんな派手なケンカになる前に相談するように」

「はい、申し訳ありませんでした」

「迷惑かけてごめんなさい」

「あとでリオンの体を無理なく維持できるように調整するから、俺の研究所に来なさい」

「はい……って、これだけ？」

リンディとマークの一言ずつで終わってしまったことに、かえって不安を覚えるはやてであったが、それに対して少し呆れたようにマークが付け足す。

「この一言で済ませるために、本局とかに内緒で頑張ったんだろうが」「そうやけど……それとは別に怒られると思っと思ったから」

「そうね、もうちよっと大人を頼りなさいって、今のうちに怒ってた方がいいかしらね」

別に忘れていたわけじゃないという言い訳にっこりとほほ笑むリンディを見て、これは藪蛇だったとはやては顔を引きつらせる。

「まあ、そいつの過去を思えば相談し難かったのはわからんでもないがな」

「だからって、全部一人で抱え込んでしまうのは論外よ。私たちは管理局の局員である前に、一人の人であることをもっと信じてほしいわ」

フェイトの件にはやての件では、それなり以上に管理局より情を優先したリンディは、局員としては失格なのかもしれない。だからこそ、そこまでしても信用されないというのはさすがにショックだったのだ。

口にごそ出さなかったが、それをわずかでも読み取ってしまったはやてとしては申し訳なさで一杯になる。

「しめんなさい……」

項垂れるはやてに次はちゃんと相談するようにと念を押し、最後にリオンに対していくつかの確認を行う。

「その体は創り直すとして、それによって生じる不具合はどのようになる？」  
「創られる体がモルフのそれだったら、リインフォースから受け継いだ機能のいくつかが不全になるけど……そこは後日話し合ってから相談しに行くよ」

「了解した。闇の欠片は？」

「目的を果たした欠片二十個、ムルヴァを除いてすべて撃破、もしくは自壊したよ」

確認のため、戦場を見ていたはずのエイミィに視線をやると、アー

スラから確認できたそれぞれの戦績を提示していた。

「全二十一個の欠片のうち、ムルヴァさんを除外した二十個が対象だね。守護騎士たちが全員で六個、マーク君となのはちゃんが二個、クロノ君とすずかちゃん、ユーノ君にはやてちゃん、フェイトちゃんがヴィヴィオちゃん達の協力のもと一個、そして……」

「リオン君たちが戦闘に入った後に、私とアルフさんが介入。五個の欠片を潰したわ」

さりげなく追加されたリンディの一言に、結局欠片を撃破できなかった数名が肩を落とす。

それでも言われっぱなしではいられないとばかりに、そのうちの一人であるクロノはせめてもの抵抗として、いくつかの欠片に感じた特異性について尋ねることにした。

「基本的に、本人の劣化版を送り込んだと聞いていたんだが……僕たちの相手はなんだったんだ？」

「せっかくだからね、特定の人物にはためになる相手を用意したわけだけど……気に入らなかつたかい？」

「そう言っわけではないが……」

質問に対して結局不明瞭な答えしかよこさないリオンに少しばかり不満が募るが、その答えも心のどこかで納得する。

(きつと、あの奇妙な懐かしいような感覚は、知るべきではないものなんだろうな……)

確かに欠片との戦いで得るものもあつたことだし、あるいはクロノにとってあの仮面の男が、マークにとってのムルヴァのような存在であることを恐れ、口をつむぐほかなかった。



かった。そして、そこまで自分のことを理解してくれているのだと知って、少し顔が熱くなったのは仕方のないことだろう。

(まあ心に問題があるんじゃない、実践に参加するのは難しいだろうがな)  
マークは心の中でそう付け足すが、それを口に出すようなことは無かった。

「それじゃあ、これでひと段落かな？」

『私の処遇は？』

「……どうせ遠からず消えるんだろ？ 好きにすればいい」

とても一言では言い表せないほどの感情が込められた一言に、ムルヴアは頷くにとどめる。

そのことに口をはさむことなど余人にできる筈もなく、これで本当にこの件は終わったものとされる。

そうなれば、次はヴィヴィオ達未来組の話になる。

「それじゃあ、次は未来から来た子たちの番ね……一体何があったの？」

「わざわざ時間を越えてまでこの時代に来たんだ。たとえば世界が亡んでいようと驚かん」

リンディとマークの言葉に、一瞬で会議室の空気が凍りつく。

その一瞬で、多くは事態の重さを認識して顔つきが変わる。特に管理世界を知る者にとっては、時間移動がどれほどとんでもない事かわかるため、それほどの技術をもってしても対処できない何かが起こっているのだと思いい戦慄する。

「……えっとっ？」

「つまり、時間移動ができるにもかかわらず、未来ではなく過去を頼ら

なきやならないほど切迫した状況ってことかな？」

「あるいは、『この時代でもつづく』ポイント・オブ・ノーリターン』ってのがあるとしてことかも？」

いまいち理解できていないのはに対し、それぞれの言葉で説明するすずかとはやて。だが、その説明をなのはが理解するよりも早く、ヴィヴィオ達から訂正が飛ぶ。

「ち、違いますー！」

「わたし達がこの時代に来たのは事故のようなもので……」

ある日突然、気が付いたらここにいたという形であることを必死で伝える。それでもしななければ、どれほど話が大きくなるかわからなかったからである。

「俺達もそんな感じですよ」

「気が付いたらこの時代に……」

さらにトーマ達が説得に加わるが、現代組としては三組もの転移者が偶然同じ時間に時間移動したと思えるほど楽観的になれなかった。

「子供たちには話すことができないレベルで、何かあった可能性の方が高いんじゃないか？」

「あるいはかなり突発的な災害が起こったとか」

「送られてきたのが事情を知らない子供たちだから……最悪、事情を知る立場にいた者は全滅している可能性も……」

「あ、あの……たぶんですが、私たちのロストログアの転移に巻き込まれたのかも……」

より一層深刻になっていく現代組の会話に入ってきたアマタに、一斉に視線が集まる。それに慄いたように一歩下がってしまつが、それ



でも言わねばならないと、顔をひきつらせながらも推論を述べる。

「え〜と……わたし達はとあるロストロギアを使ってこの時代に来たのですが、その際発生した余波のようなものに巻き込まれてしまったのではないかと……」

「別々の時代の二組に？」

「いえ、私たちも別々に来ましたから……」

アマタの転移で一組、キリエの転移で一組が巻き込まれたのではないかと言う推論は、確かに偶然ヴィヴィオ達がこの世界に来たという推論よりは信用できた。

「じゃあ、アマタさん達はなんでこの時代に？」

「それは……」

そこで語られたのは、彼女らの故郷である『エトルリア』の環境破壊。それにより死の大地となった世界を救おうとする、一人の死に行く科学者の話であった。

「目的は博士の治療ではなく、その研究に一定の成果を出すことか……」

「はい……ですが、目的の『砕けえぬ闇』は行方知れずで……」

「そこで！ わたしはそこの人と取引することになったんだけど？」

沈んだアマタの声をかき消すように主張をするキリエに促されるかのように、一同の視線はリオンへと向かう。

『大抵のことは何とかできる半分神様な人を紹介する』って……  
「確かに言ったね」

穏やかに肯定するリオンに対し、キリエはその約束を履行するよう  
に更に言い募る。

「それじゃあー」

「彼だよ」

そして紹介されたのは、やはりと言つべきか、マークであった。つ  
いさつきまで敵対していた人間を推薦する凶太さに、キリエは絶句  
し、周囲の人達もさすがに呆れる。

「……死にゆく大地を救えって言われても、無理だろ」

「あ、マークさんでも無理？」

「見もせずに断言できることじゃないが……もし本気で世界を生き  
永らえさせようって言つのなら、それ相応の『イーギル』を注ぐか、あ  
るいはかなり強力な浄化ぐらいしか思い浮かばんよ」

「策はあるんですか!？」

アマタ達は無理だと言いながらも策を打ち出すマークに一筋も希  
望を見るが、その策はこともあるつかマーク自身によって否定され  
る。

「世界を再生させるほどの『イーギル』となれば、それこそナーガ様と  
かアスタテューヌクラスを狩る必要があるだろうな。浄化にしても、  
女神クラスの実力が最低限必要だ」

「えっと、それって？」

「ん〜……竜化した俺を一对一で軽くひねれるぐらいの実力？」

マーク自身も神竜の血を引く、とても強力な個体ではあるのだが、  
それでもなお足りない。

かつてあった正の女神や、神竜王と同格の邪竜との戦いを思い出し  
ながら述べられたその感想は決して間違いではないのだ。

「それって不可能って意味じゃないっすか……」

思わずそうつぶやいたトーマの左腕は、竜化したマークのプレスを受けたせいか未だ動かない。治療を受けながらエイミーに聞いた話では、あれでも境界が脆すぎて思うように戦えない状態であったのだから、もうどうしようもない。

『……私が見てみよう』

そんな八方ふさがりな状況に軽く絶望している二人に、ムルヴァがそう声をかける。

「えっと？」

『世界全てをどうにかすることはできないだろうが、どうにかできるかもしれないと思わせるぐらいはできる筈だ』

「……まあ、ムルヴァは火竜の中でも強力な力を持っていたし、知識もある。死にかけの人間一人誤魔化すぐらい問題ないだろう」

さらに言えば、マークが予想した状況よりも軽いものであれば、あるいは何とかなるかもしれない。

「それじゃあ……！」

「ぜひ！ お願いしますー！」

かすかなものであるかもしれないが、二人は確かな希望を間違いなく掴み取ったのだ。

「……ムルヴァの肉体も調整しないとな」

そんな喜びに浸る二人を見ながら、マークは人知れずため息をつく

のであった。

## 第68話 「未来への疑問」

确实とは言えないが、何とか問題解決の一手を得たエトルリア組であったが、それですべての問題が解決したわけではなかった。

「帰還方法ねえ」

「ええ、あの子たちがロストロギアを使えるって話だったから、それについて確認してみたんだけど……」

リンディが確認してみた結果は、何とも信用しにくいものであったと言わざるを得ない。と言うのも、ロストロギアの使用限界が残り一回であることが大きな要因である。

アマタ達は大丈夫と言っていたが、たった一度の時間移動で三つの時代にそれぞれ送ることができると言われても、なかなか信用しにくいものがあつたのだ。

「アマタさん達ともう一組ぐらいなら、まあ信用できない事もなかったけど……」

「そうは言っても、現状時間移動の手段なんて、あいつらのロストロギアしかないんだろ？」

困ったように頬に手をついて行うリンディに対し、報告書に書き込みをしつつ冷静に選択肢が無いと言うマークであつたが、次の一言であっさりとその冷静さも失われる。

「フェイトさんとなのはさんの娘なのよ？ それを危ない橋を渡らせるところにして、マーク君はそれでいいのかしら？」

「……………じゃあ、どうしろと？」

フェイトの娘と言つた一言で冷静な仮面がはがされたマーク

は、眉を顰めながら問いかける。先程も言ったように、時間移動の手段なんてそうそうあるものではない。

だが、本当は違つのでしようと、リンディは核心へと切り込んでくる。

「マーク君には、時間移動の方法に当てがあるんでしょ？」

「……どうして、そう思った？」

少しだけ面倒そうに、それでいてほんのわずかに鋭くなった目線を感じたリンディは、少し踏み込み過ぎたかと感じながらも己の推論を述べる。

「十年かそこらじゃ管理局は時間移動を実現できないわ。それにあなたも未来から来たって話を簡単に信じたし……アミタさんの証言が無かったときは、貴方がヴィヴィオさん達をこの時代に送つたものと思つていたのよ」

「……それだけじゃ理由としては弱いな」

だが、マークは一度だけとはいえ死者蘇生と言つ奇跡を起こしているのだ。ならば時間を超えることもできるのでは、と思つてしまつのも仕方がないことだろう。

もちろん、少し落ち着いてしまえばそれが過剰な期待であることに気付くことになる。

「まあ、やってやれない事もないがな」

「そうよねえ、流石にマーク君で……も……？」

過剰な期待であると、そう思つた瞬間にその思いを打ち砕かれた衝撃と言つのは、想像を絶するものであった。

もはや絶叫することもでき無かつたリンディは、さびた人形のようにギギギッとぎこちなく顔をマークに向ける。

「……自分で言い出した推論だろ」

「え？　だ？　な?!」

意味のある言葉を発することができていないリンディを見て、流石に言うべきではなかったかと少し後悔するが、そう思ってもあとの祭りかと自嘲する。

それを見て、ひよっとしてただの冗談を過剰に反応した自分に呆れているのではないかと言うかすかな期待を抱いたリンディは、尋ねる。

「……ひよっとして冗談？」

「いや、本気だ」

そつやって完全に打ちのめされたリンディであったが、もはやいまさら言い繕う気無くしていたマークは時間移動について語る。

「簡単に言えば、ナーガー族の固有技能のようなもんかな？　本来、使用しようと思えば次代のナーガーになる必要があるが、俺は可能性の塊である人の子とのハーフだしうまくすれば使えるはずだ」

「……真竜って、チートの塊なんだったって実感させられたわ……」

「ちーとが何なのかはわからんが……伊達や酔狂で神なる竜なんて名乗らんよ」

「……神なる？」

数日後、人と言うのは、想像をはるかに超えた事象を目の当たりにすると、思考を放棄するようにできていると、酒の席で友人に語るリンディの姿があったと言う。

ところ変わって食堂では、今回の一件に参加した面々がにぎやかに食事をとっていた。にぎやかと言っても、現状半分以上が講義の時間

となってしまうていた。

「……と言っわけだから、未来の情報はお互いの為にも知らない方が良いつてわけで……OK?」

「確かに未来のことは気になるけど、その話を聞いて、未来が変わつてしまつてヴィヴィオちゃん達が消えちゃつたりされても嫌だし……」「そうなる情報を提供した事実もなくなるはずだから……」つて矛盾が起こつてどうなるかわからないから危険つてことね?」

「……」

キリエにより、いわゆるSFもので出てくるようなタイムパラドックスなどの説明が行われていたのだ。それにより、詳細が分からなくても大まかな危機感が伝わつたようで、未来の情報を無理に聞き出すようなまねはしない事を、この場にいる人たちに確約させていた。

「まあ、最終的には私たちがある程度情報と言つか思考を操作して、私たちが未来からではなく、どこか遠くの管理外世界から来たという事にしますから、そこまで意識する必要はないですよ!」

「よかつた、せつかくこつして出会えたのに、いろいろお話しできないなんて寂しいもんね!」

危機感ばかり強調して、この場で話をしているのかとためらい始める前にアマタがフォローを入れる。

それに素直に喜びを表したのはなのではあったが、最も安心したのは、なのとはフェイトを母と慕うヴィヴィオと、はやてに対し厳しい上官と言つ認識を持つトーマであった。

「ちよつとぐらい不用意な事を聞いたり言つてもしても、大丈夫つてこつていいですか?」

「無いに越したことはないわよ? でも、よほどのことじゃなきゃ問題ないでしょ?」



すずかの念を入れた確認にもキリエが軽く答えることで、その懸念を払拭しようとする。それでようやく安心したのか、ようやくすずかは笑みを浮かべた。

それに合わせて、念のためアースラに避難していたアリサが、話題を変えようと先程の戦いについて尋ねる。

「それはそうと……結構きつい戦いだったらしいけど、どんなもんだったの？」

アリサの視線はすずかの不揃いになった髪と、トーマの吊られた左腕に注がれていた。治療自体は終わっていたが、流石に髪を伸ばしたり、引き千切れる寸前の腕を完全に治癒させることはできなかったためだ。

「わたしらは……そやね」

「割と楽をさせてもらったかな？」

はやてとなのはが、苦戦した人たちの前に答える。距離が合わなかったり、決定打に欠けた戦いで長引いてしまったが、怪我らしい怪我をしなかった以上、フェイトやすずかとは比べ物にならないくらい楽だったはずである。

「……僕は、終始試されているような感じだったな。何がどこまでできるのかを、確認されている気がしたよ」

「ぼくの方は千日手だね。攻撃力が低すぎて、どうあがいても決着がつけられなかった」

クロノとユーノは、完全に相手の思うつぼだったのだらう。とはいえ、今後の目標ができたと付け足す彼らにとって、今回の戦いはプラスに働いたものだと感じられた。

「わたしは二人の協力もあって何とか……でも、偽物とはいえマークと敵対するなんて、もう二度としたくない」

「でも、フェイトママすごかったよ！ ホントに目にも止まらない速さで……まあ、もう戦いたくないって言うのは賛成だけ」

「……わたしは、ぜひとも本人と手合わせ願いたいと思いましたが」「!!」

フェイトはもちろん、ヴィヴィオの感想もごく自然なものであった。ヴィヴィオも格闘少女として組手や試合というルールに守られた状態ならともかく、今回のような戦闘はもう御免であった。だが、アインハルトだけは違った。

三対一でようやく戦えたという現実があるにもかかわらず再戦を望む一言に、マークの実力を知る数名が言葉にならない驚きを示す。

「誰よりも強くなるのが、わたしの……悲願ですから」

情報を削いだその一言は、痛いほど染み渡ったが、それでもやっぱり理解できないとばかりに声上がる。

「……いや、あの人と戦うのだけはやめた方がいいって」

今回マークと戦ったトーマである。もちろん、隣でリリイが全力で首を縦に振って肯定していた。

「俺も一応未来の知識があるし、強い人達もたくさん見てきたけど……」

「正直に言って、そんな人たちとだって比べられないくらい、桁外れだったんだよ」

人の姿をしていた時は魔力を完全に無効化していたこともありま

だ何とかなったが、竜の姿に変わってからは何もさせてもらえなかった。

そんな戦いとも呼べぬ蹂躞を思い返し、思わず震えが奔ったトーマに、クロノはある疑問をぶつける。

「そもそも、なんでマークと戦うことになったんだ？」

「あゝ、それは何というか……ちょっと行き違いがありました……」

先程の話し合いの結果を受け、細かい事情を話すようなことはしなかったが、トーマはマークのことをある事件の原因、より正確には黒幕ではないかと疑ってしまったのだと語る。

「いやだって、ベルカ式のデバイスを持っていたのに、質量兵器まで持っていたから……」

「なるほど、それでマークのことを非合法な存在と思ったのか……」

「確かにマーク君の武装については、例外として所持を認めるって程度だし、何より大々的に公表とかしてないからねえ」

トーマの言い訳に、クロノとエイミィは納得の意を示す。しかし、その納得の裏では、更なる疑問が生じていた。

（本当にマークのことを知らないなんて、あり得るのか？）

地球で起こった事件だけなら、あるいは埋もれてしまう事もあったかもしれない。だがマークには、絶対に無視できない実績が既にあるのだ。

（死者蘇生は言わずもがな、魔王と言う驚異もあるんだ……）

魔王関係では、グレアムが主導して部隊を一つ創設する話も上がってきているのだ。それにもかかわらず、マークの知名度が低いとは考

え難い。

「……まあ大事には至らなかつたようだし、遺恨を残さないようにな」  
「……はい……」

クロノの忠告に力なく頷くトーマであったが、それも仕方のないことだろう。正直に言って、危うく死にかけたあの一戦は、マークに対する苦手意識を刷り込むには十分な物があつたのだから。

それでも、しばらくこの地で世話になる以上、無かつたことにするわけにはいかないだろう。トーマがそう腹を括った時、まるで見計らつていたかのようなタイミングでマークが食堂へやって来た。

「あれ、艦長との話し合いは終わったの？」

「ああ、ちょっと休憩だな」

リンディがフリーズしてしまつたため再起動まで時間をつぶしに来たとは言わず、適当に答えたマークはいつになく大量の食糧を注文してフェイトの隣の席へと座る。

「た、食べきれるんですか？」

「流石に食べきれんほど頼むような勿体ない事はせんよ」

なのはの驚愕交じりの質問に気負いなく答えたマークは、五人前は軽くあるだろう食事に早速手を伸ばす。もちろん、人目もあるという事もあるだろうが、がつつくようなことはせず、常人とさほど変わらぬペースで食べ始めた。

「それより、まじめな顔してなんの話してたんだ？」

「ああ、トーマ君はマーク君と戦闘したから、そのことはちゃんと話し合つておけて」

「ふむ、それもそうだな」

エイミィの説明に納得したマークは、一度食事の手を止めてトーマと向き合う。

「あの時は、俺もやり過ぎた。すまなかったな」

「い、いえ！俺も勝手な思い込みで突っかかっていって、すみませんでした！」

マークは静かに、トーマはやや過剰にそれぞれ謝罪をする。そうすると、話題がその戦いについてのものになるのも当然と言えるだろう。

「その腕は大丈夫なのか？」

「一応大丈夫だとは思いますが。自己治癒力はかなり強い方ですから。」

「……マークさんの方は、怪我とかなかったですか？」

「こっちの損害は『デュランダル』だけだ」

「え、壊れちゃったの!？」

二人の会話に思わず割って入ったのは、フェイトであった。かつて間近で見たことがあっただけに、『デュランダル』の破損が信じられなかったのだ。

「ギリギリで碎けてはいないが……さすがにもう実用はできないだろうな」

「修復はできないんですか？」

「……あの剣、ロストロギア級だったはずだ」

顔を青白く染めたトーマの問いに、クロノがとどめの一言を放つ。ロストロギアとは、現代の技術では再現できないからこそそのロストロギアなのだ。それを壊してしまったとなったら……

血の気の引いた顔をするトーマに対し、マークは苦笑を交えながら

問題ないと告げる。

「形あるものは、いつかは壊れる。そこまで気にすることじゃないぞ」「しかし、そんな希少な武装ともなれば、相当な戦力ダウンになるんじゃないんですか?」

そんなマークのフォローも、アインハルトの一言によって気休めにもならなくなる。尤も、アインハルトとして見れば手合わせをしたい相手の戦力が低下したかもしれないことが気になったただけだったが、トーマに対しては致命的な一言となった。

「……同クラスの武装がまだいくつがあるから、大問題ってことでもないぞ」

「問題ないのでしたら、ぜひ一つ手合わせをお願いしますか?」

流石に何度もフォローを入れるほど気にしていなかったわけじゃないマークは、撃沈したトーマのことを思考から外してアインハルトに向き直る。

それは、なぜマークとの戦いを望むのかを計るためであったが、改めて向き直ると、その思いが一部狂気の域にまで届いているのがわかる。となれば、マークの答えなど決まっていた。

「やだ、断る」

「……負けるのが怖いですか?」

付き合いきれないと突っぱねるマークに対し、軽く挑発をするアインハルトであったが、この程度の挑発に乗るほど軽くは無い。

だが、この対応はクロノにとっては意外としか言いようのないものであった。

「正直、マークなら乗ると思ったんだが?」

「……じゃあ聞くが、俺が負けると思うか？」

クロノが意外に思ったのは囑託試験の際の会話が原因だ。あの時のマークには、むしろ戦いたがっているという印象を抱いたので、今回面倒だと言ってしまうことに違和感を覚えたのだった。

まあ、その疑問は置いておいて、マークの質問返しに対してはわざわざ考えるまでもないだろう。

「想像できないな」

クロノの答えに、マークの実力を知るものが同意の意を示す。アインハルトの正確な実力は知らないが、どんな切り札であろうとマークの竜化を超えるものは無いと、そう刷り込まれているといっても構わないような反応であった。

あまりの評価にアインハルトは頬を引きつらせ、何とか反論を試みる。

「勝負に絶対はありません」

「いや、戦いの結果は、全て必然だ」

万に一つも可能性があれば、勝利を捨つ事もできるというアインハルト。それに対し、戦いとは、始まった時に結果が決まっているというマーク。

当然、この場で答え等出る筈もなく、結果としてマークが折れることになった。

「……じゃあ、奥義を一つ覚えてもらおう」

マークの出した提案は、達成困難な条件を出して煙に巻くことが目的だろうと思われるものであったが、アインハルトはこれを呑む。

マークが言外に『これぐらいできなければ、戦う価値などない』と、

そう言っているように感じたためであった。

「あの、せっかくですから、わたしも教えて貰っていいですか？」

「あ、私も教えてほしいです！」

「手取り足取り教えるなんてことはしないぞ？」

すずかとヴィヴィオの便乗にくぎを刺すマークであったが、それでも教えないと言わないあたり、マークの甘さが垣間見える。

とはいえ一応実戦をこなしたあとであるため、奥義の見本などはまた後日に回すことになった。

「うん、」ちそうさまでした

「って、もう食べ終わったん!？」

軽く今後の予定を話し合ううちに、あつと言つ間に五人前を平らげたマークのおなかを見るが、見た目に変化はない。

だが当の本人は周りの驚愕を理解しているのかいないのか、席を立ててすずかのもとへと向かう。

「切な〜」

「え？ あ、はい。お願いします？」

あまりに短すぎる一言に戸惑いつつも、つい了承の意を帰してしまつたすずかであったが、マークがすずかの後ろに回つた次の瞬間には何を切ると言つたのかを理解した。

「あ……」

「せっかくきれいな髪だったのに……勿体ない事をしたな」

それはすずかの不揃いになつた髪であった。アースラに美容師がいる筈もなく放置されていた髪であったが、マークはそれを手にした



『銀のダガー』で揃えているのだ。

「ま、マークさんって髪も切れるんですね？」

「髪ぐらい誰だって切れるだろ？ ……まあ、妹分の髪も揃えていた時期があるし、そこから辺の奴らよりつまり自信はあるぞ」

自身の髪を褒められて少し赤くなるすずかの髪を、勿体ないと言いつつもバツサリと切り落とす。首元付近で大きくえぐられていた為、揃えるためにはかなりの量を切らざるを得なかったのだ。

「せっかく伸ばしていたんだろ？」

「いえ、剣を習い始めてからは切るうかとも考えていましたし、ちょうどよかったですよ」

「……そうか」

本気とも強がりとも取れるすずかの言葉に、マークは軽く頷くだけにとどめる。ただ、心の中ですずかの本気を軽く見ていたことを謝罪した。

「ごんなもんかな？」

「ありがとうございます…」

それから程なくして、髪を切り終わったと告げるマークであったが、残念なことにはこの場には鏡が無かった。

周りからの評価は中々の高評価をいただき問題ないとのことでありしたが、やはり気になるのだろう。鏡を求めて、アリサ達と共に食堂から離れる。

「じゃあ、俺も戻るか」

「あ、私も一緒に行くよ」

そろそろリンディも復活している頃だろうと席を立つマークに、エイミーも同行する。クロノは、念のため未来組に今後の行動における諸注意を確認しておくとのことだった。

そしてリンディのもとへ向かう道すがら、周りに誰もいないことを確認したエイミーが、マークに確認する。

「いいの？」

「何が？」

あまりに短い至極真面目なその一言に、マークは疑問で返すほかない。だがエイミーはわかっている筈だとマークを責め、ついに決定的な一言をマークに告げる。

「このままじゃマーク君……死んじゃうかもしれないんだよ？」

## 第69話 「乗馬教室」

「……………こんなもんかな？」

「……………うん、いい感じだね」

マークの一言に、リオンが手を握ったり開いたりしながら答える。あの大ゲンカから数日後、その際の約束通りにリオンはマークの研究所を訪れ、その肉体をモルフのものへと改造したのだ。

その結果は上々。リインフォースから譲り受けた機能をいくつか失ったが、その代わり肉体は安定し、個としての戦闘力は大きく向上していた。

「魔王に憑依されていた時ほどの強度は出てないぞ？」

「でも、本来の僕のスペックははるかに上回ってるよ。シグナムとウィータのコンビぐらいなら、互角に戦えるんじゃないかな？」

「肉体の性能だけ見れば可能かもしれないが……………お前じゃ無理だろ」

ただし、その本人の精神は戦闘に向いていないことは変わらず、生粋の騎士であるシグナム達相手では、一対一でだって勝てるか怪しいものである。

「そうだね。まあ、どうしようもない時以外は後方に居させてもらおうべきかな？」

「そこら辺はハヤテと相談しろ。俺は知らん」

さりげない進路相談のようなものも、マークは一刀両断にしてしまう。つい先ほどまでの敵と肩を並べることはできても、やはり好き嫌いはあるのだ。

はやてのこともあるので、その手を振り払う事はしないが、かといって好んで握り返すことはしなかった。

「私の方は、戦闘力と言う点では皆無だな」

マークとリオンの様子を苦笑しながら見ていたムルヴァが、半ばその場をとりなすように自身の変化を改めて述べる。

基本性能を大きく上昇させたリオンに対し、もう一人のモルフとなったムルヴァのスペックは、ごく一般の成人男性並みに収まっていた。

「流石に竜化できるようなモルフは作れんし、武器を使えないお前の性能あげてもなあ……………」

「わかっている。それに、イーギルの消費が少ないと言うのは、今後を思えばありがたいことだ」

そう、モルフの肉体はイーギルからできている以上、その動作はイーギルの消費によってなされる。

そして通常のモルフはイーギルを生産できないため、これからエトルリアに行く予定のムルヴァにとって、燃費は文字通り死活問題なのだ。

「よく言う……………お前なら回収も可能だろうに」

「ぶっ……………そこまですて長生きしようとは思えんよ」

元々イーギルとは、竜の持つ知識の一部である。と言うより、イーギルの知識を持つからこそ、肉体を安定させてエトルリアに送る話が出たのだ。とは言っても、この知識を自身の延命や強化に使う竜など、かつて存在していなかったわけだが……………

マークも、その返事は予想で来ていたのだろう。軽く頷き余命を告げるその姿に、特に負の感情を思わせるものは無かった。

しかし、この生き死にの話が予想外にも昨日の話に繋がってしまったのは、マークにとって予想外であった。

「だが、お前はいいのか？ このままでは死ぬかもしれないのだろうか？」

「ああ、僕も気になっていたんだ。正直に言って、貴方がそう簡単に死ぬとは思えないけど」

「……盗み聞きとは、趣味がいいとは言えんな」

ムルヴァもリオンも、表面上ではからかっているような口調であったが、その実これ以上ないほど真剣であった。

やれやれと、マークは肩をすくめながら昨日のエイミィとの会話を思い起こしていた。

「俺が死ぬって？」

「もちろん、最悪の想定ではあるけど……それ以外につじつまが合う説明が難しくくてね」

他に誰もいない廊下で向き合う二人は、片や困ったように、片や真剣な顔をしながら言葉を交わす。

「そう言っつからには、ちゃんとした根拠があるんだろうな」

「根拠と言うには説得力が薄いって言われるかもしれないけど……ヴィヴィオちゃんがマーク君のことを知らないのは、いくらなんでも不自然すぎるよ」

なのはとフェイトのことを母と呼ぶヴィヴィオは、いろいろな事情があつて引き取った娘であるらしい。その娘が、特にフェイトと関係の深いマークを知らないなんてありえるのだろうか？

「闇の欠片の時も、マーク君自身が出てきた時も、少なくとも知った顔に対する対応じゃなかったよ？ ってことは、今回の事件が貴方たちの初対面になるってこと」

「……別に、俺が忙しくて会う暇が無かったとか、この十年でフェイト達と疎遠になったとか、いくらでも考えられるだろうに」

「それ、本気で言ってる？」

「……」

現在、マークの仕事はどれも手伝いの域を出ず、例外である研究も、外部から何かしらの強制を受けているわけではない。それは今後も大きく変わることは無いだろう。

それに加え、フェイトの肉体はその三割近くがモルフのそれとなっている。そのような状態でマークと疎遠になるのはありえない。

「もちろん、あえて悪い予想を立ててるって事もあるから、杞憂に終わることもあるだろうけど……軽視するには、ちょっと不吉すぎると思わない？」

管理世界、いや、それ以上の枠組みから見ても、マークと言う存在は稀有なものだ。そんな存在が、身内と言つべき少女にすら知られていないなんて、何かあると言っているようなものだ。

だがマークは、そんなエイミィの不安に対し、諭すように言う。

「確かに、これから何かしらの事件が起きるだろうって言うのは、本音を言ってしまうえば俺も同意見だ。それにより、俺はヴィヴィオ達と出会えなくなるって言うのも、間違っていないだろう」

まずは、エイミィの悪い予感を肯定するような言葉を連ねるマーク。だが、この言葉には続きがある。

「だがその事件はかなり範囲を限定されたものだ。回避はそう難しい事じゃない」

「え、なんでそんなことがわかるの？」

マークの予想に、思わず疑問の声を上げるエイミィであったが、マークはさも当然のようにその疑問に答える。

「大々的な事件で俺が死ぬようなことがあれば、管理局……いや、管理世界だってただじゃすまないだろう？」

「あ……」

神竜であるマークが死ぬような大事件が起こった場合、その被害はマークだけに収まることは無いだろう。そうであるならマークが死んだのは、マーク個人を狙った罠にかかった可能性が高い。

「管理世界を巻き込まずに、俺を始末しようと思ったなら相当手段は限定される。そんな限定された状況を回避するのは、そう難しい事じゃない」

よつは単独行動をしなければ、それだけでいいのだ。

「……それだけ？」

「ああ、それだけだ」

事実、もし今回の一件が無ければマークはかなりの頻度で単独行動をしただろう。その危険を潰したのだから、今後マークが謀殺される可能性はかなり低くなるだろう。

それを理解したエイミィは、懸念が完全に解消されたわけではないが、とりあえずこわばっていた肩をなでおろすのであった。

「……どうもいつも、そんなに俺のことは信用出来んのか？」  
「信用の問題ではないだろう。ただ、心配しているだけだろう」

先日のお話を思い起こしたマークの苦笑に、ムルヴァは真剣に言い返す。確かに、何らかの罠によってマークが命を落とす可能性は限りな

く低くなっただろうが、それでも可能性が無くなったわけではない。

「私も、簡単に死ぬつもりは無かった……それでも、一人娘を残して死んでしまったんだぞ？」

その一言でリオンが少しダメージを受けたようだったが、二人は完全に無視する。そう、いくら竜が強かろうと、生き物である限り殺す手段が無いわけではないのだ。

「世には竜殺しというものもある」

「これのことを言ってるのかな？」

だが、そんなムルヴァの不安を蹴散らすように向けられた切っ先が、その想いを打ち砕く。

「……そうか、それがお前の自信の源か」

「ただの剣じゃなさそうだけど、ひょっとして……」

それを見てマークの楽観的な姿勢に納得の意を示すムルヴァ。その様子からその剣の正体をリオンが予測する。

『「神剣ファルシオン」？』

「そう、神竜王の牙を鍛え上げ造られた、至高の剣だ」

マークの持つ武装の中でも、最強の一振りと言っても過言ではない、まさに神器。これと肩を並べることができるのは、同じく神竜王の英知が詰まった『聖書ナーガ』か、暁の女神の加護を得た『神剣ラグネル』ぐらいの物だろう。

「それに加えて神竜石もあれば……なるほど、たとえ全盛期の魔王相手取っても、そう簡単には死なないだろうね」



「そついう事だ」

剣の正体を確認したりオンが、深いため息とともに納得する。今まで使っていた双聖器や神将器だって神器と呼ぶにふさわしい力を持っていたが、この剣の前ではそれらの威光もかすむように感じられたためだ。

だが、この根拠を容易に人に話すわけにはいかない。神の力の一部を宿すこの剣は、人にとって強すぎる力なのだから。

「あとは、彼女らの存在を守るだけか……」

「どついう事だ？」

マークの自信の根拠をしっかりとリオンのつぶやきに、マークが首をかしげる。そう言えば講義の時間にマークはいなかったことに思い至った二人が、キリエ達の話したタイムパドックスについて語ることになった。

「ふうん、時間移動の解釈にそんなものがあつたのか……」

「君は別の解釈をしているってことかい？」

のんきなマークにリオンが問いかけると、当然のごとく答えが返ってくる。

「あの子たちが来た時点で、もうあの子たちの居た世界とこの世界は別の世界だろ？」

「……なるほど、そついうた考えもあるのか」

マークの考え方は、並行世界というものがわかりやすいだろう。キリエ達のように、今と未来が繋がっていることを前提とした考えとは、全く違う考えであった。

「それならばタイムパラドックスの考えも無視できるな」

「ほら、納得したのならさっさと行くぞ！ せっかくの春休みに、いつまでもこんなトコにこもっていたくないんだ」

「ああ、そう言えばバニングス家の所有するコテージに遊びに行くと言っていたか？」

一通り話が終わったと判断したマークが、急に二人を急かし始める。今回の事件が無ければ、バニングス家の馬を借りて一日遠乗りモドキをする予定だったのだ。

「前にシノブに遠乗りがしたいって言ったら、アリサの家で馬を所持しているって聞いてな」

そこでフェイト達も参加を希望し、みんなで乗馬を楽しむことになっていたので。

「人数が増えただけで、予定通り行われるんだろ？」

「もう始まってはるはずだ……だから、さっさと出るー！」

再びマークは二人を急かし、研究所から蹴り出す。その姿に自分たちの子供のころを思い出したのか、ムルヴァが笑みを浮かべていたが、幸いなことにマークは気付くことなく、スムーズな移動となった。

そしてそのコテージでは、子供たちの乗馬教室が開催されていた。

「や、ほ……これは思ったより」

「とっと、そうだね、高く感じるかも」

「そうだな、だが馬とは賢い生き物だ。そう怯える必要はない」

さっそく乗せてもらったのはとフェイトが指導者役のシグナムへ感想を述べる。ただ馬の上に乗っただけだが、それでも普段と違っ

た景色に高揚するのがわかった。

「ウチは維持が面倒になって引き払っちゃったから、アリサちゃんのとこが持ってた助かったわ」

「別に私が何かしたわけじゃないですから。それに、ちゃんと対価はもらったし」

馬場の隅で忍とアリサが少しだけ話をするのは、今回の乗馬教室を開いた経緯であった。マークが忍に相談し、すずかを通してアリサにこの場を提供してもらったのだ。

本来だったら保護者として忍からアリサの父に話を通してという、面倒なプロセスを飛ばしてもらったのは、実にありがたい事であった。

「事情を知らない人が居たら、ちょっと話にくい話題も出るかもしれないから……それはともかく、対価って何の話？」

「ちよっと、マークさんの耳を触らせてもらっただけですよ」

「それはまた……」

羨ましいなどと、忍も思ってしまった。だがそれも一瞬で、子供たちがマークの耳を触る様子を想像したら、やっぱり同情すべきかと思いを直した。

そんな会話をしていた二人の耳に、ちよっとした歓声が聞こえてきた。

「ほえ、すごいやん、アインハルトさん」

「うん、かつこいいですよー！」

「いえ、そんな……」

「謙遜する必要はないぞ」

知識として知ってはいるが、経験はないと言っていたアインハルト

が、見事に乗りこなしていたのだ。それにはやてとヴィヴィオが感嘆の声を上げ、ザフィーラも素直に感心していた。

(記憶だけとはいえ、ずるをしているようで心苦しいですね……)

霸王としての記憶の中に、戦場を騎乗して駆けた記憶があったからこそその芸当であったため、正面切つて褒められると肩身が狭い思いであった。

そんな息苦しさのため、すこし走りたいと言つてその場を離れてしまったのは、仕方のないことだろう。今回のことに加えて、他にもちよつと落ち込むことがあったこともある。

「……あの時は、少し冷静じゃなかったですね」

それはマークに手合わせを挑んだことだ。あのあと少し落ち着けば、性急かつ強引な申し出であったと、そう思えるようになったのだ。もちろん、そうしてしまった理由もわかっている。

「……強かった」

それは本人ではなく、コピーとの戦いであったが、然したる問題は無いだろう。そして、そんな相手と戦うには、今しかないのだと思つて焦ってしまったのだ。

「……」

おそらく、あらかじめ準備されていたコースなのだろう。なんの障害もない道を走らせるアインハルトは、気持ちよく走る馬の背で物思いにふけていつていた。

そして、アインハルトがそんな自己嫌悪に陥っているなんて思いもしないマークは、やっとみんなと合流した先で、久々に見る馬に若干

興奮気味であった。

「おお、なかなかいい馬だな！」

「わかるの？」

「まあ、軍馬とか結構見てきたからな」

もちろん、子供たちも一緒という事で、気性の穏やかなものたちを選別しているだろう。軍馬などの戦場を駆ける馬を見てきたマークには、いささか物足りないものであったが、それでも毛並などからよく世話をされた、御しやすいいい馬であることは容易に見て取れた。

「なんや、マークさんにできないこと探す方が難しいんとちゃうかな」  
「？」

「いやいや、それは無いから」

中でも最も馬力のありそうな馬に目を付け、それに寄り添うマークにはやてがかけた言葉は、本人によって否定される。

「どれもこれも、山奥の暮らして必要に迫られたり、行軍の最中に不自由して身につけたものだから……戦友と接する流れで身につけたモノもあるが、所詮素人のその場しのぎだ」

「実際、スズカの髪も専門家に仕上げをしてもらったみたいだしね」

「お前が言っな」

リオンが付け足した一言に突っ込むマークであったが、事実その通りだと確認する。

すずかの髪は、数日前よりさらに洗礼されたものになっていたのだ。

「……私には分らんがな」

「そもそも、お前は人の顔がすべて同じに見えるタイプだろ」

ムルヴァのフォローのようなものも、人化を使うにもかかわらず、人間は全て同じに見えると言っていた過去を知っているため効果は無かった。

さすがが申し訳なさそうにしていたが、マークとしては気にするなとしか言いようが無かった。

「まあ、別にそっちの腕は誰に劣ろうが構わんよ。ただし、こっちの方は誰にも負けるつもりはないがね」

「大した自信ですね……」

そつ言つて拳を握るマークであったが、正直に言つて話を逸らす程度の気持ちしかなかった。だから、この話に食いつかれたことは意外と言つて他無かった。

それは、コースを一周して帰ってきたアインハルトの一言であったのだが、それに対しマークは少し困つたように笑みを浮かべる。

「うーん……自信って言つのはちょっと違つかな？」

「ではなんなのですか？」

「義務感……と言つのが一番しつくりくるな」

その答えは、誰にとっても予想外であつたに違いない。ただ、アインハルトにはその答えが少しだけ共感できるような気がした。

「……強く、在らなければならぬ」

「一族の誇りと、戦友の名誉のために……な」

思わずつぶやいてしまった一言を、マークは当然のように補充する。その理由は、アインハルトの理由と酷似していた。

霸王流が最強であることを、証明するという誓い。

一族と、戦友たちは強かったという事を体現するという誓い。

だが、マークはそのような共感に気付くことなく、興味は周囲へと移っていた。

「そう言えば、キリエ達は来てないのか？」

「二人はアースラで術式の調整をするって」

「トーマ達は、念のためもう少し療養しているとのことだ」

周りを見渡しながら疑問を口にしたマークに、少し離れたところに居たエイミィとクロノが応える。どうやら、思ったより大きな馬に少し及び腰になっているようであった。

「……まあ、普段の生活を見ると、動物と接する機会なんて皆無みた  
いだからな」

「まったくもって反論の余地が無いわあ〜」

「……」

納得と言った感じでうなずくマークに、苦笑しながら白旗を上げるエイミィであったが、どうやらクロノはそうはいかなかったようだ。意地になって馬の方へ近づいて行くクロノを、マークは面白そうに眺めていた。

そんなマークを見ながら、さすがとフェイトが静かに驚きの声を上げる。

「……マークさんが戦う理由、初めて聞いたよ」

「うん、でも……ううん、私も、マークの相方だって自信持って名乗れるように、頑張らないと!」

さすがはともかく、フェイトだって今までは惰性と聞いていたのだ。それも当然だろう。現在にマークの戦う理由は無かったのだが

ら。

そんななか明かされたマークの戦う理由であったが、フェイトはそれ以外にも理由があるのではと思う。ただ根拠は無いので、この場で口にはできなかったが……

そんなもやもやを抱えるフェイトとは違い、すずかは力強い笑みを浮かべる。

「思い出が相手か……強敵だね」

何はともあれ、過去の思い出に勝るとも劣らない今を用意しなければならぬ。すずかは改めて気合を入れ、ひとまず乗馬の練習へと意識を移す。いつかマークと並んで走るため、もちろん、マークにアドバースをもらう事を忘れなかった。

「そう言えば、この世界には天馬はいないのか？」

「少なくとも、伝説以外で地球上に存在するって話は知らないわ……他の世界はどうなの？」

「第61管理世界に、そのような存在があると聞いたことがあったよっな……」

「でもあそこ、保護指定世界じゃなかったですか？」

ふと思いついたかのようなマークの質問に、アリサが応えアインハルトとヴィヴィオが続く。急にどうしたんだと、小首をかしげる一同に、マークはまたとんでもないことを言い出した。

「いや、スズカが剣を続けるのなら、やっぱり飛べた方がいいかと思っ  
て」

「……えっと、別に飛べない魔導師もたくさんいるよ？」

おそろく騎乗するすずかを見て思いついたのだろう。その唐突な提案を、やんわりと諫めるフェイトであったが、ツポにはまったのか



マークはなんだか乗り気になっていた。

『マーに・カティ』も強力だが、そうになると槍も教えた方がいいかな？ 流石に『レギンレイブ』は重すぎるか？」

「じ、実物を見てみないと何とも……」

なんだか、求められるレベルが桁で上がったことを感じたさすが、ひきつった笑みを浮かべる。浮かべながらも、これはチャンスかもしれないと、気付いた。

（今まで私に教えることに対して消極的だったマークさんが、今後のことを考えてくれてる？）

それは、この先に訪れるであろう苦難をはるかに上回る歓喜であった。すずかは、ようやくなのは達の居る領域に片足を踏み入れたのだと、そのことが、例えようもなくうれしかった。

（シノブには悪い気もするが……ここまで決意が固いのなら、切り札を身に付けさせた方がいいだろう）

有象無象の雑魚ではなく明らかな格上と戦い、それでも諦めない胆力は、しかるべき評価をすべきだとマークは判断した。

それに加え、未来におけるマークの死の可能性もある。自分の周りの人間を、可能な限り強化する必要性を感じたのだ。いくら危機を回避する自信があっても、手を尽くさない理由は無い。

（あとは……保険だな）

考えたくないが、万に一つ、万全を尽くし迎え撃ってなお、危機を回避し損なった時、その時間の果てがヴィヴィオ達の居る未来なのだとしたら……

(なのは達でも対処できない一大事……その可能性は、決してゼロじゃない)

そう、マークは未だに、ヴィヴィオ達が偶然この時代に来たという事を疑っていた。そして、何か理由があるとしたら、未来にいない自分に会いに来たのだと、そう信じていた。

(奥義を一つ……可能なら、二つは覚えてもらいたいもんだ)

みんなは考え過ぎだと笑うかもしれない……それでも、マークは不安を消し去ることはできなかった。未来から来た子供たちと言うのは、マークにとってトラウマと言っていいものであったのだ。

(考えるな！ ヴィヴィオたちの瞳に、絶望なんて映っていないことぐらいわかるはずだろ！)

自分も含め、みんな、みんな死んでいった。そして、それでもなお人々の希望であり続けた戦友の子供たち。

「あの、マークさん？」

「大丈夫？ なんだか辛そうだよ」

「……いや、ちよつと昔を思い出しただけだ」

そんな光景を思い出していたのが、表に出たのだろう。すずかとフェイトが心配そうにしているのを、気落ちしているのを自覚しつつも大丈夫だと答える。

「せっかく広い場所にいるんだし、もう少ししたら前回言っていた奥義でも見せようか」

「……無理しないでね？」

フェイトは何かを察したのか、それだけ言っただけでずかを連れてその場を離れる。そのことに感謝しつつ、マークは気持ちを落ち着けるためにも、無心で馬を駆り続けた。

## 第70話 「奥義」

「さて……どうしようか？」

「どうしようって……奥義を教えてくださいませんか？」

ある程度乗馬を楽しんだ一同に、マークが奥義を教えることになったのだが……事態はさっそく暗礁に乗り上げていた。

「いや、俺って人にものを教えた経験がほとんどなくてな……どうやって教えればいいのかと悩んでいるんだ」

「よくまあそれで、奥義を教えるなんて言えましたね」

「とりあえず、アレだ、見て学べって奴で行こう」

アインハルトの呆れたような一言に、マークは視線をそらしつつ妥協策を述べる。言った本人だって、見て習得できる程度の技ではない事を理解しているのだろう。

今回奥義を教わるのはアインハルトにヴィヴィオ、すずかの三人であるが、だからと言って他の面子を追い出すようなことはしなかった。

「……見せてもいいのですか、と言うより、本当に教わっていいのですか？ 奥義なのでしょう？」

「構わないわ」

奥義、秘伝の技をほぼ初対面の身で教わるといふ事の異常さも、マークにとっては些細な事であるよつであつた。

と言うより、これは奥義に対する認識の違いだろう。アインハルトにとって奥義とは、長い修練とひらめきによって生み出される唯一無二の技であるのに対し、マークにとっての奥義は、戦場で生きていけば自然と身に付く技でしかない。

「とりあえず、ヴィヴィオとアインハルトに教える奴だな」

「わたしはどうなるんです？」

「スズカには別の奴を教える。無駄な事はさせたくないしな」

「……やっぱり、習得できないことが前提なのですね」

マークの最後の一言に、思わずアインハルトが噛み付く。しかしこれはマークが悪いとしか言えないだろう。それだけ、この一言にはあらゆるものが足りてなかった。

「ああ、違っつて。確かにスズカじゃ習得はできないだろうけど、二人が習得できないものだとは思ってない。今回は別に習得しても使わない技を覚えさせてもしょうがない、って意味だよ」  
「……そうでしたか。それは失礼しました」

確かに、戦闘スタイルに合わない技を苦勞して習得しても意味はない。前回の印象が印象だっただけに、どうも疑い深くなっていけないとアインハルトは自省する。

「それじゃあ……リオン」

「ああ、的だね？」

マークの言葉に、観客となっていたリオンが召還を行い、的とする。だが、その的にされた存在に、思いのほか注目が集まる。

「人型？」

「確かこれって……亡霊戦士？」

「ネクロマンサーの魔法としては、これ以上ふさわしいものは無いでしょう？」

すすずかの戸惑うような声に、見覚えのあったエイミィの声が重な

る。それは、以前マークが管理局に見せたそれと同じものであり、より正確には、こちらの方がオリジナルである。

「……流石に素手で見本と言っわけにはいかないが、まあ見ている」

そう言ってマークが構えたのは槍。銘は『月光』と呼ばれるものであった。対して、亡霊戦士は手に持っていた盾を構え、マークの攻撃に備える。

そして、一撃は放たれた。

碧い軌跡を残し放たれた一撃は、槍と同じ名を持つ『月光』の奥義の一撃。亡霊戦士の構えた盾を、着ていた鎧を薄紙のように貫き、その胸に大穴を開けた。

「……防御貫通、ですか」

「うっわぁ……」

アインハルトとヴィヴィオが慄く中、亡霊戦士はその形を保てなくなったのか、砂のように崩れて消える。

ちよつとだけ、この技を取得する自信を失いそうになったが、アインハルトはふとあることに気付いた。

「この技……空破断と同じですか？」

「ん、ひょっとしてできるのか？」

防御を破壊すると言っ性質から、自身の持つ技と似ていると感じたアインハルトの一言を拾ったマークが、やって見せるとばかりにその手を構える。

「バリアジャケットもなしと言っのは、危ないですよ？」

「あゝ……リオン」

「了解」

別に問題ないと言いかけたマークであったが、無理やり飲み込み、再びリオンに的を用意させる。

そこで実演された一撃は、亡霊戦士の防御を確かに貫いて見せた。

「へえ……防御突破と言う意味では、確かに同じものだな」

「それじゃあ……」

「ああ、もう一つの方も見せようか」

「……え？」

今度は剣を用意しながらそう言ったマークに、アインハルトは拍子抜けした顔をする。

だがそれも仕方のないことだろう。マークが見せた一撃を、アインハルトは実演して見せたのだから。

「さて、こっちは剣での実演になるが……」

「待ってください！ 今見たとおり、あなたが披露した技はもう習得していましたよ……」

「ああ、だから次に行くんだろ？」

噛み合わない会話をしながら、二人は同時に首をかしげる。そのまま硬直してしまった二人に、苦笑を交えつつフェイトが声をかける。

「マークは、一つの奥義を分解して披露していたんじゃないかな？」

その一言に、アインハルトたちが確認の視線をマークに向け、マークは相違ないとばかりに頷いて見せた。

「最初に言つべきだったな。今回教える『天空』は、防御を貫通する『月光』と与えたダメージを吸収する『太陽』の複合奥義だ」

「……ずいぶんと、物騒な技だねえ」

マークの説明に、エイミィが素直な感想を述べる。それぞれ単体でも恐ろしいと思える『防御貫通』と『体力吸収』を複合するだなんて、物騒としか表現できなかったのだろう。

「まあ、こいつは他の奥義と比べても別格だからな」

「それを人に教えてよかったの？」

「万に一があれば、ちゃんと責任は取るぞ」

肩をすくめながらそう言うてのけるマークに、僅かな気負いも見られない。それは万に一つなどあり得ないと言っているようで、実は物騒なこの一言も、言及されることなくスルーされることになった。

そうして構えられた剣の銘は『太陽』。その一撃は、紅い軌跡を残し、的を両断して見せることとなるが、効果のほどは実感できなかった。

「詳しい事は、この奥義書を参考にしてくれ」

「用意がいいですね」

「俺が書いたもんじゃないから、汚すなよ？」

「わかってます」

元々はとある王国で四駿と呼ばれた英傑の持ち物であり、そのことがこの書の価値を保証していると言って過言ではないだろう。

「まあロードの資質はあるし、習得は不可能ではないだろう」

「習得条件ですか？」

「そう……まあ、カリスマとでも言えばいいかな？」

聖王、神将……戦場の英雄たちでも、さらにその一握りしか習得できなかつた奥義であったのは間違いないだろう。

それでもなおこの二人にその奥義を教えたのは、偏にヴィヴィオの



存在があつたからだ。

(血統は違えど、聖王……か)

カリムが話した聖王の特徴を色濃く宿した少女に、どこか天真爛漫なシスターを思い起こさせるヴィヴィオの存在が、マークの背を押したことは間違いないだろう。決して口にはしないが、アインハルトはそのおまけでしかなかった。

「さて！ それじゃあ次はスズカだな」

「よろしくお願ひしますー」

奥義書にかぶりつく二人を横目に、マークは後回しにしていたすずかに向き直る。それに気合十分に答えたすずかであったが、残念ながらすずかの期待は、半ばほど裏切られることになってしまう。

「スズカには奥義はちょっと早いから、今回は別の技だな」

「……はい」

いくら身体能力が常人より高かろうと、剣を握って未だ一年に満たないである。魔物との実践もあり、とんでもない速さで練度を上げたが、それでもまだ奥義を扱うには早かった。

「それで選んだ技だが、やはり優先すべきは『武器破壊』だろ？」

「ッー はい、お願ひしますー」

一度は落胆させられたが、今回マークの持ちだした技は、ある意味並の奥義よりもありがたいものであった。

再び跳ね上がった表情は、マークの狙い通りのものである。これだけやる気に満ちていれば、技の習得はさらに早くなるだろう。

「じゃあ、さっきみたいにとりあえず手本かな？」

マークが言葉と共に軽く手で合図すれば、リオンが無言での用意をする。その武装は、切れ味などを度外視してつくられた頑丈なだけの鉄の斧。

対するマークは、『マーニ・カティ』と同系統の剣である『ヴァーク・カティ』を構え、振るう。

「……上手くできてよかった。正直に言って、技を重視した剣技は苦手だ」

「ごとりと、とマークの一閃から数瞬遅れて響いた音をきいて、ようやく今の一閃が武器破壊であったことに気付かされる。

「……武器破壊と、防御貫通の違いが分からなくなるような一撃ですね」

「武器と防具では、破壊の難易度は桁違いだぞ？」

先程の『月光』の一撃と比較したさすがに、マークは少し呆れながら訂正を加える。

攻撃を防ぐために創られた防具を破壊することは、思いのほか難しい。それに比べれば、攻撃することが目的である武器の破壊は、数段易しくなる。

そんなマークの訂正に少し顔を赤らめながらも、斬鉄と言うあるいは奥義に匹敵する一撃を見せられたすずかは、剣を持つ手に力を込める。

(マークさんが『難しい』って思うような技を見せてくれたってことは、期待されてるってことだよ……頑張らなくっちゃー)

ヴィヴィオ達と同じように、詳細はこれを見ると『武器破壊の書』を

渡されたはずかは、なお一層の気合いを入れる。

そのやる気十分な表情にマークは満足げに頷き、そう言えばと思いを巡らせる。

(あれから大分経ったけど……『ソール・カティ』はまだ完成しないのか?)

以前依頼した『ソール・カティ』のデバイス化であったが、まだ完成の連絡は無かった。ただ、マークの依頼を後回しにしているとも思えないので、おそらく何かしらの問題が起きているのかもしれないと、あたりをつける。

(今度、差し入れにでも行ってみるか……)

こうして、マークは第四技術部への訪問を決めた。もちろん、ただ差し入れに行くだけなので、アポイントメントを入れるつもりは欠片もなかったことを付け加えておく。

そんなことを決めたマークに、声をかける者がいた。

「マーク、私も何か技を教えて貰っていいかな?」

「フェイト?」

それは、なのはのスターライトブレイカーのような切り札を持たないことに対する、フェイトの焦りだった。

かつての切り札であるフェランクスシフトはすでに破られ、それ以降は自信をもって切り札だと呼べるようなものが無かったのだ。

「結局、マークの強化に頼り切った戦いをしちゃってるから、自分の武器が欲しいの」

「武器……ねえ」

確かに最近のフェイトの戦闘は、マークの強化によって成っている部分も多かった。だからと言って、フェイトが成長していないわけではないし、武器が無い事にはつながらない。

「フェイトの武器は速度だろ？ 攻撃力だつて低いわけじゃないし」

「でも、劣勢時の一発逆転の手札は無い」

「そんなもん、持ってる奴の方が稀だつて」

だから、これは劣等感なのだろう。すぐ目の前で急激に力をつけたのはが眩しくて、眩しすぎて、どうしようもなく求めてしまうのだ。

「……そうだな、少し、見繕ってみよう」

「うん、お願い」

その想いを危ぶみながらも、マークは否定することができなかった。今は無理だと諭すことはできたが、未来においても無理だと告げることが、マークにはできなかったのだ。

マークがわずかな苦みを感じながらも平和な日常を謳歌していたそのころ、辺境の世界にある研究所で、ある生物が生成されていた。

「……順調、と言っているのでしょうか？」

「ふむ、まあ今のところは、と言つ冠詞がつけば、現状をそう表現しても構わないんじゃないかな？」

助手の少女の不安が含まれた言葉に対し、白衣を着た青年の言葉には何の感慨も含まれてはいなかった。いや、そこは確かにある感情が込められていた。

「正直に言って、ここまで順調に事が進むとは思っていなかったがね」「はい……」

それは戸惑いであろうか……確かに、今回青年が、ジェイル・スカリエッティが行なっている実験には先例があり、ある程度予想ができる事ばかりだったとはいえ、現状は順調すぎたのだ。

「ただの人ではない……竜と人の子を創りだすのだから、もう少し想定外の事態が起こると思っていただがね」

「数値的には、確かにただの人の子でないのですが……」

そう言って二人は、目の前のシリンダーに視線を移す。そこに満たされた溶液の中には、乳児、いや、既に幼児と呼んでもよい人の形をしたものが浮かんでいた。

「成長促進は順調……このペースであと一年もすれば、実戦に耐える年齢まで成長するだろうね」

「魔力のみを見れば、すでにSSランクを超えていますからね」

「本来の資質に加え、遺伝子操作もしているのだから、それぐらいはしても構わないと困るよ」

「それもそうでした」

そもそもこの検体は、スカリエッティが理想の存在を作ってみようと思ったことに端を欲する。幸いと言うべきか、彼のクライアントがある対象の血液を入手していたこともあり、即座に過去の計画を掘り起してプロジェクトは開始されたのだ。

「元々のクライアントの意向は彼に對抗できる兵器を作る事なんです  
が大丈夫なのですか？」

「これが完成すれば、十分彼とも戦える存在になるだろう？」

「確かにそうでしょうが……」

マークを通して竜を恐れているだろうクライアントが、これを受け

入れるとは到底思えなかった。とはいえ、竜を制御できる可能性があると知れば、手のひらを返すこともあるだろうと少女、ウーノも無理矢理自身を納得させる。

そして、彼女はもう一つの疑問を口にする。

「それにしても……どうしてこうなったのでしょうかね？」

「ああ、てっきり竜の形で生まれるものだと思っていたが……」

「……それもありますが、私が言いたいのはこの子が雄性体ではなく、雌性体であることに対してです」

「ああ、それは私が弄ったからだよ」

ウーノの疑問に、スカリエッティは当然のように答える。

「現状、ナンバーズは全て女性なのは知っているだろう？　ならばそ

こは統一すべきかと……何だね？」

「……いえ、何でもありません」

いつもと違う視線を感じたスカリエッティがウーノに尋ねるが、その時には何事もなかったような顔に戻ったウーノが居るだけだった。

「……まあいい。とりあえず、彼女は順調に成長しているわけだし、そろそろ竜人にふさわしい武器を用意せねばな」

「はい、サンプルとしましては、彼が研究所を構える世界から斧を回収しています」

「ああ、もちろんそれは知っているよ。ただ、それに多少の改造を施すだけじゃ芸が無いとは思わないかい？」

そう言ってほほ笑むスカリエッティは、まるで新しいおもちゃを自慢するように笑みを深め、宣言する。

「彼の持つ武器、そのほとんどがロストトギア級であることを思えば、

この程度で満足するわけにはいかない……当然、私でさえ二度と再現できないような、最高の武器を創って見せるさ！」

その宣言は、すなわちロストロギアを、否、新しい神器をこの世に創り出すという事。そして、その危険性を知る者はここに無く、止められる者もまた、いなかった。

## 第71話 「二度と呼ばれない名」

「……ってことは、あれか？ 完成は難しいってことか？」

「誠に申し訳ない事ですが……はい、その通りです」

マークがふと思い出した『ソール・カティ』の一件であったが、連絡が無いことで想像できた通り、未だ完成は遠いどころか、現状不可能と言う状況であった。

「……まあ、精霊が改造を拒否したのは、そこに思い至らなかった俺が悪かったんだと思う。だが、なぜ判明した時点で連絡してくれなかった？」

「最初はレプリカを用意しての実験をやったんで、それにより発覚が遅れてしまって……それに、こちらも技術者としての意地がありましたから」

第四技術部のマークに対する窓口を押し付けられたマリエルは、申し訳なさそうに隈ができた顔をゆがめる。

マークとしても、試行錯誤していたという事なら、連絡が遅れたことも仕方がないかと思う一方で、精霊が拒否した事について、考えを巡らせていた。

(担い手に都合の良い形状になることを、剣が拒むとはなあ……)

ちなみに、実験作だと渡されたレプリカは、なるほど形状は全く同じものであった。

「一般的なベルカ式デバイスの素材を使った一品ですので、信頼性と汎用性はピカイチですよ？」

「確かに悪くは無いな」



受け取ったマークの見立てでは、一級品には届かずとも、正規軍に支給できる一品である。ただ、武器としての性能では、『ソール・カティ』はもちろん、すずかに渡した『マーニ・カティ』にも届かなかった。

「悪くはないが……」

「はい、わかっています。それはあくまで『ソール・カティ』をデバイス化した際の、バランスなどを見るためのものですから」

もちろん、かといって手を抜いたわけではありませんが、などと付け足しながらも、本命となるせめてもの成果を取り出す。

「これは？」

「えっと、簡単に言えば、後付け型のカートリッジユニットです」

それは、『ソール・カティ』の鏢から、刃の裏側である峰にかかる、マークの拳より一回り大きいユニットであった。

「剣すべてをデバイス化できないなら……と、作ってみたんですけど、どうしても通常のデバイスより安全面に劣ってしまって……」

「危険なのか？」

「使用者ではなく、対象者への安全が確保できないんですよ。もともと、ベルカ式はミッド式に比べて、ダメージコントロールが難しいですから」

マークがその言葉を聞き、シグナムのレヴァンティンを思い出し、納得する。そして、その程度のデメリットならばと、確認を進める。

「もしそれを使用した際、管理局の法には触れるか？」

「うーん……所持、使用については法には触れないけど、普通のデバイ

スと同じようには使えないですね」

確かに法には触れないが、例え局員として使用しても、一定以上の傷を負わせてしまえば始末書は免れないだろう。ましてや一般人が使うとなれば、一歩間違えれば犯罪者である。

だが思い出してほしい。これをマークが渡そうと思っっているすずかは、人への直接攻撃を禁忌としているため、実質問題にならないのだ。

「念のため、使い勝手を確認したいな……許可は必要か？」

「あ、テストは元々必要だったので、同意書にサインさえもらえれば手続きはこちらで済ませられます」

「じゃあ、頼む。……同系統の剣なら、互換性があるよな？」

「はい、こちらで確認できているものなら『マーニ・カティ』でも使用できます」

それを聞いて、今マークの手元にある『ヴァーク・カティ』でも大丈夫だろうとあたりをつける。問題は試験場所であるが、どこかの施設内でただ的を相手するのでは信頼性が低く感じてしまう。

「……グレアムあたりに、どこかに害獣でもないか聞いてみよう」

「……まあ、より詳細なデータが取れるのであれば、文句をつけるのも無粋というものですよね」

試験と言うより、もはや実戦であるという突っ込みをマリエルは胸の内にしまい込む。それに気付いているのかいないのか、マークはユニットを片手に同意書の書類にサインをする。

「……はい、これで問題ありません。それじゃあ、試験日が決まり次第連絡します」

「ああ、任せた。それと、最後に……」

その言葉に、思わずマリエルの頬が引きつる。前はこれと似たような状況で、『ソール・カティ』を任されたのだ。今回は一体どんな難題をよこされるのかと、警戒してしまったのは仕方のないことだろう。

だが、今回は特に難題を残されるようなこともなかった。

「差し入れだ。頑張っているのはわかったから、倒れないようにしっかり休んでおけよ」

無理をしているのが、一目瞭然だったのだろう。気遣う声と共に渡されたのは、翠屋のクッキーと、インスタントの紅茶であった。

「あ、ありがとうございます……」

警戒していた分、拍子抜けしたマリエルが感謝の言葉を伝える間に、マークは席を立ってしまっていた。

マークが本局へ行ってそんな交渉をしていたころ、アースラの一室ではとある莫大な術式の試算が大詰めを迎えていた。

「えっと……ここがこうなって、あそこがこうだから……」

「目的の地点が……ああ、これが邪魔になってるのねえ」

アマタとキリエ、それぞれが確認している術式は、帰還のための術式、すなわち時間移動魔法である。

だが、この部屋で術式の改竄を行っていたのは、二人だけではなかった。

「はい、最後の目的地の座標を見つけたから、確認の方をお願いできるかな？」

「りょーかい！」  
「助かるわぁー！」

そこにいたのは、夜天の書の元管制人格代理であるリオンであった。

なぜ彼がこの場にいるのかと言うと、彼の持つ術式により、目的地となる三点へのルートを確立しているのであった。

「ホント、私たちだけなら、もっと時間がかかっていたでしょうね」  
「それでも一週間も変わらなかったと思うよ？ まあ、交友を深めていた彼女たちにとって、この時間短縮がよかったのかは知らないけどね」

座標を受け取ったキリエの感謝の言葉に、リオンは苦笑しながら答える。

そう、例えばアインハルトあたりから見れば、マークと一手交える前の帰還は、否ではないが、是ともしにくいだろう。

「私たちにも目的はあるし、そこまで面倒見きれないわよ」  
「まあ、僕たちも、君たちが帰ってから準備しないとイケない事が多いしね」

呆れたように言うキリエに、リオンが一部肯定の言葉をかける。その言葉を聞いて思い出すのは、リオンが初めて協力を申し出たときのことだ。

『僕も未来視が使えるし、邪魔にはならないと思うよ。』

その言葉は、未来を変えることを是としない二人にとって看過できないものを感じたが、彼の言葉には続きがあった。

『まあ、未来が見えたからって、何ができるってわけでもないけどね』  
それは、立ち向かい折れたものにしかわからない諦観。未来を変えようと足掻きに足掻いて、それでも届かなかったという絶望であった。

そのような思いを聞いてしまえば、もはや対処に動こうなどと欠片も思えなかった。

(まあ、元々そう言う技能を持っていたというのなら、過剰な干渉をすべきではないのでしょうか)

(問題となるのは、未来から持ち込んだ情報、だからね)

一度は危機感を覚えたものの、干渉するほどでもないと考え直した二人は、リオンの協力を受け入れたのであった。

そして、協力という事で、もう一人の協力者のことに思い至る。

「そう言えば、ムルヴァさんは大丈夫なんでしょうか？ あの場合ではエトルリアに来て下さるといふ事でしたが……」

「流石に、約束を反故にするようなことは無いと思うよ？」

ふと不安に襲われたアマタを、リオンは自身の知識に基づき応える。

「竜族は、人と違って基本的に長生きだからね。嘘をつくなんて信用を失うようなことを、そう考え無しにやるような存在じゃないよ」

「いえ、あの、疑っているとかいふ事じゃなくてですね……」

思わず否定してしまったアマタであったが、不安に思ってしまったのは事実だ。そのことを恥ずかしく思い、身を小さくするアマタに、リオンはわかっているとばかりに頷く。

「降って湧いた幸運を、つい疑ってしまつ気持ちはよくわかるよ。まあ、疑ったところで、何ができるわけでもないんだけどね」

「それは……そうですね」

これ以上悩んでもまったく意味がないと思い知らされた以上、ただ無心に作業に身を入れる。

ただただ無言で、延々と続いた作業は、そうして最後の時を迎えた。

「お、終わった〜……」

「流石に三点同時転移はきつかったわねえ〜」

「お疲れさま」

ようやく総ての工程を終えた姉妹が大きく息をつき、リオンがそれにねぎらいの言葉をかける。

「これでいつでも帰れるようになったのかな？」

「ええ、でもいつ帰るかは今決めておいた方が無難かしらね」

「え、なんで？」

リオンの問いかけに対し、キリエは帰還時間を決めるべきだという主張をするが、アマタにはどうしてそうすべきか思い至らなかったようである。

「もう少し、あとちょっと、って言いながら帰還が遅れることを防ぐためだね」

「ああ……なるほど〜」

まるで教師のように、アマタの疑問に答えたりオンであったが、キリエの本心がそれだけとは思えなかった。

(危険な時間移動までする優しい子だしね……次に会った時の約束を

残すため、なんてロマンチックな思いがあったって驚かないよ)

言葉にこそしなかったが、どうしても顔がにやついてしまったりオンであったが、キリエが顔をそらすことで、さらにその笑みを深くする。

「そうだね、明日じゃ心の準備ができないだろうし、明後日というのが妥当かな?」

「そ、そうね! じゃあ、明後日の正午ちょうど……いえ、この夢を終わらせるなら、やっぱり深夜の方がいいかしら」

「子供が多いし、遅い時間にするなら黄昏時ぐらいがいいんじゃないかな?」

では場所をどうするか、やっぱりもう少し時間があった方が等と、なかなか結論を出さないあたり、この時間が終わることを惜しんでいたのだろう。

結局、結論が出たのは、そろそろ日が変わる時間になったころであった。

アースラの一室で白熱した話し合いが行われていたころ、当の本人たちは帰還の時間が近づいていることも忘れ、月村邸の広い庭で静かに瞑想を行っていた。

「……パレガとは、清き願い。大きな想いを成就させる祈り」

冷えた空気に、穏やかな日差しが照らす中、静かな重い声が響く。

「空と大地と気の調和を知り、己を見つめ、世界を見つめ、森羅万象を想う……」

その声の主はムルヴァであり、その言葉を聞き、実践するのは、未

だ幼さを残す少年少女たちである。

それぞれが思い思いの姿勢で祈りをささげる中に聞こえるのは、ムルヴァの声とわずかな風のざわめきだけであった。

「そして想いとは、場所や時間は関係なく、継続し成すものだ」

時間にして、わずか数分。気の短い者が気もそぞろになる前に、最後の一言を添える。それを合図に、皆が大きく息を吐き、瞑想を終わらせる。

「思ってたより短いのね」

「これぐらいなら続けられそうだね」

アリスが少し拍子抜けだと言わんばかりに、すずかが少し安心したかのように言う。周囲の感想も似たり寄ったりであったが、そんな中クロノが自分なりの答えを述べる。

「最終的に世界がどうあって欲しいか考え、自分がそのために何をすべきか見つめ直す……それがパレガの目的か？」

「……貴方がそう思ったのであるなら、そうなのだろう」

それなりに自信があったクロノの答えに対するムルヴァの応えは、あまりにそっけないものであった。

「私が伝えられることは、すでに伝えた」

「つまり、どんな解釈をするかは私たち次第、と？」

エイミィの確認に、ムルヴァは厳かに頷く。とはいえ、彼らとて最初からこのような事を話していたわけではない。パレガについて語り終えたムルヴァが、これでよかったのかとすずかに尋ねる。



「しかし、アレが行っている鍛錬など、私もほとんど知らないのでは……」  
「いえ、マークさんが私たちに話してくれる鍛錬は、基本的に自分じゃなくて他の人がやっていたものばかりですから、少しでもありがたいですよ」

そう、今回ムルヴァを中心にみんなが集まったのは、マークについて同郷であるムルヴァに何か聞けないかと期待したためだ。

そんな中、真っ先に出た質問が、アインハルトの『マークが普段どんな鍛錬を積んでいたか』であった。

「これは聞いた話にすぎんが、私が故郷をたった後の環境は、この地とは比べ物にならないほど過酷な場所であったそうだ。雲を眼下に見下ろす標高、凍てついた土地……ゆえに生活自体が鍛錬であったとも言えるかもしれんな」

「なぜそのような環境に？」

「……アレは、神剣と神竜王の娘を任された。そして『氷竜神殿』にてその守護を行っていた」

「その神殿が過酷な環境下にあったのですね……」

それならばと、アインハルトたちはマークの身体能力の高さに納得する。そして、すずか達は、マークが一族の中でも重要な地位にあったことを知った。

「守護ですか？」

「ああ、神剣を託すにふさわしい者を待つ事と、強大な力を持つ娘の監視を任されていた」

「それじゃあ、ひょっとしてこの世界にとどまっているのはまずいんじゃないか……」

その情報に、マークが元いた世界で重要な役割を担っていたという

事実に、顔を青くするフェイトであったが、ムルヴァは不思議そうに首をかしげるだけであった。

「なぜまずいんだ？」

「だ、だってマークがこの世界にいるってことは、その役割を果たせないうってことで……」

「なるほど……アレはその話をしていないのか……」

自分が転移に巻き込んでしまったからと、自責の念に駆られるフェイトであったが、何やら納得するムルヴァに、再度視線を向ける。

「与えられた役目はすでに果たされている。神剣はアンリという若者の手に渡り、娘は大地にその力を封じたらしい」

「じゃあ、マークは……」

「私が生きていたころは、数多ある異界に渡った同族の無事を確認して回っていた」

懐かしそうに眼を細めるムルヴァの言葉に、目の前の存在が魂だけの存在であったことを思い出す。それだけでマークの役目を邪魔したわけではない事を、素直に喜ばなくなってしまった。

そして、ムルヴァにはそのような機微を感じ取ることはできなかった。

「それ以外にも、規模の大きな戦いには顔を突っ込んでいたらしいな。女神の癩癩にも付き合ったと言っていたぞ？」

「女神、ですか……」

「そう言えば、フライパンに加護貰って怒られたとか言っとなった気が……」

続くムルヴァの言葉に、トーマはフェイトを気にしつつも無難な返答を返したが、はやてはヴィータを引っ叩いたふざけた武器のことを

思いだしていた。

「女神の加護を得たフライパン……おいしい料理ができるようになるんでしょうか？」

「それはちょっと食べてみたいかも」

リリーの少しずれたつぶやきに、ヴィヴィオが想像を膨らませ唾を呑む。確かに、事情を知らなければその感想こそ相応しいものなのだろう。

だが、そのフライパンの真実を知る者からしたら、あまり考えたくない事であった。

「ま、まあフライパンの話は置いておいて……じゃあ、マークさんって結構あっちこっちの世界を渡っていたんですか？」

「そうだな、私を知るのは、大きな戦いがあった四つ……いや五つだけだが、それ以外の世界にも訪れたことがあっても不思議とは思わん」

ヴィヴィオがこれ以上フライパンに興味を持たないよう話を逸らすなのはに、ある意味予想通りの答えが返る。

「マークに味方された者たちからすれば、マークは間違いなく英雄だったろうな」

「突如戦場に現れた救世主……か」

やはり男の子だという事だろう。わかりやすい英雄譚に、僅かな憧憬を感じたクロノとユーノであったが、そんな自分たちに苦笑するしかなかった。

その英雄譚を想像した一部が、夢見る乙女のような眼差しをする。

戦渦に巻き込まれた民を、迫りくる白刃から庇う英雄の姿を。

決戦の先陣を切り、駆ける勇者の背中を。

剣を掲げ、兵を鼓舞する覇者の威風を。

だが、そんな英雄譚の世界を一言で破壊する人がいた。

「でも、そんなことして回ったんなら、マーク君モテたんじゃない？」

さらに英雄色を好むとも言つし、等と付け足したのはエイミィだ。

ピシリという、何かがひび割れる音が聞こえたような気がした。それで夢から引き戻された少女たちであったが、夢から覚めたら事実が知りたくなるのは当然だろう。

その視線は、当然のようにムルヴァに集まる。

「さすがに恋愛事情までは知らんよ」

「それもそうだよねえ」

同世代の友人とはいえ、世界を隔てた二人である。そのような情報まで共有していたとはエイミィも思っていない。

とはいえ、この程度で終わるようなら、そもそも最初からこのような話題を振ったりはしなかった。

「でも、思い人がいたとか、親密になった人がいたとかいうことぐらい、聞いたことあるんじゃないかなー、って思ったんだけど？」

「……心当たりが、無いわけでもない」

「本当ですか!？」

エイミィのさらなる追求に、あくまで渋々と言った体でムルヴァが折れる。そして、それに最も強く反応したのがすずかであった。

思わず声を上げてしまい、ついて真っ赤になって縮こまるすずかを横目に、ムルヴァはその心当たりを淡々と、それでいて楽しそうに語

る。

「私が故郷を離れてから、初めて再会した時の事だ。あの時アレは、確かに竜の少女を探していた」

「竜の……監視していた娘じゃなくて、ですか？」

「うむ、何でも、戦火に晒されて逸れてしまったらしくてな……争いから逃れるために、異界へ渡ったのは確かなのだが、どの世界に渡ったのかわからなかったらしい」

当時、ムルヴァ達移住組は魔王との戦いに参加していた為、細かい話はうやむやになってしまったそうだが、それでも娘の名前ぐらいは聞いていたらしい。

「氷竜の娘で、名をニニアンと言ったらしい」

「ニニアンさん……」

「その後再会できたのかすら聞いていないが……私が知っているのは、ここまでだな」

はつきり言って、こんなわずかな情報では何とも言えないだろう。言えないのだが、それでも、マークにはかつて、なんとしてでも見つけ出したいと思える女性がいたという事は、理解させられた。

そのことが、フェイトにはなんとなく嫌だった。だから、これは八つ当たりなのだろう。

「……ムルヴァさんは、マークのことを名前で呼ばないんですね」

それは、フェイト自身が思っていたよりもとげが感じられた一言であった。そのことに軽く自己嫌悪に陥りそつになるが、それでも、ムルヴァから顔をそむけることはしなかった。

「確かに、私はアレのことをマークとは呼ばないな」

「どうしてですか？ 幼馴染なんじゃ……」

思っていたよりも簡単に肯定するムルヴァに、軽い憤りを感じるフェイトであったが、その感情も長くは続かなかった。

「……私がアレを呼ぶときは と呼ぶ」

「え、今なんて？」

「だから私は、 をアレと呼ぶのだ…… もっとも、今の私が呼んでよい名であるのか知らんがな」

わかっただろうと言わんばかりのムルヴァに対し、フェイトは疑問符しか浮かばない。いや、フェイトだけではなく、この場にいる全員がムルヴァの言葉の意味を理解できなかった。

「……別に気にするべきことではない。 は母親が授けた名で、

マークは父親が授けた名だ」

「あ……英名と和名がある、みたいなものと思えばいいのかしら？」

追加された解説で、ようやく、何となくではあるがムルヴァの言いたいことが理解できた。よゆうな気がした。

ただ、これ以上のことを聞く前にタイムリミットが来てしまった。すなわち、マークが本局から帰ってきたのだ。

「みんな集まって、いったい何を話してたんだ？」

「えっと、マークのことを少し聞いてたの」

「え……何を話したんだ？」

「……さて、何を話したかな？」

まさかこの間の宝剣の話か？ それとも……等と、ムルヴァに問い詰めるマークであったが、ムルヴァは口を割らなかった。

## 第72話 「帰還」

「……二度と会えなくなるわけじゃないんだから、いいかげん泣き止め」

「で、でもお……」

マークの呆れた声に鼻を噉りながら弱々しく反論するのは、未来から来た子供たちと最も仲良くなったなのである。

とはいえ、マークとて理解している。この別れは一時の別れであるのと同時に、永遠の別れでもあるのだから。

「たった十年だよ、なのはママ……」

「そう言っヴィヴィオちゃんだって……」

涙をこらえきれていない二人は、気付いているのだろう。

確かに十年すれば、二人は再び出会うことになるはずである。だが、その時二人は今回のことを覚えておらず、全く違う関係を築いていくことになるのだ。

これを永遠の別れと言わずして、なんといいと言っるのであるうか。今回集まった一同も程度こそ違えど、この別れをそれぞれ重く受け止めていたのだ。

「気持ちにはわからないでもないが、あまり後ろ髪を引くようなことは控える。どんなに惜しんでも、行かなきゃならんだ。せめて、笑って送り出せ」

「……」

それでも笑えと言っマークを、酷と言っのも間違っているだろう。

そもそもマークは、幾千年の歳月を戦場で過ごししてきたのだ。今回のような別れも、星の数ほど経験して来たはずである。

そしてマーク自身も、数少ない同郷のものとの別れでもあるのだ。

「未来なんて、何が起るかわからないものだ。たとえどんな事情の別れだろうと、『次に会ったときは、一杯飲みかわそう』『ああ、最高の酒を用意しておいてやる』『ぐらい言つもんだぞ?』」

「一応、みんな未成年だからね?」  
「ものの例えだ」

エイミィのツツコミに、マークがわかっていると言いながら顔をそむける。ただ、その声音があまりにも残念そうだったため、なのはの口元に、思わずかすかな笑みがこぼれた。

「そう、だね。それじゃあ、次に会った時には、何かおいしいものでも食べよう?」

「……うん、お菓子作りの勉強して、待ってる」

「(……そのお菓子作りを教わる相手は、なのはさんなんじゃないかな?)」

ふと思いついてしまったトーマだったが、余計な事は言うなとりオに笑顔で睨まれ、頬をひきつらせた。

そんなトーマを見つけてしまったクロノが、僅かに首をかしげながらトーマに対して疑問を口にする。

「ひょっとして、傷が痛むのか?」

「えっ!? あ、いや、その……」

「え、まだ治ってなかったの!?!」

思わず口ごもるトーマに、キリエが悲鳴を上げる。未来組への対処は、いわゆる『夢オチ』に設定していた為、このまま未来に帰してしまえば、『朝目が覚めたら夢と同じ場所に怪我をしていた』なんてことになってしまいかねない。



「……そう言えば、武器も破損したんじゃないか？」  
「だ、大丈夫です！」

ムルヴァのさらなる指摘に、思わず声を大にして問題ないことを告げるが、このような拳動が信用されるはずもなかった。  
だが、思わぬところから救いの手が差し伸べられた。

「まあ、本人が大丈夫って言うんだからいいじゃないか。幸い、トーマは一番先の存在だし、今回のことを覚えていても影響はほとんどないだろう？」

「……あゝ、それもそうですね」

マークの一言にキリエが納得し、とりあえず追及を免れたトーマであったが、なんだか釈然としない。とはいえ文句を言うわけにもいかず、一歩下がろうとする。したのだが、そこをマークに捕まってしまった。

「まあ、そうは言っても俺にも責任の一端はあるだろう。大人しく見せる」  
「……はっ」

そう言って施す処置は、モルフに対するものと同じものであった。

(過程は違えど、人体改造だ。これで……)

トーマのイーギルをいじり、理解の及ぶ範囲で手を加える。一つ間違えれば崩壊を起こしそうな繊細な所には手を付けていないが、それでもこの世界に来た時より格段と安定感を増す。

「これで問題ないだろう」

マークの太鼓判に、トーマは腕を回して状態を確認する。わずかに感じていた痺れが無くなり、腕が軽くなったような気がした。

「……問題ないどころか、ここに来る前より調子が上がった気さえしますね」

「しばらく調子が悪かった反動だろ？ あと、武器も見せろ」

「は、はい」

さりげなく研究者としての本領を發揮しながら、トーマのディバイダーを受け取る。マークにとって見慣れない形状であるため、完全に修復できているかはわからなかったが、一見問題なさそうではあった。

とはいえトーマからしてみれば、この状況は戦々恐々の思いであった。

(故意にやったりはしないだろうけど、また砕けたりしないだろうな……)

先の戦いで、ディバイダーをいとも容易く砕かれたこと思い返し、その頬に冷や汗が流れる。

そんな不安を抱えながらマークを見てみると、何かしらの力がディバイダーに流れるのを感じた。

「い、今のは？」

「何、簡単な加護を与えただけだ」

それは、マークが己の懸念に対して出した答えであった。

今回の時間移動事件が偶然ではなく故意に起こされたものであり、彼らが生きているマークに会いに来ていたとするなら、可能な限りの支援を行うべきとの結論に達したのだ。

「本当に簡単なものだから、効果は一時的なものだ。それと、これも持って行け」

「ちょっとー！ 流石にアイテムを渡すのは……」

「ただのお守りだ。……そうだな、トーマじゃなくて、リリイに渡しておいじ」

「は、はい？」

そう言っただけでマークがリリイに渡したのは、『デュランダル』の破片であった。剣身がひび割れた際に出たそれは、僅かな加護を未だに纏っていたのだ。

「これぐらいなら問題ないだろ？」

「……まあ、そこら辺で綺麗な石を見つかる程度には、ありえそうです」

アマタが否定しきれなかったのをいいことに、マークは『デュランダル』欠片を、ヴィヴィオとアインハルトにも渡す。

それを渋い顔で見るキリ工達であったが、マークの真剣な顔を見ると、どうしても反論し難かった。

（本当は、もっと本格的な加護を授けたいんだが……そこまでやるとかえって危険だろうな）

未来にマークを死なせた存在が居るのなら、過剰な強化はかえって目をつけられる原因となりかねない。

それでも、この程度の強化では不安が残る。

「……クリスとティオにも、ちょっと仕掛けをしておくか」

「何をするつもりですか!？」

二体のデバイスの外装に、何かを埋め込もうとしたマークの腕をキリエが止める。が、力比べでマークに勝てる筈が無かった。

「な、何したんですかぁー！」

「ちよつと『マスタープルフ』を打ち込んでみた」

「なんですか、それ？」

「ん〜、才能を開花させるきっかけ、かな？」

若干涙ぐむキリエに軽く返し、ヴィヴィオの質問にマークが応える。しかし、それに反応したのはなのはであった。

『『ファイアーエムブレム』みたいなものですか？』

「いや、あそこまで飛びぬけてはいない」

魔王戦でなのはの潜在能力を引き出した宝玉と比べるが、そこまでぶつ飛んだ品ではない。もちろん、かといってロストログア級の逸品であることに違いは無かった。

「流石にこれ以上のことは……いや、技をいくつかくらい……」

「いえ！ 十分すぎますー！」

さらに物騒な事を呟くマークに、ヴィヴィオは全力で声を上げる。それに少し残念そうにマークが納得するのを見て、アインハルトがダメもとで一声かける。

「それなら、一手ご教授願いたいのですが」

「え〜、それは面倒……いや、『天空』は習得できたのか？」

「それは……」

マークの隠す気のない本音はともかく、それでも条件を満たせなかったアインハルトが言葉を濁す。

だが、ここで思ってもみなかった助太刀が得られることになった。

「別にすこしぐらい手合わせしてあげたら？」

「……フェイトがそういつのなら」

「いいんだ、それで……」

フェイトの一声で態度を一転させたマークに、アリサが呆れた声を出す。とはいえ、時間もあまりない。

言いたいことは後回しにし、とりあえず一手交えるため二人は武装を整える。

「本気でお願いします」

「時間もない。長引かせる気はないさ」

アインハルトがいわゆる『大人モード』に姿を変え、マークが蒼い鎧と『リガルソード』を展開する。

それを確認した一同は数歩下がって、二人が戦うスペースを確保する。唯一残ったのは、審判をするつもりであろう、シグナムだけであった。

「……」

「そんな不満そうな目で見るなよ。武器はともかく、本気で戦うからな」

「……では、そうせざるを得ない状況にするまでです！」

合図は無い。踏み込み、放たれた初撃はアインハルトによる、マークが『月光』と呼んだ防御貫通技の類似技である空破断。

本当なら、この初撃に『天空』を使い度肝を抜いてやりたかったが、習得できなかったものは仕方がない。

それに対し、マークは動かない。

(何を考えて……！)

マークの舐めた対応に憤りを覚えるが、それで冷静さを失うわけにはいかない。ただ無心に、無防備となったマークの腹部に一撃を叩き込み……

直後、マークの拳打がアインハルトの腹部に突き刺さった。

「う、がはぁ……！」

「くっ……さすがに痛いっ！」

マークの一撃の威力は相当のもので、思わず吐きそうになってしまったアインハルトは、苦痛を訴えながらも動きを止めないマークに気を向けることすらできなかった。

「そこまでっ！」

アインハルトの首筋におかれた刃を見て、今まで無言で見ていたシグナムが勝負の決着を宣言する。

それに続いて、シャマルが治療系の魔法を発動させ、この手合わせはマークの勝利で幕を下ろすことになった。

「今の一撃はなんだったん？」

双方の治療を終えて落ち着いたところへ、はやてがマークの一撃への疑問を尋ねる。思いのほか早く終わった戦いの鍵となるのがあの一撃であり、それが特殊な反撃であったと誰もが気付いていたためだ。

「ただのカウンターだ」

「ただの？」

「受けたダメージをそのままやり返すタイプだ」

「えげつなあ……………」

つまり、受けた攻撃が強力であればあるほど、跳ね返すダメージも大きくなる仕様なのだ。そして今回のアインハルトの攻撃は、防御を貫通するものであった。そのダメージを跳ね返されてしまえば、たった一撃で行動不能に陥ったのも必然的だろう。

「そうか……………あの時の一撃も」

「あの時？……………ああ、砂漠で戦った時のことか」

「無手の戦いは知らないんじゃないかなかったのか？」

「殴るだけなら、誰だってできるだろ？」

シグナムとザフィーラがマークと話しているのを、アインハルトは半ば呆然と聞いていた。

自信はあった。マークの言う『天空』は無理だったが、その一歩前である『太陽』までは修得していたのだ。だから、勝利には届かなかったかもしれないが、善戦ぐらいできると、そう思っていた。

だが、いざふたを開けてみれば、結果は惨敗。魔法どころか、剣すらまともに使わせることが叶わなかった。

(今までの私の努力は、無駄だったのでしょうか……………)

そんな絶望が、アインハルトを襲う。それほどに、今の瞬殺はアインハルトの胸に突き刺さったのだ。

そして、そんなアインハルトの様子に気が付いたのだろう。マークは戦った当事者として声をかける。

「良い一撃だったぞ」

「……………これほどの実力差で、そう言いますか」

アインハルトのつれない態度に、よほどショックだったのだろうとマークは苦笑しながらも考えを改める。

目の前の相手は、ただ無邪気に力を求めた子供ではなく、誇りと目的を持った戦士なのだと。

「アインハルトは、なぜそこまで強さにこだわる？」

「……」

「正直に言って、平和な世の中に生きた少女が、何にこだわっているのかわからないんだ」

戦士にも、それぞれ戦う理由がある。家族のため、主のため、もっとシンプルに生きていく為という者もいるだろう。

それがわからなければ、何とも言いようが無かった。

そして、アインハルトはポツリポツリと話し始める。自分の中にある霸王の記憶。守れなかった大切な人。そして求めた力。それでも消えなかった無力感。

「だから、私は霸王流が決して弱くならない事を証明して、クラウスの無念を晴らしたいんです」

「……あれ、なんでだろう……なんだか結論だけすぐくずれたような気が？」

アインハルトの話を聞き終えたとき、マークはなぜか強い違和感を覚えた。そしてもう一度二度、アインハルトの話を思い返し、ようやくその正体を突き止めた。

「アインハルトは、本当の強さを手に入れたいのか？」

「はい、彼が望んでいた、護るべきものを護れる本当の強さを……」

「そこが歪んだんだな」

「……何が歪みだと言っているのですか」



うんうんと一人納得するマークに、自身の思いを歪みと言われたアインハルトが噛み付く。

「クラウスの無念は、本当の強さを手に入れられなかったことじゃないからな」

「ではなんだと……」

「オリヴィエとやらを守れなかったことだろ？」

「……」

マークの指摘に、アインハルトは黙ることしかできなかった。ひよっとしたら、目を背けていただけで、もとより気づいていたのかもしれない。

「だから、もしクラウスの無念を晴らそうって言うのなら、お前のやることは強くなることじゃない。今度こそ、護り抜くことだ」

「護り抜く……」

「そう、強くなることは確かに必要だろう。だが、それはあくまで護る為の過程・手段の一つでしかない」

そう言ってマークはなのはやフェイト、はやて達へと手を向ける。

「今回、アインハルトは一对一で俺に負けたが、みんなと協力したらどうなる？」

「……」

「それ以前に、マークと戦わないようにすれば、そもそも勝ち負けは無くなるよ？」

「さらに言えば、マークさんを味方に付ければ、なお良しだね」

マークが言わんとすることを理解したフェイトとすずかが、二人の間に加わる。

「俺は古い考えしか持たないから、これぐらいしか言えないが……若いお前は違つたろっ?」

「私は……」

「まあ、年寄りのお節介だ。余計なお世話かもしれんが、頭の片隅にでも置いておけ」

最後の最後に突き放した一言を放ったマークは、それでも確信を秘めた笑みを浮かべる。

「あ、あの……!」

「ムルヴァ」

「ああ」

アインハルトはその笑みに追い立てられるように声をかけるが、マークはすでにムルヴァへと向き直ってしまった。

だが、その後続く言葉は無く、ただただ緊張感ばかりが増えていった。

(な、なんなんこの緊張感……!)

(ひよっとして、先に動いた方が負けとか!?)

(なんでそんな物騒な事に?!)

謎の危機感を覚え、アイコンタクトで現状の確認と打破を試みるが、結局何もわからず二人を眺めていることしかできなかった。そして、ついにその緊張の糸が、切れた。

「じつやって改めて向き合つと……」

「ああ、何を話せばいいのかわからなくなるな」

今までの緊張が何だったのかといたくなくなるような情けない理由に、思わずみんなの力が抜ける。

本人たちも自覚しているのだろう、力ない笑みを浮かべながらも、  
ようやく話し始めた。

「……これから、お前はどつする気だ？」

「余生を穏やかに過ごす予定だったが……この一年弱を思えば、それも難しそうだな」

「何を今さら」

激動の生涯を送ってきたマークが、今更隠居などできる筈がないと言つムルヴァに、マークは反発するそぶりを見せる。

だがそれはあくまで表面上の話で、マークとてこの一年のことで、平穏な生活など不可能だと身に染みて理解していた。

そしてマークも、ムルヴァへと今後を問いかける。

「そう言つムルヴァは良かったのか？ せつかく拾った余生なんだぞ？」

「……流石にこのタイミングでそれを言つのは、趣味が悪いぞ？」

「すまん」

マークの言葉に顔を青くするエトルリアの姉妹であったが、ムルヴァが約束を反故にするつもりはないと示し、ほっと一息つく。

「だが、本音でもある。本来であれば、無に還っていたはずのお前が、何を思つてアミタ達に協力するのか、素直に疑問に思つんだ」

「……なに、ただの代償行為だ」

その言葉に、マークはムルヴァの一人娘のことを思いだす。要は、父のために動くアミタとキリエを、娘の代わりに見ているのだ。

「そうか、いや、無粋な事を聞いた」

「構わん」

マークの謝罪を、ムルヴァは軽く受け入れる。そのやり取りの後、再び沈黙が訪れるが、今回の沈黙は先程のものと性質が違った。

ムルヴァは、マークが今後についての答えをはぐらかしたことを責めているのだ。

「……降参だ」

「この程度で降参するなら、最初から答えていればいいものを……」

「最後に、少しだけこのやり取りがしたかったんだよ」

「……そうか」

マークのささやかな望みに、それならば仕方がないと、ムルヴァは表情を緩める。

「そうだな、一言で言えば……番つ相手が欲しい」

「つがうあいてっ」

「ははっ！」

全員が聞いていたわけだが、その中でもマークの今後の望みという事で特に注目していたフェイトが、言葉の意味が分からず疑問の声を上げる。

それに対し、マークと相対していたムルヴァは理解したのだろう。思わずと言った笑い声をあげる。

「そうか！ まさかお前からそんな言葉が聞けるなんてな！」

「……戦友たちが次々にそう言う関係になれば、興味もわくというものだ」

「そんな言い訳はいい！ だが、そうか……お前がなあ」

感慨深くつぶやくムルヴァに、マークはほんの少しだけ言っんじやなかったかと後悔するが、それが表情に出る前に時間が来てしまう。

時間がずれこまないように、時限式で準備されていた魔法陣が光を放つ。

「ああ、惜しい事をした。これならば、気まずさ無視して、無理にでも話をする時間を作るべきだったな！」

「やかましいー！ もうとっつと行ってしまえー！」

マーク達の別れを隣で聞いていると、どうにも苦笑せざるを得ない。自然となのは達の最後の別れも、笑みをまじえたものになった。

「また、いつか」

「うん、きつと」

最後の一言は誰のものでもない、この場にいるみんなの想い。

この一言によって、今回の一大騒動は、幕を下ろすことになった。

「……行っちゃったね」

「……うん」

感傷に浸る一個の中心に居たマークであったが、その余韻を壊さぬように静かに、それでいて足早にこの場を後にした。

「あ……」

「そっとおいてあげた方がいい。誰だって、人に見られたくない時がある」

それに気付いたフェイトが足を向けようとするが、それもクロノに止められる。そして、止められてしまえば、それにも一理あると思っ  
てしまえば、再びマークを追う気にはなれなかった。

そんなやり取りがあったせいか、フェイトはこの場からいなくなっ

た他の影に、気付くことは無かった。

「マークさん……」

「……スズカか……まあ、一人きりになるより良かったのかな？ ただ、今の顔は見ないでくれると助かるな」

「……わかりました」

マークの声はいつも通りだったが、それでもすずかの方へ振り返ることは無かった。やはり、それだけ友との別れは辛かったのだろう。そんな辛さを、少しでも和らげたいと思ったはずだったが、残念なことに、もう一人の訪れにより、その機会は失われてしまった。

「ねえ、今回はどこまで計画していたんだい」

「……リオン」

突如現れたリオンの言葉に、すずかは思わず反発しそうになるが、それよりも前にリオンは話を続ける。

「アインハルトさんへの説教は、どこまで本気だったのになって」

「……らしくなかったか？」

「少し」

その話題は、むしろ別れから気をそらすのによかったのかもしれない。マークはわずかにこわばっていた肩から力を抜いて、あの行動の目的を話す。

「まあ、ほとんどは成り行きだが、着地点だけは考えていた」

「と……と……」

「ああ言ったら、ヴィヴィオの騎士に出来そうな気がしなかったか？」

「なるほど」

即座に納得するリオンに遅れ、すずかはマークの考えを理解する。

「ヴィヴィオちゃんを守るため？」

「まあ、アインハルトにとっても救いになれば、と思うよ？」

そう言うマークにしたたかさを感じたすずかは、ただただ感心するしかなかった。ここだけ聞けば、誰もが幸せになれる方法だからである。

だが現実とは違う。マークは未来において何かが起こるかもしれないと予測し、その何かが起こった時に、アインハルトをヴィヴィオの盾にしようと動いたのだから。

「……じゃあ、そろそろ戻るか」

「はーん」

少し時間をおいて落ち着いたマークがすずかに声をかけ、これ为本当に別れが終わる。後は各々がそれぞれ気持ちに整理をつけ、処理する問題であった。

## 第73話 「尾行」

最近、マークがおかしい。

フェイトがそのように感じ始めたのは、春休みも終わり、一月が過ぎたころであった。

「最近忙しそうだけど……何かあったの？」

「ん？ 特に変わったことは無いけど……まあ、敢えて言うのなら、訓練校の課題が増えた位かな？」

「……それは私も知ってるよ。一緒に行ってるんだから」

その訓練校であるが、マークは戦闘関係の講義の免除を提案されていた。だがマークはそれを断り、フェイト達と全ての講義を受けることを選んだのだ。

「どこで齟齬が生まれるかわからないからな。学べるうちに、学んでおいた方がいい」

「うん、それはわかるけど……そうじゃなくて、なんだかそれだけに思えなかったから」

「確かに、やることはそれだけじゃないけど……」

フェイトの『できる事なら助けになりたい』という思いを感じ、マークは困ったような笑みを浮かべる。

確かにマークは一時期より忙しくなったが、それでもフェイト達ほどではないと思っていた。

しいて言うのであれば、研究所を持ったことから発生する研究を行い、それを提出する義務がある。

だが、現状ではフェイトの調整とナカジマ家の要請を受けることで、その義務は果たしてしまっているのだ。その作業量は、小学校と訓練校の二つに通っているのはやフェイトほどではなかった。



「確かにやることは増えたと思うけど、まだまだ余裕がある。大丈夫だよ」

「そう……ならいいけど……」

心配させないようにという思いもあったマークは、フェイトの申し出を笑顔で断る。フェイトとしても、そこまで言われてしまえば額かざるを得ない。

だが、マーク妙な忙しさは、これで収まることは無かった。

「だから、だれか何か知らないかと思って……」

「うーん……わたしの知る限りでは、何かやってるなんて話聞かないわ」

「まあ、私とアリサちゃんは、マークさんとかかわる割合が少ないしなあ」

一度は引き下がったとはいえ、やっぱり気になってしまったフェイトがとった手段は、友人達への相談である。

放課後に月村邸に集まった一同だが、以前と違うのは、今年度から転校してきたはやと、最近高町家を出て、本局で寝泊まりするようになったユーノが参加していることだろう。

とはいえ、マークと一番接する機会の多いフェイトにわからないことが、なのは達にはわかるはずもなかった。が、それでもいくらか想像することはできる。

「ここ最近って言ったなら、私が剣を習い始めたけど……」

「流石にそれを負担に思うような人じゃないと思うよ？」

「……そう言えば、翠屋でお姉ちゃんたちと何か話をしていたような？」

「すずかの指導プランの相談じゃないの？」

「あ、その話だったら納得かも」

「さすがの懸念をユーノが否定し、なのはの思い付きをアリサが疑問で返す。」

「本局でマークさんを見かけたけど……」

「魔王対策について、話を詰めてるって聞いたよ……」

「あれ？　　さすがちゃんに渡すデバイスの出来を見るため、グレアム提督のところにも用があるって……」

「え、私の？」

「あれ、聞いてなかった？」

「海鳴の図書館でも見たよ」

「この間、買い物に行って……」

途中で話を脱線させながらも、六人で目撃談や本人、周囲の話の情報、その他諸々を手当たり次第に出し、さらにはエイミィ達からも情報を募ってまとめてみた結果は、少々意外なものであった。

「……思ったより海鳴にいるんだね？」

「ちよっと意外ね……聞いたところでは、管理局関係でやることの方が多いみたいなのに」

そう、地球でやることなどさすがの指導ぐらいしかないにもかかわらず、管理局滞在時間とほぼ同じ時間、地球に滞在していたのだ。

「クロノは、本局の仮眠室を借りることも多いのに……」

「そう言えば、ユーノ君も最近そっちに多いことが多いよね？」

「あ、ユーノ君も訓練校に通い始めたから」

「なのは達とは違う課程だけだね。それに、無限書庫の方でもアルバイトを始めたんだ」

「へえ……」

さすがの疑問にさりげなくなのはが答え、ユーノが補足する。そのことにアリサが一瞬目を光らせるが、何も気が付か無かったフェイトが話しを進めてしまう。

「やっぱり変だよな……必ず誰かと一緒に居ようとするマークが、最近は一人で行動してるなんて……」

「え？ マークさんって、単独行動を好んでるんとちゃうん？」

フェイトの確信に疑問を挿むはやて。なのはやユーノも、少なからずそんな印象を抱いていたので首をかしげるが、むしろなぜ知らないのかと言わんばかりに、フェイトが応える。

「マークって、基本的に誰かと一緒にいるよ？」

「でも、気付いたらよくいなくなってるって……」

「うん、その後どこに行ってたのか聞いたら、大抵誰か人を訪ねているから」

「あ、そう言いつつ……」

より詳しく聞くと、管理局では第四技研や武装局員たちを中心に、マークは知り合いを増やしているらしい。

さらに地球では、翠屋の店員に始まり、ご近所さんやらバニングス家の使用人にまで交友関係を広げていると言う。

「い、いつの間……」

「あ……そう言えばウチのリオンも、病院で知り合い増やしとったなあ」

アリサは表情をひきつらせ、はやては身内の似た行動を思い出して遠い目をしていた。

ちなみにはやてだが、現在病院でリハビリの最中であり、車椅子、松葉づえを経て、今では杖を突けば一人で歩ける程度まで回復してい

る。

「とにかく、今わかってるのは、マークさんは一人で、海鳴の街をうろついているってことか?」

「それも毎日のように……ね」

気を取り直してユーノとアリサがまとめたマークの行動は、やはりよくわからないものであった。

「管理局じゃなくて、海鳴ってところが重要なのかな?」

「見回りの類だったら、エイミイさんにもう相談済みだよな?」

「じゃあ何かを探してるとか?」

「何かって……私たちには聞けないような……まさか!」

「何か分かったの!」

再び手当たり次第に可能性を考えていた時、アリサに天啓のようにある考えが浮かんだ。そして少し迷いながらも、それを確認するためにはやてとなのはを手招きする。

「(ひょっとして、女?)」

「(どこからそんな考えが!?)」

「(……そう言えば、つがい相手を探すって言うってたなあ)」

すずかとフェイト、ついでにユーノに聞かれないように話す三人は、今回の話の重要度を一段上げつつ思索を続ける。

「(基本的に、フェイトに心配かけるようなことをしなかったのに、最近は違うのよ? だったら……)」

「(ちょっと待って! でもそれなら管理局の方じゃないかな? 流

石に魔法とか内緒にするのは大変だよ?)」

「(そやね……でも、火が付いたら止まらんもんやろ?)」

「なのは？」

急に内緒話を始めた三人に、不思議そうな顔をして首を傾げるフェイトが声をかける。それで流石にこれ以上の話は難しいと判断した三人が元の席に戻るが、それでなんとさえいえるのはわからなかった。

(すずかは気付いてるかもしれないけど、はっきり言われたくないだろ(っし……))

(フェイトちゃんはマークさんの事、相方だって言ってたけど……)

アリスとなのはが迷う中、はやては意を決したように一つ頷き、ただ一言、宣言する。

「尾行しよう！」

「……え？」

一瞬、はやてが何を言っているのかわからなかった一同であったが、理解するにしたがって戸惑いの表情を見せ始める。

「でも……」

「大丈夫やって！ マークさんが本気で私たちに言えないようなことするとは思えんし、尾行が見つかっても何やってたか聞く、ちょうどいい機会やって！」

躊躇するフェイト達であったが、はやての主張に押され頷いてしまう。そして、言質を得てしまえばはやての行動は早かった。

その翌日には、みんなで海鳴の街へと繰り出すことになってしまったのだ。

「……本当に、いいのかなあ？」

「今更そんなこと言わない!」

「まあ、マークさんが本気で嫌だったら、すぐに撒かれることになると思うし、まだいいんじゃないかな?」

当日集合してからもためらわずかであったが、アリサに一喝され、なのはの説得に流されてしまう。

とはいえ、もとより参加しないという選択肢は無かったのだろう。言葉こそ肯定的でないが、一言も『止めよう』といった言葉は聞かれなかった。

「あ、出てきたわよ!」

「……あれ、私たちに気付かなかった?」

「やっぱり、本気で隠し事する気は無いんとちゃう?」

マンションから出てきたマークが、隠れて見ていた自分たちに気付かなかったことに驚くフェイトであったが、それははやての推測でみんな納得する。

「……行くか!」

「近づきすぎないようにね」

はやてが先頭に立ち、それにアリサが続く。その瞳に宿ったのは、好奇心の炎というべきだろうか。

まあ、何はともあれ尾行は開始され、何事もなく海鳴の中心ともいえるビル街まで来てしまった。

「本当に、気付いてないのかな?」

「確かに、「ここまで気付かれないのはちょっと不安ね……」

あまりに何事も無かった為、実は気付かれて泳がされているのではという疑念がわいてきたその時、マークの方で動きがあった。

「お店に入った？」

「……洋食処？」

「誰かと待ち合わせかな？」

流石に同じ店に入っては気付かれると思った子供たちは、携帯で連絡を取りながら順番に通行人に混ざり、中の様子をうかがう事にする。

「こちら管制のはやて。アリサ隊員、中の様子は？」

『こちらアリサ。対象は一人で座っております。……あ、店員に声をかけた』

「二番手なのは隊員、中の様子は？」

『はい、こちらなのは。え〜と、パスタを食べています。色から見て、ミートソースかナポリタン？』

「三番手フエイト隊員、中の様子は？」

『……ねえはやて、言わなきゃダメ？』  
「もちろん！」

『うう……こちらフエイト。マークはライスとハンバーグを食べてます。……あ、ピザが来ました』

「じゃあ四番手のユーノ隊員、中の様子は？」

『はい、こちらユーノ。今はポテトとソーセージを食べてるよ。よくあんなに食べられるね』

「ラスト、すずか隊員、中の様子は？」

『こちらすずか。デザートは……食べなかったのかな？ 伝票を持って、立ち上がりました』

「……ご飯食べただけ？」

『……そうみたい』

結局、店内でマークが誰かと相席することはついぞなく、再び海鳴の街へと繰り出していった。

「……出かける前も、小腹がすいたって言って、肉まんを食べてたのに」

「うわあ、あの量に加えて、まだ食べてたんや……」

「でも、お兄ちゃんたちも、あれぐらい食べるときあるよ。」

最終的には、なのはの一言で『そういつ時もある』という事でおさまったのだが、僅か十数分後に、この話題が再燃することになる。

「ラーメン屋？」

「ま、まだ食べるって言うの……！」

「……って、30分以内に完食できたら無料になる巨大餃子があったよ……」

「まさか……」

「あ、頼んだね」

あまりのことに、隠れることすら離れた子供たちであったが、幸か不幸かマークは気付いた様子もなかった。

それが故に、通常の餃子五十個分に匹敵する巨大餃子を、僅か18分24秒で完食するマークの姿を見ることになったわけだが……

「マークさんのおなかの中って、どうなってるの？」

「でも、アルフだって体積変えられるし、不思議な魔法でいいんじゃない？」

当然のように浮かんだなのはのもっともな疑問も、アリサの一言によって封殺される。もう『そういつもの』と納得してしまうのが、精



神衛生上一番良い。

若干不満そうなのはであったが、さらに二件三件と食事処に入るマークを見て、ようやく深く考えるべきではないというアリサの言葉に同意するのであった。

「……見てるだけで、おなか一杯よ、もう」

「時間を見る限り、これで終わりだと思っけど……」

空が夕焼けに染まり、いつもマークが帰って来る時間を思えば、そろそろ帰路につくはずだというフェイトの言葉に、一同は安堵と一緒に物足りなさを感じる。

「本当に、ご飯を食べに来ただけ？」

「確かに管理局に食堂で済ますのは、味気ないかもしれないけど……」

「うん、流石にそれだけってことは無いと思う」

とはいえ、今日はもう終わりであるごと、みんなそう思って気が抜けてしまっていた。だから、彼女たちは気付かなかった。

「おや、皆してこんなところで何やってるんだ？」

「ッ!？」

帰宅のため、リターンしてきたマークの声がかかる。それにより気を抜くには早すぎたのだと気づくが、事ここに至っては遅すぎた。

「え、え〜と……」

「その、なんと言いますか……」

何とか言葉を紡ごうとするが、あまりに唐突であったマークとの遭遇に、思っつよつに考えがまとまらない。

目が泳ぎ、そわそわと体をゆすってしまっフェイト達を見て、何も

無いと思うほどマークは鈍感に成れなかった。

だが、何かあるとわかったからこそ、それ以上の詮索をする気もなかった。

「別に、言いにくい事なら言わなくてもいいぞ。……あまり遅くならないようにな」

「う、うめんなさいー」

そろそろいい時間であるし、送るつかとも思ったマークであったが、口にしないでおく。マークにだって、親しいからこそ言いたくないこともある。

ただ、マークを尾行していたという後ろめたさを持ったフェイト達には、完全に逆効果だ。

マークにとっては唐突な謝罪と共に、今日一日ずっと尾行していたことを話す子供たち。それに対し、マークは困ったような笑みを浮かべるだけであった。

「……怒らないんですか？」

「ん、別に怒るような事じゃないだろう？　ただ、皆に尾行されていたのに気づかなかったのは、少し反省すべきかな」

尾行されていたという事より、それに気付かなかった自分を責めるマーク。確かに彼の経歴を思えば、平和ボケしすぎという事になるのかもしれない。

とにもかくにも、マークが気にしていないという事にほっと一息つく一行であったが、そうなると今度はマークの真意が気になってくる。

「とてつろで、マークさんは何しに街に出てたん？」

「ふむ……そうだな、せっかくだし答え合わせと行こうか」

はやての問いかけに、マークはさらに問い返す。すなわち、今日一日の成果を問いただしたのだ。

「……私たちには、食事をしに来たことしか読み取れませんでしたよ」「最初は密会とか期待してたんだけどね」

期待に添える答えではないだろうと思いつつすずかが答え、アリサが無駄と思いつつも一言付け足す。

「食事は、やっぱり普通の量じゃ足りなかったから？」

「あれだけ食べたのは、やっぱりマークさんがママクートだから？」

「管理局じゃなくて、海鳴に来てってことに何かあるんじゃないかとは思いましたが……」

「それ以上の事は、さすがに読み取れなかったなあ」

一人に続いた答えに、マークは一つ頷いて正答を述べる。

「それだけわかれば上等じゃないかな？ 食事については満点と言ってもいいよ」

とはいえ、普段からの食事が足りないというわけではない、とマークは付け足す。今回の食事は、魔王との戦闘から二度竜化した際に消費したカロリーの補充だ。

そして、次の分のストックでもある。

「で、なんで海鳴でってト」は……実は人探しをしていてね」

「人探し……？」

「そう言えば……」

首を傾げるすずかに対し、フェイトは一つ思い当たることがあった。

それは、春休みに起こった一つの事件……否、はやてとリオンのケン力があつたために、に後回しにされていたもの。

「あの時、昔の戦友に似た人がいたって……」

「そう、そいつを探してたんだ」

一人納得したフェイトは、未だ全容を理解できていない他の面子に当時の話をする。

「……ひょっとして、マークさん以外にもこっちに来てるかもしれないってこと？」

「いや、本人ってことは無いだろう。だが、その子孫の可能性は高い」「子孫って……」

正直に言つて、世界には同じ顔の人間が三人いるという都市伝説の方が、信憑性があるといつても過言ではないだろう、とユーノは思つ。もちろん、何かカードのようなものをみんなに見せているマークに、そのような事を言つわけにはいかなかった。

「……結構美人ね」

「まあ、ある意味看板娘でもあるわけだしな」

「ある意味？」

「……一言では説明しづらい」

ユーノも見せてもらったカードには、赤毛を高めの位置で結んだ、きれいな女性が描かれていた。

マーク曰く、神出鬼没で、愛想のある、根っからの商人。どんな場所、どんな時代にもいる、神童にも理解できない一族だそうだ。

「名前は……アンナ」

「アンナ、ね。私も伝手をたどつてみるわ」

「感謝する……いや、ありがとう」

アリサの言葉に一同が頷き、携帯に画像を収める。

余談ではあるが、その際、写真嫌いのマークが渋い顔をしたのを、皆で宥める必要があった。

「それで、マークさんはどうするって？」

「食べ歩きはそろそろ十分かと思ってたってことだから、ちょうどいい機会だし、人探しも一区切りにするって」

その夜、すずかは一連の出来事を姉である忍に話していた。

マークは、一月の間街を巡って見つからなかった探し人は、もう海鳴にいないのではと考えたそうだ。

「まあ、一月探して成果なしじゃ仕方ないでしょうね」

「それで、うちとアリサちゃんの家で……」

「それが妥当……というより、最初からそうしてればよかったのに」

少しばかり呆れる忍に、自分で見つけたかったのだと思うとすずかはフォローするが、それにしたって非効率的だと思わざるを得ない。

「済んだことは仕方ないわね……それで、その探し人は？」

「この人なんだけど……」

そう言って携帯に保存した画像を見せるすずかであったが、画像が存在することに忍が驚く。

「あら、画像があるなら話は早いわ……って、「これ杏奈？」

「ッ！ 知ってるの!？」

「え、ええ。この子、うちの大学の経済学部にいる子にそっくり……って、すずか!？」

画像を見て、思わずそっくりな後輩の名を告げると、すずかは早速マークに連絡をすべくこの場を後にしていた。

その行動の速さに思わず呆れるが、その気持ちもわからないでもないと考えを改める。

「大事な妹だしね。それじゃあ、力になってあげましょう」

そう言って忍は立ち上がり、後輩へアポを取るべく連絡をする。

万に一つもないと思いつつも、彼女がマークにとって、少しでも救いになることを祈りながら。

## 第74話 「アンナ」

その日、マークはエイミーを伴い月村邸へと足を延ばしていた。というのも、マークが忍の仲介により、アンナと会う約束を取り付けたからなのだが……

そこになぜエイミーがいるかという点と、マークの戦友の血縁かもしれないという、その一点に尽きる。

今日会うアンナが次元漂流者の子孫であるならともかく、万に一つ当人であるなら保護する必要があるからだ。

あと、マーク達が意図してフェイト達を締め出したのではなく、アンナと忍、それにマークの時間が合う日が、今日を除いて無かった為であることも付け足しておく必要があるだろう。

「結局マーク君は、アンナさんの事本気で探してるわけじゃなかったんでしょ？」

「確かに俺はそう言ったが……フェイトから、なんて聞いたんだ？」

月村邸の一室で、お茶をしながら静かに相手方の到着を待つ二人であったが、その静寂もエイミーの言葉によって破られた。

「うーん……フェイトちゃんは、どちらかという食事がついでで、アンナさんを探すのが本命だったんじゃないかと思ってたみたいけど……」

「まあ、そう思われてもおかしくは無いだろうな」

「でも、それだとわかりやす過ぎるかなあって、思ってたみたいなんだ」

そう言って指を立てながら持論を述べるエイミーは、気分だけは名探偵と言ったところであろうか。

「一つ、食事についてはカロリーの補充が目的ではない」  
「ほう……」

「そう考えた理由は、竜化には竜石というアイテムが必要だから」

エイミィの考えに少し感心しながら、マークは先を促す。

「竜石に竜化に必要なエネルギーが蓄えられているなら、補充するならそっちでしょ？」

「確かに……カロリー摂取で竜石にエネルギーを補充できるとは思いくらいか……」

「だから食事には別の意味があったと思ったんだけど……それは置いておいて」

エイミィは、立てた指をもう一本増やして続ける。

「二つ、人探しにしては、効率が悪すぎる。だから、探索はついでというのは本当」

「本気で探すのなら、人を頼るべきだもんなあ」

二つ目については、マークも見破られているとわかっていたらしい。うんうんと頷きながら、エイミィの推理を肯定する。

そのことに少し驚くエイミィであったが、すぐに気を直し、持論を展開する。

「ま、まあ、フェイトちゃんは昔のことを特別視するマーク君が、知り合いに似た人を探すのがついでだなんて変だ……って思ったただけだったみたいだけど」

「正直、本人ならともかく、子孫に今更会っても……と思わなくもない」

「やっぱり、複雑なんだね……」



マークの本音に、長命種にしかわからないであろう葛藤を感じたエイミーは、ただ一言いっただけにとどめる。

だが、マークの真意を測るにはこれだけでは足りない。

「……」れじゃ、俺は何の目的もなく海鳴をさまよっていたことになるんだが？」

「うん、そこで二つ目の食事についてに戻るんだけど……」ここからは、完全に私の予想というか、妄想になるから聞き流してくれるとつれいな

「そうか……」

その念の押しように、きつと自分にとって面白くない予想なのだろうとマークは身構える。

そんな不愉快なものであると思っても、問わずにはいられない予想だなんて、限られているのだから。

「艦長から以前聞いたんだけど……マーク君は、そこら辺の雑草からでも『エイギル』を回収できるって」「……」

「それを踏まえて、マーク君がフェイトちゃん達にした説明を紐解けば、今回の食事は『エイギル』の収集が目的だと思ったの」

マークはエイミーの予想に対し、何の反応も返さなかった。エイミーとしても、もとよりそのようにしてくれと言っていた為、マークの無反応にも関せず、自身の妄想を垂れ流す。

「で、艦長に話したレベルの内容を、今回に限って話さなかったのは、この話をしては不味い相手があの場にいたから……具体的には、『エイギル』の知識を持っているかもしれない、はやてちゃんが居たから……というのが、私の予想」

すべてを吐きだしたエイミィは、一息ついて紅茶に口をつける。  
できれば考えすぎであってほしかったが、『エーギル』の危険性について  
は聞き及んでいる。

その内容ははっきり言って、生半可な覚悟で流布してよい情報では  
なかった。

「……言いたくないけど、本人の意思に関わらず情報を聞き出す手段  
は、無いとは言えない。はやてちゃんが、もし『エーギル』を実用で  
きるレベルの知識を得ていたら……」

「いや、ハヤテについては心配していない」

エイミィの言葉を、マークが遮る。聞き流してほしいとは言われて  
いたが、マークとしてはその予想をエイミィに最後まで言わせたくな  
かったのだ。

「確かに、今回言葉を濁したのは『エーギル』の補給をしていたと、あ  
の場にいた誰かに言いたくなかったからだ」

「……」

「すでに『エーギル』を扱い始める兆候は見られている。できる事な  
ら、意識的に使用するレベルに達してほしくない」

マークの言葉を受け、エイミィは一人の少女を思い浮かべた。

(まさか……フェイトちゃん!? そつか、確かに手足が『エーギル』で  
……)

それに加え、以前マークの『コピー』と戦った際、フェイトはマークの  
かけた強化を、長時間強化から瞬時的強化へと書き換えたと言ってい  
た。

もしその技能が完成すれば、フェイトはマークを除き、唯一の『エー  
ギル使い』とでもいっべき存在となってしまうのだ。

(そうなってしまったら……ねえ、マーク君は、どうするの?)

知識というものは、一度拡散してしまえば抹消することが不可能と言っても過言ではない。

そうであるならマークは、マークは一体どうするのか。かつて強力な武具をその身に宿し、強固な封印をかけた守護者として、どうすべきと考えているのか。

だが、この場でその答えを聞くことは叶わない。待ち人が、この場に到着してしまっただためだ。

「待たせてしまったようね」

「いや、好きで待っていたんだから、かまわないさ」

学校から帰ってきた忍に、マークは笑顔で答える。正直に言って、この場面だけ見れば、マークがこの会談をそこまで望んでいないとは思えないような表情であった。

《勘違いするなよ？ 確かに本気で会いたいと願っていたわけじゃないが、別に、会いたくないわけじゃないんだから》  
《……複雑、なんだね》

どうにもこの件に関しては、マークの感情を鑑みることが不可能だと、エイミィは諦めをもって悟った。

そして、忍の後ろから、ついにその女性が現れた。

「初めまして……でいいのよね、マークさん？」

「ああ、間違いなく初めましてだ。アンナ……さん？」

かつての仲間と同じ顔を持つ女性に、初対面の挨拶をされ、いくらマークでも辛いのではないかと思ってしまった忍とエイミィであっ

だが、マークの表情からはその内心をうかがう事はできなかった。

「よかったわ……私を探しているって聞いたから、ひよっとしたら私が覚えていないだけかもしれないと思って、不安だったのよ」

「そうだったのか……でも、よくある事なんじゃないのか？」

「……ひよっとして、会ったことがあるの？」

「どういう事？」

ほっとした表情を見せたアンナだったが、マークの一言に苦笑を見せる。そんな変わり身にも、それなりの付き合いがある忍も首をかしげる。

「あ〜……一応な」

「やっぱり……確か、従姉妹がドイツの方にいたと思ったけど？」

「もっと上の方かな？」

「じゃあ、シンガポールの叔母さんあたり？」

「まさか……」

二人の会話から、忍はある予想を立てる。しかし、その予想を口に出す前に、当の本人から答えを聞かされることになる。

「そうなのよあ……ウチは親戚一同みんな同じ顔でさあ」

「見分けがつくのは本人達か、その配偶者ぐらいだってもっぱらの噂だな」

「うわあ……」

その答えに、忍は思わず天を仰ぐ。今日の前にいる女が、他に何十人もいるのを想像してしまえば、その反応もやむなしといったところだろう。

「世界経済が傾きそうね……」

「一族総出なら、できるんじゃないか？」

「まあ、そんな」とするメリットが無いから、やらないけど」

マークが根っからの商人と評したその性格は、世代を超えて受け継がれているらしい。

「それで、私のことを知って探していたなら、何か買いたいものがあると思ってもいいかしら？」

「ん……まあ、買いたいものはあるんだが……果たしてアンナに用意できるか……」

「挑発のつもり？ ちゃんとお金さえ払ってもらえれば、人型機動兵器だつて用意して見せるわよっ。」

「そう？ じゃあ、本命とは違うけど一つもらおうかな」

「あら、買ってくれるの？ それじゃあこの……」

「って、そんなもん買うなあああッ！」

「って、そんなもん売るなあああッ！」

あつという間に決まりそうになった商談に、エイミィと忍が渾身の力で待ったをかける。

もちろん、本気ではなかったであろうマークは、両手を上げて降参と示し、アンナも苦笑しながら取り出した機動兵器のパンプレットを鞆に戻す。

「そんなもの、いつも持ち歩いてるの？」

「まさか！ でも、受けがいいし、商談がありそうなときは持ち歩くようにしてるのよ」

「確かにインパクトは抜群でしょうね……」

アンナとはそろそろ短くない付き合いになるがゆえに、ただの冗談ではないと察した忍がため息をつくが、それを知ってか知らずか、マークは本命について尋ねる。

『ギガファイアー』と『鋼の大剣』、それに……『デュランダル』のレプリカとかないかな？」

「マーク君!？」

「……」

マークの要求に、エイミィが思わず悲鳴のような声を上げるが、それに対してアンナは先程とは一転して表情を引き締めていた。

『ギガファイアー』が何かはわからないけど、鋼の大剣は……まあ、用意できなくもないわ。でもデュランダル？ 確かフランスにそんな名前の特殊航空爆弾があった気が……」

「剣の方だ」

「……ローランの歌に出てくる、不滅の刃？」

「いや、人竜戦役で活躍した、烈火の剣だ」

「……」

最初こそ叫んでしまったエイミィだが、元々アンナはマークの世界の出身である可能性があったことを思い出し、黙って成り行きを見守る。

忍も、アンナの反応がいつもと違うと感じ、押し黙る。そんな沈黙の中、マークの真意を測ろうとするアンナであったが、それもマークの差し出したものによって答えを得る。

「……ああ、そっちの商品を買うには、これが必要だったかな？」

「これ、まさか……『メンバーカード』……!？」

それは、はるか昔、アンナの先祖が発行したと伝わる、秘密の店の会員証。ある時期を境に、店舗を待たなくなった現在、これを持つ可能性があるのは一人しかいなかった。



「……それは失礼した」

そうして書き直された領収書に書かれた数字は、なんと3495万にまで減っていた。

「は、半額……！」

「ねえ、杏奈……こんなにして大丈夫なの？」

「……もともと死蔵に近い品物だし、問題ないのよ」

「そう言う割には、目がうつろよ？」

そんな騒ぎを横目に、マークはマークで忍から指導された小切手で支払いを済ませようとするが、それにアンナが待ったをかける。

「流石に現物を持って来てない今、お金は受け取れないわ」

「そこは信用しているしいんだが……じゃあ、シノブに任せてもいいか？」

「構わないわよ」

「了解。それじゃあ……現金を用意してもらった方がいいかな？」

「持って帰るのが面倒だし、支払方法は何でもいいわよ」

後日、月村邸にて取引することに決まり、アンナは早々に帰路にいった。なんでも、品を取り出すのに相当な手間が必要らしい。

「下手をすれば、何千年もしまい込んでたはずだしなあ」

「……本当に、こんな偶然ってあるんだねえ」

「……「ついついのを運命っていうんでしょねえ」

マークとは違いエイミィと忍は、次元航行技術のないこの地球で、はるか昔に交わされた約束が果たされたことに、何やら感動しているらしかった。

だが、そんな乙女の感動も、マークには理解しがたいものであった



ようだ。

「たぶん、あいつのミッドにもいると思ってる。」

「まさか……」

流星にそれは無いだろうと否定するエイミーであったが、マークから言わせてみれば、それこそまさかである。

「まあ、向うまで探すつもりはないし、どっちでもいいか」

そう結論付けたマークは、テーブルに残った覚めた紅茶を飲み干すのであった。

「いや、たすかったよ……マイナーな部品だし、もう大手では扱っていないって聞いてたからさあ」

「どうせウチは弱小零細よ……」

その日、本局第四技術部では、マークの依頼に対応するため造られた、後付け式カートリッジユニット追加生産のためのパーツが納品されていた。

そして、そんなキワモノを作る責任者のような立場となってしまうマリエルは、決して潤沢とは言えない予算をやりくりして、ユニットの更なる安全性を追求していたのである。

「そんな」と言っていないって！ アンナだって、わかってこつという隙間に手を出しているんじゃない？」

「当然！ ……まあ、あくまでウチは個人経営だし、大企業様に太刀打ちしようなんて思わないわよ」

「そのくせ、どんな店よりも品揃えはいいんだから、ウチの部署も助かってるんだけどね」

そんなことを話しながら納品書のやり取りをする二人であったが、途中でマリエルの手が止まる。

「どうしたの？」

「そう言えば、あの『細身の剣』助かったって言ってなかったなと思って……今さらだけど、ありがとうね」

「別にお礼なんていいわよ……商人として、頼まれた品物を納品しただけだし」

そう、以前マリエルがマークに見せた実験品は、アンナの用意した『細身の剣』の錬成品をベースに作られたものであったのだ。

「それでも言いたかったんだよ」

「ふうん……まあ、それならありがたく受け取っておくわ」

アンナはそう言って立ち上がり、マリエルに背を向ける。

「じゃ、また何か必要なものが出来たら連絡してね」

「うん、その時にはお世話になります」

そのまま立ち去ったアンナを最後まで見送ったマリエルは、改めて気合を入れ直し、研究室へと戻っていくのであった。

「いやはや、いつもすまないね」

「別に対価はもらってるし、何の問題もないわ」

時を同じくして、とある管理世界の、とある研究施設でも、商品の引き渡しが行われていた。

「……はい、薬品、食料品、嗜好品、娯楽品、全て確認しました」  
「ありがとうウーノちゃん。いやあ、こんな楽を覚えたら、おねえさんよそで働けなくなっちゃうわあ」

「ほう、ならこの専属になったらどうだい？」

「冗談！ 私としては、ウーノちゃんを雇う方向でいきたいわ？」

「勘弁してくれたまえ、まだ娘たちを嫁に出す気はないんだよ」

そう言っただけ笑いあう二人とは裏腹に、このやり取りも何度目かとウーノはため息を漏らすのであった。

「しかしアンナ、君もよくこの仕事を受ける気になったもんだね？」

「きっかけとしては、相手が曾祖母の代からのお得意様なのよ、ジェイル」

ジェイルの今更な問いかけに、アンナは肩をすくめながら答える。

アンナだつて馬鹿ではない、どころか、商人としては類稀なる才を持った女性なのだ。この取引が、管理局の法に触れることもちゃんと理解していた。

「……義理堅いね」

「商売って言うのは、信用がモノを言うのよ？ それに、ご先祖様だつて非正規軍とかと取引していたこともあるし……結局、その時自分が正しいと思ったことをするしかないのよ」

それはどういう意味かとジェイルが問いただそうとするが、その前にアンナは立ち上がる。

「きっかけは、と言っただけはずよ？ それ以上は自分で考えなさい」

「相変わらず、厳しいね」

先手を取られたジェイルは、やはりアンナには叶わないとばかりに

両手を投げ出す。

それを見て、アンナは再び肩をすくめ、いつの間にか長い付き合いになってしまった男へと声をかける。

「じゃあそろそろ帰るけど……食事と、最低限の運動ぐらいしておきなさい。また一段と青白くなったんじゃない？」

「善処しよう」

「……ウーノちゃん気を付けてね？ 本当に、次来たら餓死していたなんてありえそつで怖いから」

「……善処します」

父娘そろって頼りない返事を聞いたアンナは、これは納品時以外にも足を運ぶべきか、本気で悩んだと言っつ。

## 第75話 「卒業」

本人たちの自覚のないまま、かなり忙しい日々を過ごしていた面々であったが、どうやらそんな日々にも一区切りがつきそうであった。

「もう卒業か……早かったな」

「元々、三か月間だけの速成コースだったからね」

「速成だけあって、凄い密度で大変だったね。でも、それも終わりだと思えば、少し名残惜しいかも」

しみじみとするマークにフェイト、なのはであったが、もしこの場に第三者が居たら全力で否定しただろう。

本来であれば、そのたった三か月がひたすら長く感じ、地獄のような日々が終わる卒業を、喜びむせび泣いてもおかしくないのだが、それを指摘できる者はいなかった。

「それで、正式に管理局に入局することになるわけだが……二人は武装局員として配置されることになるのか？」

「えっと、本当だったら、どこかの部隊に所属することになるらしいですけど……」

「私たちはまだ学生だから、基本的に予備隊員……時間があるときだけの、追加要員になるらしいよ？」

「なるほど……」

つまり、正式にどこかの部隊に所属するのではなく、出撃できるタ イミングに合った部隊に臨時で配置されるという事らしい。

「俺と似たような感じか？」

「……まあ、間違っっては、いない？」

「むしろ、マークさんに同行する人達の方に似てると思う」

ちなみにマークの場合は、マークの出撃時間に合わせて人材と情報を集めるといふものであり、似ているように聞こえるが、正確にはなのは達と真逆の扱いであったりする。

そんな特別扱いがまかり通るほど、マークの戦闘関係の能力は突出しているのだ。

「それなり以上にはやれるつもりだけど、新人には違いないし、しばらくは指導官が付くことになると思う」

「……指導官になるやつも、大変そうだな」

同じ部隊に所属する新人ならまだいいのかもしれないが、この二人は違う。

嘱託魔導師としての活動していた時期もあるため、即戦力となることも期待されているのだ。

さらに言えば、二人以上の実力者を指導官にするのも難しいだろう。

実力者には実力者の戦場があり、そこに新人を連れ込むのは難しい。とはいえ、実力的に可能であっても、下積み的一切を飛ばしてしまつのは、二人の為にもならない。

そんなことを考えているマークに、二人以外の声がかかる。

「あら、今日はずいぶん早いのね」

「あ、先生！」

「まあ、最後だしな」

声のした方へ振り返ると、そこには三人がお世話になった訓練校の教官、ファーン・コラードがいた。

「最後……ね。正直に言って、こんな複雑な気持ちで今日この日を迎えるとは、思わなかったわ」

「優秀な生徒なら、今までもいただろう？」

「ええ……でも、こんなに手のかかった優秀な生徒は、他にいなかったわ」

今までの彼女にとって、優秀な生徒といえば、成績の良い、手のかからない生徒であった。

だが、今回の三人、特にマークは違っていた。確かに能力は高く、素行も悪くないのだが、その態度に問題があったのだ。

「ある意味、理想の生徒であったと自負しているが？」

「自分で『ある意味』とつける時点で、自覚はあるでしょう？」

コーランの言葉に顔を背けるマークは、やはりやり過ぎた自覚があるのだろう。

マークがどんな生徒であったのかを一言で表せば、『なぜ？』『何で？』を連発する、幼児のような生徒であったのだ。

「知識欲と言えば聞こえはいいけど……」

「そ、その分戦略・戦術関係は優秀だっただろう？」

「その分野で、あなたが生徒を名乗るのは間違っていると思っわ」「確かに……」

そもそもマークが過去に何をやっていたか聞けば、複数の答えがあるとはいえ、まず間違いなく『軍師』という答えが返って来るのだ。だから、戦略・戦術においては、マークはプロと言って間違いはない。

「少し噛み合わない部分もあったけど、この三か月で修正できたのでしょ？」

「もちろん！ まあ、戦術ならともかく、戦略関係を披露することは無いだろうがな」

「流石に上の立場にならないと、戦略関係の知識は使わないよね。マークも、管理局の上層部に立つ気は無いんでしょ？」

「無い…」

フェイトの確認に、いつにたく強い口調による断言であったが、何となく、なのは達は魔王のような存在と戦う一団の指揮をマークがするよつに思えてならなかった。

「まあ、そこら辺は今後のあなた達の活躍次第でしょう？」

「辞退する……ハヤテあたりに任せる方が、誰にとってもいいと思うんだがな」

「そう言えば、リオンさんもそつち方面には強そうだね」

マークの一言で、最近無限書庫にこもることが多いと言う、元皇子を思い出すのはであったが、この場にはいない人物について話をしても仕方がない。

コラードは一つ咳払いをし、この場に来た目的を果たす。

「高町士官候補生、テストロッサ執務官候補生は今後、ハラオウン提督及び、ハラオウン執務官の指示で任務につくことになるでしょう」

「はい…」

「了解です」

二人は、訓練校に来て習った敬礼と共に返事をする。

「テストロッサ三等陸尉は、特殊技術官として任務は変わらず継続されます。同時に、グラム提督が提案した『特務六課』に所属となります」

「……ああ、俺か？ 了解しました。しかし、特務六課というのは、初耳なのですか？」



鈍い反応を返すマークであったが、そんな中でも初耳な単語について尋ねる。

「文字通り六つ目の特務機動隊です。魔王に関する脅威対策室の設立とともに、今後創設される予定の部隊だそうですね。」

「新部隊……魔王のことを思えば仕方ないんだろうが、少しばかり気が早くないか？」

「被害が出てからでは遅い、という事でしょうっ。」

そんな言葉を交わす二人を前に、フェイトは自身の進路に対し迷いを感じていた。

(母さんのような人を止めたいという気持ちは、今も変わらない。けど……)

同時に、マークの相方であり続けたいという願いも、強くあった。

(どうにか両立できないかな?)

そう思っても、難しいのはわかっている。

マークの隣にいれば、間違いなく魔物退治が中心となるだろう。それは、犯罪に走るしかないと諦めてしまっている人達を救いたいという、フェイトの願いとあまりにも遠かった。

では、マークの方からフェイトに寄り添ってもらうのはどうか？  
これもまた難しい。

管理局がマークに求める役割は、魔王やそれに準ずる者の対処であり、そのような事は、マークにしかできないのだ。

「どうするにせよ、グラムとは話をしなきゃならんな。」

「わたし達はしばらくフリーだし、手が必要なら言ってくたさいね？」

「う、うん……」

「ああ、頼りにしてるよ」

そんなことを考えていたフェイトであったが、なのはの言葉が聞こえ、ほぼ反射的に返事をする。

そんなフェイトに気付いているのかいないのか、マークは改めて「リードに向き直り、感謝の意を伝える。」

「色々と難しい生徒だっただろうが、今日まで指導いただき、ありがとうございます」

「ありがとうございますー！」

「あなた達の、これからの活躍を期待しているわ」

「ううして、短くも充実していたマークの学生生活が終了した。」

「……あつという間でしたけど、どうでしたか？」

簡易的な卒業式モドキを終え、アースラ経由で海鳴へと帰る道すがら、なのははマークに尋ねる。

入校以前に、マークが学び舎へ行くことを楽しみにしていたと、フェイトに聞いていたためだ。

「そうだな……思いのほか味気ないこともあったし、楽しいこともあった」

「どんなことが？」

フェイトが詳細を訪ね、マークは短かった学生生活を思い浮かべる。

「なんて言っか……もっと、スズカやアリサみたいのが居るのを想像していた」

「？」

「学友って言うのかな？ もっと和気藹々としたもんだと思ってた」「えっと、皆ですっと同じ授業、ってわけじゃないからかな？」

速成コースという事で、二人だけの講義も多かったのですが、他の生徒との絡みが少なかったことを言っているのだろう。

それでもマークは、校内で知り合った数人と連絡先を交換できる程度の交流はあった。

「十分仲良くしてるように見えたけど……」

「せっかくの機会だったのに、友好的な関係を築けたのがほんの数人だぞ？」

なのはからしてみれば十分な物に聞こえたが、マークには不満らしい。もっとも、こればかりは組織に所属した経験が無ければ分からないだろうと、マークも理解を強いるようなことはしなかった。

「まあ、その数人とのやり取りは、なかなか得難い体験だったかな」

「ヴァイスさんとか、おもしろい人でしたからね」

マークにとって、初めてできた学友でもあり同時に、なのは達にとっても数少ない年上の友人であった。

「ナノハとフェイトにとっては、どうだったんだ？」

「あ……正直に言ったら、忙し過ぎて、気が付いたら終わっていたって感じが……」

「マークが居なかったら、ここで知り合いを作れなかったかも……」

「そんなことないと思うがねえ……」

ただでさえ海鳴の学校があるのだ。そちらでの勉強に加え、速成コースの密度は、当たり前前に努力ができるのは達をもってしても、

つらいものがあった。

そんな次第で、あの講義は退屈だった、この課題は大変だったと愚痴が混ざってきたが、そんな会話でさえ、マークにとっては新鮮だった。

「さて、それじゃ俺はここまでかな」

「え、用事か何かあるんですか？」

「今度アルザスへ行く、クローベル統幕議長の護衛の打ち合わせがある。まあ、俺の役割は、護衛より通訳を期待されてるみたいだけどな」  
「そ、そうなんだ……」

「この後の予定を告げるマークに、フェイト達は途端に歯切れが悪くなってしまふ。そのことにマークは少し首をかしげ、すぐに理解した。

「ああ、なるほど……じゃあ、一時間以内に終わらせてくる」

「え、大丈夫なんですか？」

「ああ。だから、待ってる皆によろしくな？」

マークはそう言い残し、有言実行を果たすために走り去る。その後ろ姿を見送りながら、フェイト達はマークに内緒で準備していたことがばれてしまったのだと悟った。

「あゝあ、あとちょっとだったのに……」

「卒業祝いパーティー……マークにとっては、最初で最後の機会なのに」

そう、なのは達はまだ小学校と中学校があるが、マークにはこれから先、卒業などと言う機会は無いだらう。

それゆえの企画であったのだが、どうやらサプライズには失敗してしまっただようであった。

ちなみに、フェイト達がサプライズパーティーを知っていた理由としては、いつものメンバーが集まれる時間帯に、マークをちゃんと連れてくるためであったのだが……

「成功半分、失敗半分かな？」

「最悪ばれてもいいから、確実につれてくるようにすることだったから、一応成功でいいんじゃないかな？」

だが結局のところ、マークに無理をするように強いてしまったようなものなので、成功とは言い難いとフェイトは考える。

「……今度から、サプライズは止めるべきかな？」

「うん、しっかり時間があることを確認しないとダメだったね……」

失敗は次への糧へと昇華し、二人はハラオウン邸で待っているだろう皆へ報告に戻る。

待機していた一同が、帰ってきた二人にクラッカーを全て鳴らしてしまい、慌てて買いに行く羽目になったのはご愛嬌と言ったところだろう。

「あ、マークさん」

「お疲れ様です。あと、ご卒業おめでとつぎびいます？」

「あれ、今日でしたっけ？」

「バツカ！ 何とぼけたこと言っただよ……」

マークが会議室につくと、先に集めていた面々からにぎやかな声がかげられる。いつの間にかマークとの仕事を押し付けられる立場に立ってしまった、ロイド隊の面々である。

「祝いの言葉、ありがとう。それでだな、身内の連中が何やら企んでる

みたいで……早めに帰りたいんだ」

「ずいぶんとまあ……」

「ストレートな物言いですね……」

感謝と共に割と勝手な要求をするマークに、会議室の一同は呆れるとともに頭を抱える。

マークと活動を共にすることが多いロイド隊はともかく、クローベル幕僚議長の護衛担当は特に面白くなさそうな顔をする。

だが、文句を言う前に、マークは真剣な目つきで資料へと向かってしまったため、何も言えずに引き下がってしまう。

「……… 大体理解した。良くも悪くも、通常の護衛任務だな」

「はい。計画の時点では、特に変更を加えていません。ただ、アルザスの守護竜の行動原理が解明できていないのに、不安が残ります」

「相手がナーガの系譜であるなら、敵対行動を行わない限り安全は保障する」

「ナーガの系譜でなければ？」

「好戦的な竜じゃないんだろ？ なら、問題ない」

断言するマークだが、護衛官からすれば何の根拠も提示されていない以上、納得するわけにはいかない。

マークも一拍遅れてそのことに気付いたのか、説明を追加した。

「元々ナーガの系譜が外の世界へ出たのは、人と争うことを嫌ったためだ。そもそも、現地住民とはうまく共存しているんだろ？」

それなら、こちらからよっぽどのことをしない限り、問題ないと太鼓判を押す。

「それより、俺は現地住民の感情の方が気になるんだが……」

「ああ、それでしたら……」

そんなことで、つい護衛計画について話し始めてしまった二人に、慌てて周囲も参加し始める。そんなふうになし崩し的に話し合いが始まってしまったことに気が付いた時には、改めて会議を始めるには遅すぎた。

「……まあ、有意義な時間でしたし、改めてというには、話し合いが進み過ぎてしまいましたね」

「むう、つい興に乗ってしまったな。……会議の予定時間はまだあるが、もう詰めることもないし、終わりにするか？」

「アルザスの守護竜に関しては、多少の援護をつけますが基本的にマーク三尉に任せます。他は、現地住民とそのほかの飛竜種の対処を……」

守護竜の行動パターンを想定し、対策を練る。一部変更により発生する不具合を誰かが指摘し、さらに修正をかける。

マークには懐かしく、そして楽しい時間であったが、それも瞬く間に終わってしまい、最終確認後解散となった。

「……グラム提督が推すのも、理解できますね」

「いやあ、もっとゴリ押しな奴だと思っていたんですがね……」

解散後、すぐにこの場を離れたマークの背を見送りながら発せられた議長 of 護衛官筆頭の言葉に、ロイドが答える。

実際、ロイドにとってマークは、自分たちに援護を任せ、圧倒的な武力による力押しを主体とする戦法を好む人物であり、精密な戦法を練れるようには見えなかった。

「効率と信用の問題でしょうか？ 彼が指揮を執る場合、特に信用が足

りなかったため、細かな作戦を考えなかつたんだと思いますよ」

「……今回は、トップが議長だからこそ、か」

今回マークが立案に参加することになった計画は、信頼がある上司が発した精密な戦術となるという事だろう。

そのように評価を改められていたマークであったが、当の本人はこの後に待っているだろう卒業祝いで、頭が一杯であった。

そして帰って早々に受けたクラッカーの斉射に、思わず目を白黒させることになった。

「あゝ、驚いた……」

「大丈夫？」

「ナハハ……マークさん、本気ではねあがったからなあ」

未だにバクバク言っている心臓を押さえるマークに、一同は心配と苦笑を乗せた視線を向ける。

「しかし……先に始めていてもよかったのに」

「そんなわけにはいかないわよー」

「今回の主役はマークさんなんですから」

アリスとすずかがそう主張するが、マークからしてみればなのはとフェイトだったのだ。

「わたし達は他に機会がありますから」

「ああ、なるほど……その時は盛大に祝福させてもらおう」

微妙に気になる言葉があったが、一応の納得を得て、ようやくパーティーが始まった。

途中でマークが秘蔵の酒を出しエイミーに没収されたり、訓練校での出来事を語りはやてを不安にさせたり、ちょっと真面目に進路の話をしたりと、基本的に穏やかな時間が過ぎていった。



## 第76話 「アルザス」

「……そろそろだね」

「そろそろと言っても、俺達の出番は現地についてからだ。移動中は、そんなに緊張する必要はないって」

がちがちになったフェイトの肩を叩くマークは、その初々しさを微笑ましく思う。

というのも、正式な局員となったフェイトに、初めての任務としてマークの護衛に同行を依頼したのだ。

初任務だという事に加え、その護衛対象が管理局でもトップクラスの偉人では、緊張するなどというのは無理というものだろう。

それに対してもう一人の同行者は、緊張とは無縁の、どこか気だるげな雰囲気を見せていた。

「なんでアタシまで……」

「ハヤテから話は通っているだろうっ？」

そんなヴィータの愚痴に、マークはある種の疑問を投げかける。

フェイトにヴィータ、それにマークが居るこの場所は、アルザスへと向かう輸送艦の中に設けられた一室であり、ここに至るまで直前ブリーフィングなども済ませているのだ。

「そりゃあ聞いているって！……でもさ、護衛の任務に参加するんなら、ザフィーラの方が適任だろ？」

「……本当に聞いてきたのか？」

マークの胡乱な視線に、思わず反発しそうになるヴィータであったが、そこは何とかフェイトが宥める。

そうして宥められたヴィータに、マークは簡潔にヴィータを呼んだ

理由を述べる。

「……一言で言えば、見た目の問題だ。こつこつ男より、子供相手の方が警戒心を持たれにくいだろ？」

「……………つち！」

山ほど湧き出た文句を、ヴィータは辛うじて飲み込んだ。

今回の任務はただの護衛ではなく、ある会談の護衛である。そんな中、威圧感を持った護衛で身を固めるのは、相手に悪い印象を与えかねないのだ。

「実際の実力と見た目がかけ離れているヴィータは、今回みたいなきに使いやすいんだ」

「……………わかったよ」

不承不承と言った体でうなづくヴィータであったが、実のところその程度の理由は最初からわかっていたのだ。

本当に聞きたかったのは、そこでなのは選ばずに、ヴィータに同行を依頼した理由であったのだが……

(言わないってことは、そういう事なんだろうな……………)

ヴィータの予想、というよりは、リオンとシャルルの予想であるが、おそらくマークはこの場にヴィータを招くことに、相当骨を折ったはずである。

(アタシらがやったことを、今回の護衛対象が知らねえ何ざありえねえだろうに……………)

かつて守護騎士たちが行った凶行は、管理世界でも悪名高い。そんな中、ヴィータを管理局高官の護衛に当てると言つのは、それ相応の

反発があったことだろう。

それにもかかわらずヴィータがこの場にいるのは、マークとリンディの尽力があったからにほかならず、そこから、守護騎士たちへの印象操作が多分に見え隠れしているのだ。

(えっと、過去のアタシらと今のアタシらは別物だってことを、内外に見せつける……だっけか)

細かいニュアンスはともかくとして、現状の守護騎士たちは頼りになる味方だと示したいのだというのが、リオンたちの予想だ。

そして、これらの行為を推進する立場にマークは立っているのだらうとも。

(認めたくはねーが、だからと言って何も言わねーのも……)

以前と変わらず、はやてを斬り捨てようとしたマークを快くは思わないが、それでも今の彼が尽力してくれているというのがわからない。ヴィータではない。

感謝を伝えるべきか否かという葛藤を抱えて、ヴィータはマークの様子をつかがい……自身の目を疑った。

「……何やってんだ？」

「踊っているんだ」

突然のマークの奇行に目を丸くするヴィータは、思わずフェイトの方に助けを求めるように視線をやる。

するとフェイトは、困ったような笑みと共に、マークの奇行について説明を始めた。

「日程が決まってから、楽しみでじっとしてられないらしいよ。」

「……ガキかよ……」

完全に遠足前の子ども状態のマークに、ヴィータは頭を抱える。  
いかにこの三名が普段の護衛に対する追加要員とはいえ、こんな浮かれた様で護衛になるのかと、半ば本気で不安になった。

(……でも、それもしゃーなーのかもしんねえな)

マークの事情と、今回の会談相手を思えば、これぐらいの浮かれようは理解できないでもないかと、ヴィータはひそかに思う。

次元漂流者として、ただ一人で異界へと飛ばされたマーク。

管理局という次元世界最大の組織ですら、出身世界を確認できなかった以上、同朋との再会は絶望的であったはずだ。

それが一転して、同族と会えるという事になれば、少しばかりテンションが上がるのも、致し方ないことだろう。

だが、そんな納得も、マークを見つめるフェイトの苦しそうな顔を見てしまえば、容易く霧散してしまった。

「……マークも、きついんだよ」

そんなヴィータの疑問を感じたのか、フェイトは静かにマークの思いを語る。

「マークだって、会談相手が自分の知っている存在だとはい、本気で思っていないよ」

言われて、ヴィータはようやく思い至る。

確かに、今回の会談相手は竜であるかもしれない。だが、その竜がマークの同族であるなどと、一体誰が言ったであろうか？

しかし、同時に相手が竜であることに変わりはない、そうであるがゆえに、万に一つは常に存在してしまう。

「限りなく低い可能性でも……うっん、限りなく低い可能性だからこそ、マークは希望を捨てようとして、捨てきれない」

もっと明確に期待できるなら、あるいは可能性が皆無ならマークだってここまで落ち着きがなくなることは無かっただろう。

当人からしてみれば、1%の希望は、100%の絶望より性質が悪いといったところであろうか。

(まあ、多少複雑なんだろうが、それでもじっとしていられないってことには変わらないか……)

結局のところ、マークが落ち着きなく動き回っているという事に変わりはない。ただ、その動作を不快に思うのかといえば、決してその限りではなかった。

というのも、マークの踊りは、ただ思うがままに飛んで、跳ねて、回っているのではなく、明らかに誰かに見せることを意識したものであったからだ。

「……なあ、それ、誰かに習ったのか？」

「ん？ ああ、人の為すことは、なんでも珍しく思ってた時期もあったし、仲間たちと親交を深めるときにも、習ったりしてたな」

「へえ……」

マークの返答に納得しつつも、片手間というには本格的に見える踊りに、少しだけ疑問に思う。

真相としては、長命種の時間感覚と、マークの仲間たちが一流であったことが原因だろう。

もちろんそんな事実の意味は無く、マークの詳細を知らないものにとっては天稟の才思われていくことになるのだが、それはまた別の話である。

「あら、なんだか楽しそうね？」

「おや、議長殿？」

そこへ現れた今回の任務の最重要人物に、マークは居住まいを正し敬礼をする。

フェイトとヴィータも慌ててそれに倣うが、それもクローベル議長によってすぐに止められてしまう。

「別にそんなにかしこまる必要はないわ。あくまで、こっちが急に尋ねてきただけですから」

「え、えっと……」

「いえ、正式な所属となった今、はじめを忘れるわけにはいきません」

「ああ、その通りだ、です」

あまりに穏やかに言われ、フェイトが少し迷ってしまおうが、そこは年の功というべきか、マークとヴィータが毅然と答える。

ただ、議長はその返事を予想していたのだろう。あらかじめ考えていた提案を、マークへと投げかける。

「そのことなのだけど、今回マーク君には、色々アドバイスしてもらったことになるわよね？ その時に、階級差があって話に割り込めないとかあっては困るから、限定的なものになるけど、わたしと同程度の発言権を認めることになったのよ」

「それはまた……」

思い切ったことをすると、マークは半ばあきれる。それと同時に、議長のはからいに感謝の念も抱いた。

だが、フェイトはこの話をうまく理解できなかったようで首をかしげ、ヴィータは微妙なニュアンスの部分が確言されるまで、余計な発言は控えるべきと判断した。



訳にして、極めて簡潔に語った。

「竜たちの一部は人の姿をとるようになり、その名称をマムクート……正確には竜人族として、世界に居残った」

「それがマークのご先祖様？」

「ん〜……寿命が寿命だから、先祖って言うより……でも、今回は竜についてだから、竜人族についてはまたにしよう」

フェイトの問いかけに危うく話が脱線しかかるが、マークは辛うじて堪えて、竜の話が続ける。

「それで、人の姿をとることを良しとしなかった一部と、単純に居心地の悪くなった世界から出ようと思った一部が、文字通り世界から出て行ったわけだ」

「おそろく、アルザスにいるのがそのうちのひとり……かしらね」

「可能性は低いな……正直に言えば、まだ始祖竜の世代で枝分かれした一族の可能性もあるし、全く別の祖から生まれた一族かもしれない」

そもそもマークの故郷のデータが管理局に無い以上、アルザスにいるのがマークの知っている一族である可能性は、極めて低いと言わざるを得ない。

「だから今から俺の話す情報が、今回の件に役立つ可能性は低いぞ？」  
「それでも構わないわ」

少し長めの念押しをしたマークは、同意が得られたのをきっかけに自身の知る竜の特徴を述べる。

神竜族、火竜族、氷竜族、魔竜族、地竜族、飛竜族……マークの語る竜族の特徴に耳を傾けるミゼットたちであったが、中でも魔竜族については決して無視できない特徴が含まれていた。



「魔法無効化ですって……！」  
「ああ、他の竜族と比べ鱗が脆い……とはいえ、管理局にとっては天敵以外の何物でもないな」

それはマークの言う欠点も、気休めにすらならない衝撃であった。もちろん、今すぐどうという話ではないし、今この場にはマークがいるし、ベルカ式を扱うヴェータもいる。

今はとにかく話を進めることを優先し、魔竜族については後日話し合うことになってしまふ。

「後は邪竜とか、暗黒竜とかいるけど……まあ、今は関係ないな」

「……それも、後日にお願いなね」  
「了解」

結局、ミゼットにとって頭の痛い問題が増えただけにも感じたが、マークはそれを否定する。

「今も生き残ってるような奴は、基本的に人の子と敵対したりはしないさ……もちろん、何されても手を出さないってわけじゃないから、馬鹿な真似をすれば、話は別だぞ？」

「……肝に銘じておくわ」

こうして講義を終えてみれば、問題点ばかりが印象に残った気がするが、当然そればかりではない。

最強の竜であるナーガは人の子の味方であるし、人の子憎しと戦った竜たちは、そのほとんどがすでに討たれている。

だからほとんど問題は無いと結論付けたところで、一行はアルザスへと到着したのであった。

「ん、ん~~~~… 空気が濃いな」

「空気が濃い？」

「あ~~~~… 竜にとつて、過ごしやすい場所ってことだ」

アルザスに到着し、ミゼットたちがアルザスに住む人たちの集落へと出向いている中、マーク達は集落の入り口付近で待機し、現地住民の見世物となっていた。

《しっかし……遠慮のない視線だな》

《まあそう言っつなよ、ヴィータ》

《部外者があまり出入りしないみたいだからね》

ヴィータが念話で話す内容は、はっきりと不快を示すものであったが、別に害があるものでないから受け入れるとマークは諭す。

ただ、このまま見世物になっているだけというのもつまらないので、マークは相手方を観察することで無聊を慰めていた。

「赤ん坊だ」

「ホントだ……あ、手を振ってる」

「振りかえしてやったらどうだ？」

若いと言うより、まだ幼い少女が二人もいるためか、マークたちへの警戒は最低限で、むしろ興味の方が勝っているようであるのがせめてもの救いだらう。

最初に手を振ったのがきっかけとなったのか、近づかず、声を出さずにコミュニケーションをとるのが暗黙の了解となってしまうたのか、若い住人と隊員たちのへんなポーズ合戦が始めてしまったが、なかなか面白かったのでこれもありなのだろう。

ただ、管理局にたどり着いたあたりから何人か身悶えていたので、やっぱり駄目だったらしい。

「聖域に入らなければ、好きにして構わないそうよ」  
「……守護竜には繋いでもらえなかったか」

しばらくして長老との話し合いから帰ってきたミゼットの第一声に、マークは少し苦い顔で答える。

「そもそも、連絡の手段なんてないみたいよ？」

「共存って言うより、相互不干渉ってところか……で、会談は諦めたのか？」

「まさか！ だから、そこをお願いしに来たのよ」

「……押しかけて、さらに呼び出すなんて趣味じゃないんだがな」

マークはガリガリと頭を掻いて、気が進まないとアピールするが、ここはミゼットとしても譲るわけにはいかなかった。

「魔王のような脅威もある以上、できるだけのこととはやっておきたいのよ」

「……わかった。下がって、耳をふさいでおけ」

ミゼットの言葉に、マークは折れ、大きく深呼吸を始める。

そして、全員がすっかり下がり、念のため障壁まで張ったのを確認し、咆えた。

『オオオオオオオ』

』

その爆音は途中から音を無くし、されど大気を震わせ、その咆哮のすさまじさを余すことなく示し続けた。

世界の果てまで届いたと確信させられた咆哮に、応えがかえってきたのはある意味当然の事なのだろう。

マークの呼びかけに答えた黒い巨体は、突如として一同の眼前へと

姿を現したのだった。

「まず、何の前触れもなく訪れたことを謝罪しておく。それで、少し話がしたいんだが、かまわないか？」

「」

「そうか……おい、了承を得たぞ」

「え、ええ……」

マークの咆哮と、突然の巨体の登場に気圧されていたミゼットであったが、マークに促され改めて自身の目的を語る。

一言でまとめれば、魔王という驚異を前に、手を組みたいというもの。

「」

「ああ、そこからか……魔王って言うのは……」

どうにも、目の前の竜、ヴォルテールの言葉がわからないどころか一部聞こえないのがもどかしいが、マークの言葉からどのような会話が行われているか想像する。

「……という事で、管理局」

「」

「そう、アレがこっちにくる可能性は低いから……」

「」

「いや、流石に俺だけじゃ……」

「」

「まあ、それはそうなんだが……」

何やら雲行きが怪しいが、マークが話を振ってこないという事は、まだ自分の出る幕ではないのだろうと、ミゼットはそこまで考え、この会談のほぼすべてをマークに任せてしまっている事実が気が付い

た。

(……私も老いたと、そういう事かしらねえ)

あくまでマークに頼むのは通訳だけのつもりであったミゼットが、ほんの少し話をしただけで、この交渉を任せてもよいと思ってしまうのは、自分の気迫が衰えているからだと感じてしまう。

それと同時に、同族であるマークに任せた方が、成功率が高いのではと純粹に思っている自分もいることを感じてしまえば、もはやこの場に割って入ることは不可能であった。

「ああ、そういう事だ」

そこまで考えたのと時を同じくして、マークとヴォルテールが何やら同意に至ったらしい。

マークはミゼットへと向き直り、交渉の結果を述べる。

「ミッドチルダに常駐することはないが、手を貸してもいいって」

「……ありがとうございます。それでは、詳細につきましては……」

「は？ 無理に決まってるだろ………そんな時の俺は戦場だ」

ヴォルテールの言葉が、ミゼットの言葉を遮り、マークがヴォルテールの言葉を否定する。

「……」  
「そうしてくれ………村の、適性の高い娘を巫女に定めるから、それを管理局に置いておけて」

「……連絡係ってわけね。わかったわ」

「じゃあ、誰が決まったら、その子を通して連絡して……村長あたりなら、局に連絡付けられるよな?」

「ええ、問題ないわ」

「ううして目的は無事に果たされ、後は相手方が去るのを待ち、こちらも帰るだけだったのだが、そこで一つ問題が発生した。

「……この這いつくばってる連中はなんだ?」

「……たぶん、守護竜様と直接話をする貴方に、礼拝をしているんでしょ?」

この場でマークが表情を変えることは無かった。だが、マークが面倒だと思っているという事は、彼に関わった者からしてみれば自明の理であった。

「……そういえば、ヴォルテールってマークとは……」

「一応、ナーガ様のことは知っているらしいけど……こっちに来て独自の進化を遂げた、始祖竜の系譜らしい」

「……」

「同じ祖ではあるけど、全くの別種だな。しいて言うのなら、地竜と火竜の間ぐらいの性質に見えたけど、当てにはならん」

門も機能不全を起こしているらしいし、当てが外れたとすねるマークは、帰りの道行でフェイトを膝に抱えて放さなかったとか。

## 第77話 「そっだ、キャンプに行こう」

「ふう……」

その日、マークは珍しくミッドチルダにある管理局の本部の休憩所にいた。

販売機で購入した紙コップのコーヒーを片手に一息つくマークの表情には、いくらかの疲労が滲んでいた。

それというのも、武装局員の再訓練計画が立ちあげられた原因として、何度か訓練に立ち会わなければならなくなってしまったからである。

それもただ立ち会うのではなく、教官の真似事までさせられる始末であり、未だ人にものを教えることになれないマークは四苦八苦していたのだった。

「あら、こんなところで貴方に会うなんて珍しいわね」

「……ああ、そう言えば地上勤務だったな」

精神的疲労があるとはいえ、声をかけられるまで気付かなかったことに驚きつつ、マークは声の主へと顔を向ける。

そこにいたのは、マークの知人の中では数少ない地上に勤める魔導師である、クイント・ナカジマがいた。

「本局か技術部以外で会うのは、初めてだったかしら？」

「そっだな……ついで、お前が一人で見えるのも初めてだよ」

「一人じゃないわよ？」

何となく疑問を口にしたマークを否定するクイントは、少し離れたところに居る仲間たちに視線をやる。

その視線を追ったマークは、クイントが仲間とともにここに来たと

知るが、疲れた頭ではなぜ来たのかを察することまではできなかった。

「これからひと仕事って時に貴方を見かけたから、ちょっと待って貰ってね……それで、何してたの？」

「なるほど……いや、再訓練の手伝いを少しな」

「ああ、そう言えば私たちも二月後位に予定されてたわね」

お互いがここにいる理由に納得し、もとより少し挨拶をするだけだのつもりであったため思い切り上げようとしたところ、クイントの仲間たちが会話に加わってきた。

「ひょっとして、アナタが最近噂の竜人さん？ 最近ウチのクイント

がお世話になってるみたいで……」

「ちよっと、メガーヌ……」

「挨拶ぐらいいいでしょ？ それに、聞いた実力から鑑みると、ウチとの合同任務とかこの先ありそうだし」

メガーヌの挨拶をきっかけに、クイントのチームメンバーが次々に名乗り上げる。その中でも特に印象に残ったのは、隊長であるゼスト・グランガイツであろう。

「へえ……」

「……なんだ？」

マークが思わずあげた感嘆の声に、ゼストは不信そうな目を向ける。

「いや、管理局最高峰の実力に、つい感心してしまっただけだ」

「買いかぶり過ぎだ」

「あら、最強じゃなく、最高峰ならあながち間違いじゃないんじゃない



「？」

表情を変えずにマークの言葉を否定するゼストであったが、数少ないオーバースランクであることは事実であると、メガー又は同意する。

そして、全盛期を過去に持つものを除外すれば、地上最強を名乗ってもおかしくないと、部隊の面々は思っていた。

だが、ゼストより実績を出しているものもそれなり以上にいるし、得意とする距離の関係から直接実力の上下を比べられないものも多いと、ゼストはそう考えていた。

「まあ、本人がそう考えているなら、無理にこっちの感想を押し付けたりはしないさ」

「むっ……」

しかし、初対面の相手にこつまで言われては、なんだか自分が聞き分けのない子どもの様な気分させられてしまう。

だからと言って、相手の言い分を全面的に受け入れられるわけでもなく、なんだかもやもやしたものが残るだけの結果となってしまうた。

「しかし、これ程のメンバーを総動員する任務なんて、そうあるもんじゃないだろっ」

「そうでもないのよっ」

「今もかなり面倒な事やってるし……あ、内容は秘密ね？」

「同僚に話せないようなこともやってるのか……」

「別に後ろめたいことをやってるわけじゃないんだけどね。あと、今

回は別件よっ」

「それぐらいこつおけ」

「これ以上はお互いのためにならないと、ゼストはマーク達の会話を

止める。

当人たちもすぐにそのことに思い至ったのか、特に何を言うわけもなくゼストに従い、これ以上の話を控えた。

「最低でもAランクの部隊に言う事じゃないかもしれないが、無理はするなよっ。」

「その心遣いはありがたく貰っておこう。」

「じゃあ、マーク君も体を大事にね。」

最後に簡単な言葉を交わし、今度こそクイント達と別れたマークは、事務局でいくつかの手続きをして海鳴へと戻る。

後日聞く話となるが、この時のクイント達の任務は、とある世界に現れたアンノウン……魔物の討伐であったそうだ。

そのことを早急に知れなかったことに、マークはグラムを通じて管理局上層に抗議をしたりと、また面倒事へと発展することになるのだが、それはまた別の話。

そんな面倒事はともかくとして、海鳴に住む面々はそれぞれ忙しい日々を過ごしていた。

特に忙しそうに立ち回っていたのははやてで、それに次ぐのがフェイトとなのはだろう。

学生として海鳴で過ごしながら、管理局に所属してその任務をこなすということが、未だ幼いその身に疲労をため込んでいく結果につながるというのは、当然のことだろう。

「そんなわけだから、そろそろ完全休養日を作ろうと思う。」

最初に提案したのが誰だったのかはもはやわからないが、とりあえずどこかに遊びに行くことに決定した。

もちろん、どこに行くかでそれなりに揉めることも含めて、最初が

ら最後まで楽しむべきことだろう。

「うーん……海やプールに行くには、もう遅いよね？」

「最近過ごしやすくなってきたしなあ……まだ暑かったところは、わたしは訓練校に通ってて忙しかったし」

「温水プールは？ あるいは外国まで行けば、問題ないんじゃない？」

「せっかくだし、季節感ある催しにしよう。俺やクロノ達のパスポート問題が面倒だから、国内で頼む」

「あれ、そっちの方って問題ないんじゃない？」

「基本的には。でも、完璧じゃないらしいから、問題が起こる可能性は避けておきたいかも」

忙しさにかまけて、夏休みすら特に何もしていなかったことに気付かされ、来年はもっと余裕を持って遊ぼうと心に決める。

「疲れを取るためなら、温泉とかはどう？ 今の季節なら紅葉を見ながらって言うのも、いいんじゃないかな？」

「温泉か……春に毎年行ってるし、それをメインにするのはちょっと味気ないんじゃない？」

「でも、フェイトちゃんやちやん達とは、行ったことないし……」

「どこかで遊んで、温泉に入れる宿に泊まればいいんじゃないか」

「もうちょっと時期をずらせば、スキーとかに行ってもいいかも」

「今休養が必要みたいだし、それはまたの機会にね」

今回だけではなく次回以降の予定も増えていくが、楽しみが増えるのはいいことなのだろう。

ただ、この調子で増え続けたら、五年計画で実施していく必要が出てくるかもしれない。

「季節感を大切にするとしたら、紅葉狩りは欠かせないと思うの」

「狩り？」

「……そこら辺は日本語の表現の一つよ。間違っても弓矢とか持ち出さないでよね？」

「じゃあ、ハイキングかな」

「それならいっそ、キャンプにしない？」

「あれ、温泉宿は？」

あーでもない、こーでもない、あれはどうか、これがいいんじゃないかと話し続け、最終的には一般のキャンプ場に行くことになった。

今回は温泉を諦め、テントで寝泊まりすることにするらしい。

「マークさんは、気が乗らないですか？」

「いや、みんな楽しそうだしいいんじゃないか」

ただ一人、マークは行軍中の野営などのイメージが先行して、今回のキャンプを魅力的には感じなかったが、それは自身の想像力が貧困なためだと自覚していた。

さすがが微妙に申し訳なさそうにしていたが、マークにとっては割と見当違いな懸念なので適当に宥めておく。

そうして迎えた当日。な大人数は、数台の車を使いキャンプ場へと訪れていた。

そして、マークを含めた数人が、キャンプ場に到着した早々からグロッキー状態になっているのであった。

「……気持ち、悪い……」

『正直、自分で走って来たほうが、楽であったと思う……』

「帰りはそうしましょうか……」

理由は簡単、車酔いである。ちなみに、車に酔ってしまったのは

マーク、ザフィーラ、それにシャルマであった。

「体質かしらねえ……」

「帰りは酔い止めの薬を飲んでみるかい？」

高町夫妻が声をかけてくれたが、残念なことにそれにこたえる余裕がある者はいなかった。

「そう言えば、運転する方が酔わないと聞いたような……」

「……一応言っておくが、車の運転は免許制だぞ？」

「マーク君なら、習い始めたらすぐだとは思っけどね」

リンディの言葉にわずかな反応があったような気がして、クロノはあらかじめ釘を刺しておく。

だが、確かに今回は無理でも、次回以降のために免許を取ろうとするマークは実に容易く想像できた。

「魔法で何とかできないの？」

「……状態異常回復の魔法は、ある。けど……」

「あゝ……そう言えば、マークさんの魔法って自分には使用不可だった気が」

アリスの問いかけに何とか答えたマークであったが、すぐに言葉を濁らせる。その理由を察したユーノの言葉に、一同は同情しかできなかった。

それでもある程度時間が経って落ち着いたのか、状態異常回復魔法である『レスト』の杖をザフィーラとシャルマに使い、マークも士郎たちに続き車から荷物を降ろす作業に取り掛かった。

「マーク、大丈夫？」

「無理しちゃダメだよっ」

「大丈夫だよ」

テントの機材を運ぶ途中、料理の材料を運ぶフェイトとアリシアにも心配されるが、そのころには本当に体調は改善されていた。

「でも、車内から見えた紅葉を楽しむ余裕が無かったのは残念だ」

「ふふ、別にこれから見れば問題ないよ」

「むしろ移動中よりじっくり見れるし」

マークのおどけたような言葉に余裕を感じ、本当に大丈夫そうだと納得した二人は、その言葉に含まれた本音に答える。

事実今もマーク達の視界に入っている紅葉した木々は美しく、きつい思いをしても来たかいがあつたと思わせるものであった。

ちなみに今回来たキャンプ場は河原にあり、もう少し上流に行つたところでは溪谷くだりもやっている、ポストカードにもなつていそうな景色の場所である。

荷物を運び終え、持って来ていたお弁当で軽い昼食を済ませた一同は、持ってきたテントの組み立てを始めた。

「お、思ってたより重い……!!」

「頑張つて引つ張つて!!」

「まだてっぺんが垂れてるよ」

「よつと!!」

「さすがマーク!今のうちにロープ固定して!!」

「ぎゃあー!!待つて待つて、こっちが抜けかけてる!!」

ワイワイと騒ぎながらテントを組む子供たちに混ざるマークであったが、その行動の端々から経験者であることが見て取れた。

「マークさんは、こついつたことに慣れているのか?」

「もっと殺伐としたものなら」

恭也の問いかけに、マークは肩をすくめながら答える。一刻も早く休みたいと思う兵士たちが天幕を立てた際は、こんなに和気藹々とした空気は無かった。

むしろ手間取ったり失敗する奴が居たら、怒気を超えていきなり殺気が飛んでくるような感じだ。

「それは……なかなかハードだな」

「あくまで極端な場合だぞ？」

それでもただの作業をこなす以上の感情は起こらないのだから、レジャーとしてのキャンプというものは、マークにとってとても新鮮であった。

今回初めてテントを立てる子供たちにとっては、言わずもなだるう。

テントひとつ立てるのに大騒ぎした子どもたちとは違い、その後はおとなたち中心にテントを設置した時は、楽しげでこそあったがかなりスムーズに事が進んだ。

「それじゃあ、次は夕食の準備かな」

「え、もうっ？」

「キャンプで定番と言ったらカレーだし、煮込んでる間でも遊べるだろっ？」

「なるほど」

慣れない作業であるし、時間がかかることを前提にしている。

「じゃあ、俺は水を汲んでくる」

「あ、わたしも行きますー！」

「こっちは火の準備かな」

「野菜を切る人はこっちな〜」

「お米は？」

「飯ごうで炊くけど、もう少し後になるわ」

マークが水汲みに名乗りを上げ、土郎が火を、桃子が食材の準備をするリーダーとなる。

それに何人ががついて行くことで、それぞれの作業が始まった。

「川の水を汲むのか？」

「それはちょっと……」

「でも、ここで水道の水を使っつて言つのも、勿体ない気がするわね」

「たしか、パンフレットには……うん、ちょっと離れたところに湧き水があるって」

「ふむ……野菜とかを洗うのは水道の水でいいだろうが、食べる分には湧き水を使うか」

ちなみに水汲み班はマーク、すずか、アリサ、それに美由希にシグナムの五人である。

シグナムの提案は、同じく戦場に立っていたマークならともかく、現代人であるすずか達には受け入れられなかったようだ。

それに続くアリサと美由希の発言にマークはいくらか考え、タンク三つ分だけ脇水を汲んでくることに決めた。

「確かに、野菜を洗ったりするのに湧き水は勿体ないか」

「勿体ないと言つより、調理組は一刻も早く水が欲しいだろう？」

「そうだね、わたし達の往復を待ってるのも退屈だろうね」

善は急げとキャンプ場に設置してある水道に向かい、五人はタンクに水を入れる。

「すずかちゃんとアリサちゃんは大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ、これでも鍛えてますから！」



「それに一回り小さいタンクだし、これぐらい問題ないわよ」  
「まあ、辛くなったらいつでも言えればいい」

美由希に心配されたすずかとアリサだったが、問題ないと気合を入れて答える。

とはいえ体格的に難しいかもしれないと考えたシグナムが、あまり気負うなとフォローを入れ、マークからも一言いうようにと目線で促す。

「まあ、無理はするな。こっちはタンクだけじゃなくて、スズ力達を担ぐぐらいの余裕もあるしな」

「さ、さすがにそれはいいですよ」  
「そうか？」

その様子を想像したのか、すずかがわずかに赤くなるが、確かにこんなところで担がれるのは恥ずかしいだろうなどと、マークも納得する。

それから程なくして、一杯になったタンクをもって調理組の元へと戻った五人は、湧き水を汲みに再度出発する。

「……………流石に多くないか？」

「とはいえ、あの場に居てもやるのが無いんでな」

「せっかくのキャンプだからって、分担がおろそかになってたのが原因かしら？」

「テントと食事の準備は、並行して行うつべきだったかもね」

確かに一つ一つの作業を全員でやるのは無駄が多いだろうが、せっかくのイベントに参加しない手は無い。

まあ、結局その無駄さえ楽しんでいるのだから、こんな文句は口だけなのだろう。

「……そう言えば、魚の一匹でも獲ったりしないのか？」  
「釣竿とか持って来てないし、食材は十分あるからいいんじゃない？」  
「食材も現地調達なら、キャンプというよりサバイバルですね」  
「ひょっとして、キャンプじゃ物足りない？」

再び出されたシグナムの提案に、マークを除いた一同は苦笑を浮かべる。

除かれたマークはというと、人が多い今回のような場所では、現地での調達は一筋縄ではいかないだろうという的外れな感想をいだいていたりする。

「今日は遊びに来てているんだ。樂できるところはしておけ」  
「うむ……そうは言ってもだな」

かつての経験と全く噛み合わないのが、シグナムにとっては不安なのだろう。

その気持ちもわかるマークとしては、何とかそれらしい仕事を振ってやるしかなかった。

「……それじゃあ、そうさせてもらおう」  
「……（なんて言ったの？）」  
「（寝ず番を任せてみた）」

役目を得て足取りの軽くなったシグナムの後ろで、マークからその内容を聞いた三人は、もはや呆れることしかできなかった。

移動の片手間に焚き木になりそうな枝を集めるシグナムを横目に、四人は湧き水をタンクに詰めてキャンプへと戻る。

それからは人手を余らせつつカレーを煮込み、飯ごうでご飯を炊く。

流石に煮込んでいる間は子どもたちも暇を持って余し、川へと遊びに出た。

「マーク君はいかないのかい？」

「……水は嫌いだ」

「ああ、泳げないんだっけ？」

別に水着も持って来ていないし、泳ぐようなことにはならないだろうが、それでも何の用事もないのに水に近づきたくは無いらしい。

とはいえ海上で戦える以上、半分くらいはネタなのだろうとみんな理解していた。

そして、それ以降の時間が流れるのは早かった。

ある程度川で遊んだあとは、ゆっくり夕食を食べ、日が傾いてきた時点でキャンプ場の施設で入浴を済ませ、夜のとばりが落ちたころには、日ごろの疲れもあり早々に寝入ってしまったのである。

もちろん、全員がすぐに寝てしまったわけではないが、ごく一部の例外を除けば、普段よりはずっと早かったのは確かである。

「……寝られないんですか？」

「……まあな、これじゃあシグナムのことを笑えない」

その例外が、テントの前で火の番をしていたマークである。

「シグナムさんは？」

「……歩哨に出た。流石にそれはやり過ぎだと言ったんだがな」

それでも、屋外で休むとなれば居ても立ってもいられなかったのだろう。もちろん、今も火を見ているマークも同様である。

「そう言うスズカは、こんな時間にどうしたんだ？」

「えっと……なんとなく、ですかね？」

もともと、すずかは人より優れた肉体を持っているし、なのは達ほ

ど過酷な生活を送っていなかったのだ。

ふと目が覚めてしまえば寝付けなくなってしまうのも、何となく納得できた。

「やっぱり、長年の習慣はなかなか抜けませんか？」

「自覚は無かったが、そういう事なんだろうなあ」

思わず自嘲してしまうマークに、すずかも苦笑を返しながら腰を据える。

そうして訪れた静寂の中に、火の弾ける音だけが響く。

「月が綺麗だな」

「え？」

思わず聞き返したすずかであったが、マークは気にせず自身の言葉が続ける。

「今までそこそこ世界を渡ってきたが、どこの世界にも月ってあるんだよな」

「……やっぱり、ヒトの住む世界はどこも似かよってるってことですかね？」

「そうなんだろうなあ」

何となく肩透かしを食らったような気分になりつつも、すずかはマークに倣って夜空を見上げる。

市街地ではなかなか見えない星々に、言葉を無くして見入ってしまう。

「……そう言えば、夜の一族だったか？」

「……はい」

そんな静寂を破ったのはマークの唐突で今更な問いかけであり、確認であった。

確かに他の人がいるときに、竜だ吸血鬼だという話はし辛かっただろうし、このタイミングが一番だったのだろう。

「で、夜の一族って、吸血鬼なんだろう？」

「……はい」

「吸血鬼って、血を吸う鬼の事だろ？」

「……はい」

「俺の血を吸ったらどうなるんだ？」

「……はい？」

マークの突飛な考えに、すずかの返答も思わず疑問符がついてしまふ。

「いや、俺もちょっと自分で調べてみて思ったんだけどさ。竜の血を吸った吸血鬼って、どうなるのかな？ それと、吸血鬼に血を吸われた竜って、どうなるのかな？」

「それは……」

前例がない以上、すずかにだってわかるわけがない。とはいえ、一度疑問に思ってしまったえば確かに興味深い件ではある。

「まあ、ちょっと気になってさ。もしよければ、何滴か血を分けて……」

「飲んでみてもいいですか？」

「え？」

「はい？」

数秒間を置き、すずかは自身の早合点に気付くが、何となく、撤回したくは無かった。

マークは少し悩むが、人と交わることができる竜の血が、人と交わることのできる吸血鬼に害をなすことはないだろうと楽観的に考え、了承する。

「じゃあ、どつぞ」

「その、いただきます」

差し出されたマークの指先を、すずかは少しためらいつつ口に含む。

何となくすぐつたい気持ちになりつつ、牙が立つのに備えたマークに対し、すずかがひと思いに噛み付き……鈍い痛みが残るのみで、その皮膚を食い破ることは叶わなかった。

「……柔らかいのに、硬ひれふ」

「……」

マークは無言ですずかの口から指を抜き、ナイフを取出し薄く切れ込みを作り、再びすずかの口に押し込んだ。

今度こそ感じた血の味に、すずかは舌でその血を絡め取り、飲み下す。マークもすずかの喉がごとりと動いたのを見てとり、指を引き抜いて何かしらの変化が無いか様子を観察する。

「……何も、無いです？」

「……俺もなんともないな」

その結果に拍子抜けするべきか、何も無くてよかったと思うべきなのか悩む。

悩みつつも、多少あった緊張が解けてしまったのか、すずかを急に睡魔が襲った。

「まあ、時間も時間だったわけだし、もう休め」

「……はい、おやすみなさい」

少しふらつきながらテントに戻ったすずかを見送り、マークは傷ついた指先を見やる。

「……別に治ったりはしないか」

優れた再生力を持った吸血鬼の唾液に何の効果もないことを確認し、結局自分は何がしたかったのかと頭を抱える。

その後シグナムが戻ってきたのを確認し、マークもテントに戻って休むのであった。

次の日、シグナムと代わりリオンとザフィーラまで寝ず番をやっていたことに気づいたはやてが、ちょっとばかり説教のような事をしたことを除けば平和な朝であった。

その後、上流におもむき沢くだりに参加し、今回のキャンプライベントは終わりを告げた。

もちろん、帰りの車でも三人がダウンしたのは、言うまでもないことだろう。

## 第78話 「格付け」

時空管理局の本局、その居住区の一室にて、彼らはグラスを傾けていた。

「順調、と言っているのかな？」

「そうだな……現状はそう言い現わして問題ないだろう」

マークの言葉に、グレアムが同意する。

というより、順調でなければ酒など飲みかわす暇を持てなかっただろうことを思えば、わざわざ言葉で確認するまでもなかったことだろう。

「特務六課は無事創設され、守護騎士を含む俺たちの立場も安定してきた。若干忙し過ぎるくらいがあるが、おおむね平和……何の問題もない」

順調、平和と言いながらもどこか不満そうなマークは、グラスをありそこに入っていたワインを飲み干す。

そんなマークの様子を興味深げに見るグレアムであったが、外見からはその不満の理由を推測できるものではない。

「……何かあったのか？」

「別に……ああ、リンディがついにフェイトに養子の件を切り出したぞ？」

「やっとか……だが、君が今考えていることは全く違う事だろう？」

グレアムの問いかけをわかりやすくそらしたマークであったが、あまりにもあからさま過ぎた。

普段ならもつとつまくやる以上、これは遠まわしに愚痴に付き合え



と言う意味だろう。

グレアムはマークのグラスにワインを注ぎ足し、リーゼ達の何かつまみを持ってくるように頼む。

「……魔物が出たらしいな」

「ああ、それが……」

マークから出た言葉に、グレアムも顔をしかめる。

特務六課が創設され、魔物を代表とした特殊危険生物の対策を任せられることになったグレアム達だが、その最初の仕事となったのが事後報告の処理であったのだ。

「別に、俺の関わらないところで戦闘があったことを責めているんじゃない。遭遇して、何らかの被害があるのに『管轄外だから』と逃げ帰る輩より、よっぽど良い。問題は……」

「深追いして、隊は全滅。その後部隊を守るため、同部隊より小隊が組織され再出撃。また全滅」

考え得る限り、最悪の結果である。唯一の救いは、僅かばかりの情報収集が行えていたことだが、それも生存者がいたというわけではなく、リアルタイムで通信を行っていたからというのだから、全く話にならない。

「……」うちに連絡しなかった理由が、面子の為というのも腹立たしい

「裏でこそこそやっているうちに、地上の方に嗅ぎつかれたのも痛かったな」

「それは俺には関係ない」

空と地上という風に別々に動いているように見えても、やはり一つの組織なのだ。

下手な失態を隠す行為は当然のように露見し、相応の問題となったのだが、マークにとってはあまり興味のあるものではなかった。

「分かっている。ただ、そのせいで六課の立ち位置が微妙なものになったことは、覚えておいてほしい」

「何のために部隊を作ったのかって、責められてるんだっただか？」

「ただの被害ではなく、殉職者まで出してしまったてはな……」

「はっ！ 六課創設のために、予算でも削られたやっかみか？」

要は、わざわざ専門の部隊を用意するまでもないとアピールしようとして失敗した馬鹿が、路線を変えて攻めてきたというわけだろうと嗤うマークに、グレアムがため息をつきながら否定する。

「最初に突っ込んだ隊は、ただその地に住む人々の害を排除しようとして、続いたのは仇討のためだ」

「……面子じゃなく、市民と仲間の名誉のため、か」

「ちなみに、裏でこそこそやっていたのは部隊の人間ではなく、新参に守護者の名を奪われることを恐れたとある御隠居だったそうだ」

「割を喰うのはいつも、不器用な軍人ってわけか」

やってられるかと言わんばかりに体を投げ出しグラスをあおるマークに、グレアムも今回ばかりは同意する。

だが、それで終わらせることができないのが、人の上に立つ者の務めだろう。

「俺の知る魔物をまとめたりリストだ」

「……十六種か、思ったより少ないな」

「それにドラゴンゾンビが加えられる。さらにそれぞれ二十のランクに分けられるが、まあそこまで細かく見る必要はないか」

「……戦闘力の差はどれくらいになる？」

マークの出した資料に、グラムはわずかに感じていた酔いが吹き飛ばされる。

資料では下級・上級という格付けもされているが、それだけでは不明な点が多すぎる。

「……俺も戦ったすべての個体を覚えてるわけじゃないが、覚えている最弱の個体の戦闘力が30そこそこだった気がする」

「その数値の基準は？」

「ああ、そこからか」

そこでようやくマークは、自身が昔から使っていた能力の計り方をグラムに伝える。

「ふむ……生命力、力、魔力、速さ、技、幸運、守備、魔防の八項目からなる戦闘力の測定法か……幸運というのは？」

「不確定要素とでも言えばいいかな？ 単純な能力に対する＋と思っていればいい」

他の項目についても一応説明を受け、それからようやく本題に入る。

すなわち、管理局のランク付けとのすり合わせである。

「一般的な成人男性の能力が、20後半ぐらいになる」

「……それだけ聞けば、一般人でも魔物に届きそうにも感じるが？」

「最弱に届いたところで、あまり意味は無いな」

「ああ、確かに最弱の数値だったな」

流石に底辺を競っても仕方がない以上、一般的な新人と中堅武装局員であるC・Bランクの隊員で比較を行う。

「えっと……「じいつと、じいつがいいかな？」

「うちの隊員だな……Cランクがレスター、Bランクがマチスか」

「このレスターの戦闘力が71、マチスが83だな。上級の魔物相手だと、厳しい」

「ふむ……うちの子たちはどうかな？」

使い魔としてグレアムの後ろに控えていた二人を改めて見て、マークはその戦闘力を計る。

「リーゼアリアが138で、リーゼロットが141」

「ほう、ほぼ同じ実力だと思っていたが……」

「近接戦闘を行うやつの方が、生命力が高くなりやすいからな」

そして、生命力は他の能力の二倍近い数値になるため、僅かな差ではあるが近接戦闘職の方が戦闘力という数値が高くなりやすいのだ。とはいえ、どんな理由であろうと相方より高い数値であったロットテとしては、気分がいいのだろう。先程より、尻尾の動きが激しくなっている。

「10〜20の差で、勝負は決定的になって来るかということか？」

「よほど尖がったスペックでなければ、とだけ言っておこう」

極端な話、戦闘力にいくら差があっても、防御を貫き、生命力を抉りきる攻撃力があれば、どんな敵だって倒せる可能性はある。

「二人ほどのスペックならば、大抵の魔物は問題無く倒せる。だが、ドラゴンゾンビや魔王は別格だし、何事にも例外はあるから注意してくれ」

「別格か……具体的には、と聞いてもいいかね？」

マークが敢えて濁した部分であり、グレアムもそのことを分かった上での質問だ。

マークからしてみれば、まず会う事のない存在を恐れすぎることが無いように秘したのであり、グレアムからすれば万が一に備えて、という事だ。

だが、問われてしまえば答えないわけにはいかない。

「……………ドラゴンゾンビが最低で190、魔王はだいたい300だ」「なっ……………」

正直に言つて、マーク自身も馬鹿げた数字であると思う。一例として、200に至れば英雄と呼ばれるレベルなのだ。

「待て、待ってくれ……………確か、その魔王にとどめを刺したのは……………」

「ナノハだが、別に彼女の戦闘力が極めて高いわけじゃない。彼女の当時の力は160といったところだぞ」

「えっと、どう反応したらいいんですかね？」

呆氣にとられるグレアムの代わりに、リーゼアリア困ったような笑みを浮かべる。

当時9歳の少女が自分たちを超えていることを悔しがるべきか、戦闘力の差が100を超えているにもかかわらず、魔王を倒したという事に驚くべきか、あるいは呆れるべきか。

「ナノハのスターライトブレイカーは、かなり特殊な魔法だったからな……………カートリッジで極限まで強化し、さらに周囲の魔力を集めてるんだっけ？」

「はい……………でも、難しい技能ではあるけど、唯一の技能というわけではないですよっ……………」

「あれはもはや、あの子の唯一だろう。素の魔力が30弱、カートリッジで追加された魔力が20強、そして、周囲から集めた魔力が130強だ」

「……………言葉もないですね」

自身の持つ魔力の実に数倍の魔力を収束し、打ち出して見せたなのはの行為が、まさしく英雄の一撃であったと理解したのだろう。

ただ、再現性は極めて低い。

もつとも、魔王の心は完全に折れたであろうから、再び現れる可能性というのほぼ皆無。現れるとすれば邪竜なのだが、こちらは魔王よりさらにスペックが高かったりする。

(それまでに、どれぐらい鍛えられるかな?)

なのはを筆頭に、フェイトやはやて、それにすずかも順調に成長している。

不謹慎であるが、魔物という敵も得られる以上、何とかなるとマークは考えていた。

「……」

「何だ？」

ふと逸れた思考から戻ってきたマークが、ふと視線を感じ問いかける。

その視線の主であるグラムだが、何度か口を開こうとするが、ついに声を出すことなく、その首をゆっくりと左右に振った。

(彼自身の戦闘力は、聞かない方がいいんだろっね……)

基本的に、ヒトとは自身の持つ物差しでしか他者を計れないものだ。

すなわち、マークの実力は最低でも魔王に匹敵し、場合によっては超えかねない。

とはいえ、かつてのマークは魔王を滅ぼしきれず、封印せざるを得なかった過去もあるし、魔王には届かない可能性も十分ある。

だが、ここで聞かなければ、あくまでも『かもしれない』で済むのだ。ならばあえて聞くわけにはいかないだろう。

「……まあいい。それじゃあ今後の話だが、魔物の出現地点の調査を行うから、六課で部隊を手配しておいてくれ」

「了解した。後日地上のレジアス少将との会談も用意されたから、そのことも忘れないでくれたまえ」

「はあ……魔物の危険性を周知させておくべきだった、とか言われるのかねえ」

思わずため息をつくマークであったが、全く新しい部隊を作ったのだから、これぐらいの摩擦は仕方のないことだと、諦めるほかなかった。

せめて事態を隠蔽しようとしたところその老害の方に矛先が向けばよかったのにと、そんな愚痴を言うぐらいしかできないのだ。

もちろん、マークの予定はこれだけにとどまらない。

「再訓練の予定表に、新型デバイスのテスト、人体研究に関する論文の提出、指揮官講習、それと……」

「デバイスは次回の調査に持っていき、論文は今最終チェック中で問題ない。他は日程調整をよろしく……」

「……六課を運営するに当たり、君もいずれ責任者となる。そろそろ補佐官を決めるべきなのだが、公募しても構わないかい？」

「優秀なのを雇って衝突するのと、何も知らない若手を一から育てるの、どっちのほうが手っ取り早いと思う？」

「優秀で、理解のある若いのを……」

「そんなのそこから辺に転がってるわけないだろ？」

結局、新部隊と言っても人材不足は深刻なのは変わりない。むしろ実績が無い分、余所より集まりが悪いくらいなのだ。

せめて今日ぐらいはと、酒を飲みかわす二人なのであった。

「…………テスト、終了です」

やっと十歳に届くかという若い少女のその一言と共に、巨大な質量をもった武器が床に叩きつけられる。

否、ただ肩からおろしたただけの動作が、叩きつける動作に感じられてしまうほど、その武器の質量が並はずれていたのだ。

「ふむ、若干振り回されてしまう感が拭いきれないが…………」

「私自身の質量が足りません。かと言って、重しをつけてしまえば本末転倒と思われます」

「武器を軽くしようにも、これ以上は強度に不安が出てしまうしねえ」

少女の言葉に対し、顔色の悪い白衣の男が思案顔を見せる。

とはいえ、今日までの実験ですでに答えは出ているのだ。

「理論上も、実験値もこのバランスが一番と示している、か」

「ドクターは、自身の編み出した理論を、もっと信用して良いかと思われます」

「この世のすべてを疑い、確認するのが研究者という生き物なのだよ」

もつとも、最近の開発ばかりしているが、などと自嘲するドクターと呼ばれた男であったが、少女の耳には届いてなかったようだ。

「…………私は今、新たな真理を知ることが出来ました」

「…………まあ、君がそれでいいんなら何も言わないがね」

何やら感動している少女に少し呆れながらも、ドクターは記録してあった数値に改めて目を通す。



「君の考えたスペックシートは少しばかり単純すぎるくらいがあるが、機能的ではあるな」

「……私の感覚を、拙い言葉を纏め、形にしたドクターが凄いです」

ドクターの手元には、細かい数値が羅列したシートの他に、その数値をまとめ上げ、単純化したものがあった。

その項目は、マークがグラムに説明したものと全く同じものであることを知る者は、まだいない。

「ナギ……基礎性能値270、か」

「ドクター、よろしければ、総合性能値の方で言い直していただけますか」

ナギと呼ばれた少女は、僅かな不満と共にそう告げるが、ドクターはそれには気付かず、ただ数値だけを言い直す。

「総合性能値325、ね」

「まだ伸び代はありますから、五年以内には400に届かせます」

「期待しているよ」

ドクターの言葉に満足したのか、ナギは心なしか頬を紅潮させながら試験室を出る。おそらく訓練室へ、更なるトレーニングのため向かったのだろう。

「……さすがにやり過ぎでは」

「いやいや、最強の個体を作るというコンセプトは、彼女自身も言っていたようにまだ終わってはいないよ」

ナギと入れ替わるように入ってきたウーノに、ドクターは楽しそうに返す。

「この武装も、マーク君の持つ投擲斧『トマホーク』を彼女の牙で覆ったものだが……わかるかい？ 最初の加工以外、この牙は全く干渉を受け入れないのだよ」  
「……」

その斧の特性を語るドクターは、まるで自慢のおもちゃについて語る子供のようで、ウーノとしても換言をする気が失せてしまった。

「それでは、現在凍結中の予備個体はどうでしょうか？」

「ふむ……さすがに最強の座をかけて娘同士に戦わせる気は無いし、別のコンセプトをもって完成させるには癖が強すぎる」

かといって破棄する気は無いし、ならばこのまま凍結して、今後何か思いつけば再開するという事に決まる。

彼らは知らない。この事がのちに、史上最悪の邪竜再誕のきっかけになるといふ事を……

## 第79話 「魔物退治」

「いや、久しぶりに楽しい仕事でしたよ！」

「フェイトのデバイスを弄った方？ それとも新デバイスの作成？」

「両方です！」

最近本局に来ることも増えてきたマークとフェイトは、本局第4技術部にて新造・改造された新たなデバイスを受け取りに来ていた。

「まずはマークさんです。依頼通りの魔力剣ですが、デバイスの全能力を刃の生成につき込んだものになります」

「ん、確かに受け取った」

そもそも、無数の武器を持つマークにとって新しい武器などほぼ無意味ではあるのだが、それでも決して壊れない武器という響きには、少なからぬ興味があつた。

そこへ出てきたのが、フェイトのバルディッシュ・ザンバーである。

「魔力の消費を抑えるため、三段階に分けた強度設定をしています。一応、それ以外に制限を取っ払ったモードも用意していますが……本気で制限なく魔力を喰われますから、絶対に使用しないでくださいね？」

「ならなぜそんな機能付けた……」

「いやあ……憧れませんか？ 『リミッター解除！』とか」

「軍師の立場からすれば、そんな機能に憧れを抱く余地は無いな」

指揮官からすればそんな振れ幅の大きな戦力より、より安定した戦力の方が扱いやすいだろう。

あくまでロマンを理解しようとしないうマークの態度に、マリエルは少しばかり肩を落とす。

だが、隣にいたフェイトは違った。マークの手前、口にこそしなかったが、一時的にでも限界を超える仕様はとても魅力的に見えたのだ。

「ちなみに銘はクラウ・ソラス……光の剣って意味らしいですよ」「ふ〜ん、クラウねえ……」

残念ながら由来を知らない二人は、その銘に何の感慨も持つことは無かった。

「そして、こっちが改造したバルディッシュね」

「はい、ありがとうございます」

「ザンバーフォームを削除して、ブレイドフォームを登録……で、よかったよね？」

マリエルの確認に、フェイトは軽く頷く。

少し大きめの片手剣程度になったブレイドは、以前マークに指摘された過剰な重量を修正した結果である。

「扱いやすさはかなり向上したと思っけど、本当によかったの？」

マリエルの心配は、決定的外れではないだろう。

もともとザンバーフォームは、フェイトの軽くなりがちな攻撃をカバーするためのフォームだったのだ。

そのフォームを残さなくて本当によかったのかと心配するマリエルに、フェイトは笑みを浮かべながら答える。

「大丈夫ですよ。そっちの対策は考えていますから」

「へえ、それは初耳なんだが？」

「マークにもまだ内緒だよ。この後行く魔物討伐の時を期待しててね？」

人差し指を立ててはほほ笑むフェイトに、マークはかなわないと言わんばかりに両手を上げる。

「それじゃあ説明を続けるよ？」

「うん、お願い」

念のためマリエルは一言はさみ、解説を続ける。

「剣身を小さくした結果、消費魔力が32%削減されて、強度が17%向上しています。また、マークさんの持参した剣を参考に刃の構造に変更を加えた為、同形状のデバイスと比較して22%の攻撃力の上昇が見込まれますが、ザンバーフォームと比べれば23%の低下となります。剣身の構成時間は41%短縮され、重量は62%の軽量化が

……」

フェイトの手元にはスペックシートが表示され、そこに延々と記された表示は変更前と変更後、さらにいくつかの改造案まで書かれており、もはや混沌としたものになっていた。

「マリエル」

「その場合さらに14%の……はい？」

「じゅん、わからん」

隣で必死に理解しようとして目を回しているフェイトの代わりに、早々に考えることを辞めたマークがそう答える。

「一言でまとめて？」

「……強化されましたが、その分クセが強くなりました」  
「それで十分だ」

全力を投入して強化した機体について、結果としてほとんど語れなかったことに肩を落とす製作者だったが、それでめげるマリエルではなかった。

「ふ、ふふふ……いいもん。まだなのはちゃんに頼まれたミーティアモードの計画があるもん……」

「マ、マリエルさん？」

「そう！ 魔王戦でマークさんが使用した至高の光『アーリアル』をほぼ同時展開した『流星』を、ミッドの技術で再現する計画ッ！」

「じゃあ、そろそろお暇させてもらおうよ」

「え、マーク!？」

何やら危険なスイッチが入ってしまったと察したマークが、フェイトを連れ一目散に退出する。

退出の間際、何か後ろから声が聞こえたような気もしたが、勘違いという事にした。

「……よかったのかな？」

「……今度、六課の隊員にデバイスの改造を進めてみよう」

後日生け贄を出すと言うマークにフェイトは苦笑を返すが、だからと言って止めるようなことはしなかった。

流星に、進んで話を聞きたいとは思えなかったからだろう。

「まあそっちの話は置いておいて……この後の事は大丈夫か？」

「うん、マークが準備している間に、少し慣らしておくから」

「わかった、じゃあ後で」

受け取ったばかりのバルディッシュをかざすフェイトに、マークも軽く手を上げこの場を後にする。

その数時間後、マーク達はとある管理世界へと訪れていた。

「えっと、わたしってここにおいて大丈夫なんですか？」

「……管理局の規則的には、ちょっと危ないかもしれないわね」

「魔物対策は俺とグレラムが全権持つてるから、まあ大丈夫だろう」

落ち着かないはずかの問いにシャルマルが難しい顔で答え、それをマークが否定する。

「……なんで俺こんなトコに呼ばれたんすか？」

「えっと、副隊長だから？」

その後ろで、ロイド隊長に今回の現場を押し付けられたティーダが嘆き、フェイトがそれを慰めていた。

なぜこんなでこぼこな五人で行動しているのかといえば、先日発見された魔物の調査のためである。

「そもそも、ゼスト隊が調査したのに何をしろってんですか？」

「え、そこから？」

ティーダの疑問に、マークは素直に驚きを表す。どうやらどこかで情報が止まってしまっていたらしく、ティーダは今回の調査を行う理由を聞いていないようだった。

「まずゼスト隊だが、魔物の存在を改めて確認するも、途中で撤退している」

「え、まさか継戦不能者が……！」

「いや、魔物の動きが不可解で、念のためといった面が強い」

魔物が奥へ奥へと誘導するように配置されているように感じられ、専門家であるマークに相談するため引いたとのことだ。

そのままマークが調査を引き継ぐことになったが、別にゼスト隊が敗北したわけではない。

「……厄介そうな敵ですね」

「まあどんな群れにだってボスはあるし、そこは気にするな。で、調査内容は群れの規模とその脅威度、そして他の群れの有無だ」

わかってはいたが、やはり厄介である今回の任務にティータは思わずため息をつく。

「それで、なんでこんなに非正規の人員が多いんですかあ」

「建前としては、フェイトとスズカは俺が直接鍛えていることになっているからで、シャマルは前線に送れる補助系の中で一番頑丈だったから」

「本音は？」

「本隊から人員の選定するのが面倒だった」

「マークさん……」

本来ならグラムが部隊一つ用意するはずだったのだが、正規局員に死者が出ていることを理由に、上層部から制限がかけられてしまったのだ。

もちろん、そんな生々しい理由をマークは口にしなかったが……

あまりにもあんな理由にティータが崩れ落ちるが、マークはそれを無視して各々に役割を振る。

「まず大前提として、指揮は俺がとる」

「まあ、そうよだね」

「前衛は俺とスズカで、中衛がフェイトとティータ。後衛はシャマル」  
「了解です」

「中衛と後衛を分けたが、奇襲も考えられるし実際は二人で固まって動いてくれ」



「分かったわ」

その後もいくらか陣形と戦術を確認し、ティードが立ち直ったのを見計らい今回の本題を確認する。

「まずフェイトは新しく取得したスキルの確認」

『疾風迅雷』と、切り札だね」

「期待しているよ。そしてスズカもスキルの確認だが、それ以上に魔物を殺れるかの確認だな」

「……はっ」

「まあ、害獣退治は少しずつ慣らしていってくれ」

フェイトについては全く心配していないマークであったが、問題はすずかである。

（スズカの想いが俺の予想通りなら、命を奪う事が恐ろしいんじゃないかって、殺した結果どう思われるかが怖いってことになるんだが……）

自分が人間ではないことに強いコンプレックスを抱くすずかは、自身の抱く人間像から外れることを恐れていると、マークは予想したのだ。

（そう言う意味では、俺との出会いはスズカにとって運が悪かったんだらうな）

マークが居なければ、すずかは戦場に立つ術を持つことなく、なのは達の無事を祈るだけの生活を送っていたらう。

だがすずかはマークと出会い、戦う術を手に入れてしまった。

そうなった以上、戦わないと言う選択を取ることにはできないのだが、だからと言って戦ってしまえば自身の考える人間から外れてしま

「さすがは今、そんな矛盾の中で苦しんでいるわけだが……」

(つまり、戦う事が人として正しいと思わせればいいわけだ)

聞く人が聞けば、眉をひそめる程度では済まない考えだが、戦わな  
いという選択ができないすずかにとって、これが最善であるとマーク  
は確信していた。

「……名目は調査だが、できれば殲滅しておきたい」

「被害も出てますし、それに越したことはないですけど……」

その一言に、すずかがわずかに肩を震わせた。マークだけではな  
く、管理局の正式な局員にとっても、魔物は滅ぼすべきと認識してい  
ると知ったからだ。

つまり人にとって、魔物を殺すことは正しい。そうすずかが思えば  
とりあえずの目標は達成である。

この程度ですずかの意識が完全に変わるとは思えないが、それでも  
きっかけにはなるはずだ。

とはいえ、今回の任務をすずかのために費やすわけにもいかず、  
マークは合図をだして魔物が現れたという森へと足を踏み入れた。

「ふむ、今のところは雑魚ばかりだな」

「合計十三体。……その全てが、魔導師ランクC相当ですね」

マークの端的過ぎる評価を、ティータが補足する。

「部隊がちゃんと機能していれば、全く危険を感じないレベルですね」

「単体としてもあれだけど、連携とか一切ないし」

「ちゃんと立ち回れば、一人でもなんとかなりますね」

もちろん、早期発見と先手を取る事を徹底した結果ではあるが、それにしたって手ごたえがなさ過ぎた。

「じゃあそろそろスキルの方を試してみようか？」

「うん」

「頑張ります」

フェイトとすずかがなお一層の気合を入れ、それに合わせるかのように四体のスケルトンが現れる。

だが、そのことに今さら驚くような者はいない。索敵能力はともかく、戦場におけるマークの状況把握能力は他の追隨を許すものではないと、皆が理解させられていたからだ。

「まずはわたしが…」

すずかは宣言し、数秒と駆けることなく先頭に立つスケルトンに肉薄する。

その段階に至り、ようやくこちらに気付いたスケルトンであったがそれでは遅すぎる。

「はっ…」

鋭い呼気と共に放たれた一閃はスケルトンの持っていた剣を叩き、根元から両断してのけた。

それは理想的な『武器破壊』の妙技。格下が相手とはいえ、一撃で武器を破壊して見せたことからその技能を完全に習得したと証明して見せたのだ。

もちろん、それだけで終わるはずもなく、武器を失ったスケルトンにすずかは追撃を加え、その首を切り落とす。

「次はわたしだよ」

瞬く間に一体のスケルトンを倒したすずかに残りの三体が迫ろうとし、それもフェイトによって阻まれる。

いや、阻むなんてものではない。高速で飛来する閃光が奔り、あっという間に二体のスケルトンがただの骨に還される。

その閃光となったフェイトは、まさに『疾風迅雷』。技後硬直すら無視した一瞬二撃は、まだ無理だろうと思っていたマークの想像以上であった。

「ほっ……」

思わず感嘆の声を上げるマークも、新造デバイスであるクラウ・ソラスで残った一体を頭頂部から縦に両断する。

「いやあ、ここまで来ると敵に同情しそうになりますね」

「結局、相手に一度も攻撃させなかったものね」

いくら格下とはいえ、ただの一度も武器を振るう事すら許さないなど、そうできる事ではない。

いくらスペックが高かろうが、相手に時間を与えないことなど不可能なのだから。

「ほら、行くぞー」

そんなとんでもないことをやってのけたという自覚が全く見られない三人に呼ばれ、ティードとシヤマルもさらに奥へと進む。

その途中で出てきた下級魔物のそのほとんどが、まともに戦いになる前に屠られることになったのは、ごく当然の結末だろう。

だが、この程度で終わるようなら正規部隊から被害が出る筈もない。

一行は、更なる緊張感を持って進んでいった。

「モーサドウーグがまだ難しいかな」

「……すみません」

スケルトン討伐数が二十体を超えてから、次第にスケルトン以外の魔物が出始めたのだが、その中でも魔犬の相手にすずかが躊躇を見せってしまったのだ。

幸いけがは無かったが、だからと言ってそのまま進むわけにもいかなくなってしまおう。

「……もう大丈夫です。次はやれます」

「……まあ、スズカがそう言っんなら試してみるか」

少しの間目を閉じ、瞑想をしていたすずかが覚悟を決めたのかそう断言する。

とはいえ、マークも全面的に信用したわけではない。もとより戦えなかったからこそ『武器破壊』を習得したのだ。

たかだか数秒で意識改革ができるなどは考えられなかった。

「あと、そろそろフェイトの切り札も実践してみるか？」

「まだ大丈夫だよ？」

いつでも撤退できるようにマークが提案したが、それにフェイトは首をかしげる。

「……確かに切り札を切らなくても対応できるだろうが、その前に試しておく必要があるだろ？」

「あ、うん、そうだったね」

しかるべき時に使っここその切り札。そう言う認識があったフェイトは、実戦であらかじめ試してみるといこう考えがすっかり抜けてし

まっていたようだ。

練習では出来ていたようだし、それで十分と考えてしまったのもわからないではなかった。

そうして次が最後かと思いながら進む五人の前に、おそらくは群れのボスと思われる個体が現れる。

「エルダーバールだな」

それはサイクロプス、デスガーゴイルなどと同クラスの上級魔物の一体。能力的には魔導師ランクAAに届くだろう強力な個体であるが、それ以上に問題があった。

「……………」

「く、蜘蛛っ……」

そう、エルダーバールは、巨大な毒蜘蛛であったのだ。

見慣れているマークはともかく、他の四人にとってはトラウマものの巨大さで、その姿は背筋を凍らせた。

(ああ、そう言えば虫を見る機会も少なくなったよなあ)

マークから見れば過剰なまでに清潔さを求めた世界は、このような生き物を見る機会も奪っていた。

その結果虫に対する耐性が付くこともなく、その上でエルダーバールなど見てしまえば、硬直しても仕方がないことだろう。

生活環境が違うのだから仕方がないと、そう思うマークであったが、思いのほか復帰が早いメンバーがいた。

「うっわ、気持ち悪いっすね……………」

「ティード、大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないですけど、大丈夫っす」

「何だそれは……」

微妙に腰が引けながらも戦う気のティードに感化されたのか、残った三人も何とか戦える状態にまで戻ってくる。

「できれば触りたくないね」

「できればじゃなくて、絶対触りたくないよ……」

「私は援護だけでいいですよね？」

そんな三人を見て苦笑し合う男性陣であったが、すぐにその意識を戦闘へと切り替える。

「さて、あの一体だけなら問題ないんだが……」

「え、まさか……」

仮にも、武装隊を二度も退けた群れのボスなのだ。何の策もなく彼らの前に出てきたわけではなかった。

四方八方から木々を揺らす音が聞こえ、そこからボールが大量に現れたのだ。

ようやく動けるようになった一同が再び固まるのに、マークは軽くため息をつく。

「防御が低いすずかは下がらせたかったんだが……まあ、怪我をするのも経験の内かな？」

「せ、戦闘を行う以上、怪我をするのは仕方ないと思うけど、あれは嫌ですー！」

「じゃあ、頑張って躲せ」

言われるまでもなく、すずかは回避に死力を尽くすだろう。生きるか死ぬかの恐怖より、巨大蜘蛛への嫌悪感の方が優先されるのだから、やはり戦いへの適正は高いのだからとマークは思う。

「フェイトはさっきの話どおり切り札を」

「わかった！」

「シヤマルは魔物の足止めを最優先」

「はい！」

「ティーダはスズカへ向かう魔物に攻撃して、意識をそらせ」

「了解！」

返事こそしっかりしたのだが、まだ動きが固い。嫌悪感はもちろん、不利な状況に追い込まれたという緊張感がかなり影響しているのだろう。

故に、マークは軍師として叫ぶ。

「いかに策らしきものを行おうが、所詮は本能を優先させた蟲にすぎん！ やるぞー！」

ただ一言。『七色の叫び』と称される神軍師の言葉により、フェイト達の体に力が宿る。

その後押しに発射されたティーダの弾丸が、ボールに突き刺さり、シヤマルが発動したバインドがその巨体を縫い付ける。

二人の攻撃により、魔物たちの意識がティーダたちに向かったのを確認したすずかは、攻撃より回避を意識した一撃離脱を繰り返す。

それらを確認し、フェイトは事前に言われた通りに切り札を発動した。

「オーバードライブッ！」

あくまで気合を入れるための一言であったが、その前後の違いは歴然である。

「強化魔法!？」



「いえ、このクラスの強化なんて……！」

驚愕するティードとシャマルであったが、それも当然だろう。

この強化は、ただの強化ではない。以前マークのコピーと戦った際に発動したイーギルによる強化を、任意で発動できるようにしたものだ。

一時的とはいえ、人類トップクラスの力を手に入れたフェイトは、プラズマランサーの一撃でバールを確実に仕留めることを可能としていた。

否、たとえエルダーバールが相手でも、今のフェイトならば一撃で沈める事が可能だろう。

「これはまた……！」

フェイトの切り札を複雑な視線で眺めながら、マークはエルダーバールの爪をクラウ・ソラスで弾き、返す刃でその首を切り落とす。残ったバールは所詮下級魔物で、正直マークが居なくても完封できるのだが、今回は手出しを控えるどころか、むしろ全力で残った敵も切り伏せる。

そんなことより、問題はフェイトが行ったイーギル操作である。

(理論を知らずに、感覚だけで行つとは恐れ入ったが……これは不味いな)

イーギルというものが生命力である以上、それがどれほど危険な間のかは理解できると思う。

だから、フェイトの切り札は浅慮という他無く、だが、他のどんなものより強力であった。

「……まあ、文字通り命を賭けないと使えないわけだが」

今はまだ、マークの創造した肉体がその負担を優先的に受けているから問題ないが、一線を越えた瞬間にフェイトの命を蝕むだろう。

後で切り札の使用を厳禁するとフェイトに告げることを決め、最後の大蜘蛛を斬り捨てる。

わずか数分で二十を超える蜘蛛を討ち果たした一同であったが、マークにとって本当に大変なのはここからであった。

「あつ、あつ、クモの体液があゝ」

「これはさすがに……」

「とりあえずここを離れましょう。ええ、一刻も早く」

「……」

実体剣である『マーニ・カティ』で戦ったさすがが涙目で混乱し、シャマルは表情をひきつらせ、ティータもこの場を離れることを提案する。

フェイトに至っては途中から飛行魔法を使い、地面に降りることにすらしなかった。

「まったく……とりあえず少し移動するぞ。さすがは一回『マーニ・カティ』をしまえ。そうすれば汚れは払える」

自力で飛べる三人はともかく、おっかなびっくり蜘蛛の死骸を避けて歩こうとするすずかを抱えて、マークも翼を広げる。

皆が落ち着いた後再会した調査では、魔物の姿は確認できず、ひとまずこの地の魔物を殲滅したと報告することになる。

もちろん、一度発生した以上二度目が無いとは断言できないのだが、ひとまず今回の魔物発生事件は幕を下ろすことになった。

「さて、あつちの事件も無事終結したみたいだし、こつちも調査の再開と行きましようか」

「本当にいいのか？ ……レジラスからも調査を辞めるように忠告された。お前たちはここで抜けてもいいんだぞ」

「何を今さら。ここまで知って、後は人任せなんてできませんよ」

マーク達が魔物の退治を終えてしばらくして、彼らとはある調査をすべくある場所へと集まっていた。

その彼らとはゼスト隊……地上最強の呼び声高い面々であり、そして調査内容は、戦闘機人と呼ばれる違法研究についてである。

「ウチの娘たちも関係してくるし、ここで引くわけにはいかないわ」

「ふっ、この部隊には保身という言葉を知る者はおらんのか」

「筆頭の隊長がそれを言いますか？」

これから危ない橋を渡る緊張感と、管理局局員としてあるべき正義感が混ざり合い、その意志を固めた一同は、これから行う事を再確認する。

「これから、管理局が関与していると思われる違法施設へ潜入する

………余人に感知されぬよう、細心の注意を」

「了解ですー」

こうしてゼスト隊は、己の信ずる正義のために突き進む。その道の先に、深い闇が横たわると気付きながら……

## 第80話 「闇の入り口」

「……以上が、今回確認した魔物の報告となる」

その日、マークは先日行った調査の報告をしに管理局地上本部へと訪れていた。

というのも、先日行った調査により、魔物が転移魔法によってその場に送られた可能性が出てきたためである。

そして報告の相手というのが、地上の守護者とも名高い地上本部副司令レジアス・ゲイズ少将であった。

「ふむ、群れのボスはAAランクに匹敵するか……こちらがいかに早く感知できるかが、被害を押さえる重要なポイントになるな」

「マギ・ヴァルでは観測員を各地に配備して、発見し次第報告、精鋭による殲滅という手段を採用していた」

「それが一番無難か……法則性や生態を調べれば、事前に察知することが可能になるか？」

「経験則から、過去に大きな戦いがあった地に魔物が集まりやすいとわかっている。そこで調べてみたんだが……管理世界だけでも、数千か所は余裕で超えるな」

割とシャレにならない数に、報告を受けたレジアス・ゲイズ少将もさすがに眉を顰める。

新参者のマークですら知っている人員不足が、ここでも大きな壁となって立ちはだかったのである。

可能ならば管理局主導で事を進めたいが、さすがにこれは不可能と割り切るほかなかった。

「一応、現地の治安部隊との連携を考えていくことになるが……」

「そんなことはいい。問題は、このミッドチルダにどれほどの影響が

あるかだ」

そんなレジアスの言葉にマークの表情がピクリと動くが、それにかまわずレジアスは続ける。

「外の事は本局の連中にやらせておけばいい。だが、私はこの地上の責任者なのだ」

「むう……正直予想しにくいな。今の魔物たちには魔王がいないから、大規模な侵攻なんかは無いだろうとしか言えないな」

「逆に言えば、まとめ役が存在したら……」

「第一管理世界は、一番の標的になるだろうな」

マークの感覚では、ミッドチルダは管理世界という国の王都に当たる場所である。

同じ時代を生きた魔王及び魔物であれば、同じような考えをもってもおかしくは無いだろう。

もちろん、トップの考えによっては好物をとっておくかの「ごとく、最後まで手を出してこない可能性も無きにしても非ずなのだが。

「厄介ごとばかり持ってきておって……」

「否定はしないが、俺に言われても困る」

確かにマークが目覚めたからこそ現れた問題なのだが、マークだって望んで「この時代・場所に目覚めたわけではない。

「貴様に言わず、他の誰に言えと？」

「まあそつなんだが……そこには触れないで貰えるところじゃないかな」  
「ふん……」

マークの控えめな嘆願に、レジアスは鼻を鳴らしながらも受け入れる。もはや何を言ってもあとの祭りであることぐらい、レジアスだっ

て理解しているのだ。

「……今度魔物を生け捕りにでもして来い。こちらで調べてみよう」「それでわかることがあるなら、なるべく早く用意しよう」

まだ形ばかりの六課より、古くからある本部の方が施設に関しては充実している。最低限の協力を取り付けたマークはわかりやすく安堵の息を吐き、レジアスはそこへ更なる質問を重ねる。

「再訓練を優先させることは可能か？」

「再訓練計画は遅滞気味で、地上を優先させることは難しい」

「魔物に対する装備の開発は？」

「俺の所持する魔法書を解析する事業を展開している……対魔王装備である双聖器、風刃『エクスカリバー』の前段階として、今は『エルウインド』を解析中のはずだ」

「部隊の再編成、戦術の再構性の必要性は？」

「再訓練にある程度含まれているし、正直に言って、対魔物専用部隊でもない限り必要性を感じない。とはいえ、六課においては結構高めに優先順位を設定しているが……」

淡々と続けられる質問と回答であったが、その一連の作業がぱたりと止まる。マークもそのあまりの唐突さに首をかしげるが、その視線の先にあるのは、レジアスの何とも許容しがたい感情が込められた顔であった。

「結局、今は何もできる事が無いという事か？」

「すでに手を尽くしていると言ってくれ」

とはいえ、訪れるかもしれない厄災に対し、まったく手を出せないのは辛いことだと言うのも理解できる。

マークはちょっとした提案をレジアスに向けた。

「非殺傷設定の解除は？」

「むう……個人にその権限を渡すわけにはいかないが、緊急解除の案件は検討させておこう」

「あと、せっかく映像があるんだし、それを見るだけでも心構えはだいぶ変わるだろう」

「それについてはすでに検討を終えている」

その後もマークはいくつかの提案を続け、レジアスはその提案のいくつかを受け入れる。

いくつか、というのも、マークの提案は既に実行していたり、あるいは時代に則していないものもあったためだ。

「まだズレがあるのか……大方修正したつもりだったんだがなあ」

「わずか二年でここまで修正されれば十分だと思うが……いや、上の立場なら、時間など関係ないか」

そう、確かにマークが管理世界に来てからの時間を思えば十分かもしれないが、特務六課という組織を動かさねばならない立場になってしまえば、それも言っちゃられないのだ。

それからしばらく魔物対策の話し合いをするうちに、マークはこの場に来てから得た疑問を投げかける。

「レジアス少将は、レアスキル持ちを嫌悪していると聞いたんだが？」

「……唐突だな」

レジアスにとって、応える義理などひとかけらもない問いかけだったのだが、どうしてかこの時だけは答える気になってしまった。

ひょっとしたら、マークが人ではないからこそその心の動きだったのかもかもしれない。

「……再現性が無いからだ」

「……つまり、レアスキル持ちが何かしらの対処をしても、他の連中の参考にならないから？」

「頼って失われれば、何もできなくなってしまっただろう？」

有用だからと言ってそれに頼ってしまえば、十年二十年先にその人物が動けなくなったとき問題に対処できなくなってしまおうと言うレジアスに、マークは感心する。

「確かにこれは思想の違いとしか言いようがないな」

例えばなのは達が最善を尽くし、少しでも今の被害を減らそうと思っているのに対し、レジアスは未来を案じ、レアスキルを遠ざけているのだ。

「じゃあ、やはり俺が動くこともできれば避けたいのか？」

「貴様の後継が、貴様と同程度に動けるのなら構わん」

「……なるほど」

確かにマークの力は竜であるからこそという部分も大いにあるので、その血が受け継がれるのならレジアスにとって問題ないらしい。今後力を振るうなら子を為せと言うレジアスの無言の主張に、マークは人知れずため息を吐いた。

「そう言えば、マーク君って奥さんとかいたの？」

「……」

ハラオウン邸に帰ってきたマークへのエイミィの問いかけに、なんとなく思う。噂をすれば影なんて言葉もあるように、何かと二つ三つ話が続くらしい。



「……いなかったな」

「え、2000年以上も生きてたのに!？」

「昔は人間嫌いだった時期もあったし、何より置いて逝かれるってわかりきってたしなあ」

「それは……じゃあ、同族には？」

「身近すぎたり、幼すぎたりで縁が無かったな」

もちろん、マークにだって愛しいと思える相手がいなかったわけではない。だが、当時のマークには、その愛しい相手が老い、死んで逝くのを間近に看取ることができるほど強くは無かったのだ。

そんな想いの欠片に想像が届いてしまったエイミィは、あえてからかうようにマークへとダメ出しをする。

「……まあ、マーク君の恋愛スキルが思ってたより低いつてことはわかったよ」

「否定はせんが、人に言われるのは存外腹立たしいな」

マークも湿っぽくなってしまつのを嫌い、殊更不満そうな態度を示してみせる。

エイミィも大げさに感情を見せるマークにのって、殊更残念そうに言う。

「あゝあ、ちょっとマーク君には恋愛相談しようと思ってたんだけどなあ」

「ほづ……クロノか？」

「え、ひょっとしてバレバレ？」

「いや、リンディに相談しない理由を考えれば、相手がクロノじゃないかって言うのは一番に思いつくだろ」

そう言うマークに、エイミィは苦笑するしかない。

それは同居しているにもかかわらず今まで気付かなかったマークにか、あるいはこんなことでその想いを暴露することになってしまった自分自身にか。

「結構積極的にアプローチしてるつもりなんだけどねえ……なかなか気づいてもらえなくて」

「姉が弟にじゃれ付いてるようにしか見えなかったぞ？」

「……たぶんクロノ君もそう思ってるよねえ」

率直なマークの感想に、エイミィも同意のため息を吐く。

「まあ、年寄りから一つアドバイスをしてやろう」

「恋愛経験ゼロのくせに？」

「やかましい……距離が近すぎるなら、エイミィの方から少し離れてみるくらいと思ってる」

「と言いますよ？」

まあ気やすめだろうと思いつつ、エイミィはマークの言葉に耳を傾ける。

「エイミィは割と頻繁にクロノに抱きついたりして、鬱陶しいとばかりに引っぺがされているだろう？」

「……まあ、否定はしませんが」

「だから、引っぺがされる前に自分から離れると良い」

「？」

言葉が足りずに首を傾げるエイミィに、マークはさらに説明を続ける。

「簡単に言えば、恥じらいを見せるだけでも言えばいいかな？」

「ほっ……」

「相手が何かを意識しているとわかれば、何を意識しているか気になるのが人だろう?」

「つまり、クロノ君に違和感を覚えさせて、わたしのことを考えさせるってこと?」

「そう」

たとえば最初にマークが言ったように、まずはいつも通りくっついて、そこからぎこちなく離れるだけでいい。クロノならそれだけで、なぜエイミィがいつもと違うのかを考えるだろう。

「なるほど、距離が近すぎて、好意は親愛と恋愛の区別がつけにくいから、まずはわたしがクロノ君を異性として見てるって教えないといけないわけだ」

「そうなるのかな?」

「何でそこで疑問形になるかな……でも演技なんて私に出来るかな?」

「むしろ不自然な方がいいだろ」

なんなら手本でも見せようかと冗談交じりで言うマークであったが、エイミィも悪乗りしているのか是非にと頭を下げる。

そこへタイミングが良いのか悪いのか、クロノが帰宅してきた。

「ただいま……どっかしたのか?」

「ん、あ……いや、なんでもない」

まるで都合が悪いところを見られたかのように狼狽するマークに、エイミィはさすがにこれは無いだろうとひそかに思う。

事実、クロノはかなり胡散臭そうにマークを見やっていた。

「……まさか、何かやらかし」

「そうだ! スズカの様子をしばらく見よつと思ってたんだ!」

クロノの言葉をぶった切り、あからさまに逃げ出そうとするマークであったが、これはさすがにおかしいと、クロノも身構える。

「ちょっと待」

「じゃあ、またな！」

捕まえようとするクロノを振り切り、あっという間に逃げ去ったマークに残された二人は言葉もなく呆然とするほかなかった。だがエイミィは同時に納得もする。

(確かにここまであからさまだと、気にせざるを得ないよねえ……)

少し求める方向が違うような気がしなくもないが、関心を得ると言う一点では大成功と言わざるを得ない。

(まあ、残される人間のことも考えてほしかったけどね)

あからさまに怪しいマークに逃げられれば、直前まで一緒にいたエイミィにも同じ視線が向くのは当然のことだろう。

「エイミィ、一体何が」

「あーっと、わたしも買い物に行かなきゃいけないの忘れてた！」

「あ、おい！」

ほぼマークと同レベルの棒読みも、今回に限っては良かったのか悪かったのか、無事に逃げ出すことができてしまったのだった。

「……それで、クロノ君をからかって逃げてきたんですか？」

「まあ、一言でまとめるとそうなるかな」

突然月村邸に訪れたマークであったが、すずか達は一応迎え入れてくれた。

一応、というのも、マークがクロノをからかって逃げてきたと聞いては、心から歓迎すると言えないからだろう。

「帰ってから大変だよ？」

「まあ、その時は素直に謝るさ」

すずかと一緒に訓練しようとして訪れていたフェイトにも苦笑され、冗談のようなものとはいえ恋愛相談のことを言うわけにはいかないマークは、肩を竦めるしかなかった。

「クロノの事はひとまず置いておいて、せっかくだし今後のことを話そうか？」

「……………うん」

「……………お願いします」

少々強引ではあったが、それでも思考を切り替えた二人にマークは前回の戦いの後も告げた欠点を確認する。

「フェイトはオーバードライブの使用禁止ね。あれは本気で危ないから」

「……………はい」

「後はブレイドフォームの習熟。新しい切り札は……………その前に、そろそろ『覚醒』させておこうか」

「『覚醒』って、確かなのはが？」

魔王との戦闘の際、なのはが『ファイアーエムブレム』によってその力を解放したことを思い出す。

もしそれと同じことが可能なら……………そう思っが、ここに『ファイ

アーエムブレム』は無い。

「別に『覚醒』するためのアイテムはあれだけじゃない。……正直、いくらか格は落ちるかな」  
「……………」

もはや自分のはるか先に行ってしまった友人を思い、どうしても心が軋みそうになるが、それを表面に出さないように気を張る。

『マスターブルフ』…………いや、『導きの指輪』の方が…………ん？ こっちはどうだ？」

最終的にマークが取り出した白いこぶし大の物体には、表面に何やら不思議な刻印が施されていた。

「これは？」  
「ん〜、『天の刻印』って言うんだけど…………ダメみたいだな。やっぱり『導きの指輪』か」

結局刻印は使用されることなく再封印され、マークは代わりに小さな宝玉が埋められた指輪を出した。

その指輪をフェイトに向かって掲げ、するとほのかな光が溢れ、まるで祝福するかのようにフェイトを優しく包んだ。

「力が……………」  
「これで終わり。しばらくは対人戦でなんかでやり過ぎないように、注意してくれ」

まるで世界が広がったかのような感覚に、フェイトは戸惑う。

まるで自分の体が自分のものではない様な浮遊感を感じる一方で、今この身に宿った力が自分のものであることを確信できたからだ。

そんな状態を確認するフェイトから視線を外し、マークはさすがに向き直る。

「わたしも『覚醒』できますか？」

「ん、スズカはもうちよつと後だな。急ぎ過ぎても伸び代が無くなるから。その代わり……？」

「どうしました？」

何かを取り出そうとしたマークがぴたりと動きを止め、改めてすずかを凝視する。

「えつと……？」

「……ふむ……これは、まあ、誤差の範囲というにはちよつと大きいな」

「何かまずいことが？」

「いや、むしろ良い事なんだが……予想よりスペックの上昇率が三割ほど高い」

「はあ……確かに想定より能力が低い、よりはいいと思いますけど」

考えられる原因は、そもそもマークの見立てが間違っていたか、あるいはすずかに飲ませた血が……だが、断定できないものについてまでも執着しても仕方がないと、マークは気を取り直す。

「とりあえず、もう一回確認しておくぞ？ たぶんスズカは、自分と俺

のことを人外と分類していると思う」

「はい……」

「そして、魔物もその括りに入っている」

「……はい」

「やっぱり……人外の括りが大きすぎる。もっとすずかの言うところの人外について知らないといけないな」

マークの言葉に、すずかはなぜか力が抜けていくのを感じた。

それもそのはずだ。今まですずかは人とそれ以外という二つの分類しか持たなかったのだ。

そんなコンプレックスから解放されたすずかは、初めて自分を好きになれるような気がしたのだった。

「あとは、『精霊の粉』で魔力を上げて、『マーニ・カティ』に後付け型のデバイスを付ければいいかな」

魔力を身に付ければ魔導師として管理局に所属することもできるだろうし、これではなののは達の助けになるという目標は達成できるはずだ。

そうひそかに満足するマークの下に、グレアムからの連絡が入った。

「どうした？」

『急な話で悪いが、出撃してほしい』

唐突な申し出に眉をひそめるマークであったが、グレアムの方もどつやら切羽詰っているようで、マークの変化に関わらず説明を続ける。

『ミッドの郊外に、戦闘機人プラントが存在するらしい』

「地上の管轄だろ？ 俺らが手を出したら面子が」

『地上のある部隊が、このプラントへ向かったそうだ。それを捕縛し、プラントの確保・あるいは破壊が今回の依頼だ』

「……地上だと、そいつらの協力者の可能性がある、か」  
『そついうわけだ』

流石のマークも、今回の依頼には顔をしかめるほかなかった。

ただの犯罪者の捕縛ではない。はっきり言ってしまうえば、裏切り者



を捕らえろと言つ内容である。

正直に言えば気が進まない所の話ではないが、今回の一件、マークに断るといふ選択肢は無かった。

「もし万が一この話を断つたり、取り逃がしたりすれば、俺も関与を疑われるだろうな」

『……研究が研究だからな』

そう、マークの研究は、現在ナカジマ夫妻の要請もあり、機人関係が大部分を占めているのだ。

場合によっては、許可されなかった研究を外注していたのでは、などと因縁をつけられかねない。

「仕方無い……せめて研究内容だけでも貰い受けてくるか」

気は進まないが、その分貰えるものは貰っておこうというマークに、グラムもつい苦笑を漏らす。

『……さっそくで悪いが、転送を

「待って、わたしも行くー！」

一刻も早くと言つグラムを止め、同行の許可を求めたのは、フェイトだった。

だが、いくらマークの相方と言っても、今回ばかりは許容しがたい。なにせ、今回杖を向ける相手は、ただの犯罪者ではないのだから。

「フェイト、今回ばかりは

同行を認めるわけにはいかない。そう言おうとしたマークであったが、その言葉は最後まで紡がれなかった。

“このままじゃマーク君……死んじゃうかもしれないだよ?”

いつかエイミーに言われた言葉が、マークの中に響き渡る。

確かに、ここはフェイトに同行を許すべき場面ではないだろう。だからこそ、一人で行くべきではない場面であるのだ。

「……仕方ない……その代わりに、指示は絶対守れ」

「うん…」

力いっぱい頷くフェイトに対し、同じくこの場にいたすずかは静かに見送ることを選んだようだった。

「…武運を。無事をお祈りしています。……こんな感じですかね?」

最後に照れ隠しのためか、少し早口で尋ねてしまったが、マークにとってこのように見送られるのはとても新鮮だった。

「……意外といいな」

「はい?」

「いや、そうだな……もしよければ、祈っていてくれ」

「はい…」

いつもだったら、こんな改まった見送りは受け入れなかっただろう。だが、今日だけは、受け入れるべきだと感じたのだ。

「行ってくる」

「行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

転送の光が消えるまで、すずかは笑顔をみせ……一人が完全に消えた後、歯を食いしばって涙がこぼれそうになるのをこらえるのであつ

た。

「……結局、一番ついでに行きたいときに、一緒に行けないんだね……」

それは、自身の力を知るからこそその選択。今無理について行っても、足手まといにしかならないという、無情な現実であった。

「だから、せめて……」

生きて帰ってきてほしい。この言い知れぬ不安が、ただの杞憂であったと笑い飛ばしてほしかった。

すずかはそれから日が暮れるまで数時間、その場で祈り続けていた。

## 第81話 「VSゼスト隊!」

「……」か」

グレアムからの通信後すぐに現場に駆け付けたマークであったが、マークが依頼されたプラントにたどり着いた時には、プラントの入り口には何者かが潜入した跡が残っていた。

グレアムからの依頼では、この地にいる者すべてを捕縛、もしくは無力化して欲しいとのことだったが……

「明らかに、俺達以外にもこの連中と敵対している奴がいる様なんだが……」

「例の部隊が偽装した可能性は？」

「自分たちも潜入任務中ですって偽装か……言っちゃなんだが、今回みたいのは例外で、現場を押さえられる可能性より証拠を発見される可能性の方がはるかに高い。俺だったらそんな無駄な偽装やらんよ」

それでは誰がこんな跡を残したのかと考え込みそうになるフェイトであったが、マークが出した杖によって、思考にふけることを妨げられた。

「それは？」

「これは『ウォッチ』という杖で……一言で言えば、これを使えば中の様子をうかがう事が出来るんだ」

「……のぞき魔法？」

「ああ、難しい魔法なんだが、内部の相手にまず気付かれることなく見れるから、結構重宝していたんだ」

部屋の構造はもちろん、兵の配置まで調べることができこの『ウォッチ』は、前情報が望めない戦いにおいて非常にありがたい魔法

であったのだ。

そして、今回も『ウォッチ』の杖はその力を最大限発揮する。

「……見つけた」

魔法を使用して僅か三分。マークは対象を捕捉した。もちろん、そこまでのルート等も完全に把握している。

「今後のルート、相手の進軍速度を合わせて……接敵場所は……」

ぶつぶつとつぶやくマークを、フェイトは黙って見守る。もっとも、残念ながら『ウォッチ』を使用した視覚情報は共有されないので、口の出しようもないのだが……

そうしてまた数分の時が流れ、マークはついに一歩目を踏み出す。

「とりあえず、先行する部隊を捕縛する。抵抗せずに投降してくれればいいが、まあまず無理だろうな……」

「その場合は、武力行使？ 陣形はどうする？」

「俺が前に出るから、フェイトはフォローにまわってくれ」

「わかった」

端的に答えるフェイトであったが、内心はマークの言葉に歓喜していた。

以前、シグナム達と戦った際は、マークがフェイトをフォローしていたのだ。それも文字通り、何の打ち合わせも訓練もなく動き回るフェイトを、その技量と戦闘経験のみを頼りに……完全にマーク頼りの連携モドキであったのだ。

それが今回はどうだろうフェイトは、マークにフォローを頼まれたのだ。これを嬉しく思わないわけが無かった。

(だけど、まだまだよ……)

そんな喜びを感じながらも、フェイトは努めて冷静であろうとする。頼まれたのはいいが、まだその仕事をこなしたわけではない。ちゃんと喜ぶのは、マークの期待に応えてからだと自制する。

「行くぞー!」

「はいー!」

そうしてフェイトはひそかにテンションを上げつつ、先導するマークに続いて施設に入る。だが、そんな二人の姿は、すでに安全な場所へと避難済みのこのプラントの主に筒抜けであった。

「……さて、それではゆっくり見学させてもらおうとしようか」

「ミッドチルダ最高峰ゼスト・グランガイツと、私のオリジナルであるマーク・テスタロッサの戦いですか」

「残念ながら、一対一にはなりそうもありませんね」

施設内外に百を超えるカメラを設置したジェイルは、自らが創造した娘たちとこの正規の決戦を観戦としゃれ込んでいた。

もちろん、先に潜入したゼスト隊も彼らの監視下に入っている。

余談であるが、誰に教わったのか彼らの手元にはポップコーンとコーラが用意されていたりする。

「それで、ナギはこの戦いをどう見るかい？」

「経緯はどうであれ、オリジナルに敗北はありません」

「ほう……やはり、計測器でも作ってみるかね」

断言するナギに、ジェイルはその断言の源となったであろう彼女の感覚を再現できないかと、頭の片隅で模索する。

「断言できるほど、能力に違いがあるの?」

「はい、その戦闘力の差は100を超えています。おそらく、通常の攻撃ではオリジナルの皮膚に傷すらつけられないでしょう」

「まさか……」

「ふん、数字では読み取れない強さというものもあるんですよ」

ナギの言葉に素直な驚きを見せるウーノであったが、その後ろにいたクアットロが口をとがらせ反論する。

確かに、クアットロの保有する先天固有技能などは、ナギの目で数値化するの難しい。

「……では、クアットロ姉上はグランガイツ氏が勝利すると？」

「数は力とも言つし、なにより単純に能力が高い存在が勝つ世界であれば、人はもう滅んでいるんじゃないかって？」

「道理です。……私はまた一つ、世界の真理を知ることが出来ました」

「……なんででしょうね、そこはかとなない敗北感が……」

クアットロの言葉に感銘を受けるナギに、言い勝ったはずのクアットロが微妙に悔しがる。

「ふむ、だが今回にすべきは勝敗ではないのだよ。そこを忘れてないでくれたまえ」

「はい、了解ですドクター」

ジェイルの言葉に、娘たちは気を入れ直す。そう、今回の感染の目的は、『マークの危険度調査』なのだ。

マークが今回の一件の思惑にどこまで気付き、どこまでその思惑に乗るか、あるいは突っぱねるか。

管理局の一部上層部は、今回の一件をマークの見極めに使うつもりでいるらしい。そして場合によっては、相討ちしてくれなど、無茶にも程がある。

(正直、欲張り過ぎだと思っがね……ゼスト隊の対処とマーク・テストロッサの調査は、一緒にすべきではなかった)

そんな本音を持ちつつも、ジエイルはクライアントの意向に今は逆らう事が出来ない。

はて、今回の一件はどう転ぶか……そんなことを考えながら、画面に映るマークとゼストの動向を観察し続けていた。

その画面内では、今まさにゼスト隊がマーク達の接近に気付いたところであった。

「っ！ 後方より魔力反応あり！ 数は……二つです！」

「気付かれたか……総員、戦闘準備！ 迎撃するぞ！」

ゼストの指示に各々武器を構えるメンバーであったが、危惧して利多様な先制攻撃は無く、彼らも先制攻撃をくわえる事が出来なかった。

そんな一瞬の硬直の最中、何とものんきそうな声が二組の間を歩き来することになった。

「なんだ、先客はお前らだったのか」

「……なんでこんなところにマーク君が来るのよ」

お互い顔見知りという事で微妙に肩の力が抜けるが、この中で唯一面識のないフェイトだけがそう言うわけにはいかなかった。

「知り合い？」

「ああ……まあ、研究関係でな」

「研究……ひょっとして、クイントさん？」

「ええ、そしてあなたがフェイトちゃん？」

面識こそないが、同じ研究所で処置を受けている関係でそれぞれ



マークから話を聞いていた。

特にフェイトとギンガは年齢もそう違わないし、友人になればと話していたのだ。

それがこんなことになるなんてと顔をしかめるマークとフェイトであったが、クイントはそれに気付かない。

「まさかアナタ達までこの件の調査に来ているだなんて……でも、マーク君の研究内容を思えば、あながち見当はずれの人員配置というわけじゃないのかしら？」

「……やっぱりお前らも調査で？」

「ええ……まあ、秘匿命令って奴で」

微妙に言葉を濁すクイントであったが、マークはその内容に思わずため息を漏らす。せめて正式にどこかから命令が下りていれば、もっと楽に話は済んでいただろう。

「えっと、マーク君？」

「……俺への指示は、この施設に内通したものの捕縛だ」

マークの態度に疑問を見せるクイントであったが、続く言葉にまずは怪訝そうな表情を見せ、次に納得、そして同情と警戒を等分に混ぜた複雑な顔になる。

「つまり、正式な命令を受けずにこの場にいるわたし達を、アナタ達は捕縛しなくちゃいけないってことね？」

「そういう事だ……出来れば投降してほしいんだが、無理だろう？」

「ああ、難しいな」

チームを代表して、ゼストがここでつかまる気は無いと明言する。今までの流れを断ち切って返答したのは、マークに自分こそが責任者であることをアピールするためだろう。

「どうしてですか？ 誤解なら誤解で、ちゃんと証明すればいいじゃないですか……」

「あ、まあ、……フェイトの言う事は正しいんだが……」

「関与していないと言う証明は、非常に難しい。ましてや、ウチの隊にはクイントがいる」

「……娘たちのために集めた資料がどのような手段で集められたか、実はその内容に非合法的な事柄が含まれているんじゃないかと言われるれば、反論しにくいわけだ」

一度は口を濁すマークであったが、ゼストの言葉に渋々と言った体で投降できない理由を説明する。

だがこれは嘘でこそないが、少し違う。本当に危惧していることは、別にあるのだ。

(無実を主張しても、どこからともなく証拠が出てくることもあるかもしれないしな……)

そう、今回の一件が何者かに仕組まれたものだとすれば、証拠をでっち上げられる可能性も否定できない。

むしろマークが投入されたタイミングから考えて、全て黒幕の掌の上と言われた方が納得できる。

(ゼストたちは相互不可侵の領域に触れたか、あるいは……)

考えたくないが、そもそも機人の件は管理局の裏側が推進しているのかもれない。

おそらく、この場にいるほとんどは同じ考えに至ったのだろう。数少ない、いや唯一の例外がフェイトであるが、マークはもちろん、ゼストたちもまだ気付かせる気が無かった。

「とにかく、投降しないと云うのなら、制圧する他無くなるのだが？」  
「仕方がない、か……だが、そう簡単に制圧できるとは思わない事だ」  
「肝に銘じておくよ」

その言葉と共にゼストは槍を構え、マークは魔力で形成された大剣を顕現させる。

「……まさか、お互い刃を向けることになるとは思ってなかったわ」  
「……ちゃんと引き際は見極めてくれよ？」  
「あら、もう勝った気での？ それは少しばかり気が早いんじゃないかしら……」

言葉尻に合わせたクイントの一撃は、その瞬間に発動された強化魔法によりマークの予想を超える速度を見せる。

(まさか一足飛びで……)

今いる場所が攻撃範囲の外と思っていたことも災いし、クイントが放った上段蹴りにわずかだがマークの反応が遅れる。

しかし、反応が遅れてもなお、マークのほづが迅かった。

「うっ……」

「甘いっ……」

クイントが完全に決まったと錯覚するほどのタイミングで放たれた一撃は、魔力刃によって完全に防がれる。

だが、クイントがマークの懐に入ったことに変わりはない。弾き飛ばそうと力を込めるマークの大剣をそらし、クイントはがら空きになったボディへと拳を向け……

「やせません……」

「っ！」

フェイトのフォトンランサーによって阻まれる。

「惜しかったな」

「そうね……でも、気を抜くには早いわよー！」

フォトンランサーを回避したことにより、大きくマークから離されてしまったクイントであったが、クイントは一人ではないのだ。

「はあっ！」

「でりゃあー！」

ゼスト隊の面子は全部で七名。クイントが離れたからと言って安心できる人数ではない。

そのことを証明するかのように、魔法が、刃がマークへと迫る。

「くっ！」

さしものマークも、フェイトのフォローがあるとはいえ七人もの攻撃を全てさばききれはるはずがない。

躲しきれない攻撃が、徐々にマークの鎧を削り始める。

「マーク！」

「問題ない！ 後方から援護を続けてくれ！」

シールドなどの魔法を使えないマークを見かねて割り込もうとしたフェイトであったが、それもマーク当人に止められてしまう。

だがそれも仕方ないことだろう。確かにフェイトはシールドなどの防御が使えるが、その耐久度は決して高くない。

ゼスト隊の波状攻撃にさらされてしまえば、そう長くはもたないだ

ろう。それに加え、フェイトは元々生粋のアタッカーなのだ。防御に参加するより、相殺や牽制を担当してもらった方がずっとありがたかった。もちろん、それ以外の想いもないわけではない。

(本来であるなら、クイント達は同僚だ。そんな相手に、刃を向けてほしくない……)

あくまで補佐以上の事をして欲しくないと願うマークであったが、誰もがその意図を読み取れるとは限らない。

「ずいぶんと余裕じゃないのー」

「貴様こそ引き際を考えるべきじゃないのかー」

マークとコンビを組むフェイトにはともかく、相対するクイントやゼストにとってはそうはいかない。

圧倒的とまではいかないが確かに押されている状況で『問題ない』と断言されれば、さすがに看過することはできないだろう。

《何か切り札があるって事かしら？》

《……この場合は狭すぎる。竜化は使えないはずだ》

地上でもトップクラスの实力を持つゼスト隊は、魔王戦の映像も当然見ている。そこで当然マークの戦いも見て、かなり大味な攻撃が多いことも知っている。

正直に言って、閉所で、それも捕縛を目的とした戦いでは實力を相対限されるだろう。

とはいえ、警戒してばかりでは何もできない。

《確かに不安は残るが、相手の手の内全てが分かっている戦いなどないー》

《それもそうね……ま、何かあったとしても、使わせなければいいのよ

ね!》

意識を切り替え、さらに苛烈な攻撃を加える。だがそこへ、まるでこの時を待っていたかのように鋭い反撃が行われる。

「うぐうっ!」

「カイン!」

「っ! やりそこなっただか」

自身へのダメージを無視した強引な一撃により、隊員の一人がマークの斬撃によって吹き飛ばされる。

幸か不幸か、あまりに強引な一撃であったこともあり、意識を完全に刈り取るには至らなかったようだが、それでもダメージは甚大である。

「よくもまあ、あんな体勢から……!」

「まともに喰らえば、ひとたまりもないな……」

一撃を喰らった隊員の回復と、マークの一撃へ意識が向かってしまったゼストたちが、それは明らかな悪手である。

「プラズマスマッシュャー!」

後衛にまわるように指示されあまり目立たなかったフェイトであるが、その実力は管理局でもトップクラスであるのだ。

そのフェイトへの注意を切らしてしまったら、手痛い攻撃が来るのは当然のことだろう。

今までの牽制とは威力が桁で違う一撃に、ゼスト隊は当然のように攻撃のリズムを崩されてしまう。

そして、それを見逃すマークではなかった。

「覚悟！」

「まだだっ！」

マークの重い連撃を、ゼストは辛うじて流し続ける。だが、それがいつまでも続かない事は誰もが理解していた。

(ヤバい……もう長くはもたないぞ……！)

そんな状況を一番苦々しく思っていたのが、事もあるつかマークである。

(立場上逃がすわけにもいかないが、かといって捕縛するのもなんだよなあ……)

何度も言うようだが、マークは管理局に所属している立場上命令に違反するわけにはいかない。

管理世界の出身でないうえに、そもそも人間ですらないマークは、ルールを普通の職員より徹底的に順守しなければならないのだ。

そうでなければ、竜が人の世で生きていくことはできない。

では、捕縛する問題は何か？ これはどちらかといえば心情的な問題である。

(きつと、嵌められたんだらうな……)

そこまで長い付き合いではないが、それでもマークはクイントの人となり信用している。そのクイントが濡れ衣を着せられるのを黙って見ているほど、マークは人でなしではない。

(問題は、どうやって逃がすかだが……)

流石に全員に逃げられるのは問題外だ。となると数人、三人逃がす

のが限度だろう。ではその三人をどうするか……そんな余計な事を考えていたのがまずかった。

「……っ！ 隙あり、だ！」

「おっ！」

力の乗り切らない斬撃をはじめ、体勢を崩したマークにゼストの最高の一撃が迸る。

ゼストの突きはマークの腹部に炸裂し、その体を地面とほぼ水平に吹き飛ばしたのだ。

「マーク!？」

「ちよっ、やりすぎじゃ!？」

フエイトはもちろん、思わずクイントも狼狽してしまっほどの一撃であったが、そんな一撃を加えたにしてはゼストの表情は硬かった。それもそうだろう。ゼストの手には、マークを突いた感触がはつきりと残っていたのだから。

「いやぁ……流石に油断のし過ぎか」

「……化け物か!？」

そう、その手に残った感触は、決して人を突いたものではなかった。もっと固く、厚く、強靱な手ごたえであった。

すなわち、ゼストの最高の一撃すら、マークには有効だとなりえないのだという現実を叩きつけたのだ。

「まさか、無傷だって言っの!？」

「それは流石にないって……まぁ、致命傷には程遠いがな」

もともと、マークがこの世界で苦戦していたのは、非殺傷設定とい



うマークの知識に無い技術のせいである。

それについても、マークの鎧がバリアジャケットとなった今、ほとんど意味をなさず、マーク本来の防御力が発揮できるようになったのだった。

「さて、じゃあ第二ラウンドと行くつかー！」

「つくー！」

マークの宣言と共に再開された戦いだが、そこに先程までの気概は無い。ゼストの一撃すら受け止めたマークに対し、打つ手が無いのだ。

半ば絶望に沈むゼスト隊であったが、それでもまだ戦う事を止めない。否、止められなかった。

「……………まったく、面倒な」

僅かに愚痴をこぼしながら、手持ちの特殊な魔符を使い、適当な悪役を作るしかないかとマークが苦渋の決断を下したとき、それは現れた。

「ドクターの懸念は正しかったようですね。やはり、欲張るべきではなかった」

「……………どちら様かな？」

「ナギと申します。以後お見知りおきを、マーク様」

「……………」

水面の底のような深い緑の髪に、同じ色の瞳は、マークのものと酷似していた。そして何より、その手に持つ大斧のアンバランスさ、気配が雄弁に彼女の正体を語る。

「……………神竜族」

「ハーフですよ」

そのナギの言葉に、フェイトやクイント達が見開く。今、目の前の少女は、マークと同類だと名乗ったのだから、その反応も当然だろっ。

そして、その少女は告げる。

「では、さっそくですが死んでください」

次の瞬間、大斧が奔り、鮮血が舞った。

## 第82話 「VS神竜」

正直に言ってしまえば、マークが居ればどうとでもなると、フェイトはそう思っていた。

ジュエルシードの時も、闇の書の時も、なんだかんだ言って最善がそれに近い結果を出してきたのだから。

だから、今回管理局の仲間を捕縛しないと聞いた時も、さほど意識することは無かった。

だから、マークによく似たナギと名乗る少女が現れたときも、何とかなるとそう思っていた。

……ナギが放ったであろう一撃によって、対峙していたゼスト隊の隊員の上半身が消滅するまでは。

「……どういつもりだ？」

「……言葉通りの意味ですよ」

一撃目に辛うじて反応したマークは、魔力剣でナギの戦斧をはじきながら尋ねる。しかし、その返事もそっけないものであった。

（まったく……本気でいっただいどういことなんだ!?)

更に出力を上げて輝く魔力剣と、三人の血ですでに汚れている戦斧が交差する中、そのそっけない返事はマークの混乱に拍車をかける。

というのも、ナギが神竜のハーフという事実は、マークにとってただ同族であると言っただけの事ではないからだ。

（俺の知る限り、神竜の生き残りは……いや、子をなせる可能性があるのは、四人だけ）

その四人のうち、一人は人間嫌いなので除外するとして、残りは三

人。

さらにその三人のうち一人は存在が変質しているので、一応除外しても構わないだろう。

つまり、可能性があるのは二人に絞られるのだ。

(一人はファだ。まあ、育った環境もあるし、あの子の可能性が一番高いんだが……)

とある世界の理想郷と呼ばれる、人と竜の共存する里で育った彼女の子という可能性は確かに高いが、ナギと名乗った少女の容姿を見る限り、その可能性は低そうに思える。

(じゃあ、まさかチキの子か?)

いささか色彩が濃すぎるが、髪の色など多くの共通点があるように思える。

それに、ナギの外見に比例しない強大な力は、神竜王ナーガの直系であり歴代最強と言われたチキの後継であるとすれば納得できるものもあった。

その性能はマークに迫り、その手に持つ武器の事もあり状況によっては魔王を倒すに足る力を秘めていたのだから。

「戦いの最中に考え事とは余裕ですね？」

「つくー！」

必要であつたとはいえ、状況把握に気をとられすぎたとマークが気付いた時には遅すぎた。

皮肉と共に放たれたナギの一撃は魔力剣を一瞬で粉碎し、マークを弾き飛ばす。幸いダメージには至らなかつたし、魔力剣も数瞬あれば再構築できる。だが、マークが復帰するまでにかかる数秒は、ゼストたちには長すぎたのだ。

「二人目」

「1」のっ。」

血に染まった戦斧を向けられたクイントは、その瞬間に自分の命がここで潰えるのだと理解した。理解したからこそ、残った一瞬に命を賭けようと決めることができたのだ。

(「この一撃を躲す事なんか、できない。防ぐこともできなければ、耐えることすらできない」)

だが、自分が真つ二つになるまでの時間を、0.1秒から0.2秒にすることぐらいできるかもしれない。

自分の動きがやたらと遅く感じ、それと同時に迫る刃の動きもやたらと遅くなったようにクイントは見えた。

(「これも走馬燈って奴の一種かしらね……」)

死を認識した脳が、必死にその認識から逃れようとして、限界以上の速度で回り始めたのであろう。

そうとわかった瞬間、重たくて仕方なかった体が少しだけ軽くなる。しかし、その感覚に従って動けば、肉体が壊れるという事も容易に想像がついた。

(「頭も体も、リミッターをぶった切って限界ギリギリまで動いてるんでしょっねえ……」)

そうクイントは理解し、だからと言って動かない理由にはならなかった。

たとえここで動けば廃人になるとわかってても、動かなければ死ぬのは確定しているのだから。

ぶちぶちと筋肉が切れる感触がするのを無視して、両腕を交差させ魔力で強化しナギの一撃に備える。その強化に使った魔力も、今までクイントが使用したことのある量を上回っていたが、それでもなお、ナギの一撃をしのげるイメージが持てなかった。

(だけど、時間稼ぎにはなったかしらね……)

すでに戦斧はクイントの両腕に触れようとしていたが、もはやそのことに恐怖は無い。ただ、自分の死が無駄にならなければいいなという願望のみが残っていた。

(なんて、未練が簡単に断ち斬れば良かったんでしょうけどね)

人は、そう簡単に割り切れるものではない。やり残したことは多く、夫や娘たちを残していかなければならないことも心配だ。何より死ぬのは恐ろしかった。

全力で防御を施した両腕であったが、やはりそれでは足りなかったというのが見えるのもまた、怖かった。

左腕はそもそも戦斧に立ち向かう資格すら得られなかったのか、肩が外れ押しつけられるばかり。右腕は何とか自身の体とナギの間に立ちふさがっているが、それももう2/3が断たれてしまっていた。

ここから更なる抵抗をしようにも、すでに自身の実力を超えた抵抗をしているのだ。そして最後の砦である右腕がついに断ち斬られ、もうその刃で死を迎えるしかないと言う時点になって、眼前にいたナギが真横に弾き飛ばされた。

「やらせるかー」

魔力剣の再生成を待たずに繰り出したマークの一撃はナギの予想よりかなり早かったが、その代わり威力は低く、デバイスにも大きな負担となっていた。

だが、そんな無理な一撃であったからこそ、未だクイントの命があるのだ。

「助かつ、た……？」

「まだだ！ あの小娘はまだ排除できて……！」

「これで共に一撃ずつ……イーブンですね」

悠長に話などしている暇はないと言わんばかりに、ナギが再びマークへと斬りかかる。それをマークは何とか受け流しつつ、フェイトへと指示を飛ばす。

「相手は魔王級だ！ 絶対に俺から離れるな！」

「了、解！」

魔王級。それはフェイトの知る限り最高クラスの判定であるが、対峙した経験がある分腰が引けてしまう事は無かった。

目の前で人が死んだことに対する衝撃が無くなったわけではないが、それでもフェイトはマークの指示に従い動き始める。

もちろん、動き始めたのはフェイトだけではない。ゼストたちも、この状況を何とか打破しようとする行動を開始するのであった。

「メガーヌはクイントの治療を！ マーク、一時休戦したい！」

「却下だ！ お前らの相手をしている余裕はない！」

「では勝手に協力させてもらおう！」

言外に逃げると言ったつもりのマークであり、それはゼストにも伝わっていたのだが、残念なことにその道が選択されることは無かった。

そもそも、相手はこちらを殺しに来たのだから、逃げたとしても戦場が変わるだけという確信があった。それゆえの共闘宣言だったのだが、これが正しい選択だったとも言い難かった。

ゼストの戦力はフェイトを上回るとはいえ、全員がそのランクにいるわけではない。いや、たとえゼストやフェイトであっても、ナギの一撃の前では等しく無力であった。

「くそっ！ ナギの攻撃は何としても躲せよ！」

「言われなくても……！」

「……邪魔ですね」

共闘は予想していたし、もしそうだったとしても問題ないとナギは考えていた。

確かに事前のクアットロとの会話で数は力だと認めていたが、それでもなおマーク以外は脅威に思えなかったのだ。

そしてそのマークも、無力化する手はずは整っていた。

(ああ、くそ……どつすればいいんだ!?)

それに対し、マークはこの戦いが始まってから何度目になるかわからないほど自問自答を繰り返していた。

というのも、ナギの目的がわからないのが原因である。

それはゼスト隊をどうすると言う表面的なものではなく、何のためにそうするのかといった、今回の行動の先にあるビジョンが見えてこないのだ。

(何のため……いや、誰かのためか？ それとも……)

そのようにナギの背景に気をとられ、目の前の戦いに集中できていなかったという事は否定できない。

だが、つい先ほどゼストの一撃をもらったばかりでもあり、油断していたわけでは断じてなかった。

それは、ナギたちの本命の一手に対する反応からもうかがう事が出来た。



(！ 投げナイフ!?)

ゼストたちを庇いつつ援護を受け、魔力剣から上位の武装に変えることなくナギに対しわずかながら優位に立ったマークであったが、不慣れな連携の隙間を縫うようにしてそのナイフは放たれた。

まっすぐに飛ぶナイフはマークの顔面を、より正確にはその瞳を指し突き進む。

ナイフを放ったのは、ジエイルの誇る『ナンバーズ』の 5 チンクであり、そのチンクを隠していたのが 4 クアットロであったが、さすがのマークもそこまでは知る由もなかった。

(残念、伏兵は予想済みだ！)

しかし、伏兵の存在は予想できたものであり、少し驚いたものの回避は十分に可能であった。

だから、マークは当然のように投擲されたナイフを、首を傾げる動作のみで回避し、故に爆発をもろに受けることになった。

「なっ!」

「マーク!」

「問題ない!」

すべての事象を認識できたものが何人いたか、あるいは、誰もがマークの頭部が謎の爆発に巻き込まれたとしかわからなかったかもしれない。

マーク自身も何が起ったのか今一つわからなかったが、それでもわかることはある。

(右目が潰されたか……あと、右耳も駄目だな)

いくらマークでも、やはり生き物という事だろう。肉体の表面を傷つけることができないのなら内部から崩せばよいという考えは、見事に成り立ったのであった。

そして、そのダメージは平衡感覚までをも奪い、マークもたまらず片膝をつく。が、これでナギたちの攻撃が終わったわけではない。

「終わりです」

その一言と共にマークに振り下ろされた刃は、しかし二人の間に割り込んだ男のせいでマークに届くことは無かった。

「やらせは……せんー」

「邪魔ですー」

割り込んだ男はゼストであり、それに焦ったのはナギだ。先程のマークの復帰速度を思えば、この一撃を返すころには万全と言わずとも戦いを再開できるだけの準備は出来てしまうと、そう確信できたからである。

だが、そう思ってももう遅い。ナギの必殺を期した一撃はゼストを両断してその命を奪い、代わりに多大な代償を払うことになってしまった。

『華炎』！

「ッかは……！」

残った左目を見開くマークの奥義による反撃は、ナギに多大なダメージを刻む。しかし、致命的というには程遠いものであった。

(力が乗らない!?)

マークは驚愕するが、それも当然の事であった。なぜなら、今マー

クの持つ剣は魔力で構成されており、通常の斬撃に魔力を付加する奥義である『華炎』とはきわめて相性が悪かったのだ。

もしマークの放った一撃が、物理攻撃に魔力を上乗せする『魔力付加』ではなく魔法攻撃に魔力を上乗せする『魔力付加』であったなら、この結果も変わっていただろう。

「この程度！」

それはどちらの言葉だったか、だが、双方にそれなり以上のダメージが入ったことに変わりはない。

腹部に一撃を受けたナギより、視力を失い、平衡感覚の怪しいマークの方が若干不利だろうが、そこは基礎性能差により、ほぼ拮抗する形となる。

最大戦力である二人が拮抗すれば、勝負を決定付けるのは彼らの周りにいる者たちである。

『ふふふ、完全な無力化はできなかったけど、成果は十分かしら？ 彼

さえ止められれば、後はおもちやだけで十分でしょう』

「誰だ！」

『答える義理は無いのよ、お嬢ちゃん』

フェイトの誰何を受け流し、クアットロはジェイルの創った『おもちや』を解き放つ。

そのおもちやは多脚機構を有した戦闘機械を中心に、浮遊するカプセル型や、巨大な球状のものも確認できた。

そして、所有戦力が逆転したことを悟ったマークは、撤退を決意する。

「フェイト！ 作戦は放棄し、離脱を最優先とする！ クイント達も

……」

『させるわけないでしょうっ!?!』

だが声の主は、撤退など許しはしないとはかりにおもちゃたちに指示を出す。それにより始まった無数の戦闘機械の攻撃に、主戦力を失ったゼスト隊はまともな抵抗ができなかった。

そう、ゼスト隊は。

「……オーバードライブ！」

本来のフェイトの実力では、この場を突破するだけでも難しいだろう。

だから、フェイトがマークに禁じられた過剰強化を使ったのも、仕方がないことだ。

彼女には、手があるのに黙って目の前の人たちが死んで逝くのを見ていることなど、できなかつたのだ。

「私が切り開きます！ 皆さんは、後に続いてください！」

その言葉は、マークにだって否定できなかった。だが、否定せずとも肯定できるはずもなく、一刻も早くこの窮地を脱出すると心に決める。

そのためにも、マークは余計な事を考えることを止め、ナギへと全力を向ける。

「……あの時は否定したが、まさか役に立つ日が来るとはな」

「何を……？」

「リミッター、解除！」

その言葉とともに、マークは魔力剣クラウ・ソラスの魔力強度を完全開放する。それと同時に魔力が貪り食われるかのように奪われ、クラウ・ソラスの光が増していく。

「こんな……自爆するつもりですか!？」

「誰が……!？」

驚愕するナギをしり目に、マークはさらにクラウ・ソラスに莫大な量の魔力を渡し続け、ついに臨界へと至る。

目が潰れると思えるほどの光は、マークの技量により光の斬撃へと形を変え、戦闘機械の約四割を焼き払った。その代償はマークのほぼ全魔力であり、デバイスとしての機能全て。

そんな一撃を間近で受けたナギであったが、それでもなお、彼女は健在であった。

「……でも、逃げられましたか」

そんなナギの言葉に答える者は、その場にいなかった。

マークはデバイス一つ犠牲にして、まんまと逃げだして見せたという事だろう。

「今回は、引き分けですね。ですが、あまり参考にはなりませんか……」

そう、マークは神器の類を一切使わずに戦い、ナギもまた、切り札たる竜石を使わずに戦っていたのだ。

そんなお互いがセーブしていたからこそ引き分けたのだが、正直な気はその結果に満足がいかなかった。

「……どうせ破棄する施設です。ちょっとばかり壊しても問題ないでしょう」

その言葉とともに、ナギは竜石を解放する。そして、自身の力をマークに見せつけるため、その戦斧を振るるのであった。

「いい加減、しつこい！」

『貴方こそ、いいかげん墜ちなさい！』

マークが離脱する直前、一足早くに離脱を開始したフェイト達であったが、その逃避行は上手くいっているとは言いがたいものであった。

戦闘機械の攻撃はわずかではあるがフェイトの足を鈍らせ、ゼスト隊の生き残りの命を削っていった。

『よくまあもたせているけど、それももう限界かしらね』  
「くっ……」

クアットロの言葉通り、フェイトはもう限界であった。ただでさえ消耗の激しい過剰強化を行い、クイント達ゼスト隊の生き残りを保護して逃げていたのだから、この結果も当然だろう。

「（あなた一人で逃げなさい）」

「（そんなこと……！）」

「（わたし達を連れては無理でも、あなただけなら……）」  
「（できません！）」

クイントの提案に反対するフェイトは、されど有効な案が浮かぶわけがなく、じわじわとなぶられ続けていた。

だが、そんな苦しい時間も終わりを告げる。

「遅くなった！」

「全然！」

そう、ナギを振り切ったマークの到着である。

『リワイプ』の杖を使い合流したマークは、即座に『ワイプ』の杖に持ち替え、フェイト達を転送しようとするが、それを黙って見ている

クアットロではなかった。

『そんなこと、させるわけないでしょう！』

「マーク！」

迫る戦闘機械に焦るクイントだが、正直、やるべきことを定めたマークにとって足止めにはならなかった。

「問題ない」

「問題ないって……！」

そう、マークは一切のダメージを無視して、転送しようとしているのだ。

『狂ってる……！』

「狂ってなんかないさ。ただ単に、この程度のダメージなら無視できるっただけだ」

だが、ここでマークにとって誤算となる一撃が放たれる。それが、先の戦場においてきたナギの一撃であると感じいたのは、施設の下層から莫大な力が放たれた後であった。

「……………ッ！」

マーク達が立つフロア丸ごと、いや、この施設を崩壊させるのに十分な一撃と、マークの転移はどちらのほつが早かったのか………少なくとも、ナギやクアットロ、ジェイルたちには分からなかった。

「連絡はまだ入らんのか………！」

そうひとり呟くのは、地上本部の一室に待機しているレジアスであった。

彼が待っているのは、数時間前に裏切り者を捕縛しに行ったというマークである。

だが、本当にレジアスが待っているのはマークではない。いつの間にか裏切り者とされた彼の友人であるゼスト・グランガイツである。そして、待ち人であるマークが来た時、彼は絶望の底へと落されるのであった。

「……全滅、だと……あの、ゼストたちが……」

「ああ、死体が回収できたのはクイントと他二名だけだが……死体は見ない方がいいだろう」

そう、レジアスの前に現れたマークは右目を失っており、それ以外にも無数の傷が全身に刻まれていたのだ。

相方であるフェイトも非常に衰弱しており帰還後すぐに病院へと搬送され、何とか生き残っていたクイントを含む三人は、脱出直前に放たれた攻撃により息を引き取ったとのことであった。

「一体、なぜ……」

「さあな、本人たちは死んだし、奴らが攻撃してきたのも口封じのためか、懐を探られたことに対する見せしめか判断がつかない」

「……」

半ば放心するレジアスに今回の戦いの全容を語るマークであったが、その目にはどこか探るような鋭さが見え隠れしていた。

「個人的な意見ではあるが、彼らが内通していたとは考えにくいと思っっている」

「では、やはり見せしめという事が……」

「その可能性が高いだろう……だがそう考えると、俺に連絡が来たと



「というのがやはり不審だ」

「……管理局内、それもかなり上の立場のものが、奴らと関わっている  
とでも？」

「あくまで可能性の話だ」

マークの言葉を聞き、思わず叫びそうになったレジアスであったが、それは何とかこらえる。それが結果として良かったのかどうかは別であるが……

だが、マークがそこまで予想しているのなら、確認しなければならなかった。

「……もし、その可能性が真実であるなら、……君はどうする？」

「まあ、どちらであろうと関わった以上ある程度調べはするがね」

「そうか、調査をするのか……」

レジアスとしては、できれば止めたかった。それはゼストと同じ結末を恐れるからであり、減にマークは右目を失う怪我を負ってしまったのだから。

しかし、何らかの不正行為が行われている可能性を示された以上、管理局に勤める者として、止めるわけにもいかなかった。

もちろん、マークとて止められても止まれない理由があった。

（まあ、建前はともかく、ナギの事があるからな……）

それは自身と同族であるナギの存在ゆえである。

ナギがマークの予想通りチキの子であるならば、むしろ管理局を抜けてでもナギの味方をすることになるだろう。

だが、その可能性が低いことをマークは自覚していた。

（……クローン、か）

そう、可能性で言うのなら、ナギはマークのクローンである可能性もあるのだ。いや、最後にナギが放った一撃の気配から、自身ときわめて似た力の質を持っていることがわかってる。

とはいえ、マークは男性でありナギは少女である。その一点がある限り、まだナギはチキの子である可能性の方が高くなってしまっただ。

（これについては、かなり優先順位を高くしておかないとな……）

そう決意するマークだが、それ以上に優先すべき事案がある。

（フェイトの治療はもちろん、匿った三人についても考えなきゃいけない）

マークが死亡したと報告した三人だが、実はまだ生きていたのだ。生きてはいたが重症であることに変わり無く、マークは『医療事故』を恐れ、匿う事にしたのであった。

（まったく、魔物の事だけでも手一杯だったというのに……）

内心でばやくマークであったが、レジアスの手前表情には出さない。

その後今回の報告は書類にまとめて再提出することを約束し、マークも応急処置ではない治療を行うため病院へと向かうのであった。

## 第83話 「それぞれの立つべき場所」

報告後すぐに病院へ向かい治療を受けたマークであったが、困ったことに人間に対する治療を竜に施していいか判断できず、結局治療系の魔法少しと包帯による保護しか行われることは無かった。

マークもそのことに不満を覚えることは無い。そもそも自前の『傷薬』によって治療はほぼ終わった状態であったのだから当然だろう。

「この薬の即効性……少々研究したいところですね」

「まだいくつかありますし、構いませんよ」

大量生産できるならそれに越したことはない、マークは使いかけの『傷薬』を医師に渡す。

その途中、おそらく『傷薬』も扱っているだろうアンナのことを思いますが、前言を撤回できず、心の中で手を合わせた。

そんなこんなでマーク自身の治療は十数分で終わり、ようやくフェイトの所へと向かえるようになったマークの下に、今回の一件を聞いたのだろう少女たちが飛び込んできた。

「マークさん……」

「大ケガを負ったって……！」

「その目……！」

「フェイトは!？」

「病院だぞ、静かにしなさい」

さすが、なのは、はやて、アリシアがまくしたてるのを宥めつつ、マークは今回ここに来た面子を確認する。

「すみません……グレラムさんから連絡があって、リンディさんに頼んで皆で来ました」

「さすがにクロノとエイミィは……」

「来てます」

「他には？」

「アリサちゃんが出来なかったけど、シグナムさん達は来てますよ」

「ユーノ君もすぐ来るって」

どいつもこいつも暇な事だと言いつつも、マークは心配してくれたであろう皆に内心感謝する。

だが、何があったのかを説明するのは全員がそろってからと言つて、すぐに語るうとはしなかった。

そのマークの言葉に何とか落ち着きを取り戻した三人は、大人しくリンディ達が追いつくのを待つ。そして数分も待たないうちに、リンディ達がマーク達の下へとやって来た。

「マーク君、大丈夫!？」

「おい、その目は……!？」

「あなた達、ここは病院よ!？」

つい先程の会話を思い出させるリンディ達のやり取りに、マークはつい苦笑を漏らす。

「順番に話すから、少し落ち着け」

そういつてマークは話をするべき場所へと向かうため、踵を返す。その行動に、この場では話せない事柄もあると察した一同は、黙ってマークの後に続くのであった。

それから数分歩いた先にあったのは、フェイトの居る病室であり、マークは軽くノックをしてその中に入る。

「ようやく来ましたか……」

「フェイトちゃん!？」

相方であるマークに、フェイトの容体を伝えるべく待機していた医師が声をかけるが、それよりも子供たちのほうが早かった。

ベッドに駆け寄り、ただ眠っているだけのように見えるフェイトを覗き込み、目立った外傷はなさそうだと見てほんの少し安堵する。

「……まあいいです。それで、フェイト・Ｔ・ハラウンさんの容体ですが……」

「必要ない。これでもこの子の主治医だからな」

「そうでしたね。ですが一応……外傷の類はいずれも軽傷で、そちらの治療は終了しています。また検査の結果も特に異常は見られませんが……なぜか意識が戻らない、という状況です」

「意識が……！」

「原因は把握している。こっちの専門分野であるし、その点は問題ない」

「……では、失礼します」

医師の言葉に青くなった一同であったが、続くマークの言葉にその緊張がほぐされる。医師が出て行った後、全員の視線がマークに集中するが、マークは肩をすくめて一言で簡潔に述べるにとどめた。

「イーギルが枯渴しているだけだ」

「その説明で理解できる人はいないと思うわ……」

今までもそれなりにイーギルについて説明されてきたリンディ達だが、詳細について理解できているわけではない。

ただ、マークが非常に強力で有用、危険なエネルギーであると言っていることから、何となくわかったような気になっているだけである。

「別に理解する必要はない。まあ、ちょっと危なかったけど、大きな問

題は無い」

「小さな問題はあるのね？」

「……モルフ化が進むから、想定以上の実力を出せなくなるくらいかな」

要は、火事場の馬鹿力のような物が無くなるという事だが、なのはならともかく、フェイトにそちら方面の力を期待するものは少ない。

一応、フェイトの保護者であるリンディに処置の許可をもらい、マークは一つ小さな輝く石を取り出す。

「竜石……直接見るのは初めてかしら？」

「そうかもな……ちなみにこれは『飛竜石』だ」

「竜石にも種類があるの？」

「当然」

そうやってマークは自身の持つそれぞれの竜石について軽く述べる。

『火竜石』……竜の中でももっとも一般的である火竜の力を秘めた石で、他の竜と比べ力が強い。

『氷竜石』……竜の中でも神事などに精通することが多い氷竜の力を秘めた石であり、他の竜と比べ防御が固い。

『飛竜石』……竜の中でも数少ない空を飛ぶことができる竜の力を秘めた石であり、他の竜と比べ機動力が高い。

『魔竜石』……竜の中でも最も魔法に精通した魔竜の力を秘めた石であり、他の竜と比べ魔力が多い。

『神竜石』……竜の頂点に立つ神竜の力を秘めた石であり、他の竜の長所をすべて備えたような規格外である。

「てっきり、火竜は火竜に、神竜は神竜にしかねないものだと思っていたのだけど？」

「器に収まりきるのなら、どんな竜にも成れるのがマムコートだ。さすがに火竜が神竜にはなれないけど、俺なら問題ない」

とはいえ、現在竜化は強敵相手にしかしておらず、強敵と戦うのに手を抜くことができるはずもないため最近神竜石しか使っていない。

そんなことを話しながらも、マークはフェイトにそれなりの量のイーギルを流し込み、内面的な損傷を修復する。

「よし、これで終わりだ」

後は自然に目を覚ますのを待つだけとなり、マークはようやく今回あった出来事を駆けつけた皆に語りだす。

グレアムから特殊な任務を回され、そこに駆け付けた事。

そこで起こったゼスト隊との戦い、直後に現れたナギと名乗る竜の血を引く少女の事。

その後現れた戦闘機械と撤退、追撃によるゼスト隊の全滅……まとめれば数行に過ぎない出来事であったが、その結果マークは右目を失っているのだから、間違いなく一大事である。

「まさか、マークさんの目を奪えるような敵が現れるなんて……」

「ナギとその一派か……」

リオンが今回の敵の強大さに震え、シグナムは自分たちが遭遇した時、どのように対処すべきかを考える。

「そのナギさんは、マークさんも知らない方なんですか？」

「ああ、可能性としては、俺のクローンかとも思ったんだが……」

「性別が違うなら、その可能性は低いよね？」

さすがの疑問にマークが願望を交えて答えるが、アリシアによって

完膚なきまでに否定されてしまっ。

「……わかってる。一番高いのは、チキの娘である可能性だ」

「チキさん？」

「神竜王ナーガの直系で、歴代最強とも言われる神竜の女性だ」

「え？」

そんなマークの説明に、もう何を言われても驚かないように身構えていた一同が呆気にとられる。

だが、それも仕方ないことだろう。マークといわずに抜けた強者が最強と呼ぶ竜の女性。その娘が敵対者だと言われれば、耳を疑いたくもなる。

「……せめてもの救いは、チキ本人を敵に回したわけじゃないってことぐらいかな？」

「それは本当に救いになるのかしら？」

シャマルの言葉にマークは肩をすくませ、今後の展望を語る。

「どちらにしろ、戦闘は無謀だから対話による接触を目指すほか道は無」

「やっぱり……じゃあ、どうしても戦闘を避けられないときは、どんな手が有効だ？」

「チキには俺の名前を出して、どこかで話し合いの場を用意してくれればいい」

「ナギが相手の場合は？」

「難しいな……」

マークとも面識があるチキはともかく、ナギに対する対策などないに等しい。しいて言うのなら竜石を使わせない事だが、それ以前の問題である。



「……ナノ八の場合は『ファイアーエムブレム』が力を発揮すれば、何とかなるかも?」

「意識して使えている気はしないんですけど……」

「俺も使えるわけじゃないし、アドバイスもできないしなあ……あと  
は、はやては蒐集した『フォルブレイズ』とかの竜に対して効果のある武装だが……」

「えっと、まだ十全には使えませんが、発動までなら……」

「心もとないが、無いよりはマシか」

つまり、現在ナギと相対できるのは、マークを除けばなのはとはやて位のものという事だろう。それでもかなり不利な事に変わりは無く、勝利をつかむなんてもってのほかだ。

他に、即座に対策を練るのであれば……

「……スズカにこれを渡しておく」

「え、ひょっとして『ソール・カティ』ですか?」

「ああ、これにも対竜特攻が付加されているから」

まだマークの付き添い無くして前線に出ることが無いすずかに渡しても、正直意味がないとも思えるが、この一件が長期化するのなら確かに必要だろう。

「……近いうちに、必ず使いこなして見せます」

「期待して待ってるよ」

決意を新たにするすずかに対し、マークは軽く本心を告げてからりオンに向き直る。

「お前が個人で扱える魔法は?」

「……闇魔法なら、一応全部」

「お、『魔書ギムレー』や『ロプトウス』、『マフー』も？」

「じめんなさい、それは流石に……でも『ルナ』や『グラウアー』なら」

マークの上げたでたらめなものはともかく、リオンが格上相手に戦える魔法を使用できる事を確認し、これではやて達は問題ないだろうと安心する。

「囿に亡霊戦士も使えるし、そろそろユニゾンデバイスも完成するか  
ら、こっちの心配はいらないですよ」

「ユニゾン……ああ、管制の後継か？」

「……そうですね、夜天の書はユニゾンを前提に創られているので、  
やっぱりこのままというわけにはいかなかったんよ」

おそらく、リインフォースの代わりを用意するという事に抵抗があるのだろう。だが魔王のような強大な存在もあるため、自身の強化を足踏みするわけにもいかないと言ったところか。

マークとしても、はやて達の戦力が充実することに否やは無いので、特に口を出すようなまねはしなかった。

「さりげなくはやて達の戦力が反則じみてきたな」

「確かに……マーク君がいるからあまり目立たないけどね」

「あら、本局の方では結構話題になってるわよ？」

マークの桁外れの実力により、少し基準がずれてきたと自覚したク  
ロノとエイミィであったが、リンディはさすがに惑わされたりしてい  
なかつたらしい。

そのことに自身との実力の違いというものを再確認し、2人はさら  
なる成長を誓う。

だが、惑わされたままの方が良いこともある。

(無限書庫でいくつかわ変わった魔法を習得して強くなったつもりでい

たけど……マークさんとともに戦えるような敵が現れたなら、こんなじゃ全然足りないよね」

完全にミッドの常識から逸脱してしまったなのは達を追うユーノは、自身もすでに常識を捨てた術士をいくつか修得していた。

そのことに気付かず更なる飛躍を求めるユーノは、一同の中で最も静かに、そして分かりにくい成長を遂げているようであった。

「……まあ、考えられるのはこんなもんかな？」

「マーク、竜には逆鱗というものがあると聞いたことがあるんだが……」

「そんな一発逆転が可能になる弱点なんて、ただの幻想だ」

シグナムの願望は、マークに当然のように一蹴されてしまう。もちろん、竜にだって人体急所のように、どんなに頑張っても鍛えられない場所があるのは事実だが、それを教えてもあまり意味がない。

「たぶんだけど、ナギは竜化しないと思うし……」

「え、でも竜石は持つてるんでしょ？」

先程の対策では竜石を使わせるなどといった以上、当然竜化してくると思っていた一同が首をかしげるが、マークはそういえば言ったなかつたかと、自身も含めた混血の切り札を公開する。

「混血は竜化できる個体の方が少ないというのもあるが……裏技みたいな方法で、人と交わった竜は、竜石を人の姿のまま使うというものがあるんだ」

「……つまり？」

「人の形をした竜ができる」

「……と、いいいますと？」

「武器を振るう人型の竜という悪夢が具現化する」

人という生物の強みである武器を、単体において人よりはるかに強力な生物である竜が使つなど、マークの言うように悪夢としか思えない。

「……竜化された方がまだましたなんて思う日が来るとは、さすがに思いもしなかったわ」

「まあ、あくまで勘だし、最悪を想定していた方が後々のダメージが少ないだろう？」

打ちのめされ頭を抱えるリンディにマークはわずかばかりのフォロウをするが、それで頭を上げられるほど簡単なものではなかった。

「そんなに気を落とすなって、あっちにナギというカードがあるのから、こっちには俺というカードがあるんだから」

「オフENS側とディフェンス側って言う、この上ない障害があるのよっ」

「……どうにかしてみる」

非常に頼りない返事をするマークであったが、それでもできない事を安請け合いするような人物ではないので、リンディはその言葉を信じる。

「じゃあ、早速やっておかないといけない事があるんで、フェイトの事は頼んだ」

「娘の事よ？ 頼まれるまでもないわ」

「そうだったな」

リンディの了解を得て、マークは病室を後にする。

もちろん、フェイトが起きたらしばらく安静にしておくように伝えることを忘れない。エーギルが完全になじむまで、無理は禁物だ。

マークが居なくなった病室から、また一人一人と人が去っていく。フェイトは心配だが、それぞれにやるべきことがあるのだ。そうして病室に一人になったリンディは、心の中でマークに問いかける。

(もし、チキさんとナギさんが強い決意をもって管理局と敵対した時、あなたは一体どうするの……?)

今まで通りフェイトの相方として管理局側に立つのか、それとも……  
結局言葉にすらできなかったその問いに、答える者はいなかった。

そうしてマークが目指すのはミッドの郊外、廃棄都市区画である。マークが訪れたのは、そこに匿った人物と会うためである。

「調子はどうだ?」

「よく、わからないわ……自分の体なのに、自分の体じゃないような、とても不思議な感じ」

「まあ、その通りなんだから、その感覚も当然か」

マークの正面に座った人物はその言葉を受け微妙な表情をするが、これしか生き残る方法が無かったのだから、文句は無い。

いや、生き残ったというのにも語弊がある。彼女たちは一度確かに死んでしまったのだから。

「……モルフの技術って、本当に反則ね」

「そうでもないぞ? 七人全員分の肉体を作るにはイーギルが足りなくて、全員纏めて一つの肉体に押し込むことになったしな」

そう、施設内での死者を含め、全員のイーギルを回収したマークは、そのイーギルを使い、新たな存在を創造したのだ。

「元々の七人の容姿を使ったら後で面倒だし、こっちで適当に決めさせてもらった」

「その適当って言うのがねえ……この容姿、一流のトップモデル並みじゃない？」

そうやってその人物はひびの入った鏡で自身の容姿を確認する。

その肌はとてもきめ細やかな白い肌、血のように鮮やかな唇に、黒く長い髪はつややかでわずかなウェーブがかかっている。

そして、何よりも印象的な、闇夜に在ってなお金に光る二つの瞳である。

「……『リムステラ』だ」

「それが私達の新しい名前ってことね。まあ、元々女性だった私には違和感が無いけど、隊長たちはちょっと抵抗があるかもね」

「肉体的な強度はかなり高いから、どの戦い方をしても問題無い筈だ。だが、普段はクイントが表層にいると思っていいいのか？」

「ええ、問題ないわ」

そう、この場にいる人物『リムステラ』は、ゼスト隊のメンバーのイーギルを纏め、創りあげたモルフなのだ。

そして、マークがわざわざ彼女らを人形としてまで生かしたのは、彼女たちの持つ情報の為である。

「……やはり、管理局の上層部では後ろ暗いこともやってるんだな」

「やはり、なのね……」

「組織ってそう言う物だろう？」

とはいえ、表側の局員にはれるようでは二流と言わざるを得ない。やるのならばねないように、あるいは、ばねても触れられないようにすべきなのだ。

「そんなわけで、俺も裏側に組織を作っておこうと思う」「  
何がそんなわけでかわからないけど……私達はその組織の一期生つてわけかしらね」

マークの突拍子の無い提案に、クイント達に断る権利は無い。  
なぜなら彼女たちはすでに人ではなく人形、それもマークによって創られた人形なのだから。

だが、そんな強制は必要なかったかもしれない。

「やることはいたって簡単、管理局の不正を暴いてこちらのカードにすること、それだけだ」

「……私達が生前やるつもりとしていたことじゃない」

せいぜいマークへの報告の義務が生まれた位で、やることは変わらない。  
ない。

もちろん、生前の知人友人家族と会うことは叶わないが、もう死んでしまったことを思えば、遠くからでも見るだけ感謝してもいいくらいだろう。

そんな想いの中、リムステラの一つの人格が否と告げる。

「まだ若い娘がいるんだけど……」

「その娘の事も闇に引き込みたいのなら、連れてきて構わないぞ？」

「……局の福祉厚生に期待するわ」

メガーヌの言葉を一刀両断するマークであったが、とはいえ彼も鬼ではない。

「気に掛けるぐらいはしておこう……あとは、連絡方法にデバイスの代わり、衣食住……」

一言だけであったが、言質を取れて安心したメガーヌが再び引込む。少なくとも、リムステラに対しこれだけの便宜を図るように人物が何もしいないなんてことは無いだろう。

「衣食住はこつちで何とかするわよ……連絡も、ちょっと不審者に付け入るすきを作ってくれば、どうとでもなるわ」

「そうか？　じゃあ、デバイス代わりに魔導書だけでも持って行け」

そう言ってマークは『フィンブル』の魔導書をリムステラに渡す。風と氷の属性を持つ、かなり高位の魔導書だ。

「ありがと……単独で動く？　それとも、そこら辺のならず者を制圧して従える？」

「やり方は任せる。効率とか、有効性とか、その場に応じていろいろあるだろうしな」

こつちで出来上がったマークの密偵だが、後日リムステラが勧誘した有能なあぶれ者により『黒い牙』が組織されることになるのだが、今の彼らに、それを知る由は無かった。



## 第84話 『ついでに闇』

ゼスト隊が全滅した事件から数日後、意識が戻ったフェイトはリハビリに励んでいた。

いや、リハビリと言っては語弊があるか……マークのエアギルによって強化された身体能力の把握のため、リンディと共に訓練場を訪れていたのだった。

「調子はどう？」

「……うん、少し体が軽く感じるくらい」

リンディの確認に、フェイトは思いつく限り最高の答えを返す。そう、フェイトの身体能力は、むしろ向上していたのだった。

「本当に反則よね……むしろ倒れる前より能力が向上しているなんて」

「でもその代償として、少しずつ人間から外れていってるらしいよ？」  
「……」

力を得た代償……フェイトにはあまり実感がわかないが、周囲の人物にはその変化がいくらか目に見え始めていた。

別に体のどこかから羽が生えたとか、角が生えたとかいう変化ではない。ただ、瞳の色が変わっただけだ。

肉体の半分以上がモルフのものになった為ではないかという事であったが、フェイトの赤い瞳は、金色へとその輝きを変化させていたのだ。

「まあ、まだ決定的に人から外れたわけじゃないらしいし、それを言うのならマークはもちろん、シグナム達だって人じゃないしね」

「それは、そっただけ……」

ずいぶんと気楽に言うフェイトであるが、事はそこまで簡単な事ではないのだ。

もちろんフェイトも、本気でなんでもない事と思っているわけではない。だからと言って深刻になったりするべきではないと思ってあえて気楽に言っているだけである。

「……現状、モルフ化は六割に届くってマーク君は言ってたけど、以前と同じように調整していれば変わらず成長していられるそうよ」

「そっか、このまま一定ラインを超えたら、成長もできなくなるかもしれないんだ……いつまでも体が子供のままって言つのは、さすがに嫌だね」

リンディが半ば事務的にマークからの伝言を伝えるが、やはりフェイトの注目する点はずれているように思える。

本人から伝えていたら少しは結果が変わったのかとも思うが、残念ながらここにこの場にマークはいない。

というのも、マークは先の戦いがあった施設の再調査に駆り出されているからだ。

(まあ、もしあの場にナギさんが残っていたら、マーク君以外に対抗できる人はいないし、仕方ないんでしょうけど……)

可能な限り早い再調査の必要性は十分理解しているリンディだが、それでも、なぜこのタイミングでと思ってしまうのも、親として仕方がないことだろう。

そして駆り出されたマークは、名ばかりの護衛任務において、完全に暇を持て余していた。

「……暇だ」

「ええ、まあ、まだ完全な安全が保障されていませんし……ですがこの

一件に触れる人物を一人でも減らすためです。今しばらくご協力ください」

最初こそ、ナギが最後に放った一撃によって大破した施設に戦々恐々していた調査員であったが、その恐怖もどこへやら、マークの緊張感の無さも手伝い、危機感を感じさせない顔になっていた。

前回ナギと戦った地点を越え、さらに奥に進むマーク達調査隊であったが、次第に団体行動をしなくなり、ほぼ個人で調査を始めていたのだ。

というのも、マークの独り言に返事をした調査員の言葉がすべてだとしか言いようがない。もともと極秘で進められていたゼスト隊の任務の事もあり、彼らの名誉のためにも、今回の一件はごく一部のものにしか公開されないことになったらしい。

「……適当な真実を作って、それを公表してしまえばいいのに」

「……正式な局員が、不正を行えなんて言わないでくださいよ……そういっばれたらやばい事は、できる限りやらないに越したことはないんですよ?」

「嘘も方便という言葉もあるだろう? 市民の安心のためにも、必要な事だと思っが……」

しかしマークの提案は受け入れられることなく、闇に溶けていくことになった。

もつとも、マークの提案の根底には、自身の拘束時間を減らしたいという思いしかなかったのだ、さほど問題にはならないだろう。

「それで、何か分かったのか?」

「そんなに簡単に分かれば苦労しません。この充実した設備からわかったのは、敵が並の犯罪者じゃないことぐらいでしょうか……」

「何を今さら」

「ですよね……」

相手が並でないことは、ナギという手札を持つことからもわかって  
いたことだ。

「残された機材はデータが完全に消去されていますし、戦闘機械の残  
骸は本部に持ち帰ってからの本番です」

「残された機材から、どんな研究がおこなわれていたかわからないの  
か？」

「今の所、汎用性の高い機材ばかりですからね……数少ない特殊な機  
材もダミーの可能性がありますが、これだけでは何とも……」  
「その特殊な機材の使い道は？」

調査員の言葉に、マークは念のためという思いで問いかける。

「マークさんの専門のものなら……生体ポッドですね、見に行ってみ  
ますか？」

「是非」

ポッドならばマークの専門でもあるため、わかることもあるかもし  
れない。お互いその程度の思いであったのだが、現場についてみれば  
そのような中途半端な思いも消し飛ぶ。

そこに在ったのはただのポッドではなく、何者かに破壊されたポッ  
ドだったからだ。

「ふむ、何者かに破壊された？」

「はい、マークさん達の戦闘痕とはまた別に、この場所で破壊行為が行  
われたようです」

「……第三者がいたのか？」

「無いわけではないですが、その可能性は低そうですね」

もし第三者がいたとすればナギの迎撃を躲すか、管理局の監視をす

りぬける必要がある。

確かにそんな存在がいるとは考えにくいですが、現実として何者かの牙の痕が存在しているのだから、考えないわけにはいかない。

「……人造生命体の暴走とか？」

「なるほど、破壊痕はこのポッドの中にいた存在が残したものである可能性ですか……この施設の主に遺棄された以上、そこまでの脅威度ではないのでしょうかね」

「それなら何の問題もないんだがな……」

改めてポッドを見るマークであったが、どうにも嫌な予感が止まらない。

とはいえ調査員の言葉の通り、施設の主に放棄されるような存在が、マークにとって脅威になるとも思えないのも事実である。

「……それでも、最低限の警戒はしておこう」

「と、言いますと？」

「どうでもいい存在ならば、近いうちに死体を晒す羽目になるだろう。」

そしてそれが確認できなければ……」

「なるほど、管理局の警戒をすり抜け、生き残った存在となれば、警戒に値するでしょうね」

マークの根拠のない警戒は、表面上だけ受け入れられることとなる。

もっとも、あくまでなんとなく嫌な感じがすれ程度の事に対し、表面上だけとはいえ対処がなされたのだから、満足すべきなのかもしれないが……

「まあいい……それで、これにデータは残っているのかな？」

「少々お待ちを……はい、やはり残っていませんでしたようですね」

おそらく、先にこの場に來た調査員に聞いたのだろう。データが無かったのは残念だが、それでもこの場でなにをしていたのか調べる手段が無いわけではない。

「一体何を？」

「ん、ポッドに入っていた溶液から、一体どんな生物を作ろうとしていたのか、ある程度分かるから」

「そうでしたか」

生体ポッドに使われていたガラスの破片を手を取ったマークは、そこに残った匂いから生物を特定しようと試みる。

「……」

「どうです？」

「……わからん」

なぜか中に入っていた生き物の匂いがしない。かろうじて溶液の匂いから人かそれに類する生物であると予想できたが、それ以上の事はさっぱりであった。

「……竜も万能ではないんですね」

「それはそうなんだが……あれ？」

何となく納得できないマークであったが、わからなかったのは事実である。首をかしげながらもガラスの破片を調査員に渡し、更なる調査をお願いする。

そして、それ以降も調査が続き、ついには全てのフロアに危険が無いことが確認された。

「これで俺もお役御免かな？」

「はい、ありがとうございます」

護衛の必要性が薄れたため、これ以降は専門家に任せるという事にして施設の外に出たマークであったが、そこにふと視線を感じる。

(ん?)

ほんの一瞬、マークがその視線の主の居場所を特定することもできない間であったが、確かに視線を感じた。

マークはその視線の主に気付かれないように周囲を探り、とんだ杞憂であったと気づくのであった。

(リムステラか……)

おそらくはこの調査に参加した人物を把握し、調査するためだろう。そして彼女がクロと判断する人物がいれば、後日リムステラの名前は次元犯罪者として登録されるかもしれない。

(まあ、頑張れよ)

心の中でひそかにエールを送り、マークは今度こそその場を離れる。

次に訪れる場所は、気が進まないがもう決まっているのだから。

「……大丈夫か、ゲンヤ?」

「マークか……そうだな、あまり大丈夫とはいえねえな」

調査の後にマークが訪れたのは、ナカジマ家であった。

ゲンヤの招きに従いリビングまで来たマークは、そのソファアに早速腰を下ろす。

今回、ゼスト隊の事を内密に処置すると局が決定した以上、マーク

には現場であったことをナカジマ家の面々に語ることができない。  
だが、マークはそれでも顔を出さずにはいられなかったのだ。

「……娘の前では無理にでも大丈夫だと言え」

「手厳しい奴だ……だがまあ、そこら辺は大丈夫だ。それでも父親だからな」

「そうだったな……こんなこと、言うまでもなかったか」

そう、そんなこと言われるまでもない。だが、自分がそう思っているだけでは、なかなか実行できないのも確かである。

ゲンヤはマークの来訪に、心の中で感謝を告げる。だが、言葉として口から出て行くのは感謝ではなかった。

「……それで、何をしに来たんだ？ まさか俺を慰めに来たわけじゃねえだろ？」

強がりと言いたければ言えばいい。だが、男というのはそう言う生き物であるのだ。

自分にそう言い訳をして虚勢を張るゲンヤは、続くマークの言葉に何と返せばいいのかわからなかった。

「……どうも……いつも死に急ぎやがって……嫌になるな」

「それも、いい奴からどんどん死にやがって……先立たれる年寄りの身にもなれっつもんだ」

「……」

「せめて、娘が嫁に行くのを見るのが、親の役目っつもんだろ？」  
「……おい、なんで俺じゃなくてお前がぐちぐち言っつんだよ」

やっと返したゲンヤの言葉に、マークは不機嫌そうに言ひ。



「俺だってショックだったんだよ」

「だからってな……」

「せめてもの抵抗は、中身だけでも手を出すしかないだろう？」

「おい……」

「それで中身は抜き取ったが、それだって気休めにしか過ぎない」

「……」

再び黙ってしまったゲンヤの耳に、マークの真剣な声が響く。

「七人だぞ？ それだけいたのに、できたのは一人だけだ」

「……」

「中身は詰まっているとはいえ、所詮人形にしかならなかった」

「……」

「もう好きにしろって言いたくなるのもわかるだろう？」

「……わかんねえよ」

マークが何かを伝えたいというのは理解できたゲンヤだが、その内容はさっぱりだ。

だが、マークとて最初から通じるとは思っていない。

「まあ、特殊な任務中の殉職だから、詳細については言えないってゲンヤも聞いているだろう？」

「そりゃそうだが……」

「でも、その任務の後の事は、特に口止されてないんだよな」

「後だと……」

クイントは任務中に殉職したのだから、後なんてあるはずがない。だが、そんな考えは、マークがこれから言う事を受け止める、準備でしかなかった。

「とはいえ、全部言ったら後が怖いから言わないけどな」



ゲンヤは気付かなかったが、時が来るまでは手伝わせないと言外に告げたマークは、満足そうにうなずいた。

そうしてマークはナカジマ家を後にする。次に訪ねるのはアルピーノ家だ。

「……誰もいない？」

勇み足でアルピーノ家を訪れたマークであったが、そこには人っ子一人いなかった。

「おかしいな……まだ管理局の方は動いてないって話だったんだが……」

前もって確認した話では、メガーヌの一人娘はまだ住み込みのベビシッターに世話をされているはずである。

それにもかかわらず、この場にはいないという事は……

「……先手を打たれたか？」

誰が打ったのか、何のために打ったのかも不明である。

そもそも幼児をさらう事で生み出される利点が、マークには思いつかなかった。

「仕方がないか……後日、もう一度調べてみよう」

その結果、メガーヌの友人を名乗る銀髪の女性が娘のルーテシアを引き取っていったという話を聞くことになるのだが、その女性の行方をマークが知ることはできなかった。

マークがそんな事後処理に励む中、とある施設ではある実験が行われていた。

「……ふむ、理論上はこれでいい筈なのだが？」

「人造魔導師としての素質は、それなり以上の数値を示しているのに……どういう事でしょうか？」

実験を行うジェイルの前には、生体ポッドがあり、その中には修復されたゼスト隊の四人が並べられていた。

そう、彼らが行っていた実験はロストロギアを使った『復活』であり、その適性を持ったゼストへの施術であった。

だが、実験前の理論値とは異なり、施術されたゼストの肉体は未だ沈黙を保っている。

「何が足りないんだらうね？」

「私には分かりかねます」

ジェイルの独り言に律儀にも返事したウーノであるが、当然その言葉はジェイルの耳に届かなかった。

「ふむ……これは興味深い現象だ……」

「管理局の死者蘇生プロジェクトの資料でも要求してみますか？」

「そうだね、そちらの資料も見てみよう」

ジェイルの思考の一部に触れたからか、今度はあった返事にウーノは早速手配を開始する。

だが、ジェイルには資料に解決策は無いとなぜか理解していた。

「肉体的には、眠っているだけのように見えるが……そうだね、非論理的だが、あえて表現するのなら、これには魂が宿っていない」

「魂……ですか？」

「そうだよ、ナギ」

興味深そうに呟いたナギの言葉に、ジェイルはひるがえって答える。

「そもそも、ナギの予備としてマーク君のクローンを創っていた時に気付いたのだが……彼らはナギと違って一切の反応が無かった」

「創りかけならば当然？」

「いや、竜は特別だったのだよ」

ジェイルはナギが目覚め、自身の名を名乗った時に確信を得ただ。

「竜には固有の魂があった。魂の数は有限で、いくら肉体があっても中身が無ければ生物たりえないのだと、私は理解したのだよ」

「……つまり、竜の魂はこの地にナギしかいなかった？」

「そして、彼の魂はなぜか失われているから、いつまでも目覚めない」

本来この肉体に宿っていた魂が無くなったから、ゼスト・グランガイツは目覚めないのだと。

「……つまり、魂を入れれば、ドクターの理論が正しかったと証明できますか？」

「ん？ ああ、そうだね……」

かなり飛躍した理論ではあるが、ゼストの肉体に魂を入れて『復活』が成れば、ジェイルの言った魂についての予想も、人造魔導師理論も間違っていないことになるだろう。

だからこそ頷いたジェイルであったが、続くナギの行為に目を見張ることになる。

ナギは、ジェイルの知らない術式を行使し、ゼストの肉体に何かを

埋め込んだのだ。

「ナギ……一体何を……!？」

「うん、目が覚めたみたいですよ」

ナギの言葉にゼストの方向向き直れば、確かに彼は薄く目を開いていた。

「ククッ……」

その現実には、ジェイルは笑いをかみ殺すことができなかった。

「素晴らしい……!　これが、竜の力だということか!」  
「?」

首を傾げるナギに、ジェイルは跪き、教えを乞う。

「ナギ、君の知る全てを、この私に教えてほしい……!」  
「……ドクターが望むのでしたら?」

ナギはよくわかっていない様子であったが、それでもジェイルの手を取ったのであった。

## 第85話 「新しい力」

フェイトが退院して一月後、彼女はマークの研究所にて最終調整を受けていた。

「……覚醒後から、さらにスペックが上がったな。今の総合力は、200にぎりぎり届かないぐらいだな」

「えっっ？」

「管理局の規格に合わせるなら……SSランク位かな？」

「割ととんでもないね……」

マークの解説に、フェイトは苦笑するしかない。管理世界最大の組織である管理局ですら、Sランクに到達出来る魔導師ですらほんの一握りであり、SSランクなど両手の指で足りるのではないかと思われる程度しかないのだから。

「念のため言っておくが、身体性能が上がっただけで、SSランクの人物と互角に戦えるようになったわけじゃないからな？」

「うん、わかってる」

「それならいいんだが……」

真剣に頷くフェイトに、マークはため息を吐く。

フェイトの態度から、マークが言いたいことを理解できていないと確信できたからだ。

(でも、何を言っても無駄なんだろうな……)

格上との戦いになれば、フェイトは確実に自身の体を顧みない全力を出すだろうことは、容易に想像できた。

とはいえ、最初のころはその行為を許容していたマークだけに、今

更格上と戦うなど言っても意味は無いだろう。

そして、格上相手に戦うのなら、それ相応の準備というものが  
必要だ。

「……今回の治療に当たり、枯渴したイーギルは竜石を使って補給したわけだが、それにより『飛竜石』とある程度親和性ができたはずだ」「どういう意味？」

「……『飛竜石』をあらかじめ渡しておくから、今度無茶するとき  
自分のイーギルではなく、こっちのイーギルを使え」

そのマークの言葉に、フェイトは息をのむ。『竜石』は、マークの切り札だ。それを他人に渡すなど……

マークにもその驚愕が伝わったのだろう。少しばかりばつが悪そうな表情で、フェイトの勘違いを正す。

「俺の切り札は、俺自身の『神竜石』だ。『飛竜石』はもちろん、チキの『神竜石』だっておまけのようなもんだ」

「え、でも、強力な武器であることには変わりないんでしょ？」

「確かに強力だが、『神竜石』が手元にあればそこまで重要ではない」

確かにと、フェイトはマークの解説に納得する。普段の切り札は神器があり、それを超えれば『神竜石』による竜化となれば、『飛竜石』に出番はない。

まして、自前の『神竜石』を最高のものとし、他人の『竜石』がワンランクおちるとなれば、それも当然のことだろう。

「練習しておいた方がいいかな？」

「……さすがに、補給の用途が付かないし、止めておいた方がいい」

『竜石』が完全な消耗品である以上、滅多な事では使うなど釘を刺し、マークはフェイトに退出するよつに勧める。



「復帰後初任務はなのとは一緒に行くんだろ？ 遅れないようにな」

「うん、じゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

フェイトを見送り、彼女が研究所から完全に出たのを確認し、マークは一人ため息をつく。

「効果があればいいけど……やっぱり無理かな？」

マークの『竜石』を受け取ったフェイトは、補給の当てがない消耗品をどう扱うか……できれば『竜石』を大事にしまい込み、強敵相手には無茶をしないで貰いたいが……

そう思うが、やはりそこまで効果は無いように思える。

マークはもう一度ため息をつき、フェイトの性格矯正の次の案を考えつつ、客人を待つのであった。

マークがフェイトの自爆癖を何とか強制できないものかと思案していたころ、八神はやてはついにある決断を下した。

すなわち、新規ユニゾンデバイスを完成させることである。

(できればリインフォースの帰還を待ちたかつたんやけど……)

そんなはやての心境を理解する守護騎士たちも、今回はかりは後継機の作製を止めるわけにはいかない事を理解していた。

強大な敵が現れる可能性が濃厚なのに、自分たちの強化をおざなりにするわけにはいかないのだから。

そう言ったわけで、はやては人造生命の創造にもそれなり以上に通じているだろうマークの協力を依頼しに来たのであった。

「それで、ハヤテがわざわざ俺に会いに来るなんてどんな用なんだ？」  
「厚かましいお願いやとは思っけど……リインの強化を頼みたいんや」

そしてリインフォースの起動前にマークの下を訪れたのは、その強化を限界まで行うためである。

「管理局に残る技術だけじゃ、この先足りなくなると思っんよ」

「だから俺か……まあ、強化するのはかまわないが……」

「何か問題でもあるん？」

「……まあいいか」

その技術を提供しろとか管理局に言われる可能性も十分あるのだが、その点は忘れておくことにした。

「何や凄い気になるんやけど……？」

「あれだ、ロストロギアって言えば問題ないだろ」

「？」

どうもロストロギアと聞くと思考が停止する人間が多いようだしと、マークは割と投げやりにリインフォースの強化を了承したのだった。

だが、その強化の方法ははやての想像以上のものであった。

「……その指輪は？」

「氷の精霊ニニスの加護を得た特殊な指輪だ。人造生命体に埋め込めば、なかなか面白いことになると思っぞ？」

「面白いつて……」

はやてが少しだけ眉を顰めるが、それでも悪いことは起こらないだらつとその指輪を受け取る。

『ニニスの守護』、それはある氷竜の娘が持っていた、母の形見であり、守りの力を持ったこの世に二つとない指輪である。

そんな指輪の力を十全に発揮できるように調整するのは時間がかかるかもしれないが、とりあえず同期だけでもしたら起動させることにする。

おそらく数日以内にお披露目ができる事になるだろう。

「それで、指輪の代わりと言ってはなんだが、頼みたいことがあるんだ」

「マークさんが頼みごとなんて、珍しいこともあるもんやね……わたしらにできる事なら」

「シグナムにスズカの指導をお願いしたいんだ」

この要求に、はやて達は首をかしげる。なぜなら、シグナムによるスズカの指導は今も行われているからだ。

「具体的に言えば、スズカに魔力の扱い方を教えてほしい」

「え、すずかちゃんには魔力が無いんじゃない」

「発生させる」

「やせる!?!」

マークの持ち物の中に、そういった類のアイテムがあることを告げると、はやては思わずため息を吐く。

「まさかドーピングアイテムまであるとは……副作用とかは大丈夫なん?」

「副作用については、今まで確認されてはいない」

もっとも、たとえ副作用があったとしても、はやてにはすずかが魔力を発生させるのを断るとは思えなかった。

「わかりました。シグナムには話を通しときます」  
「ああ、頼んだ」

双方無事に要求を通したことで、今回の目的は果たされたのだが、予定していたよりも順調に終わってしまったため、すこしばかり雑談とあいなつた。

いや、雑談というよりかは、進路相談と言った方が適切かもしれない。

「……まあ、私は能力的に完全な後衛やし、これからは指揮関係の資格を取ろう思つとるんやけど」

「妥当な考えだと思つぞ？ 守護騎士たちを効率的に運用することは重要だし、お前らの中でその役割を担える奴がないからな」

「クロノ君は？」

「あれは単独行動用の人材だ」

ちなみに役割的にはフェイトが兵士、なのはが前線指揮官、はやてが総指揮官となるのが現状のベストだろう。

ちなみに、今後ずすが戦場に出た場合、彼女の役割がどうなるのか、マークにはまだ想像できなかった。

「こんなこと言うのもあれなんですけど……なのはちゃんもどちらかといえば……」

「拳で語り合つタイプだな」

「……」

割と盲目的なフェイトはもちろん、なのはもお話するのは戦った後というタイプと言えるだろう。

だが、砲撃魔導師というスタイルである以上、なのはは将来的に前線指揮官になつてもらわなければ困るのだ。

「ナノ八にはリーゼ姉妹から教導隊の誘いが来ているし、そこで何かしら見えてくる物があるだろう」

「フェイトちゃんはこのままでいいん？」

「……あの自爆癖は俺のせいだし、どうにかするわ」

少し口ごもったマークが答えるも、その声にはいつもの自信が見当たらなかった。

「自爆癖は言い過ぎじゃ……」

「毎度毎度限界を超えた強化をして自壊させて、俺が処置しなきゃならない状態になるんだぞ。それを自爆癖と言わず何といえと？」

「えっ……」

はやてもフォローしようとするも、そのフェイトはつい最近入院したばかりなので先が続かない。

実際はそこまで毎度毎度無茶をしているわけではないのだが、今後あるだろう強敵との戦いで途中退場されてもかなわないので、この対応も仕方ないのかもしれない。

「まあ、今後は「うちの技術も使ってフェイトを強化していくことになるだろうし、そう簡単に自爆させんよ」

「……」

なんだか望んだ答えとはかなりずれたような気がするが、それを指摘する勇気がはやるには無かった。

その後約束の時間となりはやてと別れたマークは、月村家へと訪れていた。

用件ははやてに言っていたとおり、すずかに『精霊の粉』を使い魔力を発生させるためである。

それだけのつもりだったのだが……

「……何やってるんだ？」

「あ、いらっしやいマーク。何って、見ての通りよ」

マークの疑問に軽く肩をすくめて答える忍は、割と本気で呆れているようであった。

それもそのはず、すずかは恭也との訓練を左手に『マーニ・カティ』、右手に『ソール・カティ』を持って行っていったのだから。

「双剣……いや、キョウヤのは二刀というんだっただか？」

「間違っていないけど、激しく間違えてるわよ。本来二刀は片方が脇差だし、恭也が使うのは小太刀二刀よ」

それに対し、すずかが扱う剣は両方とも小太刀とは比べ物にならない長さで重さである。それを無理に扱う以上、尋常でない負担がすずかにはかかっているはずである。

「止めなかったのか？」

「止めたわ。でも、結果は見ての通りよ」

すずかは忍達の制止を振り切り、二刀を振るい続けている。

このスタイルを実行することが、マークが二振りの剣を渡した理由だと思っているという事もあるが、それ以上に普通の戦い方を覚えてもマーク達の隣には立てないと感じたためである。

確かに、異常ともいえる戦闘力を有するマークと肩を並べたいのなら、その考え方しかないのだが、さすがに急ぎ過ぎだとマークも思っただが、すずかにそんな常識が当てはまるとは限らないのだ。

「……夜の一族だったか？」

「そうよ、だからあの子は壊れずに済んでいるの」

そう、さすがの身体能力は並の人間と比べてはるかに高い。それゆえに二振りの剣を何とか振るえているのだが、それでもわずか11歳の少女には荷が重い。

荷が重いだろうが、マークにはこれを止めるつもりが無かった。

「自身の無力を知って、それでも先へ進もうという考えは、嫌いじゃない」

「いや、好き嫌いじゃなくて、このままじゃさすがが……！」

「そこをフォローするのが、先人の務めだろ？」

本人にはやりたいたいだけやらせて、足りないところ……具体的に適切な休息などはフォローする。やる気が有り余っているすずかだからこそその指導方法と言えるだろう。

もっとも、この指導はフェイトも適用しており、そのとぼっちりと言ってしまうは聞こえは悪いが、休養日に行動を共にするのはやすずかも間接的に体調管理をされていたりする。

「今後は魔法も勉強することになるし、そこまで体を酷使することにはならんだろっ」

「……まあ、二刀の練習時間が減れば、深刻な事態にはならないでしょうね」

同じ夜の一族である忍の考えも確認し、マークは剣を振るう二人の近くへ寄る。

「そこまで……」

「っ……マークさん……っ、くんには……」

「お久しぶりです……怪我は大丈夫でしたか？」

打ち合いをやめ、慌てて挨拶するすずかに対し、恭也はマークの右

目を見て言っ。

ミッドチルダに行けない恭也は、今日までマークの怪我について人づてにしか聞いていなかった。

「完治したと聞いていたが、その右目の眼帯は……」

「治らなかったわけないわよね？ 胸に大穴相手も次の日には治ってたんだから」

「ああ、これはただの飾りだ」

恭也が少し不安げに、忍がため息をつきながら確認するが、マークも平然と答える。

実際は、マークの右目は完治していない。傷を治さずに眼帯をしているのは、管理局に対して竜も方法によっては倒せる存在であるというアピールだ。

以前は傷付いた翼がその象徴であったが、今は右目にシフトして翼を完治させている。

「それならいいが……それで、今日はどんな用件で？」

「今日は、スズカの魔力を覚醒させに来た」

「ついにですか!？」

もしすずかに尻尾があったら、これ以上ないほどの勢いで振られていただろうと思えるほどの食いつきである。

そんな様子を微笑ましく思っても、マークは表情を引き締めたまま『精霊の粉』を取り出す。

「これを飲めば魔力が発生するから」

「わかりました!」

即座にマークから粉を受け取り、すずかは忍の下へと走る。おそろく、そこに水が用意してあるのだろう。



「……大丈夫なのか？」

「副作用なら、確認されていない」

「ならいいんだが……」

恭也は今一つ、自分には理解できない薬への不信が抜けならしい。マークにもその気持ちはなんとなくわかるので、かつて人以外の種族も『精霊の粉』を使用したことがあるとだけ、追加の情報を出すことにした。

そんなことを話している間に、さすがにマーク達の元へと戻ってくる。

「飲んでできましたー！」

「ん……ああ、間違いなく魔力が発生している」

「~~~~っ！」

マークが太鼓判を押し、すずかは顔を輝かせる。だが、喜ぶのはまだ早い。これはあくまで、魔力が発生しただけにすぎないのだから。

「一応シグナムに魔力についての指導を頼んでおいたが、自分でも訓練しておく」

「はい、パレガですよね？」

「何で……そっか、ムルヴァに習ったのか？」

この世界に無い筈の訓練法を切り出したすずかに少しマークが驚くも、すぐに答えを導き出す。

その後訓練に当たり注意事項をいくつか確認し、最後に後付け型のカートリッジデバイスを『マーニ・カティ』と『ソール・カティ』に装着する。

「……これで、完全装備ですね」

「防具はつけないつもりか？」

「あっ！」

満足げに二振りの剣を眺めるすずかに、マークはもう一つの大事な要素を指摘する。

完全に防具については意識の外であつたらしいすずかは、あまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にしてうろたえる。

「え、えっと、バリアジャケットでしたっけ？」

「俺も自分の鎧以外は持たないからなあ……………」

「どうせだつたら、袴にしてみる？」

「おねえちゃんっ！」

忍の案に慌てるすずかであつたが、マークには慌てる理由が最後までわからなかった。

……………ちなみに、ジャケットデザインはなぜかマークに一任されることになつたらしい。

「あ、そう言えばちょっと聞いてみたいことがあつたんですけど……………」

「ん、何だ？」

姉妹で一通りじゃれ合つて、ようやく冷静さを取り戻したすずかが、マークに軽い気持ちで尋ねる。

「私も竜石みたいなもの作れませんか？」

「それは……………」

マークが言いよどむが、すずかはそれに気付かず自身の考察を述べ続ける。

「あれって普段弱体化する代わりに、石の力を使った時は力を倍増す

るって奴だと思っんですけど……あ、非戦闘時に力をためて、戦闘時にそれを解放するって言い方の方がわかりやすいですかね？」

「……まあ、間違っではないない、かな」

「やっぱり！ それなら普通の人には難しいかもしれませんが、夜の一族である私なら、再現できないですか？」

「……」

さすがの提案に、マークは黙り込む。それは、確かに魅力的な提案であったからだ。

(正直、手が足りてないんだよな……)

現在マークが指揮できる人材だけでは、魔物相手だっただけで対応しきれぬか疑問なのだ。

これにナギや他の犯罪者、マークが封印していた邪竜まで出てくるものなら、間違いなく手に余る。

(少なくとも、英雄級がもう一人必要か……)

確かにマークの知る戦力の中には、なのはやはやてといった将来英雄級に届く逸材は存在するが、彼女たちは担う役割が違う。

問題を解決できる英雄のような人物ではない。

英雄を撃ち出す為の土台のような人物でもない。

彼らが戦いに出ている間、人々を守る盾のような人物が必要なのだ。

(だけど、石を作るってことは……)

そう、マークが悩むのは、石を作るのにエーギル操作技能が必要という一点に尽きる。

それさえなければ、マークはさすがに石を作る事に反対しなかった

だろう。

「……やっぱり難しいな。そもそも、竜族が力を石に封じて今の姿をとるようになったのも、そのままじゃ生きていけない状況に追い込まれたからだし」

「そうですねか……」

マークの上げた理由に肩を落とすすずかであったが、実際そこまで落ち込んでいるわけではない。可能ならありがたかったが、その可能性は低いと元々思っていたのだから。

だが、マークはすずかの様子にわずかではあるが罪悪感を覚える。

マークが述べた理由は嘘ではないが、真実であるとも言い難い内容なのだから……

「じゃあ、魔力以外の……」

「簡易版ではあるが、カートリッジ技術は……」

すずかが他に強くなれる可能性を模索するのを、マークは真摯に受け止め、助言をすることで罪滅ぼしとするのであった。

## 第86話 「リムステラ」

結論から言って、ナギという存在は管理世界の中でもごく一部の人物にしか教えられない極秘事項になった。

理由は簡単、単体で世界と戦える魔王クラス……それも明確に敵と言えるような存在があると世間に知られれば、大きな混乱が起ると予測されたためだ。

故にナギという存在は秘匿され、極秘裏に対策が急がれることになった。

その対策にマークが動員され、馬鹿みたいに忙しくなったのはある意味当然であったと言えるだろう。

そしてその対策の一環として、魔導師ランクの改定が急がれていた。

「とりあえず、君が言つところの英雄級をSSSランクと設定しようと思うのだが？」

「ああ、それで問題ないと思う。それで、今後のランクでは魔力だけでなく精神力も数値として……」

「うむ、しかし幸運の数値化は……」

マークとグレアムは特務六課の部隊長室にて、新たな魔導師ランクについてまとめていた。

ちなみに、悪乗りしたマークが『魔王フォデス級』としてEXランクを、さらに上に『神竜王ナーガ級』としてEX+ランクを設定したりしたが、まじめに採用されてしまって慌てたりするのだが、それはもう少し先の話である。

「実質、人の到達できる最高位はSSS+ランクだな。ごくまれに例外……たとえば神の加護とかがあれば、EXランクに届くことがあるかもしれないぐらいか？」

「そして現在のSSSランク候補が高町なのはと八神はやてか……」  
「正直、俺が認知していない面子の中に候補がいるかもしれないが……ああ、わざわざ探す必要はないぞ？」

魔王級に対抗できる人物は多ければ多い方がいいが、わざわざ探す必要が無いと言ったのにはそれなりの理由がある。

「本当に魔王級と戦える实力があるやつは、探さなくても自然と出てくるもんだ。たとえ实力があるのに埋もれてしまった奴は、それは魔王と戦えるだけの運が無いつてわけだ」

「しかし实力はあるんだろう？」

「無理に魔王の前に出しても、運悪く实力を発揮する前に死んでしまったら意味がないだろう？」

そう、ある一定以上の戦闘で必要なのは实力ではなく運なのだ。

もちろん、いくら運があっても覆らない实力差というものも存在するので、その一線を越えてからの話になるが。

とにかく、わざわざ拾い上げなければならぬ実力者は、マークの中では実力者にならないのだ。

「運も実力のうち……か」

「そついう事だ」

もつとも、マークに見出されるという事は、将来邪竜あたりと戦わせられることになるので、運がいいと言えるかどうかかわからないが……

二人がそんな話をしている中、一人の隊員が部隊長室を訪れた。

「失礼します。マーク二尉いますか？」

「ティードか、どうした？」

微妙に砕けた態度で部屋に入ってきたのは、ティータ・ランスター第二分隊長である。

最初にマークの指揮下に入ったのが運の尽きというか、そのまま特務六課に所属となり、ロイドに続いて分隊長を任されることになったのだ。

そんなティータがこの場に來たのは、マークに今日こそあるものを返却するためであった。

「一応言っておきますけど、返却が遅れたのはこちらから切り出すのはどうかと考えていたからですからね」

「……何か貸してたっけ？」

「……覚えてないんですか？」

首を傾げるマークに、ティータは割と本気でため息を吐く。

「あー、初めての任務の後に渡された腕輪の事ですよ……」

「ああ、『魔導師の腕輪』か」

ティータの言葉と実物を見て、マークはようやく当時のことを思い出さず。

「そう言えば、貸すのは一年といった気がする……」

「二つちから突っ返すのは、貸与された時に醜態を見せたので憚られて……でも期限から一年が過ぎて、流石にまずいと思って返しに來たんですよ」

正確には一年半近くになるのだが、そこら辺はまあいいだろう。

マークとしても、別に次に渡したい相手がいるわけでもなく、完全に忘れていたのだから。

忘れてはいたが、有効活用されていたのならそれでいいかと、マークは腕輪を受け取る

「それで、腕輪の効果についてわかったか？」

「えっと……自信は無いんですけど、もしかしてというものは……」

マークは当時のことを思いだしたついでに、あの時は語らなかつた腕輪の効果について気付いたことを聞いてみるが、ティータはかなりの躊躇を挿んで、こたえる。

「……魔力の成長促進、だったりします？」

「正解。わかつたってことは、それなりに恩恵があつたってことか？」

よくわかつたな、と気楽に言つマークであつたが、ティータついでにグレアムは顔を真っ青にする。

「……マジかよ……いや、思い当たることがあつただけぞ……」

「それが本当なら、ロストログアというのも生ぬるい代物だぞ？」

幼少時からの成長から見てAAランクが精々だろうと思つていたティータだったが、それに反してつい先日AAAランクの試験に受かつてしまったのだ。

それを単純に喜ぶだけで済ませられる図太さがあればよかつたのだが、残念なことにティータはそうではなかつた。

「確かに、生来の才能をさらに伸ばすようなもんだもんな」

「今ようやく、効果を公にしたら問題になるって言つた意味が分かりましたよ……」

「だが、これを使用すれば、人員不足解消の一助になるのではないかな？」

「これ一個じゃ焼け石に水だろう」

確かに装着しているだけで魔力の成長が促進されるというのはあ



りがたいが、年単位で使用してようやくランクが一つ上がるだけ。それも今回のティータほどの効果は、滅多に期待できないらしい。

「それなら、最初からなかったことにしていいかもしれない」

「まあ、今回みたいに機会があれば誰かに貸すぐらいか」

「……」

マークとグレアムが出した結論に、勿体ないと思ってしまったティータであったが、それが正しい思考だろう。

ひそかにため息を吐いたティータであった。

マークがティータに腕輪を返してもらっていたころ、ミッドチルダの郊外でリムステラは秘密裏に情報収集を行っていた。

「まさか、管理局から離れることでこんなに情報が集まるとは……」

周りから見ればひとりつぶつぶ言っているように見えるリムステラであったが、彼女にとっては違う。彼女は一つの体に七つの魂が宿っていたのだから。

そんな彼女が驚くのは、管理局の外側に形成された情報網だ。

まずは安全な拠点を得ようと奔走した結果、リムステラは管理局にも裏社会にも属さない、特殊な一団と接触することになったのだ。

そこで肉體言語やら酒の力を借りて何とか溶け込み、その情報網を使う事を許されたのだ。

なぜか、姐さんやら姉御やら呼ばれることが多くなったが、安全な拠点と確かな情報の代償と思えば安い物である。

「最高評議会が、戦闘機人の作製を推奨している……ね」

リムステラとて必要悪についてとやかく言いつつもりはないが、これ

はその範疇を越えてしまっていると思う。

おそらくは、長い時間をかけて倫理観が少しずつ甘くなっていたのだろう。

とはいえ、さすがにそれらの行為を手元でやるのは都合が悪い。

故に犯罪者に研究をやらせ、その成果が出ては犯罪者を捕らえ、技術を接收することで違法研究を重ねていったのだろう。

そして今回その役に選ばれたのが、ジェイル・スカリエッティである。

そして今回の問題は、これだけに収まらなかった。

「戦闘機人とは別枠で、プロジェクトFを再起動し、噂の竜人のクローンを作成したとか……」

そう、それこそがゼスト隊の命を奪ったナギという存在の答えであった。

この情報が入ってすぐ、マークに連絡を取ろうとしたリムステラであったが、タイミングの悪いことに魔導師ランク改定の準備の為に、らく外に出られなくなってしまっていた。

「彼は知り合いの子であるかもしれないと危惧していたみたいだし、違うとわかればそれなりに取れる手段が増えると思うけど……」

とはいえ、マークと互角の戦いを演じたナギが、今後しばらく表に出てこないだろうことは容易に想像できた。

次こそは勝てるようにと、今頃調整を行っているだろう。

「可能なら、調整が終わる前にアジトを突き止めたいんだけど……」

表の世界からはじき出され、かといって裏の世界に染まることもなかった彼らをもってしても、『無限の欲望』と言われる男の拠点を調べ切ることができなかったのだ。

もつとも、今までの情報を集めただけでも十分とんでもない腕の持ち主たちなのだが……

そんなことを考えつつ、リムステラはもう一つの懸念を晴らすべく、ミッドチルダの郊外を探索し続ける。

探すのは、施設から自力で逃げ出したらしい人造生命体である。

「微かだけど、確かに存在の痕跡がある……もしこれもマークのクローンなら、放って置いたら後々大変なことになりかねない」

だが、管理局の方でも嚴重とは言えないまでも警戒網が敷かれており、なかなか思うような探索ができずにいた。

下手をすれば、リムステラ自身が逃げ出した人造生命体と判断されかねないからだ。

「まあ、今の私が人造生命体であることは否定できませんが……」

つい浮かんだ皮肉を口にしつつ、これ以上の探索は不可能とこの地を離れる。

「しばらくは管理局の不祥事について調べましょうか……さすがにまだ最高評議会には手が出せないでしょうし、今は末端から手を加えていきましよう」

いくら最高評議会が黒だったとはいえ、これを公表しても受け入れられるとは思えない。今は耐え忍んで、時を待つほかないだろう。

だが、リムステラは気付いていなかった。闇を見るといふ事は、闇に見られているという事を……

だから、管理局の警戒網から十分離れたところで向けられた一撃を、完全に躲すことができなかった。

それでも急所を逃れ、左腕を切り裂かれるだけで済んだのは、リムステラの身体スペックがずば抜けているおかげである。

そして、リムステラは驚愕する。襲撃者の姿は、彼女がよく知る人物のそれであったのだから。

「ゼスト・グランガイツ!？」

「……」

そう、リムステラの前に立ったのは、彼女の中にいるはずのゼストであった。

しかし、いや、だからこそリムステラが感じた驚愕は一瞬。目の前の存在が偽物であるとわかった以上、リムステラの感情が怒りに染まる。

「……『フィンブル』ッ……」

「……」

もはや言葉にならないほどの怒りは、魔法という形になってゼストへと向かう。

鋭い氷の欠片を含んだ暴風がゼストを包み、さらに巨大な氷の塊を発現させ、ゼストを閉じ込めようとする。

だが、腐っても管理局最高峰の使い手。ゼストは手に持った槍で氷の欠片をはじき、氷塊に飲まれることなくその場から脱出してみせる。

そのままリムステラへと向かい、その槍で心臓を貫かんとするが、その程度は予想済みである。

「……こちらにオリジナルがいる以上、あなたの動きは全て筒抜けです」

「……」

無言を貫くゼストに、リムステラは『フィンブル』を応用して氷の柱を生み出し、撃ち出す。

さらに風の刃を使い徐々にゼストを追い詰める様子は、完全に作業と言ってよいものであった。

そう、相手がゼストだけであったなら、後は詰将棋のごとく最後までこの場が覆ることは無かっただろう。

だが、この場はミッドチルダであり、派手な戦闘をすれば管理局の魔導師が出てくるのは当然の事であった。

完全に戦場を支配していたリムステラの足元に、雷撃が走ったのだ。

「今すぐ戦闘行為を中止し、投降してください！」

その声のリムステラは顔をゆがめる。それが今もつとも会いたくない人物の一人の声であったからだ。

(なんでフェイトちゃんがここに……！)

さらにその後ろから飛んでくるなのはの姿も確認して、リムステラは気付かれない様のため息を吐いた。

彼女は知らなかった。復帰してすぐという事で、フェイトはなのとは行動を共にしており、万に一つを考えミッドチルダ郊外という近場の任務に立候補していたことを。

そして彼女は知っていた。フェイトはゼストと戦いたくなくないと思っていて、死んだはずの彼がこの場に居たらその生存を喜ぶだろうことを。

「そこにいるのは姿形を似せた偽物だ！ 気を許すな！」

「っー」

一度は敵対したとはいえ、最後は共闘した顔見知りには状況を尋ねようとしていたフェイトが、リムステラの警告を聞き咄嗟に身をひるがえした。

その直後に奔った一閃により、フェイトとなのははこの場が思っていた以上に混沌した場であると認識する。

しかし、そんな警戒も長くは続かない。奇襲に失敗し、管理局の排除にも失敗した以上長居は無用と判断したのだろっぜストは、即座に撤退したのであった。

「……警告、感謝します」

「感謝ついでに見逃してくれたらうれしいんだけど？」

「それは……できません」

「そうだろっね」

元管理局員として、フェイトの主張は理解できる。しかし、リムステラとしては今管理局にいろいろ調べられるのは都合が悪い。

ならばそれらしいことを言って煙に巻くのが一番と判断した。

「……まだ時ではない」

多少仰々し過ぎるかと思ったりリムステラであったが、始めてしまった以上は続けるほかない。

警戒しつつも首を傾げるフェイトに、さらにそれらしい言葉を投げつける

「いずれ来るときに備え、力を磨いていなさい。そうすれば、肩を並べるところがあるかもしれない」

「どっついう意味ですか？」

敵じゃないというアピールを行いつつ、リムステラは転移を行いその場から消える。

転移に気付いて慌てるフェイトを見て少し申し訳ない気分になったが、かといって管理局に捕縛され、マークに迷惑をかける気にはなれなかった。

これからしばらくして、管理局の敵とも味方とも取れる行為を繰り返した結果、犯罪者のリストに名を連ねつつも義賊としての名が広がっていくことになるのだが、それはもう少し先の話である。

リムステラが探索を諦めたころ、一人の少女が管理局の中樞へと侵入を果たしていた。

「正直、警備がすぎる過ぎるな。技術が進歩したのはいいが、過信しすぎだ。やはり最後は個々人の技量こそが重要だという事を忘れている」

薄暗い、天井まで伸びた三本の巨大なシリンダーが立つ部屋で、少女は嘆く。

だが、その言葉に応える者は無い。つい今しがた、答えを返す可能性があった存在の命を少女が刈り取ったばかりなのだから。

「ふむ、今となっては見る影もないとはいえ、さすがはかつて英雄と呼ばれただけはあるか。なかなかのイーギルだ」

肉体はすでに無くなっていったが、その精神は一応健在であったらしい。少女は手に入ったイーギルに満足し、そのイーギルの一部を使って細工をする。

少女によって人形として再び意思を得たかつての英雄は、そのことに疑問を持つことなく、むしろ下僕にして頂いたと感謝する。

「まあ、ひとまずこれでいいだろう」

実質管理局を支配下に置いた少女であったが、人形たちに特に変わった指示を出すことなくこの場を後にする。

それは少女の戦う相手が、決して油断ならない敵であるからだ。欠片だって手を抜くことはできない。

そうつぶやく少女の脳裏に奔ったのは、かつてあった二度の戦いの事である。

「もう、細かい事は思い出せない……でも、これだけは覚えている」

少女を退けた一頭の竜と一人の英雄、そして、その間を取り持った半竜半人。その半竜半人こそ……

「マーク……我が仇敵にして、今の私のオリジナル……」

そう、この少女こそがジェイルの研究所から逃走したナギの予備であった存在。すなわちマークのクローンであり、その身に宿った精神は、マークと共に封印されていた邪竜である。

そんな少女に掌握された管理局の最高評議会だったが、彼女はまたこのカードを切るつもりが無かった。

「手札は多ければ多いほどいい。私は貴方を、決して甘く見たりはしない」

人類に道を譲ったナーガの血族が人類を敵に回したとき、マークは一体どうするつもりか。

少女は邪竜の名にふさわしい笑みを浮かべ、その日が来るのを待ちわびるのであった。



## 第87話「訓練休暇」

突然だが、戦闘面ではほぼ万能を誇るマークであったが、彼にも弱点というものはある。

念のため言っておくが、別に心臓を抉られたら死ぬとか言う当然の事でも、実は身内に甘いかいという精神的なものでもない。

もっと単純な事なのだが……もちろん、日常で問題になるような事でもなければ、戦闘で問題になることもないだろう。

だが、それでもその一点が弱点であることに変わり無く、またその弱点は訓練によって改善することが可能であるらしい。

ならば、無い時間を無理にでも捻出して訓練を行うのは、ある意味義務とさえ言えるというのが今回のマークの言い分であり、管理局が認めた主張であった。

そして、せっかくの訓練を一人で行うのはもったいないというのがグラム 의견であり、ならば成長途上で面識もあるフェイト達を同行させてはどうかというのがリンディの提案であった。

結果、地球関係者の訓練休暇が実現した。

「……確かに、書面だけ見れば訓練休暇が受諾される内容だったな」  
「ああ、近年まれにみる会心の出来だっただろう？」

ため息を吐きつつもマークと共にトレーニングを行うための服装に着替えたクロノであったが、正直真面目な彼からしてみれば、なんだか虚偽報告をしているようでかなり後ろめたかった。

そう感じるのは、この場所のせいだろう。

「訓練とはいえ、休暇中だ。比較的気の休まる地球で行うのも、問題ない事だろう？」

「ああ、訓練場所を個人的な伝手で用意するのもよくある話だし、特殊な訓練を行うのに部外者の指導を受けることもままあることだ……」

だが……」

クロノの視線の先に居るのは、特にマーク達とは関係のない民間人である。

そう、今回の訓練は、海鳴市にあるとある屋内民間施設で行われるのだ。

「……『水練』とはよく言ったものだ。ようするにプールで……」

「みなまで言つなよ、クロノ。泳げない俺にとっては、間違いなく訓練でもあるんだから」

ひどく真面目な顔をしながらクロノの言葉を遮るマークであったが、本気でないのが明らかだ。

何せその目が完全に笑っていたのだから。

「まあ、残りの二日はちゃんと訓練するし、初日くらいいいだろう」

「せめて二日頑張ってから、最終日に打ち上げにした方が……」

「それじゃあ俺が泳げるようにならなかったとき大変じゃないか」

2人と同じように水着を着たユーノがつぶやくが、それはマークが即座に却下した。

流石に三日かけても全く成果なしでは、問題が残る。初日にみんなでプールにしたのは、保険でもあったのだ。

もつとも、マークほど体を動かせる人物が、全く泳げるようにならないなど欠片も思っていなかったが……

そんなわけでプールに来た一行であったが、その前にもちよつとした問題が起こったのだ。

というのも、その問題はマークやクロノたちではなく、主に少女たちに降りかかったもので……要は水着のデザインについてである。

「おまたせしました」

「いや、たいして時間は立ってないよ」

続々と出てきた少女たちの水着は、いわゆるスクール水着というものであった。

一応、休暇とはいえ訓練であるため、あまり可愛らしいものなどは自粛すべきという事になってしまい、結果学校で使うようなものになったのだ。

「せっかくの機会だったのに……」

「まあまあ、今度はちゃんとした休みの日にしてもらえばいいじゃない。ほら、プールじゃなくて海なら……」

フェイトやなのは、はやてに続いて出てきたはずかとアリサが何やら話していたのがマークにも見えたが、さすがに内容まではわからなかった。

保護者枠で忍や美由希、リンディやエイミィ、シグナム達も現れたがやはり全員が紺色の水着であった。

「シノブ達が着ているのもスクール水着というやつなのか？」

「まさか！」「っちは競泳用よ。貴方たちと同じく、ね」

流石にそんなものを着る歳ではないという忍であったが、マークの記憶では彼女もまだ学生だったはずである。

首を傾げるマークだったが、それ以上は考えるなどはかりにクロノに肩を叩かれ思考を停止させるのであった。

「それにしても、まがりなりにも水着で出てきた女の子たちに何もなしなの？」

「ふむ……？」

言外にとつとと寝めろというリンディであったが、まさか自分をと

いう事は無いだろう。

マークとしてはそれでもよかったが、彼女の視線は間違いなく最初に出てきた五人に向いていた。

(はてさて、どつしたものが……)

褒めろと言われても、彼女たちにとって今着ている水着は本意ではないらしいし、スタイルをというにはまだ……

(……なんだろう、今背筋が……?)

なぜかこれ以上考えるのは不味いと感じたマークは、とにかく素直に思ったことを口にしてみることにした。

多少失言があったとしても、このまま黙っているよりかはマシだろう。

「……綺麗になったなあ……」

初めて会ったときは、まだ幼さが勝り、見ていて微笑ましいという可愛らしいという感情が先んじたが、今はもう違う。

目標をしかと定め、その目標へ向け着実に進む力強さも加わり、磨かれてきたのが見て取れる。

特にすずかは魔法がほとんど使えないにもかかわらず戦う事を望んだためか、その輝きが肉体にも顕著に表れている。

フェイトに限っては出会った当初の険が取れ、丸くなったとも言えるかもしれないが、それ以上に自身の意思を持ったことにより一本芯の通った美しさを得たように思える。

もともと強い意志を持っていたなのはにしても、将来の進路という形で未来へと視界が広がったためか、どこか生き生きとしているように見える。

この面々の中で最も危ういのははやてであるが、彼女にしてもただ

やみくもに『家族を守る』と言っていたところは違い、管理世界について様々な知識を吸収してきている。

一家の主として強かさを得た彼女が、最大の成長を見せていると言つて過言ではないだろう。

五人の中で唯一進路を別つたアリサであつたが、その決断を下せた彼女が一番冷静であつたと言えるかもしれない。

決して情に流されたりせず、自分にできる事をわきまえ、自分しかできない事を実行するという事は極めて難しいのだから。

要するにほぼ内面の成長に触れた言葉だつたのだが、評された少女たちは顔を赤らめる者がいる程度には満足できたらしい。

「へえ〜、ふう〜ん……」

「……なんだよ」

「べつつこい〜」

なんだかやたらとニマニマするエイミィが鬱陶しかつたが、そこからマークの述べた感想が間違いではなかつたとひそかに安堵する。

「まあ、いいわ。……それにしても、やっぱり絞り込んであるんだねえ」

「鋼のようなという表現がぴったりね。……これって本気で沈むんじゃない?」

圧倒的な膂力を持つというには細身に見えるが、そこら辺は考えても無駄と知る美由希が感嘆の声を上げ、忍が懸念を述べる。

「沈まないように、泳ぎを教わりに来たんだろ?」

「……まあ、そうなただけどね」

本気で首を傾げるマークに、本来人は浮くものだと言つ気も起らなかった。

何となくしてやられた気分になる忍であったが、いつまでもプール  
際で話し込んでいるのもよろしくない。

さっそくではあるが、訓練を開始することにした。

「とはいえ、俺とフェイト、ハヤテとアリシア以外は遊んでいても問題  
ないんだが？」

「いや、せつかくだから近代泳法の一つでも学んでおこうと思ってな」

「正直、飛行魔法の応用で水中であろうと高速移動に問題はねーんだ  
けどな」

「……」

シグナムとヴィータが言い分を聞くと、本気で訓練が必要なのは  
マークだけであるらしい。

ならば完全な素人に足並みを合わせさせるのも悪いとマークは思  
い、班を二つに分けたのだが……

「スズカと俺の組と、それ以外？」

「そ、わたし達じゃ万が一あなたがおぼれても助けられないし」

もしマークを助けようと思ったら、ユーノが結界を張ってなのはが  
デイベイン・バスターあたりを打ち込んだ方で水を吹き飛ばす方が確  
実だろう。

普通に救助しようと思ったら、まず間違いなく二次被害が発生す  
る。

そして、今回教師役を務める人物の中で最も運動能力が高いのがす  
ずかなのだ。

「すずかちゃんの最近のハードトレーニングで、完全に追い抜かれ  
ちゃったのよねえ……」

「まあ、まともな人間なら仕方ないでしょ」

一応、年下に追い抜かれたことを嘆く美由希であったが、同時にこの事が不可避であったことも理解している。

肉体の質が違う事も確かに一因だが、何よりも強くなることに懸ける意志が違う。

「……結局のところ、貴方がおぼれるところを想像できないから樂觀視しているのよ」

「本当にその恐れがあるなら、我らが監視につくからな」

シヤマルとシグナムの言葉に、マークも納得せざるを得ない。

もしこのプールでおぼれるようなことがあるなら、かつて海に放り出された時に死んでいただろう。

そんなわけですすかの個別指導を受けることになったマークだが、当然のように順調に指導となった。

「えっと、本当の初心者なら水に入るところからなんですけど……」

「まあ、水に入るのは初めてじゃないしな」

今まで泳いだことが無いだけで、水浴びをするのに川や湖に入ったことも一応ある。

とはいえ、それもせいぜい膝上に届くかどうかという深さまでだ。

さらにこのプールは、なだらかな坂の様に少しずつ水の中に入れるような作りになっていない。初めて自分から水の中に入るのに、まったく躊躇なくとはいかなかった。

「じゃあ、わたしの手を握って……」

「ああ……」

割と平気そうな顔をして実は怖いのか、それとも教師役のすすかの指示に従っているだけなのかはわからない。

だが、素直にすすかの手を取ったマークは、二人でゆっくりと水の

中に入った。

「大丈夫ですか？」

「……ん、問題ない」

ただ初めての事だから慎重になっているのか、緊張しているのかもわからない。

いつもより言葉数が少ないような気もするが、マークが指導を受ける側に立つのを見るのは初めてで、やはりすずかには判断がつかなかった。

「じゃあ、次は顔を水につけます」

「分かった」

「あっ………」

すずかの言葉にしっかりと頷き、マークは大きく息を吸って水の中に潜る。

完全に潜るのではなく、顔をつけてもらっただけのつもりだったすずかがわずかに驚くが、幸い問題無くできたようであった。

マークに握られた手をわずかに握り返し、もう上がってくれと合図した。

合図を受けゆっくり上がったマークに、すずかは笑みを浮かべて満点をつける。

「ここまでできれば、もうほとんどできたも同然ですよ！ 後は水の中で目を開けられるかぐらいだけど、いざとなったらゴーグルもありますし」

「そうか？ じゃあ、もう一度潜ってみようか」

「はい……」

マークが息を吸うのに合わせ、すずかも大きく息を吸う。



水中で目を開けるのなら、目の前にあるのが顔であった方がいいと思っただのだ。

そうして同時に水の中に潜り、わずかに発生した気泡が無くなったと同時にすずかはマークの隻眼が水の中でも開いているのを確認できた。

この段階についても、マークは無事にこなせたようであった。

「えっと、あと何かやっておくべきことは……そうだ！ 水の中で動く感覚を覚えるのはどうですか？」

「しまじゅん？」

「泳いでみる前に、歩いてみるんですよ」

そう言っただけすずかはマークの手を引き、プールの端をゆっくりと歩く。

手を引かれるままに歩いていたマークであったが、次第に慣れてきたのが、すずかの隣に立って歩き始める。

「どうですか？」

「うん、思ってたより重くないかも？」

「そうですか？」

水の抵抗が思ったほどではないのも、マークが以前海に落ちた時と比較しているからだ。

今着ている水着と比べれば、海水を吸った服は、さぞかし重たかったことだろう。

それからしばらく歩いた後、ようやく今日の本命である泳ぎの練習に入った。

「基本は水を掻くときは広く、手を前に戻すときは狭くです」「ふむ」

クロールの手の動かし方を実演しながら、息継ぎの仕方も含め解説する。

もっとも、予習として水泳入門書のような物を読んでいたらしいマークには、説明は必要なかったかもしれない。

バタ足についても足の付け根から動かすとか、膝を曲げないように等説明し、早速やってみるようになった。

「最初はバタ足だけで、手は握ってますから、顔をつけてやってみてください」

「了解」

こうして順序通りに、割ととんでもないペースで泳ぎ方を教わったマークは、一時間後には今日初めて泳ぎを習ったとは思えない速度の泳ぎをマスターするのであった。

「ふむ、有意義な一日だったな」

「……午後はまさに訓練って感じだったかな！」

「はは……ヴィータちゃんとシグナムさんに対しては、マーク君も容赦なかったもんね」

マーク達が泳げるようになってからは、基本的にビーチボールを使ったりして遊んですごしたのだ。

その際、マークのアタックは当然のようにシグナムやヴィータを狙い、白熱した戦いになってしまったのだ。

もっとも白熱した最大の原因は、熱くなりすぎたヴィータがビーチボールを魔力で強化してしまったことにある。

「あれのおかげで、本気で打ってもボールが割れなくなったからな」

「……反省してる」

「よろこぶ」

お互い一応本気でなかったとはいえ、マーク達が戦えば注目を集めるのはもはや必然である。

その後ボールの使用を禁じられてしまったのも、また当然の結果だろう。

「まあ、飛び込みとか競争とかも十分楽しんだしいんだけど」

「私は流れるプールで浮かんでるだけのマークさんが印象的だったな」

今日泳げるようになったとは思えない事をしでかし続けたマークであったが、さすがにとっては大きな浮き輪を借りてきて流れるプールに浮かんでいた方が印象的であった。

隣にはフェイトとアリシアの浮き輪がくっついていたので、それに続いて皆で繋がって行ったら、さすがに大きくなりすぎて他の利用者の邪魔になると注意されてしまったが……

そんな楽しい出来事を語りながら帰路についていたマークの耳元に、忍が静かに近づき尋ねる。

「ホントに大丈夫だったの？」

「何が？」

「最初のころ、ずっとすずかの手を握ってたけど、本当は怖かったんじゃないかなって」

「……」

そう言えば、とマークは思い返す。

確かにマークはすずかの手をずっと握っていたが、別に水の中に入ることには恐怖を覚えはしなかった。

「ふ〜ん……すずかの手を握っていたから怖くなかったとか？ それとも、割と無意識で握り続けてたの？」

「……まあ？」

「はあ……」

とぼけているのか本気でわかっていないのか今一つ分からないマークの返答に、忍もこれ以上探りを入れるのを諦める。

正直、枯れているのか、戦いにかまけて情緒が未発達なのかすらわからないのだから。

「これだったら、すずかをからかった方が楽しいわ」

「……」

その言葉にマークは返事をせず、この後散々弄られるであろうすずかに心の中で手を合わせるのであった。

そこからしばらく無言であった二人であったが、ふとあることを思い出したマークが再び声を出した。

「……そう言えば、エイミィとクロノの仲が少し進展してたか？」

「他人の方はそこそこ見えてるのね……ナンパされそうになったエイミィを、彼が助けたのよ。その時は私の方に被保護者が集まってたから」

ちょっと一休みのつもりだったのだろう。一人になったところを運悪くターゲットにされたエイミィであったが、そこをクロノが颯爽と助けたらしい。

「あの顔は自分が嫉妬したことに気付いてしまったって顔だな」

「そうね。あるいは無意識のうちに、自分の物だって思ってたことに気付いたってところかしら？」

何はともあれ、これでクロノとエイミィの関係は進んでいくことになるだろう。

何となくうらやましく思ったマークは、明日からの訓練でちょっとだけクロノに厳しく……もとい、丁寧に指導しようかと検討するのであった。

## 第88話 「訓練休暇二日目」

訓練休暇の二日目、マーク達は月村邸の一角に結界を張り、戦闘訓練を行おうとしていた。

「現在確認されている最大の脅威は、竜族ハーフと思われる少女ナギだ。魔物どもの存在も気にはなるが、優先すべきはこちらになるだろう。」

「マークの同類……正直に言って、勝てるイメージがわからないんだが？」

「うん、地上最強と言われていた部隊でも手も足も出なかったし……なのはとはやて以外決め手に欠けるって言ってなかった？」

とりあえず前提を確認するマークに、クロノとフェイトが疑問を呈する。少なくとも、一朝一夕の訓練で届くような存在とは思えなかったのだ。

「だからと言って、対策を練らない理由にはならないだろ？」

「それはそうやけど……」

「もちろん、すぐに強くなれるような訓練は無いが、一時的な物なら不可能じゃないからな」

そう言ってマークが取り出したのは、色とりどりの宝石が付いた指輪であった。

「これ……」

「指輪に嵌められた宝石を砕くと、一時的に能力が上昇する魔導具だ」「またとんでもないものを……」

使い捨てでこそあるが、カートリッジシステムを採用していない魔

導師はもちろん、魔法の心得がないものでも使えると言っ割ととんでもないアイテムであったりする。

さりげなくロストロギアに片足を突っ込んだアイテムに、クロノは人知れず肩を落とすのであった。

だが、この指輪はその場しのぎのものではしかない。今回の本命は、成長の余地のあるのは達ではなく、すでに完成された戦士であるシグナム達に向けられたものであった。

「レヴァンティンとグラーフアイゼンに『デュランダル』の欠片を埋め込むのもいいかな？ クラールヴィントには組み込みにくいから……いっそ『セチの祈り』を五番目のリングにするか？」

「……いいのか？」

「……ナノハに『炎の紋章』を渡しているし、ハヤテも俺の魔法を蒐集しているから、欠片程度今更だ」

他にもリインフォースに『ニニスの守護』を埋め込んでもいるし、本当に今更な問いかけと思わないでもない。

「ザフィーラの手甲はどうする？」

「ふむ、もし希望を聞いてもらえるのなら、我は盾としての役割を十全にこなせる強化をお願いしたい」

「そうか……なら『竜の盾』を加工してもらおう」

シグナムとヴィータは刃で、シャマルは指輪で、ザフィーラは盾で強化することに決めたが、残念ながらこの場で加工できるものではなく、後日第四技研にて処置してもらうつことになる。

これだけでも結構な強化であるのだが、マークの強化にはまだ先があった。

「もっ……は……これだ」

「ひょっとして『竜石』か？」

「いや、『獣石』だ」

更なる強化として取り出したのは、『竜石』によく似た『獣石』という力を秘めた石だ。

何に使うのかと訝しんだのも一瞬。ヴィータはとある前例から、これの使い道をひらめいてしまった。

「……………これを使って、フェイトにしたみたいにアタシらの体を作り替えるのか？」

「ッ!？」

「提案の一つだ。強制はしない」

ヴィータの言葉を肯定したマークに、はやて達は今度こそ驚きの目を向ける。

確かに、すでに完成された守護騎士たちを強化しようと思ったら、最終的には改造を行う他無い。

「作り替えると言っても、リンカーコアの横に埋め込む、といった表現の方が適切かな？ まあ、異物として弾かれないように、いくらか弄る必要があるかもしれないけど」

「それを実行して、シグナム達はそのままでいられるん？」

「人格までは弄らんよ。守護騎士プログラムは確かに複雑だが、これでもリオンやムルヴァの肉体を作れる程度の技能はあるんだから」

「確かにそうかもしれないけど……………」

実績があるのは認めるが、今回はフェイトの治療とは異なり、まさに改造手術とでもいうべき所業なのだ。はやてが思わず躊躇するのも仕方ないことだろう。

だが、当の守護騎士たちは違った。

「……………是非、頼みたい」



「シグナム!？」

「主はやて……わたし達が最も恐ろしいのは、貴方を守れない事です」

シグナムは、今はまだ自分がマークと戦っても勝てないという事を、そして通常の訓練では自身が成長しない事を知っている。

故にマークの同類が敵対していると知ってしまった今、どんな危険があると言われようとも、力を得る機会を蹴るわけにはいかないのだ。

「問題ありませんよ。マークが提案したという事は、失敗する可能性がほぼ皆無のはずです」

「そつやろつけど……」

「なじむまでそれなりに時間がかかるかもしれないけどな」

言外に失敗はありえないと言うマークに、はやては反論の材料を失う。とはいえ、もとより反対していたのは感情的な問題だ。

シグナム達が望み、マークが太鼓判を押すのならば、これ以上反対することもできなかつた。

「人に対する施術じゃない分、監視とか気にしないでいいから気が楽だな」

「そっか、フェイトちゃんにやる時とは違って再現が実質不可能だから……」

「そついうことだ」

本来は研究所にて行つべきだったが、守護騎士という他に類を見ない存在への施術である。たとえ見られたとしても問題ないと判断したマークは、即座に『獣石』をシグナム達へと埋め込んだ。

「……なんか、変わった気がしない」

「常時発動型にしたら、スズメの涙みたい強化にしかならんからな」

ヴィータの感想に苦笑するマークは、簡単な発動方法を告げる。  
曰く、リンカーコアから魔力を引き出すかのごとく、『獣石』から力を全身に巡らせればよいとのことだ。

「やってみるか」

「消耗品だから、あまり無駄遣いするな。感覚を掴むまでにとどめておけよ?」

「わかった」

忠告を聞いて集中しだした守護騎士達から一歩離れたマークに、ふとフェイトが訪ねる。

「私も感覚を掴むだけだったら、そんなに消耗はしないかな?」

「……まあ、全くないわけじゃないから、時間は掛けるなよ」

「うん、わかった」

フェイトも首にかけた『飛竜石』を取り出し、シグナム達に続くように目を閉じ集中を始める。すると、変化はすぐに訪れた。

「フェイトの方が馴染んでいる分早いか……」

「なんだか、不思議な気分……」

マムクートでないフェイトは、『竜石』を使おうが竜化をすることは無い。だが、全く影響を受けないわけでもなかったようだ。

「わっ、わっ、耳が伸びたよ!?!」

「ねえ、これひょっとして竜の鱗? さわってみていい?」

「え、えっ!? つひゃん!?!」

マークと同様に伸びた耳に加え、首もとにわずかに鱗が生えたらし

い。さすがに翼が生えたりはしなかったが、十分すぎる変化である。なのはとすずかにくつつかれて触られて赤くなったフェイトをはやてがちらちらとみるが、主として守護騎士たちのもとを離れるつもりは無いようである。

そんな主の限界が迎える前に、ザフィーラが『獣石』の発動に成功した。

「…………ふむ、なるほどこれは素晴らしいな」

「元々が守護獣だからか？　かなり安定しているようだな」

予想以上の強化にどこか興奮気味のザフィーラに、マークも問題ないことを確認する。

もっとも、マークの言うつようにもとが守護獣であったためかフェイトのような目に見える変化もなく、周囲からしてみればわかりにくかったようだが。

しかし、外見から判断し難かったのはザフィーラだけだったようで、次に発動を成功させたシャマルの変化は非常にわかりやすかった。

「ネ、ネ」ミミヤー！

「ちよっ!?!　ネ」ミミヤー!?!

思わず叫んでしまったはやてに、シャマルは慌てて自身の姿を確認する。実際に触ってみれば、確かに自分のものと確信を得られる感触を持った耳が側頭部あたりから伸びていた。

「…………どっしり理屈で猫の耳が?」

「マーク君!?!」

「まあ、特に害があるわけじゃないから」

悲鳴を上げるシャマルに、想定外ではあるが実害が無いことをマー

クは告げる。事実不調を感じることもなく、ちゃんと強化は成されていた。

「……おい、まさかアタシたちも生えてくんのか!」

「シャマルを見る限り、何の動物の耳が生えてくるかはわからんがな」

「マジかよ……」

思わず集中を解いたヴィータであったが、残念ながら今更強化を無かったことにもできるはずが無かった。

シグナムもそのことがわかっていよう、若干頬が引きつるのが見えるものの、必死で『獣石』を発動させようとしていた。

「うう……確かに身体能力は大幅に強化されてるみたいだけど、魔力の強化はいまいちかしら?」

「ああ、『獣石』は身体機能方面に特化しているから……後方支援型にはあまり有効な強化じゃなかったな」

羞恥に悶えながらも自己分析するシャマルに、マークは騎士という言葉に引きずられ過ぎたかと己の失敗を悟る。

彼女らは守護騎士ではあるが、その本質は魔力を使って戦う魔導師でもあるのだ。

もっとも、守護騎士たちに『竜石』を使う気は無い以上、根本から作り直す以外に手は無く、選択肢などなかったのだから仕方がない。

そんなやり取りをしている間に、シグナムもまた『獣石』の発動に成功したようであった。

「シグナムもネコ!!!?!」

「ひょっとして、ライオンの耳じゃないかな?」

「ネコ科はネコ科でもライオン!?!」

どんどんテンションが上がっていくはやて達に、シグナムは表面的

には何かを諦めたような顔をしながら耳をぴくぴくと動かす。

(……………実は気に入ってる?)

何となくマークにはそんなふうに見えたが、賢明にも確認したりはしなかった。

ひとしきりはやて達が騒いだ後、ついに最後の一人となったヴィータへとみんなの視線が集まる。

「シャマルとシグナムがネコ科やったし、バランス的にはヴィータはイヌ科やね」

「他にも動物はいろいろいるのに……」

集まった視線に一瞬だけ怯んだヴィータであったが、注目が集まったことでかえって腹を括ったのか、次の瞬間には『獣石』の発動を成功させた。

そして現れたのは……

「ウサミミッ……」

「わっ！… ちょっ……」

垂れたウサミミを生やしたヴィータを存分にもふるべく、はやてはいつそ襲い掛かると言った表現をした方がいい勢いでヴィータに飛びつく。

撫でまわされるヴィータの様子はシグナムの時と同様に、どこかまんざらでもないように見えたのだが、マークはやはりそのことを口にはしなかった。

もっとも、そんなことを口にするような暇もなく、マークに問いが投げかけられたからかもしれないが。

「ちなみに、どのケモノ耳がマークさんの好みなんですか？」

「ん？」

今一つ要領を得ないすずかの質問にマークは首をかしげるが、それでもとりあえず自分がどんな耳が好きかを考えてみる。

「ネコ、かな？」

「ネコですか」

「ああ、特に態度と耳の反応が噛み合っていない時なんかは見ていて面白い」

必死で興味が無いふりをしているのに、耳だけは『興味津々ですー！』と訴えているのを見るのはなかなか楽しかったと言うマークに、すずかは要するにギャップがいいのかなと思案する。

「スズカは……ネコ好きだったな」

「はい！ ウチも今では近所でも有名なネコ屋敷ですよ」

軽い気持ちで聞き返そうとしたマークであったが、寸でのところですずかの好みを思い出す。

思いのほか良い反応が返ってきたことで、実は地雷を踏むところだったのではとマークが軽く冷や汗を流していると、ヴィータのウサミミを十分堪能して満足したらしいはやてがようやく復帰してきた。

「それで、」の後の予定はどうなん？」

まさかシグナム達の強化で終わりじゃないだろうと問いかけるはやてに、マークは当然とばかりにとあるマニュアルを提示する。

「そ、それ……」

「まさか……」

「ああ、『兵士強化マニュアル』だ」

「兵士強化マニュアル？」

かつて行われた地獄のような訓練を思い出して青ざめるのは達に対し、その存在を知らないシグナム達が首をかしげる。

「どちらにしろ、守護騎士たちに基礎トレーニングは必要ないだろうか？ お前らは庭の隅で新しい力を馴染ませとけ」

「……まあ事実であるし、そうさせてもらおう」

守護騎士たちを追い払ったマークは、なのは達に向き直りいい笑顔で告げる。

「今日まで簡易プログラムをこなしているんだ。あの頃からどれだけ成長したか、これ以上分かりやすい訓練は無いだろ？」

「……そう、ですね……」

いまだ運動全般が得意とは言い切れないなのはは思わずため息を漏らす、マークが止まる気配は無かった。

その後行われた訓練にて、特に後衛型であるなのは、はやて、ユーノが早々に脱落してしまったことは、ある意味当然とも言えるだろう。

「ふむ、特にユーノはひどいな」

「まあ、彼は無限書庫にこもって術式の研究を行っていましたから……」

「だが、今後も戦場に立つつもりならこれは不味いだろう？ ちょっとばかり、今後のトレーニングメニューでも考えておくか」  
「……」

マークの横でトレーニングを見学することになった小さなリイン

フォースは、今後予想されるユーノの絶望に、静かに目を伏せるの  
であった。